福岡県の祭り・行事

―福岡県「祭り・行事」調査事業―

福岡県文化財調査報告書　第二八五集　二〇二四　福岡県教育委員会

福岡県文化財調査報告書 第二八五集

福岡県の祭り・行事

―福岡県「祭り・行事」調査事業―

福岡県教育委員会　二〇二四

福岡県文化財調査報告書 第二八五集

福岡県の祭り・行事

―福岡県「祭り・行事」調査事業―

福岡県教育委員会　二〇二四

巻頭図版①

玉せせり（福岡市）

ホンゲンギョウ（宇美町）

鷽替え（太宰府市）

鬼すべ（太宰府市）

畑のどんど焼き（豊前市）

巻頭図版③

嫁ごの尻叩き（春日市）

石釜のトビトビ（福岡市）

相島の恵比寿祭り（新宮町）

歩射祭（福岡市）

大飯喰らい（糸島市）

和布刈神事（北九州市）

藁の大人形（柳川市）

粥占（福岡市）

英彦山神宮御潮井取り（添田町・行橋市）

御田植祭（豊前市）

山誉め祭（福岡市）

沖詣り海神祭（大川市）

風旗（八女市）

叶院千灯明（福岡市）

久富の盆綱曳き（筑後市）

大浜流灌頂（福岡市）

準備中

流灌頂（大任町）

動乱蜂（久留米市）

ヒョウカリライ（福岡市）

筥崎宮神幸行事（福岡市）

志賀海神社神幸行事（福岡市）

福吉神幸祭（糸島市）

八所宮神幸行事（宗像市）

平等寺の宮座（宗像市）

能古島白鬚神社おくんち（福岡市）

薦替え（東峰村）

献水神事・水占い（吉富町）

準備中

どんきゃんきゃん（みやま市）

はやま行事（福岡市）

準備中

おしろい祭（朝倉市）

山人走り（豊前市）

亥の子（苅田町）

御供納（久留米市）

ウシサマ（糸島市）

白糸の寒みそぎ（糸島市）

川まつり（嘉麻市）

準備中

生立八幡宮神幸祭（みやこ町）

準備中

糸田祇園祭（糸田町）

風治八幡宮川渡神幸祭（田川市）

小呂島祇園山笠（福岡市）

前田祇園山笠（北九州市）

準備中

江浦祇園祭（みやま市）

黒崎祇園山笠（北九州市）

今井祇園祭（行橋市）

中島祇園祭（柳川市）

三池祇園社祭礼行事（大牟田市）

苅田山笠（苅田町）

どろつくどん（柳川市）

序

古来より福岡県は、大陸との文化交流の窓口として最新の文化が伝わってきました。その中で県内各地では、異なる歴史や風土の中で独自の文化が育まれ、特色のある祭り・行事が継承されてきました。これらの祭り・行事は、まさに人びとの生活の一部であり、また、誇りに思う人びとも多く、世代を超えて受け継がれてきました。

しかし、近年の社会生活や産業の急速な変化に伴い、福岡県の伝統的な祭り・行事の中には大きく変容してしまったものや、すでに廃絶してしまったものも少なくありません。特に、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大によって、数多くの祭り・行事が中止、もしくは規模を縮小しての開催となることが多く、貴重な文化財の滅失に大きく拍車をかけています。

こうした危機的状況の中、福岡県教育委員会では、国庫補助事業として平成三〇年度から令和五年度にかけて、福岡県内で継承されてきた祭り・行事の調査を実施しました。

本報告はその調査成果を取りまとめたものであり、それぞれの祭り・行事が備える地域的特色や歴史的背景を報告することによって、継承されてきた祭り・行事の価値が改めて見直され、今後の保存・継承に資することができれば幸いです。

最後になりましたが、本調査の実施及び報告書の刊行に当たり、御指導いただきました文化庁をはじめ、調査に御尽力いただきました福岡県「祭り・行事」調査委員会の調査委員・専門調査員の皆様方、御協力いただきました各市町村、各調査地の祭り・行事の保存会や地元関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和六年三月三一日

福岡県教育委員会

教育長　吉田　法稔

目次

巻頭図版
序
例言
第一章　はじめに……1
第一節　調査に至る経緯……1
第二節　調査体制……1
第三節　調査の経過……5
第二章　福岡県の祭り・行事……10
第三章　各テーマ概要……13
第四章　詳細調査……19
第一節　特論一　祇園山笠……19
第二節　特論二　獅子祓・獅子廻……82
第三節　詳細調査……104
一　玉取祭……104
二　ホンゲンギョウ……108
三　鬼すべ・鷽替え……110
四　畑のどんど焼き……119
五　嫁ごの尻叩き……121
六　石釜のトビトビ……124
七　相島の恵比寿祭り……127
八　歩射祭……134
九　百手祭り・大飯喰らい……141
一〇　和布刈神事……144
一一　藁の大人形……147
一二　粥占……150
一三　英彦山神宮御潮井取り……154
一四　御田植祭……158
一五　山誉め祭……161
一六　沖詣り海神祭……163
一七　叶院千灯明……172
一八　風旗……175
一九　久富の盆綱曳き……178
二〇　流灌頂（福岡市）……183
二一　流灌頂（大任町）……186
二二　動乱蜂……189
二三　ヒョウカリライ……192
二四　筥崎宮神幸行事……196
二五　志賀海神社神幸行事……200
二六　福吉神幸祭……204

二七　八所宮神幸行事……209
二八　平等寺の宮座……216
二九　能古島白鬚神社おくんち……220
三〇　薦替え……225
三一　献水神事・水占い……228
三二　どんきゃんきゃん……231
三三　はやま行事……240
三四　山人走り……244
三五　亥の子……247
三六　おしろい祭……250
三七　御供納……253
三八　ウシサマ……257
三九　白糸の寒みそぎ……259
四〇　川まつり……262
第五章　今後の展望……266
第六章　基礎調査一覧……267
参考文献……310
巻頭図版及び文中写真出典……316

例言

一、本書は、福岡県教育委員会が平成三〇年度から令和五年度の六箇年にわたって国庫補助事業として実施した福岡県「祭り・行事」調査の報告書である。

二、調査事業の実施に当たっては、福岡県「祭り・行事」調査委員会を設置し、調査方法、報告書編集について指導・助言を得た。

三、市町村の協力のもと、所定の調査票に基づき基礎調査を行った。基礎調査の結果は、第六章に基礎調査一覧として掲載した。

四、詳細調査は、調査委員会で選択した四二件の祭り・行事について、市町村の協力を得て、調査員・専門調査員・事務局が実施した。

五、口絵及び本文中に掲載した写真は、詳細調査実施時に調査委員・専門調査員・事務局が撮影したもの及び市町村・保存会提供のものを使用した。

六、本文中に使用した地図、分布図は事務局が作成した。

七、第二章及び第四章は、調査委員・専門調査員が担当し、第三章は本県人づくり・県民生活部文化振興課の久野隆志が、また第一章及び第五章は文化財保護課の梶佐古幸謙が担当した。本書の編集は、調査委員会・九州歴史資料館の岸本圭・会計年度任用職員の墓昌也の協力を得て梶佐古が行った。

第一章　はじめに

第一節　調査に至る経緯

福岡県は旧筑前国、筑後国、豊前国の一部からなる。自然環境としては、玄界灘、有明海、周防灘に面し、筑紫山地、耳納山地、英彦山地などの山々とそれらを水源として流れる筑後川、遠賀川、山国川といった大きな河川によって、福岡平野や筑紫平野をはじめとする豊穣の地が形成されている。また、古代より大陸との交流の窓口として、最新の文化が伝わってきた。

県内各地では、異なる歴史や風土の中で独自の文化が育まれ、特色のある祭り・行事が伝承されてきた。北部九州に特有のカビで吉凶を占う「粥占」や玄界灘沿岸の「玉せせり」、全国的にみて古式が残る「宮座」及び「放生会」、筑前・筑後地域の「盆綱」、県内全域に広まった恵比須信仰に基づく「恵比須祭り」など現在も豊かで多彩な祭り文化が息づいている。

福岡県では、右記のような多彩な祭り・行事が実施されている一方で、これまで祭り・行事の悉皆調査を実施しておらず、県内に分布する祭り・行事の全体像及び現在の実施状況が把握できていない。

そのため、福岡県教育委員会では、県内に伝承されている祭り・行事を把握し、文化財保護の基礎資料とするため、福岡県「祭り・行事」調査を実施することとした。調査に当たっては文化庁が定める「祭り・行事調査実施要項」に則り、国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金（民俗文化財調査費国庫補助）を受けて実施した。

調査は平成三〇年度から四箇年をかけて実施する計画で、前年度の平成二九年度から文化庁調査官と協議を進め、調査委員の立ち上げ準備も行った。また、「北部九州の盆綱」が平成三一年三月二八日付で記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されたことから、福岡県「祭り・行事」調査の中で併せて調査を実施することとした。

初年度である平成三〇年度は、県内に継承されている祭り・行事のリスト作成を中心とした全体把握を行う基礎調査を中心としたものであり、翌年度（令和元年度）から実地調査を本格化させた。

しかしその年度の末頃から新型コロナウイルス感染症が全世界的に流行する状況が発生した。それにより調査対象である祭り・行事が実施されず、また聞き取り調査もできない状況が発生した。十分な調査記録がとれない想定外の状況に至ったため、委員会における協議、文化庁の了解を得た上で調査期間を一年延長することとした。しかし新型コロナウイルス感染症の拡大は留まる様子をみせず、単年の調査期間延長に止まらず、令和五年まで調査期間を延長することとなった。

新型コロナウイルス感染症は令和五年五月八日をもって感染症法上の位置付けが「五類感染症」に変更され、諸対策について緩和されたため、各地で休止していた祭り・行事も再開される事例が増加した。しかしながら、この長期休止を機に長く伝承されてきた祭り・行事が廃絶する事例が少なくないと思われる。このようなタイミングで県内の祭り・行事把握と記録作成ができたことは不幸中の幸いであったのかもしれない。

第二節　調査体制

（一）　調査委員会

調査に当たっては、福岡県「祭り・行事」調査委員会設置要項を定め、民俗学・文化人類学を専門とする県内在住の有識者四名に委員を、同じく専門調査員に八名を委嘱した。委員会委員は調査事業の運営全般に関する審議のほか、祭り・行事の詳細調査と報告書執筆を担当した。

加えて、本調査事業を補完するため、民俗を専門とする市町村文化財担当職員の御協力を得た。

第二章及び第四章は、調査委員・専門調査員が担当し、第三章は本県人づくり・県民生活部文化振興課の久野隆志が、また第一章及び第五章は文化財保護課の梶佐古幸謙が担当した。本書の編集は、調査委員会・九州歴史資料館の岸本圭・会計年度任用職員の墓昌也の協力を得て梶佐古が行った。

○調査委員（敬称略）

森　弘子　学校法人筑紫女学園　理事　★調査委員会委員長

白川　琢磨　福岡大学　名誉教授（令和四年度まで）

須永　敬　九州産業大学　国際文化学部日本文化学科　教授

田中　久美子　福岡工業大学　社会環境学部社会環境学科　准教授

○専門調査員（敬称略・五〇音順　所属は令和五年度現在）

カーター　ケイレブ　九州大学　人文科学研究院　講師

亀崎　敦司　新修宗像市史編集委員会　研究協力員

末松　剛　九州産業大学　地域共創学部地域づくり学科　教授

中村　琢　平戸市生月町博物館・島の館　学芸員

長谷川　清之　田川郷土研究会　常任委員

福間　裕爾　太宰府市文化財専門委員会　委員

吉田　扶希子　西南学院大学　非常勤講師

吉留　徹　福岡県文化財保護審議会　専門委員

○オブザーバー（敬称略）

小林　稔　文化庁文化財第一課　民俗文化財部門主任調査官（平成三〇年度～令和元年度）

藤原　洋　文化庁文化財第一課　民俗部門　文化財調査官（令和二年度～令和五年度）

久野　隆志　福岡県人づくり・県民生活部文化振興課　参事補佐

（二）調査・執筆協力（敬称略・五十音順　所属は令和五年度現在）

調査及び執筆に御協力いただいた市町村文化財行政職員は左記のとおりである。

石井　和帆　福岡市博物館学芸課

内野　嗣昭　東峰村教育委員会教育課

河口　綾香　福岡市博物館学芸課

栗焼　憲児　豊前市教育委員会生涯学習課

中内　華奈　豊前市教育委員会生涯学習課

（三）事業の実施体制

福岡県「祭り・行事」調査事業は平成三〇年度から令和五年度の六箇年をかけて実施した。計画当初は平成三〇年度から令和三年度の四箇年で事業を終了する予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、県内の多くの祭り・行事が中止や規模を縮小しての開催となり、詳細調査の計画に大幅な変更・遅れが生じたため、文化庁との協議の上、令和五年度まで事業期間を延長することとなった。

本事業の事務局は福岡県教育庁教育総務部文化財保護課に置き、委員会を含む事業の全般的運営、基礎調査のとりまとめ、市町村への調査協力依頼、その他必要な事務手続きを当課文化財保護係で行った。予算の執行については当課管理係が担当した。

（四）事務局（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）

○平成三〇年度

福岡県教育委員会

城戸　秀明　教育長

吉田　法稔　副教育長

辰田　一郎　理事兼教育総務部長

文化財保護課

［総括］

河口　靖志　課長

田上　稔　参事兼課長技術補佐

市村　智子　課長補佐

［管理係］

松本　親典　参事補佐兼管理係長

野美山　智美　事務主査

宮崎　亮　主任主事

渡部　倖子　主任主事

手嶋　健登　　主事

［企画・埋蔵文化財係］

杉原　敏之　　参事補佐兼企画・埋蔵文化財係長
飛野　博文　　技術主査（再任用）
宮地　聡一郎　　技術主査
城門　義廣　　主任技師

［文化財保護係］

入佐　友一郎　　文化財保護係長
岸本　圭　　企画主査（調査）
坂本　真一　　技術主査
下原　幸裕　　技術主査
松本　将一郎　　主任技師

○令和元年度

福岡県教育委員会

城戸　秀明　　教育長
吉田　法稔　　副教育長
木原　茂　　理事兼教育総務部長

文化財保護課

［総括］

河口　靖志　　課長
田上　稔　　参事兼課長技術補佐
市村　智子　　課長補佐

［管理係］

堺　崇文　　管理係長
新飼　奈美　　事務主査
宮﨑　亮　　主任主事
川江　美春　　主任主事
手嶋　健登　　主事

山口　ゆら　　主事

［企画・埋蔵文化財係］

杉原　敏之　　参事補佐兼企画・埋蔵文化財係長
宮地　聡一郎　　企画主査
坂元　雄紀　　技術主査
城門　義廣　　主任技師

［文化財保護係］

入佐　友一郎　　参事補佐兼文化財保護係長
岸本　圭　　企画主査（調査）
坂本　真一　　技術主査
下原　幸裕　　技術主査
松本　将一郎　　主任技師

○令和二年度

福岡県教育委員会

城戸　秀明　　教育長
木原　茂　　副教育長
上田　哲子　　教育総務部長

文化財保護課

［総括］

綾部　耕士　　課長
田上　稔　　参事兼課長技術補佐
松本　親典　　課長補佐

［管理係］

堺　崇文　　参事補佐兼管理係長
新飼　奈美　　事務主査
宮﨑　亮　　主任主事
川江　美春　　主任主事
亀山　栞奈　　主事

北村　友樹　主事

［企画・埋蔵文化財係］

杉原　敏之　参事補佐兼企画・埋蔵文化財係長
宮地　聡一郎　企画主査
大庭　孝夫　技術主査
城門　義廣　技術主査

［文化財保護係］

入佐　友一郎　参事補佐兼文化財保護係長
岸本　圭　参事補佐（調査）
下原　幸裕　技術主査
坂元　雄紀　技術主査
松本　将一郎　主任技師

○令和三年度

福岡県教育委員会

吉田　法稔　教育長
寺埼　雅巳　副教育長
上田　哲子　教育総務部長

文化財保護課

［総括］

明永　好弘　課長
田上　稔　参事兼課長技術補佐
宮崎　奈巳　課長補佐

［管理係］

広津　壽子　管理係長
新飼　奈美　事務主査
森藤　潤也　主任主事
川江　美春　主任主事
亀山　栞奈　主事

北村　友樹　主事

［企画・埋蔵文化財係］

杉原　敏之　参事補佐兼企画・埋蔵文化財係長
宮地　聡一郎　企画主査
大庭　孝夫　技術主査
城門　義廣　技術主査

［文化財保護係］

岸本　圭　参事補佐兼文化財保護係長
下原　幸裕　技術主査
坂元　雄紀　技術主査（調査）
岡田　諭　技術主査
松本　将一郎　主任技師

○令和四年度

福岡県教育委員会

吉田　法稔　教育長
上田　哲子　副教育長
松永　一雄　教育総務部長

文化財保護課

［総括］

明永　好弘　課長
田上　稔　参事
赤間　寛人　課長補佐
杉原　敏之　課長技術補佐兼企画・埋蔵文化財係長

［管理係］

広津　壽子　管理係長
楢原　充士　事務主査
森藤　潤也　主任主事
亀山　栞奈　主任主事

北村　友樹　　主事

［企画・埋蔵文化財係］

大庭　孝夫　　企画主査
城門　義廣　　技術主査
出見　優人　　技師

［文化財保護係］

岸本　圭　　参事補佐兼文化財保護係長
下原　幸裕　　技術主査
岡田　諭　　技術主査
松本　将一郎　　技術主査
梶佐古　幸謙　　主任技師（調査）

○令和五年度

福岡県教育委員会

吉田　法稔　　教育長
上田　哲子　　副教育長
松永　一雄　　教育総務部長

文化財保護課

［総括］

比山　裕隆　　課長
杉原　敏之　　参事兼課長技術補佐
赤間　寛人　　課長補佐

［管理係］

古賀　功親　　管理係長
山田　哲也　　事務主査
森藤　潤也　　主任主事
宮本　瑛介　　主任主事
亀山　栞奈　　主任主事
堤　祥吾　　主事

［企画・埋蔵文化財係］

大庭　孝夫　　企画・埋蔵文化財係長
城門　義廣　　技術主査
岡田　諭　　技術主査
出見　優人　　技師

［文化財保護係］

森井　啓次　　参事補佐兼文化財保護係長
下原　幸裕　　企画主査
野木　雄大　　技術主査
松本　将一郎　　技術主査
梶佐古　幸謙　　主任技師（調査・報告）

基礎調査及び詳細調査に当たっては、市町村文化財担当職員、保存会・担い手の皆さまから多大なる御協力をいただきました。市町村文化財担当職員には、行事のスケジュール確認や保存会との調整、調査の随行について御助力いただき、また保存会・担い手の皆さまには、詳細調査の際の聞き取りや補足調査等において快く調査に協力いただきました。個人名を挙げることはできませんが、ここに記して深謝いたします。

第三節　調査の経過

調査は全体把握を行う「基礎調査」と、把握を行った上で本県に特色のある祭り・行事の記録作成を行う「詳細調査」に大きく分かれる。調査の経過について、年度を追って記す。

○平成三〇年度

福岡県「祭り・行事」調査委員会を立ち上げ、調査の方針等基本事項について承認を得た。県内文化財行政担当者会議で調査趣旨を説明し、県内市町村の文化財担当者に対し調査協力を求めた。委員会で承

認を得た調査方針に則り、県内市町村に照会し基礎調査に着手した。代表的と判断される祭り・行事について、詳細調査に着手した。

［第一回委員会（六月二九日）］

調査委員会の立ち上げに当たり、委員の委嘱を行った。調査方針を確認し、承認を得た。福岡県独自の調査テーマ・地域区分について事務局案を基に協議を行った。

［第二回委員会（三月二二日）］

委員会で承認された項目に沿って基礎調査を実施し、中間報告を行った。基礎調査に着手して出てきた課題等について協議を行った。

○令和元年度

基礎調査については内容の充実を図った。詳細調査については調査テーマに沿って調査対象候補を挙げ協議を行い、調査計画を策定の上、実地調査に着手した。報告書の執筆に向け、章立て・要項等の提案を行った。令和元年度末から新型コロナウイルス感染症拡大防止の対応が生じ、三月一〇日に予定していた第三回委員会は中止し、文化庁調査官との個別協議を持つこととなった。

［第一回委員会（八月五日）］

基礎調査について調査テーマ毎に整理を行い、テーマに沿って詳細調査の方向性を検討した。詳細調査計画を早期に定めて執筆分担の整理を行う方針とした。

［第二回委員会（一二月一六日）］

報告書の構成について事務局案を提案し、協議を行った。詳細調査の記述順序について、単なる羅列ではなく県の特色を出すにはどうあるべきか意見交換を行った。執筆要項についても事務局案を示した。詳細調査対象について、より具体的な絞り込み作業を行った。

○令和二年度

新型コロナウイルス感染症の影響と緊急事態宣言の発令を受け、予定していた調査対象の多くが中止となった。特に多くの人が参集する祭り・行事は悉く中止となり、また実施されるとしても例年より大幅に簡素化した形で行われた。委員会開催についても慎重な姿勢が求められ、年度後半の一二月に第一回委員会を開催した。調査期間について文化庁との協議を踏まえ、一年延長することで承認を得た。

［第一回委員会（一二月四日）］

新型コロナウイルス感染症の影響を多大に受け、中止・簡略化・神事のみ実施等の状況になっていることを共有した。報告書の記述順について季節順・テーマ毎・地域別等の項目立てを提起し、協議を行った。

［第二回委員会（三月二四日）］

行事が予定通り行われないこともあり、関連文献調査や聞き取り調査に注力した。報告書の記述順は季節で線引きせず実施順とした。詳細調査を実施した祭り・行事のうち報告書に掲載するものの選択について協議を行った。

○令和三年度

調査期間を令和四年度まで延長したものの、一向に新型コロナウイルス感染症の沈静化は見えず、変異株の発現等もあり、調査期間を更に一年延長することで承認を得た。報告書記述の体裁等について具体的な協議を行い、執筆作業に向けた取組を本格化させた。

［第一回委員会（一〇月二七日）］

報告書の執筆イメージを共有した。写真の用い方や、行事をどこまで詳細に記述するか等協議を行った。

［第二回委員会（三月二二日）］

新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、詳細調査を実施したものについても簡略化等が顕著な状況であった。報告書の具体的記述を示した上で、執筆方針を定めた。

○令和四年度

依然として新型コロナウイルス感染症の影響が続いた。特に年度初頭の行事が軒並み中止・縮小となったが、夏前頃から新型コロナウイ

ルス感染症の影響が小さくなり、段々と行事が再開し始めたため、詳細調査を再開させることができた。特に新型コロナウイルス感染症の影響を著しく受けた山笠行事の調査を中心に行った。

［第一回委員会（七月二六日）］

報告書の編集スケジュール・全体構成イメージの共有、報告書ドラフトの読み合わせを行い、執筆内容の洗練化に関する協議を行った。

［第二回委員会（一一月一八日）］

報告書のスケジュールについて再共有をし、掲載写真や文言について協議を行った。

○令和五年度

新型コロナウイルス感染症が五類感染症に移行したことで、各地の祭り・行事の多くが再開したため、補足の詳細調査を実施した。令和四年度同様、山笠行事を中心に実地調査を実施した。

［第一回委員会（八月三一日）］

報告書の刊行スケジュールについて再度共有・確認し、報告書原稿のレイアウト、図面、名称の取扱い等について最終協議を行った。

（梶佐古　幸謙・岸本　圭）

福岡県「祭り・行事」調査委員会設置要項

（設　置）

第１条　福岡県内に伝承される祭り・行事の調査を実施するため、福岡県教育委員会に福岡県「祭り・行事」調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（所掌事務）

第２条　委員会は、前条の目的を達成するため、福岡県が行う福岡県「祭り・行事」調査事業に関し、必要な指導助言を行うとともに、調査研究を行うものとする。

（組　織）

第３条　委員会は、委員４名程度をもって組織する。

２　委員は、民俗学等に関し専門知識を有する者のうちから福岡県教育委員会教育長が委嘱する。

３　基礎調査・実地調査に際しては、必要に応じて調査員・専門調査員を置くことができる。

４　事務局は、福岡県教育庁教育総務部文化財保護課に置き、委員会の開催等の諸事務及び庶務を行うものとする。

（任　期）

第４条　委員の任期は、委嘱を受けた日から令和６年３月３１日までとする。

（委員長及び副委員長）

第５条　委員長は、委員の互選によりこれを定める。

２　副委員長は、委員長が指名する。

３　委員長は、委員会の会務を統括する。

４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長が欠けたとき、又は委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

（補　則）

第６条　この要項に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、福岡県教育委員会教育長が別に定める。

附　則

この要項は、平成３０年６月２９日から施行する。

附　則

この要項は、令和４年４月１日から施行する。

福岡県の祭り・行事調査テーマ一覧

本報告書では、下記の全国共通テーマに加え、福岡県独自テーマを委員会の承認を経て設定した。テーマの概要については第三章で述べることとする。

全国共通テーマ（二〇項目）

〈着眼点Ⅰ〉道具立て・神饌など

1 大火を焚くことに特色のある祭り・行事（盆・正月など）
2 山車（だし）・屋台・船などの出ることに特色のある祭り・行事
3 鉾・旗・おはけなどの標示物を用いることに特色がある祭り・行事
4 臨時のつくりものや特別な装置を用いる祭り・行事
5 供物や料理に特徴のある祭り・行事

〈着眼点Ⅱ〉組織と形態

6 頭屋・宮座などの組織による祭り・行事
7 一年神主などの祭祀形態に特色ある祭り・行事
8 村組織による祭り・行事
9 村連合の祭り・行事
10 競技を伴う祭り・行事（綱引き・凧揚げ・相撲・競馬・船漕ぎ・弓射など）
11 託宣・占いなどを伴う祭り・行事

〈着眼点Ⅲ〉祭りの目的・対象

12 子どもの成長祈願・氏子入りなどを目的とする祭り・行事
13 若者入り・成人祝いなどを目的とする祭り・行事
14 新婚祝いを目的とする祭り・行事
15 悪霊防御（防ぎ）・悪霊送り・神送りを目的とする祭り・行事
16 自然現象に対する祈願（雨乞い・日乞い・風除けなど）を目的とする祭り・行事
17 田の神・恵比寿など生業にかかわるカミに対する祭り・行事

〈着眼点Ⅳ〉祭りの時期

18 正月に行われる特色ある祭礼・行事
19 盆の時期に行われる特色ある祭礼・行事
20 節供（三月節供・五月節供など）に行われる特色ある祭礼・行事

福岡県独自テーマ（一九項目）

21 玉せせり　22 替物行事　23 恵比寿祭り　24 百手
25 粥占（かゆうら）　26 獅子祓・獅子廻　27 川祭り　28 風旗
29 山笠　30 盆綱　31 花火　32 神幸行事　33 修験・山伏
34 亥の子　35 丑祭り　36 ヨド　37 仏教行事　38 禊ぎ払い
39 その他

第二章　福岡県の祭り・行事

福岡県は、明治九（一八七六）年、筑前地域・筑後地域・豊前地域の一部が統合して誕生した。江戸時代、若干の変遷はあるが筑前は福岡藩と支藩の秋月藩、筑後は久留米藩、柳河藩と三池藩、豊前は小倉藩と支藩の小倉新田藩にわかれ、それぞれに独自な政治・文化を展開した。

また産業や文化、人々の生活に大きな影響を与えるのは自然条件である。旧三国から成り立つ福岡県は、玄界灘、有明海、周防灘の三つの海に面し、筑紫山地、耳納山地、脊振山地、英彦山山地などの山地が脊梁のように横たわり、それらを水源として筑後川、遠賀川、山国川など多くの河川が流れ、福岡平野、筑豊平野、筑紫平野、豊前平野などの豊饒の土地を形成している。

玄界灘は海外とこの地を結び、博多はかつて日本有数の門戸として海外の進んだ文物がもたらされた港町である。周防灘は瀬戸内海を通して中央とつながり、干満の差が激しい有明海は、その泥のなかにじっくりと独自の文化を醸成させた。

本県には、県下一円に行われるもの、また地域によって特色ある多彩な祭り・行事が存在する。詳細については第三章で記述するが、ここでは、そのなかでも特徴的な事例を掲げておく。

◆八幡宮と天満宮

祭りは多く神社を中心に行われるが、全国の神社でも有数な八幡宮と天満宮の発祥の地が、豊前と筑前にある。すなわち宇佐八幡宮と太宰府天満宮（安楽寺天満宮）であり、この両社が九州を二分する荘園領主であった。かつ宗像三女神・志賀島の綿津見三神・住吉の筒男三神など、記紀神話で重要な位置を占める古来の神々が玄界灘沿岸に多く鎮座するのも、福岡県の祭りを豊かにしている大きな要因である。

豊前は明治以後半分に分割され、宇佐八幡宮は現在大分県に位置するが、福岡県東部の京築地域・田川地区は旧豊前国に属し宇佐八幡宮を中心とする文化圏に属している。八幡宮最大の祭事「放生会」は、養老四（七二〇）年隼人の乱平定後、隼人の霊の鎮魂のために始められたと伝えられ、田川郡香春岳から採れる銅で鋳造した「宝鏡」を、宇佐八幡宮に納めることが重要な年中行事であった。現在、香春三の岳の麓に鎮座する古宮八幡宮の神幸祭にその名残を留めている。放生会は八幡宮の伝播とともに全国に広がった「仏神事」であったが、明治以後、仏教要素がとりのぞかれ、「仲秋祭」となった。しかし福岡県においては、庶民が慣れ親しんだ「放生会」の名でひろく行われ、宇佐八幡宮を発祥とする楽打ち等さまざまな民俗芸能も付随して地域を代表する祭りとして盛大に行われている。

太宰府天満宮は、配所の地大宰府で亡くなった菅原道真の菩提寺「安楽寺」として創建された。その荘園は筑前・筑後・肥前・肥後を中心に広がり、したがって各地に荘園鎮守神として祀られた天満宮（天神社・老松宮）がある。また元々「天ッ神」として祭られていた「天神」が菅原道真信仰と習合した場合も多く、農耕神としても信仰された。

春先に山の神を迎え田の神とし、収穫の後に山へお帰しするという習俗は日本全国に見られるが、この地方では二月初丑の日に「山の神迎え」、一一月初丑の日に「山の神送り」が「うしどん」「うしさま」として行われた。その地域が安楽寺領又は天満宮分布地と重なることから、牛をお使いの動物とする天神信仰との関連が考えられ、また一般に「どんど焼き」「左義長」といわれる小正月の火祭りを、一月七日早朝、子供が中心となって「ほうげんぎょう」「ほっけんぎょう」として行うのは、「法華の行」であり、かつて天台宗の寺院であった安楽寺（天満宮）の影響ではないかと考えられている。ちなみに、豊前地域はほとんどの所で、一月一四日にどんど焼きとして行われている。

一月七日の鬼すべは、正月に国家安泰などを祈る法会「修正会」の満願に行われた「鬼行い」の名残である。神仏分離の際、寺院として存続した国東半島の寺々では、「修正鬼会」として古い姿をよく伝えているが、福岡県においては、筑後市熊野神社の鬼の修正会などいくつかの同義の祭りがあるなか、久留米市大善寺玉垂宮の「鬼夜」が比較的古体を伝え、かつ盛大に行われることから国の指定を受けている。

太宰府天満宮で鬼すべと同日に行われる「うそ替」は朴の木でつくった民芸品「木うそ」を替え合い、一年についた嘘を天神さまの誠に替えていただくのだという。江戸初期の万治年間（一六五八～六一）には既に盛んに行われていた様が『百人一首一夕話』の記事に見られる。神職が出した一二個の金鷽に当たった者は、その年の幸運を得られるともいう。全国に広く見られる「換物神事」の一つであるが、換物が天神さまの使鳥「鷽」を象った物とされるところに特徴がある。木うその形状はご幣の古い形「ケズリカケ」が形を整えた物であり、国東の修正鬼会における重要な法具「香水棒」、あるいは小正月の神仏への供え物のケズリカケ、『源氏物語』にもみえる正月卯の日に邪気を祓うために贈答した「卯杖」などとの関連性が考えられる。太宰府天満宮から大坂天満宮など全国に伝わったが、ことに江戸に勧請した亀戸天神社の「うそ替」は江戸名物として名高い。県下でも、久留米市の北野天満宮・糸島市の老松神社・福岡市博多区の住吉神社などでも行われている。

◆生業の祭りと年占

国民の大半が農水産業に従事していた我が国において、その年の豊作や豊漁を願う春の祈願の祭りと、収穫を感謝する祭りは、祭りの基本であり、この間に家々や村々で行われる様々な年中行事があった。

収穫感謝祭である「宮座」については、関西地方など古くから行われている地域では、神事を行う、「神課」などと言われる村落内の限られた成員を「宮座」と言うが、県内では秋に行われる収穫祭そのものを「宮座」と称している。かつては、県下一円で村落ごとに、神幸を伴うもの、豪華な供物を捧げるもの、占い的な意味を含むものなど様々な特徴を持った宮座が行われ、新穀はじめ様々な供物を捧げ、その年一番の御馳走を作った。しかし農業の衰退した高度経済成長期以降に廃止した所や、神社での祭典は行うものの、直会は仕出しや料理屋での会食に変わり、年に一度の地域の親睦会のようになっている所が多い。

このような宮座の中で「占い」的な要素を持って今日に伝えられているものもある。例えば、福岡県無形民俗文化財に指定されている朝倉市黒川の高木神社宮座行事では、神課と呼ばれる宮座の成員の役割として、神饌の準備と献供に加え、「おほし改め」「トリミクマ」という年占の要素を含んだ儀礼に関与する役割があった。同じく朝倉市杷木大山の大山祇神社のおしろい祭では顔に塗られた粢（しとぎ）の量によって、来年の豊作を占った。朝倉市杷木穂坂の阿蘇神社の泥打ち祭りでは、宮座の成員から選ばれた白装束の代宮司に子ども達が投げつける泥の付着具合が良ければその年の作柄は良いと言われる。

このように、年の豊作を前もって予測すると言うことは大きな関心事であった。ことに、それに粥を用いることは全国的に行われており、県下でも筑前・筑後で広く行われている。一般的には小正月に行われる事が多く、やり方は、その年の月の数だけ竹管、葦管などを粥に入れ、中に入った粥や小豆の分量でその年の豊凶を占ったり、粥棒と呼ばれる柳やヌルデの棒に割り目をつけて粥の中に入れ、付着する量の多少で豊作を判断する方法が多く、「管粥祭」「筒粥神事」などとも呼ばれる。いわば、前記の粢や泥の付着具合によるという単純なものであるが、次に掲げる「粥占」は、粥又は飯を伝来の鉢に盛り、半月から一箇月放置して、それについたカビの種類やカビの生え具合により、その年の豊凶や天候を占うというもので、全国的にも北部九州独自の方法と言える。筑後川が貫通する朝倉市においては、現在は廃絶しているものもあるが、恵蘇八幡宮、老松神社など数箇所の神社で粥占が確認される。福岡市西区飯盛神社の粥占が福岡県指定、筑紫野市筑紫神社の「粥占祭り」が筑紫野市指定を受けている。また神社ばかりでなく福岡市城南区東油山正覚寺など寺院で行われる場合もある。

海辺の祭りでは、その年の大漁を占うものは、県下ではあまり見られないが、福岡市東区筥崎宮の「玉せせり」は、一月三日に陰陽二つの玉を、浜方と陸方に分かれて奪い合うもので、最後に玉を筥崎宮に納めた競り子が浜方ならば豊漁、陸方ならば豊作に恵まれるといわれる。玄界灘沿岸にはこのように新年に玉を競り合う、「玉せせり」「玉せり」「玉やれ」などといわれる玉取祭があるが、漁業従事者がおもな担い手であるため、筥崎宮のような占い的要素は見られない。また

子どもが主体で行われるところもある。これは全国的に見られる正月に海から砂を採ってきて、恵比須神に供え、また砂の中から石を拾って恵比須神に供えたりする「玉取祭」が玄界灘沿岸で独自の発展を遂げ、祭礼化した恵比須信仰の一つの形と考えられている。

今となっては全国的には珍しい祭りとして、関門海峡でのわかめ漁の解禁に先立ち行われる北九州市門司区和布刈神社で行われる和布刈神事、海の者が山を誉めるという福岡市東区志賀島の山ほめ祭は、全国的に数が減っているが、古来の漁業のあり方を祭の中で現代に残す素朴なまつりである。

◆修験のまつり

豊前地方は英彦山、求菩提山などを中心とする修験道の影響が色濃く遺る地域である。春先に行われる松会は、斎庭に神の依代である柱松を立て神事を行うもので、英彦山霊山寺を中心に豊前六峰と呼ばれていた山のうち求菩提山護国寺・蔵持山宝仙寺・普智山等覚寺・松尾山医王寺・桧原山正平寺において年中諸祭の中心をなしていた。『彦山大権現松会祭礼絵巻』によると、柱松起こし・神幸行列・流鏑馬に続いて、御田祭の馬杷（田すき）・田打ち・種まき・田植えの所作が行われ、ついで孕女（はらみおんな）による神前御供・獅子舞・長刀・鉞・金棒の演技、楽打ち・ササラ・延年舞・風流・早具足などの芸能・競技が行われ、柱松の上での幣切り、柱松倒しで終わるものであった。

その年の豊作を山の神仏に祈る里人と山伏が交流する地域を越えた盛大な祭りだったが、明治初年の神仏分離、修験道廃止によって昔日の面影を失った。現在神職や氏子が祭りの担い手となり各山に断片的に残存し、多くは「お田植え祭」の形で行われている。柱松を立てるなど最も古体を留める等覚寺の松会が国指定を受けている。修験道の影響は豊前地域の神楽にも見られる。

◆都へのあこがれ―祇園祭

祇園祭は都市の祭礼の代表的なものである。むろん京都の祇園社（八坂神社）に発し、祇園社の伝播とともに全国に広がった。華やかな装飾で飾った丈の高い山や大きな山車、雅な囃子は人びとの耳目を惹き、経済力のある地域であれば、祇園社がなくとも「○○祇園」「○○山笠」と称し、大きな山や山車を繰り出し盛大に行われるようになった。

福岡県においては国指定の戸畑祇園大山笠、博多祇園山笠が代表的な祇園行事であるが、競走するもの、囃子にのせてゆっくり進むもの、舁くもの、曳くものなど祭りの在り方や、山の形や装飾などは地域の特色がある。博多祇園山笠を中心とする筑前系の人形山、筑後の旧柳川・三池藩領内の大蛇山、行橋市元永の須佐神社（今井の祇園さん）を発祥とする豊前系の幟山・提灯山に大別されるが、宇島祇園など豊前市の海岸沿いにみられる祇園祭は、山車（踊り車）や船屋台など中津祇園をまねたものとされる。豊前市八屋祇園では踊り車・屋台山・船屋台（大船）のほか、高い岩山に人形を飾った人形山も見られ、様々な要素が採り入れられている様子がうかがえる。

県下一の都市博多の影響は山笠ばかりではない。博多周辺や宿場町などに、八朔の贈答・笹飾り、節供の土人形の贈答、盆の人形飾り（いけどうろう）、祭礼における役職者の赤手拭いの使用、町内毎のデザインの長法被・提灯、屋台を曳くどんたく囃子などに博多と同じ習俗が見られ、軽妙洒脱で風刺の効いた「博多にわか」も、盆に青年が演じるなど、周辺地域に濃密に分布した。こうした現象を「はかたうつし」という。都会のものが格好良くみえるのは、今も昔も変わらない。こうした要素がどんどん採り入れられ、祭りが変容していく場合も多いのである。

久留米市北野天満神社の神幸祭、みやま市瀬高広田八幡神社の神幸祭（どんきゃんきゃん）、宗像市吉留の八所宮の神幸祭などに供奉する大名行列の奴の所作も、「格好良いもの」として採り入れられた一例といえる。

（森　弘子）

第三章　各テーマ概要

本県の祭り・行事調査事業により収集された祭り・行事は、文化庁が策定した「祭り・行事調査実施要項」において設定された「全国共通テーマ」及び福岡県が独自に設定した「福岡県独自テーマ」に分類される。着眼点により複数のテーマに該当する祭り・行事があるが、本県ではいずれのテーマについても該当する祭り・行事が伝承されている。

本章では、本県にとって特徴的な祭り・行事のうち、代表例として、「一　山車・屋台・船などの出ることに特色のある祭り・行事」、「一五　悪霊防御（防ぎ）・悪霊送り・神送りを目的とする祭り・行事」、「一七　田の神・恵比須など生業にかかわるカミに対する祭り・行事」、「二一　玉せせり」、「二二　替物行事」、「二七　川祭り」のテーマについて述べる。

一　山車・屋台・船などの出ることに特色のある祭り・行事

「山車・屋台・船などの出ることに特色のある祭り・行事」として、福岡地域、北九州地域及び筑豊地域（ともに旧筑前国側）には人形を飾る山笠が広く分布している。中でも福岡市博多区の「博多祇園山笠行事」は九州北部の山笠の典型例として重要無形民俗文化財に指定されている。また、幟山笠が分布する北九州地域及び筑豊地域（ともに旧豊前国側）では、伝承地が隣接する旧筑前国に入るものの、昼の幟大山笠から夜の提灯大山笠へと姿替えする北九州市戸畑区の「戸畑祇園大山笠行事」があり、こちらも重要無形民俗文化財に指定されている。また、北九州地域南部には豊前市の「大富神社神幸行事（八屋祇園）」などのように大船が登場する祭り・行事もある。以上については、本県が独自に設定したテーマに「山笠」の項があるため後述することとし、本項では筑後地域の山車などが出る祭り・行事について述べる。

筑後地域では、大牟田市、みやま市、柳川市、熊本県玉名郡南関町に伝承される「大蛇山」が報告されている。竹や和紙、神社のお札などで作った竜の頭や尻尾を取り付けた「大蛇山」と呼ばれる山車が、太鼓・鉦の囃子や法螺貝の音に合わせて運行される。また、大蛇に咬まれると無病息災になるとも伝えられており、子どもを大蛇に噛ませようとする親の姿が見られる。

大牟田市の「三池祇園社祭礼行事」では三池祇園宮に奉納する本町と、弥剱神社に奉納する新町の大蛇山が最も古いとも伝えられる。その後前述の二山を含む六山を中心に、さらに多くの人が曳けるよう新たに大蛇山が運行されるなど、広く大蛇山が分布することとなった。柳川市の「中島祇園祭」では大蛇山に加え、踊り子を乗せた山車の「踊り山」、からくり仕掛けの子獅子が登場する「獅子山」が運行される。また、大名行列である「殿様行列」もつく。なお、地元では祇園祭が始まった当初は大蛇山のみが巡行していたとも伝えられる。みやま市の「江浦町祇園祭」では大蛇山のほかに「踊り山車」がつき、「渡瀬祇園祭」では大名行列の名残りとされ、滑稽な所作を行う「雲助道中」がつく。いずれも七月に実施される。

また、柳川市において一〇月に実施される「どろつくどん」は、京都の祇園祭の山鉾を模したとも伝えられる山車が運行される。山車には踊り手が乗り、葛西囃子を参考にしたとも伝えられる囃子に合わせ、能に発したともされる舞を舞う。

一五　悪霊防御（防ぎ）・悪霊送り・神送りを目的とする祭り・行事

悪霊防御は、主に六月や七月に行われる「茅の輪くぐり」が多く報告されている。その他特徴的な悪霊防御の祭り・行事として、北九州市小倉北区萩崎町の「わいわい祭り」がある。一月の小正月に行われる。人々が行列をなして地区内を巡り、辻では神職の「一つ祝ってくれ」という呼びかけに対し「祝おう、祝おう」と応える。柳川市有明町下八丁の「ワラの大人形」は二月一日に行われる。男女一対の大きなワラ人形を作り、海童神社の鳥居に立てかける。人びとが年の数だけ八の字に回り、夜、鳥居から大人形を外し崩して大人形を送る。かつては、青年が川に人形を流しに行っており、その際、会話や流した

大人形を見に行くことなどは禁止されたほか、途中にワラが落ちていないか確認に行くほどであった。ワラの大人形に類似するものとして、みやま市瀬高町上庄に伝承される「大人形・大提灯」がある。八坂神社において七月に行われる。大人形は、八幡太郎義家、安倍貞任・安倍宗任（一年交代）の二体の大人形の股をくぐり、無病息災を祈願する。大提灯は、魚鱗や貝殻などで色鮮やかに作られた大提灯が地区内を回る。宮若市平の「平八月祭り」は岡見神社から囃子を奏しながら地区内を回り、地区の外に設けた水神棚に向かう。地区内の辻では足を止め、音色を変える。水神棚に到着すると、杖で水神棚を倒し、人々は話すことなく静かに地区内に戻る。「何か悪いものがついてこないように」とも伝えられている。

「一七　田の神・恵比須など生業にかかわるカミに対する祭り・行事」

「二一　玉せせり」

五穀豊穣をもたらすとされる田の神に関する祭り・行事において特徴的なものとして、小郡市横隈において一一月に行われる「早馬祭」が挙げられる。新ワラを使って早馬と呼ばれる馬の胴のようなものを二頭分作る。中には稲穂や殻付きの大豆の枝などを入れる。その後タテガミを外し、二手に分かれて家々を訪問する。家の玄関で地固めをするように早馬を突く。全ての家を回った後は、早馬は解体され、人々は早馬の中に入れてあった収穫物を縁起物として持ち帰る。同様の行事は、小郡市乙隈でも行われている。朝倉市杷木穂坂の「杷木の泥打ち」はクジで選ばれた氏子が代宮司となり、境内に設けられた「神の座」で、神田から運ばれた土でこねられた泥を塗り付けられる。その後、地区の端の道祖神まで神幸するが、神幸の間、子どもたちが泥を代宮司に向かって投げつける。

豊漁、豊作、商売繁盛などをもたらす恵比須に関する祭り・行事において特徴的なものとして、新宮町相島の「恵比須祭り」が挙げられる。島の青年が恵比須、大黒、福禄寿の三神となり、家々を回り豊漁などを祈願する。北九州市八幡西区木屋瀬において一二月に行われる「子供えびす（こども頭行事）」は、頭と呼ばれる小学四年生の男の子が中心となり、笹を飾った山車を作り町内を引き回す。「宮田えびす祭り」では恵比須座が開かれ、福引を行う。この座を開き福引を行う恵比須祭りは、北九州市若松区浜町の「恵比須祭」、福岡市博多区東公園の「十日恵比須」、宮若市福丸の「若宮えびす」などがある。

また、主に玄界灘沿岸に分布し、恵比須信仰の性格が強いとされる「玉せせり」についても述べる。福岡市東区箱崎の「玉取祭」は玉取恵比須神社から玉を競りながら筥崎宮に向かい、玉を納める。年占いの要素もあり、最後に玉を納めた競り子が浜方の場合は豊漁、陸方の場合は豊作になるとも言われている。福岡市中央区伊崎の「十日恵比須祭」は、玉を持って地区の家々を回り、家では玉を神棚に突き当てて御神酒をかける。その後、海中で玉を競り合い、恵比須神社に納める。

「二二　替物行事」

神社などに集まった人々が何か特定のものをお互いに交換し合い、最終的に特別なものを手にした人が福を授かる行事で、全国的な分布が見られる。本県の替物行事としては、太宰府市宰府の太宰府天満宮の「うそ替え」が挙げられる。ここではうそ替えは追儺行事の「鬼すべ」の前に行われ、暗闇の中で木うそを交換し合うことで、知らずに口にする嘘を天神様の誠に替えていただく行事とされている。うそ替えは大牟田市宮原町の駛馬天満宮など各地で行われている。

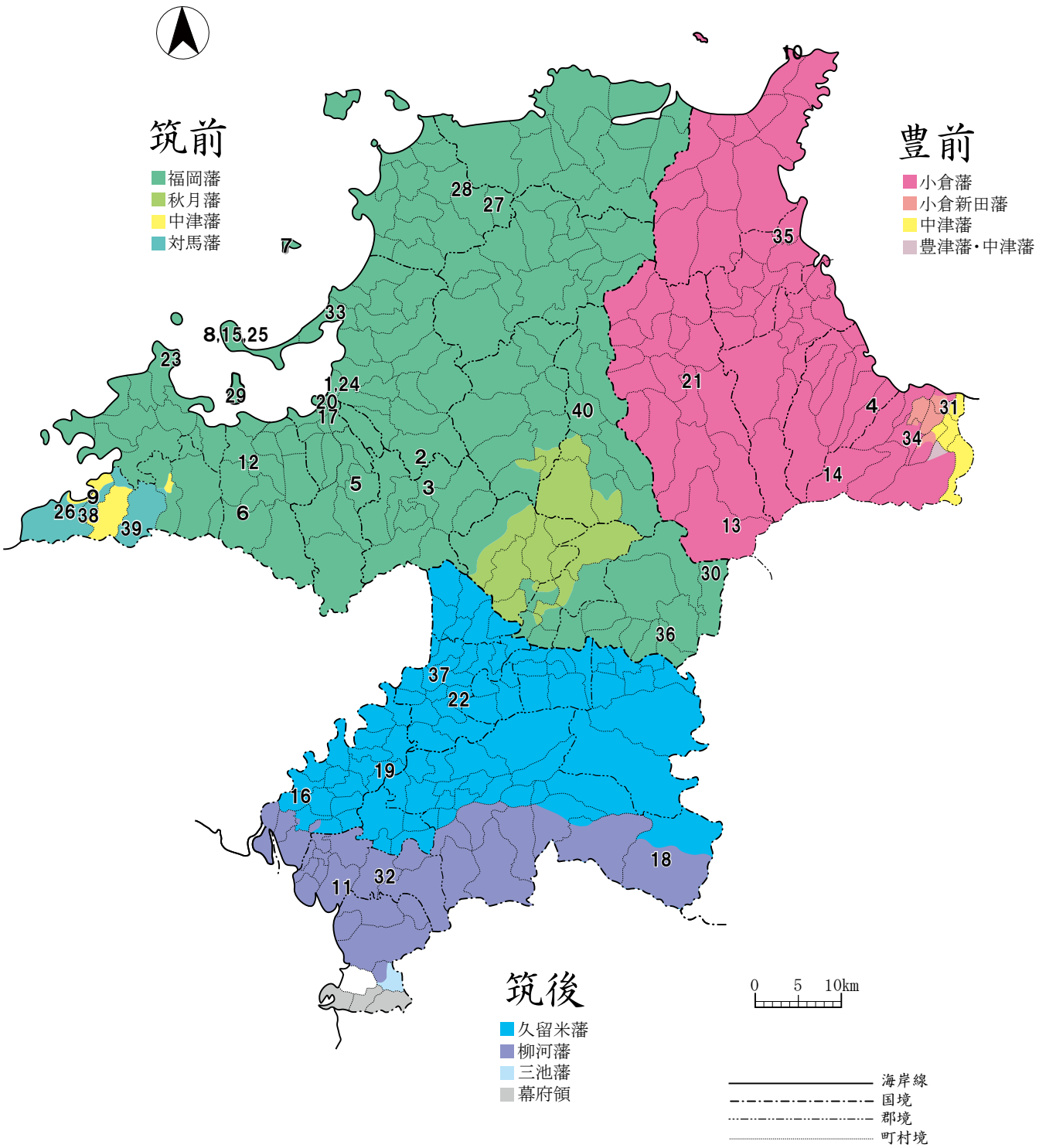
「二七　川祭り」

本県の川祭りは、農業に関連して水神祭りの性格が強いものと水難除けの性格が強いものに大別される。水神祭りの性格が強いものは「ダブリュウ」などと呼ばれることもある。形状は竹を三本立てて供物を下げるもの、竹を四本立てて中央に竹を筵のようにしたものを棚として供物を置くものなどがある。

水難除けの性格が強いものとして、糸島市二丈深江において七月に行われる「深江の川祭り」が挙げられる。子どものみで行う行事で、

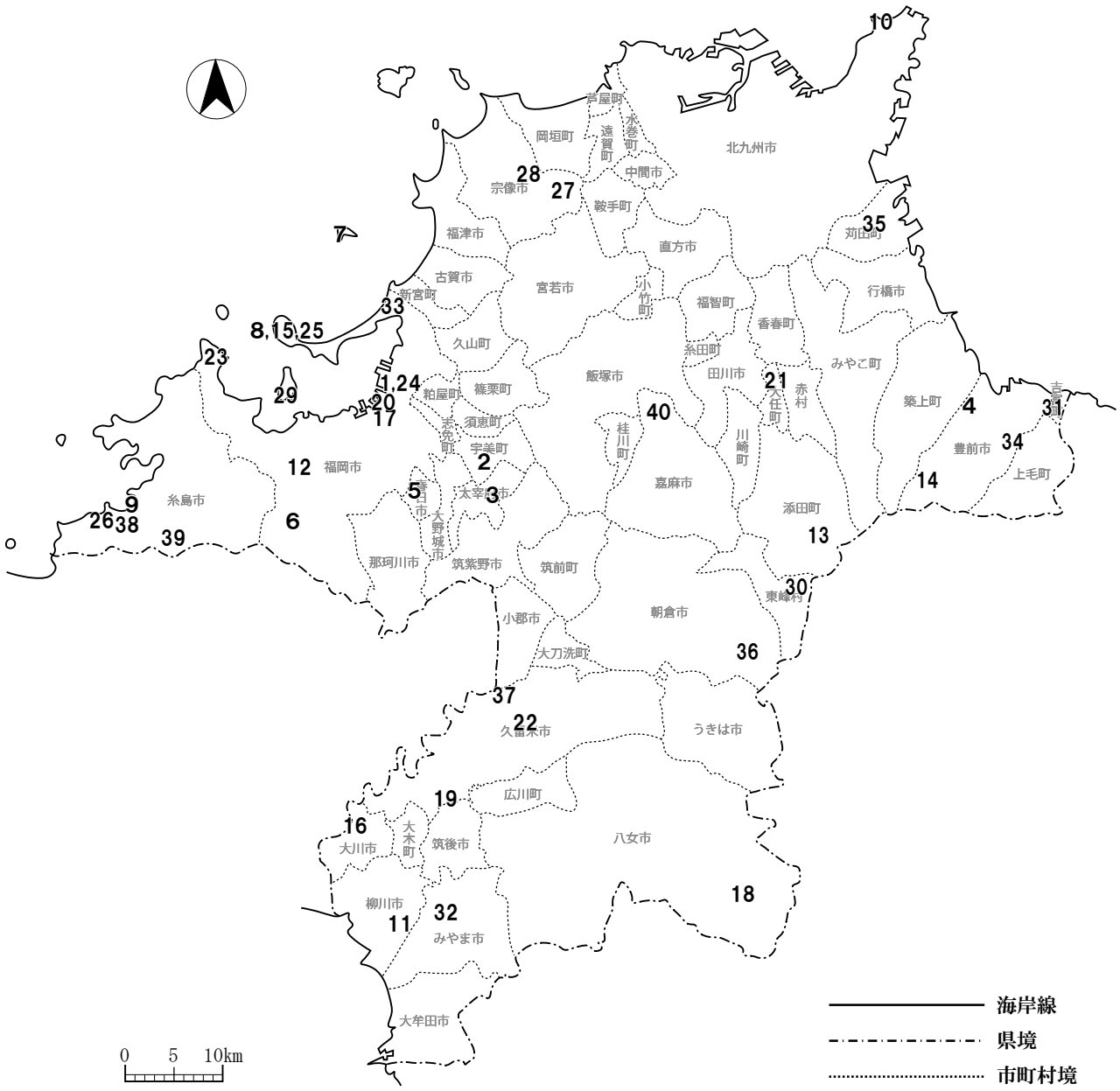
祭り前日には竹を切りに行き、米を集めるなどをして、公民館などに一晩籠る。翌日早朝、砂浜の砂で祭壇を作り四隅に竹を立てて水神棚とし、神職のお祓いを受ける。その後、竹を海に流して（現在は流していない）海開きとする。八女市岩崎の「岩崎の子ども川まつり」も子ども中心の行事で、麦ワラとコモで作ったバラ（酒樽）とドンバラ（酒の肴）、名前を書いた短冊を結び付けた大竹を地区内の用水路などに奉納する。「大木の川祭り」は水難除けなどを目的として大木町の堀の各所にワラで作った飾り物を付けた竹を立てる。飾り物には、オムスビやカッパの好物の煮干しなどを入れたワラヅト、酒を入れたトックリ、盃などがある。

（久野　隆志）



図一． 祭り・行事詳細調査対象行事の位置図①（各番号は第四章第三節の詳細調査と対応）

※破線で示した町村境界は明治二十年から昭和二五年まで



図二． 祭り・行事詳細調査対象行事の位置図②（各番号は第四章第三節の詳細調査と対応）
※市町村の境界は現在のもの

表一．祭り・行事詳細調査対象行事の実施場所情報

通し番号	行事名	実施場所	実施場所住所
1	玉取祭	筥崎宮	福岡市東区箱崎１丁目２２－１
2	ホンゲンギョウ	宇美町原田上公民館	糟屋郡宇美町原田５丁目８－５
3	鬼すべ・鷺替え	太宰府天満宮及び周辺	太宰府市宰府４丁目７－１　他
4	畑のどんど焼き	水神社	豊前市大字畑７０１
5	嫁ごの尻たたき	小倉住吉神社	春日市小倉３丁目３７
6	石釜のトビトビ	石釜公民館	福岡市早良区大字石釜７３２
7	相島の恵比寿祭り	若宮神社	糟屋郡新宮町相島１３７７
8	歩射祭	志賀海神社	福岡市東区志賀島８７７
9	百手祭・大飯喰らい	淀川天神社	糸島市二丈深江２２２０
10	和布刈神事	和布刈神社	北九州市門司区門司３４９２
11	藁の大人形	龍神宮	柳川市有明町１９５２－９
12	粥占	飯盛神社	福岡市西区飯盛６０９
13	英彦山神宮御潮井取り	英彦山神宮 沓尾海岸（姥ヶ懐）	田川郡添田町英彦山１ 行橋市沓尾
14	御田植祭	国玉神社	豊前市求菩提２０２
15	山ほめ祭	志賀海神社	福岡市東区志賀島８７７
16	沖詣り海神祭	若津神社 風浪宮	大川市向島２０８９ 大川市大字酒見７２６－１
17	叶院千灯明	叶院（普賢堂）	福岡市博多区上呉服町６－８
18	風旗	風神宮	八女市矢部村矢部３６３５－３
19	久富の盆綱曳き	久富熊野神社	筑後市久富１６３５
20	流灌頂（福岡市）	大博町周辺	福岡市博多区大博町８　周辺
21	流灌頂（大任町）	十輪院	田川郡大任町今任原２５９０
22	動乱蜂	王子若宮八幡宮	久留米市山川町５６９
23	ヒョウカリライ	白木神社 恵比寿神社	福岡市西区西浦浜
24	筥崎宮神幸行事	筥崎宮	福岡市東区箱崎１丁目２２－１
25	志賀海神社神幸行事	志賀海神社	福岡市東区志賀島８７７
26	福吉神幸祭	白山神社	糸島市二丈福井４９０９
27	八所宮御神幸行事	八所宮	宗像市吉留３１８６
28	平等寺の宮座	白鬚神社	宗像市平等寺５１８
29	能古島白鬚神社おくんち	白鬚神社	福岡市西区能古７１９
30	薦替え	岩屋神社	朝倉郡東峰村大字宝珠山４１４１
31	献水神事・水占い	壺神社	築上郡吉富町土屋５１７
32	どんきゃんきゃん	本郷聖母神社 廣田八幡宮	みやま市瀬高町本郷７１０ みやま市瀬高町文廣２０７
33	はやま行事	奈多公民館	福岡市東区奈多２丁目１４－２
34	山人走り	嘯吹八幡神社及び周辺	豊前市山内１４３
35	亥の子	浄土院地区	京都郡苅田町下片島
36	おしろい祭	大山祇神社	朝倉市杷木大山５２７
37	御供納	天満神社	久留米市宮ノ陣町八丁島
38	ウシサマ	個人宅	糸島市二丈
39	白糸の寒みそぎ	熊野神社	糸島市白糸６８４
40	川まつり	須賀神社	嘉麻市山野１６０９

第四章　詳細調査

第一節　特論一　祇園山笠（ぎおんやまかさ）

はじめに

福岡県「祭り・行事」調査では、「山車・屋台・船などが出る」という全国共通のテーマのもとに、関連する祭礼を拝見することができた。全ての対象を調査できたわけではないが、田川郷土研究会の調査研究成果[1]や筆者のこれまでの北部九州での祭礼の知見も加えて、福岡県内の山・鉾・屋台を伴う行事を俯瞰してみたい。

北部九州の山・鉾・屋台と藩域

北部九州には、多様な「造り物」がある。大別すると、旗や幟、造花などを建てた屋台の幟山（旗指山・花山）、大蛇の意匠を施した屋台である大蛇山、そして人形の飾りを施す人形山である。幟山、大蛇山、人形山の分布を俯瞰すると、幟山は東部に多く、大蛇山は南部に多い。人形山に関して言うと、九州北西部の唐津市（旧東松浦郡）一帯まで多く、長崎県に入ると分布がなくなる。ただ、壱岐島には唯一の分布がある。佐賀市に入ると分布はまったくない。

この分布特性を、江戸時代の藩域に重ねてみると、幟山は小倉藩領、大蛇山は三池藩・柳河藩領、人形山は福岡藩・唐津藩・幕府領と合致する。つまり「造り物」違いが、江戸時代の藩域を反映しているということである。

山・鉾・屋台は、このように江戸時代の文化領域のあり方を今和の今に伝える媒体としても機能していることがわかる。藩政の相違によって人々の気質や趣向にも違いが現れ、祭礼文化の親和と対立が生み出されてきたのである。この分布相は、江戸時代に形成された目に見えない文化の壁が今も歴然と機能していることの証左となっている。

造り物の起源は、中世の京都祇園会に登場した「山鉾」にあるとされる。「鉾」は高く、木製の大車輪があり、大勢の人々に曳かれて巡行する。対して「山」は、鉾より小ぶりで、人形が飾られ、人に担がれてゆく。飾りの主題には、世相を反映した、諷刺的なものも許されていた。

また、祇園会には「風流笠」と呼ばれる傘の造り物も付随した。博多松囃子でも見られる「傘鉾」、あるいは柳川の御賑会で出ていた「山鉾」のようなものである。この「祭り・行事」調査に福岡県独自の調査項目として設定された「山笠」とはこのふたつの要素の融合し、独自の発展を遂げたものであろう。

福岡県下の「山笠」の系統

山笠とは、趣向を凝らした人形などの飾り物を乗せて巡行する「造り物」のことである。それはヤマと呼ばれ、夏の祇園祭礼に登場するのが一般的だが、春秋の神幸行事に随行するものなどもあり多様性がある。人形山について北部九州全体で見ると、今は行われなくなったところも含めると、百余箇所の分布がある。それらを形態と使用される人形などから、筆者は以下のように、五つの系統にわけている。

まず福岡市とその周辺、福岡藩領の旧筑前国に分布が見られもの。その特徴は、頂上からシオリと呼ばれる台の上まで、道が必ずつながるように波や岩瘤などの飾りを配置するところにある。岩組山とか岩山などと呼ばれる。飾りの主題は人形浄瑠璃や歌舞伎の名場面が採用されることが多く、表（正面）と背面（見送り）の両面にそれぞれで異なる主題の意匠が施される。時代を反映した主題の人形飾りは見送りにされることが多かった。頂上から時系列で物語が展開していくように、道に従って飾り付けられる。標題によっては、道が途切れないように橋をかけたり、回廊を回したり、船や馬を飾ってその配置の決まりを守っていく。山笠の頂上から、道は数回折れ曲りジグザグに下まで降りてくる。途中の折り返しには、城郭や寺院などヤカタを設けて人形を配置していく。台周りは杉の葉を竹で挟み込んだ「杉壁」で覆われる細工を施すところにも特徴がある。

この山笠は、福岡市とその周辺部に濃い分布が見られる。ただ、福岡市中心部を取り囲む地域には、山笠の空白地域が連なり、分布の多くは距離的にそこから離れた場所にある。空白を抱えるこの分布群の中心にあるのが、国指定無形民俗文化財の「博多祇園山笠」（以下、博多山笠）である。その始源伝承の古さや吸引力の大きさから博多山

笠の影響下にあるグループと考えることが可能で、これを筆者は「博多系」と呼んでいる。

博多山笠の巡行には、多くの人手が必要である。車輪がなく人が棒で肩に担いで行く舁き山だからである。一つの舁き山を約五キロメートル巡行させるのに千人以上の人手が必要とされる。一人の舁き手が山笠を舁ける距離は短く、交代要員が必要だからである。博多の町々は、江戸時代から周辺農村の「山笠加勢」を受けてきた。舁き手を供給してきた為に、博多周辺に分布の空白が現れているのである。博多山笠の始まりには諸説あるが、いずれも確証がない。ただ、中世の康正二（一四五六）年には、すでに行われていたとする文書が残っている。

博多系に分類するヤマには博多山笠との関連が何かしら見出される。飾りの形式はもちろんのこと、使うに人形に至るまで類似点を見出すことは容易い。博多山笠の人形は、陶製の型に紙と大鋸屑を貼り付けて、型抜きした頭に、胡粉を塗り美しく彩色したものである。胴体は竹枠に藁を詰めて紙を貼り付けたものである。重量が軽いことが特徴である。衣装は豪華な西陣織など実際の着物に使う生地が使われてきた。現在では博多織も使われるようになった。かつての博多織は硬くて造作に向かなかったからだ。岩瘤、波などは竹の骨組みに紙を貼り付け着色したものである。甲冑は厚紙に、金銀の紙や小さな鏡を縫い付けて人形用に誂えられるが、江戸時代末期までは本物の甲冑が使われていた。人形は等身大を原則としていた。明治時代までは、高い飾り山をそのまま舁いていたが、電柱の敷設、電線の架設などの近代化により、山笠は舁きまわる低い「舁き山」と据え山の高い「飾り山」に別れた。人形もそれに合わせて、高いところほど小さく作られる。舁き山にいたっては人形一体を大型化した飾りに変化してきている。人形は博多人形師の手になるものだが、博多人形とは言わず「山笠人形」あるいは「山人形」と呼んでいる。博多人形師は土の人形を作り生計を立てているが、博多松囃子が終わると山笠に向けて二箇月前から、山人形の製作に専念する。ただ、山笠にかかわる人形師たちの数は少ない。

博多系には、この博多の山人形を借用して地元の山笠に飾る例がある。博多山笠で見た人形が別の主題で、周辺地域に現れることは多々ある。かつては、博多の町内が貸し出していた。博多の町組である「流」が人形飾り一式を買い取っていたからである。現在では、据え山に飾られる人形は人形師からの借用なので、祭礼終了時には返却する。周辺の博多系の山笠が、それをまた借用している。飾り付けには博多人形師が出向く場合もある。離島にも博多系は分布するが、そこでは地元の人が博多山笠を真似て人形や飾りを作る所もある。

正徳二（一七一二）年に、博多から祇園神とともに造り物の山笠三基も伝えられたと『筑前国続風土記』記されている所がある。江戸時代に海運で栄えた福津市の津屋崎である。ここの山笠も博多と同じく頂上から台上まで一本の道を通す約束がある岩組山である。明治期の山の姿は博多よりはスリムではあるが高さは同じように高い。ただし、津屋崎山笠に飾られるのは、博多の山人形ではない。津屋崎人形師が作る山人形である。製作方法も博多と共通で、日常は土人形を作って生計を立てているのも同じである。博多人形師と血縁関係はないとされるが、人形型の交換や、津屋崎人形に不幸があり喪がかかったときなどは、博多人形師が代わって飾り付けに応じたりと交流があったことを伝えている。山笠の形式は同じであるものの、山笠の舁き棒には津屋崎ならではの工夫がある。津屋崎の街並みは、津屋千軒と言われ所狭しと町屋が並ぶ、当然道も狭く、山笠はそのなかを疾走する。曲がり角もたくさんあり、小回りが効くことが要求される。そこで、舁き棒の長さを調整した。六本ある棒は外にいくほどに短くなっており、その工夫で厳しい曲がり角を山笠が容易に曲がることができている。博多山笠と姿は同じであるが「田舎山」という言われ方で、違いを語ることが知られている。

津屋崎の山人形も賃借方式であり、どのような主題にも対応できるように人形を作り置きしている。博多から祭神、山笠、行事ともが遷されて広がった博多と同系の山笠ということができるが、玄界灘沿岸地域に津屋崎人形師が製作する山笠が一定の分布を持つことから「津屋崎系」と呼んでいる。

博多系のように一本の道を通さず、歌舞伎や人形浄瑠璃の題材を、館を積み上げたような造作に、ブロックごとにその場面を配置していく飾り方をする山笠がある。直方山笠である。製作に携わってきたの

は直方の人形師たちであった。筑豊の彦山川水系の下田川地方や遠賀川流域の産炭地、北九州工業地帯などに多く分布するもので、人形と飾りを、直方の人形師がほぼ供給してきた。津屋崎人形師が飾り付けた所もあるが、直方の形式で配置されているところから、この形式の山笠群を「直方系」と呼ぶことにしている。

直方山笠は、直方多賀神社の秋の神幸に供奉した造り物がその始まりとされる。江戸時代の文献には「花山笠」と記され、もとは人形山ではなかったとも考えられる。人形山と認識できるようになるのは、明治時代に入ってからである。一〇メートルは優に超えているような姿が写った明治三七（一九〇四）年の写真が残っている。後には、台上の館の造作が両端に大きく広がる工夫「開き山」が生まれた。開き山というのは、明治四一（一九〇八）年に博多の山笠が低くなったときに飾りを横に広げて配置するために考え出されたものだが、館飾りが動いて開く工夫は直方独特のものである。直方系の山笠は喧嘩山笠とされ、暴れるところに個性があり、この工夫が喧嘩の華となっている。山を上下に揺すりガブルという動作をして暴れると開きが連動して動きが派手になるのだ。それを「博多のように上品ではない」と評する人もいる。直方では、炭鉱経営者や裕福な商人などが山人形を所有しており、それを祭礼のときに出して飾り付けたとされている。現在の行事は山台を洗うことから始まり、台組して四隅に笹竹を立て注連縄を張って神官から修祓を受けるが、その姿を「笹山」と称している。また、人形山の夜の巡行では、電飾を施し多数の提灯の先導で巡行する。この姿を「提灯山」と呼んでいる。直方では笹山、人形山、提灯山と姿を変えることが意識されている。北九州市の山笠も笹山から人形山と姿を変えるが、そこも直方の人形師が飾り付けに携わってきた。ただ、直方山笠の変化は経過としての姿であり、博多山笠の素山から人形飾りへということと同じであり、変化に特別な意味合いを持たせてる北九州市のヤマとは異なる。詳しくは後述する。

直方の人形師には、かつて二つの系統があった。一つは津屋崎の山人形の技術を学んだ人形師、もう一つは博多人形師と師弟関係にあった人形師、こちらは早い時期に製作を止めた。コロナ禍のここ数年は、唯一残っていた人形師を廃業に追い込んだ。現在はその技術を受け継ぐ、福智町の人形師だけが直方系を担っている。

福岡県外の「山笠」の系統

江戸時代に旧浜崎村の庄屋がお伊勢参りの帰途に見た京都祇園を伝えて始まったのが佐賀県の浜崎祇園とされる。現在は唐津市となった浜崎祇園の山笠は高さ一五メートルと高く、正面から見ると博多系のように一本の道が通って同じように見えるが、横から見ると大きく棒を槍のように突き出すように人形や館を飾りつける「槍出し」と呼ばれる手法が特徴である。このような特徴を持つ山笠は旧東松浦郡一帯（現唐津市と周辺地域）に複数分布している。この山笠群に飾られていた山人形は浜崎の人形師が製作したものだった。かつて浜崎には人形師は数人いたが、現在は一人もいなくなっている。浜崎の山人形は博多に比べて概して小ぶりである。筆者はこのグループを「浜崎系」と呼んでいる。ただ、分布域では「博多の人形が回ってくる」という語りが伝えられてきた。実際は、浜崎の人形師が製作したものであったが、ある人形師宅に残された頭を調べると博多人形師が製作した山人形であった。この頭を使った浜崎の山人形が、博多のものと人々に認識されていたのであろう。浜崎人形師不在後は、直方の人形を借用して飾った時期もあった。現在は唐津市の人形師が製作したものに加え、博多の人形師も製作に携わり、博多の山人形も使われるようになってきている。福岡県下では今は中断しているが、糸島市深江の秋祭りに出ていた山笠が「浜崎系」であった。

浜崎は、江戸時代は幕府領であったが、同じ天領に伝承されている造り物として有名なものに大分県の国指定重要無形民俗文化財の日田祇園山鉾がある。江戸時代に始まったとされ高さは一五メートルはある。平成に一基を復元したので「平成山鉾」と呼ばれたが、現在は多くの山笠が同様に高くなっている。日田の飾り方は、博多と同じく一本の道を通して飾り付けているが、その道は横に張り出す形になる。バランスをとるために、台の左右に俵を付けるのも特徴である。人形は日田の人形師が作る。下駄製作と兼業で人形作りに携わっていた。頭は木製で面目は、文楽人形のようである。これに対して博多の山人形のことを日田では「生き人形」と評する。かつて観客は、日田の山

鉾を見て浜崎同様に「博多の人形が回ってくる」と話していた。近代に、実際に博多の著名な人形師が山鉾を飾っていた事実を反映した伝承である。人形が逆さまになって落ちていくような、博多の山人形しかできない飾り方が明治期の写真に記録されている。日田の人形は木製で重量があるため、直立した姿で飾る。対して博多の山人形は軽く、アクロバティックな飾り付けができた。また日田の大和町だけが、博多山笠の飾りをまるごと借りていた事実もあった。その町を通して博多の流儀が日田に伝わっている。ただ日田には豪奢な金糸の織り物の幕をさげ、優雅な祇園囃子を演奏しながら巡行するという天領ならではの京都とのつながりを感じられる部分も残っている。玖珠郡九重町の下担祇園の山車は、日田と同じ形式を持っている。福岡県内では、吉井町の山笠がこの系統に入る。現在では博多から山笠を一式を借用して飾っているが、かつては日田と同じ形式であった。このグループを「日田系」と称している。

文化伝播とその経路

人形山すべての系統には、「博多うつし」という言葉が伝えられてきた。「博多習い」とか「博多まねび」とも使われていたが同じ意味である。それは博多の文化を尊敬したうえで真似て、習い覚え後世に伝えていくことを指している。この背景には博多の都市文化に対する憧憬の念が存在する。かつての博多はそれほどに周辺の人々が、挙って訪れる都会であった。北部九州の人形山の分布域は、博多と同質の気風を持つ領域、すなわちハカタ文化圏でもある。このハカタとは実際の博多よりも広い範囲を指し、博多の文化を手本や雛型として受け入れる場ということでもある。普段の蓄えを一気に使い切るような祭りが、佐賀市近辺で良しとされないのは、ハカタ文化圏ではないことを示している。その範囲内には山笠の分布は見られない。もちろん佐賀市近郊で山笠がある所もある。小城や多久である。そこは、江戸時代は佐賀本藩ではなかった。小城祇園は「見事みるなら博多祇園、人間みるなら小城祇園」と博多を意識した物言いを残している。

博多うつしは、山笠の形態だけに見られるのではない。博多山笠の「追い山」行事は、その迫力ゆえにハカタ文化圏内では多く見られるが、博多系以外の直方系にまで及んでいる。また、博多山笠の法被や、組織の模倣なども見られる。当番法被と呼ばれる長法被はその格好良さから、日田祇園で着用されるまでに広がっている。これには、現在のマスメディアの在り方が影響している。テレビは北海道に博多山笠を伝えた。北海道芦別健夏山笠である。番組で見た山笠を芦別の人々は自作して自分たちの祭りに出した。これも博多うつしである。今では、博多との人的交流も盛んになり、博多から正式に兄弟山笠として認知されるまでに至っている。

山笠の分布を見ると、商都、城下町、宿場町、港町など繁華な場所に多い。周辺部に農村や漁村などを持つ、いわゆる「都会」である。純農村部には、山笠はない。しかし例外もある。それは近代に入り急激に人口を増した場である産炭地である。多くの人手を必要とした炭坑では、全国からたくさんの鉱夫が集まり一挙に都市化することとなった。彦山川・遠賀川水系の炭鉱町の多くには、多様で荒々しい気風が醸成され、それを「川筋気質」と表現した。山笠はそれを一つにまとめるものとして有効であり、炭鉱経営者なども積極的に祭礼に参与した。直方の資産家や裕福な家が山人形を購入し家に飾って保管していたもの持ち寄り山笠に飾ったとのされるのは、その証左であろう。そこで産出された石炭は、水運で遠賀川の河口の芦屋に運ばれ、日本の近代を支える原動力となってきた。

遠賀川流域の北九州市八幡西区木屋瀬には「博多の祇園は、飯塚から木屋瀬に来て、黒崎で終わる」という言い方が残っていた。木屋瀬は長崎街道の宿場であり、遠賀川を渡ると唐津街道赤間宿へとつながる交通の要所である。ここでは祇園祭礼に直方系の人形山が出るが、明治時代までは博多山笠と同じ姿であった。宿場周辺の農村からは町屋の甍の上にたなびく、山笠の幟「二引」が見えたと伝えている。宿場町が周辺から人手を集めており、近世から舁き手を周辺農村に頼んでいた博多と同じ構造である。長崎街道を通じて博多の文化が伝えられ、祇園祭礼として残されてきたことを今に伝えるものであろう。

この構成は、山笠を行う場合の人の手当てには最良の構成である。博多山笠もまさしく、この構成のうえに成り立ってきた。博多＝マチ、周辺漁村＝ウラ、近郊農村＝ムラである。舁き手を農村や漁村から雇

い、造り物を製作する資金は町が担うということである。山笠は、都市の祭礼である。人、モノ、資金の循環がなければ山笠のような祭礼は成立しない。それを見る人、「見物人」も必要とされる。日頃から人の往来が盛んで吸引力の高い都市部ならではの祭礼といえよう。ウラは、マチ的な要素を内包している。漁業は商行為なしには生計が成立たないからである。津屋崎のようなウラが山笠の中心となった理由もそこにある。この基本構造は博多と同じだったのである。

豊前地方の原型「今井系」

ここからは人形山とは別系統のヤマについて考えていく。山車・山鉾などと呼ばれるものである。小倉藩領の旧豊前国で最も古い始原を伝えている祇園社が「今井津祇園社」である。京都祇園社から中世に今井津金屋（現行橋市今井）に勧請された祇園神である。豊前地域の祇園社（須佐神社）は、ほとんどがこの今井祇園社（現今井津須佐神社）から勧請されたと伝えている。また毎年、万年の加護を願って、今井津の近くの「姥ケ懐」という海岸で潮井（海水）を汲んで、町村の代参者が今井祇園社に参り、祈祷札を受けて帰る万年講「今井さまの万年願参り」が行われており周辺地域からの信仰も篤い。この座元には「今井津　須佐神社」と記された座元旗を掲げ、そこが分霊された村祇園とみなされた。「今井のお祇園さん」の信仰的影響力は豊前のみならず、旧福岡藩領の筑前まで及んでいて、黒崎の祇園社、宗像市赤間の須賀神社など、今井祇園社との関係を伝えているところも少なくない。

今井のお祇園さんの祭りが「今井祇園行事」である。詳しくは詳細報告に譲るが、『太宰管内志』「今井祇園社」の項には「今井の祇園社と云うは、近国に知られたる社なり。六月の祭には、郡中の人集て式を行へば、甚だにぎやかなり。山笠六基を造る。十四日の夕に連歌興行あり。其時宗匠は山笠の台上に居るなり。山笠のつくりやうは、京都祇園に似たり。さて今井の町と、元永の町の間に汐入りの川あり。山笠此処を引渡す。故に車をふとく造る事なりとかし。」[2]とあり、車上連歌などの奉納行事やその賑わいとともに京都祇園の鉾との類似を指摘している。高さ四丈、二本の鉾柱を持ち、上部に付けられた鎌で、八ツ撥という稚児を乗せて道切の注連縄を切って進んでゆく、かつての姿は京都祇園祭りの長刀鉾と同じである。かつて今井の山車は祓川を渡り元永の祇園社に詣でて稚児を奉納していたため、車輪は現在でも径が六尺ある。

今井祇園の特徴は、連歌奉納、稚児・大幣奉納、提灯山巡行、飾り山（幟山）巡行と多彩な行事にある。祓川近隣の英彦山を水源とする今川を遡ると、今井祇園と形式が類似する幟山が複数存在している。みやこ町犀川の生立八幡神社山笠、田川郡赤村下赤・上赤地区の山笠、添田町下津野・上津野の高木神社の幟山である。生立八幡神社の山車には、今井の山車の部材が使われている町があり、製作法も今井に学んだと伝えている。また、今井元永の舁き山の復活に際して生立八幡神社の舁き山から製作・操作方法を逆に学んでいる。元永の舁き山と下津野の御神山の鉾柱は、生立八幡神社の二本の鉾柱「だし」と形式が共通している。花・ヤナギと呼ばれる飾りが付くのは、生立からで赤村、津野へと続く。後述する田川地方の山車装飾のバレンとの関係も看取できる。

また、今井の「八ツ撥」と生立の「とおりもん」という稚児、そして彼らが行う大幣の奉納など、祭礼のあり方について見ても共通点が多く、山車に伴って、これらの儀礼も伝播したと考えることも可能であろう。赤村祇園で稚児が化粧をして幟山に乗る姿は今井祇園の八ツ撥を連想させる。神霊を今井祇園社から勧請し、山車、祭礼を始めているのは、博多櫛田神社から祇園神と山笠を移して始まった津屋崎山笠と同じ構造である。この今井祇園に類似する山車群を本稿では「今井系」と呼ぶことにしたい。旧小倉藩領一体に分布し、小笠原藩の家紋である三階菱紋を使う事でも共通している。

今井系と直方系が出会う田川盆地の山笠

英彦山から田川盆地へ下り、直方で遠賀川に合流する彦山川水系に眼を転じても、今井系の幟山が見い出せる。その多くは「神幸」と呼ばれる春先の行事で登場する。英彦山神宮の御神幸を皮切りに、祭礼が平野へと下ってゆく。

英彦山が修験道寺院だった時代から、今井津と英彦山は密接な関係

にあり、今井の海で重要な神事が行われていた。現在、英彦山神宮の神官たちが、英彦山から下り生立八幡神社、今井の小祠などで神事を行い接待を受けながら、祓川の先にある沓尾の「姥ケ懐」の海で禊をして、英彦山へ潮井を持ち帰る行事である。今井では彼らの歩く道は、現在でも「山伏道」と呼ばれている。

今井系の幟山は、彦山川を下るように添田町、田川市伊加利・伊田などに分布している。伊加利では、今井系の山笠とともに、人形を乗せた飾り山が登場していた。昭和二五（一九五〇）年の写真から直方山笠と共通したものと推察しうる。ただ、明治期までは地元の人形師が製作しており、戦後になって直方の人形師に依頼するようになったとされる。他に踊り山もあり、隣の田川市伊田の川渡り神幸祭との関連もうかがえる。残念ながらこれらも戦時中に絶えた。既に述べた津野でも五月の幟山とは別に七月の祇園祭に、昼は人形山、夜は提灯山が出ていたと伝えているが、それも明治期に途絶えた。

彦山川水系の中元寺川でも、今井系の山車は見られる。上流の添田町上中元寺山笠、川崎町安宅須佐神社山笠である。安宅の幟山は中元寺川を渡って神幸する神輿に供奉する。中流の田川市弓削田では、現在でも祇園社（須佐神社）の祭りとして幟山が二基出ている。

川を渡らないことと人形山

田川郡のヤマの分布特性は、今井系と人形山が入り混じるようになるところにある。それはすなわち、旧筑前国の山笠の影響が見られるようになるということである。

彦山川水系では、川渡り神幸祭が行われる伊田を境にして、グラデーションのように徐々に今井系が見られなくなる。伊田と境を接する糒、夏吉、そして香春町、それぞれの神幸には人形山が供奉するように様相が変わる。糒は「筑前系の華麗な舁き山」[3]だったと伝えられている。田川郡香春町の須佐神社は、元応二（一三二〇）年に今井津の祇園社から勧請された所である。江戸時代の祭礼では山鉾を奉納し清瀬川を渡って本社へ戻り、今井と同じように連歌が奉納されていた。明治時代になり、社が遷宮され川を渡らなくなり、三基の人形山を出すようになっている。直方の人形師と当地の人がそれぞれ造っていたようである。

田川郷土研究会の花村は、川渡り行事との関連で幟山の分布があるのではないかと推論[4]しているが、筆者は逆方向からのもう一つの視点を加えてこの論を補強したい。それは、祭りのクライマックスは何かということである。川を渡ること自体が見せ場となる所では、今井系のような大型の曳き山である幟山が適しており、見栄えも良い。しかし、川渡りできない環境にある地域では、見せ場を別に仕立てる必要がある。それが、豪華な飾りを施した人形山を舁き回すということである。

中元寺川水系の糸田の祇園山笠はまさにこれに該当する。当地の山笠は江戸時代から人形をあしらった「居人形山」であった。具体的にどういうものであったかは不明だが、おそらくは人形飾りのある据え山だったであろう。明治期になって炭鉱産業の隆盛もあり、直方との交流が始まり人形を乗せた飾り山笠となったようである。糸田は、旧筑前国との境にある烏尾峠から降りてくる「太閤道」に繋がる古い往還沿いの町部である。江戸期に飯塚宿の山笠関係者が糸田の庄屋に人形他を借りに来たという伝承もあり、この道を通しての交流はあったとされる。糸田山笠のクライマックスは、二つの舁き山が糸田の往還で対峙して、どちらが先に降ろすかを競う。これをかつては糸田の上・中・下の舁き山が入れ替わり立ち代わり夜遅くまで行っていた。これがなかなか盛り上がり、観客たちも興奮した。かつてはそれに加えて糸田の三基の舁き山が、飾りを取り外した四本柱に数十個の提灯を取り付けて旧祇園社地まで急斜面を一気に担ぎあげる行事も壮観で、これも提灯山として姿のクライマックスであった。

糸田より下流を「下田川地方」と呼び、ここには今井系はないとしたが、江戸時代に今井から勧請された金田（現福智町）の稲荷社境内社の須佐神社の山笠は、江戸期から明治期までは幟山笠であったとされている。おそらくは今井系であったろう。炭鉱の隆盛とともに人形飾りの山笠に変わり、近年新たに糸田祇園山笠に参加するようになった曳き山へ囃子を伝授している。

福智町上野の神幸祭にも人形山笠が出ていた。これを「ヤカタ人形山」と称していたが、天保一二（一八四一）年に「居人形山」に変更

され、以降は幟山に人形を飾り付けるような簡素なものとなり昭和一〇（一九三五）年に途絶えた。このヤカタ人形山は、現在見られる糸田祇園の館を積み上げたような飾り山の形式であろう。かつて筆者は、糸田の人形山笠を直方系に分類し、筑前の要素が炭鉱産業の発展により、明治以降に取り入れられたものであろうとしたが、この「ヤカタ人形山」が江戸期に造られていたとするならば、地元人形製作者の存在も想定され、直方系との交流開始時期を再考する必要も出てくる。それこそ今井系と直方系の濃淡が変化するヤマの分布である。直方で遠賀川に合流する彦山川を通して旧豊前国と旧筑前国の文化とを混ぜ合わせて伝えてきたと考えても良さそうである。

今井系が旧筑前国のヤマと出会った「苅田系」

京都郡苅田町の山笠の特質は、灯山、幟山、飾り山と姿を三度変えるところにある。そのうち、お潮井を取りに向かう幟山、提灯を灯した山の巡行、「鉦卸し」から始まり、連歌奉納祭などの行事の共通点から、今井祇園行事との関連が強く認められる。こうしてみると苅田を今井系に分類することも可能に思える。しかし、提灯を何段にもして四面に灯す灯山は、今井とは趣が異なり戸畑山笠との類似を感じさせる。加えて、苅田の山笠はもう一度姿を変える。字原神社の神幸で神輿に随行する姿の飾り山である。ごつごつした瘤のような岩の背景に、館と人形を飾り付けたものである。頂上には竹に柳のように垂れた多数の造花を付けた「ホテ」と呼ばれる柱が三本立てられる。生立八幡のヤナギ、伊田のバレンなどに連なる造作である。人形飾りは直方の人形師の手によるが、直方系のように館の上に数多くの人形が配置され物語を表現するようなものとは異なり、岩に嵌った館に人形が二、三体配置されるという形式。どこか博多山笠を感じさせるが、博多の岩瘤とも趣はことなるものの、岩を強調した人形山である。博多系の山笠も「岩山」・「岩組山」とも呼ばれ、岩の山を背景に人形を飾り付ける形式は共通している。

苅田のクライマックスは、競演会で山笠が勢ぞろいして、互いの山を対峙させて勢いよくぶつける「突き当て」にある。先に述べた糸田の二つの山笠が対峙して行う行事と共通点も感じ取れる。一時、突き当てが危険とされ、それが行い難い直方系の山笠に変える町が増えた。直方山笠の当初の姿は「花山笠」と伝えており、現在のような人形山ではなかった可能性があることは既に述べた。「ホテ花」という別称も伝えられているが、直方系の上にこのホテを乗せたものを、苅田では「小山」と称している。

対して岩山は「大山」と呼ばれている。今井系の山車と直方系の人形山がここで出会っていることになる。苅田と同じ形式は隣町の小倉南区曽根綿都美神社の山笠にも見られる。提灯山、幟山、人形飾り山へと三様に変化する形式をなどは同じで、人形飾り山に岩山の造作も見られるが、苅田でホテと呼ぶ最上部の飾りを、ここではバレンと呼んでる。また小倉南区長尾八坂神社には、苅田の山笠を模して始めたと伝えられる山笠がある。岩山は見られないものの、昭和三〇（一九五五）年までは舁き山で「お汐井かき」のときは幟山、夜は提灯を付けた「火山」に姿を変えた。苅田山笠も四〇年程前までは舁き山であった。今井系と直方系どちらもの影響がみられるのが苅田山笠ということになる。こうしてみると分布は数例だが、これらの山笠も含めて「苅田系」と呼ぶこともできるかもしれない。

ただ苅田山笠に、博多を感じるのはどういう訳であろうか。今井の隣町豊前市の八屋祇園に出る神山と言われる舁き山は、苅田山笠と同型の屋形型の屋根の上に張り出す形で人形が飾られ軍記物などの物語を表現したものである。当地の明治四一（一九〇八）年の写真を見ると、背景の山の造形には岩瘤の造形は見られないものの、高い頂上からジグザクに一本の道が降りてきて舞台に人形が飾られている。これは明らかに博多系の特徴である。二つの山笠が出会い対峙するとガブリといい棒を上げて睨み合う。苅田のように突き当てることはないが、糸田などとも共通するクライマックスの表現である。小倉から苅田を通り、今井を経由して宇佐八幡宮へ続く勅使街道上にある場所であることを考慮すると、このような旧筑前国の山笠との類似点が現れることも不自然ではない。街道を通して博多山笠の見分が伝えられ、今井系が街道を通して博多系と出会ったのであろう。

この街道は大分県の中津で分岐して天領日田へと向かう。大分県の九重町下担祇園は、下担の人の夢枕に白馬の乗った今井津祇園の神が

立ったことから、文久二（一八六二）年に今井祇園を当地に勧請し、今井祇園の山車の作り方も学び、祭りを始めたとされている。昭和三六（一九六一）年の火事で山車は焼失、昭和四八（一九七三）年に今度は日田から山鉾や人形の製作方法を学び自作し、祇園囃子は唐津から学んで現在に至っている。かって筆者が日田系として分類していたものであった。ここに北部九州の山・鉾・屋台の循環路が繋がった。

今井系の影響を受けた汐井の笹山

北九州市の山笠は姿を変えるところに特徴がある。直方系の人形山に分類できる黒崎祇園や前田祇園には、神輿の神幸前に海で海藻などの潮井をとり、清め祓いを目的として巡行する「笹山」・「旗笹山」というもう一つの形態がある。芦屋で山笠巡行時に汐井が先んじて撒かれることも関連していよう。博多山笠には疫病退散の清水散布伝承がある。実際には海の砂汐井を下げた人形山が町内を回ることで清め祓いをしており、北九州市の山笠のように祓い清めに特化した姿を持たない。都市近郊農村の祇園祭りであれば、疫病の祓いは、獅子頭などが回ることによって代替される場合が多い。獅子の出る祇園には山笠はないが、北九州市の笹山はこの獅子と同じ役割なのかもしれないと想像する。

このように姿を変えるのは、今井系から苅田系に見られる小倉藩領のヤマの特色である。豊前の山車の変化のあり方は、信仰的な機能に特化したもの考えられる。対して、旧筑前国のヤマ、なかでも博多系にはこの機能変化が明確には見い出せない。前田や黒崎などの直方系に見られる変化は、今井系の影響を受けたものと考えることができるだろう。

南筑後にひろがる「三池系」

南筑後を分布域としているヤマが大蛇山である。旧柳河藩と旧三池藩の祇園社に、それぞれ江戸時代から山車が存在しており、各藩主が下賜した「御前山」を伝えている。両藩は境を接しており、旧柳河藩三池本町と旧三池藩新町の二基の大蛇山は切磋琢磨して独自性を維持し現在まで祭礼を伝えている。大蛇山は、今井系と比べて横長の屋形型の山車に大蛇の意匠の飾り物を後から取り付けたものである。山車には技巧を凝らした欄間細工が施され、大蛇の飾りがなくとも、それだけで完結するものである。大蛇の飾りは竹枠に紙を幾重にも貼り付けて着色したものである。それは博多系の山笠などとも共通した製作技術である。江戸期の記録に大蛇の造作の記述が見えないこともあり、御前山が巡行していた祭礼に、後から人形山など博多系の要素として、大蛇の造り物が加わったとの見方もできるかもしれない。

この三池大蛇山から、山車の製作法、祭礼行事のあり方などを学んで始まったのが大牟田祇園の大蛇山四基である。三池の二つの山車をルーツとして権威化し、この四基と合わせて六山と呼んでいる。大牟田祇園祭は博多祇園山笠を意識しており、手拭など様々なところに博多山笠の要素が見られる。この大牟田祇園の四山から習った大蛇山が一四基ある。この大蛇山群は、大牟田祇園とは祭日を分けて祭礼を行っている。六山を「神事山」と呼ぶのに対し、これらは「地域山」と呼ばれている。さらにこの地域山から習ったとする大蛇山のもあり、大蛇の増殖は現在も続いている。

大蛇山は大牟田市域の外にまで広がっている。柳川市大和町中島、みやま市高田町江浦、同町下楠田渡瀬、熊本県玉名郡南関町で大蛇山が巡行している。同じ大蛇の造形を持つ山車であるが、三池大蛇山との相互関係は明確ではない。大蛇の運行、目玉争奪など似たような特徴を持っているが、一様ではない。旧藩領ごとの特性が違いとして現れてもいる。江浦では、大蛇山に加えて三池本町で行われている「臼かぶり」をも伝えている。市域の外側にある大蛇山は三池街道に沿って三池から伝播したものと推定する。こうしてみると、大蛇山はひとつの文化圏を形成しており、この分布を「三池系」と称することができるだろう。

どろつくどんと博多松囃子

三池系と同じ旧筑後国の祭礼に柳川市の「どろつくどん」がある。京都祇園の山車との関係は諸系の始原伝承にあるが、どろつくどんに見るような関東との関係を併せ伝える所は、福岡県下では他にない。山車の構造も今井系や三池系のような重厚なものではなく、どちらか

というと博多山笠に近いような組み立て分解が容易な構造を持つ山車である。屋根にあたる部分の造作は千鳥格子の文様があしらわれており、この意匠を持つものを近隣で探すと、博多松囃子の三福神と傘鉾に随行する「通りもん」と呼ばれる山車に見いだされる。様々な芸を披露する移動式の囃子台である。博多松囃子が博多どんたくに吸収されて、通りもん自体は少なくなっている。現在まで古い形を残しているのは日本最古の老人会である「高砂会」の山車である。これは踊り山などではなく、翁媼の高砂人形を飾った曳き物である。柳河藩の御賑会では、どろつくどんを「囃子台」、人形や飾り物を乗せたものを「曳き台」と称している。それらの造り物の前には「山鉾」という前山車が出ていたが、博多松囃子と比較して考えると、どろつくどんが通りもん、曳き台は高砂会の山車、鉾山が傘鉾に該当する。こうしてみると福岡藩城下の博多との共通性が見えてくる。どろくつどんを柳河旧城下の町人地柳河町の商人たちが始めるときに、同じく博多町人たちの祭りであった松囃子を参考にしたと考えることは自然であったように思える。柳川周辺でどろつくどんと類似する山車が出る祭りはない。そこで分布域を持つものは「風流」と言われる芸能である。これは農村部を中心とするものである。

山・鉾・屋台の文化伝播を身体技法で検証する

ヤマの行事には、様々な儀礼の終わりなどに「手打ち」・「手締め」という身体技法がある。これを見ることで、文化の系統や伝播を考えることが可能になる。詳しくは述べないが、博多系では、京阪系にルーツを持つ「博多手一本」という一本締めの技法が、行事の節目ごとに「手を入れる」と称して行われる。これが北九州市の旧小倉藩領に入ると三三七拍子の関東系の「三本締め」の技法に変わる。直方系など筑豊地区では三三二拍子という関東と博多が混合した手一本の変種の手締めになる。京築地区では「一本締め」だが、今井においては、「三献の手打ち」といわれる独特の手打ちが伝えられている。「オーイ（二拍）、オイ（二拍）」の打ちを人を変えて三回行うもので、行事の終わりには必ず行われるものである。三人で分けて行う、博多手一本の原形のようにも感じられる。それは明らかに関東系とは異なるものである。今井祇園が京都から伝わったという伝承を考えると、それを傍証するような身体技法であろう。関東から学んだと伝える柳川のどろつくどんでは、関東式の三本締めであることを勘案すると興味深いところである。北九州市の山笠と隣接する、芦屋では博多に類似した「手一本」の変種の手打ちを伝えている。ここは現在は直方系になっているが、かつては博多系の山笠であったことが身体技法に残されているということである。

福岡県下の山・鉾・屋台を中心に「系統」とその関係性を考えてみた。山笠の姿には時代による変容があり、系統が変化することがある。それに比べるとこの身体技法はなかなか変化しない。本来の形式は何か、どこから伝わったものかを検証するときに有効な方法ともなる。祭礼の調査においては、山車の構造の比較検討だけではなく、儀礼や身体技法、囃子、ヤマを運行するときの掛け声のような音声の伝承までも考慮して総合的に考えていく必要があるように思われる。

以下では、調査委員会で詳細調査の対象とすることに決定した各祇園山笠行事について個別に報告する。

（福間　裕爾）

注

（1）田川郷土研究会編　二〇〇〇　『福岡県における川渡り神幸行事調査報告書』

（2）花村利彦「福岡県下の神幸行事の概観」『福岡県における川渡り神幸行事調査報告書』一〇頁

（3）同右　一四頁

（4）花村利彦「神幸行事の地域性と変容」『福岡県における川渡り神幸行事調査報告書』一九頁

小呂島の祇園山笠行事

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【指定等】

種類　福岡市指定　無形民俗文化財

名称　小呂島の祇園山笠行事

指定年月日　令和二（二〇二〇）年三月二三日

【別名】小呂島祇園山笠

【地域の概要】

小呂島は、博多港から約四〇キロメートルの玄界灘にある離島。島のほとんどが傾斜地で、集落は南岸にある。正保二（一六四五）年に北崎（現福岡市西区）から「五軒屋」と呼ばれる五世帯を福岡藩が移住させ、これ以降、島が有人になった。享保二（一七一七）年には一九軒になり、寛政期の記録には二六軒、人数一四一人、牛二〇頭とある。明治以降ほとんど世帯数は増加しておらず、戦前まで世帯数は二八戸であった。主な生業は漁業である。昭和三九（一九六四）年に東西防波堤が竣工するまでは、南岸は砂利浜であり、船は浜に上げられていた。また、電気や下水道設備などの整備に時間を要し、電気は昭和二九（一九五四）年に発電所が設けられ、日没から二三時まで供給された。水道も、同じく昭和二九年に水源地を設けて簡易水道が引かれたが、昭和四〇年頃までは、福岡まで水を買いに出ていた。『筑前国続風土記拾遺』には、西浦や壱岐島勝本まで水を買いに行っていたと記されている。

【伝承地もしくは実施場所】福岡市西区小呂島一〇

【実施時期】七月一五日

【伝承組織】小呂島の祇園山笠行事山笠保存会

【由来・伝承】

山笠がどのようにして小呂島に定着したかは明確ではないが、無人になっていた島に、黒田藩による漁場区域拡大の政策によって移住させられた人々が伝えたのではないかといわれている。

【実施内容】

一　「ごしんさま」受け取り　六月下旬

山笠行事は、六月下旬に福岡市西区宮浦まで御神入れした御神体を受け取りに行くところから始まる。御神体は「ごしんさま」と呼ばれ、普段は七社神社の拝殿裏の祠に納められている。また、この時に、山笠を作るのに必要な青竹や笹竹、稲藁なども調達をする。

七社神社は島の南岸にある。神職は島にはおらず、宮浦にある三所神社の宮司である党家が代々その職を務めている。党家に伝わる天明六（一七八六）年の神社由来書には、既に七社大明神の名が見え、祭礼の項に九月二一日と一〇月一八日の「おくんち」と「秋祭り」の祭礼は記されている。

二　棒洗い　七月一日

山笠の舁き棒を海水で洗う。小呂島山笠は三本棒である。三本である理由は不明であるが、舁き回る集落の道が狭く、それに対応した為とされる。各棒の前と後ろに二人ずつ舁き手が入って一二人で山笠を舁く。

三　部材作り　七月八日

山笠の台の部材を作る。山笠台を取り囲む壁は、現地でススキと呼ぶ茅を竹で挟んで板状にして作る。

四　飾り作り　七月一一日

波、魚、昆布などの山笠の飾りを製作する。竹枠に紙を張った張りぼてに着色したものである。魚・昆布などは漁業を主生業とする小呂島独特の飾りである。サガリバナは割いた竹に色紙の造花を飾ったものである。

五　山笠組み立て・飾り付け　七月一四日　朝

朝から山笠を組み立てる。小呂島山笠には飾り山と舁き山がある。飾り山は中年組が、舁き山は若者組が手がける。

飾り山は七～八メートルの高さがある。台上の四方に張ったベニヤ板に穴が開けてあり、そこに波・魚・昆布などの飾りを差し込み、前後に「絵馬」を飾る。サガリバナは頂上部から後ろ側に垂れ下げて飾る。頂上部に「二引き」の旗を立てる。後ろに破魔弓と「祇園宮」と染められた旗一対を両端に立てる。現在、飾り山の中心部は四方にベニヤ板を貼ったものを使うが、かつては竹を編んだものに飾った。また、以前は紙で手作りをしていたサガリバナも、現在は博多の造花店に依頼してプラスチック製の花を用いる。中学校の美術の先生に描いてもらっている絵馬も、以前は博多の絵馬店まで買いに行っていた。

高さ約三メートルの舁き山は、台は四方から藁縄を斜に結び結束する。三本の舁き棒には縄が巻かれ、これを掴んで山を舁く。台上の木製の祠には「ごしんさま」が納められる。舁き山は現在に至るまで、基礎部分は何度か作り替えられており、島内に住む大工経験者が山の台を作った。

六　宵宮　御神酒の座　七月一四日　昼～夕方

昼過ぎから、青年たちは夜に行われる宵宮（前夜祭）の肴の下準備を行う。夕方に「御神酒の座」が行われる。男達は法被に白い短ズボン姿で、東の海岸でお汐井取りを行う。汐井は海の丸い小石。飾り山の「ごしんさま」に汐井を供え、当屋が炊いた白米を高く盛りつけたお御供を少し頂く。そして、六〇歳以上の長老、六〇歳未満の戸主、若手それぞれの席に付く。かつて、小呂島には青年宿があり、男子は中学校を卒業すると、結婚した男性を除く三三歳までの男は青年宿で寝泊まりをした。二〇歳までは、飲酒は年三回、喫煙禁止など様々な生活上の規制があった。現在では青年宿は廃止されているが、島における祭礼などの場面において、年齢階梯制度が緩やかに維持されている。

御神酒の座では、スルメ、湯がいたイカに酢味噌をかけたものが出る。海藻の海松料理もお馴染みのものだが、最近は出ていないと聞く。座が始まってしばらくすると、音頭取りの男性が発声し、翌日の山笠で歌われる祝い唄が一番ずつ三番まで歌われる。祝い唄の発声は突然で、事前に音頭上げを依頼されている人がその役を担う。その後、若手たちは「ヨンジョイ」という掛け声をかけながら、山笠を近くの港の広場まで舁いてゆき、神社に戻る。

舁き手は、法被、白い短パン姿だが、昭和二五（一九五〇）年生まれの伝承者が若手の時に「恥ずかしい」という理由で現在の姿になった。それ以前は、上半身は裸で締め込み姿であった。

七　棒がきの寄り合い　七月一四日　二〇時

御神酒の座が終了すると二〇時頃から、「棒がきの寄り合い」が始まる。そこで、翌朝の行事での担ぎ手の配置や役割が発表される。一番棒と呼ばれる、神社を出発する際の最も重要な役割もこの時に発表される。

八　追い山　七月一五日　早朝

七月一五日早朝より、男達は東の海岸にお潮井取に行く。前日と同様に石潮井を「ごしんさま」に供え、お御供を頂く。五時一五分、七社神社の社殿の前では、当屋が叩く太鼓を合図に神社下の広場で山笠が一回半廻ってから出発する。太鼓の合図は、かつてはなかった。

山笠は、海水で道を清める先導役に導かれながら、島内を巡る。各家から勢水が飛ぶ。山笠は島内六箇所で止まり、舁き手がしゃがんで、

それぞれの場所で音頭が上げられる。祝い唄は前日の夜に歌われた唄と同じ節回しである。音頭取りの独唱から始まり、そこに全員が斉唱で呼応していく。「祝い唄」は、歌詞も六番まである。そのうち、一番と三番を除いた一、四、五番の唄は、博多で歌われる祝い唄の歌詞と共通する。また、三番の歌い出しも「博多祝い唄」の三番の歌詞と共通する。二番の歌詞は、「わかまつさまよ」を「ごうよのまつ」に変えたものである。また、締めの部分の歌詞「おきのとなかにちゃやたててちゃやたてて のぼりくだりの ふねをまつ」は、何らかの形で流布した流行歌の歌詞であった可能性があるとされている。小呂島の祝い唄は、他所と共通する歌詞の間に、山笠が止まる場所の特徴などを歌い込んだ小呂島独自の歌詞を挟み込んだ構成であり、博多を中心とした地域で広く歌われている「祝い唄」が小呂島で摂取された後に、島独自の展開を遂げたものである。

山笠は、集落をほぼ一周した後、七社神社に戻る。担ぎ手たちは拝殿に上がり、当屋の準備した小豆飯のおにぎりと御神酒を頂く。折敷に盛られた小豆飯の御供には、かつてはハコフグの見せ熨斗が添えられていた。

昼からは子ども山笠がある。小ぶりの舁き山を子ども達が舁いて島を回る。大人同様に祝い歌も歌う。

九　宵山　山解きの御神酒の座　七月一五日　夕刻

夕方には宵山がある。この日に昼からの渡船で島に戻ってくる人達のために舁く山である。追い山は島外の者でも参加できたが、これには参加できない。あくまでも島民だけで舁く。宵山では、途中で音頭は上げない。

小呂島では、かつては飾り山を舁き廻っていた。飾り山は、斜面を登ることはできなかったため、南岸の通り沿いの集落だけを廻っていた。当時の飾り山は高く、重りに大きな石を用いて転倒を防いだ。舁き山と飾り山に分かれたのは、島内電線架設が理由だと記憶している人が多い。しかし昭和三六（一九六一）年に書かれた「小呂島に於ける部落祭祀」には、「四尺四方の台の上に絵馬二枚を掲げて」という記述が見え、この特徴は飾り山の特徴と重なることから、この時までは飾り山が動いていた。昭和三九（一九七四）年の出力の大きい発電機導入から、昭和三七～三九年に飾り山と舁き山の分化が生じたものと推測できる。

山笠が神社に戻ると舁き手による博多手一本に似た手打ちが入り、「山崩し」（博多が山解きと呼ぶようになり、小呂島でも「山解き」と言うようになった）が始まる。山笠はただちに崩され、飾りは各家庭に持ち帰られ、床の間や玄関先などに厄除けとして一年間飾られる。また、山の上に挿してある各漁船の名前を記した旗は、船のお守りにされる。山解きが終わると、神社の広場では「山解きの御神酒の座」が行われ、今年の当屋と来年の当屋が共に準備にあたる。以上の一連の行事に関する準備を中心となって進めるのが三軒の当屋である。数年前までは、二軒一組で受け持っていたが、高齢化等による負担増で、三軒一組になった。当屋は、祇園祭の準備以外にも、八月の万年願（歌舞伎中止後に続けられている行事で三番叟を奉納する）、一〇月のおくんち、一一月の秋祭りなど、年中行事の準備を一手に引き受けており、一一月の秋祭りで当屋の引き渡しが行われる。元来は当屋の家で座を設けていたが、現在は公民館が充てられている。

（福間　裕爾）

黒崎祇園山笠行事

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　黒崎祇園行事　附　関係古文書、笹山笠、太鼓

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和四三（一九六八）年二月三日）

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【別名】黒崎祇園、喧嘩祇園

【地域の概要】

江戸時代初期、井上周防之房が福岡藩領国端守護のため城を築き、藤田村と熊手村の両村を集めて宿駅とし「黒崎」と称した。長崎街道筑前六宿の東の起点である黒崎宿と筑前国遠賀郡の藤田村・内田村・船町・熊手村一帯で旧来から行われていた祇園行事は「黒崎祇園」と呼ばれていた。黒崎は大字藤田・熊手に属しているが藩政期から神社に関しては、上ノ宮・下ノ宮・岡田宮各波多野の三社家が関係していた為、藤田村・田町の一部は藤田の社に、熊手村・田町・船町は熊手の社に属していた。

祇園会は、藩政期には旧暦六月に行われていた。熊手須賀神社（現岡田神社）は一二～一三日、旧藤田須賀神社（現春日神社）が一三～一四日に、明治以降になると新暦の七月一一～一二日となった。昭和四〇年代には学童生徒の便宜を図り、夏休みに入る七月二一～二二日に変更された。旧鳴水須賀神社は藩政期には七日に行われていたが、明治以降は七月七日と八日の二日間を祭日とした。鳴水須賀神社からは山笠が出ていなかった。

現在の実施地域も基本的には、近世からの伝統を継続している旧藤田村の春日神社と旧熊手村の岡田神社の氏子圏である。それに一宮神社の氏子である山寺・熊西を加わえた地域となる。古老は、藤田は上ノ銘から熊手は山寺から移住した人々であり、それぞれ気性が異なり互いに排他的であったことが喧嘩山笠の異名に反映されたと伝えている。

現在の山笠は八基。一宮神社の御神幸山笠は令和四（二〇二二）年の当番山笠山寺山笠と熊西山笠の二基。岡田神社の御神幸山笠は熊手一番山笠、熊手二番山笠、熊手参番山笠の三基。かつてあった田町、船町の山笠は、昭和二三（一九四八）年頃に絶えた。春日神社の御神幸山笠は藤田西山笠、藤田東山笠（藤田山笠から独立した紅梅六区の山。これを機に藤田は東西に分かれた）、東町山笠の三基。

【伝承地もしくは実施場所】北九州市八幡西区黒崎

【実施時期】七月一〇日～二五日

【伝承組織】黒崎祇園山笠保存会

昭和三七（一九六二）年七月に藤田・熊手・熊西の三地区の山笠が太鼓の競演会を開催したことが保存会発足のきっかけとなった。昭和三九（一九六四）年一〇月に保存会の準備委員会が開かれ、翌年の五月に「黒崎祇園太鼓保存会」設立。昭和四三（一九六八）年二月に黒崎祇園の笹山笠が福岡県指定無形文化財に指定されたことから同年七月に「黒崎祇園山笠保存会」と改称された。

【由来・伝承】

黒崎祇園は、近世には藤田須賀神社、熊手須賀神社、鳴水須賀神社のそれぞれで氏子が行ってきた祭礼である。現在では、春日神社、岡田神社、一宮神社から八本の山笠がでる。その歴史的変遷については、黒崎祇園太鼓保存会が昭和四二（一九六七）年にまとめた『黒崎祇園』に詳しい。本報告では、それを参照することで実際の調査結果と照合して記述する。

祇園社の由来は旧村ごとに異なっている。藤田の祇園社については、古伝に素戔嗚尊は中世に麻生氏が治めていた前田村祇園原（現北九州市八幡東区前田）に祀られていた祇園社（後の八束髪（やつかひげ）大神社）を春日宮宮司波多野神太夫正治（寛永一五（一六三八）年没）が藤田村に遷して山王宮の相殿に祀ったのが黒崎祇園社だとされている。延宝八（一六八〇）年の波多野正次譲状には「黒崎藤田村ニ坐神五社」として黒崎山王の森に遷した祇園社が記されており、春日神社文書にも「藤田村祇園社、拝殿立初り申し候ハ天和三（一六八三）年ニ而御座候」とあり、寛永期以前に黒崎山王宮の相殿として祀られ、天和三（一六八三）年に社殿を建立したとされている。祇園社は近世初頭より通称「上ノ宮」波多野家が奉仕してきたが、戦後からは春日神社波多野家が奉仕している。

前田村の八束髪神社の社伝には「麻生氏退転の後、慶長五年黒田長政就封の後、老臣井上周防之房をして黒崎の城におらしむ。之房も亦本社を尊崇す。後世此社を諸所に勧請せり、故に之を本宮と称す。元八束髪社と言へるを、中古祇園神社と言ふ。明治維新旧号に復せり、旧社地に石鳥居あり、銘に昔麻生氏壮社殿厳祭祀、此本邸内祇園之本宮也、国老黒田近江丹塀増熊と記せり」とあり、井上周防が前田祇園原の祇園社から各所に勧請したと記されている。しかし、近世に設けられた黒崎宿の祇園社がこの時に勧請された祇園社に当たるかは明確になっていない。

熊手の祇園社は由緒等は不詳。延宝年中の神社帳に記載があるとされ、元禄、享和、化政期には既に岡田宮の境内末社として、祇園会が行われている。岡田宮は中世には熊手権現と称し、後に八所明神となり熊手村貞元にあったが、慶長八（一六〇三）年に現在地（北九州市八幡西区岡田）に遷座した。なお末社祇園社の旧社地は不明と伝えている。

近世に入り黒崎祇園に参加した鳴水地区の祇園神社（現須賀神社）は、慶応四（一八六八）年閏四月の神社帳には貴船神社の相殿に祀られていたと記されている。

黒崎祇園社の起源は地元の伝承によると、慶長庚子の黒田長政筑前入部の節、今井の祇園社（行橋市）にて休憩したことに因みに、豊前と筑前の国境に近い遠賀郡のこの地に、今井の祇園社を勧請したと伝えている。

山笠については、宇都宮文書の文政三（一八二〇）年辰二月の「藤田村書上帳」には、前田祇園の祭礼の「山笠多かりし」という記述に続いて「産民等打集、年毎に六月一〇日名護屋崎の潮井、大渡川の潮井を以て社地を清む。これを大祭の始とす。同一一日神官注連を下して御祓す。同一二日諸病の患を除く。牛馬の冥利を祈て、藤田、熊手、田町、および船町、上の名産民等、山笠、小供踊類有て賑々敷御神幸、船町波戸場におひて御潮井を授奉り、同一三日祝部男集て御神楽たえず。」と黒崎の山笠と思われる記述がある。現在のように潮井とりから祭礼が始まっている。

岡田神社波多野家文書の嘉永五（一八五二）年六月に、田町、船町から雨請い山笠の記述があり「山笠舁初るは此年也。是迄ハ山笠なし。」と、この年が山笠の舁き初めとされている。天保一四（一八四三）年の藤田村庄屋の日記には「山笠台ばかりを舁き」とあり、台組だけの素山か、笹山だったと考えられる。現在は曳き山となっているが、近世までは舁き山だった可能性もある。

古老によると、明治二二（一八八九）年黒崎に流行病が発生し、厄払いとして藤田に一本山笠が建てられたが、事故があり中止された。明治三七、八（一九〇四、五）年に日露戦争の戦勝祝いに飾り山がだされた。熊手でも笹山がでた。いずれも臨時の山笠であった。明治になってから初めての祇園祭礼の山笠は明治三九（一九〇六）年に田町が出した山笠である。そのときの藤田の山笠は潮井取りの帰路に死亡事故を起こした。事故を誘因した山笠の台は、棒、鉦、太鼓等を残して焼き捨てられる習わしだった。藤田の山笠台は新調するにあたり、それまでより小さくした。棒も穢れを払う意味から削られ二尺短くした。

明治に入って山笠は車輪を持つ屋台山となった。飾りについては当初「岩山」（博多や苅田（かんだ）の山の形式）を作ったこともあるが、直方（のおがた）の

人形師による人形飾りが一般的になった。

九州電気軌道の路面電車の敷設により山笠の高さは一八尺（五メートル四五センチメートル）以内にまで低くなった。しかし、電車架線を通り過ぎると山笠の高さを上げる「せり上げ」「押し上げ」という工夫で往時の大山笠の記憶を残した。人形飾りなどはなく、木枠に幕を張ったものを二段三段と押し上げていく仕組みだった。また、山笠を大きく見せるために「槍だし」という工夫もするようになったのもこの頃からである。道の狭いところでは折畳み、広い街道では横に張り出して幅を広げる回転式の飾り部分のことである。

飾りについては人形師任せであったが、藤田区は人形の衣装を京都から本金襴を取り寄せて地元処女会が製作し着付けまでした。人形師は人形の頭と手足を持参するだけだった。多額の費用をかけたため雨のときは防水布をかけた。

大正から昭和初期が戦前の山笠の全盛期で、戸数も増加し屋敷、東町（陣山）と新たに山笠が増えた。太平洋戦争が始まると笹山笠に出征兵士壮行の幟を立てて曳くようになった。空襲も頻繁になり昭和二〇（一九四五）年には全ての山笠行事が中止された。

戦後復活したが、山笠を担ってきた青年会が解体され青年団となり、現在の区会・町会組織での運営となった。

【実施内容】

令和四（二〇二二）年は新型コロナウイルス感染症拡大のため平年とは異なった。熊手二番山笠の行事も合わせて記述する。

五月二四日（日）　一宮神社にて当番山笠引継ぎ式
五月二八日（日）　第三区（熊手一、熊手二、熊手三）合同説明会
六月五日　（日）　岡田神社で第三区合同太鼓初打式　二番山役員会
六月二六日（日）　熊手二番山笠太鼓初打式
七月三日　（日）　山小屋設置　岡田神社から山笠台搬入
七月一〇日（日）　葛取り・棒締め・杉取り・笹山笠組立
七月一七日（日）　六時集合出発　お潮井とり　脇田・汐入の里（若松区）
九時半　熊手二番山笠山小屋出発（笹山笠）
一〇時　岡田神社で笹山笠安全祈願祭・笹山笠運行
七月一八日（月）　一三時　人形飾り付け
一八時　電飾飾り付け、太鼓競演会
七月二二日（金）　各山笠清祓い　一九時山笠競演会
七月二三日（土）　一〇時半一宮神社神幸祭、八幡西区役所表敬訪問
一三時　半岡田神社御神幸、太鼓競演会
一七時半より町内巡行
七月二四日（日）　一三時春日神社御神幸
一七時春日神社前集合写真撮影、町内巡行
七月二五日（月）　一九時フイナーレ山笠自由演技
二〇時保存会解散式、三区解散式
二一時山笠解体（人形）
七月三一日（日）　片付け　岡田神社小屋へ備品搬入

一　山笠準備

戦前、藤田では区の代表が当番で組長を集め、山笠実施の検討をした。山笠を建てないとなった時は、青年が各戸を廻り建立を依頼した。船町では七月一日の岡田宮祇園社の宮籠りで山笠の実施について協議したが、山笠を建てないとなると、こちらも青年が戸別訪問して賛否の投票を依頼した。青年が投票用紙を配布・回収するため結果は必ず実施となった。熊手では青年が発議し、区長が組長を集めて協議した。各区の青年たちは山笠実施に向けて場外で示威行動をするのは通例で、船町などは祇園籠りより太鼓を打ち始め、決定前に山笠を出すなどの運動をした青年たちもいたと伝えている。

二　山笠台組立・笹山笠飾り付け

山寺・熊西・藤田西・東町はお潮井とり前までに山笠台を組み立てる。藤田西は令和五（二〇二三）年の予定は、六月一八日に葛下見、二五日に葛取り・棒洗い、七月二日には、杉取り・電飾点検、テント張り、

山小屋作りを行い、蔓で台を結束して締め上げる棒締め、三～八日の間に杉の枝を挟んだ「勾欄」を作り笹山笠の飾り付けをする。

藤田・熊手は蔓で三本の棒を結束するが、船町だけは船頭町であることに由来して綱を使う。葛切り、杉取りなどの準備は熊手、船町は青年が一切を引き受けたが、藤田は山笠当番が定められており、人を雇って行ってきた。蔓は従来は帆柱山でとっていた。台の中央部に四隅の柱から竹を交差させかけまわし、それに荒縄を巻いて台を補強する。これを「文字固め」と呼ぶ。文字固めした間に、進行方向に向かって右に大太鼓、左に小太鼓、中央に鉦を配置する。山笠は囃子によって運行されるため、小太鼓は発進・停止の合図を出すために、常に正面を注視できるように文字固めする。小太鼓は竹撥で打ち、太鼓が止まると山笠も停止する。囃子には山笠が止まっている時の「据山」、巡行している時の「練山」、走る時の「追山」とあるが、拍子の緩急、強弱、撥数の違いで、同じ囃子を打ち分ける。黒崎祇園囃子は、井上周防之房がこれを聞いて間延びしていると感じ、関ケ原合戦の陣太鼓と法螺貝を教えたという伝承がある。黒崎祇園は喧嘩山笠と言われ、囃子を「喧嘩セー、喧嘩セー」と打ったと伝える人もいる。町の角を曲がるときには、一度囃子を止め打ち替えをする。

藤田、熊手、田町、船町で少しずつ調子が異なる。藤田は、鉦の打ち出しを小太鼓に合わせるが、他は最初から合わせて打ち出し、小太鼓と鉦が合うと大太鼓を打ち始める。山笠が行き逢うことをセリと言い、互いに通り過ぎるまで囃子を止め太鼓は打たない。

笹山笠は地区によって飾り方に違いがある。杉勾欄の下に幔幕を引き回し、四隅に梵天を下げ、両脇に大きな提灯を付ける。須賀神社の扁額を飾り、笹竹二本を立てるが、戦時中は連隊旗や花木を立てたこともある。盾や唐扇で四隅を飾る。幔幕は各区独自のもので、船町は「入船」の図を四隅に刺繍し、船の字を配したもの。田町は田の字を図案化した丸に十字、藤田は藤の字、熊手は熊の字に弓を配したものを刺繍していた。台上の飾りも各区で異なり、船町は唐扇四面を四隅に飾り、藤田、田町は盾を並べ、それに各々の区の印を入れた。熊手は国旗を張り、弓を配していた。

三　お潮井とり・笹山笠巡行

山寺・熊西・藤田西・東町の各山笠は七月の第二日曜日にお潮井とりをする。旧来は五段の海まで山笠を舁き清祓いをしたが、年によって潮井とりの場所は変わっていた。七浦汐井（夕方にとる汐井と表記されている）のこともあったとされている。令和四（二〇二二）年は七月一〇日に行った。藤田西は山小屋で山笠の前に供物をし、神職による御神入れ神事の後、黒崎湊跡（洞海湾黒崎泊地）で潮を汲み、山笠を洗い清める。その後町内を笹山笠で巡行する。当番山笠の山寺と熊西山笠は一六時半に、一宮神社境内の「厄神社」前に集合し山笠清めの神事をする。社に向かって左手に山寺、右手に熊西が入り、それぞれの舁き手たちが前に整列する。厄神社は須佐之男命を祀る小さな社で、かつて山寺諏訪山（現御手洗公園）にあったものを、昭和五〇（一九七五）年に遷したものである。両山笠とも、山の頂上部に笹竹で鳥居形を作り注連縄を張り、中央社に「須賀大神」額の木札、葉のついた椎の生木を立てる。二引きに菊の紋が入った盾三枚が四方を囲む。熊西は盾の間に提灯を配し、木札の左右に御神燈の小型提灯を付けている。当番山笠には、左右に大型の「御神燈」の丸提灯が付けられている。

疫神社前に供物を捧げ、一宮神社神職による祭典が始まる。一同修祓、社で前警蹕（けいひつ）をかけ、各山笠の前でも警蹕をかけて神を山笠に降ろす御神入れをする。玉串奉奠の後、山笠の清めとなる。神職は各山笠の四隅を修祓する。同時に各山笠の代表が塩を振りかけ清めていく。山笠台は蔓を締め付けて結束されており、そこに潮井とりの際に採った海藻が挟まれている。海藻はミルやホンダワラなど色のついたもので、熊西は舁き棒の左右三箇所の葛の結束部にも海藻が紐に結ばれている。出発前に潮井海水を台の四隅の葛や海藻にかけて清めた。

一七時、笹山笠二本は法螺貝の合図で一宮神社境内を出て町内巡行に出発し、各町内を一巡した。熊西山笠は、神社を下りてすぐに町内

巡行に向かった。山寺山笠は、神社下で山を止め、代表が「山を見てください」と言い、舁き手一同が一礼した。元黒崎祇園山笠保存会であった故人のお宅に向かってのことであった。その後、山寺は一宮神社鳥居前で子ども、青壮年に分かれて記念写真撮影を済ませ、町内巡行へ進んだ。

道の角は山笠を前に傾け後輪を上げて曲がる。一七時半頃、門口で山笠に貢献した人達の遺族が位牌、遺影を持ち山笠を迎えた。山笠は、個人宅前で前後に山を傾けるガブリや、左右にゆする動きをし、山笠を止め追善する。これは生前に受けた花代などのお礼でもあるという。追善は巡行路上にある個人宅でのみ行う。東王子町の集合住宅の遺族は、山笠の巡行路に遺影を持ってきて追善を受けた。お礼に遺族に「水玉」を渡すこともあった。各区では人形山初日の巡行で毎年個人宅に山笠が出向いて追善をする。初盆宅の前を通るときは、太鼓と囃子を止めて静かに通り過ぎる。町内巡行は子供たちが綱を曳き、前後に大人たちが一〇人ずつ舁き棒について山笠を曳く。また、前後に一人ずつ台に乗って山笠を指揮する。

熊西山笠は国道三号線を渡り筑豊電鉄の熊西駅まで行き引き返す。山寺山笠も町内巡行を終えて一宮神社下まで戻り、青年たちだけで山笠を左右に蛇行したり、ガブリ、四つ角で何度も大きく回るなどする。これは二二日の山笠競演会の練習である。

両山笠とも、一宮神社境内の厄神社前に戻る。一同整列し、一宮神社神職による祭典が始まる。警蹕がかかり、御霊遷しの神事があり、玉串奉奠で終了した。祭典が二〇時に終了するとその場ですぐに、笹山笠から椎の木が抜き取られ降ろされた。各山笠は山小屋へ戻り、この日の行事を終えた。

熊手一、熊手二、熊手三、藤田東は、第三日曜日にお潮井とりをする。令和四（二〇二二）年は七月一七日に行った。この日までに笹山笠を完成させておく。藤田東では、山笠上部に笹竹で鳥居形を作り、注連縄を張る。中央に「奉祀須賀大明神」の額を立て、ニ引きと「藤」の文字が入った赤い盾四枚で四方を囲む。杉高欄は、ダンプカー一台分の杉を使い、厚みと幅を持たせて大きめに作る。山笠台の四方を締めるのは「黒葛」である。杉と黒葛を採取する場所は他の区には秘密にする。山笠台は三年かけて作る。車輪はかつては一本木から作っていたため水に漬けて保存していた。今は合板であり、接着剤が剥がれるので水漬保存はしなくなった。山笠上部四隅に「五色の花梵天」を付ける。地区ごとに四隅に付けるものは異なる。

九時半、藤田東山小屋前では春日神社神職による祭典が行われた。修祓、降神之儀、御神入れ神事、塩と酒による山笠四方清め祓い、玉串奉奠等があった。神職自らが横笛を吹いて奉仕。二五日のフィナーレまで神は山笠に降ろしたままにする。山笠の舁き棒の上に塩や酒のほか、役職者の使う、ねじねじ襷、指揮用梵天などと飾り山笠に使う「水玉」が供えられ清められた。水玉は寄付者への礼にもなる。

神事終了後、洞海湾に向けてお潮井とりが始まる。曳き手は、前六人後七人程度である。山小屋がある紅梅（こうばい）町公民館から県道二七三号線に合流し、道路の中央を山笠が走る。掛け声は「ワッショイ」。お潮井とりへと向かう途中、休憩ついでに祝儀を受けた会社に寄り鉦と太鼓を鳴らす。これを「接待を受ける」という。接待ではおにぎり、お酒、ジュースが準備されている。県道二七三号線を北上し、洞海湾に到着すると、日本酒で潮井場を清め、代表の五人が竹筒に潮を汲む。潮はその場で笹山笠にかけて清める。潮の取り方に作法はない。昭和四〇年代、洞海湾の環境汚染のため一時期若松区脇田でお潮井とりを行っていたが、二〇年ほど前から海の浄化に伴い洞海湾に戻った。

お潮井とりの後、帰路に町内を巡行し、そこでも接待を受けた。巡行の途中で山笠は蛇行し、家々の軒先を清め祓う。途中山笠を激しく回しながら町内を二時間ほどかけて回り、山小屋に戻った。

四　飾り山笠人形飾り付け

各地の笹山笠は、町内巡行が終わると徐々に人形山笠へ姿を変える。熊手は、令和四（二〇二二）年は一七日に笹山笠を巡行させたが、かつては一一日が御神幸本祭であった。その時は、一〇日の笹山笠巡行

後の夜から人形山を飾り始め、一一日朝には七部飾り、夕刻には満艦飾の姿になっていた。藤田では本祭一二日朝の案内山笠の頃は半飾で町内を触れ廻り、夕刻の御神幸までに飾り付けを完成させていた。船町は山笠建立が遅れることもあったが、一一日は三分の一飾り、一二日に三分の二飾り、一三日に満艦飾になることもあった。なお昭和二三（一九四八）年頃に絶えていた船町山笠は、平成二四（二〇一二）年に「田町舟町山笠」として復活している。

黒崎山笠は本祭後に喧嘩山笠となっていたが、激しい喧嘩であったため、近年では代わりに、本祭御神幸前の夜に「前夜祭山笠競演会」を行うようになった。電飾の飾りの各山笠が日暮れ時に黒崎駅前ふれあい通りに集い、設けられた来賓席前で、ガブリや蛇行ど山笠の操作を競う。令和四（二〇二二）年は二二日（金）に行われた。演技後に表彰式が行われ、優勝山笠には優勝旗が渡される。

五　御神幸

七月二三日（土）一宮神社の御神幸が行われた。一〇時半、八本の山笠が山寺の一宮神社の鳥居前に集合する。各区の山笠の中には、一宮神社御神幸の前に追善山をするところもある。亡くなった山笠功労者宅に山笠が行き、「三三七拍子」の打ち込みをする。

当番山笠は各区の山笠巡行の世話をすることになっている。令和四（二〇二二）年の一七日は山寺山笠である。山寺区が、集まった各区の舁き手たちへの給水などを行う。鳥居に向かって左脇に山寺山笠が据えられ、役員や舁き手達が並び、拍手で各区の山笠を迎える。各山笠は鳥居を曲がり山笠を据える。熊手三番・熊手一番は勢いよく舁き込み、その際にこの両山笠の台上がり指揮者は「オイサ」の掛け声を用いた。黒崎は祇園の掛け声は〝ワッショイ〟であり、〝オイサ〟は博多祇園山笠の掛け声である。鳥居前では各山笠とも「太鼓やめれ」の合図で、祇園囃子を止める。進む山笠以外の山笠は、鳥居に近いところから順に、熊手一番山笠、熊手参番山笠、藤田東山笠、東町山笠、藤田西山笠、交差点を越えて熊手西山笠が並んだ。熊手二番山笠は鳥居の右脇に据えられたが、ここもオイサの掛け声であった。飾りの表題はほとんどが戦記もので、熊西は表「承平天慶の乱」見送り「鞍馬天狗」、東町は「姉川の合戦」見送り「三国志」、などである。飾った人形が誰であるかという小さな名前札があるのが、直方系飾り山の特徴である。

一八日に行われた祇園太鼓競演会で優勝した藤田西山笠は優勝旗と賞状を、藤田東山笠は山笠競演会の優勝旗を表に飾っている。各山笠とも神幸のお供に備えて車輪をグリスアップする。

一一時、神社で御神遷しされた御神輿が下りてくる。令和四（二〇二二）年は新型コロナウイルス感染症の影響で密を避けるために軽トラックに神輿を載せての御神幸となった。軽トラックの荷台には、四隅に笹竹が立てられ注連縄が張られている。神輿に続いて、神職が笛を吹きながら随行し、二人担ぎの太鼓が続く。宮世話人がタコンバチ（菅笠）にお賽銭を受けていく。この形式は旧来からのもので、軒別に切銭のように一銭ないし二銭の賽銭を集めていた。御神幸はこの賽銭があがる範囲を対象としていた。熊西、藤田西、東町、藤田東、熊手参番、熊手一番、熊手二番と続き、当番山笠の山寺が最後に出発する。各所で祝儀を頂いた時は、打ち込みをしながら進んでいく。熊西の山小屋前では各山笠の接待があった。

黒崎宿の搆口を通り、黒崎ひびしんホール前に各山笠が集まり「山笠大集合」となる。山笠が入るときは勢いよく「追山」の囃子で入ってくる。総取締以下の役職者たちは、山笠名の入ったプラカードを持ち、八幡西区長を前に並ぶ。区長に向かって左から、東町、藤田東、藤田西、熊手参、熊手二、熊手一、熊西、山寺の順である。ここで区長から挨拶があり、各山笠に「激励品」と称するものが渡された。ビール一ケースと清涼飲料水である。区長に対して保存会長のお礼の挨拶に続き、山寺の代表が三本締めの打ち込みをした。

黒崎祇園の組織は戦後、区会組織として旧来の姿を残している。かつて役職には、交渉人、才判人、中年取締、若中取締、取締（総取締）正・副などがあったが、現在は、区長が務める会長を筆頭に、総取締（委

員長)、副総取締（進行係）、相談役、会計、取締、世話人がある。

午後、各山笠は岡田神社の御神幸に向かう。熊手下市に勢揃いし、一三時に岡田神社拝殿に宮世話人と第三区（熊手一、熊手二、熊手三）の代表、保存会会長、他の山笠の代表が参加して祇園祭の祭典が始まる。玉串奉奠の後に遷御の儀があり、警蹕がかかり、神輿に御神が遷される。神輿はトラックの荷台に載せられて、一八頃までかけて二〇箇所の氏子を回る。本来は八幡工業高校の生徒が担いでいくものだが、新型コロナウイルス感染症の影響により、トラックでの御神幸となった。

各山笠は熊手下市商店街で岡田神社神職から清祓いを受ける。その後、神輿が出発すると最初はそれを守るように随行するが、後に神輿の神幸コースから外れ、それぞれの町内巡行へ移る。かつては、往路復路ともに神輿の後に着いてお供した。

熊手二番山笠は、商店街に入ると蛇行やガブリを始め、御祝儀の打ち込みをしながら進む。山を止め、酒を頂いた酒屋前では、店先で山笠を出迎えた店主達を前に三本締め打ち込みをする。商店街の代表を務める毛糸店では、商店街全体に対しての御祝儀のお礼として打ち込みをする。町巡行は、正式には一九時半から、八本の御神幸山笠が自らの街域で山笠を披露する。かつてはこれを「流れ舁き」と称していた。黒崎の山笠は曳き山であり、担ぎあげていく舁き山ではないので、この呼称はかつて舁き山であった頃の名残であろう。山笠を運行する者たちを「舁き手」と呼ぶのもその名残と思われる。

舁き手は、藩政期は若者、組、明治以降は青年会であった。藤田・熊手両区では一七歳から二五歳の青年が前山を担当し、二六歳から三〇歳までの若中、及び三一歳以上の中老が後山についた。今では、博多のように、山笠の前を「表」、後ろを「見送り」と称しているが、かつては「前山」、「後山」と呼んでいた。

子どもは山笠の前を走った。山笠舁きは、須賀神社のお守りを身に着け、法被に自らの区名を染めている。かつては甘木でそれを染めていたと伝える。下は猿股引で、白足袋に滑り止めの綱を巻いていたが、明治以降は白足袋のみになった。

翌二四日（日）一三時から春日神社御神幸である。春日神社の御神幸山笠は藤田西、藤田東、東町であるが、山笠が藤田のみだったことがあり、藤田が黒崎宿の中心であったことも考えあわせると、代表的な山笠とされた。

御神幸の五時頃「案内山」と称し他区山笠に御神幸の供を頼む山笠を派遣した。同日の一五時頃再び「迎え山笠」を出し、各山笠が春日神社馬場に勢揃いし、清祓いを受け、藤田山笠が最後尾に着いて御神幸の供奉をした。熊手の岡田神社の御神幸では、藤田が案内山と迎え山を出していた。山笠が御神幸で巡行するときの順序は、毎年交渉人の抽選によって決まった。

藤田、熊手、田町、船町、屋敷など各地区へ入る時は、その地区の山笠を最初に入れる仕来りであった。自区の山笠が先頭をゆっくり巡行することにより、できるだけ他区の山笠をとどめ、自分たちの街を賑わすことを目的とした。

かつては「追い山」と称する行事があり、各区とも五段に集合したという。

七月二五日（月）一九時、黒崎駅前ふれあい通りに山笠が集合し、ガブリや蛇行ど自由演技を行うフィナーレとなり、二〇時に解散式が行われる。その後各山小屋に戻った山笠は区の解散式を行い、二一時頃に、山笠から人形を降ろし飾りを解体する。翌日が片付けで、山笠台や棒などを収納した。会計も行うが、かつては山笠期間中の費用はすべて帳面による掛買であった。山笠が終わる一四日に「狐おとし」と称して全支払いをし費用の清算をする。各山笠ごとに祝儀の余剰金で「打ち上げ」をした。黒崎祇園山笠の行事はこれですべて終了する。

（福間　裕爾）

前田祇園行事（まえだぎおんぎょうじ）

【指定等】

種類　北九州市指定無形民俗文化財

名称　前田祇園山笠行事

指定年月日　平成一三（二〇〇一）年三月三〇日

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【別名】　前田祇園山笠

【地域の概要】

官営八幡製鐵所の三度にわたる拡張工事で、大正一〇（一九二一）年には北九州市八幡東区前田の人口は急増している。かつての閑村は多くの人々を抱え急激な都市化をすることとなった。商店街などのインフラも整備され、さらに人々の集住も進んだ。このような近代的景観のなかに中世的景観を内包した地域が八幡東区前田地区である。洞海湾に面した日本製鉄（旧八幡製鐵所）の社前の町域が一・二区で、この行政自治区から山笠が出る。第一自治会が一番山笠、第二自治会が二番山笠、第三・第四自治会が本宮山笠を出す。山際に位置する三・四区は八束髪神社が鎮座する祇園社の故地（昭和三〇（一九五五）年に二区に鎮座する仲宿八幡宮に合祀）、中世山城の花尾城址入り口と伝えられている元城町などを含む歴史的景観を持っているため本宮山笠と名乗っている。平成五（一九九三）年～一五（二〇〇三）年にかけては、新日鉄桃園社宅の有志による桃園山笠も出ていたが、平成一六（二〇〇四）年の社宅の廃止提案により解散した。現在は三基の山笠で祭礼が行われている。

【伝承地もしくは実施場所】　北九州市八幡東区前田地区

【実施時期】二月～七月　旗笹山巡行は七月最初の日曜日

【伝承組織】前田祇園山笠保存会

第二自治区にある祇園町商店街の有志による二区独自の保存会があり、そこから昭和五九（一九八四）年に二番山笠が最初に再建された。二番山笠の独自の保存会は、平成三（一九九一）年の一区への山笠譲渡、一番山笠の復活。それに続き、平成五（一九九三）年の桃園社宅有志への青年山笠の譲渡を行い桃園山笠の創設、発展的解消をして前田祇園山笠保存会となり、現在に至っている。

【由来・伝承】

祇園行事は、中世に前田の地を治めた麻生氏が、応永（一三九六～一四二八）年間に京都八坂から祇園神を勧請して祇園原に前田祇園社を建立したことに始まると伝えている。前田祇園社はのちに八束髪神社と呼ばれるようになる。

前田祇園祭礼の始まりについては諸説あるが、波多野家文書「祇園三座大神縁起」には室町時代中期以降のこととして、「いにしえの麻生氏在城の時は士家多く、村里宮座の序ありて、神事祭祀の儀式も殊にいかめしく、遠近の人まいりつとひぬれば、商人集まりて市をなし侍りぬ。（いまの田の字に、今市免といふあり。年中行事の時々、市場せし故、今呼びてかくはいふよし。）つくり山、笠鉾などと多しと也。又御旅所の跡あり。」と記されており、山、傘鉾など祇園会類似の造り物が多く出る祭礼が行われ、周辺地域のみならず、遠方からも見物人が集っていた様子が伺える。

明治三四（一九〇一）年の八幡製鐵所操業による近代化で、前田祇園の祭礼の在り方も急激に変化してゆく。人々は山笠に豪華さを求め、明治四〇年頃から、旗笹山から人形飾り山笠で巡行するようになったと伝えられている。明治四四（一九一一）年の電車の開通は、山笠の高さを低くする一因となったが、大正六年頃には山笠は更に豪華さを増し、各町毎に山笠が出されるようになった。人形飾りは直方の人形

師が担当した。

昭和一二（一九三七）年の日中戦争勃発により祇園行事は順次縮小され、第二次世界大戦が始まると旗笹山に武運長久を祈る幟を立て出征兵士を壮行するなど、戦時色一色に変わった。昭和一九（一九四四）年には戦況悪化により山笠行事は中止となった。昭和二〇（一九四五）年八月八日「八幡大空襲」で前田地区はほとんどが焦土と化し、神社、山笠関係道具の一切が消失した。

戦後の八幡製鐵所の再開と生産増強によって、前田の各町内は活気を取り戻した。昭和二二（一九四七）年の祇園祭事の復活に続き、昭和二六（一九五一）年に二基の山笠巡行が再興され、昭和三〇年代になって山笠四基が並ぶまでに復興したが、事故により再度中断した。昭和五九（一九八四）年に二番山笠が再興し、それに続いて平成五（一九九三）年に一番山笠と本宮山笠が設立され、平成一一（一九九九）年の北九州市無形民俗文化財指定を受けて現在に至っている。

【実施内容】

一　総会・全体会議

二月～三月に仲宿八幡宮で行われる総会を皮切りに、六月初旬の全体会議と前田祇園山笠保存会の会合が続く。

二　山笠製作　四月中旬～

山笠は二番山笠、一番山笠、本宮山笠の三基。それぞれが四月中旬から山に入り、山笠台を結束するための蔓を探す。主に藤蔓を使うが、蔓は数種類あり、藤の花の咲く四月頃が見つけ易いからである。山では、太さ、長さなどを確認して目印を付けておき、七月初旬の旗笹山巡行の一週間前に九本切り出してくる。これで約一・五一メートル四方、高さ約二・一メートルの台車と舁棒三本を締め付けて結束する。各町それぞれの山笠で蔓の使い方が異なる。本宮は蔓を熨してから一回しして結束する。二番・一番は、蔓をそのまま使う。また、竹を割いて曲げて結束もする。台上を取り囲む手摺り高欄に使う杉の葉も森林管理署の許可を得て山に取りにいく。杉の葉を隙間なく並べ竹で挟み、高欄に取り付ける。その下に紫色水引幕と注連縄を巡らせ、更にその内側に赤の幕を張り、四隅には藁の梵天と呼ばれる飾りを下げる。江戸時代の旗笹山の形態について、天保四（一八三三）年の記録には「山笠台の下を取り巻く四方の杉垣、これに小柱を立て、赤い布で包んだ鉄砲袋をつけ、細い竹で横につなぎ、布を左巻きにしている」とある。杉壁・鉄砲・左巻きは、博多祇園山笠で現在も用いられている飾り方であり、両者の関係性を物語っている。

台車の内部には、大太鼓・小太鼓・鉦などが取り付けられる。これも、各町で配置が少しずつ異なる。一番山笠と二番山笠は進行方向に向かって左側に大太鼓、右に小太鼓を配置する。一番山は大太鼓と小太鼓の間を竹で十文字に区切り、その竹に荒縄を巻いている。鉦は右隅に置く。二番は基本的に一番と同じ配置であるが、竹の区切りはなく、鉦は台上部に取り付ける。本宮山笠は、進行方向に向かって左隅に小太鼓（これは竹鉢で叩く）、その対角線上後部右隅に大太鼓、後部左隅に鉦を配置する。この鉦は、人形飾り山に姿が変わると上に配置される。竹筒の水筒が前部に取り付けられる。

この配置によって演じられる祇園囃子には拍子の違いにより、山笠を止めているときに奏する「据えばち」、巡行しているときに囃す「練りばち」、駆けるときに叩く「追いばち」の三種類ある。近世には、法螺貝も使われていたとされるが、現在法螺貝は本宮だけが使っている。山笠が街角を曲がるとき、他の山笠の前を通過するとき、横ですれ違うとき、一時太鼓を止める習わしである。

三　お潮井とり　六月二六日

祭礼の一週間前の七月の初旬に行う。令和四（二〇二二）年は六月二六日に行われた。かつては洞ノ海で潮井をとっていたが、八幡製鐵所建設によりお潮井とりの場所が敷地内となり、旧来の場所でとることができなくなり、山潮（川の砂と水のこと）となった時期が続いていたが、平成一一（一九九九）年に、旧来通り八幡製鐵所構内の大字

前田葛島の海岸でとることができるようになった。

現在では、八幡東区東田緑地に設けられた「八幡祇園行事　御潮井所」が整備され、そこで行われている。八時に参列者が仲宿八幡宮に集合し、宮司を先頭に各山笠の舁き手、神輿の担ぎ手など総勢八〇人程度が御潮井所に移動する。現地では海に向かい注連縄を張り、神職らが案の上に献饌をしてお潮井とり神事の祭典を行う。潮井桶や各山笠の参列者を修祓する。参加者は全員で海から砂と海水を汲み、お潮井とりをする。お潮井は桶に入れて各山小屋や各家庭に持ち帰り、厄払いなどに使用する。仲宿八幡宮の社殿前には、「御潮井真砂（祓い清めの砂）」と記された箱にお潮井を入れて参拝者に提供されている。

四　旗笹山笠奉納宮入　七月三日

九時四五分、神社から前もって渡された八色旗（緑・白・黄・黒・赤・金丸紫二本・紫）、八幡大神の三巴神紋を付けた朱色盾を四方に四枚ずつ立てた旗笹山笠（本宮は笹山と称す）が各町の山小屋を出て、道中練りばちの囃子を奏で、一番山笠、二番山笠、本宮山笠の順に仲宿（なかやど）八幡宮に到着し境内に入る。境内の正面には茅の輪が設けられている。神社神殿に向かって右側の境内に、一番山笠を中央にして、左に二番山笠、右に本宮山笠が並ぶ。

一〇時、各山笠の実行委員や代表が拝殿に昇殿して祭典が行われる。神殿には正面に八幡大神、左手に恵比須神社、祇園本宮八束髪神社は右手に合祀されている。神殿正面に八束大神と墨書された木札が三本立て掛けられ、修祓、祝詞奏上、玉串奉奠のあと、御神入された八束髪大神の木札が宮司より、各山笠の代表に渡される。各山笠はそれを受け取るとすぐに上部の中央に立て、前には笹竹に渡した注連縄が張られている。

一番山笠から神職が修祓をして、舁き棒を塩を撒いて清め、台の四隅に盛り塩をして巡行の安全を祈る。山笠の舁き手たち全員も修祓する。終了すると各山笠舁き手総員で打ち込み（三三七拍子の手打ち）をして巡行となる。山笠は静かに境内を出てから、態勢を整えて祇園囃子を奏でながらの巡行を始める。本宮山笠は法螺貝を吹き鳴らして巡行する。

一番山から順に坂道を登って祇園宮旧社地の本宮に向かう。掛け声はワッショイである。前後の三本の舁き棒の端に青年指揮者が乗って前後で五色の布のついた指揮棒を振って山笠を指揮する。舁き棒は杉の丸太を何年も寝かせてから削ったものである。棒の鼻には金属がはめ込まれている。指揮棒の赤布には祇園神紋と八幡神紋が入り「前田祇園山笠　〇〇山笠」と記されている。山笠は木製四輪の曳き山である。一番山笠の四隅には「清修」と記された提灯、本宮山笠は「本宮」という提灯が飾られている。舁き手の姿は腹巻、ステテコ、白の地下足袋で、上に法被を着る。二番山笠の襟には、「市指定無形民俗文化財」の文字が見える。鉢巻は各山笠で色が異なり、役職によっての違いはない。取締などの役職は腕章で示している。令和四（二〇二二）年は、新型コロナウイルス感染症の影響でみなマスクをしていた。女性や子供たちも同じ姿で山笠を曳く。角を曲がるときは、前棒を下げて後輪を浮かせて方向を変える。山笠の後ろからは、暑さ対策もあり救護車が随行する。

古刹の祇園山龍潜寺まで坂道を上り、山門前を右折して、祇園宮があった祇園原町（祇園元町）に入り、一〇時五〇分に旧八束髪神社前に各山笠が揃う。昭和三（一九二八）年の御大典記念に建てられた鳥居の前には、本宮山笠が据えられる。本宮の役員たちは「祇園本宮之跡」と記された横にある石祠を参拝して柏手を打つ。祇園本宮は八束髪神社と号するが、昭和二四（一九四九）年の戦災で、御神霊と大鳥居を一旦仲宿八幡宮へ移し、昭和六二（一九八七）年に仲宿八幡宮に合祀された。その御分霊をここの石祠に戻し祀り、現在は御旅所となっている。

各山笠は御分霊の参拝を終えると、この地を治めていた麻生氏が春日神を祀った由緒がある鳥野神社前を通り、それぞれの町内を巡行して山小屋へと戻る。本宮山笠は、祇園原町から更に高いところにある、麻生氏ゆかりの元城町や花尾町などを回り、一四時四〇分頃、山小屋がある本部へ戻る。

五　前日祭　七月一六日　人形飾り山笠巡行

各町の旗笹山は宮入・各町巡行を終えると、飾り山笠に姿を変える。台に左右に開いて動く仕組みを取り付ける。これを「槍出し」と呼んでいる。直方山笠で「開き山」と呼ぶものである。山笠が大きく見えて、動きに連動して飾った人形が動く。狭い道では折りたたむこともできる。太鼓と鉦の配置も変更される。本宮山笠では、鉦が台の内部から山笠頂上部に移動する。人形を飾りつけるのは、直方の原田人形師であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で休業し、そのまま廃業した。引き継いだのは福智町の富田人形師である。水玉（竹籤と銀紙で作った飾り）を五〇〇本以上取り付けて、飾り人形を引き立てる。この日の夜から三日間、「人形飾り山笠」として各町内を巡行する。出発に先立って、各山笠の収納場所に仲宿八幡宮の神職（宮司と権禰宜）が出向き、巡行の安全を祈願して祭典を行う。神事後に山笠はそれぞれの町会へ巡行する。指揮するのは、梵天・槍出し・架線と呼ばれる役員たち。飾り山笠のそれぞれその場所の名称が役員名になっている。梵天は棒の上に立って指揮する。日中は指揮棒を使うが、日が暮れると「梵天」と記された提灯を用いる。

平年であれば、三基の山笠がサワラビ通りに集まり、出発の合図で順次八幡駅に巡行し、八幡駅広場前に集合することになっていた。巡行には八幡東ねぶたも参加して、多くの観客が集まり駅前は賑わうが、令和四（二〇二二）年は新型コロナウイルス感染症の影響で、この駅前での行事を中止し、町会の巡行のみとなった。

二番山笠である祇園町山笠では、山笠を収める「斎納庫（山小屋）」前で一六時から神事（祭礼と呼んでいる）がある。山笠は一九時半に斎納庫を出発して祇園町、小伊藤山公園、八幡駅、山笠通りを経て、二〇時半に再度祇園町へ戻る。夜の人形飾り山笠は、かつては蝋燭の提灯の明かりであったが、一〇ワットの電灯を使うようになり派手になった。仲宿八幡宮を通り、二一時に斎納庫へ戻る。

本宮山笠では、夜の部として一六時半に本部前で神事を行い、一七時に山笠が出発する。一八時二〇分から祇園原公園で小休止する。その時に、昨年亡くなった山笠の功労者の遺族が、遺影を手に山笠前にやってきて、そこで舁き手たちの打ち込み（三三七拍子の手打ちをすること）を受けて、功労者を追善する。また、御祝儀を頂いている商店の前などでも山笠を止めて打ち込む。二〇時頃に本部に戻る。

六　当日祭祇園大祭（御神幸）七月一七日　飾り山笠奉納宮入

大祭は「中日」と呼ばれている。九時二〇分頃から人形飾り山笠が、一番山笠から仲宿八幡宮境内に集合する宮入が行われる。境内での各山笠の据え方は三日の旗笹山宮入と同じである。最後に宮入する本宮山笠が境内に入ったのは九時四〇分頃であった。

人形飾りの外題は木札に墨書されている。一番山笠が表「関ヶ原の合戦」後「天目山の合戦」、二番山笠が表「山崎の合戦」後「女傑勇躍ノ誉」、本宮山笠が表「倶利伽羅峠の合戦」後「七尾城の戦い」である。趣向を凝らした飾り付けがされている。それぞれの場面に小さな木札に登場人物の名前が記されている。一番山笠の後ろに飾られた龍の造り物には「花尾小学校児童作龍」とあった。各山笠とも旗笹山のときに頂上に立てていた「八束髪大神」木札は表に移され、正面中央（本宮だけは向かって左の槍出し）に飾られた。二番山笠には「祇園町山笠」と墨書された木札も飾られている。旗笹山笠の時には、横に飾られていたものである。各山笠役員らが社殿前に整列して、八一七年大祭神幸式祭典が始まる。大祭では仲宿八幡宮の御祭神の御神幸となるため、拝殿内には神霊移しが行われる神輿が安置されており、参列者一同は社殿下の軒先に並んで座り祭典が行われた。神職が境内に集まった三つの山笠の舁き手を修祓。神前に三つの山笠を代表して一番山笠の保存会会長が参拝した。

社殿前の境内に張られたテントに、北九州市長、市議、区警察署長、区市消防署長、福岡県議、国会議員などの来賓が並び、一〇時から神輿出発式が始まる。当番山の一番山笠の舁き手三名による祇園太鼓奉納があった。拝殿前の外に据えられた大太鼓と小太鼓、鉦で演奏する。山笠巡行のときに奏でられる祇園囃子の三曲である。このとき使われ

る大太鼓には『慶安元年八月氏子中』の銘が刻まれていた。この後、テントの来賓に向かって拝殿前の外に置かれたマイクを使って挨拶が始まる。続いて氏子総代会長、保存会会長と続く。最後に来賓代表として北九州市長の挨拶があり、神輿に出仕する仲宿青年会会長の発声で乾杯となり式は終了する。

一〇時半、神輿が拝殿から外に出され、花火を合図に清道旗を先頭に神輿による神幸が始まる。神輿の後に三基の山笠がお供して祇園原町の御旅所まで随行した。一〇時五五分頃、御旅所に神輿を安置して代表者が参列し御旅所祭が行われた。

祭典の後、一一時一五分以降それぞれの町会を巡り、神輿は仲宿八幡宮へ戻る。町会巡行では、祝儀を受けた企業や家が仲宿八幡宮社前の掲示板に張り出されて各山に知らされており、そこでは全山笠を止めて打ち込みをしてお礼とする。また各町会からそれぞれの町会の山笠にも寄付があり、山小屋に氏名が張り出されており、そこでも各山笠は打ち込みをしてゆく。また不幸があった家の前を巡行するときは、祇園囃子を止めて通る習わしになっている。各山笠は一四時ごろに山小屋に戻る。

本宮山笠は、町会が山の上にあるため、山笠を巡行させる為の人手を集めるのに苦労する。令和四（二〇二二）年は、穴生の舁き手達二〇人が、「穴生山笠」と染められた揃いの法被を着て祇園三丁目の交差点から本宮山笠の加勢に着いた。祇園原本部前から、龍潜寺より先の険しい山際を登る巡行を加勢するためであろう。兄弟山などという公式な関係での協力ではなく、本宮の舁き手の知り合いを通してなされたことであるという。本宮だけの人員ではこの山道はきついのだという。

この日の山笠巡行は夜の部もあり、電飾を灯した各山笠とも一七時近くからそれぞれの町会を巡行して、二〇時半～二一時に山小屋に戻る。

七　後日祭　集団山見せ　七月一八日

集団山見せは、前田祇園山笠通りに山笠三基が集合して、その豪華さを競う前田祇園山笠のフィナーレ行事である。平年であれば各町会を巡行した山笠は、夕方に福岡ひびき信用金庫前田支店から善興園を結ぶ大通り「前田祇園山笠通り」に集まり、市長ほか多くの来賓を招待して競演会が始まる。

最初は各山笠代表による太鼓の競演が行われる。子供の部、大人の部に分かれて演奏する。続いて、前田祇園山笠三基が道路で山笠を前後に傾けながら蛇行し駆け抜け、続いて山笠を回す。祇園囃の早太鼓、早鐘が響き渡り会場内はクライマックスを迎える。山笠の競演が終了すると、太鼓の競演の表彰式があり前田祇園山笠は全ての行事を終了する。令和四（二〇二二）年は、山笠競演会は多くの観客が集まることもあり、新型コロナウイルス感染症の影響で急遽中止とし、町会巡行だけとした。山笠巡行では、小学生も参加するため、親の同意書をとり、検査キットを各町に配り、新型コロナウイルス感染症対策をした上で実施された。参加できない子どもたちのために、ドローン撮影も行われ学校教育で前田祇園山笠について学べるように工夫された。

令和四（二〇二二）年の行事の実際は、二番山笠では、斎納庫を正午に出発して「前田祇園山笠通」を巡行して、商店街で小休止。祇園町を経て一七時半に戻って行事を終えている。本宮山笠は、一〇時四五分頃に舁き手たちが集合して、一一時に山笠巡行を開始している。この日の町会巡行では元城町など中世の古地とされている、高いところにある町へ行くことはなく、一三時に帰着して、山笠行事を終了している。

翌日以降、人形師がやってきて飾り山笠を崩し、解体した飾りを持ち帰る。これで全ての行事が終了する。

（福間　裕爾）

今井祇園行事

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　今井祇園行事

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和三五（一九五八）年一月一二日）

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【別名】今井祇園祭・今井祇園　廿日祇園

【地域の概要】

旧今井村は「今井津」と呼ばれ、祓川河口部に中世から瀬戸内海との交易を担う港町として形成されてきた。金屋には中世から「金屋鋳物師」が居住していた。今居鋳物師藤原応安の名前と応永二八（一四二一）年の銘がある梵鐘が浄喜寺に残っている。浄喜寺は本願寺教団の九州の拠点として建立されたもので、戦国期からの歴史を有し、浄喜寺と今井津祇園社の門前町として発展した。江戸時代には今井市場、金屋、中須など交易の場であったことを伝えている。

【伝承地もしくは実施場所】

福岡県行橋市今井～大字元永地区周辺（旧豊前国仲津郡今井津周辺〔旧小倉藩領〕）。今井津（今居津）とは、中世に繁栄した瀬戸内海西部の港湾に由来する祓川河口の広域名称。今井・元永・沓尾・長井・金屋・津留・真菰・簑島周辺。

【実施時期】

令和五（二〇二三）年は七月二日～三一日。平成一四（二〇〇二）年から七月一五日～八月初頭、大祭は八月初めの金、土、日曜日の三日間となった。元来は七月一五日～八月三日。大祭は八月一日、二日、三日（旧暦五月二五日～六月一五日）であった。

【伝承組織】

今井津須佐神社、同氏子会、各山笠・笠鉾奉納地区（今井東町・今井西町・今井中須町・元永・金屋・真菰・沓尾）、浄喜寺、今井津周辺の集落。

今井西祇園会（役員：顧問二名、主願八名、祇園係三名）、今井西町の三組から二名ずつ出る選考委員が役員を選ぶ。主願の妻は祭礼関連の食事準備を担当する。祇園係は若い者が務め、「手永廻り」、「花配り」、八ツ撥の世話、主願の補助をする。かつては主願が組織の中心であったが、現在はこれからの祭礼の継続も考慮して祇園青年団という組織もできている。

今井西には加勢町がある。注連立て、寄付・花もらいなどを務める行橋市金屋・辰地区と、山車の部材を結束する蔓を用立ててきた京都郡苅田町二崎地区である。

【由来・伝承】

由来には、以下の三説がある。

元慶七（八八二）年、豊前の疫病蔓延時に杉山勘解が京都感神院祇園社から分霊して海路今井津金屋に勧請し、延長八（九三〇）年に村上左馬充頼次が元永の妙見山に遷し、山車祈祷を始めた。

昌泰元（八九八）年から三（九〇〇）年にかけて、今井津に疫病が蔓延した際に、中良身が金屋に祇園神を降臨させ祀った。その後、延長八（九三〇）年に元永の妙見山に遷し、安和元（九六九）年に祇園祭を始め、山車鉾を用いて祓川原で祭事を行った。

慶長六（一二五一）年に、地頭職福島采女正・村上佐馬頭が京都祇園社を瀬戸内海経由で今井邑に勧請し、兵乱を避けて元永妙見山に遷した。

【実施内容】

四年ぶりの開催となった令和五（二〇二三）年は、行事日程に変化がある。今井祇園の稚児を伴う重要な行事「八ツ撥」は少子化の影響を受けて近年実施できていない。本報告では令和五（二〇二三）年の行事を記述するが、詳細な調査と記述がなされた『今井祇園祭　行橋市文化財調査報告第三一集』から平成一四（二〇〇二）年の今井西の行事を適宜参照し、行事調査報告を補填する。場所記載がない場合は、事務所が置かれる今井西公民館である。

令和五（二〇二三）年の行事

一　七月二日　花笠（花傘）組立　今井西公民館　熊野神社　注連綯（しめな）い

祇園係が町内各戸へ、竹ひご・紙などを配り、枝・花びらなどの製作を依頼する。枝に緑の紙を巻いて茎とし、紙を五枚重ねて花びらにしていく。一軒七本竹ひごを巻き、花は二〇枚作ってもらう。今井西は七〇軒ほどある。

製作詳細は図示され素材と同時に配布されており、各戸では完成したパーツを祇園係に届ける手筈になっている。竹ひごに緑の色紙を巻き、枝が二本組と三本組のものを作り、胡瓜の葉をかたどった緑色紙を付ける。竹ひごは、京都郡勝山町久保地区の竹職人によって準備されてきた。花弁は方形の色紙四箇所に切り込みを入れて箸で丸めて五枚重ねて糊付けする。現在は行われていないが、今井東の花は紫の色紙を巻き、西の胡瓜に対して茄子と称する。

六月二三日以降、今井西公民館で祇園係と祇園青年団が一本一本花に仕上げ「祇園の花作り」をする。新型コロナウイルス感染症拡大以前は、今井西公民館に子供会とその母親たちが夜に集まり、この作業を行っていた。小豆を花の芯とするため前日から水に浸け、ふやかしておき、五枚の花びらを重ねて小豆で止める。ふやけた小豆が乾燥してしっかり止まる。この小豆は腹痛や牛馬の病気難産に効果があると信じられ、花配りの後で御飯等に混ぜて食べる。

花には四種類あり、枝が二本のものと三本出ているものがある。長さは九〇センチメートル程度である。花の色の組み合わせは、①赤白赤　②白赤　③白赤白　④赤白　①と④が二枝のものである。②の白赤だけ九二本、他はそれぞれ九一本ずつ作り合わせて、三六五本の花を作る。今年は三六六本作った。

九時から主願、祇園係の役員と今西青年団が公民館に集まり、花笠を組み立てる。かつては、〝主願〟など祭役員を中心に祇園会、区の人々だけで花笠作りを行ってきたが、青年団を参加させることで若い世代への技術伝承を行うことにした。紐で天井から笠の骨を吊り下げて、それに祇園の花を取り付けていく。赤い笠の骨の真ん中には、仏事に使う風鈴が下がっている。これに四種類ある花を組み合わせて笠に付けていく。①と②を合わせて二本とし取り付け、次に③と④の組を飾る。三六六本という数から当初三本ずつ飾る計算であったが、途中から変更され二本ずつとなった。花は笠の中心から下向きに揃えて麻紐で編むように取り付けていく。天井から吊り下げて飾っていくのには理由がある。八ツ撥の頭上に飾る天蓋であるから、水平で傾きがないかを注意深く見て飾る必要がある。三六五本飾るのが本来であるが、臨機応変に進められる。その間に「芯花」が作られた。一二本の祇園の花を一束として奉書に包み、水引で結んだもので①から④までの花四種類を三組で一二本である。水引は祝儀袋のものが流用された。閏年にはこの組み合わせに③の白赤白が一本足されて花が一三本になる。芯花を笠の中心から下げて花笠は完成する。下に人が入り、麻紐でもう一列編み上げた。傘の上部には天蓋の緑の紙が貼り付けられ傘が完成する。昼前に作業は終了した。最後に「三献（さんごん）の打ち込み」という手打ちがあり、作業を終わる。この手打ちは「オーイ（二拍）、オイ（二拍）」の手打ちを人を変えて三回行うもので、行事の終わりには必ず行われるものである。行事が終盤に差し掛かると、誰ともなく「三本打ち込んで終わりにしよう」との提案があり、賛同があるとその場の長老に発声をお願いして「僭越ですが御指名いただきましたので、御唱和ください」と一回目の手打ちとなる。二人目の打ち込みは町内会長が指名される事が多く、締めは行事責任者が発声を担う。この日は

祇園会長が締めた。

完成した打ち込みが終わると、片付けをしてから、作業にあたった人々が花笠の下で直会をする。行事ごとに何度も直会をすることも今井祇園の特徴である。関係者だけではなく、その場に居合わせた者にも直会への誘いがある。その際の誘い文句は「ホトメキナイ」（食べていきなさい）である。ホトメクは博多のノボセルと同じような語感で使われる。

七月八日に、完成した花笠を辰地区に運ぶ「花笠送り」があった。腹痛や牛馬の病気・難産のときに、その花びらを飲むと効能があるとされ、辰下区の人が法被姿で迎えに来る。それを送り出す今井西の主願たちとの直会がある。辰上地区公民館で花笠を迎えての直会の後、辰下区の公民館に遷され、天井に花笠を吊り下げての「花笠見せ」となり、老若男女が参加しての直会となる。

七月一七日には、今井西地区の主願が花笠を貰い受けに行く「花笠迎え」があった。現在は車を使うが、かつては鉦叩きを先頭に花笠を天秤担ぎで今西公民館へ運んだ。

この花笠作りと同時進行で、今井西と今井東の境にある熊野神社の拝殿で注連綯いが行われていた。左綯いで五箇所分の道切りの大注連縄他が綯われていた。午後からは今井須佐神社裏山から注連縄を取り付けるための竹とタブの木の枝を切り出した。

二　七月一五日　熊野神社拝殿発句定幷一巡　熊野神社拝殿

「鉦卸し連歌」と通称されている今井祇園祭始めの行事。福島家、村上家、庄野家、辻家、守田家、末次家と合わせて「六頭（党）」（六株）と呼ばれる旧家が連歌奉納に関わっていたとされている。かつては、六頭筆頭・旧地頭福島家の座敷で行われていたが、現在は熊野神社横の社務所で行われる。かつての鉦卸し連歌には、今井東・金屋も集まっていた。

一〇時、参加者が社務所座敷に座る。一四席準備されていたが、諸事情により当日の参加者は七名であった。正面に向かって左に今井津須佐神社宮司、中央にこの日の指導者である宗匠を務める今井津須佐神社神職、右に宗匠を補佐する執筆の連歌巧者、今西祇園会会長、総代、今井西区長などが参加する。行橋市長も座に加わった。調査者の二名も勧められて参加することになった。

発句定一巡とは連歌の最初の長句五七五を定めることから始まる。一同が熊野神社神殿に向かって二礼二拍一礼する。続いて祇園会会長より「風薫る庭に現るや須佐の神」と発句を定め、二度読み上げられる。かつてはこの役を福島家の当主が務めてきた。この発句を受けて七七の短句を継いでいく連歌が始まる。一巡とは座を反時計回りにひと巡りすることをいう。「初折表」を八句、「初折裏」を一四句、連歌を繋いでいく。奉納には連歌独特の式目と呼ばれる規則がある。句数は、百韻（一〇〇句）、五十韻（五〇句）、世吉（四四句）等を単位として、発句から挙句まで春夏秋冬・景色・恋などの句を織り交ぜて構成する。詳しくは、時分、聳物、降物、山類、水辺、動物、植物、人倫、居所、衣類、旅、名所、恋、述懐、神祇、釈教という「部立」があり、発句は恋と述懐の歌が読めない決まりになっている。三首目からは更に部立の制限は増え、先の二つに加えて、名所、神祇、釈教の項目が加わる。これが初折裏の二句目まで続き、以降は制限がなくなる。但し、同じ字は五句の間は使えないなど、他にも細かな規則がある。大和言葉で綴られ、漢語は使えない。

折表から折裏の三句までは地域との関係で詠まれる。祇園会会長に続き、善徳寺、浄喜寺、総代、市長、福島家、守田六頭、辻六頭、末次六頭、庄野六頭、区長である。本来なら六頭から参加するのだが、現在はこの歴史を踏襲して参加者がなり替わって歌う。歌を判定するのが宗匠の役目で、式目に従っているか、「障り」はないか、使えない言葉はないかなどを判定して、障りがある場合には、発句者に改訂を宣する。認められれば宗匠が歌い、執筆が記録する。この日は一四句まであがったが、時には半分も行かないこともある。この発句は今井津須佐神社での社頭連歌へ続き、そこで完成の「満尾」となる。連歌は一筋縄ではいかない。

一二時一五分、一巡したところで、宮司が床の間の御幣に向かって祓いの祝詞を唱え、床の間、参加者と修祓を行う。熊野神社に向かっても修祓する。続いて宗匠が一巡した連歌二二句を詠じて奉納する。

詠じ方は独特で、句の最後を上がり調子で少し長く歌う。終わると直ぐ様手を挙げて、熊野神社脇殿に鉦二面、太鼓一張を準備して控える今井西の青年団に奉納が済んだことを伝える。合図に間髪入れずに鉦太鼓が打ち鳴らされる。

鉦卸し連歌が終わると鉦太鼓は拝殿から今西公民館へ運ばれる。今井の人々は、この鉦の音を聞いて、通称「廿日祇園」の始まりを知る。鉦卸しでは、連歌奉納が祝詞の代わりとされ、祭典に祝詞奏上はない。それを受けて鉦の音で神が降臨するとされている。

社務所では、参加者の直会が始まる。直会の料理は当番が作り、家ごとに出す料理も決まっていた。福島家から、胡瓜もみ・そうめん・スイカ、庄野家から、連歌餅（餡餅）が出されていた。餡餅は現在でも当番がこの日のために搗く。魚はトビウオと決まっており、酢物も定番となっていた。現在では仕出しとなっているが、この定番は必ず入っている。

三　七月一六日　元永山笠安全祈願祭

今井祇園の山はかつては、各地から六基出ていた。金屋、今井西、今井東、今井中須が曳き山で、真菰と元永からは舁き山が出ていた。現在は今井西の曳き山と、元永の舁き山の二基のみである。明治時代に金屋、今井中須、真菰の山が中断した。今井東は昭和三九（一九六四）年に中断した。元永は太平洋戦争時に中断された。金屋、真菰、中須の山車部材はその後、みやこ町犀川生立八幡宮の山笠に伝えられたとされている。

元永は、昭和一六（一九四一）年まで山を出していた。元永の舁き山は、高さ一五メートル以上ある旗差し山であった。平成一九（二〇〇七）年六月に有志が今井祇園祭元永山笠復興会を発足させ復興を開始、平成二八（二〇一六）年にＮＰＯ法人となり、かつて使われていた山笠の部材を神社境内や区の倉庫から集めて、平成三〇（二〇一八）年に山笠を復元した。水を吸った輿木一本は一・四トンであった。復元に際しては、現地に残されていた大正一二（一九二三）年の写真を参考にしたものの、詳細については不明な部分も多く、今井祇園の山車が伝えられたとされるみやこ町犀川生立八幡宮の柳瀬地区の舁山に、教えを請い実現した。毎年五月上旬に行われる生立八幡宮神幸祭の際に、山笠の花切り・組立・巡行・解体まで参加して、製作方法と舁山運行の技術を磨いている。

八時から元永の今井津須佐神社下の広場において、元永山笠安全祈願祭が行われた。山の部材の前に祭壇が組まれ供物がされて、今井津須佐神社宮司により神事が執り行われた。神事は通常のもので、降神の儀、献饌、祝詞奏上の後、山笠の部材を修祓し、更に紙吹雪を撒いて丁寧に清めた。その後六人の玉串奉奠（元永山笠振興会代表は喪にかかっており、これには参加していない。後で宮司による清払いを受けた）で祭典は終わり、山笠の建設に入った。クレーンで部材を吊り上げて組み立てて、欄間や破風などが取り付けられる。

今井祇園の山車の特徴であるオオヤンボ・コヤンボという二本の柱も建てられる。一六メートルの高さがある。元永山笠は生立八幡宮の柳瀬地区の山笠に倣って、二本の間が小縄巻された横木で接続され梯子状になっている。上部には梵天状の飾りが付く。かつては杉材であったが、現在では大正期に豊前から寄贈された欅が使われている。オオヤンボの根元は山車の床板に乗せて固定される。ここまでできると横のテントで昼すぎに直会がある。仕出しの弁当の他に素麺が出された。

四　七月一六日　今井西輪上げ

一〇時から今元公民館から約二〇〇メートルの祓川河口川床に埋設された今井西の曳き山の車輪を掘り出して引き上げる。四輪の他、それを通す「心棒」と呼ぶ車軸二本も上げる。川に埋めておくのは、木材が乾燥して割れないようにするためである。車輪は径一・五メートル、厚五五センチメートルの楠材の組木である。

前もって、被せられていた泥は機械で取り除いており、ポンプで川の水をくみ上げて車輪の泥を落としていく。車輪は川の流れに沿って一列に埋設されており、車軸二本も同じ場所にある。クレーンで一輪ずつ吊り上げるが、水に浸かっていた楠は一輪一トン以上の重さになっている。心棒も二〇〇キログラムはある。四輪のうち一輪を残して、トラックで今井西公民館へ運ぶ。一一時二〇分に輪上げ作業は終了した。

この作業にあたるのは、今井祇園西町青年団である。かつて曳き山を出していた今井東町の青年団も参加する。残された一輪を道路に立てて、車輪に棒を通す、それに紐をかけて公民館までの六〇〇メートルを曳いていく。かつては町民総出で、四輪とも四班に分かれて運んでいた。それを後世に伝えるために現在でもクレーンを使わずに、わざわざ人力で運ぶようにしている。本来は「鉦卸し」の日没に輪上げして、麦藁を燃やして車輪の両端を照らし深夜にかけて運んでいた。元永でも輿木を運ぶために使われた車輪があり、それを掘り出すのを輪上げと呼び、夜に若者たちが裸で藁火を焚いて輿木を勇ましく運んだと伝えている。

今井西は、鉦を叩きながら輪を運ぶ。鉦に合わせて合いの手が入る。「オーリョ　リョー　リョー」、「ホイホイ」という合いの手は、八ツ撥がゆくときの掛け声である。公民館前に四輪とも置かれて干される。公民館で輪上げの直会がある。青年団は一三時から曳き山の部材の輿木を点検する。公民館前には寄付札立てが設置され、山に飾る幟を陰干しする。

五　七月一七日　事務所開き　注連立て

今井西公民館前に竹を立てて注連縄を張る、竹には魔払いのタブの枝が付けられ、注連縄には御幣の他、紙に包んだ洗米を結わえる。正午から「事務所開き」の神事を行う。公民館の床の間には「須佐之男命」の掛け軸が祀られ、今井津須佐神社宮司による祭典がある。公民館入り口に「今井西祇園会事務所」の看板が掛けられて、七月二七日までの期間、平日は一八時から二〇時まで、土・日曜日は八時から一八時まで主願が常駐する。

一四時から中須橋口など今井西町の入口に、主願たちによって注連が立てられる。これには青年団も参加する。沓尾地区、長井地区、金屋地区、辰地区それぞれの地区で、この日以降注連立てが行われる。東橋、熊野神社前、中須橋に注連縄を立てる。今井東は、今井東・今井西の境、熊野神社参道入口などに、今井西の対岸には真菰区が、東橋対岸には元永区が、それぞれ注連縄を立てる。

六　七月二〇日　社頭連歌　今井津須佐神社拝殿

一〇時から須佐神社の拝殿に座が設けられて連歌が始まる。この日は調査者一名の座も準備されており一一人の円座であった。本殿正面を背にして中央に宗匠、向かって左が須佐神社宮司、右に執筆を務める須佐神社神職（鉦卸し連歌の宗匠）、神殿に向かって右回りに、神社総代、今井西祇園会会長、辰区連歌巧者、浄喜寺住職、今井西区長、調査者、行橋市教育委員会文化課長、連歌巧者（鉦卸し連歌の執筆）という顔ぶれである。社頭連歌の宗匠は元北九州市立いのちのたび博物館学芸員の有川宜博氏が務めた。氏は大宰府神縁連歌会宗匠も務め、連歌の継承普及に尽力している。

最初に一五日に行われた熊野神社発句定幷一巡「鉦卸し連歌」の初折表八句と初折裏一四句が詠唱、披露され、社頭連歌が始まった。宗匠は、連歌は文字ではなく音で表現するものと言い、この発句定の連歌を式目にそって読みなどを修正していく。更に一巡以外の連歌は作者名を残さずに神へ奉納するのが連歌と連句の違いであることが説明され、「驚きと、言うか言わぬか、ぬらりひょん」の発句が続けられ、名残表の連歌が始まる。長句を絵の背景としてそこに短句で絵を描いていく感覚で歌を繋いでいく。発句に繋がったのは「やがてえ病みの、退ける国」と新型コロナウイルス感染症拡大から回復する情景が継がれた。宗匠はもっと軽やかに明るい歌をと要求する。継いだ句は「朝の雲、こころ軽きに、浮かびけり」であった。このように一巻の絵巻

を宗匠の進行に従って紡いでいく。名残表の一四句までは部立の制限はない。季節の句は二句続ける決まりで、冬が二句続き、「忍ぶ草、霜ぶる身こそ、枯れがたき」と恋の呼び出しの歌となり、恋の歌が三句続いて、夏二句、秋二句、一三句目が月の歌と決まっており、そこで二句詠んで名残表を終了した。一四句目は「盃を手に、我を飲み干す」と月を映した酒を呼んだ。宗匠から連歌ではあまり食べ物を歌わないが、酒は多いという説明があった。宗匠は絵巻を設計するデザイナーのような役割をする。いい連歌ができるか否かは宗匠次第である。ここで昼食となる。

社頭連歌の昼食は、ささげ豆の握り飯、トビウオの焼き物が定番である。近年はアジが多くなっているという。酒も出る。かつては、料理は連歌に関連した六頭の家から提供されていた。

昼から名残裏の八句を読む。二名が用件で退席した。部立は名所、恋、述懐、神祇、釈教が読めなくなる。式目に触るとやり直しとなる。冬の句「北風を、受けて冷たし、丘の上」二句続いた後、なかなか後が出ない。宗匠曰く、午後はペースが落ちるとのことである。季節のない「雑（ぞう）」が続き、春の句に移り土と筍を詠み、花へと続ける。「まほろばに立つ、淡きかげろう」で名残裏八句が終了した。一五時二〇分に句挙となった。

続けて、連歌奉納の祭典となる。一同須佐神社神殿に向かい座り、宮司による修祓などの神事の後、執筆により神前に連歌が語尾上がりの調子で詠み上げられ奉納された。記された連歌も神前に奉納され、一五時三〇分須佐神社奉納之連歌「社頭連歌」は満尾となった。

七　七月二三日　山車建て　手永廻り

七時五五分から一分間「人寄せの鉦」が今井祇園西町青年団長によって打ち鳴らされ行事の始まりを町内に知らせる。八時から今西公民館に集まった、町内の氏子・青年団を前に今井西祇園会会長、町内会長の挨拶があり山建てが始まった。参加者は御神酒・昆布するめで身を清めてから作業にかかる。

熊野神社参道前の倉庫から曳き綱など山車の部材を運び出す。これには氏子の女性たち七名も参加していた。公民館前の県道二四六号「沓尾大橋線」にクレーンを使って車輪が運びあげられ、定位置に配置され輪組が始まる。山車を建てる場所は、かつてあった浅間神社の前ということで昔から変わらない。山車の車輪はひとつ一トン以上の重量がある。心棒は前後を一・六メートル間隔を空けて輪に通す。車輪が動き出さないように六〇センチメートルの楔で止められ、端縄をかませておく。

車輪の心棒の上に一・六メートルの幅で床木（据木）を載せて、正面を東に向けて四本柱を組み立てる。それは今井津須佐神社のある方向である。四本柱は上にいくほど開いていく末広がりな構造になっている。上部は八角形に削られた柱になっている。

九時半に祇園会の主願が法被を来て「手永廻り」に出かけ、今井津須佐神社の京都郡一帯の氏子圏の村々から寄付を集める。

一〇人で熊野神社に部材を取りに行く。権現様脇殿下に保管されていた輿木二本と神殿下に置いてあるオオヤンボ・コヤンボを引き出して台車に載せて運ぶ。公民館内では女性たちにより山車に飾る花作りと直会料理の準備が行われている。

輿木は長さ一〇・三メートル、径二一センチメートルから次第に太くなっていき、幅二六センチメートルを最大にまた細くなっていく構造である。先丸の角材の様な見た目である。山車の巡行のときに舵取りをしたり止めたりすることから「とめ棒」又は、舵取りのための綱を先端に付けることから「綱棒」とも呼ばれる。先端には真鍮板で覆われているが、他所に見られるような環はない。輿木はクレーンで吊り上げて地上一・七メートルの高さで、四本柱の桁に乗せる。四本柱は四・五メートルの高さがある。七人で輿木のバランスを見ながら取り付け位置を調整する。

四本柱に梁や桁が組まれ、床板が張られていく。囃子座の床板が張られて、周囲を囲むように高欄を取り付けていく。高欄は十二支を題材にした彫刻で北側の子から一辺四面ずつ反時計回りに三面に取り付

けていく。公民館横では格子屋根を組み立てた後で、幟を固定するための竹などを麻紐で結び付けていく。

組立と並行して、山車を建てている県道から脇に入った路上でオオヤンボ、コヤンボの製作が行われる。まず、先端に取り付ける御幣を熟練者が作る。豊前神楽の採り物にも似たシデ状のものである。雨に濡れて崩れないように防水仕様の紙を切っていく。

オオヤンボが一二・九メートル、コヤンボが一二・五メートルと少し短い。細く割った竹、六から八枚を檜材の両ヤンボの周りに荒縄で結び付けて囲う。結び方が独特で、男結びで角が出るよう角結びにする。三三箇所の結び目を作るのが本来の姿と言われているが、オオヤンボでは四六箇所、コヤンボでは四三箇所を結んだ。この角は邪気を払い蝮除けになると言われる、農作業に使う足半草鞋の角結びと同じと考えられている。角が前になる。シデは長さ一・六メートルの青竹に取り付け、両ヤンボの先端の割り竹の中に入れて七箇所を麻紐で結ぶ。

続いて両ヤンボの「幣切り鎌」を準備する。農作業で使う薄刃の鎌の刀身だけを使う。切先には麻緒が結びつけられて垂らされる。中子には半紙に米と塩をそれぞれ包んだ二つのおひねりを麻紐で結び付ける。ヤンボの先端から四・二メートルの所に白ロープを巻き、目印としてその少し上、先から三メートルの所に刃を前に向けて縦に鎌を結び付ける。さらに三メートル下にダシ縄と呼ばれるロープを取り付ける。この作業は熟練を要し、来年は引退するという古老が中年や青年団に教えていた。

山車の前側から破風などを取り付けていく。朱塗り・金の縁取りの欅材の破風などは最も古いものとされている。前の破風だけは二段になっており、四本柱からせり出して赤・黒漆塗りの向拝柱を立て、繋紅梁で繋ぐ。最前列の破風には三階菱の小倉藩の紋、上段の大屋根の鬼板には西の文字が金で入っている。取り付ける順番があり、それを違えると部材がうまく嵌らない。何度もやり直しながら組立は進んだ。後ろの破風には金塗りされた鳥衾の彫刻飾りが取り付けられる。大屋根には西の文字の飾りが乗る。前面一段目の屋根下には慶雲の飾り板を三枚取り付ける。車上連歌のとき、ここに宗匠と執筆が座る。

格子屋根にも幟を建てる角材が角結びされて取り付けられた。それをクレーンで吊り上げて取り付ける。前の下段だけ取り付けた時点で昼食となった。

昼食後、全ての屋根が組みあがると、オオヤンボとコヤンボがクレーンで吊り上げられて角結びを前にして格子屋根の天井窓に収まった。幣切鎌も前を向いている。二つの棒は前後で少しずれて交差するように建てられる。棒元は輿木を支える桁の中央に縄で縛り、ダシ縄を前後の輿木に結び付けて固定する。四本柱と床木の四方を斜交いにそれぞれベルトとラチェットチェーンを使い、締めて台を固定する。ほかの部材でも固定には現在では蔓の代わりに撚り縄を使う。五尋一二本を青年団と主願たちで作っている。ラチェットとベルトを使う前は「文字棒」四本を蔓に差し込み、捻って締め上げて固定した。輿木はロープを幾重にも巻きつけて床木に結束する。

輿木の前後の先端に二本ずつ、山車運行時に舵をとるための「梶取り綱」を取り付ける。主願たちが撚りをかけた五尋一〇本の端縄の中心を「徳利結び（舟子結び）」にして更に数人がかりで撚りを入れて太くしていき、二本の元と端を連結する。全て左撚りである。

公民館内で女性たちが作った紙の花飾りの飾り付け準備をする。今井西の女性たちが色紙を切って竹ひごに紙縒りで下げた花の串をホテと呼ばれる麦藁束に刺したものである。山車の四方の屋根上に飾られることから「四方花」と呼ばれる。藁束に青年団が竹を通して、米・塩を包み取り付ける。本来はホテに通した竹の先端に三角の五色の旗にして挟んで取り付けるが、今年は麦藁束下の竹に貼り付けた。山車の屋根への四方花の取り付けは、提灯山車曳きの時に行った。それまでに花が散らないように調整する。

山車の上部には、竹が結び付けられ囃子座が作られた。この青竹に腰かけて鉦太鼓を叩く。倉庫から曳き綱を運んできて、山に連結する。

山の心棒二本の中央に渡された丸太に、綱を二つ折りにして巻き付けて固定する。巻き付けた二本の先が前に出るようにして、パレット

の上にとぐろを巻いて積んでおく。現在は、ナイロンロープを使っているが、かつてはこの山車建ての日に綱打ちを行っていた。端縄二五本長さ六〇メートルの束を三つ作り、今井西公民館前から熊野神社入口の今井東との境の四つ角まで引っ張り出して準備する。それを差配するのは子ども達であった。山車の打ち鉦の囃子に合わせて総出で撚りをかけ、三つ組みの大綱を打った。大勢で地面を転がして撚りを掛けた綱は、山車の後方の路面で何本もの丸太の上でころがされて仕上げた。山車の上の囃子衆は綱打ちの進捗を見ながら調子を変えて、作業を囃した。この藁は稲童地区から奉納されていた。

格子屋根の上に幟を飾る。幟は長さ四間の竹に通されて格子屋根に固定される。前にオオヤンボ、向かって右に「須佐神社」の幟、後ろにコヤンボ、向かって右に「熊野神社」の幟を建ててから、奉納された幟を自由に配置していく。この日は全部で一六本建てた。四〇本建てたこともあるという。新しく奉納された幟は必ず建てることになっている。かつて幟建ては、提灯山曳きの朝に行われていた。女性たちが熊野神社の掃除の後に、竹に幟の乳を通して準備した。

一八時三〇分、区長、町内会長、祇園会会長の順で、三献の打ち込みがあり山建ての作業が終了した。

八　七月二七日　浄喜寺発句幷一巡　浄喜寺連歌

一三時から浄喜寺庫裡の仏間で行われた。文化一〇（一八二七）年に再建された本堂は、今井祇園の「夜祇園」に周辺から訪れた参詣客の宿として提供されてきた。

連歌座は、宗匠・執筆のほかは、伝統的に六頭の子孫が集うものだったが、今年は、今井西祇園会会長、行橋市教育委員会職員、真菰区代表、浄喜寺檀家総代、浄喜寺住職、連歌巧者、調査者二名であった。社頭連歌のときの浄喜寺住職の依頼により、宗匠は社頭連歌に続き、有川氏が務めた。

この日は、浄喜寺住職による「輪組なす山車に四年の塵もなし」の発句が定められて初折表が始まる。この長句を合わせて、今井西祇園会会長が「幟はためくこれ科戸風」と受けて夏を詠んだ。この二句の部立の式目は恋と述懐が詠めない。三句目からはこれに加えて名所、神祇、釈教の三つを詠めない式目となる。夏の三句目「大空の雷の音とどろきて」続くところで、「雑」という季節のない歌「雨の匂いに猫は走りぬ」と短句が続く。この句は浄喜寺の家猫「ひみこ」と「にんじゃ」が連歌座に参加していたことによって詠まれた句である。続いて秋が続き、秋の三句目に「山の辺にゆらぐがごとき赤き月」と月が詠まれてさらに秋が一句続き、初折表八句が終わる。

行橋市長代理の教育委員会職員の「細江にもハの字を残す帆掛け船」の雑の歌から初折裏が始まる。次の句までは名所、恋、述懐、神祇、釈教の部立が詠めない。

三句目からは部立の障りは一切なくなる。恋の歌「契りける君待つ日々のいや辛し」の長句に調査者二人が「瞼を濡らす袖の移り香」、「浮かびては緩るる俤消えやらず」と受けた。春の歌になり、宗匠の「酔うてはをれぬうららなる道」に続き、執筆が「旅半ば花の筵のそこかしこ」までの初折裏九句で、車上連歌へ繋ぐことになった。かつて、四代小笠原忠総公が築かせた「小笠原のお庭」に面したと庫裡の奥座敷で行われていたときには、床の間に「健速須佐之男命」の掛け軸をかけて、宗匠以下が床の間に向かい、連歌を朗詠し奉納した。一同二拍手一礼し、宗匠が終了を告げる定めになっていた。奉納連歌を奉書紙に包み、浄喜寺家紋入絵漆塗手箱に乗せて神号の前に捧げていた。社頭連歌では作者名を記さずに奉納されたが、浄喜寺連歌は、作者名も記され奉納され、車上連歌へと繋がれた。

九　七月二八日　提灯山車曳き

すでに四方花は屋根に取り付けられている。前側の屋根には平成一四（二〇〇二）年七月に奉納されたやや小ぶりの白地に「奉納」と草書体で墨書された幟が一対追加して飾られている。午前中に山車の三面に幕を張る。幅の広い胴幕の上に垂れ幕の水引幕を重ねる。どちらの幕にも小笠原藩の三階菱紋が入っている。水引幕は大阪の今宮實

蔵組から大正一五（一九二六）年二月に寄付されたもので、こちらの三階菱紋は錦糸で刺繍された豪華なものである。

一八時から提灯山の飾り付けを始める。まず、大締太鼓が運び上げられて表最前列中央に取り付けられる。鉦は山車上部の北側に吊り下げられている。提灯の明かりには電球を入れる。

提灯は四面に飾る。表裏に三階菱紋、左右に西の文字が入ったものを一面五張りずつ竹竿に吊り下げて、格子屋根に取り付けた。山車の前と後の輿木二本の上に長方形の「御神燈」を渡して飾る。和紙張りの正面には「御神燈」、横には「西町」と墨書されている。商家には「御神燈」の提灯が軒に掛けて灯された。

山車の前に今井西区町内から、大人・子どもなど大勢が集まってくる。大人は法被を着ているが、若い人のものは丈が長い、青年会と記された法被は短いが、こちらが古いものである。帯を独身の若手はピンク、年配者・妻帯者の若手は黄色を締める。

一九時一五分から今井西公民館内で棒割を行う。まず、梶取前後八人を選び、前の北側南側それぞれ二人を決めて、後ろも同様に二人ずつ割り振る。梶取は重要な役で、特に夜に巨大な山車を制御するには熟練した技術が必要とされる。緊急時に山車を停車させる「制御棒」役を決めて、祇園会会長から「四年ぶりで心躍るが、心棒や車輪がもつか心配」との話があり、囃子の調子で進行の指示をするとの打合せがあった。早鉦が進めで鉦が止むと止まれ合図である。通行車両の整理をする「交通」役、「水かけ」役を中・後・前と決めて、「ロープ係」を二人選出した。特に綱の先端は難しいので熟練者が選ばれた。曳く時間は二〇時から二二時まで道路占有許可をとっており、その間はコミュニティバスも来ないとの会長からの話があり、「まずは清めよう」と御神酒を手に副会長の音頭で乾杯が行われた。役者は手に「主願」と書かれた提灯を持ち、山車の周りに着いてゆく。

この提灯山車曳きは、町内の人でなくとも、男女子ども誰でも参加できる。元永山笠保存会の面々も手伝いに来ていた。二〇時に山車曳きが始まった。とぐろを巻いていた曳き綱が前に引き出された。綱が地面に着かないように、輿木に細い白ロープを渡し上を通して梶取の邪魔にならないようにする。山車を東に向かって曳き出す。皆で曳くがなかなか動かない。鉦がカンカンカンと打たれ、続けてヨイショの掛け声で力を何度も合わせていく。それでもなかなか山車は動き出さない。

ある瞬間にフワッと軽くなり、急に山車が動き出す。囃子はカカカカの早鉦と太鼓の連打に変わる。山車は一五メートル以上の高さがあり、県道沓尾大橋線を行くが、両脇にある電信柱に当たりそうになる。背後から曳き手に「力水」が浴びせかけられる。鉦卸し連歌で宗匠を務めた神職も、この日ばかりは後ろから思い切り水を浴びせていた。

今井東との境、熊野神社入口までゆくと、曳き綱を巻き取り、後ろに出して、後退するように西に曳き始める。昔、今井の東と西で綱引きをした名残と伝えている。旧善徳寺入口まで曳き戻して、再び東へ曳き公民館前の定位置に何度も切りなおして、二〇時五〇分に納めた。二一時、祇園会副会長、子供頭、太鼓を担当した青年団長が音頭を取り、三献の打ち込みを行ない、提灯山車曳きは終了した。青年団たちは太鼓、「御神燈」、そして提灯を山車から竹竿ごと降ろして公民館に収納する。公民館で祇園会会長の挨拶に続き直会となった。

一〇　花見の座　七月二九日　熊野神社拝殿

本来は八ツ撥奉納の関連行事である。近年は八ツ撥行事が行われていないため、単独での開催になっている。一二時から熊野神社拝殿で花見の座が始まる。衣装を着た八ツ撥の人形を碁盤の上に立たせた姿で拝神殿の中に飾る。この花見の座には八ツ撥が欠かせない存在であり、いつか復活するという願いを託して、その代役として人形を飾る。天井には花笠が下がる。この日の座は行橋市長、行橋市議会議長、行橋市議、福岡県議、今井町内各区長、周辺町内各区長、今井関連の企業経営者、今元派出所警察官、ＮＰＯ法人元永祇園山笠振興会などが招待されている。花見の座は行事として複数あるため、区別するために「来賓花見の座」と呼ばれることもある。

最初に、今井津須佐神社宮司による祈願祭の祭典が行われる。神前、八ツ撥の人形、そして参拝者一同を修祓して、祝詞奏上となる。市長、今井西区長、今井西祇園会会長の玉串奉奠で一同拝礼する。神事が終わると、今井西青年団長の司会進行で花見の座が始まる。今井西祇園会会長の挨拶、来賓代表の行橋市長の挨拶があり、令和二（二〇二〇）年で今井祇園の山車奉納が九〇〇年を迎えたことなどが触れられた。続いて来賓紹介、祝電披露、そして乾杯で直会となった。直会の料理は仕出しであるが、この花見の座では、胡瓜の酢もみが定番とされ別に付けられた。これは、今井西町内が作り、胡瓜とカニカマの酢の物に真っ赤なサクラエビが振りかけられたものである。

今井西の人々は、熊野神社脇殿に控えて、直会の手伝いをしている。女性達もいるが、彼女らは拝殿には決して足を踏み入れない。この座が八ツ撥関連であることを伝えている。八ツ撥行事の難しさの一つに、稚児の食事や普段の世話は男性しかできないことが挙げられる。子供が少ないこともあるが、これが現代の生活では難しく、八ツ撥が実施できないことの一因ともなっている。

一時間ほどで、三献の手打ちがあり花見の座の直会は終わった。来賓達が退席すると、すぐに八ツ撥人形、花笠が拝殿から今井西公民館へ運び出された。花笠は青年団二人の竹竿に吊り下げられてゆく。このとき天秤の片棒を担いでいたのは、近年最後の八ツ撥経験者であった。この座にいた前今井西区長も昭和二五（一九五〇）年の経験者であった。

熊野神社は中央の拝殿の左右に脇殿を持つ構造の社である。かつては熊野権現と呼ばれており、熊野修験に影響を受けていたと思われる。向かって左側脇殿が今井西の脇殿、右側が今井東の脇殿である。この神社の脇殿下に山車の部材が保管されていることは、山車建てで述べた。　現在では山車を出さなくなった今井東の山車の部材は、この右側の脇殿に今もある。高欄は「二十四孝図」で、しっかりした彫刻が飾られている。四本柱の向拝柱、破風なども残っている。これを見ると、今井西と反対の配色になっている。赤地に黒の縁取りの漆である。陰陽になるのは、西が月を表すのに対して、東は太陽だとされている。八ツ撥はどちらも男児が務めるが、西が女形稚児、東が男形稚児、という違いがある。山車の車輪は、西が埋設している祓川の東側に今も埋まっている。

この日、今井東公民館には「天照皇大神宮」の掛け軸が床の間に掛けられていた。今井西公民館には「須佐之男命」が掛けられていることを考えると、山車は西と東で一対ということであろう。

一一　元永山笠舁き　七月二九日　須佐神社前広場

元永山笠は七月二四日には飾り付けは完成していた。みやこ町柳瀬区から寄贈された祇園の木瓜紋の入った胴幕、三階菱紋の入った水引幕を張り、屋根の上のオオヤンボの両脇に須佐神社と太祖大神社の幟が、左右には四本ずつの奉納幟が立っていた。前後の輿木には小丸太六本が左右を繋ぐように取付けられている。元永山笠は舁き山なので、大人数で担ぐための棒である。正面破風の上には日の丸が交差して立てられ、上には御幣一本が飾られる。屋根の四方にも御幣がそれぞれ立てられている。破風下には三階菱紋下に元永山笠と記した提灯一張、左右に三階菱紋入りの提灯二張が下がる。

一七時から元永山笠振興会会長宅横で直会が行われた。テントが張られ、元永山笠の復興に尽力した各地祭礼の関係者が集った。みやこ町犀川生立（さいがわおいたつ）・柳瀬（やなせ）、田川市白鳥（しらとり）、同下伊田（しもいた）、香春（かわら）町、苅田（かんだ）町馬場（ばば）・提（ひしゃげ）・与原（よばる）・立志会・本町（もとまち）・中町（なかまち）などである。犀川柳瀬は、元永や今元から山笠の舁き手を雇っていた。苅田町については、直接元永と縁があるのは馬場区であるが、山笠振興会に参加を一任しているため、たくさんの町内から参加がある。白鳥は神輿会の人々が来ている。白鳥は飯塚山笠と博多山笠土居流に参加している。今井西町青年団も参加する。元永祇園山笠振興会副会長の挨拶があり、続いて行橋市長、福岡県議が挨拶した。

一二〇名の招待者だったが、これは五トンの山笠を担ぐために必要な人員の数であるという。

一八時、参加者が元永山笠の前で記念撮影をして、山笠を舁く。元永山笠はヤマカサと濁らずに発音する。山笠には太鼓と鉦二つが取り付けられ、その囃子の合図で「山舁き」を始める。

輿木に付けた小丸太に一〇人が入る。前六〇人、後六〇人、ちょうど一二〇人の舁き手が入っている。これには行橋市長も参加していた。最初なかなか上がらなかったが、何度か試すうちに、ふっと舁き上がった。歩調を合わせて山笠の方向を変えて舁き上げて降ろした。元永地区の須佐神社参道には現在電線が張り巡らされており、沿道を舁くことができない。元永山笠振興会会長は通りの電柱埋設の請願を続けており、いつか往時のように通りで山舁きをしたいと熱く語る。「元永山笠は手永で舁く」とされ、今井津須佐神社の氏子圏の人々で担いできた。山舁きが終わるとすぐに元永山笠は解かれる。三〇日には、ほぼ部材を仕舞うだけになる。

この日の夜は、今井津須佐神社の「夜祇園」と言われ、周辺からの多くの参拝者と多彩な露店が出て賑わう。「祇園さんの飴」を買うのが楽しみだったと伝える人もいる。二種類あり、ひとつは米粉で作った白い飴が糠に入ったものと、もう一つはべっこう飴のようなものにピーナッツが入ったものだったと言う。

一二　車上連歌　七月二九日　今井西公民館前

今井西青年団は、元永山笠の山舁きから戻り、車上連歌の準備をする。この日は花見の座、元永山舁き、そして車上連歌と忙しい。午前中に、提灯山車巡行のときより更に上に二段の水引幕が張られ、幕三面の中央部に柄鏡を下げる。上段の幕は六頭の子孫である辻家から寄贈されたものである。正面には日の丸二本が交差して立てられ、向拝柱の向かって右に浄喜寺の「上に下り藤」紋が入った提灯、左に三階菱紋に「錦齢会」という文字の入った提灯が下げられる。「錦齢会」とは今井西区の敬老会年寄組の名称である。かつては、「福島家」の提灯を下げていたが、福島家が連歌奉納を辞退したことに伴なって、「錦齢会」が担当することになり、提灯も変更された。御神燈の灯籠を前後に取り付けて、輿木に車上連歌用に明かりを準備する。山車の前には縁台が置かれる。公民館内では、宗匠を務める須佐神社神職と執筆を務める今井西祇園会会長が車上連歌の進め方と、どこまで歌を詠むかを検討する。

今井祇園のとき青年団の男女の独身者は、この夜は鼻筋に白いドーランで線を描くことが慣わしになっている。夜祇園もこの姿で回る。二〇時、鉦を合図に山車の前高欄枠内に向かって左に宗匠、右手に執筆が上がり、御神酒をいただき着座する。執筆はかつては福島家当主が務めた。墨衣姿の浄喜寺副住職が浄喜寺家紋入り弓張提灯を手に山車の前にやってくる。提灯を掲げて、山車に向かい「お連歌を」と声高に呼びかける。これが車上連歌の始まりの合図となる。車上連歌は特定の座がなく、路上にいる誰でも自由に参加することができ、笠置連歌とも呼ばれる。この日は、連歌巧者だけではなく、浴衣・着物姿の男女七名、一般、今井西青年団、調査者一名も参加した。

一同はまず、山車の前から東に向かって、二礼二拍一礼で今井津須佐神社を遥拝する。山車の上から執筆により浄喜寺連歌が朗詠披露され、九句目の春花「旅半ば花の筵のそこかしこ」に続ける初折裏の一〇句目の月から詠み始めて一四句で挙句とすることが宗匠から宣言され、連歌が始まる。部立の式目の制約は一切なく、自由に五句紡げば挙句ということである。路上の浴衣姿の女性から山車に向かって「月の鏡のかすむふるさと」と歌が挙がる、それを受けて「組紐を媼のみ手の撚りにけり」と女性が歌う。宗匠は連歌の最後なので、「縁起のいい明るい歌を」と連歌衆を導く。いくつも歌が出るが、宗匠により式目の障りがあるとの指摘でなかなか採用されない。青年団の「この学び舎に降り積もる雪」を受けて「長き坂ちさき足跡続きおり」、そして最後の句となる。「将来の明るい希望の見える句を挙句としたい」と宗匠が宣言する。それを受けて「豊国を寿ぐ清き玉水」という調査者の歌が採用された。誰でも奉納できるという車上連歌ならではのことであった。この車上連歌も作者名は残らない。須佐神社に向かって執筆が車上連歌を朗詠し奉納、参加者全員で二礼二拍一礼の遥拝を行った。

二一時、終わりの挨拶と同時に、山車の鉦太鼓が打ち鳴らされ、町内に奉納が終了したことを知らせ、車上連歌はこれで終了した。

青年団はすぐに山車から鉦太鼓、御神燈を降ろして公民館に仕舞う。車上連歌に参加した人々が公民館に集い、祇園会会長のお礼の挨拶に続いて直会となった。

一三　今井西町花見の座　七月三〇日　今井西公民館

正午、今井西公民館に西町の人々が集まり、花見の座を開く。本来は八ツ撥を今井津須佐神社に奉納する直前に開かれる宴で、八ツ撥を花笠の下に据えての西町の人々との直会であった。現在は花笠の下に八ツ撥人形を据えて、準備された料理を楽しむ。この日の座には、町内の人たちだけが参加することができる。

まず、床の間に祀られた「須佐之男命」の神号に対して、須佐神社宮司による祭典がある。神事は大祓の祝詞から始まり、神号、玉串、八ツ撥人形、町内の人々を修祓する。祝詞奏上に続いて区長、祇園会会長、青年団長、主願が玉串奉奠をした。座一同に御神酒が廻り、区長による花見の座の挨拶に続いて直会となった。一時間程した後、祇園会会長が閉宴の挨拶に続けて、飾り山車曳きの案内をした。

この今井西町内の花見の座の他に、かつては「子供の座」と呼ばれる子ども達だけの花見の座もあった。

一四　飾り山車曳き　七月三〇日　今井西公民館前

一三時五〇分、山車の上で「人寄せ」の鉦が鳴り、一四時胴幕、水引幕、手鏡で飾り付けられた山車から曳き綱が東に延ばされる。提灯はすべて外され、前高欄には太鼓とともに、金地に日の丸の扇を手にした、八ツ撥人形が上がっている。法被姿に豆絞りの鉢巻をした曳き子たちが綱に着く。人員の配置は公民館で行われた。古の縁から、大分県玖珠郡九重町下旦から青壮年団、子ども達二〇名が今井西にやってきて山車曳きに参加。下旦青壮年団二人に前の梶縄に着くように指示があった。九重町下旦八雲神社でも祇園があり、日田系の山鉾と呼ぶ人形山車が出る。現在、下旦祇園は九重町の無形民俗文化財になっている。下旦祇園の子ども・女性たちは前の梶縄近くの曳き綱に着いた。梶取は八人、下旦青壮年団とともに今井西の青年団が担当した。

飾り山車の車輪の心棒に主願が水を掛ける。山車は提灯山曳きと同じであるが、日中なので、参加者も多い。太鼓は囃子衆の総帥が務め、鉦の打ち手は太鼓に従って打つ。鉦太鼓の囃子に合わせてヨイショの掛け声で一気に山車が動き出す。動き出すと鉦太鼓が連打される。夜の提灯山車曳きに比べると見通しもよく、動き出しも軽やかである。沿道から力水も浴びせられる。

途中、祇園会会長が「山が言うことをきかん」と言い、わざと山を止めて何度も左右の曳き綱を持ち上げて中央に寄せて激しくぶつけ合う。これは山が動かないわけではなく、曳き手が山車曳きを楽しむ手段である。大きな山車は軽快に動くことはできないが、昔は曳いている途中に不意に輪止めを入れて急ブレーキをかけて山を止めたりした。これもスリルがあり楽しかったと伝えている。今は心棒が痩せてきて、これはできなくなった。曳き綱を打ち合うことで飾り山車曳きのクライマックスともなっている。再び東へ曳く。提灯山車曳きと同じだ。町境には、電線が道路を横切っており、これ以上山車は進めない。そこまでの区間の電線を取るようにした今井西の努力でこの行事が続いてきたことになる。一五時二〇分には、山車を納めて三献の手打ちが行われ、子ども会の二人が音頭をとり、会長が締めた。一五時三〇分から青年団と主願たちは、幕・幟・鏡などを仕舞い、ロープを解いて片づけていく。並行して会長と青年団長は下旦祇園の面々と今井津須佐神社へ向かい、祇園会会長が、芯花を須佐神社社務所へ奉納した。神職によって、芯花は須佐神社神前に供えられた。事務所に戻り、会長、区長から挨拶があり、副会長の音頭で乾杯があり直会となった。下旦祇園は来年も来ることを約束してマイクロバスでその場を後にした。本来ならこの行事は、八ツ撥奉納と一連のものであった。

一五　山車崩し　輪納め　注連下し　七月三一日　今井西公民館前

祓川　今井西町

八時より、山車崩しがある。クレーンを使って山車の部材を降ろしていく。昼食の後、一三時より、綱や向拝や破風などの部材は倉庫へ仕舞い、輿木・オオヤンボ・コヤンボが熊野神社脇殿下に戻された。脇殿からはみ出た輿木にはトタンの覆いをかける。残った端縄は周辺の農家が使うとのことで事務所に残され、後で回収されることになっていた。オオヤンボ・コヤンボを降ろすときは、下から抜き取るので、クレーンを使わない。

一三時五四分、車輪がクレーンでトラックに積み込まれる。クレーンが祓川へ移動する。事務所前の寄付掲示板が片づけられ部材は倉庫へ運ばれた。

一四時半、クレーンで一輪ずつ穴に埋けていく。心棒も脇に埋ける。四輪とも入れ終わると青年団長がしゃがんで二礼二拍し、少し長く祈り、来年も実施できることを願う。そのとき「大人たちの夏休みが終わった」と呟いた。例年ならこの時に、わざと誰かを川に落としたりして楽しむのだが、この日は静かな祭りの終わりであった。この後、小型の重機で輪と心棒に土を掛けて埋設する。青年団は事務所に戻り、注連下しにかかる。

主願たちは、中須橋など周辺の今井西管轄分の注連を外している。青年団は金屋との境の道路上に張られた注連を、電柱に登って下ろす。

続いて公民館入口に掛けられた「今井西祇園会事務所」と記された看板と「祇園係　西祇園会」の提灯を取り外し仕舞う。最後に今井西公民館の注連を外す。

一九時から事務所仕舞いがある。今井津須佐神社宮司による神事に続き納会の直会となる。これで正式に祇園のための事務所が閉じられる。

一六　花配り　会計監査　町内会計報告

八月二〇日一〇時から、寄付の返礼を持って主願が手永を廻る「花配り」をする。花笠の花と豆絞りの手拭を一軒一軒配る。八月二七日一六時から、町内会長・会長・会計により会計監査を行い、結果を八月二七日に町内会計報告を行い、今井「廿日祇園」の全ての行事を終了する。

（福間　裕爾）

生立八幡神社山笠

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　生立八幡神社山笠

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和三七（一九六二）年二月二〇日）

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【別名】犀川神事　生立八幡宮神幸祭

【地域の概要】

生立八幡神社の信仰圏は、大村、山鹿、古川、下高屋、木山、大熊、久富、花熊、谷口、本庄、続命院、崎山、八ツ溝、末江、彦徳の一六村で、これらの大字は長井手永に属していた。手永は小倉藩の村落支配単位である。長井手永の大庄屋は大村の永井家が務めていた。明治二二（一八八九）年の町村制施行で彦徳が豊津町となり、他の一五村は東、西、南犀川村となった。昭和一八（一九四三）年に、東西南が統合されて犀川町となり、平成一八（二〇〇六）年に豊津町、勝山町との対等合併でみやこ町となっている。

【伝承地もしくは実施場所】

福岡県京都郡みやこ町犀川生立七番地　生立八幡神社（生立八幡宮）

【実施時期】

明治以前は、「八朔神幸」と呼ばれ旧暦八月一日の祭礼だった。改暦で五月一一日例祭になり、現在では五月第二日曜日までの三日間、生立八幡神社夏季大祭で山笠が奉納されている。

【伝承組織】

生立八幡神社・同氏子会・各山笠奉納区（続命院・山鹿・柳瀬・古川・上本庄・大熊・木山・谷口）行政単位の区が伝承組織。各区は御旅所の宿直、神輿舁きなどを輪番で受け持ち、山笠の奉納を分担する。「立屋敷神事」、稚児、大幣持ちだけは、大村区が受け持つことになっている。

【由来・伝承】

神幸祭の起源は治暦三（一〇六七）年とされるが、当初から山笠を伴うものであったかは不詳。江戸時代中期に、風止め祈願、厄除け、作頼みなど豊作を祈願する八朔節供の神幸行事に山笠が供奉。当初の山笠は榊を乗せた「柴山」だったとされている。

【実施内容】

一　お籤とり　四月上旬

神輿が行幸する大村区立屋敷神事の御座（座元）、御手男（御座を補助し、神事・もてなしの準備に携わる者）二名、稚児、大幣持ちを定める「お籤とり」から祭礼行事が始まる。

上本庄区では、お潮井とり、汐かき、山笠作りなどの諸役が籤引きで決められているが、それを「祇園座」と呼んでいる。

二　山笠準備「竹取り　蔓取り　花切り　綱打ち」四月中

蔓は、山笠の腰木に渡して曳き綱を支える「綱持たせ」、台各部の締め付けなどに使う。五色の紙を切り竹ひごに付けたヤナギと呼ばれる飾り物「花」を作る。曳き綱は数年に一度打ち、各家から供出された端縄一カタ（六〇尋）から三三本の三撚りしたものである。曳き綱は担がれてお潮井とりをして練り歩き、民家の庭にとぐろを巻いて御神酒を振舞われる。曳き綱は夜隠されてそれを役員が探し出すという儀礼が行われる。

三　注連卸し　五月祭礼の前日

立屋敷御仮屋の周囲、立屋敷鳥居前、大木戸鳥居前、水神場の榎、誉田皇子御手触之石に注連を張る「注連卸し」をする。一六時から生立八幡神社神職が地面に座して、立屋敷、大木戸、水神場の順で祭典が行われる。舗装される前までは、大村区の永井家（大庄屋）から立屋敷御仮屋まで砂を敷いた。

四　お潮井とり　五月一二日　生立八幡神社前の今川

山笠はジンジヤマあるいはヤマと呼ばれ、曳き山と舁き山の二種ある。曳き山は「親車」と呼ばれ、続命院と山鹿から出る。組み立ては現在では生立八幡神社前の馬場（神事河原）で行われるが、かつてはそれぞれの集落で行い、祭礼の日に馬場まで来ていた。山笠には、造り物と榊を取り付ける大ダシ、小ダシと呼ばれる一四～一五メートルの棒を二本立てる。先端部には鳥毛という飾りが付く。山笠の重量は四トン。続命院の四本柱は、上にいくほど間隔が開く形式で、今井祇園の山車と同じである。今井から伝わったとされているが、今井の方では中須の山車を続命院に譲ったと伝えている。続命院の大ダシには「生立八幡宮本車」神額、山鹿の小ダシには紙花の「輪違い」、サイコロや将棋の駒を象ったサイコマの飾りが付く。紙花の飾りは大ヤナギ、小ヤナギ、旗状の飾りはフンドシと呼ばれる。竿の突端に付ける馬印（扇、軍配、太鼓）など飾りは各区で少しずつ異なる。木山区と谷口区の舁き山では屋根の四隅に「八つ旗」という白い晒木綿を腰木まで垂らすが、神社の対岸の区は今川を渡る「川渡り」をして馬場に参集するのに対し、木山と谷口は川渡りをしない。そのための飾りと説明されている。各山笠には中央には榊の大枝を立て、神社名の青幟二本をダシに飾り、屋根には赤い幟旗を左右で三〇本立てる。この旗差しの幟はかつては数本飾る程度だった。

山笠は、続命院、山鹿、そして舁き山が続くが山の順番に関しては時代により変動があり一定していない。令和五（二〇二三）年は、舁き山のうち柳瀬区、古川区の山笠が諸事情のために出ず、全部で六基となった。

山笠が組み上がると「ひい」と呼ぶ御幣と榊を持って今川に行き、川水を手桶に汲み川潮井をとる。本来は山笠を川に持っていき台を清めた。それを「汐かき」と言った。各区それぞれ今川水系の小川にお潮井とり場があったが、今は神社橋下の今川で行われている。その場に御幣を立てる区もある。昔は五月九日未明に、各区とも行橋市沓尾の姥ケ懐までゆき、潮井筒に海水と藻をとって八時に戻っていた。現在では上本庄区だけがこの行事を続けている。

一七時頃、神輿のお潮井とり。三台の神輿が今川の堤防までゆきそこで待機、潮井を待ってから神社に戻る。かつては神輿が今川に入っていた。

各区の舁き山は、潮井が来ると台の四方にかけ、正面の鉦にむけて振りかける。鉦が打たれ、舁き手たちは「やー」の掛け声で腰木を担ぐようにして細かく上下に揺する動作をする。終わるとすぐに鉦を下す。かつて山笠を川に担いでいき、お潮井とりをしていたときの名残という。お潮井手桶は台下に結び付けられる。

五　神幸祭　お下り　山笠巡行　五月一三日土曜日

各山笠は、台組みの外側に竹を立て小縄を縦横に組み、小倉藩の三階菱紋入りの胴幕、刺繍入りの水引幕などを複数巻き、正面に日の丸を飾る。神社鳥居に向かって左側に続命院、山鹿の親車が並び、上本庄、大隈、木山、谷口の曳き山が続く。平年なら上本庄の前に、柳瀬、古川の舁き山が並ぶ。

一五時、神幸行列の人々が裃姿で拝殿に昇殿して本宮発輿祭が始まる。本殿、拝殿、神輿、神幸祭関係者を修祓、神輿に向かって祝詞を奏上する。神輿が神社を出て、大村区の立屋敷仮屋（御旅所）へ神幸する。供奉する稚児と大幣持ちとは、大村区大庄屋又は江戸期に苗字帯刀を許された家の三歳～五歳の男児を神職の「お籤とり」で選ぶ。選ばれた家は「とおりもんがおりた」と喜ぶ。御旅所での神事で、男手のみで作られる八一個の小餅を杉の葉で包んだ「杉餅」と呼ばれる

特殊神饌が供えられる。

一五時にお下りが始まると、山笠は腰木を御神酒で清め、続命院から動き始める。かつては大村区の御旅所まで神輿に供奉したが、現在は馬場の御旅所までの近距離を移動する。巡行では、山車責任者、お潮祓い、木遣り、打鉦、太鼓、前梶、後梶等の役がある。山笠の操舵は、腰木の梶縄でする。前の左右に三本ずつ、後ろに二本ずつ結んだ藁縄にぶら下がるようにして方向を変える。親車の径一・五メートルある四輪には左右に「れんが綱」と呼ばれる縄を束ねたもので心棒を覆い結ぶ。直径一五センチメートル、長さ二〇メートルのもの二本を一本に束ねた曳き綱で曳く。

舁き山の腰木は、大丸太二本が前後に貫き、その下に小丸太を横に取り付けて舁き手が一つの小丸太に九人が入り、百人以上で担いで御旅所へ進む。すべての山笠が馬場の御旅所前に集合すると、各山笠は「一本締め」でこの日の巡行を終える。

木遣りの音頭に合わせて、トーリャの掛け声に呼応するように、二つの鉦、太鼓が打たれ山笠が動く。鉦打ちは代々決まった家柄が務め、「人寄せ」、「きゃり」、「引立て」、「引出し」などがあるが、各区で流儀は異なる。

神幸行列が馬場のお旅所に戻ると、一七時半頃から神輿三台が据えられ御旅所着輿祭が行われる。この後神社拝殿で行われる予定だった夜神楽は、大雨のため中止された。神幸の一行はこの日は御旅所に宿直する。馬場は夜店が並び夜まで賑わう。かつては「犀川の夜市」と呼ばれて近隣からたくさんの人々が集った。

六　神幸祭　お上り　山笠巡行　五月一四日

一五時、御旅所発輿祭があり、神幸行列は浮き殿へと移動する。その間に山笠は元の位置に戻る。一八時、神幸行列が神社へ戻ると、本宮着輿祭があり、三台の神輿から神霊が神社に戻り神幸祭は終了し、その後、山笠は解体されて倉庫に仕舞われる。

（福間　裕爾）

風治八幡宮川渡り神幸祭

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　風治八幡神社川渡神幸行事

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和二九（一九五四）年一二月一三日）

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【別名】伊田の御神幸

【地域の概要】

風治八幡神社の氏子は、藩政期は上伊田村・中伊田村・下伊田村であった。明治二〇（一八八七）年に三村が伊田村となり、上伊田・下伊田・中伊田・番田・鉄砲町の五つの区が設置された。五区が輪番で、山笠や獅子舞の奉納を分担してきた。三井田川鉱業所伊田坑開削に伴う人口増加により、大正三（一九一四）年に伊田町、昭和一八（一九四三）年に後藤寺町との合併で田川市となった。

明治初頭までは上伊田、中伊田、下伊田の山笠だけが彦山川を渡っていた。お下りでは、一番は上伊田、二番は中伊田、三番が下伊田、お上りのときは、下伊田が一番となり、中伊田、上伊田が続いた。明治末年には下伊田・鉄砲町・番田・中伊田から一本ずつ山笠を出し、上伊田が獅子舞を担当した。大正以降、町部の新設区が踊り山を建てた。踊り山は引き台とも呼ばれ、幟山に着いて川渡りしていたが、踊り山を改造して幟山とする区も現れ本数が増え、一三基の幟山が出るようになった。その後、炭鉱閉山で四本にまで減少したが、現在は一一基の山笠が出ている。

【伝承地もしくは実施場所】

福岡県田川市伊田　風治八幡神社　御旅所　彦山川

【実施時期】五月第三土曜日、日曜日

【伝承組織】

伊田区長会、風治八幡神社奉賛会、敬神婦人会、川渡り青年会友志会、神輿をかつぐ会、田川商業連合会、山笠当番区（一番下伊田、二番下魚町、三番鉄砲町、四番新町、五番川端町、六番番田、七番栄町、八番大通り、九番橘、一〇番三井伊田、一一番上伊田東）

【由来・伝承】

永禄年間、伊田村で疱瘡流行時に、風治八幡神社境内の祇園社に終息を祈り、願成就の万年願の神幸祭に始まると伝えられる。

陰暦三月一五、一六日が祭日だったが、明治末年に陽暦五月一七、一八日に変わった。昭和初期まで六月一四、一五日、戦後に三井田川鉱業所の給料日に合わせて五月一六、一七日に変更された。現在は五月の第三土曜日、日曜日の両日が祭日である。

【実施内容】本報告は令和五（二〇二三）年の一番山下伊田を中心に行う。

一　神幸祭準備　四月注連おろし　五郎瀬祭り　蔓取り

四月一日の注連おろしで鳥居に新しい注連縄が掛けられ、区総代による当番地区の確認と祭礼までの日程の打ち合わせがある。四月下旬に彦山川の堰で「五郎瀬祭」という川祭りがある。五月になると各区が山や囃子の準備に入る。

以前は、「蔓取り」と「綱打ち」を行っていた。山の各部を締める藤蔓を山に取りにゆき、各戸から引き縄の材料として藁縄を集めた。山の組み立て後に彦山川に潮井（水と川砂）を取りにゆく。平成七年頃から下伊田区の青年部は、四月最後の日曜日の朝、彦山川上流の深倉峡と行橋市簑島海岸（長井の浜）まで潮井を取りにゆくようになっ

た。山笠を触る前には、必ず潮井で清める。

幟山（のぼりやま）は四輪の曳き山である。屋根の中央にサシと呼ぶ六～八メートルの柱を立てる。先端に御幣と三輪があり、中段に玉袋と呼ばれる杉の葉を飾った竹籠を付ける。竹に色紙の短冊を貼ったものを挿して花のように広げ、これはバレンと呼ばれる。かつては大ザシ・小ザシと呼ばれる二本の柱を立て、各区で一〇メートルを越えて高さを競っていたが、電灯線の架設により小ザシ一本のみとなり、高さ一三メートルに統一された。飾り方は各区で異なるが、屋根に一〇本ほどの緋幟旗（ゴロフ地）を立てる。

二　町内巡行　神幸祭　お下り　五月二〇日

下伊田の山笠は、八時から町内巡行を始める。祝儀を受けた家々に山笠で門付けしてガブリ（舁き棒に肩を入れて山笠を前後に揺すること）をしてお礼していく。

一〇時、区長の挨拶、青年部他の紹介、「三三四拍子の打込み」で、下伊田町内を出て風治八幡神社へ向かう。子ども達が「道中囃子」を演奏する。下伊田には鉦・太鼓は笛と一緒に叩いたとされる京囃子があったが失伝したため、今井祇園（今井津須佐神社）に出向き囃子を学んで、平成一四（二〇〇二）年に復元されたものが笛の道中囃子である。これを機に、女人禁制を解いて女児の笛奏者を山笠に乗せるようした。風治八幡の神は女性とされ、山笠には女性は参加できなかった。この道中囃子の掛け声はオッショイである。明治大正期に山笠を下伊田と共同で巡行させた鉄炮町にも道中囃子がある。

風治八幡神社下の県道四一号南大通りの待機位置に、一番山笠から順に入る。一二時、各山笠区の区長や役員たちが神社拝殿に昇殿して神幸祭の神事が始まる。一三時二〇分、一番山から順に大勢でサスマタを支えて屋根に小ザシを立て、一六〇本束ねていたバレンを開く。各区ともこれには趣向を凝らし、五番山川端町は開くと仕込まれた風船が空に舞い上がった。下伊田では、白幟（風治八幡宮、天下泰平）二本、六メートルのバレン一六〇本を囲むように緋幟旗二四本を円形に配置する。台を飾る幕は西陣織である。

一四時、神幸祭お下りが始まる。境内での獅子舞奉納後、風治八幡神社と白鳥神社の神輿二基が一番山の前で神輿振りを繰り返し彦山川へ向かうと、「風治八幡宮前」交差点で一番山からガブリや大回しを披露して神輿に続いて彦山川に入る。山同士が水を掛け合い、ドライアイスの煙、紙吹雪、餅撒きなど、各町とも趣向を凝らした演出であった。棒先に青年たちが乗ったまま、激しくガブルところもある。鉦太鼓の乱打で山を前後に傾けて揺らすガブリを続ける。鉦を木槌二本で乱打する囃子はダブリと呼ばれる。鉦の数は町によって数・大きさとも異なる。叩き方は鉦の外側を叩くが、大分県中津から伝わった豊前囃子とされる六番番田だけは鉦の内側を叩く。各区の山笠は川の中で記念撮影をして、一六時四〇分、上伊田青年部長の合図で一一基の山笠が川の中央で整列して、一斉にガブル青年部有志による競演会が始まる。二時間ほどで川から上がる。御旅所は風治八幡神社から見ると彦山川を渡った対岸にある。当初、御旅所は対岸ではなく社地から東の川原にあった。明治初めまでは、対岸の下伊田・鉄砲町の山が彦山川を渡ってくるのを、中伊田・番田の山が川の中で出迎え揃って神社まで行き、それからお下りになった。明治二八（一八九五）年に豊州鉄道が開通し、御旅所が彦山川対岸に移ったことに伴い、神輿と山が揃って川を渡るようになり「川渡り神幸祭」と称されるようになった。

一七時、御旅所鳥居前で神輿を待つ間、上伊田はガブリを続ける。神輿が御旅所である武徳殿に入ると、上伊田は区長の挨拶と青年部長が台に上がり三三四拍子の手打ちでこの日の行事を終えた。一一基の山笠は御旅所鳥居前に向かって左に一番下伊田を筆頭に、奇数山が横に並ぶ。右に二番下魚町から偶数山が並んで停車し、提灯を飾り付けて一晩を過ごす。

三　神幸祭　お上り　五月二一日

一一時三〇分、上伊田は御旅所の山笠の前で記念撮影をする。区長役員挨拶に続き、青年部長が音頭をとりワッショイの唱和、三三四

拍子の手打ちでお上りを始める。御旅所での獅子舞奉納に続き、神輿を先頭に一一番山から順に川に入りガブル。一番山が最後に彦山川に入った。下伊田は還暦を迎えた人に赤法被を着せ、台に乗せて祝う。川の中で新町と下伊田の山笠が互いに表の棒を上げて対峙し、棒先に青年が乗りワッショイを連呼して激しくガブル。三三四拍子の手打ちをして両山笠は分かれた。

一五時四三分、一〇番三井伊田が神社下に戻ってきた。それに続き各山笠は南大通り神社下でバレンを倒して、それぞれの町へ戻る。神輿は神社に戻り還御の神事がある。一一番伊田東は神社下に戻らずに橋の上でバレンを倒してそのまま町へ戻った。一七時半、二番下魚町は町内でバレンを倒した後、曳き手だけが神社下に来て神社を遥拝した。一七時四〇分、一番山下伊田が神社下に戻り、ここでバレンを倒し紅白の提灯を山笠に取り付けていく。

一八時、下伊田山笠は提灯を灯して神社下を出発して山笠格納庫へ帰る。神社から一番遠い町が下伊田区である。一番遠い町が一番山を勤めたとも伝えている。格納庫は「五郎瀬」のそばにある。道中囃子を奏でて戻っていく。

一九時三〇分、格納庫に到着。道中囃子を奏でながら前棒だけを上げるように優しく最後のガブリをする。区長ほかの挨拶があり三三四拍子の手打ちで川渡り行事は終了した。二〇時、山笠からサシを降ろして収納。バレンは区長が町内の組内戸数分に鋸で切断して丸く輪にしていく。バレンは各家で玄関に飾られて魔除けとなる。格納庫に山笠を納めて、行事は終了となる。

（福間　裕爾）

苅田山笠

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　苅田山笠

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和四八（一九七三）年四月一九日）

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【別名】　苅田神事　宇原神社神幸祭

【地域の概要】

山笠は旧村の与原上、与原下、尾倉、集、南原、馬場、濱、港、提、長畑、上町、中町、本町、西町、雨窪の一五区から出す。

【伝承地もしくは実施場所】

福岡県京都郡苅田町一帯　宇原神社　苅田町役場宇原神社浮殿　JR苅田駅前

【実施時期】

かつては旧暦八月一四日～一五日に行われていた。昭和三（一九六四）年に一〇月一日、二日と変わり、その後大祭は一〇月第一日曜日として、各行事をそれに合わせて二週間行うようになった。令和四（二〇二二）年は九月一八日～一〇月二日にかけて行われた。

【伝承組織】

苅田山笠保存振興会、苅田山笠青年会、苅田町一五区、各区が順番で当場を決めて運営する。山笠はすべて宇原神社の氏子が出す。かつて旧一〇村から九基出ていた。堤と長畑が二町で一つの山笠を出した。現在は新しい五区が加わり、山笠も各区から出て一四基になった。

【由来・伝承】

嘉吉二（一四四二）年、宇原神社の神幸に各村から傘鉾を出した。慶長二（一五九七）年の八月一五日の放生会に村々から出した鉾山が苅田山笠の始まりとされている。

【実施内容】

一　鉦卸し　汐かき　九月一八日

○時過ぎに山笠関係者が、大幣を先頭に提灯を持ち、鉦を叩いて苅田の漁港や各区の川尻に行き、鉦を海水で清める。ヨシ（葦）を刈って海水に浸し、汐井（海水）を竹筒に汲んで、宇原神社へ詣でて、社殿を三回右回りにめぐり、葦を神前に奉納する。各区一張りの提灯を神社に残して帰る。汐井を撒いて神社を清め、区に戻って山笠を清める。令和四（二〇二二）年は、台風一四号の影響で九時から実施された。

二　山笠台の組み立て

当場（当番）が山笠格納庫から山笠の部材を取り出して台を組み立てる。台枠に径六〇～八〇センチメートルの木輪四輪を付け、一二～一五メートルの舁き棒を大綱で締め付ける。山笠の正面は「前」「前山」、背面は「後ろ」、舁き棒の先端は「鼻」と称する。後ろを「見送り」と呼ぶ区もある。

三　連歌奉納　九月二二日

氏子会による奉納行事。旧八月八日に徹夜して連歌を詠んでいた。現在の行事は、先代宮司が戦後に考案した、下の句を決めておき上の句を継いで歌を完成する形式である。本式の連歌は難しいとの判断で始められた。一〇時に拝殿で祭典が始まり、続いて連歌奉納の儀になる。宗匠が神前で詠じて奉納する。宗匠が「全三六首奉る」と言い、奉納連歌が記された帳面を神前の案に備えて奉納を終える。

四　灯山（ひやま）巡行　九月二四日

苅田山笠は曳き山だが、七〇年程前までは舁き山であったとされる。三度姿を変えるのが苅田山笠の特徴であり、最初の姿は二二〇個の提灯を飾った灯山である。例年ならすべての山笠がＪＲ苅田駅前に集合するが、令和四（二〇二二）年は、新型コロナウイルス感染症予防のため、参加する山笠を役場広場とＪＲ苅田駅前に半数ずつに分けた。

各町の山笠は格納庫から、鉦と太鼓の囃子で参集場所へ向かう。鉦の数は各区で異なる。山笠は二〇時半に、駅前に集合した。道中は鉦太鼓のゆっくりした「緩行」という囃子でやってくる。駅広場前の交差点では、鉦太鼓の調子が変わり乱打されて、各山笠が山笠の舁き棒の前後を揺すり、前棒あるいは後棒だけを上げたまま、大回転するなどの技を観衆に披露する。山笠の運行は「山笠運行責任者」が負うが、この技を指揮するのは同志会・山笠協賛団体の会長である。広場に六基の山笠が箱型提灯を灯して並ぶ。かつての灯山は一五メートルの高さがあり、小倉からも見えたと伝えている。現在、中町区だけが箱型の上に提灯を一二段掲げている。

町内のみを曳いて廻るところもある。馬場区もその一つである。令和四（二〇二二）年に舁き棒を新調した。突き当ての時は棒が長く太い方が有利になり、各区とも棒を競って長大化している。馬場は桧材から杉芯持材に変えて一二メートルから二メートル長くした。山笠は区の財産であり、責任者は区長が勤める。一七時、区、同志会（外部からの縁故者）、青年部関係者が参集して、舁き棒新調の山笠神事が行われた。宇原神社神職による祭典があり、舁き棒の祓い清めに移る。大祓いの太祝詞を唱えながら、山笠の舁き棒を修祓、塩・御神酒で清めていく。舁き棒に一〇箇所以上ロープを輪掛けして、格納庫から引き出されると提灯のローソクが灯される。

一七時四〇分、格納庫を出発する。子ども達四〇人程が曳き綱について、京町二丁目から一丁目を回り、その後、馬場区町内を巡行して、一九時二〇分に格納庫へ戻った。大正初期までは、馬場区を中心にして苅田は南郷と北郷に分かれ、それぞれが隔日で灯山を出した。最終日を夜市といい、山笠が一箇所に集合して夜店が出て賑わった。

同様に山笠神事を実施する集区は、一七時より山笠の清めを行う。令和四（二〇二二）年は汐かきが中止となり、代わりに事前に清めた葦を「前山」に供えた。神事後、馬場区山笠格納庫に向かい、一八時三〇分に、馬場区の山笠と対峙して鉦の連打で突き棒に軽く突き当てをして、互いに棒を担ぎあげるように揺する。これを「祝儀当て」と言い、突き棒を新調した山車に行う儀式。馬場区は令和四（二〇二二）年は突き当てには参加しないため、集区が馬場区格納庫を訪れてこの日に実施した。祝儀当てを終えると、役場に向けて巡行。一九時頃に役場到着後、山笠を回す「喧嘩山」を何度か行う。回し終えると所定の位置に駐車し、山笠の頂上部分に新たに木製の骨組みを作り、提灯を追加して飾りつける。約三〇分後に他の区も到着。喧嘩山を行ったり、舁き棒の前を上げて動く。令和四（二〇二二）年の参加は三区のみ。二〇時過ぎに各区の山同士で突き当てを開始。集区は前山が傷付かないように、前山を後ろに向けて突き当て。突き当て終了後、各区の山笠格納庫へと帰る。

五　山の汐汲み（汐かき）　幟山巡行　一〇月一日

例祭の前日夕刻に行うが、令和四（二〇二二）年は中止となった。提灯を外した台に、幔幕を張り、魔除けの複数の赤い幟を飾り立てた二つ目の姿、幟山で、ホテ花と五色のスダレを付けて、鉦太鼓を叩いて山笠を海岸や川尻に持って行く（人だけ行く区もある）。海岸で葦を海水につけて山笠台へ投げ込む。汐かきの後、幟山は町を巡行する。区の代表が汐井を持って宇原神社へ行き奉納する。代表が戻ると幟山はそれぞれの区に戻る。

六　神幸祭　集団山見せ　一〇月二日

旧八月一五日に行われていた苅田神事の中心行事、令和四（二〇二二）年は新型コロナウイルス感染症の影響で、神事のみとなり、神幸は中止された。本殿の神輿は御旅所内に設置されたモニターで映し出され

ていた。神輿舁きは、かつては苅田区（西町、本町、中町、上町）に限定されていたが、現在は各区から出している。神幸の途中、磯の上（磯の神）の休憩所で神輿が休憩する。以前は各区の山笠出発順を、この場所で籤引きをして決めていたので、「籤引き場」と呼んでいた。現在の消防本部前である。昔は南北で一番に山笠を巡行する町が決まっていた。南郷では南原、北郷では雨窪が「籤なし」と言い一番に出発し、他は籤引きで決めていた。現在は毎年協議で順番が決められている。

山笠は、集区が最初に出発して磯の上に神輿を迎えにゆき、その先導を勤め宇原神社の旧宮所の浮殿（現苅田町役場前広場）にゆく。なぜ集区が神輿を迎えるのかは諸説ある。一つは、「集」という地名が「神様が多く集まる所」という由来から。もう一つは、宇原神社の祭神は男性である一方、集区の山車の祭神が女性だという説からである。区の「前山」には女性の神様が彫られている。集区のあとに他区の山笠一三基が続く。

神輿に供奉する山笠は「飾り山笠」と言い、苅田山笠三つ目の姿「岩山」である。江戸時代には「鉾山」と呼ばれていた。当場の人々は、真夜中の二時頃から山笠の飾り付けを始める。竹骨に紙を張り付けて岩波を作り、五色のスダレを付け、館に人形数体を飾り付けて、歌舞伎や浄瑠璃の名場面を表現する。人形は岩波とともに直方の人形師から借用していた。人形師廃業後は、その人形を買い取って区で飾るようになった。もともと岩波は区で作るものであるが、人形も青年たちが自作している区もある。

役場庁舎前に本部桟敷が設けられ、そこに山笠保存振興会役員や来賓、警察幹部などが座る。各区の山笠は、舁き棒の片方を持ち上げて、中央で反時計回りに大廻りする喧嘩山をして待機位置に入る。それまで折り畳んでいた岩瘤や、三本のボテ花、スダレを立て岩山の飾りを披露する山笠集団山見せとなる。各区の同志会や山笠協賛団体や舁き手たちは、宇原神社神職が待機する御旅所前に整列して、山笠巡行安全の御祈祷を受ける。山笠の台部分に塩を盛り清める。各区は山笠の車輪を点検して、グリスアップするなど突き当ての準備にかかる。

七　喧嘩神事　山笠の突き当て

例年であれば、御神幸は浮殿御旅所まで神輿が降り、一五時に還御する。令和四（二〇二二）年は中止されたため、神輿還御の時間になると各区の舁き手たちが会場を掃除して、神社にある神輿に敬意を表することになった。

突き当てをする区としない区がある。集区は、木の彫刻を飾った「前山」にあり、突き当てをすると壊れるので喧嘩神事には参加しない。一三時四〇分に各区の、区長・幹事会会長・突き当て担当が集まり、本部席前で会合が行われ、グループごとに時間を決めて、安全に突き当てを行う事が確認され、「一本締め」で終了した。各区の山笠は突き当てに向けて、人形や館、杉壁、欄間彫刻などを取り外し、前山に板を張った。岩瘤、ホテ花、スダレも倒す。棒鼻にさらに金属環を付け足して舁き棒を補強して長くする区もある。山笠には規格があり、どこもほぼ決まった構造だが、突き当てが好きな区は突き棒を若干長く作っている。突き当ては主に役場の駐車場で行われているが、かつては御旅所や道路上でも山笠が出会うと突き当てをした。苅田駅前でも山笠が集まり突き当てを繰り返した。千人以上の観客が集まり、警察の取り締まりが厳しくなり現在の形になった。

かつては、中棒（喧嘩棒）と言い、舁き棒の内側に一二～一五メートルの別の棒を取り付けていた。山笠の喧嘩のための棒である。現在は付けない取り決めになっていたが、この棒を取り付けて突き当てに参加した区があったため揉めた。舁き棒の内側にクワガタの歯が生えたような姿であった。その区は他の区から抗議を受け、喧嘩棒を取り外した。

一四時五〇分、各区の山笠はいくつかのグループに分かれて突き当てを始める。勢いよく二つの山笠が舁き棒を突き当てる。大きな音がして山笠が壊れる。互いの山笠は舁き棒の前を上げて絡み、左右に揺するなどして、離れてはまた当たるを繰り返す。このときの鉦太鼓は、「競り山」と呼ばれる乱打である。運行するときの「緩行」「急行」「停止」と言われる囃子とは異なる。

各グループの突き当ては四〇分程度予定されていたが、各区の山笠ともこの時間では収まらずに、会場を出ようとしては、戻って突き当てをする区もあったが、一七時にはすべてが終了した。

八　山笠解体と当場渡し

山笠は各区が四、五〇世帯を一単位とする「当場」制度で行われており、神幸祭が終わった翌日に当場が山笠を解体して、受け取り帳に部材を記入して翌年の当場に渡す。当場受け取り帳には文政三（一八二〇）年からのものが残っている。このあと慰労会がある。炊き出しなどもこの単位で女性たちが担当する。苅田山笠の行事はこれで全て終了する。

（福間　裕爾）

糸田祇園山笠

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【指定等】

種類　糸田町指定無形民俗文化財

名称　糸田祇園山笠

指定年月日　平成一六（二〇〇四）年二月二七日

【別名】御神幸　春祭

【地域の概要】

糸田町は、福岡県の中央部、田川盆地の北西に位置する面積約八平方キロメートル、人口は一万人弱。遠賀川水系の中元寺川と泌川が町を貫いて北流し、町域を三分している。中元寺川より東、町の東部地域は標高四〇メートルほどの丘陵で、かつて筑豊炭田の繁栄を担った地域。また、中元寺川と泌川に囲まれた中部地域は、標高約三〇メートルの糸田原台地と流域平野からなり、台地上は古くから拓かれ、町の中心部を形成している。泌川の西、西部地域は関の山山地の東に位置して、農業地帯となっている。

江戸期の糸田村は、筑前と豊前の国境に接し、細川・小笠原藩を通して金田手永の八村に属した。安永～天明期（一七七二～一七八九）に糸田村は上糸田、中糸田、下糸田の三箇村に分かれた。明治二〇（一八八七）年、糸田村・大熊村・鼠ケ池村が合併して糸田村となり、明治四〇（一九〇七）年、さらに宮床村が編入。昭和一四（一九四〇）年町村制施行により糸田町となった。

【伝承地もしくは実施場所】田川郡糸田町

【実施時期】

明治中頃までは旧暦六月二〇日、二一日の土用に行われていた。昭和五五（一九八〇）年、祭りに参加する勤務者の都合を考慮して五月第二土・日曜日に変更された。令和五（二〇二三）年は五月一三、一四日に行われた。

【伝承組織】

糸田町行政区（上糸田、中糸田、下糸田、真岡、北、戸石、南糸田、宮川、宮床、大熊）

【由来・伝承】

宝永三（一七〇六）年に疫病が流行り、疫病退散のため今井津（現行橋市）から祇園社を勧請し、宝永五（一七〇八）年に大宮八幡近くの祇園社に、蔓延した疫病の平癒を祈願して糸田祇園山笠は始まったとされている。祇園社（須佐神社）は、現在は金村神社に合祀されている。

江戸時代中期には、上・中・下糸田村三箇村の祭礼となり、村内の辻屋敷への神幸に山笠が供奉した。辻屋敷付近の御旅所（鳥居に「祇園社」の扁額がある）に、現在でも一晩神輿が宿直している。

糸田村の山笠は舁き山であったといい、嘉永七（一八五四）年の文書には「居人形山」という記載がある。その頃は、山笠が毎年建つことはなく、隔年か二年に一度であった。明治以降に、毎年建つ年中行事となった。昭和七（一九三二）年までは三丈（約九メートル）の高さがあり、これに歌舞伎・浄瑠璃の名場面や戦記物からとった人形や館・城郭などの飾りをつけた舁き山であったが、諸事情からこの年を最後に山笠は建たなくなった。

町制施行後、旧糸田村とは異なる日程で行われていた周辺の旧村区域の御神幸を同じ日とすることになり、各村の神輿に随行していた曳き山が糸田祇園祭に参加するようになった。糸田の御神幸は、これ以降、舁き山と曳き山が混在する祭りとなっている。舁き山は、上糸田、

中・下糸田（平成元（一九八九）年時点では、中糸田と下糸田は別々に出している）、南糸田、宮川、戸石、真岡、北から出る七基。しかし、中・下糸田、南糸田、宮川、戸石は令和五（二〇二三）年は出していない。戸石は下糸田から山笠を習ったため、その年は中・下糸田が山笠を出さなかったことに倣って出さなかった。宮床の山笠もかつては舁き山であったが、行政区内にあった豊国炭鉱の施設が障害になり高い山笠が巡行できなくなり、現在は曳き山となっている。新興住宅地の桃山（ももやま）と打越（うちこし）からも、子ども達の曳き山が出る。大熊は日吉神社の御神幸に供奉する曳き山である。他に鼠ヶ池にも山笠があったが、最近は出ていない。山笠の数は時代によって増減があるが、元々は旧糸田三箇村の祭りに出る山笠三基が糸田祇園山笠であった。文化財指定もこの三村の山笠を主な対象としている。今でも旧糸田村のなかでは、最終日に集まる多くの山笠を別ものと言う人もいる。

近年は行政区の他、山笠愛好団体（純心会、竜康会、友好会）が「個人山」（曳き山）を出して祭礼に参加する。これには大熊の曳き山から技術などを習っているところや、笛の囃子を唐津曳き山から習い、取り入れている個人山などもあり、多様性が認められる。

【実施内容】日程は令和五（二〇二三）年

一　蔓取り・山笠準備　四月中旬～三〇日

糸田祇園山笠の準備は、各行政区では三月末から四月初旬にかけて、竹取りや蔓取りを始める。上糸田では四月三〇日に、近くの山に入って藤蔓を取る。採取する場所は毎年同じところである。蔓は山笠の台組みに使用する。台を組み立てる日まで、蔓は柔らかくなるように水に漬けて保存しておく。

二　潮かき　お潮井とり　四月中旬～五月三日・五月四日

祭りの一週間前に山笠の架台に舁き棒と幕を付け、四隅に竹を建て注連縄を張り、子ども達を乗せて町内の川まで鉦・太鼓を鳴らしながらゆき、お潮井とりを行い、架台や棒を清める。大熊区では四月一六日に中元寺川で、真岡区は四月三〇日に泌川で、ともに一〇時からお潮井とりをする。北区も泌川で行う。

上糸田は、総代・中年・青年・子ども達が五月三日に行橋市の長井の浜に行き、「潮かき」をする。青年一人が海に入り、深いところまで泳いでゆき、首まで浸かって身を清める。浜からそこをめがけて潮井筒四本を投げる。竹筒が二本繋がったもの二組である。それに海水を汲み海潮井とする。終えると浜に上がる。その足で一行は、近くの今井祇園社（須佐神社）に参拝する。お潮井とともに昨年の潮井筒も持参する。古い潮井筒は拝殿脇の小祠に納めて、一同昇殿する。神前にお潮井と御神酒四升を供えて、一一時から神職による「潮かきの儀」の祭典が行われた。笛が奏でられ、祝詞奏上に続き、奉幣の儀になった。神職が参列者の頭上に大幣を掲げ「オーミーツー」と唱えながら祓っていく。大幣は、今井祇園の稚児である「八ツ鉢」が神社に奉納したものである。玉串奉奠で神事は終了した。神前から清められたお潮井を受け取り、一同は上糸田の山建場へ戻り、台組みをした舁き棒に少しずつ注ぎ清める。この海潮井とりは、四〇年程前に始められたという。

翌五月四日には、台の四方に竹を立て注連を張り巡らせ、台中央の笹竹に海潮井筒の一組を結び付ける。もう一組の海潮井は曳き山の子ども山笠の四本柱の櫓に結び付ける。台には太鼓二張を台上に据え、下に鉦を据える。山笠の脚は、上下とも蔓で十文字に結束されている。架台は藤蔓の根の皮で台脚に結び付けられている。二本の舁き棒は杉材で、前後の先端は環から出た手綱で二本が繋がれている。役員が舁き棒前後の棒鼻に塩を盛り、御神酒を注ぎ清める。舁き手一同も御神酒と昆布するめで身を清める。一三時三〇分、区長の挨拶、「一本締」めに続き、まず子ども山が曳き出され、続いて舁き山も架台に乗った子ども達が叩く鉦太鼓の一囃子で、お汐井取りに向かう。架台（山笠枠）はこの時は通常とは上下逆さに取り付けられている。枠が手すり代わりになり、子どもの転落防止になる。

一本の棒を前後で一〇人程度、合わせて四〇～五〇人で、息を合わせて舁く。この日の舁き手は普段着である。舁き棒に水をかけ休憩を取りながら進む。山笠は上糸田町内を巡るように舁かれ、中元寺川河畔に出る。河畔土手に山笠を止めて、青年二人がバケツを手に川面に下りて、川の水を汲み、台脚や舁き棒にかけて布で拭いて清める。かつては、川の中に山笠を入れて台に水をかけ手洗いで清めていたので、子ども達が慌てて山笠から降りて逃げた。子ども達を山笠枠に乗せるのは古くから行われており、子どもの健やかな成長を願う行事とされる。お汐井とりが終わると山建場に戻り、架台の上下を戻して、祇園山（大山）の製作にかかる。枠は子ども転落防止の手すりから、桧の葉を挟んだ壁（上糸田は桧葉を使うが「杉壁」、中・下糸田では「桧門」と呼ばれる）を取り付ける枠に変わる。

三　飾り付け　五月七日～五月第二金曜日

お汐井とりが終わると、四本柱を建てて人形を飾り付ける。これまでは直方（のおがた）の原田人形師が飾り付けていたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で廃業したことにより、上糸田では令和五（二〇二三）年から、原田人形師から買い取った人形を福智町弁城（ふくちべんじょう）の平塚人形師が飾り付けるようになった。他の行政区や個人山は、原田人形師に技術を学んだ福智町弁城の富田人形師に飾り付けを依頼している。平塚人形師は富田氏の同僚。個人山は大山であり、人形の豪華さを競う。紙を切って竹ひごに付けたバレンや水玉などの飾りも取り付けて、糸田の祭り前日までに飾りつけを終了する。

四　祇園座　五月第二金曜日

祭礼の前日の夕方に行われる。「祇園座」の構成員は、上糸田・中糸田・下糸田の旧三箇村の七五人。座元は「元方」と呼ばれ、家の入口には笹竹に注連縄が張られる。旧三箇村が交代で勤めてきた。明治二四（一八九一）年の「祇園座当帳」が残っており、戦時下においても中断することなく続けられてきた。神職による祭典が元方の座敷で行われ、続けて「オハラ」と呼ばれる直会となる。最初に三献の盃事がある。一献は盃で御神酒を飲み、吸い物と料理をいただく、二献は茶碗で燗のついた酒をいただく、三献は吸い物椀の蓋でいただく。最後に、元方の引継ぎ「当渡し」が行われる。座元と翌年の座元が二人ずつ三丁の豆腐を囲んで対峙して座り、三丁の豆腐を角を崩して食べる。豆腐三丁が旧糸田村三箇村を象徴しているとされており、各村が互いに角を立てないためと説明されている。

五　祇園山笠　五月第二土曜日・日曜日

祭り当日の日程は、糸田祇園山笠実行委員会で各団体の運行を話し合う。一日目は、須佐神社神幸の御下りの神輿を、旧糸田村の山笠が泌川河畔の下糸田区付近で待ち、列を整えて御旅所祇園社まで供奉して送る。これに先立ち神輿は「祇園座」の元方に立ち寄る。神輿は御旅所に一晩泊まる。

二日目は、九時から御旅所で祭典があり、糸田の町々を隈無く回る還御の御上りとなる。一六時三〇分、各山笠が上糸田の大通りの糸田小学校付近に集まり始める。純真会、真岡、北の順で山笠がやってきた。続いて蓮台車に乗せられた須佐神社の神輿が糸田小学校正門前に到着する。真岡、北などは山建場から遠いため、舁き山の台脚に移動用の小型車輪を臨時に取り付けて移動し、集合場所で取り外す。真岡は、山笠を上・中・下糸田から習っており、現在でも山笠建設のときには、糸田行政区から指導を受けている。子ども達が身に着けるお守り袋には菱の実が入っている。北も行政区であるが、山笠有志とともに山笠を運営する山笠である。有志が参加するが個人山ではない。北の山笠の台上には、初節句を祝う木札などが立てられ、町内との密接な関わりを表している。各行政区の舁き山の結束は強い。今年は南糸田行政区の山笠が出なかったため、南糸田の青年たちは北の山笠に参加していた。

大熊行政区や宮床行政区では、それぞれの氏神の御神幸が行われ、神輿に山笠が供奉する。宮床では、貴船神社の神幸に先立って、境内

の鎮魂之碑前で豊国炭鉱救難者の慰霊祭が行われる。一五時に神輿が出発する。山笠は神輿に続き貴船社仮屋まで巡行する。宮床は旧糸田村ではないため、中元寺川を渡って巡行しない。宮床・大熊の御神幸は、町制三〇周年を機に、糸田区須佐神社の御神幸に合わせて行うようになった。大熊は日吉神社の御神幸で神輿に供奉する大山の曳き山で、頂上にバレンが付かないのが特徴である。子ども達が演奏する笛の囃子に合わせて巡行する。この囃子は福智町金田稲荷の山笠から習ったもの。青年会「翔辰会」には他地域からの参加もある。中年以上の会は「日吉会」である。大熊行政区内での山笠のお披露目が終わってから上糸田に向かう。

一七時三〇分、神輿が小学校前を出発し還幸する、各山笠も提灯を灯してそれに供奉する。神輿は旧糸田町役場跡（フェスティバルパーク）まで行き、高台で山笠を見下ろして休憩する。下の広場に各行政区の山笠と個人山が集まってくる。

舁き山の重量は約二トン、電線などのために平成元（一九八九）年当時は高さは約一丈（三メートル）であったが、現在は電柱の高さを上げ、電線が道を横断しないように変えるなど障害が取り除かれて旧来の高さに近づいている。それを四～五〇人で「前」と「送り」（後ろ）を担ぐ。上糸田は、右肩左肩に分かれて舁き、片手で隣の舁き手と手を繋いで棒を揺するように「ヨイヤーサッサ、コリャーサッサ」の掛け声で足を合わせて進む。手を繋ぐのは、力を入れるためである。舁き棒の前の「棒しぼり」と呼ぶ指揮者の指示で「鼻棒」と呼ぶ先頭の舁き手から順に肩を変え、「送り」も順に鼻棒から変わっていく。肩には、三角座布団、白シャツに胴巻、半ズボンに足袋裸足である。本来は足袋草鞋履きだが、今年は手配が間に合わなかったと言う。令和五（二〇二三）年は行っていないが、中・下糸田には、山舁きに先立って夜に町内に草鞋を配る「草履配り」と呼ぶ行事がある。「ノシタ、ノシタ」の掛け声で、棒を上下に微動させて山笠は止まる。なお、舁き山には太鼓と鉦だけで、笛の囃子はない。山笠が止まっても囃子は止まず、ゆっくりとした拍子で続けられる。

一八時四〇分、大熊行政区、純心会、竜康会、友好会の曳き山が揃って、山笠を前後に揺するガブリや、棒の上に若手が乗ったまま、棒を上げて前後に動くパフォーマンスをする競演会となる。派手な電飾が施された曳き山には、笛の囃子があり、純心会は大熊と同じく福智町金田稲荷の山笠から習っている。友好会は掛け声も「エンヤー、ヤッサ」と舁き山とは異なるが、これは囃子を唐津曳き山から学んだことの影響であろう。

一九時半、須佐神社神輿が金村神社へ還御を始めると各山笠はその場で見送る。

二〇時、舁き山が通りに出て巡行を始める。そこで北と真岡の舁き山が出会い「競り」をする。向かい合って二つの舁き山が、舁いたまま足踏みして掛け声を掛け合い止まり、我慢比べをする。先に山を地面に降ろした方が負けとなり、道を譲る。熱気あふれる舁き山のクライマックスである。このときは、真岡が競り勝った。そこに上糸田がやってきたので、真岡が挑んだ。長い時間競りが続いた。真岡が上糸田に道を譲った。

糸田区の人は、「競り」と言うことができるのは、旧糸田村三箇村の舁き山だけだと言う。つまり、一つの道に連なる上糸田、中糸田・下糸田の舁き山が出会ったときだけが「競り」とされきた。それ以外の取り組みは「競り」とは言わない。これが終了するとそれぞれの舁き山は山建場に戻る。上糸田から続く道は一本道で「太閤道」と呼ばれる旧烏尾道と言われる古い道である。

かつては　飾りを取り外して、四本柱に提灯だけを灯して神輿を神社まで送っていたとされている。上糸田では、その名残として若手が山笠の頂上に付けられている「天下泰平」の飾りとバレンを取り外して、走って金村神社に奉納している。祭礼が終了した後の上糸田の直会では必ず「豆腐料理」が出る。

（福間　裕爾）

中島祇園祭

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【地域の概要】

柳川市は、県南部、筑後平野の西南端に位置している。市域の大部分は古くから開拓された海面干拓地帯であり、平坦な低地にクリーク網を形成している。

行事の伝えられる大和町中島は、近世柳川藩領内の一三の在町の一つでもあり、南北に貫流する中島川河口域の河湊であるとともに、東西に横断する三池街道の宿場町としても繁栄した。町並は長さ二一〇間、家数七四戸とある（平凡社地方資料センター　二〇〇四）。

明治二二（一八八九）年には、栄村・明野村・皿垣開村と合併して有明村となり、さらに明治四〇（一九〇七）年には、塩塚村・鷹尾村と合併して大和村となった。昭和二七（一九五二）年には大和村が町制を施行して大和町となり、平成一七（二〇〇五）年には、旧柳川市・三橋町と合併し、柳川市となった。

【伝承地もしくは実施場所】　八剣神社、および中島地区一帯

【実施時期】

毎年七月第四土曜日に実施されている。平成四（一九九二）年までは旧暦六月一五日に実施されていた。

【伝承組織】

中島祇園は次の四町内によって行われており、それぞれの町内では担当する出し物が決まっている。東上町は大蛇山、西上町は踊り山、中町は殿様行列、下町は獅子山である。

なお、かつては旧北二重でも大蛇山を出していた。昭和三八（一九六三）年に大きな事故があったため、旧北二重は祭への参加を取りやめている（柳川市史編集委員会　二〇一二）。

各町内では区長を中心に、世話方（隣組長）、中老（五〇歳まで）、青年（三〇歳まで）など年齢によって組織されており、祭においてもそれぞれの担当を持ち、役割を果たしている（柳川市史編集委員会　二〇一二）。

【由来・伝承】

中島祇園は夏の疫病退散を祈願する祭といわれている。祇園祭の由来は不明であるが、八剣神社の創建については次のような話が伝わる。

天保一四（一八四三）年九月二二日の夜、東上町の恵介のもとに、新村の軍太がやってきて二つの像を預かってくれと懇願した。しかたなく恵介がその像を預かることにしたが、ちょうどその頃、江浦の祇園宮と秋葉宮の尊像がないと噂が立ち、恵介が預かった像こそ、その尊像に違いないと言い出した。その時、東上町の人びとは、東上町に来たのも、神がそうさせたのだからと、祠に設けた神鏡に神霊を遷し、神霊が遷されたことで空となった像が江浦に返された。

その後、中島祇園社（八剣神社）の尊像が造られ、一一月一六日に宝殿の完成とともに、遷宮の儀が執り行われたという。（大和町史編纂実務委員会　二〇〇一）

【実施内容】

一　行事の準備と各山車の概要

六月に行われる祇園総会で、区長・隣保組長・老人会が集まって、祇園祭までの準備を話し合う。

大蛇山を出す東上町では、前年の一一月頃から材料の竹を切り出し、五月の連休明けから大蛇山を作り出す。山車の側面に大量の葦を挿して飾り付けるのは中島の大蛇山の特徴である。大蛇は祭りの最後に八剣神社の前で崩してしまうため、毎年新しい大蛇を骨組みから作っている。また、八剣神社の御札を貼り合わせて作った大蛇山の目玉は御利益のある縁起物とされている。かつては祭りの最後に男達がこの目

玉をめぐって激しい奪い合いを繰り広げていたが（後述）、現在では祭りの前に予め目玉をもらう人が決められている（柳川市史編集委員会　二〇一二）。

また、かつて旧北二重が大蛇山を出していた時には、旧北二重が男の大蛇、東上町が女の大蛇と言われていた。旧北二重の大蛇は大きくて歯先が鋭く尖っているが、東上町の大蛇は小ぶりで歯先も丸いと言われていた。

また、大蛇山には、折々に幼児を抱えた親が集まってくる。幼児の頭を大蛇の口に差し入れると、無病息災になるとされており、これを「かませ」と言っている。

西上町は踊り山を出す。山車の前面にはスライド式の舞台があり、その上で着物を着た女性の踊り手が踊りを披露する。

中町は、柳川藩の参勤交代を表わした殿様行列を出す。行列の中心は駕籠に乗った殿様であり、小学生が扮している。また、その前後には槍や弓を持った侍たちが行列を組む。

下町の獅子山は、前後に二つの山車を連ねた珍しい山車であり、前の山車には獅子とそれを操る獅子方が乗り、後の山車には三味線や太鼓を奏でる囃子方が乗る。

二　行事次第とその内容

以下、令和元（二〇一九）年の事例を中心に、実施次第とその内容を記す。

八時より、八剣神社にて祇園祭の神事（「お祓いの儀」）が行われる。参加者は各町内の区長や役員、神社運営実行委員、行政関係者、商工会関係者などである。

二三時には「開眼」の神事が行われる。八剣神社に向かって右側に大蛇山が据えられ、その前に、米、神酒、野菜、果物などの神饌が供えられる。東上町若附合、下町青年会の関係者が参列するなか、神事が執り行われる。大蛇山を動かす中心となる東上町若附合は、進行長・副進行長・中老連絡役（二名）、花火管理係（二名）などの役があり、それぞれ左腕に、黒地に金字の腕章を巻いている。神事が終わると、大蛇の口先に花火が取り付けられ、神社前の道路に引き出されたのちに着火される。また、これ以後、鉦や太鼓が鳴らされ続ける。

大蛇山の一回目の巡行は、一七時二〇分に八剣神社を出発し、羽瀬組合前まで巡行し、そこで折り返して神社に一八時四〇分に戻ってくる。巡行中、オハナを頂いた家の前で、大蛇の口先に挿した花火の火の粉を吹きかける。オハナを頂いた人の名は次のようにマイクで披露される。

「ハナの御礼申し上げます。ハナの御礼申し上げます。〇〇（氏名）様より頂く、オーハナー。（これを人数分繰り返す）有り難うございました。有り難うございました。」

その際、大蛇の首を左右に振り、それに合わせて山車の屋根上に立った青年団員が手持ち提灯を左右に振る。この間、法螺貝が吹き鳴らされ、鉦と太鼓が激しく打ち鳴らされる。かつては一軒一軒行っていたが、現在では二～三軒まとめて行う。

西上町の踊り山は、一八時三〇分に中島漁協倉庫前を出発する。道中はスピーカーで歌謡曲を流しながら進む。

巡行中にオハナを頂いた家の前にさしかかると山車を止め、前面に収納されているスライド式の舞台を引き出し、その上で踊り子が踊りを一舞い披露する（「芸者ワルツ」などの歌謡曲）。音楽は屋根に据え付けたスピーカーから流す。舞い終わるとマイクにて、「〇〇（氏名）様、オハナ有り難うございました。」とアナウンスし、オハナを出した家に向かって踊り子がお辞儀をする。一九時一五分頃八剣神社前に到着。踊りを奉納する。

八剣神社前に到着すると、山車を神社の方向に向け、踊りを奉納する。奉納が終わると、大蛇山が鉦と太鼓を激しく打ち鳴らし、大蛇の首を激しく振りつつ、口先に付けた花火を踊り山に向けて吹きかける。屋根の上の青年も大蛇の首が振られるのに合わせて法被を大きく振る。一方の踊り山の方も、四～五人の青年が舞台の上に立ち、法被を激しく振って踊り山に降り注ぐ火の粉を払おうとする。これを何度か

繰り返したのち、踊り山は巡行に戻る。

中町の殿様行列は、一九時三〇分に中町駐車場を出発する。行列順は次の通り。

ホイホイサン（一名・掛け合いの際にホーイホーイと言う）メガホンを持つ→ハワキマショウ（二名・笠を被り、竹箒で道を掃く）→挟み箱（二名・挟み箱を肩にかつぐ）→ニンジベ（七名・毛槍状の竿を持つ、小学生から中学生が務める）→殿様（一名・小学生男子、駕籠に乗る）→駕籠丁（四名・駕籠を担ぐ）→家来（七名・それぞれ纏・槍・鉄砲・などを持つ）→ニギヤカシ（四名・手拭いを頭に掛け、顔に白粉と紅で化粧をした派手な格好の男性）→御台所（二名・道具入れを二人で一つ持つ）。

また行列の脇には、「世話方」「御台所」など役職名の入った提灯を持つ男性達が加わる。また、行列の中心となる殿様（とのさん）の小学生は、クジによって決められる。七月一〇日頃、小学一～四年生のまでの子ども達の名が書かれた紙札を作り、神職が御幣を垂らし、その御幣に付いた紙札に名前が書かれていた子が殿様役を務める（柳川市史編集委員会　二〇一二）。行列が過ぎるとオハナを頂いた家の前を、ヤッコサンが踊って回る。

一九時五〇分頃、八剣神社に到着し、神社に参拝すると、殿様行列の人びとに大蛇山の花火が吹きかけられる。それが終わると、再び行列は町内巡行に戻る。

下町の獅子山は二つの山車が連結されたものである。前の山車の前方・右側・左側にはそれぞれからくり獅子が据えられ、山車には獅子を操る人が乗る。後の山車には囃子方（笛・太鼓・三味線）が乗る。囃子方には子どもも含まれている。

中島納骨堂を一八時三〇分に出発し、その途上で主な場所にさしかかると獅子を舞わす。二〇時四五分頃に八剣神社に到着すると、山車を南向きに止め、右側面を神社側に向けるとお囃子が始まり獅子を舞わす。それが終わると、獅子山に向かって大蛇山の花火が吹きかけられる。下町の青年達は獅子山の屋根に登り、法被を激しく振って、火の粉を払おうとする。このやり取りを数度繰り返した後、再び巡行に戻る。

二一時には、大蛇山が二回目の巡行に出発し、二二時頃には全ての山車が大高青果市場に集合する。各地区の山車が揃うことを「競演会」という。最初に殿様行列のヤッコさんが踊り、続いて、踊り山の踊りがある。そして大蛇山が花火を獅子山に向かって吹きかけると獅子山でもお囃子を囃す。山車の上には青年たちが登り、法被を振って掛け声の掛け合いを行う。○時五〇分頃、大蛇山が八剣神社に戻ってくると、大蛇山が神社に向けて花火を吹く。最後は参加者皆が花火を手に持って高くかざし、一時一〇分頃に終わりの挨拶をもって祭りが終了する。祭りの後、大蛇山の解体を行い、さまざまな飾りを観客が持って帰る。骨組みなどは川岸で燃やしてしまう。町内を練り歩いた大蛇山を燃やすことによって、町内の疫病避けになるという。（柳川市史編集委員会　二〇一二）

三　目玉取り

かつては、朝方まで山車の巡行が行われており、最後に「目玉取り」が行われていた。大蛇山の目玉は、商売繁盛や家庭円満のご利益のある縁起物とされており、とりわけ左の目玉は大変なご利益があるとされていた。その目玉を求めて、かつては近隣地区からも大勢の青年が集まり、目玉を奪われないようにする大蛇山の青年たちとの間で、激しい争奪戦が繰り広げられた。そのことからこの祭りは「けんか祭り」の異名をもっていた。目玉を取りにくる青年たちは、多くの場合地域の大店や名士の家から頼まれた青年たちであり、目玉を取って持ち帰ると酒や御馳走の振る舞いを受けた。昭和三八（一九六三）年に事故が起こったことを最後に、目玉取りは行われなくなったが、現在も大蛇の目玉は縁起物として珍重されており、大牙や御幣と共に、祭りの後に中老や商店関係の協賛会への御礼として渡される。

【類似行事・関連行事】

現在、大蛇山が行われているのは、大牟田市・柳川市・みやま市・熊本県玉名郡南関町であり、旧柳川藩・三池藩の祇園祭の出し物となっている。大蛇山というと、大牟田市の大蛇山が著名であるが、この祭が一般的になったのは昭和に入ってからであり、古くから行われている大蛇山は、大牟田市三池、みやま市渡瀬・江浦、柳川市中島であるとされる（原尻　二〇一八）。

三池の大蛇山は、旧柳川藩の八剣神社、旧三池藩の彌剱神社で行われる。現在は二つの大蛇山の競演（柳川がオス、三池がメス）となっているが、元々は別々に行われていた。以前は「目玉取り」といわれる目玉争奪戦も行われていた。

渡瀬の大蛇山は、みやま市高田下楠田の八剣神社で行われている。ここでは大名行列の名残とされる「雲助道中」がユニークである。同じく高田町、江浦の淀姫神社にも大蛇山が伝わっている。江浦では、三つの大蛇山（古町・新町・二の丸吉原）と一つの踊り山（田中）で構成されている。このうち、渡瀬・江浦・中島には踊り山が登場しており、大蛇山は祇園祭の出し物の一つとして捉えられている。祭の名称も「大蛇山」ではなく「祇園」と呼ばれるのが一般的である（原尻　二〇一八）。

（須永　敬）

三池地区祇園社祭礼行事

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【指定等】

種類　大牟田市指定無形民俗文化財

名称　三池地区祇園社祭礼行事、三池の大蛇山

指定年月日　平成二二（二〇一〇）年四月一四日

【別名】三池の大蛇山　大蛇山祭り

【地域の概要】

大牟田市大字三池・大字新町は、大牟田市中東部の内陸部に位置している。東は三池山、大間山などの丘陵が連なり、西は大牟田川の沖積平野が広がる。

現在の三池の町並みは、鎌倉時代に三池氏が今山に山城を築き、この地域を支配したこと始まる。室町時代になると、城の周囲には市がたつようになり、三池の町並みもこの頃から次第に形を整えていく。江戸時代になると、町並みを南北に貫く三池往還（県道大牟田高田線）を中心とした街道筋の宿場町として栄えた。北側が柳河藩立花家、南側が三池藩立花家の領地であったが、町並みの中央を東西に貫いていた水路が両藩の境となっていた。三池藩には陣屋が設けられるなど、商家の町並みと、武家屋敷の町並み、山麓には農村が広がっていった。さらに、藩境を中心として三池の町並みが形成されたことで、人の往来は賑やかになった。大字三池の祇園宮は旧柳河藩領に、大字新町弥剣神社は旧三池藩領に位置しており、それぞれの歴史的特徴を今日まで色濃く残している。新町の山は昭和六三（一九八八）年から「三池藩大蛇山」と呼称している。

【伝承地もしくは実施場所】大牟田市大字三池、大字新町

【実施時期】七月第四土曜日及び日曜日

【伝承組織】

三池藩大蛇山実行委員会（大字新町弥剣神社）

三池本町祇園宮神社総代会（大字三池祇園宮）

【由来・伝承】

三池山（今山嶽）に伝わった、「今山の城にいた御姫さまを、大蛇が今にも飲み込もうとしたとき、毎日ご飯粒をあげてかわいがっていたツガニが出てきて鋏で大蛇の胴体を三つに切って姫を守った。大蛇の切られた体がのたうった窪地に水が溜まったのが三池山の山頂にある『三つの池』である。」という古池の伝説は大蛇山との繋がりを連想させる。三池山には現在でも、山頂付近に池が連続して三つある。かつて三池権現として信仰された場所である。

古くから大蛇山を伝えているのは大牟田市三池の二箇所。一つは大字新町の弥剣神社である。天照皇大神宮、宗社稲荷大明神、祇園牛頭天王、大塔大権現を祭神とし、創建は寛永一七（一六一四）年とされる。この地域は、江戸時代は三池藩領にあたるが、中島家文書によると寛政三（一七九一）年、同四年には三池祇園会では「本山」と踊り屋台があるとの記載がある。この「本山」が大蛇山の原型ではないかとされるが、大蛇の造形に関する記述はない。また、弥剣神社には、「安政四（一八五七）」銘をもつ山車の部材も保存されており、江戸時代には祇園会祭礼行事が行われていた。

もう一箇所が大字三池の彌劔神社である。「本町の祇園さん」と呼ばれ、鳥居の扁額には現在でも「祇園宮」とある。創建に関する記録は残っておらず、創建年は詳らかではないが、一説には南北朝期とも伝えている。祭神は牛頭天王とされ、神殿内には他にも小祠や様々な御神体が祀られている。神殿中央の厨子には大きな耳を持つ赤色の牛頭天王らしき神像が納められている。祇園社祭礼行事に関する記録は少ないが、山車は、柳河藩立花家との親族関係である上内立花内膳家

から下賜されたものと言われている。

【実施内容】

行事の準備や運営は、大字新町弥剣神社の祇園社祭礼行事では、三池藩大蛇山実行委員会が行う。大字三池祇園宮の祇園社祭礼行事では、三池第一、材木町、神田脇の三地区の氏子で構成された、神社総代会が中心となって行っている。新町弥剣神社は、田町、新町、陣屋（じんや）の三町で祭礼行事に携わる。氏子の範囲もこの三町内である。各町内は複数の下部組織を持ち、各集落の住民が中心となって行っている。大蛇山祭りの際には隣接地域の参加は基本的には受け付けておらず、三町内の住民でのみ行ってきたが、近年は他地域からの参加者も多い。

三池地区の祇園社祭礼行事は、過去には旧暦の六月一日から一五日にかけて行われていた。現在は七月一二日から二六日にかけて行われる神前行事、地域御幣奉納、町内巡行、目玉争奪戦という一連の祭礼行事の総称であり、特に町内巡行は、初期の祇園社祭礼行事の形態を残し、通称「大蛇山」と呼ばれる山車が町内を練り歩く。

四月頃から大蛇の飾りを作り始める。竹に藁を巻いた芯に紙を貼り付けて形を作り着色していく。誰でも作れるわけではなく、熟練者が携わる。この大蛇の頭・胴・尻尾の造形を四輪の館型の山車に付けたものを「大蛇山」と称している。口には古大麻が貼り付けられ、耳や髭、角などがあり、蛇というよりは龍のような形をしている。山車の天井に、切れた小さな胴が吊り下げられ、後ろ側に尻尾を差し出して飾る。大蛇は三分割で作られ、三池山伝説を表しているようである。

一　神前行事　七月一二日

祭礼行事は、山車の大蛇山、及び氏子らを御幣で祓った後に三回塩を撒く修祓を行う神前行事から始まる。そして、一四日間かけて諸々の行事が行われる。かつては、北九州市の黒崎（くろさき）まで汐井を取りに行ったと伝えている。

二　六山巡行　第四土曜日

午後、大蛇山を組み立ててトラックに乗せ大牟田市街地へ運び、「六山巡行」に参加する。三池大蛇山に習った大牟田市内の神社から出る四基の山と三池の二基の山が大通りで一堂に会する競演会で、新しく始められたものである。そこでも三池の二山は大蛇山の祖として一目置かれる。会場に行く道々で子どもの健康を願う人々から依頼があれば、子どもを大蛇の口に持ち上げて囃したてる「咬ませ」を行う。

三　町内巡行　第四日曜日

次の日曜日に町内巡行が行われる。当日は、八時から山車を清掃、一六時半過ぎに巡行が始まる。笛太鼓の囃子と、山車に吊り下げられた半鐘を打ち鳴らしながら三池往還を行き来する。寄付を受けた家の前など、要所要所で大蛇の口に花火を差し込み火炎を散らす。昼は煙の多いもの、夜になると火花の華やかな花火を使う。また、「咬ませ」も行う。咬ませた後は手締めをする。

かつては、それぞれの町の大蛇山は藩境を越えることはなかった。現在では、藩境に来ると山車から人が下りて進む。本町と新町の藩境の道路上で、二つの大蛇山が揃い、口から花火の火花を散らしながら、大蛇の尻尾を打ち合わせ、大蛇の赤子が生まれるイベントを行うようになっている。これは、本町が雄で新町が雌という伝承に基づいた新しい伝統である。

四　目玉争奪、耳牙奉納　七月第四日曜日

町内巡行は、山車に大蛇の頭部、胴体、尻尾を象った飾り付けをし、囃子を奏でながら本町・新町、各々前述した三町内を行列巡行する行事である。この発炎筒や花火を焚きながらの巡行は、病気などのケガレを祓う祇園信仰の意味合いが色濃く残る特徴である。巡行を終えると大蛇を取り壊した。これは大蛇が天に帰るのを防ぎ、守り神として土地に留めるためだという。この取り壊した大蛇の目玉、牙、耳などは厄除け・御守として御利益があるとされ、かつては巡行の終了と

ともに、男達が目玉に殺到し激しい争奪戦を行っていた。祇園社の祭神である牛頭天王が胡瓜で目を突いて右目を失ったため、左目が特に価値があるとされている。大蛇の目を奪うと、どこの家のものでも良いので、神棚に目玉を供える。それで目玉の所有権が確定した。

本町では、目玉が氏子外の者に奪われないように、氏子同士で連携していた。戦中には出征する若者に優先して目玉を渡すために団結したと伝える。目玉以外の部位もやはり奪い去られ、目玉の争奪戦が終わると殆ど何も残らなかった。目玉の争奪戦はその危険性から現在は行われていない。目玉や牙、耳などの部位は事前に申し出があれば、取り外しておき、申し出をした人物に渡す。これらの部位は縁起が良いとされており、相応の対価を奉納することになっている。大蛇がバラバラにされると、氏子は直会を行い、祭りは終了する。新町は神社に帰ってから、子ども達のみで争奪をするようになっている。「三池の大蛇を見ると三年眠い」と言われ、争奪戦と共に祭りは終わる。耳と牙は後日、熊本県南関町との境にある峠の塞の神に奉納する。ここは耳の神様として信仰されている。

大蛇山祭りは大牟田市以外でも行われている。別途報告がある中島の他、渡瀬、江浦、南関である。三池とこれらの地域の大蛇山との相互関係は不詳だが、大蛇の運行、目玉争奪など似たような特徴を持っている。また、そのすべてが明治以前には成立していたと考えられていることから、この分布は三池街道に沿って三池から伝播したものと考えられる。

（福間　裕爾）

どろつくどん

【テーマ】二「山車・屋台・船などが出る」、二九「山笠」

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　どろつくどん

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

【別名】御賑会　おにぎえ

【地域の概要】

柳河藩城下の掘割に囲まれた、町人地旧柳河の各町がその舞台である。明治三七（一九〇四）年五月二五日付『柳河新報』第一八号には、「囃子台」どろつくどんは、外町・上町・瀬高町三丁目（現京町三丁目）・蟹町の四基、前山車と呼ばれる「山鉾」が本船津町ほか一六台、「踊台」（踊り山車）四台の他、物語や時事などを人形や飾り物で表現した「曳台」も三台出ている。芸妓が雇われていたと思われ、旧柳河城下町の他、個人や団体が二台の踊り台を出している。この年の祭礼には日露戦争の戦勝祝いから、音楽隊の参加や日露戦争に関する造り物飾りが神社回廊で行われていたことが記されている。

明治期と思われる町内前山車（山鉾）の写真では、一番外町（閑古鳥）、三番新船津町（蓬莱山）、四番上町（閑古鳥）、五番中町（為朝）、六番辻町、七番西魚屋町、八番蟹町（三宝に烏帽子）、一〇番糀屋町（ひょうたんに桜）、一一番瀬高町一（雅楽打ちもの太鼓）、一二番瀬高町弐（八咫鏡）、一三番瀬高町参、一四番細工町壱（柳河城）、一五番細工町弐（扇に祇園守）、一六番材木町（龍門の滝登り）、一七番新町（剣巻龍）、一八番出来町（楠公桜井の訣別）、一九番東魚屋町（八咫鏡）、二〇番恵美須町（三宝に桃）、二一番田代町（虎）が記録されており、先に述べた記事と共通するところも見い出せる。現在この山鉾を出しているのは、保加町（外町）だけである。

大正一四（一九二五）年には、外町、瀬高町三丁目、東魚屋町からどろつくどんが出ている。辻町、中町、上町、上町二、片原町、細工町三、新町、材木町は踊り台を出し、各地から踊り手を雇っている。

【伝承地もしくは実施場所】

柳川市　三柱神社　日吉神社　八剣神社及び柳川市柳河地区

【実施時期】

文政三（一八二〇）年の三柱神社遷座祭の日に因んで、大正時代までは旧歴の八月一五日から三日間行われていた。昭和時代に入り、新暦の一〇月九日から一一日の日程に変わり、現在は一〇月第二日曜日を中心に三日間が祭日となった。令和五（二〇二三）年は一〇月七日～九日に行われたが、中日の八日は大雨のため神幸等の行事は中止された。

【伝承組織】柳川どろつくどん保存会　旧柳河町町内会

【由来・伝承】

「どろつくどん」は、柳川藩主立花鑑賢により文政九（一八二六）年九月一六日に柳河城内三丸から高畑新宮に遷御して建立された三柱神社の遷座祭を祝うために奉納されたのが始まりとされる。

外町（現保加町）の御用人夫差入家業の北川新十郎、弥永久右エ門等が江戸の神田明神に奉納されていた葛西囃子や舞踊、神田の曳き物や京都祇園祭の山鉾を参考にして囃子と囃子台を考案し、文政九年八月一五日還座式の当日に山車（山笠）を押し立てて、一番に参拝した。山鉾（前山車）には、中国の故事に因む閑古鳥（諫鼓雉）の飾りを付けて藩主の安寧、天下泰平を祈り、北川新十郎以下外町の人々は裃、菅笠、浅裏草履で曳いた。囃子台がどろつくどんと呼ばれる山車である。これ以降、外町のどろつくどんや山鉾は、秋祭りに必ず引き出す

こととなり恒例化した。
明治一〇年頃の立花宗茂公年忌祭の時、外町から教えを受けて、蟹町、辻町、東町、瀬高町（現京町三丁目）、本船津町、上町のどろつくどん山車が御賑会に奉納されるようになった。

【実施内容】

現在は一〇月第二日曜日を中日として行われる三柱神社の秋の大祭「御賑会（おにぎえ）」は、大賑わいが訛った名称だとされている。どろつくどんとは囃子台山車の名称で、奉納舞を披露することで五穀豊穣、商売繁盛、天下泰平、家内安全を祈る行事となっている。山車の上で舞と囃子を披露しながら市内を練り歩き、三つの神社に奉納する。さらに街を流しながら、祈願内容に応じて面を取り替えて舞を奉納していく。

どろつくどんは、第二次大戦中には山車が防空壕の材料に使われるなどして奉納できない時期もあったが、御賑会は中断する事なく続いている。以前は約二〇町が山鉾（前山車）・踊り台（踊り山車）・曳き台を所有していたが、現在は、囃子台（どろつくどん）は保加町、蟹町、京町三丁目、上町の四町のみが所有する。平成九（一九九七）年に「飛龍どろつくどんの会」（飛龍）が発足し、町内会の枠を超え誰でも参加出来る会として、五基目の山車として祭りを盛り上げている。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で令和二（二〇二〇）年は、どろつくどんは中止され、令和三（二〇二一）年も当番山だけが奉納されたが、令和五（二〇二三）年は三年ぶりに保加町、蟹町、東町、京町三丁目、飛龍の五基のどろつくどんが揃った。

以下、令和五年の当番一番山である、京町三丁目町内（京三）の行事を中心に記述する。

一　奉納舞の練習及び準備　一〇月祭礼前の月曜日～金曜日

金剛院に舞方（上山）が集まり、二〇時から一時間、拝殿内に設けられた山車の舞台を模した場で、毎晩奉納舞の稽古を集中的に行う。舞の稽古は、月一回、年間を通して行われている。各町ごとに舞、囃子は若干異なる。能に発した舞で、喜怒哀楽を簡略化された所作で表現する無言劇である。舞方は全員が交替で全役割を行なう。また、山車の飾りなどを調整し、山つくりの準備をする。

二　山つくり　一〇月七日土曜日

八時より京町四角の駐車場でどろつくどんの山車を組み立てる。京三の山車は横幅二・一メートル、奥行三メートル、高さ三・八メートル、舁き棒は六メートルの長さがある。棒を含め、基礎的な台の組みは事前に済ませてある。屋根や芯棒などの部材は金剛院から運び出す。

奉納舞の面は、賢徳、舌出し、猿二種、大天狗、天神、黒髭海童、横口、顰海童、空吹、お多福、髭癋見、般若、般若海童、ひょっとこ、天狗、空吹、天神、大黒が金剛院の拝殿に並べ確認されて、持ち出された。能面に由来するものだが、かつての面は和紙を張り合わせて造られたもので、舞うときに顔にしっかり密着し具合が良かったという。しかし、盗難にあい、現在の面は木製である。駐車場へ運び広げられたブルーシートに、部材、太鼓・笛などの楽器、舞の面を並べる。

下台周りにダンダラ幕（鯨幕）を巻く。以前は白黒だったが、現在は紅黒、他の町は昔から紅黒。辻町はかつては紅緑の鯨幕。台上部横に造花を飾り付け、長さ三・五メートルの芯棒を組み立てる。上部に「京三　三柱神社」の灯籠、鉾、最上部に三又になった御幣を差す。鉾には前面に八咫烏、後面には兎の意匠が描かれるが、「日中烏あり、月中兎ある」という故事から、烏が太陽を兎が月を象徴している。その下に大波の飾りが下がる。三〇年程前に、保加町に倣って京三でも烏と兎に造り変えた。蟹町では、鯉の滝登り、飛龍は龍である。これを鉾や上鉾と呼ぶ。

御神酒で台・棒・車輪を時計回りに清める。上山の芯棒も清める。大太鼓、小太鼓二、銅鑼、摺り鉦を上山に運び上げる。「どろつくどん」という名称は、小太鼓の音「どろ」、太鼓の縁を叩く音「つく」、大太鼓の音「どん」のオノマトペであるという伝えがある。小太鼓の撥は柳の枝の皮を剥いで乾燥させたものである。

市松柄の天井を取り付けて、「金剛院」の幕を張りまわし、四隅に

「京三」の提灯を下げる。上山に上鉾を立て芯棒をボルトで固定する。面を運び上げ、芯棒に下げていく。般若の面を最も高い位置に飾るが、外から見て見栄えが良いように、綺麗に飾る。

山車の飾り付けが終わると、九時一五分から金剛院に移動して、出発式がある。宰領の「三日間の安全を」という挨拶のあと、神前に二礼二拍一礼する。記念写真撮影のあと、参加者は御神酒、昆布するめで身を清める。

九時三〇分、山車の正面を金剛院の方向へ向けて、最初の舞を奉納する。神前での奉納はお多福からと定められている。続いて、天狗、般若の順で、笛と太鼓・銅鑼の囃子に合わせて、台から上半身を乗り出すように舞う。太鼓と銅鑼は同時に鳴らされる。

どろつくどんは、上鉾を後ろに倒して銅鑼が連続で鳴らされるなか三柱神社に向けて出発する。電線などが巡行の障害となるため可倒式になっている。撞木を手にした般若の舞で進んでいく。途中、祝儀のお礼に舞を「門付け」していく。演じる演目は、場所によって適宜変わる。道中は銅鑼と太鼓だけの道囃子で行く。どろつくどんの囃子には、道囃子（まちばやし）の他、参道囃子（おまがり、チンツク囃子）、神楽囃子（神前はやし、さんもん）がある。

その日に上山に上げた面の演目から、神社まではチャリ（手力男）、空吹が演じられた。神社入口の太鼓橋の上で、上鉾を立てて般若を奉納する。ここから参道である。京三は一番山で当番山である。必ずお宮に参拝することになっている。当番山のときは保存会から、豆絞りと草鞋の配給がある。

三　当番山三柱神社前で舞三番奉納　町内門付け巡行　一〇月七日土曜日

九時五五分、保加町の山車が一番に参拝した故事に倣い、一番山京三のどろつくどんが三柱神社の鳥居をくぐり、社前楼門前で鉾を立てて、上山と呼ばれる囃子方、下山と呼ぶ押方も一同揃って参拝し、帰路につくときに奉納舞を始める。宰領の「京町三丁目、奉納させていただきます」の口上で奉納を始めた。

令和五（二〇二三）年の当番町は、京三、上町、飛龍。当番町はそれぞれの山車で「何年かに一回」と決まっており、三基の場合もあれば、二基の場合もある。

三柱神社から出る順番が京三が最初なので、一番山とされる。ただし、日吉神社から出る時は、上町、京三、飛龍の順番に変わる。当番町ではない保加町も八日当日参加予定で、飛龍の後に続く。飛龍は毎年出ている。

社前の山門前では、神楽舞の笛太鼓の囃子で舞を奉納する決まりである。このときの囃子を「さんもん」と呼ぶのはそのためである。「三役」と呼ばれる、お多福、天狗、チャリの演目が決まりである。これは、天の岩戸開きの神話に因んだ演目で、お多福が天宇受売命、天狗が猿田彦命、チャリが手力男命を表している。特に、天狗には安心感を伴った卒のない踊りが要求される。京三の演目は、お多福、天狗、般若であった。般若は須佐之男命を表している。どろつくどんの山車が多く出るようなってからは、境内松原に並んで休息することになっているが、この日は、「飛龍」のどろつくどんが先に神社での奉納を済ませており、松原で待機して、一番山の京三を見送った。三柱神社社務所で神社奉賛会へ舞を奉納して町巡行へ向かう。

大正始めまでは、この「どろつくどん山笠」（山笠という表記もある）の他に、太鼓台の上に「閑古鳥」を飾り、蔓を巻きつけた山鉾（前山車）が子供連によって曳かれていた。閑古鳥は中国の故事、平和が続き検問所の太鼓に閑古鳥がとまり蔓さえ巻きついたことに因むとされた。

午前中は京町、新町、細工町、出来町を回り、五五箇所程の門付けを行った。相談役が記念品にタオルを渡す。城下柳河町の全戸には、造花・献灯が飾られる。一箇所二分程度の演目はチャリ、天狗、お多福、空吹、海童、であるが、順番など決まりがあるわけではない。途中で、県指定無形民俗文化財である「今古賀風流」と出会った。こちらもこの日が祭日であり、柳河の街中でも披露される。舞手が頭に被った羽熊が鬼のように見えて、子供の頃に追いかけられ怖かった経験を持っ

ている人は多い。

午後も横山町から門付けを続ける。コーリャの合いの手から、笛の囃子が始まり舞が奉納される。道中、囃子の変わり目に、大太鼓と銅鑼を激しく打ち鳴らして進むことがある。曳き手の士気を鼓舞するものでシャギリという。銅鑼の音が大きくなり、太鼓のリズムが変化する。途中、上町のどろつくどんと出会った。どろつくどんが鉢合わせすると、どちらが先に行くかで揉めることがある。宰領たちの話し合いが行われ、このときは上町が京三に道を譲ることになった。京三は細工町、出来町、町回りを続けて日吉神社まで行き、そこの御祭神に因んで猿が演じられた。ここでは猿二匹で舞うことが決まりである。金剛院へ戻り、道具や幕、面などを拝殿に仕舞う。

夜、柳川商店街振興組合主催の「踊り山競演会」が京町第二駐車場で行われる。踊り山（踊り台）は京三、辻町の二台である。どろつくどんの囃子台が「男山」と呼ばれるのに対し、踊り山は「女山」と言われている。どろつくどんと道で出会うと、踊り山は必ず道を譲ることになっている。「男を立てる」と説明されている。

踊り山では、艶やかに着飾った女性たちが美しく舞い地唄を披露する。かつては芸妓が山車の舞台に上がり舞を奉納していた。それはまるで「お座敷が動いている」と評されるほど艶やかであったという。最初は長崎から、後には八代・唐津からも、芸妓が祭りの三日間雇われて出入りしていた。祭り二日目には招いた町の若い衆と懇ろになることも多く、仲良く町を歩く姿も祭りの風景となっていた。芸妓が柳川に嫁に来ることも多く、「柳川の旦那さんと長崎のお嫁さん」の夫婦が沢山いた。

町々が芸妓一座を雇うことは費用がかかり大変であった。明治三七（一九〇四）年には、香町一座、瀬高座、森峯吉一座が雇われていることが記録されている。今は踊りの師匠さんたちが二つに分かれて旧柳河町の女性たちを指導して踊りを披露する形に変わった。かつて踊り山は八台ほど出ていた。曳き手たちの目印は赤い鼻緒の雪駄である。

踊り山は、どろつくどんの発祥と深い関係にある。三柱神社造営の地固めが行われる時、柳河藩城下の町人地「柳河」の商人たちが手伝い、男衆は変装して賑わし、女衆が三味線と太鼓で興を添えた。ただ城下外に位置していた保加町（城下入口の出の橋の外側の町だったことから外町と表記された）は芸妓を雇うには費用がかさむことから、問屋を中心にこれに参加しなかった。これが他の町々から不評を買ってしまった。外町はそれを挽回するために、神田明神囃子を習い、その造り物などを参考に生み出した囃子台がどろつくどんとされる。

四　一〇月八日日曜日　御賑会御神幸

本来であれば、祭礼の中日に当たる第二日曜日には、三柱神社で出御祭があり一三時から御神幸となる。神幸行列の神輿にどろつくどんの山車が供奉し、後に踊り山が続く。三柱神社から柳河の町々を通って、日吉神社に向かい、一四時の御旅所祭のあと、一五時半中町の八剣神社（旧祇園宮）に御神幸する。それぞれ神社の境内ではどろつくどんが舞を奉納する。八剣神社御旅所祭の後、一六時半に神輿は三柱神社へ還御し、一七時に三柱神社へ帰着して還御祭がある。そこで供奉の行列は解散となるが、どろつくどんと踊り山は、神輿を見送り、商店街など柳川全町の各所で奉納舞を披露する。大正時代まではこれが深夜にまで及んでいたが、現在では京町第二駐車場に各町の山車が集合し奉納舞を披露する柳川商店街振興組合主催の大競演会に変わっている。

だが、令和五（二〇二三）年は大雨のために行事のすべてが中止となった。京町三では見物客の願いに応え、急遽、金剛院の拝殿に多くの見物客を上げて、その日に奉納するはずだった舞を披露した。多くの観光客が観覧した。京町三の故老たちは、「こんなにたくさんの見物人が集まるとは思わなかった」と言い、舞方の青年たちもそれに応えて、張り切って舞った。保加町でも、倉庫にどろつくどん山車を入れ、そこで奉納舞を町内の人々に披露した。今は引退した往年の名人たちも舞い、久しぶりに名人の舞にみなが酔いしれた。

五　町回り　一〇月九日月曜祝日

八時三〇分、京町の駐車場で山車の幕などを飾り付けて上鉾を立てる。鉾の日月下の京町の文字を図案化した円盤の髭は「しぶき」（飛沫）、そこから下がる八本の飾りは「たきなみ」とそれぞれ呼ばれ滝と波の水を表現したものである。

この日の演目は大黒、チャリ、猿、空吹、天神、顰、舌出、賢徳などだが、空吹、ひょっとこ、猿は動作が似ており、軽妙な舞を得意とする上山が勤めた。

金剛院に因む舞は狐である。金剛院には棚倉稲荷が祀られており、御祭神に因んだ大型の面である。狐の舞は難しく、白い手袋をして手を狐の形にして舞うもので、舞うことができるものは一人しかいない。この日、演じられることはなかった。

三日目はすべてのどろつくどんが出るわけではない、保加町、上町のどろつくどんは既に解体され倉庫に仕舞われていた。この日動くのは京三、蟹町、飛龍と踊り山である。

九時五分、金剛院で青年会代表から「未成年飲酒のないように」という挨拶があり、参加者が金剛院拝殿に向かい二礼二拍一礼、御神酒、昆布するめで身を清める。九時一五分、駐車場に戻り山車正面を三柱神社の方に向けて、「三役」の奉納舞、神楽囃子にのせて、お多福、猿、天狗を奉納。猿は山から飛び出して柱にぶら下がり揺するなど、滑稽な動きをする。般若のシャギリで出発する。道中は銅鑼の連続音だけで空吹（ひょっとこ）、チャリ（ゲンコツ・手力男）、般若が代わる代わる舞う。綱を曳いて辻町、本町を通り、出の橋を渡り保加町に入り「門付け」を始める。どろつくどん会長宅で舞を「打つ」。打つとは門付けのことである。猿二匹の舞を奉納した。一匹は山車から降りて周りの人と握手してまわる。以前、猿二匹で舞ったら観客に好評を博したことから恒例化した。この日の芯棒には、猿は三面飾られていた。

船津町に入ると恵比須神社の広場で上鉾を立てて休憩。糀屋町、材木町、鍛治町、西魚町などの旧柳川校区（旧城下の外側まで含む）を回るが、沖端町までは行かない。折り返し地点の「エフコープ柳川ステーション」では、鉾を立てて猿を演じた。この時も猿二匹が山車を降りてバナナを配るパフォーマンスをした。般若のシャギリで京町へ戻る。どろつくどんは旧城下町の商店主たちが中心になって運営してきたので日程や行事が急に変更になっても対処できている。サラリーマンだけではなかなか難しいと言う。途中、始祖金剛院以下歴代の大先達らが眠る長井家之墓がある天叟禅寺に相談役が詣でた。

帰路は道囃子で、チャリ、天狗など面を次々に変えながら演じていく。シャギリは銅鑼だけだが、これには笛が入る。この日の笛方は三人であった。京町の交差点まで帰ってくると、参道囃子（おまがり、チンツク囃子）に変わり、片方の棒を持ち上げて山車を大きく回して方向を変え、左右に細かく何度も激しく揺らしながら駐車場に入る。

一三時二五分、金剛院へ山車を向けて、舞を奉納する。お多福に続き猿となるが、ここでは三匹が出てきた。三匹は山車から降りて下山の人々や、祭礼に毎日協力してくれた柳川信用金庫の職員たちと握手したり、観客とじゃれるなどパフォーマンスをする。下山に促されて山車にもどるが、なかなか上がらず、名残惜しんで演じる。続いて天狗が舞う。最後が般若であった。これで「打ち止め」となった。

一三時三五分、宰領の音頭で、全員で「三本締め」をしてどろつくどんの行事が終了した。すぐに面が降ろされ、山車の片付けとなるが、前日の雨で山車が濡れたため台を乾燥させる必要が生じ、解かずにそのままにされた。部材や面などは金剛院へ収納された。京町三丁目の人々が金剛院に集まり直会となった。

大正時代までは、早朝から舞踊台（踊り山）は神社に参拝して終日境内で演芸をしていた。夜になると帰路に町内を練り歩き、踊りを披露していた。この日も辻町、京町二丁目の踊り山は町回りを続けていた。

（福間　裕爾）

第二節　特論二　獅子祓（ししはらい）・獅子廻（ししまわし）

一　はじめに

獅子舞は、庶民にとって最も身近な民俗芸能の一つである。県内でも四季を通じ多くの祭礼行事で演じられている。県内の獅子は、二頭・二人立ちとよばれるものがほとんどで、前で獅子頭を持つ者と後ろで胴衣を被る者によって舞われるのが基本である。獅子の大きな目的は祓いであり、祭礼行事の道祓いや斎庭の祓い、祈祷行事での悪疫退散・五穀豊穣・家内安全等を祈るためのものである。最近の調査では「舞わない獅子」、いわゆる夏の祈祷などで行われる「門付けの祓い獅子」が多く継承されていることが判明している。しかし、門付けの祓い獅子は、夏の祈祷のみでなく、春祭りや秋祭りの祭礼行事の際にも行われる地域がある。また、門祓いの獅子は通常舞わないが、一部の地域では獅子舞を行うところもあるなど、現状は複雑である。県内の獅子舞については、今日まで、先学によりその外見や所作による特徴などについて解説されてきたが、前述したように地域により祭礼・年中行事で獅子の在り方に違いがあり、その性格が把握しにくい面があった。そのため、今回は、今までの資料及び限定的に行った現地調査、聞き取り等に基づき、地域毎の獅子の情報を集約し、福岡県の獅子に関する行事の実態を把握できる基礎的資料の作成を主な目的とする。

二　分布

県内の獅子の行事は、流域や平野を単位として、地域的なまとまりをみることができる。主なものとして、①北九州市の紫川流域、②遠賀川の本支流域、③福岡平野、④・⑤筑後川流域と支流である宝満川流域があげられる。おおよそこの地域内で同様な形態の獅子の行事が行われている。

（一）紫川流域

北九州市内には、祭礼行事の前に、「敷地祓い」という行事があり、榊台と呼ばれる小型の宮形に神を移し門祓いを行う行事である。これは、「獅子祓い」が起源と考えられ、紫川流域には、その名を残す「敷地払い・獅子起こし」と呼ばれる行事が現在でも行われている。

（二）遠賀川上流・下流、彦山川流域

上流と下流で獅子のタイプは大きく異なる。上流は、大分八幡の獅子舞に代表される舞獅子が広く分布する。祭礼行事、祈祷行事の門祓いなど、すべての行事で舞獅子が行われる。下流域では、舞い獅子は行われず、お獅子さまと呼ばれる夏の門祓いが中心である。

支流の中元寺川・彦山川流域には、遠賀川上流域から伝播した舞獅子が分布するほか、この地方独自の五段・六調子の獅子があり、英彦山神宮にも修験道に関連する松会行事の獅子舞がある。

（三）福岡平野

福岡平野は、基本的に、「祈祷行事の門祓い獅子」が分布する。都市部ではお汐井とりの省略や子どもの負担を軽減するために獅子を神輿台に載せて移動している地区もあり、伝統というよりも子どもが主体の行事となっている。反面、周辺部の東区や西区では、比較的そのままに伝承されている。

西区では、演劇・狂言獅子に分類される獅子舞が継承されている。県内でもこの地域周辺だけであり、起源としては、周辺で活躍した糸島市の泊役者の存在が考えられる。しかし、残念ながら泊役者についてはほとんど資料が無い状態である。

また、東区香椎や少し離れるが福津市の在自・練原には飯塚市大分から伝わった獅子舞がある。

糟屋郡は「祈祷行事の門祓い獅子」が主体であり、祇園祭り、おくんち、正月などに行われる

（四）宝満川中流域

宝満川中流域の小郡市、筑紫野市、旧夜須町には、一般的な「祈祷行事の祓獅子」が分布する。ただ、小郡市の一部の獅子では、隣接する佐賀県鳥栖市からの影響がうかがわれる獅子舞が行われている。

（五）筑後川流域（八女地域を含む）

筑後川流域は、遠賀川流域に次ぐ、獅子行事の集中地帯である。基

本的にその容姿や所作の荒さに特徴がある。しかし、中流域（朝倉・浮羽）と下流域（久留米・三潴）において、獅子の胴に使用される素材や掛け声など違いがある。

筑後川流域の影響を受けている八女地域には、三井・三潴系、星野地域には、朝倉・浮羽系の獅子が伝わっている。

三　獅子舞の種類と分類

県内の獅子舞についての体系的な調査・研究は、昭和八（一九三三）年に福岡女子専門学校の教授であった平井武男による『福岡県郷土芸術』第二分冊「民間演芸」巻一の中の獅子舞が最初である。平井は、県内の獅子舞を舞や所作の特徴から、筑後川流域の浮羽地方の、舞がほとんど無い祓い獅子を甲とし、福岡市東区の香椎宮で舞われている伎楽系の舞い獅子を乙に、福岡市西区の野方に伝わる演劇と獅子舞が合わさった演劇系の獅子舞を丙の三種類に分類し解説を加えた。

○平井分類　甲．祓い獅子　浮羽地方（例、柳瀬の獅子等）
　　乙．伎楽獅子　香椎神宮（例、福岡市東区）
　　丙．演劇獅子　野方の演劇獅子（福岡市西区）

その後、民俗研究家の梅林新一が昭和三二（一九五七）年に「郷土田川一〇号」で、平井の分類に加え、新たに獅子舞に伴う子どもの太鼓打ちを加えた。さらに、それまで、「各戸祓いの門付け獅子」は、獅子（舞）としての概念がなかったが、以前には舞があったところもあるため、各戸祓いの門付け獅子も獅子舞のひとつとして加えられている。

○梅林分類
一、シュロ獅子→平井分類の甲
（浮羽郡、三井郡、朝倉郡に見られるもので胴の布にシュロの毛、或いは糸の類をつけたもの、囃子が無く、獅子が踊るのみとしたもの）
二、雌雄二頭の獅子舞→平井分類の乙
（これは、福岡市香椎等に奉納する雌雄二頭の獅子（獅子の舞だけで筑豊のような太鼓打等がないもの）
三、子ども太鼓打ちを伴うもの（新）
（嘉穂郡及び田川郡の獅子舞がこの類である）
四、演劇的獅子舞→平井分類の丙
（福岡市今宿及び壱岐、糸島郡周船寺〔以上、昭和三二年当時〕のもので、三番叟の猿が出たり、米拾いなど多分に演劇的要素がある）
五、各戸祓獅子舞（新）
（これは、獅子頭（一頭或いは二頭）を棒持して各戸を廻って祓い行事とするものであるが、獅子頭を持って廻ると共に、昔は、舞いもあったが中止しているという神社もあるので一項設けた）

最近では、佐々木哲哉による分類（『福岡祭事考説』二〇一七）がある。基本的には、平井の分類に準ずるが、祓い獅子を祭礼行事のものと門祓いとに分けている。

○佐々木分類
甲．祓い獅子　一）祭礼→筑後川流域系・位登八幡・英彦山神宮
　　二）門祓い（梅林の各戸祓い獅子舞）
乙．伎楽獅子　遠賀川上流系→嘉穂地方の獅子が周辺の田川・京都・宗像・粕屋・朝倉地域へ（太鼓叩き・廻り打ちが付くことがある）
丙．演劇・狂言獅子　福岡市西区の演劇・狂言獅子

今回は、従前の成果を参考にしながら祭礼と祈祷の行事、舞と所作に行事を加味しながら分類を行った。また、祭礼に伴う獅子のうち、獅子頭だけを抱えて廻るものは分類から除外し、二人立ちで舞はなく

ても巡幸に伴うものは含めた。

Ⅰ．行事による分類

A．祭礼行事の獅子→春・秋の神社の例大祭などの祭りに奉納したり御神幸行列の先駆等を努めたりする。門付けを行なう場合もある。

B．祈祷行事の獅子→夏の祇園祭りに前後して行われる門祓いの獅子。（別の時期に門祓いをおこなう地域もある）

Ⅱ．舞・所作等による分類

a．舞獅子→囃子に合わせて舞を行う。

1）ストーリ性のあるもの→遠賀川上流域の舞獅子

2）祓いの要素の強いもの→田川地域の「五段・六調子」「英彦山神宮の獅子舞」

b．祓い獅子→基本的に囃子の楽器は無い。イメージとしては、連続した所作が少なく魔祓い様の儀式的な所作がいくつか組み合わさる。筑後川流域の甘木雛城神社の獅子舞・久留米スサノオ神社・若宮神社の獅子・恵利八幡

c．門祓い獅子→祓いが中心で体の動きはほぼ無く、口でカクカクと「歯噛み」を行なうのみ（囃子は無い）。例として、一般的に行なわれている祈祷行事（夏祈祷・お獅子様等）の門祓いの獅子、福岡平野・筑後川流域・遠賀川流域等で見られる。遠賀川上流域では、舞獅子が門祓いを行う。また、筑後川流域では、b型の簡略化した所作を行う地区がある。

d．演劇・狂言獅子→福岡市西区の演劇・狂言獅子

※県内の獅子は、これらの行事と舞や所作の組合わせによって、ほぼ、次のように分類できる（アルファベットの大文字は、行事の分類、小文字は舞・所作の分類である）

A―a・「祭礼行事の舞獅子」
祭礼の御神幸行事に伴い、舞獅子が斎場や道を祓う。
（遠賀川上流域・田川地域・宗像地域・香椎宮等）
・祭礼の御神幸等で神輿の行列が無い場合、獅子に神の御霊を遷し巡幸する。（嘉麻市平山の獅子舞他）

A―b・「祭礼行事の祓い獅子」
祭礼の御神幸行事に伴い、斎場・道の祓いを行う祓い獅子
（筑後川流域）

A―c・「祭礼行事の門祓い獅子」→祭礼に併せ、門祓いを行う。
（椿八幡の獅子舞（旧穂波町））

B―a・「祈祷行事の舞獅子」
祈祷行事の祭典の後、舞獅子で門祓いを行う。
（遠賀川上流系の夏のお獅子様）

B―b・「祈祷行事の祓い獅子」
祈祷行事の祭典の後、神社のお立ち寄りや戻り、途中の要所で祓いの所作を行い。地区によっては、各戸祓いの折りにも簡単な所作を行う。（筑後川流域）恵利八幡宮（田主丸：祓い獅子）

B―c・「祈祷行事の門祓い獅子」
一般的な門祓いの獅子（筑後川の除く県下で一般的に行われる）

B―d・演劇・狂言獅子→福岡市西区の演劇・狂言獅子　現在は、正月や夏の祇園祭（元岡）、かつては、盆に行われたともいうが、日程は不定期ともいわれる。

四　各地域の獅子の概要

各地区に分布する獅子について、概要を見ていく。地域の括りについては、旧国単位・郡単位で範囲を区切ったが、現在の行政区分と異なる地域や獅子の分布などで、若干変則的に取り上げており、分かり難い部分もあることを御了承いただきたい。

（一）旧豊前国（旧企救郡【門司・小倉】〔七例〕）

旧企救郡は、現在の北九州市門司区から小倉北・南区である。舞い獅子は確認できなかった。祈祷系の門祓い獅子は、菅原神社の秋祭り（小倉南区）で確認された。現在は、省略化されているが、『北九州市史』によると「十月二十三日に獅子舞と称して、獅子頭を持った若者が家毎にまわっていた。行列は、雄獅子・雌獅子の頭を持つ二人、ジョウラ面（鼻高面または天狗面ともいう）をかぶり、長い漆染めの杖をつく者一人、それに道行きの囃子方として太鼓持ち二人、太鼓打ち、笛、鉦が各一人で、これらが一団となり、これに米入れの袋を持った二人の若者が続く。道中をはやしながら獅子頭の口をカツカツと鳴らして魔払いをする。家々では獅子が来ると、塩水をつけたササをふりかける。獅子の口に頭をかんでもらうと魔払いになるといって、家中の者が祓いのため獅子の口を頭にかぶせてもらう。これが済むと「獅子の口」といって、一合ぐらいの白米を獅子の口に入れる。このほか、旧企救郡には、「敷地祓い」という行事があり、現在でも周辺の主要な神社で盛んに行われている（例として門司区の波上八幡や小倉南区の荘八幡等）。神社の例大祭に先立ち、門祓いを行う行事で、榊台という小型の神輿を担いで地域内を各戸を祓ってまわるのである。この行事を「獅子舞」・「獅子回し」と呼ぶ地域がある。しかし、名称とは違い獅子は出ない。例として、西大野八幡宮（小倉南区）、東大野八幡宮（小倉南区）の「秋の例祭」では、この例祭に先だって敷地祓いをする。これは「ししまい」と呼ばれ、内容は東大野八幡宮の場合と同じである。蒲生神社（小倉南区）の高野・山田地区では、代表の三人の当主がお迎えにいき、榊台（神輿の小型のもの）に御神体を移して帰り、氏子の各家をお祓いしていた。これを「獅子起こし」と呼んでいた（北九州市史編さん委員会　一九八九）。

敷地祓いについて、『到津八幡神社小史』によると「享保時代頃は、獅子頭をもってまわっていた、そのころは、修験者の影響が強かった」とあり、敷地祓いも元は、榊台では無く獅子頭を持ってまわっていたようで、その名残として獅子起こし等の呼び名があると考えられる。獅子祓いについては、江戸時代の庄屋日記等に記録されている。江戸時代の『中村平左衛門日記』や『小森尚之輔日記』には、獅子祓いのことが、詳しく書かれている。

（二）旧豊前国（旧京都郡・旧築上郡〔九例〕）

苅田町の宇原神社で師走一二月に神職と獅子によって祈祷行事の「獅子廻し」が行われている。現在の社家の時代に始まったようで、起源は、昭和一〇年頃と言われている。年末の大祓の一環として、お札配りと祓いを行う。

みやこ町（旧豊津町）では、祈祷系の門祓いの獅子は、徳永、彦徳、高崎の三箇所で確認されている。徳永では、四月の春祈祷、水神祭の祭りと同時に相撲等とともに行われる。家内安全・悪魔退散・五穀豊穣・無病息災の祈願である。疫病は水を介することから、水神祭に取り込まれたのであろう。行列も御幣を持った宮総代に神官、獅子が続く。各家をまわり、家の中に上がりこみ、部屋を祓ってまわり、家人を獅子頭で祓う。彦徳では、春祈祷として行われ、牛馬安全、無病息災・五穀豊穣を祈る。

祭礼行事の舞獅子は、大分八幡神社（行橋市下稗田）と近くにある大久保の獅子舞（みやこ町勝山）がある。ともに遠賀川上流系の獅子が伝わっている。大分八幡神社では大分八幡神社（飯塚市）から習ったといわれているが、大久保の獅子舞では、子どもの太鼓打ち・廻り打ち等などは無く、舞や楽も変容しているようだ。

等覚寺（苅田町）・求菩提山（豊前市）・松尾山（上毛町）には、修験道の松会行事のうちの神幸祭行事の名残の獅子がある。等覚寺では、

松会行事に先んじて松庭を祓う。求菩提は、現在獅子頭が残るのみである。松尾山では、英彦山から習い、最近復活した。

（三）旧豊前国（旧田川郡〔三三例〕）

田川地域は、遠賀川支流の彦山川、中元寺川流域及び今川流域の上流に位置する。祭礼行事の獅子は舞獅子で、地理的に旧筑前国と国境を接することから、隣接する嘉穂郡の綱分八幡神社（飯塚市庄内）や大分八幡神社（飯塚市筑穂）から伝わったと言われる。系統的には、中元寺川下流の金田稲荷神社（福智町金田）・南木菅原神社（福智町金田南木）は共に綱分八幡に習ったもので、金田稲荷神社は、記録によると「宝暦三（一七五三）年に獅子頭寄進」の記録がある。南木菅原神社は、明治二〇年代に始まっており（「上野手永各社諸祭礼式書上帳」（一八七〇）には、明治三（一八七〇）年の獅子舞の記載あり）、さらに、この地域から田川の各地へと伝わる。金田稲荷神社から上伊田西（田川市）へは言い伝えによると、天明年間（一七六一～一七八八）の大飢饉の後、獅子舞とともに稚児舞を奉納したといい、この頃伝わったものであろう。昔は村中を巡回し、軒先で、村中安全、夏中諸病退除、牛馬安全を祈った。また、町内の上金田へと伝わり、さらに経由して白髪神社（福智町伊方古門）へも伝わっている。また南木菅原神社からは昭和八（一九三三）年に岩屋（田川市）へ伝わっている。これらの獅子舞は、楽打ち（稚児舞）を同時に演じる。

中元寺川上流の猪膝白鳥神社（田川市猪国）の獅子舞も伝染病の治癒祈願のため綱分八幡宮から習ったといわれ、正徳三（一八一三）年が始まりと言われる。添田町の「野田の獅子舞」は、ここから伝わったと言われる。田川では、舞獅子のことを獅子楽と呼ぶ。これは、嘉穂郡で子ども達が行う太鼓の打ち込みや円陣を組んで舞う「廻り打ち」を田川では「楽打ち」と呼んでおり、それを同時に行うためといわれる。

田川には、この地域独自の獅子がある。「五段・六調子」の演目で、田川市位登八幡宮が発祥ではないかといわれている。位登八幡宮の獅子舞は、江戸初期に始まったと言われるが記録類は無い。また宇佐八幡宮から習ったとされるが、宇佐八幡宮でも記録が無い。演奏は太鼓のみで、動きも斎庭全面を踏み締める所作が強調され、舞獅子というより祓いの要素が強い獅子である。周辺では、中元寺川沿いの田川市猪位金のほかに、同下弓削田須佐神社、同見立の貴船神社でも舞われている。貴船神社では、明治二〇（一八八七）年頃に地元から習いに行き貴船神社の神幸祭で披露したのが始まりとされる。このほか、「五段・六調子」の舞は、川崎町では、田原正八幡神社、大石神社の森安・池尻地区、太田で舞われ、添田町の「野田の獅子舞」にも「五壇」という演目で伝わっている。

川崎町では、大分から伝わったといわれる遠賀川上流系のお囃子が入る舞獅子を曲獅子と呼ぶ、太鼓のみで祓いの要素が強い五段・六調子と区別したものであろう。この地域では、五段・六調子は、曲獅子よりも格が高いといわれている。永井・東川崎・木城（廃絶）・安宅にある。

添田町では、上落合と下落合に伝承されている。下落合は幕末に木城（川崎町）から伝わる。演目に「イリ・ノリ」、上落合では、「イリハ・ナカ・ノリ」があり、遠賀川上流の大分系と言われている。野田の獅子舞（添田町）は、文化元（一八〇四）年に、日向から招いた舞楽の師匠から習得されたといわれるが、演目の「マエニワ」は猪膝（田川市）から伝わったものといわれ、「五壇」は、中元寺川流域の「五段・六調子」である。

「祈祷行事の門祓い獅子」は、お獅子廻と呼ばれ、夏に行われる。彦山川流域の田川市夏吉・糒・伊加利、大任町上今任・峰・向田で確認されている。大任町峰では、八月の土日のうちの一日を選び、虫祓いの祈祷のあと、祓いに向かう。行列は、宮司・獅子・鉾・面・賽銭箱の順で、途中で子どもが元気に育つよう頭をくわえたりする。向田は、峰と一緒に行っていたが出雲神社を勧請してからは無くなった。現在双方ともに行っていない。上今任野原八幡も病魔退散のため行っていたが、祭典のみとなり平成一〇（一九九八）年にそれも中止となった。糒は戦後廃れ、伊加利（田川市）は、古くは門払いを行っていたが、

現在は祭典のみである。夏吉（田川市）では、七夕の行事で、前日六日にお汐井とりがあり、夜は貴船神社でお籠り、翌朝より、神官がムラを個別に回ってお汐井を榊に浸して振りながらお祓いをする。それに続き、獅子・五色旗・金幣・太鼓・賽銭箱の行列が続き各組ごとで受け渡していく。引き渡しの際、各組で御神酒を出し、行列には神社総代や各隣組長がついて回る。戸口に家族が並び獅子を拝んでは触れてもらうという疫病祈願の方法として始まったと言われる。田川地域では、全般に同様の行列、方法で行われていた。

今川流域の赤村小内田（こうだ）地区は、「おししかい」とよばれて、八月七日頃に行われる。特徴的なのは、神社で祭典を終えた後、小さな神輿で集落内を祓い清めていくが、この際、獅子の随行は無く門祓いも行われず、組毎の要所でのお祓いを行う。これは、企救郡で行われている「敷地払い」に類似するものと考えられるが、詳細については不明である。

さらに、福智町では、江戸時代と思われる「立花家文書」（『上野村誌』昭和五（一九三〇）年：年代及び所在不明）に、現在は行われないが、上野中宮神社（旧赤池町）の神幸で一〇月朔日から六日まで、獅子廻（シシカイ：獅子祓いのこと）で氏子圏の一二箇村を回っていたことが記されている。また、香月とみの文書（明治三（一八七〇）年）には、上野福智中宮神社の獅子廻で一〇箇村を一〇月に廻るほか、鋤木田、伊方、弁城の村の氏神で六～七月に獅子廻を行ったことが記され、その目的が「流行病為退散」・「諸病為退散」とある。また南木村（旧金田町）の天満宮では四月の「祭礼例年執行」で「獅子楽」と記されている。獅子楽とは、この地域では獅子舞のことであるが、南木村に獅子舞が伝わったのは明治二〇年代といわれるので、現在の獅子舞との関連は不明である。

（四）旧筑前国（旧遠賀郡〔三一例〕・旧鞍手郡 ※現北九州市の一部含む〔五一例〕）

遠賀川の中下流域である。現在の北九州市の若松区・戸畑区・八幡東区・八幡西区、遠賀郡、直方市・宮若市・鞍手郡に当たる。基本的に祈祷行事の門祓獅子のみが分布する。

旧遠賀郡は、遠賀川下流域及び洞海湾に面した地域で現在の北九州市若松区・八幡東区・八幡西区・戸畑区を含む。

『若松神社誌』（一九七二）によると、若松区（北九州市）の神社の一部では、夏の時期、祈祷行事の「お獅子さま」が行われていた。現在は、蜑住（あますみ）の戸明神社や日峰神社で祭典のみが行われている。

戸畑地区の戸畑祇園山笠では、「獅子舞」と呼ばれる行事を行う。祇園山笠が始まる別日に神職・関係者と獅子で道祓い・辻祓いを行う舞わない祓い獅子である。これは、隣接する企救郡（旧豊前国）で行われている敷地祓いの影響かとも思われる。企救郡の場合、獅子は無く、その代わりに小型の神輿の榊台で祓いを行うが、こちらでは、神職に獅子が同行する。「天籟寺ムラおし志のはじまり」（戸畑市教育委員会）には、お獅子の入る所、人数、接待など、行列の様子が記載されている。それによると行列は、「御志しまい四人・御へいもち壱人・御むくりこくり（鬼面？）弐人・御たいこ四人・御ふゑふき三人・御はさん箱もち一人・御かきもち弐人」とある。また、始まりについて、「明和元年（一七六四）までに五一年」になると記されており、逆算すると正徳三（一七一三）年から始まったことになる。

『我らの枝光』（一九八五）によると「諏訪神社（八幡東区「現枝光八幡宮に合祀」）においても秋祭りの前々日より、ムラ中を戸別に回ってお祓いを行っていた」とある。さらに八幡東区南部の河内地区では、「九月に青年たちが「おしっさん」として獅子頭と天狗面、御幣をもって各家をまわり、門口で獅子頭の口をカタカタさせ忌み穢れを払った。お礼には、祝儀・米・芋などがあり、野菜類は処女会により料理され、白山神社でお籠りをした」という。芦屋町では、芦屋役者が活躍していた頃、正月に獅子の門付けが行われていたという。遠賀川左岸の岡垣町内各所では、病気や災難を払うため獅子祈祷が行われていたようである。山田の氏森神社では、七月一五日に、赤・青の天狗面を持った青年の先導で神職などの行列が家々を訪れた。家族が出揃ったとこ

ろでお祓いを行い、獅子頭を持った青年が「オンカク」と叫び「ガチャン」と閉じていたという。

旧鞍手郡では、祈祷行事の門祓獅子が、地域内の多くの場所で確認できる。特に鞍手町・宮若市に集中する。さなぼりの終了後から祇園祭で行う地域が多い。

八幡西区では、遠賀川右岸の野面（八幡西区馬場山）にある八所神社の秋祭りの時、神輿で笹尾川上流にお汐井を取りに行き、「獅子廻し」を行っていたという。

鞍手町内では、『鞍手町誌民俗編』によると、「お獅子様」は「獅子祭り」ともいう。暑さの厳しくなる七月中の土用の入り頃に行われ、ムラの一軒一軒をまわって夏の悪疫祓いと家内安全を祈願する。マヤ（厩）も祓う。

祭りの方法は、早朝にお潮井とりを行い、神社での神事の後、神主と氏子がムラの各戸をお祓いしてまわった。氏子はクミごとに雌雄の獅子頭を持って個別にまわり、戸口で口を開閉させてカポカポと鳴らし、鉾で「エイ」とか「ソイコウ」と掛け声をかけ、イエの中に向けて突き、お潮井を振ってお札を配った。お礼は麦初穂といい、昔は、各戸麦一升が一般的であったという。

また、『太宰管内志』をまとめた、江戸時代後期の古門神社の神官伊藤常足が残した「伊藤家家事雑記」によると、管轄した地域の古門・本村・神崎で「お獅子様」を受け持っていたようである。神崎では、水神祭に続くお獅子様の行事が伝えられている。

宮若市は、旧若宮町と旧宮田町が合併して誕生したが、内容的には、ほぼ、鞍手町と同様である。

旧若宮町では、オシッサマと呼ばれ、夏の病や災いを防ぐための行事と言われている。サナブリが終わってから一日を選び行う。『民俗芸術』第三巻第一号（「獅子舞号」昭和五（一九三〇）年）には、『筑前鞍手郡山口のお獅子様』と題して山口地区のお獅子様の様子を記録したものがある。稲光は七月一五日に行われ、虫除けのお札を竹に挟んでムラはずれや分かれ道に立てた。平では七月一四日、同夜は祇園祭りとして、各自弁当を持って神社に集まりお籠もりをする。このように祇園さんの日に行うところも多かった。弥ケ谷は、宮田町上有木の内だったので、獅子頭をはじめお札・道具類の受け渡しは、両地の道の峠になる鳥越で行っていた。

旧宮田町でも、「お獅子様（獅子回し）」は田植えが終わった七月初め頃に行われる。一軒ずつまわっているのは本城と飯之倉（一九九五年時点）だけで、外の地区では、お宮か公民館に集まって祭典があり、獅子頭をカポカポと鳴らしてお祓いをし、お札をもらって帰るところが多い。各戸をまわっていたのは、脇野、下有木では昭和一〇年代、長井鶴、龍徳では昭和二〇年代、桐野、芹田では昭和三〇年代、飯之倉でも昭和五〇年代までである。

各家をまわっていた頃は、行列を組み、道中では太鼓を叩きながら、獅子頭の口をカポカポと鳴らし夏の無病息災と家内安全を祈願した。飯之倉では、太鼓の叩き方も「お獅子様太鼓」といって一つのリズムがあったが、現在それを叩ける人はいない。本城では、祓いの順序は、①宮司のお祓いにはじまり、②五十鈴を振り鳴らす。③お札を配る。④お潮井を振る。⑤獅子頭をカポカポと鳴らす。⑥玄関の鴨居に鉾を突くが、昔は傷が残るほど突くのが魔よけになると喜ばれていた。太蔵の上の段組（太蔵東区）では子どもが生まれた時に、山所神社に男は白、女は赤の布に名前と生年月日を書いて奉納するが、このときの旗を持ち行列に加わる。鉾を突くときの掛け声は旧笠松村では「ソウコウ」と呼んでおり、その意味は「そこ」に疫病神がいるから突くというのである。このとき、本城では「疫神社祈祝」、太蔵では「疫神社祈祝」、飯之倉では、「無病息災獅子祈祷祭」のお札を配る。お獅子様の御祝儀には、各家麦初穂一升ずつあげていた。お獅子様が全戸まわり終えると、ムラ中でお籠もりをする所もあった。また、獅子頭を幼い子供の前でカポカポ鳴らしてもらうか、かぶるようにすると「タッシャ（達者）に育つ」といわれてきた。組ごとに場所と時間を決めて獅子頭などの祭具を次の組に渡している。

直方市は、『直方市誌下巻』（一九七八年）によると、「七月十八日に「獅

子祈祷」（おしっさま）。今でも各村村落に残っている」とある。新入の例が紹介されているが、ほぼ鞍手地域で行われているものと同じである。頓野では、一二月の各戸への大祓いの行事である。上境、永満寺でも現在一二月に行っている。元々上境・永満寺は春と秋に行っていた。このほか、中泉でも記録されている。

嘉穂郡と接する小竹町では、町北部の遠賀川右岸の赤地地区は獅子が舞わない「祈祷行事の門祓いの獅子」である。左岸の「南良津の獅子舞」は、宝暦二（一七五二）年に秋のおくんちで披露され次の年から、夏の祈祷で行われるようになったと伝えられる。通常、遠賀・鞍手の祓い獅子では舞獅子は行わないが、ここでは、「夏祈祷の門祓い」で舞獅子を舞う。祈祷行事の門祓で舞獅子が行われるのは遠賀川流域では、最北端に位置する。また、舞については、町内新多や昭和四〇年代、遠賀川の東側に隣接する頴田町上勢田からも習ったといわれる。このほか、現在、消滅しているが、亀山神社（勝野）、絹干神社（新多）でも行われていた。絹干神社では、獅子舞と一緒に神相撲も行われていた。

（五）旧筑前国（旧嘉穂郡〔八三例〕）

遠賀川上流域の旧嘉穂郡である。明治二九（一八九六）年まで、飯塚市以西の嘉麻川、庄内川流域の嘉麻郡と以東の穂波川流域の穂波郡に分かれていた。この地域は、遠賀上流系の舞獅子の発祥の地でもあり、県下でも最大の舞獅子の集中地帯である。「祭礼行事の獅子」と夏の「祈祷行事の門祓獅子」などすべての獅子は舞獅子で行われる。そして、おくんちなどの祭礼行事のなかで神輿の巡幸が無い場合、神遷しされた獅子がムラを巡る地区がある。「祈祷行事の門祓い」では、各家毎にまわる地域と簡略化されて要所で舞う地域がある。

この地域の獅子舞は、大分（八幡宮）系と綱分（八幡宮）系で呼ばれることがある。これは、獅子舞を習った神社の系統をさす。いわゆる嘉穂郡は、明治二九（一八九六）年までは、穂波郡と嘉麻郡に分かれており、大分八幡は穂波郡の中心的な神社であり、同じように綱分八幡宮も嘉麻郡の主要な神社であった。ともに祭礼行事で舞獅子を行う。

また、地域によっては、一年間に廻す回数も多く、春・秋に獅子舞を行うところや、正月・春祭り・夏祈祷・秋祭りなどで複数回廻す地区もあったという。

嘉穂郡は、県下で最も舞獅子が集中する地域であり、すべてを紹介することは難しいため、（A）祭礼行事に伴う舞獅子、（B）祈祷行事の門祓い獅子、（C）祭礼行事の門祓い獅子の三種類に分けて見ていく。

（A）祭礼行事に伴う舞獅子

はじめに、福岡県の舞獅子の中心的な存在でありルーツともいえる福岡県指定「大分の獅子舞」（旧嘉穂郡筑穂町）と、「綱分の獅子舞」（旧嘉穂郡旧庄内町）について触れてみる。

飯塚市の大分八幡宮（旧筑穂町大分）は、筥崎宮（福岡市東区）の元宮ともいわれ旧穂波郡の代表的な神社である。この系統の獅子舞は、遠賀川上流から田川地域にかけて多く見られ、ほかに東は、京都郡・行橋市方面、西は、香椎宮（福岡市東区）、津屋崎（福津市）、また南は、筑後川流域の恵蘇八幡宮（朝倉市）にまでその伝播が見られる。「大分の獅子舞」は、戦国時代の争乱で絶えていた祭礼を、江戸時代の中頃の享保年間（一七一六～一七三六）に再興することとなった。時の庄屋であった伊佐善左衛門が、享保五（一七二〇）年、村人一五名（舞役八名、楽人七名）に二箇月間、京都の男山の石清水八幡宮に伝わる獅子舞を習得させ、享保九（一七二七）年の放生会に奉納したのが始まりとされている。「享保九年七月の大当送帳」の序文に「御獅子楽始候付十四日御宮祭座祈祷之為執行有之・・・」とある。舞はハナノキリ（イリハ）・ナカノキリ（ナカ）・ノリ（キリ）の三段構成で、所要時間は七分位である。雌雄の獅子の胴の中に、それぞれ二名が入って舞う。最初のハナノキリは、左に雌獅子、右に雄獅子が並んで緩やかに舞い始め、ナカノキリは雌雄が相対して舞い、ノリは動きが激しくなり相対して舞いながら、雌獅子を左において、ハナノキリとは向

きを逆にして終わる。内容は、雄獅子と雌獅子が最初見合いをし、次に恋をして、最後は恋に狂って乱舞する様を表しているという。楽方は大太鼓、小太鼓、笛、胴拍子で、大太鼓は小学生男児の役で、獅子が舞っている時、小太鼓（舞はこのリズムによる）、笛、銅拍子に合わせて叩く。

獅子は、神社、お旅所などの斎庭、巡行の道筋、また、決められた場所や家などで舞を行う。昔は春も舞っていた。

同じく旧嘉麻郡を代表する神社として飯塚市の綱分八幡宮（旧庄内町綱分）がある。文献では、天明六（一七八六）年に獅子舞を奏したという記録がある（『庄内町誌』）。ここから習ったといわれる獅子舞が、旧嘉麻郡内や田川地域で多く確認されている。基本は、大分系と思われるが、舞や楽等で一部違いもある。また演目が大分のものがイリ・ナカ・ノリの三段構成に対し、綱分のものは、前ニワ・クルイの二段構成で、その他に新馬場・古馬場・神殿入がある。また「大分の獅子舞」の子どもが演じる「大太鼓」の代わりに「廻り打ち」と呼ばれる楽も舞う。双方ともに、御神幸で神輿の行列に伴う典型的な「祭礼行事」の獅子である。この地域の特徴のひとつとして、前述の「獅子舞」とともに、太鼓の打ち込みや子ども達が円陣を組んで一年間の農作業を表すといわれる「廻り打ち」と呼ばれる楽がある。比較的「綱分系」に多く見られる。他の地区では「三番叟」や「杖楽」・「鉦打ち」などを行う地域がある。

獅子舞は、大分系では、序（マエノキリ）、破（ナカンキリ）、急（ノリ）の三段から構成されるものが基本となり、これに、神社の敷地に入る際の「馬場入り」の舞いや、神殿に入る際の「神殿入り」などの演目がある。

（B）祈祷行事の門祓い獅子

「祈祷行事の門祓い獅子」は、飯塚市の北部から西側（旧飯塚市北半部、旧頴田町、旧庄内町）に集中する。また、嘉麻市にも一例確認される。「夏祈祷」や「御祈祷」、「獅子祈祷」と呼ばれ、神職の各戸祓いの後、各戸で獅子舞が行われる。夏季の疫病予防と家内安全を祈って行われている。

頴田町の佐興地区では、獅子祓いの際に昼食（ちゅうじき）を挟んで岩戸神楽の「岩戸開き」と「神相撲」が行われる。神相撲は、神楽の演目などにも見受けられるが、力士役二人と孕（はら）み女が登場し、曲芸的な相撲やこっけいなやりとりを行う。周辺の小竹町新多（廃絶）、飯塚市柳橋でも確認されている。また、以前は馬屋等も祓いを行い、菖蒲を配っていた。

下山田の射手引神社の祇園の獅子舞は、各戸祓いで、清道旗・鉾に赤・青の鬼面を吊した鉾面と共にまわる。

「柳橋の獅子舞」は、享保一五（一七三〇）年の撃鼓神社の文書に、獅子舞を五穀神社に奉納したという記述がある。古くは、中、庄司、柳橋、津島、吉北の五地区でも行われていた。各戸では、獅子が「歯噛み」などはせず、捧げ持つだけの時期もあった。デハの曲の舞いは「いもほり雌獅子」と呼ばれる。中（なか）の撃鼓神社でも「獅子御祈祷」と呼ばれ、戸別祓いを行っている。乙丸（おとまる）の獅子舞いは、比較的行列が残る。まず、お汐井で身を清め、猿田彦の鉾面、清道旗、御神燈、幟、獅子、笛、太鼓の順で進み、獅子舞の演目も道行き・イリハ・ナカ・キリ・神殿入りの五曲がある。

口ノ原の獅子祈祷は、昭和三八（一九六三）年までで獅子は各家をまわらなくなったが、彦穂神社には、嘉暦元年の獅子頭や嘉永六（一八五三）年の祭礼の御神幸行列に獅子が描かれた絵馬が残る。絵の残りは非常に悪いが、古い写真などで確認すると、田植後か刈り入れ後に、二頭の獅子と共に鼻高面、人形山、提灯等の行列がムラを巡っていた様子が描かれている。

（C）祭礼行事の祓い獅子

夏の「獅子祈祷」などとは別に、祭礼に合わせて、獅子の門祓いを行う地域がある。基本的に、祭典の後、門祓いにまわるのは同じである。秋祭りのおくんちが多い、飯塚市の旧穂波町椿八幡宮、嘉麻市、旧稲築町や、旧嘉穂町の一部において、それぞれの祭礼行事の祭典を終了

した後、ムラの中を戸別もしくは特定の場所をまわり獅子舞を行う。

旧穂波町内の獅子は、秋祭りで行われる。椿八幡宮の氏子は、椿・弁分・安恒・楽市・秋松・堀池の六地区で構成される。椿八幡宮の氏子であるとともに、地域内にはそれぞれ神社があり、二重氏子となっている。この地域は、おくんちの祭り前にあわせ、地元の各家々を、「門祓い」してまわる。

嘉麻市内でもおくんちの獅子舞として、旧稲築町では、山野（九月二三日）、口ノ原（九月二九日）、岩崎（一〇月一〇日）、漆生（一〇月一五日）、才田（一〇月一六日）、鴨生（一〇月九日）、平（一〇月一九日）で行われている。

また、平山の獅子舞（旧碓井町）などのように、神輿や山車は巡行せずに、獅子に御神入れを行い御神幸をする地区もある。

（六）旧筑前国（旧宗像郡〔二例〕）

旧宗像郡には、祭礼行事の舞獅子が福津市津屋崎の豊山神社（練原）、金比羅神社（在自）に継承されている。練原の獅子楽は、延享五（一七四八）年に穂波郡大分村（現飯塚市大分）から伝授されたとされる。きっかけは、大分から練原に嫁入りした人の縁であるという。

九月の豊山神社の御神幸で奉納される、在自の金比羅神社の獅子舞は、明治二一（一八八八）年に在自の新町組が加わったことに始まる。旧津屋崎町内の練原から在自に養子に来た人が伝えたとされる。

（七）旧筑前国（旧糟屋郡〔三三例〕）

旧糟屋郡域では、久山町の一例が舞獅子であることを除き、「祈祷行事の門祓獅子」で、地域により開催時期が異なる。

名称は、古賀市では「シシマイ」、他では「シシマワシ」が多い。一例のみ「シシマツリ」がある。時期は、七月の夏が多く「祇園祭り」で行われているほか、粕屋町では正月、久山町ではおくんち等で行われる。

目的は、五穀豊穣、家内安全、無病息災とされている。行列は簡略化されているところが多い。

古賀市内では、六箇所が確認され、どれも七月の祇園祭りで行われる。新久保の夏祭り（若八幡宮）、庄の夏祭り（綿津見神社）、薬王寺の祇園祭り（白髭神社）、小山田の祇園祭り（小山田の斎宮）、駅前古賀神社の祇園祭、青柳神田の祇園祭があり、青柳神田での祇園祭では、獅子が茅の輪をくぐった後、各家々に厄祓いにまわる。

新宮町では、「獅子廻し」として四例が確認され、正月元旦には、原上の「子供獅子廻り」（熊野神社）、七月の祇園祭りとして新宮の祇園祭り（磯崎神社）、的野の祇園祭り（熊野神社・須賀神社）、一〇月の「湊のおくんち」（綿津見神社）が確認されている。

久山町では、山田地区の斎宮と若宮八幡宮に残っている。時期は秋で、おくんちの際に行われる。

斎宮では、一月一六日に祭典を行い、神官によって祝詞の後、獅子面のお祓いがある。一七日の「獅子廻し」は、「おしっさん」と呼んで古くから行われ、五穀豊穣、家内安全、無病息災を願って各家をまわる。行列は、唐草胴衣をつけた雄獅子（青面）、雌獅子（赤面）の獅子頭と、榊、御幣、御汐井、賽銭箱をもった数人の人が「キャーフ・キャーフ」と連呼しながら各家をまわり、表口から入ってお祓いの後、獅子頭をその家の人の上に被せて悪霊を除き神の御加護を願う。昔は、「獅子廻し」の人を座敷に通して酒肴でもてなし、お賽銭を上げたが、今は行っていない」（『久山町誌』二〇〇六）。若宮八幡宮でもほぼ同様の内容で行われる。舞獅子として上久山白山神社がある。正月に行われているが、この獅子舞は、昭和二（一九二七）年に披露した後、一度も舞われる事無く五五年が経ち、昭和五七（一九八二）年に香椎宮の獅子舞から指導を受け再開している。

粕屋町では、大隈（おおくま）、長、原、内橋（うちはし）、原町（はるまち）、酒殿（さかど）、甲仲原（こうなかばる）、乙仲原（おつなかばる）で確認されている。それぞれの神社に所属し、新年の祝いに子ども達が獅子頭をかぶって家々をまわる。

「正月に行う長者原では、家々をまわる際に、輪切りの大根に松・竹・梅を挿した「松竹梅」という祝い物を配る。内橋では、さらに大

根の上に大根で作った大黒さまを据え、「とびとび」と呼んだ。そして、同じように各家に持ち歩いて、祝いのことばを述べていた。神社のお札を配り御祝儀をもらう。原町では七月の第一日曜日に、子ども達が各家をまわって「獅子廻し」をし、志賀神社のお札を配り祝儀をもらう。酒殿では三宮神社に所属した「獅子廻し」、甲仲原では、駕輿八幡神社と志賀に所属した「獅子廻し」があり、それぞれの神社の祭りの際に子ども達が「祝うた」といって各家をまわる。江辻、戸原では、江戸時代に部木の八幡神社の祭りのときに、「獅子舞」を奉納していたことが神社の記録に残る」（『粕屋町誌』一九九二）という。

須恵町の乙植木「乙植木天満宮」では、七月第四日曜日「四と四の一六で祝うた～」と歌いながら家々をまわり、無病息災を祈って住民の頭に獅子を押し付ける。

（八）旧筑前国（福岡市内〔三九例〕）

福岡市は、旧糟屋郡、旧那珂郡、旧早良郡、旧糸島郡等が範囲に含まれる。そのため、この旧郡単位に見ていく。全体としては、香椎宮の伎楽系舞獅子、西区の演劇獅子などのように舞や動きがある獅子や演劇・狂言を取り入れた獅子は、早い時期より知られていたが、「祈祷行事系の門祓獅子」については、芸能要素を持たないことから祓いの年中行事の一つとしての認識でしかなかったようで、実態については不明であった。その後、平成二五（二〇一三）・二六（二〇一四）年度に行われた『福岡市における獅子祭りの分布と現状に関する調査』により、市内には、「シシマワシ」、「シシマツリ」、「シシゴモリ」、「シシマイ」と呼ばれる「祈祷行事の門祓獅子」があり、市域の都市部（旧唐津街道沿線）から平野の農村部、博多湾岸の漁村部まで広い地域で伝承されていることが明らかになった。今回、これらの成果を交えながら福岡市内の獅子について「祈祷行事の門祓い獅子」、「祭礼行事の舞獅子」、「演劇・狂言獅子」を概観してみる。

（A）旧糟屋地域（東区奈多・和白地区）

（a）祈祷行事の門祓い獅子

現在の福岡市東区では、五つの地区、三つの神社で行われている。和白・奈多地域では、七月の祇園祭に行われるが、奈多は、正月・おくんちでも行う。和白大神神社では、江戸末期に始まったといわれる。いずれの地域も、当日は志式神社の宮司による祭典のあと門祓いに向かう。門口で「トウルルルル」と、獅子の鳴き声のまねをした獅子が玄関口に来る。大神神社では、家人は、頭を軽く垂れて、獅子頭を軽く頭に載せる。その後、お初穂を三方へ載せる。奈多地区では、玄関内を一回りして出て行く。子どもがいる場合は、獅子頭を軽く頭に載せたり、噛む真似をする。奈多では、一月二日に四町内が保有する獅子頭を年に一度、獅子祓いをして魂入れをする。また、獅子頭の下面中央には孔がある。粕屋町に隣接する多々良の若八幡宮では、香椎宮の宮司が、多々良川で祭祀を行った後、多田羅会館へ戻り、そこから二手に分かれて、「門祓い」に回る。玄関の中では、獅子頭を前後、上下に数回動かし、家人からお初穂を受け取る。代わりに紅白餅、「香椎宮蝗虫退壌御祈祷」と「若八幡御守護」のお札を渡す。

（b）祭礼行事の舞獅子

旧糟屋地域では、神幸行事の舞獅子として福岡市東区の香椎宮で、福岡県指定無形民俗文化財の「香椎宮の獅子楽」がある。起源は、香椎獅子楽の世話役の話では、明治年間に福岡市東区浜男の人が、大分で習ったものを、香椎の青年に教えたという。戦後も昭和三〇年代に大分へ習いに行ったこともあるという。

（B）旧那珂郡・福岡城下地域

現在の福岡市内・中央区・博多区・南区で、ともに「夏の大祭」、「夏越し祭り」に合わせて行われる。名称も「獅子祭」、「獅子廻し」、「獅子舞祭」と呼ばれる。警固や大名では、移動中太鼓に合わせ、ガンゾイもしくはギャンゾイと叫ぶ。唐人町では、獅子頭は神輿に載せる。昔は頭にかぶっていたという。南区の若八幡宮では、六〇年以上前に途絶えたが、博多祇園山笠の追い山が終わった日に、「門祓い」をし

たという。高宮神社では、獅子を載せた神輿を高く掲げ、その下をくぐらせ祓いとしている。目的は、魔除け、家内安全・無病息災で、商家では商売繁盛が加わる。

（c）旧早良地域　現在の福岡市内・早良区・西区（早良郡）

全て、祈祷系の門祓い獅子で、「獅子廻し」の名称を使う所が多い。七月一五日の祇園に近い日に行う所が多いが、早良区加茂のように、享保の飢饉以降、七月二三日に行うところや、月末に行うところもある。市内では、お潮井とりをするところが少なくなっているが、この地域では、まだ数箇所確認できている。「獅子祓い」の順序は、神社を出発したあと、掛け声を掛けながら地区内をまわる。城南区田島では、お獅子を神輿に乗せる。また、神輿の代わりにマチをまわるようになったところもある。掛け声は、七隈地区の「トーンコセ」、その他「ワッショイ」が多い。各戸祓いをしないところも多い。マチまわりのみで獅子頭の御祓いやお初穂も無いところもある。早良区高取では、神職・獅子・賽銭箱・子ども数名で、神職の祝詞の後、子ども達が「商売繁盛、家内安全」と唱え、賽銭箱の人がお札を配り、お初穂を受け取る。昔は雄獅子・雌獅子で戸祓いをした。また、西区金武では、玉串を先頭にし、獅子頭が本殿を右まわりに三回まわったのち、「ワリヨイ・ワリヨイ」と唱える。一行は、軽トラックでマチをまわり、終了後、赤と黒の獅子を年交代で、頭のみ家々を順番でまわしている。

（D）旧糸島地域

（a）祈祷行事の門祓い獅子

「門付けの獅子祓い」が、西ノ浦の宮浦と畑中の二地区でともに三所神社で行われる。宮浦は「夏越しの祭り」、畑中は秋の「おくんち」で行われている。宮浦は、御幣持ちにお潮井・獅子頭の順で、家に着くと御幣を振りながらお潮井を撒き、玄関先で「キンギョサイ」と叫ぶ。そして玄関内で「セーイ」と叫び、家の中に上がる。

今宿の松原獅子舞は、昭和五四（一九七九）年に始まった新しいものである。

（b）演劇・狂言獅子

旧糸島地域では、演劇・狂言獅子が分布している。現在、元岡、今宿青木、宇田川原に残っており、元は、旧早良郡の壱岐にもあった。壱岐の獅子（昭和三五年頃廃絶）は、糸島郡今宿村字妙（女？）原から明治の中頃に伝わったといわれ、拾六町と野方で演じられていたが、今はどちらも残っていない。

また演劇・狂言獅子の起源については、元岡では、明治初年に隣村の泊村（現糸島市）から伝授されて八坂神社の祇園会に奉納されてきたという。その後、明治時代に再興にあたって志摩郡の泊村の大日寺を本拠としていた泊役者の関与がうかがわれる。

今宿青木のものは、昭和五〇（一九七五）年に復活して元旦から八雲神社に奉納しているという。宇田川原のものは、享保年間（一七一六～三六）に、筑前一帯で大飢饉が続いたため、当地の庄屋中村伊右衛門が英彦山に参篭して願掛けを行い、獅子を拝領して帰り、宇多神社に奉納して豊作を祈ったところ、翌年は大豊作に恵まれたので、以後は毎年春に獅子舞を奉納しているという。演目は、「門付」「猿（三番叟）」「萬作」「獅子打ち萬太郎」「餌拾い」「源如」「藤八」「鬼女」があり、どこの団体でもこの中のいくつかを行っている。

獅子舞というよりも演劇的な要素が強いところから、芸能集団との関わりが大きいと考えられ、元岡の獅子舞の伝承などからすると、江戸末期に泊の役者集団との関係で確立され、周辺地域に広がったものであろう。

（九）旧筑前国（旧筑紫郡・旧夜須郡・旧三井郡【一部旧筑後国を含む】〔一二例〕）

筑後川支流の宝満川の中下流域、小郡市、筑紫野市、旧夜須町が含まれる。この周辺には、小郡地区を中心に夏の「祈祷行事の門祓い獅子」が分布する。筑後川流域に分布するシュロ獅子とは違い、布製の胴を使用し基本的に舞わない獅子である。小郡市は、本来旧筑後国であるが、宝満川流域であることから、ここで取り上げる。

筑紫野市には、小郡市、筑前町（旧夜須町）に隣接して、「下見の獅子舞」がある。一説では、江戸時代に疫病が流行った際に病魔退散祈願として始まったという。七月二五日の行事で村中の男が年齢に関係なく参加する。雌雄の獅子頭をそれぞれ持ち、村内の家を一軒ずつ御祓いをしながらまわっていく。獅子頭の口を激しくかみ合わせて音を出し、参加者全員が大声を出しながら、獅子頭を置くための箱や素手で、家の玄関扉、戸や壁、床などを叩き、家の中の邪気などを追い払うという。獅子頭の口で頭をかんでもらうと無病息災であるという。

筑前町（旧夜須町）の四三嶋にも同様の祈祷行事の祓獅子が分布する。四三嶋天満宮の「獅子廻し」は、神社の祭典の後神殿を回り、雌雄の獅子頭と御幣を持って集落の各家をまわり、獅子頭を鳴らしながら玄関から上がり込み、座敷を通り抜けて、縁側から飛び降りる。玄関に出迎えた家人は、若衆が用意していた水をあびせかける。各戸には、玉串を配り魔除けとする。また、御幣を付けた長竿を区の境界に立て、区外からの魔・疫病の侵入を防ぐ。囃子はない。

小郡市内の獅子は、夏祈祷系の門祓い獅子で、「ししまわし」・「獅子追い」と呼ばれている。獅子祓いは、田植え後のサナボリの行事として無病息災・五穀豊穣を祈願し、集落の青壮年を中心に老若男女、小学生も含めて参加する。赤黒二頭の獅子が集落を巡回する。各家では神主が御祓いをして、そのあと獅子がカツカツと歯打ちを行う。移動する際に、「あ～」と叫び続けながら隣へ向かう。このうち「下八坂の獅子舞い」は、神殿の神事の後、赤・黒の獅子と太鼓の打ち手が境内で太鼓や鉦に合わせて舞いを奉納し、神殿を三周してから町内各戸を祓いまわる。興味深いのは、舞いの中で子供達が竿についた紐を獅子にあてる所作である。隣接する佐賀県鳥栖市などの獅子舞で見られる「獅子釣り」の様子を想起させる。これは、『小郡市史』（一九八八）には江戸時代から始まったとあるが、住民によると「鳥栖に習って戦前に始めたという話もある」とも言われる。経過はわからないが、鳥栖地域の影響を受けているようだ。

（一〇）旧筑前国（旧朝倉郡〔二五例〕）

この地域は筑後川中流域の右岸の朝倉市（旧甘木市・朝倉郡朝倉町・杷木町）から東峰村で、東側は大分県境に接する。この地域の獅子は、動きが荒く脚の動きに特徴があり、胴体はシュロで作られている。ほとんどの獅子には音楽が伴わず、舞いというよりも祓いの所作を繰り返し行い激しく動きまわる。この地域は、「祭礼の神幸に伴いながら門祓い」を行うことが多い。また、東峰村のように「祈祷行事の門祓い」のみを行うところもある。

旧甘木市には、この地域の代表格である、三奈木地区と林田地区に所在する美奈宜神社のおくんちの獅子舞がある。両神社の獅子舞はよく似ており、胴体や脚絆、獅子頭のたてがみにまでシュロの毛を使い、激しい「歯打ち」をする。また、神幸の「大太鼓」の巡行では、途中の数箇所決められた場所や、それとは別に、氏子の家に「村廻り」をする。

林田美名奈宜神社の獅子舞は、「蜷城くんちの獅子舞」として福岡県指定無形民俗文化財となっている。特徴は、遠賀川上流域の舞獅子とは違って舞い楽を伴わず、荒々しく暴れまわり、芸能的な要素が少ない。実際の獅子の演技では、郷社と呼ばれる紋付羽織の責任者が付き添い、鼻持ちと呼ばれる獅子経験者の若者が二人、暴れる獅子の口を取って抑える役をする。ここの獅子は、笛・太鼓などの楽は無く、風流化されておらず、舞楽も伴わず芸能的要素も少ない。各所作は、獅子頭を大きく上下左右に振り、脚を小刻みに震わせ地団駄を踏み、激しい「歯打ち」を行い、斎庭中を暴れまわる魔祓いの獅子で、筑後川流域の両岸各地に伝えられているものの中でも典型的なものである。子ども達の頭をかむと病気を除き、獅子が猛に暴れれば豊作になるという。

美奈宜神社は、江戸時代まで、氏子圏が筑前を越えて筑後の恵利八幡神社まで広がり御神幸を行っていたということで、このことが、シュロ系の獅子舞が広まった要因の一つであろう。

もう一つの寺内美奈宜神社の獅子舞は、一〇月に行われ、周辺に所

在する獅子と同様「歯打ち」をするが、神社や御旅所で神輿を迎え入れる際は、三〇秒あまり打ち鳴らす。

そして最も特徴的なのは上三奈木地区の獅子舞で、御神幸の巡行の途中で、「種付け」と呼ばれる感染所作（かまけわざ）を行うことである。祓いと五穀豊穣の祈願が見て取れる。

須賀神社（朝倉市甘木）では、祇園祭に合わせて祈祷行事の門祓獅子が、町内を戸別にまわる。

旧朝倉町の恵蘇八幡宮（朝倉市朝倉）の神幸祭には、二種類の異なるタイプの獅子が舞われる。「山田区の荒獅子」と「恵蘇宿の獅子舞」で、山田区の獅子は、荒々しく激しい動きで雌雄の獅子がかみ合って充足した後、愛情を表す様を描いている。神社等では「本きば」を演じ、家々では「本きば」の半分である「半きば」を舞う。典型的な筑後川中流域系の獅子である。

恵蘇宿の獅子舞は、笛、太鼓による獅子楽に合わせて舞うもので、雌雄の獅子の恋愛の様を細やかに表現している。「もわかれ」と「のり」の二部構成となっている。この演目の「のり」と笛と太鼓の獅子楽は、遠賀川上流系のものである。実際に映像で確認すると、曲は遠賀川上流系のものであるが、恵蘇宿のものにアレンジされ、舞いも筑後川中流系のものである。この地域に遠賀川上流域系の楽曲が伝わっていることは興味深い。

旧杷木町の久喜宮祇園（朝倉市杷木）は、元禄八（一六九五）年に初めて山笠が作られ、毎年地元の人たちにより輪番で祀られている。神幸の行列では獅子が先頭に立ち、家々を廻る。

このほかにも、旧杷木町では、神幸祭の行列に獅子が伴うものとして、杷木神社・志波宝満宮・久喜宮日吉神社がある。夏の祇園でも、志波須賀神社、久喜宮須賀神社で獅子が登場する。これらは、御神幸行列に伴いながら祓いを行う。阿蘇神社（杷木町穂坂）の祭礼では、代宮司が神社から近くの庚申塔へ向かう際、獅子頭で先導して要所で「歯打ち」を行う。

東峰村の旧宝珠山村、小石原村には、夏の祇園系のお獅子様が残る。青竹の杖を持った赤鬼・青鬼が先導して、獅子が集落をまわり家人の頭を噛む。この地域の特徴は、神社の氏子が全体で行うのではなく、各小集落毎に分かれて行う。

（一一）旧筑後国（旧浮羽郡〔一三例〕）

旧浮羽郡の地域は、現在、うきは市と久留米市に分かれている。「祈祷行事の門祓い獅子」が見られる。獅子は、地区により少し異なるが、朝倉地域と同じように、シュロ製の胴であり、青竹を持った赤鬼・青鬼が先導し、祓いの「歯噛み」の際に行う「打ち込み」は、「祝いましょう」・「もうひとうせー」・「いおうてさんど」である。通常、「祈祷行事の門祓い獅子」の場合、「歯打ち」と「打ち込み」が基本であるが、それ以外の「祓いの所作」や堂回りなどを、神社を発つ時と戻るときに行う地区がある。例として祭礼行事に伴う「柳瀬のおくんち」などで見られる。「祈祷行事の門祓い獅子」では、複数の「祓いの所作」が見られる。

うきは市（旧浮羽町・旧吉井町）には、「祭礼に伴う獅子」と「祈祷行事の門払獅子」が行われている。

旧浮羽町の小川樫ケ平では、田植え後のサナボリに「鬼の日」と呼ばれる「獅子回し」を行う。無病息災を願う行事で、鬼がワラジで家に上がり込み（道開けという）竹を叩いてまわる。その後、獅子頭で頭をかみ、次々と通行人達のお尻を竹で叩く。昔は、通称「捕まえ坊主」という逃げ回る子ども達を捕まえ、鬼の所に連れて行く青年がいた。ここでは、獅子より鬼が主役となっている。

吉井町千年の小江八幡神社の「獅子舞い」は、七月二八日に固定されている。起源は不明であるが、獅子頭は二〇〇年以上前のものといわれ、一〇キログラム以上ある。神社で獅子が「祓いの所作」を奉納した後、町内の各家や施設をまわり、そこでも祓いの所作を行う。各戸をまわり終え神社に帰還後、神社の周囲を三周し獅子を奉納する。

出発の際の「祓いの所作」は、まず「始めましょう」の掛け声で、左の赤獅子が頭を左右に振りながら、三歩後退し「口をかぽ、かぽ（歯

打ち)」、更に二歩下がって「かぽ、かぽ」、そして前に五歩進み元の位置に戻り「かぽ、かぽ」、次に右の黒獅子が同様の動作を行う。それが終わったら、二頭の獅子が立った状態で「いわいましょう」(口をかぽ、かぽ)、「もうひとつせーの」(口をかぽ、かぽ)、「いおうてさんど」(口をかぽ、かぽ、かぽ)で終わる。

神社以外では、簡略化され、「三歩下がって、三歩戻る」としていたのが、令和五(二〇二三)年から、いわれのある家以外はさらに略され、「始めましょう」の掛け声で「いわいましょう」(口をかぽ、かぽ)、「もうひとつせーの」(口をかぽ、かぽ)、「いおうてさんど」(口をかぽ、かぽ、かぽ)となった。

終わったら、口に祝儀を入れる。その折、獅子が家人の頭を噛む。行事には、獅子二頭で四人・責任者一人・獅子の交代要員、そのほか、子どもがついて回る。

祭礼行事の巡幸獅子として、七月の「吉井祇園」(うきは市)がある。素戔嗚神社と高橋神社の間を巡行する御神幸行列に併せて神輿迎いや祓いが行われる。

久留米市の旧田主丸地区では、旧浮羽地域の中でも祈祷系の祓獅子が多く分布している。平井武男の『福岡県郷土芸能　民間演芸巻二』で紹介された「獅子舞・甲」(八三頁)として、柳瀬玉垂宮獅子舞(旧田主丸町)が紹介され、そのほかにも恵利八幡宮、川会村字原の天満宮、水縄村石垣神社(以上旧田主丸町)・千年村若宮八幡宮(旧吉井町)とあるが、石垣神社は途絶えている。現在、旧田主丸地区では九箇所で行われている。

筑後川中流域系でよく見られる獅子で夏祭り・祇園祭りの祈祷行事で門祓いを行う。名称は「獅子舞い」、「獅子打ち」がある。また、祭礼行事に分類される柳瀬のおくんちでも門祓いが行われる。

起源は、小川区が江戸時代、原・片の瀬は、昭和の初めと言われる。

目的は、悪病祓い、無病息災、厄除け、家内安全、また、小川では「頭を噛んでもらうと頭に吹き出物がでない」と言われ、同様に亀王子供獅子打ちでは、「かつて皮膚病が流行した時期があり、健やかに育つようにと、生まれたばかりの乳飲み子を獅子の口の中に入れ、無病息災を願う「噛ませ」という風習ができたと言われている」各戸には御幣が魔除けとして配られる」。

時期は、七月に八幡神社(明石田)、矢倉八幡神社(麦生)、祇園神社(片の瀬)、八月には老松神社(小川)、原の天満神社では、九月一五日の夜渡で、柳瀬は高良玉垂神社の一〇月九日のおくんちで行われる。

基本的に、各戸を巡る門祓いを行う。その際、「歯打ち」のみの地域と、祓いの所作を行うところがある。最後は、「打ち込み」等と呼ばれる手締めの拍子を「歯噛み」で行う。御祝儀を口で受け御幣やお札を渡す。

獅子は雌雄一対で、天満神社では髪には御幣が付けられている。胴と脚絆はシュロを使う朝倉・浮羽に見られるものである(柳瀬はシュロを編み込んだ簑を布に裏打ちしている)。又、へらの木の繊維で作った腰簑を使用しているところもある。獅子頭のみで胴衣を着けない地区もある。「祓いの所作」には楽はなく、獅子方が呼吸を合わせながら演じる。赤青の鬼が青竹を持つ。天満神社では鬼の面は和紙製で腰には男性の象徴をつけている。

現在、田主丸地区に残っているものは、夏のものが多く、「祈祷行事の祓獅子」である。恵利地区は、川向かいの筑前側の蜷城の林田神社の御旅所があったと言われ、周辺を含め獅子舞も下流域と中流域の影響を受け合いながら成立したものと考えられる。小川区では、赤鬼・青鬼が先導し、天満宮に帰還後、獅子が鬼を追う形で天満宮の周りを三周する。

久留米市指定無形民俗文化財の「柳瀬おくんちの獅子舞い」では、おくんちの行事で「祭礼の獅子」に分類されるが、祭典が終わった後、神輿などの御神幸行事は無く、獅子による門祓いに出る。「普通騎馬」「振り分け騎馬」「走り騎馬」の三種の舞(坪舞い)と呼ばれる「祓いの所作」を行う。

(一二)旧筑後国(筑後川流域:旧三井郡南部〔二例〕)

大刀洗町は、同じ旧三井郡の小郡市と隣り合わせであるが、筑後川

の右岸に沿って旧田主丸や旧甘木市に隣接している。獅子は頭のみで胴衣は無く一人で持つ。町内には、本郷と山隈に残っていた。ともに「祈祷系の門祓い獅子」である。本郷では、獅子が玄関口に駆け込んだ後、一般家庭では歯を鳴らし、お祓いをする。「祝いましょう、もうひとつせ、商売繁盛」と唱え、新築の家では「祝いましょう、もうひとつせ、両手三言」と獅子役達が言上する。各家庭には、白色の御幣、商店・会社等には金色の御幣、獅子役等関係者の家庭には銀色の御幣が渡される。山隈の獅子舞では、祭典の後、鬼と獅子が校区内の家庭をまわる。鬼が先に、その後を獅子が入り鬼を追い払う。

（一三）旧筑後国（筑後川流域：旧三井郡・旧三潴郡〔二三例〕）

筑後川流域の獅子を考える場合、久留米市の高良山の獅子は代表的なものであり、周辺部に影響を及ぼしたと考えられる。歴史的に見ると筑後地方の獅子舞は、祓いが中心であるが、これは鎌倉時代の初め頃から、田楽美麗法師であった梅津家が、「獅子勾当」として獅子舞を全て独占していたことに起因すると言われている。梅津家は、菅原道真を慕って筑紫に下り、高良山庇護の下、三潴荘夜明（大善寺町）に住み着いたといわれる。高良山の獅子舞が氏子達によって奉納されるようになったのは、一説には、「高良神社御神幸」が復活された寛文一九（一六七九）年以降と言われている。

「高良山の獅子舞」は、高良大社の五〇年に一度の「御神期大祭」及び一〇年に一度の御神幸の先陣・先祓いとして獅子と猿田彦を先導役として勤め、要所要所で舞ってきた。昭和五二（一九七七）年に復活した際、一〇年に一回の舞いでは技が伝承できないということで、毎年高良大社の御神前で上演することとなった。長寿安全・無病息災を願い、獅子と風流が対になって毎年奉納されている。

高良大社には、寛文九（一六六九）年作の獅子頭が所蔵されている。一頭の前と後に二人が入り、赤と黒の二頭で舞う。前の者は、左手を真上に伸ばして約二五キログラムの獅子頭を支え、右手はあごを持ち、開閉する。胴は苧で作られた長い紐を中央部から両側に垂らしている。時々、椿油を塗ってはヨリをかけ直す。このタイプの胴を持つのは、高良山の周辺部から旧三潴地域である。演目は一つで、「神の舞」と呼ばれる。太鼓二基で舞う。その場での足踏みや「歯噛み」などの祓いの要素が強い所作である。おくんちでのビデオを見る限り、所用時間は一分余りである。動きはそれほど無いが、これは獅子頭が重いため細かな動きができないことのほかに、古い形を残す可能性も考えられる。ともに演じられるものに明治一九（一八八六）年に始められた「御井町風流」がある。

次に、高良山に伝わる獅子の所作を見てみる。まず舞い方であるが、①正面に五歩進み、左足から跳んで足踏みをする。（前後の足が揃っている）
②その場で獅子頭を振り落ろし右へ大きく振り上げ、振り下ろして左へ上げる。これを二回繰り返して中心に高く掲げ、二回大きく口をかみ合わせる。
③背面となって同じ動作を繰り返して、元の場所に戻る。再び正面を向いて、獅子頭を同じように左右に二回ずつ振り上げ、正面で二回かみ合わせて終了とする。所要時間は、一分余りである。

獅子の演目では、「神の舞」の所作を演じているのは、高良大社（御井町）と周辺東側に所在する若宮神社と素戔嗚袁神社の獅子がある。比較するために獅子の所作や概要を紹介する。

若宮神社では、境内で舞う「神の舞」と「道行き」での所作がある。神の舞は、最初、本殿前で行われ、前後に動き口で「歯噛み」をする。場所をかえて本殿横では対角線上に向かい合い、交互に入れ替わり途中で口をガツガツと鳴らす。道行きでは、悪魔払いの勇壮な舞を行う。これを「むかう」と呼んでいる。ジグザグに暴れることから、獅子裁判と呼ばれる介添人が付く。

須佐能袁神社獅子舞（草野上町南屋敷）は、七月二四日・二五日（夏休み最初の土日）に行われ、文政一一（一八二八）年の獅子頭が残ると言われる。

須佐能袁神社祇園祭の獅子は、御神輿が神社を出発する前に「神輿

迎え」を数回行う。行列の進行途中、要所で激しく跳躍して迎える。神輿の前では、裃姿の者が堤匠を持った者に差し押さえられる。道中の獅子は、満一歳の子の居る家、御祝儀のあがった家の前で、無病息災・商売繁盛の舞いをしながら行列を待つ。二日目の本殿前での最終の獅子舞は、桜門側と本殿側に赤黒分かれて、笛の音にあわせて跳躍しながら場所を替わる。すれ違うときに、一口「カツン」とかみ合わせる。これを数回繰り返すと、突然暴れはじめ、観客の中に飛び入り広場中を駆け巡り、観客を追い散らしながら、さっと本殿に入る。

高良大社の獅子は、比較的シンプルな所作のみを行う。これは、頭が重いために大きな動きができないことが一因であると考えられる。しかし、祓いを中心とした所作は、古くからの要素を伝えているとも取れる。同じく神の舞を演じる若宮神社、須佐能袁神社の獅子は、高良山のものに比べると動きが激しく、所作も豊富である。筑後川周辺の一部の獅子で類似する所作が確認できる。

久留米市内では、獅子の行事は、このほかにもいくつか記録されている。

天満宮（合川町）の「獅子廻し」は、正月と九月二五日の祭りのときに、お宮の雌雄の獅子頭を取出し、村中一軒一軒座敷に上がって舞い、家人はその獅子に頭をかぶってもらう。そうすると病気にかからないといい、また、その毛を門口に下げておくと流行病が入らないと信じられてきた。（新編筑後の年中行事十二ヶ月）

大善寺玉垂宮のお田植えおくんち、また『久留米市史民俗編』（一九八六）には、素戔嗚神社の祇園会神幸祭、津福本町の獅子舞、上津町本山の天満宮に奉納される「本山風流」の獅子舞、津福本町八幡神社の「獅子回し」、櫛原天満宮の獅子舞、藤光の獅子舞などが記されている。

大川市に所在する西田口（三丸）の熊野神社祇園祭獅子舞は、七月におこなわれる。祭り当日、六時頃から青年たちが街中を住民の安全と健康を祈願し各戸祓いしてまわる。古文書によれば、「仁平二年～貞和三年の間に久留米方面より習得した」といい、「梅津文書」には「獅子舞は仁平二年、大善寺玉垂宮に所属する人々によって熊野神社に奉納されていた」と記されている。この間に「田口から高良社へ獅子舞が奉納されていた」『大川市誌』（一九七七）とある。胴体は、麻系紐毛である。同じく田口町の蛭子神社祇園祭獅子舞（三丸）では、同じように祈祷行事の門祓いが行われていたが、現在は廃絶している。榎津城町の八坂神社神社では現在、門祓いは無く先払いの獅子と神輿が行列を組み、町内を練り歩く。獅子については現在、獅子頭を掲げて氏子の家を巡行するのみとなっている。楽器は太鼓のみである。同じように、各戸の祓いは現在行わず、巡行するものとして榎津の城町八坂神社獅子舞がある。獅子舞は、慶長三（一五九八）年以来、四〇〇年以上伝承されているといわれている。神幸祭の一部として継承され、祭典で奉納される。また、木室地区で「八朔の宮獅子廻し」の記録があるが、詳細は不明である。（『新編筑後の年中行事』一九七二）

旧三潴町に所在する田川西の高良玉垂宮「田川西獅子まわし」は、「祈祷行事の門祓獅子」で五穀豊穣・無病息災を祈念する夏の行事である。二〇～三〇代の大人たちによる獅子が三潴町田川地区内をまわる。平成一二（二〇〇〇）年に四三年ぶりに復活した。

旧城島町の「下田部落祇園祭獅子舞」（下田天満宮）は、昭和初期に始まったといわれるが詳細は定かでない。赤と青の獅子に二人が入り、途中交代しながら各家々を「門付け」してまわる。囃子は男児が行ない、お汐井でのお清めは女児が受け持つ。玄関口で「ソラキター」と叫んで家の人に知らせ、お汐井で清める。獅子は家人に対して獅子の口をカタカタと二、三度鳴らし邪気を祓い清める。西と東の地区境界（堤防）で、獅子が背負った各家の邪気を清めるという意味で、稲わらを燃やし、その周りをまわる「炎の舞い」を行う。このほか、隣接する塚本地区でも同様の獅子がある。

大木町では、現在は上牟田口・絵下古賀・筏溝に残っている。祈祷行事の門祓獅子である。上牟田口では、七月に「獅子舞」が三嶋神社で行われる。明治中期から始まり、昭和四五年頃途絶え昭和五六（一九八一）年に復活した。悪霊祓い・無病息災を祈願する。午前六時に、

二頭の獅子は禊を行い、御祓いが済むと各家を訪れ、家人の頭を噛んで次の家へと向かう。舞いには「芙蓉の舞」がある。獅子のたてがみには、へらの木の皮で作った紐を使う。

絵下古賀では、昔、八月一日に「獅子舞」が地区内をまわっていたが、現在は、高良玉垂命神社の境内にある祇園社で赤黒一対の獅子頭がお祓いを受け、午後から公民館に据えられる。まず獅子頭にお参りし、それから獅子に頭をかざし、赤・黒の順に「パンパン」と鳴らす。御祓が終わると団子と飴湯をいただく。

筏溝地区でも子ども達が、獅子と天狗面を持って各家をまわる「獅子ごま（獅子廻）」と呼ばれる門祓の獅子がまわっている。

柳川地区は現在は行われていない。金納地区では昭和二〇年頃まで六月一日に青年団が獅子舞をして各家をまわっていたという。祈祷系の門祓獅子である。土足で家に上がっていた。獅子にかまれると縁起がいいといわれていた。高島地区の祇園にも以前は獅子舞があり、青年団が舞っていたという。

（一四）旧筑後国（旧八女郡〔六例〕）

八女市・筑後市・広川町に、獅子の胴は、麻系の紐毛で作られている。土橋八幡宮の獅子が祭礼の行道獅子のほかは、祈祷系の門祓獅子である。

筑後市の雷神社（江口）には「獅子回し」の行事がある。その起源は明らかではない。約二〇年間途絶えていたが、昭和五四（一九七九）年に再開された。祭りの日は八月一日で、青年により、獅子が激しく口を打ち合わせながら地区内全戸を巡り、家人は頭をかんでもらえば一年無病息災といわれている。まず小学生による潮井採りと全戸の塩祓い、続いて中学生らが、一対の柄つき天狗面による「テング回し」をする。最後に青年による獅子の門祓いが行われる。筑後川流域系の祈祷行事の祓獅子で苧麻毛の胴体である。このほか、井田地区においても「獅子廻し」が行われている。

広川町に所在する「清楽茶屋地区の獅子舞」は、素戔嗚神社（祇園社）で行われる。神社の起源は、久留米城内の祇園社が分社され勧請されたものである。獅子舞が行われる祇園祭礼は、悪疫退散を祈る夏越の祭りで、地域に残る記録によると「獅子は慶応三年六月にできた」とある。旧暦七月一五日に祭礼があり、一六日に獅子舞が奉納され、獅子が家をまわる。筑後川流域系の「祈祷行事の祓獅子」で麻系紐毛の胴体である。

八女市の土橋八幡宮の秋の御神幸では、獅子が行列に伴い集落を祓う。

旧星野村（八女市）の三坂（祇園神社）・長尾（天照御祖神社）・的別当（素戔嗚神社）には、七月の祇園祭でこっぱげ面とよばれる竹杖を持った赤鬼と青鬼が集落をまわる行事が継承されている。最近では、赤鬼・青鬼が強調されているが、内容を見ると浮羽地方で見かける、胴体がシュロの祈祷系祓獅子である。起源は不明であるが、長尾の神面には天明六（一七八六）年の墨書銘がある。獅子の「打ち込み」は三箇所で少し異なるが、三坂では、「祝いましょ」（カツカツ）に続き、「もひとつせー」（カツ）、「祝うて三献」（カツカツカツ）と浮羽地域によく似る。鬼から取った御幣は、悪魔除けのお守りとして各戸の門口に掛けられる。この地域は、山ひとつ越えた浮羽地域とは、明治二九（一八九六）年以前まで、行政上同域の生葉郡であった。北側の合瀬耳納峠を挟んだ麓のうきは市樫ケ原には同様の鬼がメインとなった「獅子廻し」がある。

五　獅子舞の特徴とその概要

以下、膨大な資料をまとめるに到らず、詳細について十分な検討はできていないが、現段階で気付いた点のみを紹介する。

（一）獅子の姿

通常、県内の獅子は、二人立ちと呼ばれ、胴衣の中で前脚の舞方が獅子頭を持つ。胴衣は布であるのが普通である。これに対し、筑後川流域では、胴体に獣毛を表現している。通常県内の獅子の胴毛は布で作られ母衣（ほろ）や油単（ゆたん）といわれているが、この地域では、下布にシュロも

しくは苧などの麻系の紐毛を縫い付けている。中流域の旧浮羽郡と旧朝倉郡がシュロを使用し、簑と呼ばれる獅子の胴体や獅子役の脚絆に使う。竹で枠をつくりシュロを下布に取り付けたものや、シュロの繊維を束ねたものを括りつけるなど地域で差がある。また獅子の舞い方も、脚絆もシュロを使用し、腰簑を下げる。へらの木を使用していたらしいが、現在は、麻や藁なども見られる。尻尾は中から操ることができる。

上牟田口（大木町）ではヘラの木が使用される。

三井・三潴では、苧麻等の麻紐の毛に色がついたものを使用し、背中の中央から両側に垂らしている。

また、筑後川中流域の獅子には、赤鬼・青鬼が先導する。先を細く割った青竹の杖を持ち、腰簑を付け、柳瀬ではへらの木を使用している。県内の他の地域では、鉾に猿田彦（天狗）面を付けた鉾面を持って廻ることが多い。また、天満神社の夜渡の獅子舞（旧田主丸町）では、腰に陽物、瓢箪を下げる。

筑後川流域では、顎に取っ手が付いたもの、手を入れる孔があるものがある。「歯噛み」をしやすくし、大きな音を出しやすくするためであろう。

また、福岡市内では、祭りの際の移動が楽になるように、顎の下に円形の孔が開けられ頭に乗せやすくするための工夫がある。また、町回りの祭の持ち運びを考慮し、獅子頭を保持しやすくするため、獅子頭底部に金属製の取手が二個ついたものが多い。

（二）獅子行事の起源について

起源については、記録として確認できるものは少ない。筑後地方の獅子舞は、田楽美麗法師であった梅津家が独占していたと言われる。高良山の獅子舞を地元高良山の神幸祭が復活した寛文九（一六六九）年以降と言われているが、詳細については不明である。「舞獅子」として「大分の獅子舞（飯塚市）」は、享保五（一七二〇）年に京都の石清水八幡宮に習いに行き、享保九（一七二四）年の放生会で披露されたと言われる。祭帳の「大当書送帳」でも確認ができ、これが県内の中心的な舞い獅子の起源であろう。始まりに関連して周辺の大分系といわれる獅子舞もこれ以降に開始されているようであり、流れからいけば、ここから伝播していったことは間違いないだろう。「土師の獅子舞（桂川町）」は、伝承では嘉暦三（一三二八）年と言われるが、神社文書では、「元文三年より、獅子舞あり」と記録され、少なくとも現在の獅子舞の起源はこの時期であろう。

「祈祷行事の門祓い獅子」では、飢饉がきっかけとなったところも多く、江戸の享保年間から江戸末期頃に起源を伝える地区が多い。その中で、天籟寺（戸畑区）の明和二（一七六四）年に記された「お志しのはじまり」では、その始まりを「明和元年まで二・・・五拾壹年ニ相成候」とあり、記述から逆算すると明和元（一七六四）年から五一年前で、正徳三（一七一三）年となる。起源を遡れるものとして貴重である。

修験道の松会関係の獅子舞については、英彦山祭礼絵巻等に描かれているが、松会の起源が不明であり獅子についても起源をたどるのは難しい。

（三）祭礼・年中行事との関係

基本的に、獅子が祭り等に登場するのは、「祭礼行事の御神幸」か「獅子祓い」などと呼ばれる「祈祷行事の門祓い」が主なものであるが、県下ではこれらが複雑に入り混じりながら行事を形成している。

神社の祭礼においては、例大祭で神輿による御神幸が行われ、獅子は「御神幸の道祓い・斉庭の祓い」を行うが、筑後川流域や遠賀川上流の一部では神輿の御神幸の代わりに、獅子に神移しを行い巡幸や門祓いを行うところも見られる。

旧企救郡と隣接する戸畑区（旧遠賀郡）周辺では、祭礼行事に先んじて獅子が、集落や道筋、各戸を祓う例も見られた。

また、別の行事と結びついたものもある。祇園祭りやおくんちの例が多いが、そのほかにも、粕屋町では、正月に獅子が門祓いを行う際に、

「とび」と呼ばれるお土産を配る風習などがある。これは小正月の行事と結びついたものであろう。

鞍手町神崎、旧豊津町内の例では、水神祭りと結びついている。田川地域では虫払いの祭典の後、門祓いにまわる例もある。水神祭りは、伝染病を媒介し、虫除けも江戸時代の飢饉の原因が蝗虫の発生などに起因する。これらのことは、獅子祈祷行事が、飢饉を要因とする悪疫退散のための行事であったという伝承を裏付けるものであろう。

（四）「舞獅子」の起源と伝播について

福岡県を代表する舞獅子として「大分の獅子舞」（旧筑穂町）がある。地元に残る祭帳などで「享保九年」より放生会に奉納したとされ、時期が確認できるものとして貴重である。大きな特徴として県下の各地へ伝播している点が挙げられる。遠賀川の上流域では、旧穂波郡の「大分の獅子舞」と旧嘉麻郡「綱分の獅子舞」（旧庄内町）がよく知られており、元は同系列のものと考えられるが、不明な点が多い。隣接する田川地域では、この二つの神社から伝わったと言われる獅子舞が分布する。綱分から伝わったものは、そこから、周辺の神社を経由し、さらに各地へ伝播している。下流では、飯塚市に隣接する小竹町（鞍手郡）に、東では、京都郡の大久保（みやこ町）・下稗田（行橋市）、西は、香椎宮（福岡市東区）、練原・在自（旧津屋崎町）、南は、筑後川中流域の恵蘇八幡宮（朝倉市）までと江戸時代の国を超えて伝播している。

大分の獅子舞がこれほど伝播した要因であるが、その一つと考えられるものにお囃子がある。笛や竹を削いで作ったバチで叩く太鼓などで奏でる曲は軽快で、特に演目の「ノリ」の曲は特徴的であり、一度聞くと耳に残る。それに併せて舞にもストーリー性があり、恋愛を表しているといわれ、その分舞も激しくからみの多いものになっている。まさに五穀豊穣を祈願する舞として里人にも受け入れやすいものであったと思われる。隣接する田川地域には、祓い要素の強い「五段・六調子」があるが、囃子は太鼓のみで動きも儀式的である。現在も中元寺川流域の数箇所に残るが、この地域にも大分系・綱分系といわれる獅子舞が入ってきている。地元では、「五段・六調子」の方が格が高いと言われている。大分系・綱分系の獅子の伝播は、「五穀豊穣・子孫繁栄」を願う獅子舞の形が、元々地元にあった「祓いの要素」の強い獅子（五段・六調子）でおこなっていたものが、恋愛を表す獅子で同様の願いをおこなっており、長い期間の間に意識の変化がおこなわれたことが感じ取れ興味深い。

（五）「祈祷行事の門祓い獅子」について

基本的に、祈祷行事の獅子は、口を上下に「カチカチ」と鳴らすのみで、舞や所作は無い。門祓いの行列もお汐井、神職、獅子、世話役、賽銭箱が基本であるが、地域によって差がある。遠賀川流域の一部の地域では、お汐井、鉾面、神職、獅子、五十鈴、のぼり、賽銭箱とかなりの行列をなすところもある。また、筑後川流域においては、赤鬼・青鬼、獅子、役員等でそれに付き添う人がいる。

①門祓いを行う組織と範囲

神社の氏神を基本とする範囲、おおよそ明治初期の村が一つの単位になると考えられるが、実際には、自治単位の区全体で廻る場合と、その下位である組単位で獅子や道具等を引き継ぎながら行う所も多いようである。

②目的

祭礼行事の獅子の目的は、悪疫退散・五穀豊穣と言われるが、祈祷系の門祓い獅子については、悪疫退散・五穀豊穣に加え、家内安全・商売繁盛、果ては交通安全までとするところがある。

しかし、伝承では、飢饉を起源とした悪疫退散と言われる。記録に記載されているものを挙げると、江戸時代の『中村平左衛門日記』安政六（一八五九）年九月一二日の「八幡宮獅子請け」には、「コロリを防候心得専也」とあり、明治二（一八六九）年の「田川郡上野手永各社諸祭礼式書上帳」（現福智町周辺）のうち鋤木田村の諏訪社で六月一七日に行われた獅子廻（ししかい）の目的として、「右者流行病為退散例年執

行仕候」とあり、元は疾病退散等などを目的に行ったことがわかる。また、筑後川流域の旧田主丸地域や遠賀川下流の鞍手町では「獅子に頭を噛んでもらうと、頭のおできができない」と伝えられており、離れた地域で共通の効能が伝承されていることは興味深く、古くは同様の呪いが広範囲でおこなわれていたことが窺える。

③門祓の内容

基本的には多くの地区で行われているもの、遠賀川流域、筑後川中流域に分類できる。それぞれ地域によって多少の差はあるが、獅子が単独、もしくは神職やお汐井、その他に行列で各戸を巡り、家の中を祓う。現在は玄関が多いが、元は家中を獅子が祓った。それも玄関から入り、縁側に抜けたり、雌雄の獅子が交互に両方から入り、入れ替わったりしていた。家人の頭をカチカチと「歯噛み」を行う。その折、お札等を受け取り、御祝儀を獅子の口に入れる。家によってはお接待を用意している所もある。

遠賀川下流域では、獅子を中心に、神職・お汐井、鼻高面、獅子とつづき、これに沿って、五十鈴、太鼓・賽銭箱と規模は小さいが、御神幸行列を作る。獅子の祓いの後、鉾で玄関の鴨居を突く。お札を配り御祝儀を供える。

また、舞獅子が、門祓いを行うのも特徴である。小竹町の南良津では、「お獅子様」の祓いの門付けとは別に、舞獅子がまわる。田川地域では現在、行事を行っている所は少ないが、門祓いは古い時代にすたれ、その後、要所となる地区の神社や役宅等に寄るだけのところが多かったようだ。

筑後川中流域の朝倉・浮羽地域では、先導する赤鬼・青鬼がおり、その後に獅子が続く。「獅子は、先に入った鬼を追い払う」という地区もある。門口では「祓いの所作」を行い、「歯かみ」をする。最後に獅子の毛（シデ）を渡す。

④他地域での「門祓い獅子」

「獅子祈祷」も多くの地点で共通点が見られ、広範囲に分布する「年中行事」の一つと考えられることから、他県での類例を探してみたが、九州内では、それほど確認ができずにいた。その中で、大分市内「敷戸子子神社」・「弥栄神社」において、内容的に福岡県の門祓い獅子に非常によく似た例を見つけることができた。また、全国的にも、関東圏でも埼玉県上尾市の八枝神社を始めとして、新潟県佐渡島では多くの例が確認できた。また、獅子としての例ではなく、鬼の行事として探すとかなり例があるようで、鬼が集落を門祓いし、その後で獅子が出てくるというパターンで、県内でも筑後川中流域では鬼が獅子とまわる。その中で星野村の「こっぱげ面」や樫ヶ平（旧浮羽町）の門祓い獅子では、鬼の方が主役となっている。県内でも他地域では、鬼ではなく猿田彦の鼻高面を鉾等につけることが多く、その差については、祓い要素の強い獅子とともに興味深い。

「祈祷行事の門祓い獅子」としては、伊勢太神楽（三重県）がよく知られる。北部九州には昭和戦前まで、伊勢地方から伊勢神宮の神霊を遷した獅子頭を奉じた「伊勢太神楽」の一団が訪れて家祓い・竈祓いを行っていたとされ、「門祓いの祓い獅子」もその影響を受けた可能性も指摘されている。しかし、残念ながら今回の調査では確認できなかった。

おわりに

今回の調査開始時には、県下では約一二〇余りの「獅子に関する祭礼・行事」が確認されていた。その後、聞き取り、調査資料、県下の市町村誌、古文書等に目を通していくと、次々と獅子に関連した行事例が確認され、最終的に廃絶したものを含め約三五〇の行事が確認できた。数については、祈祷獅子関係では、神社単位全体で行うか、地区毎によるかで数に差異が出てくるが、分布と特徴について大方の概要は確認できた。しかし、限られた時間であったため不明点もたくさんあり、十分な考察ができていない。その中で一部ではあるが、解明が必要とされる項目を列記し、今後の課題としたい。

①筑後川流域の「祓い要素の強い獣様の獅子」については、中流域、下流域での様相の違いや、起源・伝播の状況についても不明な点が多

い。しかし、所作などを見ると祓いの要素が強く、本来の獅子の姿を残しているようであり、遠賀川上流系の舞獅子よりも古い様相を残すものと考えられる。今後、補足調査等を行いその価値を見いだすべきである。

②「祈祷行事の門祓い獅子」については、県下の広い範囲で分布が見られる。地域性もあるが、行事の起源・目的・内容について各所の伝承等を組み合わせていくと悪疫退散・五穀豊穣などの願いが読み取れる。地域毎に特徴も有るようで奥が深い。これは、福岡県の「獅子の行事」の特性をあらわすものであると考えられ、「祓い行事」の一つとしての位置付けを行うべきであろう。

③旧企救郡の「敷地祓い」と「獅子起こし」の行事について、享保の頃まであった「敷地起こし」の行事には「獅子の祓い」で獅子が地域内をまわっていたようであるが、いつのころか、獅子がでなくなり、そのかわりに小型の宮形でまわっている。「昔は、「獅子廻し」を山伏が行っていた」とも言われており、大内田のおししかい（赤村）でも同様に獅子が出ない。「祈祷行事の門祓い獅子」の起源をたどる上でも興味深いが、現状では参考となる資料が残っていない。

④遠賀川上流系の舞獅子については、「大分の獅子舞」では、起源もはっきりとし、各地域に伝播したことがわかっているが、地元では、大分系と綱分系と呼ばれる。囃子等の類似点もあるが相違点もあり、双方の獅子舞の関係が不明である。特に「綱分の獅子舞」やそれに伴う太鼓打ち（子どもの廻り打ち）の起源がある程度わかれば、この地域の獅子舞の系譜がさらに明らかになるだろう。

今回の調査で大変参考になったものは、地域での聞き取りとともに近世の庄屋や神職の日記である。これらの資料には、地域の祭礼・年中行事の様子がかなり記載されており、現在では忘れられている不明点を探るための重要な資料である。今後、これらの資料調査も重要な課題である。

最後になりましたが、この報告を作成にするに際し、福岡県内外の市町村及び、北九州市内につきましては、北九州市中央図書館の奉仕課に多くの資料を紹介していただき、また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で行事が中止される中、南郁夫氏（小郡市）には、長年にわたり収録された多くの獅子舞の映像資料を提供していただきました。記して感謝いたします。

（長谷川　清之）

第三節　詳細調査

一　玉取祭

【テーマ】二一「玉せせり」

【別名】玉せせり

【地域の概要】

神功皇后の胞衣を筥に入れて埋め、その場に印として松を植えたことから、「筥崎」と名付けられた。筥崎宮は、旧官幣大社、神社本庁別表社。祭神応神天皇、神功皇后、玉依姫命。筑前国穂波郡大分八幡宮の頓宮であったが、延長元年（九二三）に遷座して現在地となる。

【伝承地もしくは伝承場所】

福岡市東区箱崎一―二二―一　筥崎宮

福岡市東区箱崎一―二七―一五　境外末社玉取恵比須神社

【実施時期】毎年一月三日

【伝承組織】

筥崎宮氏子二五〇～三〇〇人が参加。

箱崎、筥松、馬出、千代、吉塚、東吉塚の氏子地域のうち、かつての箱崎村、馬出村にあたる箱崎、筥松、馬出の青壮年で行う。

【由来・伝承】

起源は不詳。室町時代に始まったという。『福岡県神社誌』上巻に記される社伝に、玉を競る由縁が記される。

正月三日筥崎宮の拝殿に於て、神職が石にて作れるささやかなる玉を捧げて持てるを人々寄集ひて戴きたるとかや。さるを誰いふとなく彼の玉を戴けば、その年の悪事災難を遁れ運強くいとめでたしなどいひて、年々に集りくる人数殖え、果ては社前に備へたるを参詣の人々に授けんとするを、我先に戴かんと押合ひ揉み合ふ内に、神職の持てる玉落ちければ、各々一時に之を拾はんと競ひける。されど衣服を着たる儘にては進退自由ならざれば、裸体になりて競ひ取合ひしより起りし

とある。「官幣中社筥崎宮御由緒調書」（一九〇三年）に、「神功皇后異国退治の時干珠満珠を以て平く其表示也と云う」とともに記される。

玉そのものの由来には諸説ある。神功皇后の新羅の役の時に、龍神が捧げた満珠干珠にあやかるという説のほか、『筑前国続風土記拾遺』上巻巻之五州崎町上の項には、

原田門種明應三年甲寅正月元日卯刻。箱崎宮へ参詣致。潮井濱へ打出なかめし処に。不思議なる光明かくかくとして海上より浮き來るを暫く相待居申候処。無程御玉一對寄セ來ルヲ拾取宿所ニ帰り暫ク留置候処。様々之事有之候間、其後明應八年未年箱崎宮へ神納仕候事

女玉櫛田宮納仕候事

とある。明応三（一四九四）年、原田門種は箱崎のお潮井浜で、沖の方に光輝き浮遊している二顆の玉をみつけて拾った。不思議なことが続いたため、同八（一四九九）年に一顆を筥崎宮、今一顆を櫛田宮に納めたという。呼子屋平子巳之助の記録である。このように、海から流れてきた玉を得た話がほとんどである。より詳しい玉の由来は、『博多記』の松囃子の項にある、

博多洲崎町に七軒の問屋有、諸国より商売船来しに或時呼子浦の商船来りしか、海上にて木の玉二ツ流るる有、是を取来り七軒の問屋に遺す、問屋中相はかりて俗家ニ置へき物にあらすとて、一ツを箱崎八幡宮に奉納し、一ツを神屋宗湛に送りにける、宗湛受取候に其夜内鳴動し光物有、宗湛驚て翌日問屋中を呼て是を返す、問屋中社人を招きて玉を恵比須社に納む、（中略）右二つの玉一ツハ箱崎宮に納毎年正月三日玉取りの神事有り、今一ツ博多に御座候玉ハ七軒の問屋一年替りに預り居申候、是も正月三日玉

取の祭いたし玉を問屋毎年請取渡しに餅の不入雑煮具ハ博多雑煮品々又山の芋の大きなるを塩煮して上に亀の足のことく竹串を長一尺二寸にして赤紙にて巻上にしへ付申候七本立る也、御酒を右ノ玉に備へ申候、又キチヤウ申ハ木にて鍬の如く拵長サ三尺六寸にして二本両人持候て玉渡し受取申候他より人を入不申候、問屋計勤来候

と詳しい。これは、鶴田自反の記述だが、『鶴田家伝記』を引用した『重複　筥崎社艦』に、「延享四年、（中略）一木、山口両家出仕し、既にして博多の七問屋、及鶴田自反、石村某、鶴田小左衛門等胥謀りて櫛田神社に納めし珠を転して、筥崎宮へ相納む、依て福田屋より別に新珠を造りて櫛田神社に納む」とある。合わせて玉取恵比須神社の昭和一三（一九三八）年建立の鳥居が、「鶴田家中興の祖七右衛門自反建立」であることからも、由来譚に深く関与するものと『福岡市史』民俗編一に詳細が記される。

「せせり」とは、繰り返し触れる、もてあそぶという意で、競い合って触りあうことである。「競り子」とは、祭りに参加して玉を競る者のことである。

年占の要素がある。最後に玉に触れた者が浜方ならば豊漁、陸方ならば豊作といい、一年の吉凶を占う役目もある。二〇二〇年は陸側の勝利で、豊作とでた。また玉に触れると悪事災難を逃れ、幸運を授かるといい、皆一度は触れたいと競って競っている。

【実施内容】

玉洗い式

一三時、筥崎宮境内絵馬殿前にて神事の後、二つの玉を洗い清める「玉洗い式」である。令和五（二〇二三）年より絵馬殿内に新たに台を設置して行うようになり、以前の台は使わなくなった。玉は木製で二つ、陽玉（雄玉）は直径二八センチメートル、重さ八キログラム、陰玉（雌玉）は直径三〇センチメートル、重さ一一キログラムである。神事に先立ち、一五年ほど前から箱崎、筥松、馬出、吉塚の消防団が一緒になって、太鼓を叩いて纏を振った。

前日より設置された祓所は、四隅に齋竹（葉がついた竹）を立て、注連縄が張り巡らされ、西向きに造られている。正面には、紙垂、ウラジロ、ユズリハをつけた注連縄が張られた玉櫃の上の八足台に、祭場に向かって右に陽玉、左に陰玉が載せられている。神酒、スルメ、コンブの他、藁のタワシ一二本（閏年は一三本）、菜種油三合三勺と半紙が並ぶ。向かって右横には、脚つき盥、湯と水が入った手桶にも同じように紙垂、ウラジロ、ユズリハをつけた注連縄が張られている。

玉を洗う役は、代々神事にご奉仕される家柄の一木家・山口家が直垂姿で行う。但し、山口家は昭和末に途絶え、現在は神職が代わりを務めている。修祓後に、一木家・山口家が神酒を玉に注ぎかけ、神職から神酒を受ける。参列者が神酒を受け終わると、玉洗いとなる。まず盥に手桶の湯を取り、柄杓で水を注いで湯の温度を調整する。その盥に二家によって陽玉を入れて一二本の藁のタワシで洗い、菜種油を玉に注ぐ。半紙で玉全体に延ばして塗りつけて拭き上げる（写真一）。陰玉も同様の手順である。拭き上げた紙が皮膚病、かさ、吹き出物に効くといい、かつては奪い合っていた。

玉取恵比須神社

終われば両玉は玉櫃に納められ、東側に約二五〇メートル離れた境外末社玉取恵比須神社に、「宰領」によって隊列を組んで運ばれる。宰領は、氏子で世話係の内、若手の四〇代の者で、白丁を着る。他に神職二名、玉取恵比須神社の総代一〇人弱、筥崎宮の祭典員（多くは玉取恵比須神社と兼任）一〇～二〇人で、そのまま神事に臨む。神社には福笹が二五〇～三〇〇本用意されている。玉取恵比須神社では、玉

写真一　玉洗い式

洗い式が始まる前から多くの参拝者が訪れて初穂料を納め、お札と福笹を頂いていた。また近くの病院の駐車場にて、奉賛会によって「福汁」が出されていた。「福汁」はその年によって、うどんや豚汁とメニューが変わる。二〇〇～二五〇食を用意する。

神社に到着した後、玉櫃から両玉を出して神前に供え神事を行う。終了後、陽玉のみ神職によって下げられ、世話人の総代から競り子の子ども達へ渡される。かつては、まず乳児に玉に触らせていた。今でもできるだけ多くの子どもに玉に触ってもらうという。これから陽玉だけを競っていく。一方、宰領によって陰玉は武内通りから東門を通り境内に入って、筥崎宮本殿で陽玉の到着を待つことになる。

子どもによる玉せせり

大人の補助を受けながら、子ども達が玉を競っていく。上半身は裸で、締め込み姿で肩車の形で上に乗り、後ろから二人で支える。「オイサー、オイサー」や「オッショイ、オッショイ」の掛け声で、一の鳥居の近くまでを進む。沿道の町内の人から、「力水」（もしくは「きおい水」という）が競り子にかけられる。水色のたすきをかけた大人が、責任者として子どもたちの安全と、全体の動きを調整する（写真二）。

大人による玉せせり

そして、今度は大人が玉を競る。一端宰領に玉は渡され、改めて大人の競り子に渡す。上半身は裸で、締め込み姿である。子どもの場合と同様に、肩車の形で上に乗り、後ろから二人で支える。消防によって競り子に、「力水」をかけていく。子どもの時と同様に「オイサー、オイサー」や「オッショイ、オッショイ」の掛け声で競っていき、楼門で待つ神職に渡すまで運んでいく（巻頭図版）。楼門前にいる四、五人が次々に玉を渡していくが、玉を持つ度に「バンザイ」の声が競り子全員からあがる。そして玉は神職に渡される（写真三）。続いて「博多祝いめでた」を歌い、手一本で締める。最後に神職の手に渡した者は「幸運者」とされ、宮司から「玉せせり　幸運者」と書かれた色紙が贈られる。

昔は縁起がいいからと、コースを外れて、競り子の町内に玉が運ばれることもあった。

写真二　子どもの玉せせり

写真三　大人の玉せせり

玉納めの儀式

玉を楼門の神職に納めた後、玉納めの儀式となる。楼門と拝殿間に一〇人ほどの白衣白袴の祭典員が並び、陽玉を「オイサ、オイサ」と言いながら順番に受け渡して神職に届ける。さらに数人の神職を経て、最後は宮司によって神前に納められる。ここで陰陽の両玉が揃い、神事を行い終了となる。その後、玉取恵比須神社近くの病院の駐車場にて、奉賛会の人達の直会となる。

競り子達は、境内の一角の「湯殿」の桧造りの風呂で冷えた体を温める。昔は、筥崎宮前の筥松湯を借りていた。また玉せせりに使った六尺の下帯は、安産の腹帯として重宝された。

【類似の行事】

玉せせりは筥崎宮が有名だが、その他福岡市西区姪浜（めいのはま）の姪浜住吉（すみよし）神社、福津（ふくつ）市西福間（にしふくま）の宮地嶽（みやじたけ）神社、福岡市中央区伊崎（いざき）の恵比須神社、粕屋（かすや）郡新宮（しんぐう）町の恵比須堂、福岡市東区志賀島（しかのしまひろ）弘などと各所で行われる。

代表的なものを述べる。まず姪浜住吉神社の玉競祭である。毎年一月三日一三時から斎行。姪浜住吉神社で神事終了後、隊列を為して海辺の事代（ことしろ）神社を目指す。締め込み姿の漁業協同組合員によって行われ

る。玉は一つで、木製の直径二五センチメートルほどの大きさで、一部欠損している。三方に載せて運ばれる。到着後神事を行い、波打ち際の海水で玉を洗い清める。その後再び三方に載せ、来た時と同じように隊列を為し、姪浜住吉神社に向かう。その途中、かつて事代神社が祀られていた付近から玉を競りだす。グループ等は無く、各個人が縁起の良い玉に触ろうと競り合っていく。玉に触れれば無病息災という。沿道からのきおい水を浴びながら、「オイサ、オイサ」の掛け声とともに約一キロメートルの町並みを進んで行く。姪浜住吉神社拝殿前には壇が設けられる。神社に戻ると、壇の前でも激しく競られた後、待ち構えた壇上の者が玉を受け取り、玉を神前に納めた。「博多祝いめでた」を歌い、万歳三唱で終わる。

尚、令和五（二〇二三）年以降、神事や海水による清めは変わりなく行われるが、玉を競ることはなく、三方に載せて姪浜住吉神社まで、一人が静かに運んでいる。締め込みではなく、私服の上に「日本水難救済会」の名が入った法被を着ていた。

福岡市中央区伊崎の十日恵比須神社では、毎年一月一〇日一〇時から行われる。鳥飼八幡宮の兼務社で、伊崎から福浜（ふくはま）に移転した漁師の守り神の神社である。陰陽の二玉があるが、直径三五センチメートルの木製の陽珠だけを競る。現在の玉は、昭和一六（一九四一）年の製作である。

約一〇分の神事終了後、まず世話人である漁業組合伊崎支所運営委員会会長が玉に御神酒をかけてから、参道に投げて転がす。それを大人が拾い上げて玉を右肩に載せ、町内の公民館、小学校、保育園などを廻った後、各家を廻って駆け巡る。漁師が中心で、子ども達もついて行く。いずれも締め込み姿で、「オイサー、オイサー」の掛け声をかける。基本的には大人が行い、所々で子ども達に玉を持たせていた。小学校などでは、玄関で玉に御神酒をかけて、その場で玉を突き当てる。各家では、玉を神棚に突き当てて御神酒を注ぎかける。菓子や御酒の接待が用意されている家もある。留守宅には、玄関の戸に玉を突き当てる。ひと通り家を廻った後、漁業組合事務所に行き、同様に玉を突き当てて「博多祝いめでた」を歌う。いずれも一番だけで、会長の自宅と漁業組合事務所だけで歌う。その後浜に行って玉を海に投げ込み、大人が玉を競る。その後神社まで戻り、玉を納め、「博多祝いめでた」を歌い、万歳三唱をして終わりとなる。

商売繁盛を祈願して希望される町内の家をすべて廻る。かつては、大名や唐人町まで廻っていた。また子どもが五、六〇人いた頃は子ども用の玉があり、大人ではなく子ども達が玉を競っていた。

福岡市東区志賀島の弘でも、同様に家々を廻る。「玉遣（や）れ」といい、元は十日えびすの行事で一〇日だったが、昭和五五年頃から一月三日になった。「六尺べこ」とよばれる褌を締めた小中学生が行う。木製の玉を地区の恵比須神社の前に供えて、九時から神事を行う。海からお潮井である砂を取って来て、玉の前に供え、玉を御神酒で清める。かつては海水で清めた。その玉を持ち、「ワッショイ、ワッショイ」（一時期「玉遣れ、玉遣れ」）の掛け声と共に各家を廻る（写真四）。玉が来ると、家の神棚に持って行き、捧げ拝む。誤って玉を落としてしまうと、海の水で清めたという。

博多部では、今では見ることは出来ないが、川端町、西町、上・中市小路、片土居町、大浜などの多くの地域で行っていた。片土居町では、四、五歳から一二、三歳の子どもが町内を廻ったという。

各地の玉せせりは、恵比須信仰の現れという。筥崎宮のように二手に分かれて競るもの、もうひとつは各家を訪れるものと分類することができる。そして大人が競るところと子どもが競るところ、その両方のところとある。また催行日も恵比須信仰で一月一〇日だったが、筥崎宮の影響で、一月三日に行うところがほとんどである。

（吉田　扶希子）

写真四　弘の玉遣れ

二　ホンゲンギョウ

【テーマ】一「大火」

【地域の概要】

宇美町は福岡県の北部中央に、背骨のように連なる三郡山地の西、福岡県糟屋郡の最南部に位置する。面積は三〇・二二平方キロメートル、北は須恵町・志免町、東は飯塚市、南は筑紫野市・太宰府市、西は大野城市に接する。明治の初め頃、障子岳村は宇美村に合併、明治二二（一八九九）年、宇美・四王寺・炭焼・井野の四箇村が合併し宇美村が誕生、大正九（一九二〇）年には糟屋郡で最初に町制施行した。

町の東側には、砥石山から三郡山、頭巾山、仏頂山へと九〇〇メートル級の三郡山系の山々が屏風を立てたようにそばだち、西には四王寺山・乙金山・井野山などの低山が連なっている。

三郡山を源とする宇美川は、河原谷より流れ出る仲山川、西の四王寺山から内野谷を流れ下る内野川、井野川の流を集め、志免町との境界で合流して、やがて多々良川に流入する。それらの川が潤す豊かな平野の中央には、応神天皇生誕の地として宇美八幡宮が鎮座する。宇美町の町名は、この『記紀』にも記された「応神天皇の御生誕の地」という所以を以て生じた。

原田地区は、太宰府市との隣接地にある農村地帯である。元は炭焼村の枝村である。本村は原田上で分家等の集落として原田下ができた。さらに両地区の間に町営住宅ができ原田中央と呼ばれている。近くに三菱勝田炭鉱があり、原田地区の中に坑道が通り、積み出し口や坑口が一部村の中にあるが、原田村の人がそれに従事したことはない。ほとんどが農業に従事しており、今でも農業による地域での繋がりが深い。氏神は貴船神社で、炭焼村の貴船神社を勧請したものという。原田上の戸数は現在一六四戸だが、これは核家族化したことによるもので、元来は二〇戸前後であった。

【伝承地もしくは実施場所】宇美町原田上公民館広場

【実施時期】

一月七日　七時～（元来六時からであるが、近年老齢化により変更）

【伝承組織】原田上自治会

【由来・伝承】

正月の大火は、全国的には一月一五日の小正月を中心に行われる、どんど焼き或いはサギッチョ（左義長）と呼ばれるものが多いが、九州地方では全域で、正月七日に火焚き行事を行うところが多い。九州南部では「鬼火焚き」、筑前・筑後・肥前では、「ホッケンギョウ」「ホウゲンギョウ」「ホンゲンギョウ」などといわれ、一月七日早朝に行われる。

呼称の由来は「法華の行」あるいは「奉献行」だとする説があり、九州全体に亘って、修正会との関連も指摘されている。宇美町近辺では、太宰府天満宮で一月七日夜に行われる「鬼すべ」の源流が、修正会の満願に行われる「鬼行い」であることから、かつての安楽寺領荘園との関係も考えられている。

古くは各家のカドで行っていたようであるが、昭和期には集落の組合ごとに、子ども組で竹や葛を伐り、田んぼや河原にヤグラを立て、火をつけ、書き初めや正月飾りを燃やした。高度経済成長期にホンゲンギョウは一時廃れたが、近年は参加しやすい日時が工夫され、土曜日や日曜日の昼間、コミュニティや子ども会の行事として復活するケースが多い。なお、小正月のどんど焼きと混同され、呼称も本来ホンゲンギョウであるはずのものが、どんど焼きと呼ばれている地区もある。しかし、一四日に行っているところもあり、これらは元から「どんど焼き」であったとも考えられる。

本項では、伝統を継承している宇美町原田上の事例を中心に述べる。

【実施内容】

ヤグラの製作

①暮れの内に山で先端が二股になるような樫の木を切り出し、葛を採り柔らかくするために川につけておく。

②年が明け三日の午後、枕木の上に青竹を並べ、その上に心棒・笹竹・枯れ竹・藁を置いて、青竹で巻き、チェーンで締めワイヤーで縛る。円筒形になったら葛でナナトコハン（七箇所半）縛り、一番上に笹竹を立て、注連飾りをとりつける。

③樫の木で作った刺叉で起こし、それをつっかい棒としてヤグラを立った状態に固定する。

④集落の人は注連飾り、古い御札などを持ってきてヤグラに挟む。

着火

①根元に藁を置き、ここに灯油をまいて火をつける（写真一）。

②昔は書き初めを入れ、煙が高く上るほど書が上達すると言われたが、今は書き初めをする子もなく、子どもの参加は数人程度である。

③着火すると一〇分ほどで燃えてしまうので、今度は崩した燠に網を置き、昆布・スルメや目刺しを焼いて食べ、御神酒を頂き、あとはかっぽ酒にして飲む。また、家から持ってきた鏡餅に焦げ目をつけ、持ち帰り、七草汁に入れて食べる。無病息災の縁起物とされる。

極楽寺では餅を焼いて、その場で食べる。

写真一　ヤグラの着火

【類似行事・関連行事】

宇美町まちづくり課による平成三〇（二〇一八）年の調査によると、宇美町内では、宇美東、障子岳の本村・今屋敷（いまやしき）、原田下では一月六日、障子岳極楽寺、原田上では一月七日、山ノ内では一月一三日、桜原（さくらばる）、下宇美、大谷、上河原では一月一四日に行われている。

宇美小コミュニティでは下宇美のホンゲンギョウに、ホンゲンギョウをしていない地区が合同し、深町公園で盛大に行われている（写真二）。竹馬会という六五歳以上の人々の会の指導で、長い笹竹を、十二支をしめすという一二本の真竹で巻き、ワラ縄で八箇所縛った本体九メートル、笹の先端まで入れると一三メートルという巨大なヤグラを立て、年女・年男が火を入れる。広場ではぜんざいやきなこ餅が振る舞われ、地域の人々の交流がもたれる。

比較的山手の農村地域である障子岳では、三地区とも昔ながらに一月六日又は七日の六時から、地区の刈り取った田圃で行われるなど古い形を残すが、ほかの地区では、ほとんど地域公民館の広場で行われ、開始時間も八時、九時、一〇時などとなっている。

なお、井野コミュニティは、井野小学校グランドで、小学校の授業の一環として、地域と合同で、一月の第二土曜日九時より行われる。

（森　弘子）

写真二　下宇美のホンゲンギョウ

三　鬼すべ・鷺替え

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　鬼すべ

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和三〇（一九五五）年三月五日）

【テーマ】一「大火」、二二「替物行事」

【地域の概要】

「鬼すべ」が行われる太宰府天満宮は、福岡県太宰府市の東北部、宰府四丁目に鎮座する。太宰府市は、玄界灘に面した福岡市の中心部から南東約一六キロメートル、福岡平野が一旦狭まり、広大な筑紫平野へと拡がってゆく地峡部に位置し、東は福岡県の中央を南北に連なる三郡山地、西は福岡・佐賀県境に連なる脊振山地の端部に囲まれている。

この地は大陸や朝鮮半島に近く、古代には、律令制下最大の地方官衙「大宰府」が設置された。大宰府には北中央に置かれた政庁を中心に、東西二四坊、南北二二条の条坊が敷かれていたと考えられており、この地は現在の太宰府市、筑紫野市の一部に相当する。太宰府天満宮本殿の地は、祭神菅原道真の墓所と伝えられ、この大宰府条坊の東北郭外に位置する。創建間もない頃から、安楽寺（太宰府天満宮）には堂塔や荘園の寄進が相次ぎ、天満宮の発展とともに大宰府の賑わいの中心もこの地に移動した。

発掘の成果により、太宰府天満宮周辺の街区は、平安時代末期の一一世紀末から整備が開始されたと考えられ、現在大町と馬場を画する、小鳥居小路の溝もこの頃造られ、溝から東は境内（社家地を含）、西側に門前町が形成された。永観二（九八四）年、菅原輔正が中門楼一宇と回廊四六間を造営し（『安楽寺草創日記』）、また重森三玲によると心字池も池の地割りは平安期のものということで、天満宮を象徴する心字池から楼門・回廊・本殿という基本ラインは千年続く風景と言える。

江戸期、太宰府天満宮の所在する宰府村は、社領分と蔵納分に分かれ、それぞれに庄屋以下の村役人が設置されていた。天満宮周辺は黒田藩が定めた筑前二四宿の一つ「宰府宿」であり、四箇所の構口（高橋口・五条口・山上口・溝尻口）があった。現在の上三町は社家街で、通りに面して宿坊も担った社家屋敷が並び、背後には田畑、社家に帰属する人々の住まいがあった。連歌屋通りの南側東半分の地は御造営・代官所が占め、北側と西には小社家が軒を連ねた。大町は旅館街、新町・五条には旅籠・商店が五条口・高橋口まで続いた。

明治になり、社家は解体されたが、明治三五（一九〇二）年の菅公一千年大祭を機に、福博地域とタイアップした振興が図られ、現在では馬場・大町は、年間一千万人にせまる観光客相手の土産物屋や飲食店が軒を連ね、三条・連歌屋・新町・五条は主に住宅地となっている。

【伝承地もしくは実施場所】

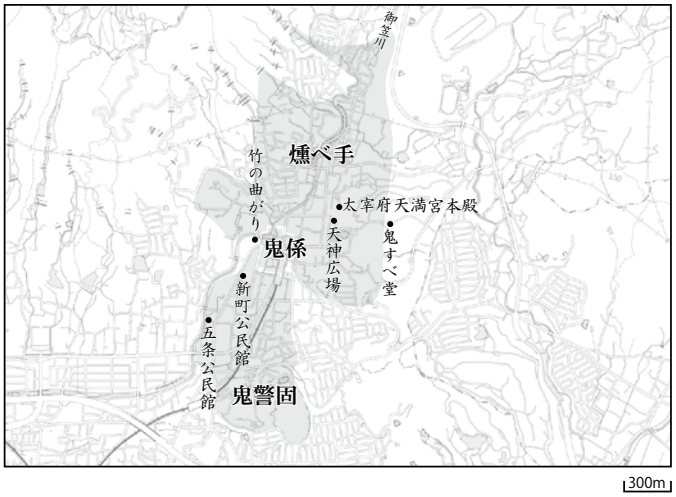
太宰府市宰府四丁目七―一

太宰府天満宮門前町

【実施時期】例年一月七日

【伝承組織】

鬼すべは明治以降の官社時代、旧太宰府町の主催で町民（氏子）の奉納行事として行われ、現在でもその形を継承



図一　実施地と伝承組織の地図

し、氏子会の奉納行事として行われている。太宰府天満宮の氏子域六町の住民が鬼を守る側と鬼を退治する側に分かれて炎の攻防を繰り広げる。

御笠川（みかさがわ）の流れに従って上三町と下三町に分かれ、上三町（三条・連歌屋・馬場）は、唐団扇（とうちわ）・カリマタを持ち、鬼を燻（す）べる役、下三町の内、鬼係は大町（おおまち）が務め、鬼警固（おにけいご）は五条・新町の若手がテン棒係、中老が松明係を務める。燻べ手はエンジ色の筒袖法被、鬼係は茶色、鬼警固のうち松明係は紺色、堂の壁を打ち破るテン棒の係は緑色の筒袖法被を着し、命綱となる縄襷（なわだすき）を身体に巻きつけ、手ぬぐいを被った頭に鬼の角を表現する縄鉢巻きをつける。それぞれの係の取締長の角には、赤い布を巻き、巨大さを競う。

全体責任者としては氏子会長を一名置き、各町に氏子総代一名、宮世話人一名、祭祀係二名、その下に若手・中老という組織となる。若手は一五～六から二五歳まで、中老は二六歳から四一歳までの男。中老・若手の頭を「連長」といい、その下に中老・若手とも各町二人ずつ取合がいる（平成五（一九九三）年頃までは連長・副連長各町一人ずつ、取合四人ずつ）。取合とは神社と町の間を取りもつことからきた呼び名という。鬼すべ神事の中での責任者は総取締、取締長、取締と呼ばれる。

鷺替えは神社主体で、一般参詣者が参加して行われる。

【由来・伝承】

鬼すべは、寛和二（九八六）年、菅原道真の曾孫大宰大弐菅原輔正（すがわらのすけまさ）によって行われたのが起源とされ、年の初めに当たって、招福、災難消除、特に火除を祈る祭りである。元来は神仏習合の宮寺であった天満宮安楽寺で正月元旦より天下泰平・玉体安穏を祈って大講堂で行われる修正会の、満願の七日夜に行われた「鬼行い」を起源とする。古くは薬師如来を本尊とする大講堂での薬師悔過が修正会の中心をなしていたが、時代の変遷とともに、最後の「鬼」にまつわる部分が肥大化し、江戸後期には「鬼すべ」と言われる祭りに発展していった。

明治の神仏分離により、鬼すべは廃止との通達があったが、存続を願う町民によって存続され、氏子の奉納行事として今日に至っている。儀礼の部分は仏事から神事に変化したが、氏子参加の鬼をふすべ、炎の攻防をくりひろげる部分は江戸後期から踏襲されていると考えられる。

もともと鬼すべが行われた大講堂は、明治維新以後、地主社さらには祇殿といわれ、現在の幼稚園・社務所と心字池の間を通る「薬師の馬場」と呼ばれた石畳のつきあたりにあったが、昭和一四（一九三九）年の鬼すべの際に焼失し以後浮殿の建物を移転して祇殿としたが、社務所新築、回廊の拡大、それに伴う絵馬堂の移転など一連の境内整備と、ますます増えた見物人に対応するため、現在は東神苑奥うぐいす谷に祭場を移した。

同日六時より境内で行われる「鷺替え」は、天神さまのお使い鳥「ウソ」を象った木鷺を替え合うことで、一年についた嘘を誠に替えるとも、一年の幸運を得るためともいわれる。各自求めた木鷺を手に「替えましょ、替えましょ」と呼び合いながら、天満宮から出された金鷺を求めて替え合う。金鷺に替え当たった者は幸運を得ると言われる。

鷺替えの起源は明らかでないが、貞享二（一六八五）年に貝原益軒が著した『太宰府天満宮故実』に「正月七日の夜はまづ酉刻ばかりに、うそがえと云事あり。さて其次に法事をなして後儺あり、鬼とりと云…」と記されており、また『百人一首一夕話』（天保四（一八三三）年）には、鷺替えの際の替えもの「木ウソ」の図を載せ、「この鷺替は万治年中（一六五八～一六六一）の物にして或家に秘して持ちたるを、画史の写すものなり」と説明しており、江戸初期には、すでに鷺替えが行われていたことが知られる。

文政二（一八一九）年、太宰府に倣って大坂天満宮でも鷺替え神事を始め、翌三年二月二五日には江戸の亀戸天満宮においても初めて行われ、やがて全国に伝播した。大阪の流行唄に「こゝろづくしの神さんが　うそをまことにかえさんす　ほんにうそかえおゝうれし」と歌われた（『藤岡屋日記』文政三（一八二〇）年）。

現在、全国各地で行われる鷺替えの多くは、開催時期は様々であるが、天神さまの縁日に因み、二五日というところが多い。しかし本家本元の太宰府天満宮と周辺地域は一月七日に開催される。開催日や木ウソの形状から勘案すれば「鷺替え」の起源は「鬼すべ」と一体のものと考えなければならないであろう。

【実施内容】

一　祭具の製作

⑴ 木ウソの製作

鷺替えに用いる木ウソは、以前は、天満宮周辺に住む占部家・高田家・岡藤家が製作し、鷺替神事当日に販売していたが、三家ともに製作者が絶え、現在は天満宮が用意する八百個前後を、太宰府天満宮神職と平成一〇（一九九八）年に発足した太宰府木うそ保存会が半数ずつ製作している。

木ウソは元来、握りやすい太さに成形した「ホオノキ」で作られ、尻尾をケズリカケにした素朴な形状のもので、現在のように突鑿（つきのみ）を用い羽を巻き上げ、段ごとに整えた美しい形状のものではなかった。現在の形になったのは、昭和三三（一九五八）年、ベルギーのブリュッセル万国博覧会に出品された高田保製作の「太宰府の木うそ」がきっかけとなった。こうなると、木肌が白く美しく、また巻き上げやすい「コシアブラ」が材料として普及し、太宰府木うそ保存会では、原木の育成と伐採作業も担っている。

製作手順

原木は、表皮を鎌などで剥ぎ、日陰で三箇月から半年ほど乾燥させる→適度に乾燥を終えた原木を三寸（高さ九センチメートル）の大きさに合わせてカットする→表面の皮剥を一寸の突鑿で行う→同じ一寸の突鑿で目の切り込みを行うと同時に頸部側背面の切り込みを入れ七角形に仕上げる→四分（刃幅一・二センチメートル）から五分（一・五センチメートル）の突鑿を使い、作業台に木ウソの頭部を押しつけ、羽の巻き上げ作業を行う→胸の切り込みは目の細かい鋸で長さに対して三対七の割合の位置で切込を入れる→作業台に木ウソの底部を押しつけ一寸の突鑿で切込を入れ、三面の胸を作る。木ウソの素地完成。ポスターカラーで、胸の赤い部分、黒い目、足を描き、羽に赤・緑の彩りを添える。頭部に七角形に切った金紙を貼り付ける。太宰府天満宮の焼印を入れて完成となる。

一月七日の祭り当日夕刻より木鷺授与所で天満宮職員によって一体千円で授与される。前年に使用した木鷺は木鷺納め所に返納する。

⑵ 鬼すべの祭具製作

カリマタ

燻べ手の祭具は、カリマタと唐団扇である。

カリマタとは、藁と生松葉で「スベ釜」を作る際に下に敷き、点火後、藁が燃えやすいよう、下からゆっくりと持ち上げ、空気の通り道を作るカマスカシの時に使う道具である。

大カリマタは燻べ手のシンボルである。当番町が持つ。直径約二五センチメートル、長さ約三・一メートルの樫の丸太である。小カリマタ道中用は各町一本、計三本ある。直径約九センチメートル、長さ約二・五メートル。大カリマタ同様の仕様にする。他に各町四本の小カリマタを持ち、それらはあらかじめ斎場に持ちこまれている。直径約九センチメートル、長さ約三メートル。元口を対角に削ぎ落とし、この削った方を釜下にする。

昭和三二（一九五七）年以前は、一月五日に若手が山に行き樫の木を伐ってきて、寸法検査を受けたものを用い、五年間使用し六年目に新しい用材と取り替え、使用済みの大カリマタは薪としてその年の当番区に分けられていたが、用材不足・奉仕者不足のため、永久使用するようになった。

これら大カリマタ、小カリマタについては天満宮が保管し、その年の当番町に代わって準備をする。

唐団扇

スベ釜から立ち上る煙を鬼すべ堂に送りこむための大きな団扇である。上三町の各町が一〇本ずつ持つ。天満宮が材料を準備し、氏子たちが結成した神池会によって製作されている。毎年一二月第一木・金・土・日・月曜日の五日間を基本の製作日とし、連日一〇名ほどの会員が参加する。

材料は三〇本用のベニヤ板三〇枚、真竹（柄竹）三〇本である。まずベニヤ板の要所を割竹で補強し、柄竹となる真竹の上部に切込を入れ、ベニヤ板をはさみ込む。ベニヤ板の上下の真竹を針金で強く締め、上からシュロ縄を巻く。ベニヤ板の両面に奉書紙を貼って、朱墨で梅紋と斜めの線を表裏に描き入れる。天満宮の点検を受けた後、各町名の揮毫（きごう）を天満宮に依頼する。

宝蔵松明　竹松明　鬼松明

道中及び斎場を照らすため、鬼警固は宝蔵松明、竹松明、鬼松明を掲げる。以前は三本とも材料切り出しから町内で行い、作り方も異なっていたが、材料調達の困難や担い手不足により、今日では三本とも天満宮が製作し、三本とも同じ松明である。

材料は孟宗竹・角材・肥松である。製作手順は、外側は乾燥させた孟宗竹で中に角材、芯の部分には松ヤニを含みよく燃える肥松を入れる。元の部分に約六〇センチメートル幅で藁縄を巻き、その後、先に向かって約三〇センチメートル間隔で約一〇センチメートル幅で同様に藁縄を巻く。元の部分は、白いロープで先に巻いた藁縄を三本取りで先から元に向かってくぐらせ（兵児掛け）、最後は男結びで結ぶ。白いロープは、さらに六〇センチメートル編み進め、引き綱とする。約一〇センチメートル巻いた部分の藁縄は、男結びの後約六〇センチメートル残して切る。これも引き綱となる。それぞれの引き綱が左右互い違いになるように結んでいく。直径約五〇センチメートル長さ六・五メートルの松明が三本完成する（写真一）。全て鬼すべ堂に保管される。

宝蔵松明は道中や斎場を浄め、かつ神職・氏子会長の道中を照らす重要な松明である。かつて宝蔵を管理していた宝蔵坊が松明を持って先導していたことに由来する。道中が長いので、一番大きな松明であった。鬼松明は斎場で鬼を誘導する松明、竹松明は斎場を照らす松明である。

テン棒

鬼警固のもう一つの役割は、天棒で鬼すべ堂の板壁を打ち破り、煙を外に出すことである。天棒には頭部に注連縄を付けたひときわ大きなシンボル天棒と呼ばれる天棒が一本、一・五メートル～二・一メートル程度で、道中用二〇本、斎場西側外に置いておくもの二五本の計四六本ある。天棒は全て樫木を根ごと掘り上げ、根の部分が槌になるように削り仕上げていた。昭和四〇（一九六五）年代まではそのようにして毎年作られていたという。最近では新調せず、毎年同じものを使い、必要に応じて天満宮で製作している。

鬼係松明

鬼は元来姿を見せてはならないものなので、かつては鬼係松明は小型で、一人で持つことができる程度のものだったが、近年他の松明に倣って肥大化し大きなものとなった。道中、鬼を先導する明かりとなる鬼係松明の製作は、一二月第二または第三日曜日に鬼すべ

写真一　松明づくり

堂にて行われる。天満宮が材料を準備し、大町の氏子たちが製作している。唯一竹のみで作られる松明である。

五月頃山から切り出し、縦長に割って乾燥させた孟宗竹（本来は真竹）を割り、竹の外面を松明の外側とする。長さ約一・五メートルの青竹の根元から三五～四〇センチメートルの部分に穴を貫通させ、引き綱とする二本のロープを通す。竹を並べ、元の芯部に青竹が来るように包みながら松明の素型を作る。引き綱とするロープは、綯って片側を二メートルとする。松明内部の隙間をなくすためチェーンブロックで固く締め、カケヤで叩き揺さぶりながら生番線（鉄線）で要所数箇所を巻き締めて行く。六・八メートルの長さで両端を切断し、藁縄で本締めをする。元から三〇センチメートル間隔で九～一〇箇所藁縄を巻き、元に近い五箇所に持ち手をつける。最後は男結び。直径三八センチメートル、全長六・八メートルの鬼係松明が完成する。

角づくり

当日奉仕者の頭に巻く鬼の角で、全ての町で現在も氏子たちで作る。作る時期は当日の事もあったが、現在は事前に作る。調査時の大町は一二月第二日曜日、鬼係松明を作った後に大町公民館に移り作った。連歌屋は一二月二三日祝日に行っていた。藁を綯い、直径約三センチメートル、長さ約六〇センチメートルのものをおよそ百本綯う。

今日では藁の入手が困難で、また稲の刈り取りも機械刈りなので長さが短い。そこでどの町も、天満宮が齋田で手刈りしたもち米や黒米の長い藁や、佐賀県の武雄方面から九月の神幸式用と一緒に四五〇束ほど準備する中から譲り受ける。

藁は根本をすぐり、袴を外して茎だけにし、全体に水を霧吹きして湿らせ、柔らかくしておく。一つかみの藁を二つに分け、根の部分を重ね一束とし、重ねた部分から先に向かって左綯いに綯っていく。反対側も同様に綯い、先端は緩まないように透明や赤のセロテープやビニールテープで留める。全体を見て、飛び出ている短い藁をはさみで切って整え完成。当日はこの角を頭に巻き、片方をもう片方の綯目にくぐらせ留める。

命綱

命綱は、転んだ時、引き起こすため身体に巻く綱。一五～二〇メートルの縄を二重にする。先端を左肩から右わき腹へ回して結び、胴に二～三回巻いて右後ろわき腹のところで結ぶ。前日、天満宮から支給され、各町の若手役員によって配られる。

スベ釜

年末までに、神幸式の際に準備しておいた藁の内から二百把、生松葉六〇把が鬼すべ堂に運び込まれる。生松葉は福岡市西区姪浜（めいのはま）の生（いき）の松原にある九州大学演習林の枝打ちの際に集めておく。

二　祭りの進行

(1)　鷺替え

一月七日一九時から、太宰府天満宮楼門前の天神広場に八本の笹を立て注連縄を張り巡らせた、直径七メートルの斎場の中に木鷺を手にした参加者が入る。神職の「メットー」のかけ声を合図に斎場の提灯をはじめ、すべての照明が消され暗闇となった中で、太鼓の音に合わせた巫女の「替えましょ、替えましょ」と音頭取る声がマイクから流れ、参加者も「替えましょ、替えましょ」と言い合いながら木鷺を取り替えていく（写真二）。この時、当たりの木鷺を手にした神

写真二　鷺替えの様子

社職員が紛れ込み、いっしょに木鷽を替え合っていく。四分ほどして神職の「テントー」の声で、照明がつけられると、参加者は木鷽の底に当たりシールが貼っていないか確かめる。当たりの文字が巫女から発表されると、当たり木鷽を持ち舞台上の神職に確認してもらい、当選者の発表となる。当選者に授与書が渡され、インタビューを受けた後、巫女の先導で本殿に移動し、修祓、玉串拝礼の後、金鷽が授与される。金鷽は高さ二センチメートル、重さ二〇グラムの二十四金製。江戸期の古い形を模している。金鷽を得た人は、大幸運を得るといわれる。

鷽替は六回行われ、約一時間で終わる。授与される金鷽は、鷽替神事で六個、福みくじで六個、計一二個が授与される。

令和四（二〇二二）年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で縮小して行われた。まず木鷽授与時に参詣者に検温、手の消毒、マスクと手袋着用の協力を呼びかけた。準備した木鷽の数には変更なし。開始時刻は一八時であった。メットーの合図で周囲の照明は消されたが、斎場の八つの提灯はつけたままだった。かけ声は進行役の神職・巫女のみで、参詣者には控えるように呼びかけた。一回に金鷽二個ずつ授与するようにし、計三回、間隔を空けずに行った。当たり木鷽を手にした参詣者は、そのまま本殿に案内され、昇殿参拝の後金鷽を授与された。

⑵鬼すべ

①本殿追儺祭（一五時）

宮司以下神職と氏子会役員が昇殿し、追儺祭本殿祭が行われる。

②鬼係　鬼面拝受（一六時）

本殿で大町に鬼面と忌火が渡される。神事に使う一連の火は古式に則り火きりという方法でおこす。忌火は手丸提灯に承け、鬼面は鬼面使いが顔前に掲げ、若手が守って参道を大町の斎場まで運ぶ。

③鬼係　鬼面飾祭（一七時）

鬼面飾は、明治から昭和初期までは、当日の朝、大町の吉田家が天満宮から鬼面を受け、夜まで自宅の玄関に屏風を巡らせて面を飾っていた。その後場所を変えながら今日では、かつて「竹の曲がり」と呼ばれ、平成二三（二〇一一）年まで郵便局があった場所の一角に祭壇を設け鬼面飾祭を行っている。一七時、鬼面を飾り、お供えをすると鬼面飾祭が始まる。参列者は大町の氏子総代、宮世話人、祭祀係・中老取合・若手取合・鬼面使い、代々火渡しの役をしている鬼木家の当主である。

天満宮で拝受した鬼面には紅白の紙で髭がつけられている。これは出発前に鬼の髭剃り（紅白の髭を外す）を行い、後日魔除け火除けのお守りとして大町の家々に配られる。現在使用する鬼面は平成二七（二〇一五）年に氏子により奉納されたものである（写真三）。

祭祀の後、徐々に鬼係が集合する。茶色の法被を着て、鬼角と命綱、手拭をかぶり軍手をつけ、配られた火難消除の御札を懐に神事の無事を祈る。煎り豆・昆布・スルメと御神酒をいただき、鬼係松明を燃やしながら煤を顔につけ、出発の二〇時二〇分を待つ。

鬼は前日から潔斎し、当日一九時には頬かむりに角をつけ、鬼装束を着用し、身体は四八箇所荒縄で縛られる。姿を見せてはならない。斎場の鬼控所で待機する。

写真三　大町鬼面飾祭

④鬼警固　松明

町ごとに五条公民館、新町公民館に集合する。一七時三〇分、新町・五条の警固取締長・取締と松明係取締長・取締が、本殿で忌火をもらい受ける。高張提灯と幟旗持ちは中学生。一八時過ぎに五条公民館に戻った一行は集合しているほかの鬼警固とともに五条区女性部の有志によるおにぎりや豚汁の接待を受けながら出発に備える。高雄・北谷・松川・内山の氏子役員と祭祀係は社務所に集合の後、氏子会長を迎え、共に五条公民館へ行く。

一八時四五分頃、忌火を松明に点火。氏子会長・取締長の訓示の後、一九時、氏子会長・宝蔵松明は高雄（たかお）・北谷（きただに）・松川（まつごう）・内山（うちやま）の氏子役員、祭祀係と共に鬼すべ堂を目指して出発する。宝蔵松明を担ぐのは中老である。担ぎ手はおおよそ二五人である。四〇人が交代で担いでいく。途中、新町公園でも接待を受ける。宝蔵松明は常に元を参道の中央におき、先だけを一八〇度の範囲で動かすのが決まりである。宝蔵松明の火は火除けの霊験あらたかとされ、また浄めの火でもあり家々に潜む魔を焼き払うといわれることから、軒から軒に振りながら参道を練っていく。

一九時四〇分、宮司邸前に到着する。氏子会長が宮司邸に赴き、神事への奉仕と祝詞の奏上方を口上をもって懇請する。あらかじめ置かれていた竹松明、鬼松明もここで合流し、二〇時、宝蔵松明と共に太鼓橋を渡り、祓所へ向かう。

写真四　竹松明・鬼松明に点火

楼門前の祓所脇に竹松明・鬼松明を交差させて置き、その横に宝蔵松明を置き、松明係は祓所で祓いを受ける。その後、本殿で竹・鬼松明の忌火をいただき、両松明に点火する（写真四）。

⑤鬼警固・天棒

町ごとに五条公民館、新町公民館に集合する。一七時三〇分、新町・五条の警固取締長・取締と松明係取締長・取締が、本殿で忌火を受ける。一八時過ぎに五条公民館に戻った一行は集合している他の鬼警固と共に五条区女性部の有志による接待を受けながら出発に備える。

一九時二〇分、宝蔵松明が出発して二〇分後、シンボル天棒を中心に二〇本の天棒を掲げて斎場へ向け出発する。「鬼じゃ、鬼じゃ」の掛け声のもと、固まって進んでいく。先頭の取締長は赤手丸提灯を上にかざして先導し、取締役員は、役員名の入った手丸提灯を手に持ち、天棒の周囲について神事の進行を司る。新町公園で接待を受けた後、再び斎場を目指す。大町から馬場に上る斎垣の下りを、三回を限度として練り、参道は一気に駆け上がる。二〇時五分、宮司邸前に到着。二〇時一〇分、太鼓橋を渡って祓所でお祓いを受ける。

⑥燻べ手

三条・連歌屋・馬場の三町によって構成される燻べ手も、まず町ごとに集合する。役員は役員名の入った手丸提灯を掲げ、それぞれの場所で唐団扇七本、小カリマタ一本、当番町はさらに大カリマタを一本持ち、燃え盛る藁の上を練りながら待機する。

一九時二〇分、参道御休興所で待機していた馬場の燻べ手は、参道を上って左折、幼稚園裏の道を通って天満宮西門に到着する。

一九時三〇分、連歌屋浦之城橋たもとで待機していた連歌屋の燻べ手は、県道を練りながら上っていく。連歌屋交差点から小鳥居小路に入り、飲食店の軒先で接待を受ける。再び県道に出て天満宮西門を目指す。一方三条公民館に集合していた三条の燻べ手も、一九時三〇分

に公民館を出発する。県道沿いの商店前で接待の後、天満宮西門に到着。一九時五〇分、「鬼じゃ、鬼じゃ」の掛け声と共に天満宮西門に三町が集合する。

三町揃って隊列を整え斎場を目指す。当番町連歌屋（平成二七（二〇一五）年）の中老連長が先頭に立ち、赤手丸提灯を上にかざして一団の指揮をとる。大カリマタは当番町の中老が担ぐ。一団は大カリマタを先頭に小カリマタ三本で左右と後方をコの字型に囲む。小カリマタの位置は大カリマタ当番町が後方、左右両脇は若手取合の話し合いにより決める。その囲みの中に唐団扇が二一本入り、一団を構成する。各町の役員はそれぞれの町の小カリマタの横や後ろにつき一団の体制を調整する。西門口で皆気勢を上げながら燃え盛る炎の中を練った後、二〇時に出発する。

最近は近隣の筑紫台高等学校からの参加がある。四〇～五〇人の野球部員が各町に分かれて入る。

「鬼じゃ、鬼じゃ」と掛け声を掛けながら小鳥居小路、参道を下って西鉄太宰府駅前広場着くと、駅前広場に置いてある藁に三町の連絡員が点火し、広場を三周、左回りで駆け回る。そして大カリマタを立て高く差し上げ、気勢を上げた後休憩する。

二〇時二〇分、再び気勢を上げ大町から馬場に上がる斎垣の下りを三回練り、参道は一気に進んで行く。土産物店甘木屋前で大カリマタを差し上げ気勢を上げた後、左折する。太鼓橋は渡らず、薬師馬場を通り、二〇時三五分、楼門前の祓所に到着する。

⑦鬼係

この間大町の鬼係も出発の二〇時二〇分を迎える。「鬼」と書かれた高張提灯二張と鬼係幟旗を小学生が持ち、総代を先頭に参道を進んで行く。鬼火渡しと書かれた手丸提灯を持つ火渡し役の鬼木家がこれに続く。火渡しの役は鬼木家の世襲である。梅紋の入った藍染の直垂、侍烏帽子を着用し、手丸提灯の中には火渡しのための未使用のろうそくも入っている。鬼係松明が道中を浄めながら鬼面を先導して行く。松明の元を押さえる人、引き綱を持つ人は経験者である。太鼓橋を渡り二〇時四五分、祓所に到着する。お祓いを受ける。

それぞれはお祓いを受けた後、順次斎場へ入場して行く。

⑧斎場入場

最初に斎場に到着するのは、鬼警固の天棒である。二〇時三〇分、「鬼じゃ、鬼じゃ」と掛け声を掛けながら入場し鬼すべ堂の後方を回って堂の西入口に待機する。

同四五分、燻べ手が到着。警固の立ち合いのもと、堂の正面にスベ釜を築く。堂から四メートル間隔をとり、大カリマタを中心に小カリマタ一五本を枕木状に並べ、その上に藁二〇〇把、生松葉六〇把を交互に積み上げていく。高さ約二・五メートル、幅約一四メートルのスベ釜が完成する。後に入場する松明が氏子会長席に到着後、松明の取締長の立ち合いのもと、灯油二缶をスベ釜にまく。

同五五分。鬼係が到着する（写真五）。所定の場所に鬼面をかけ、鬼と合流し待機する。

二一時、しんがりを務める松明一行が宝蔵松明を先頭に入場。松明に先導され宮司以下神職六名・若党二人・氏子会長・火渡し役を誘導して斎場に入る。

宝蔵松明・竹松明・鬼松明は堂内を三周し斎場を浄め、斎場北側に並べて立てる。すでに二時間半にわたって燃えている宝蔵松明は、長

写真五　斎場での鬼係

さがその半分ほどになっている。氏子会長は斎場北側の氏子会長席に、神職・火渡し役は東側入口から鬼すべ堂に入る。

⑨鬼すべの攻防

堂内の中心に舗設された南面の祭壇で祓殿祭が行われる。その後、先ほど作られたスベ釜を祓う釜祓いの儀が行われる。続いて、堂外は滅灯し堂内では火渡しの儀に移る。火渡し役の鬼木家は、燻べ手三町の各取締役が持つ忌藁にその忌火を渡し、各取締役は堂外のスベ釜に点火する。炎が一気に燃え上がる。

次第に火勢が落ち着くと燻べ手は一斉に唐団扇で煽ぎたてる。堂内からは鬼警固が板壁を天棒で打ち破る音が轟き始める。燻べ手は煙が立つようにカリマタを持ちあげて藁を浮かせ、唐団扇で煙を堂内に煽ぎ入れる。しばらくこの攻防が続き、板壁が全て打ち破られると、堂内の神職によって太鼓が打ち鳴らされる。天棒は取締の指導で裏の相撲場にまとめて返還する。

太鼓の音を合図に、灯り取りの竹松明が堂の西側に立ち、宝蔵松明と鬼松明を導く。これに続き鬼面を先頭にして西口から鬼係の一行が堂内に入る。あらかじめ決められていた身長が同じくらいの鬼使い二名は、鬼をはさんで腕を交差し、鬼にくくりつけてある腰木を持って鬼を護衛する。煙が立ちこめる堂内を鬼係は右回りで七周半する。鬼係が堂の正面を回る時、燻べ手は唐団扇で藁灰をすくって鬼係にかける。祭壇前の桟敷には神職が座り、一周するごとに鬼の頭を六人の神職が卯杖で打ち、煎り豆を投げる。鬼係一行は神職の前では鬼の前をあけ、鬼を見せる。神職席西側の堂内回数誘導所役が壁の回数札をめくって回る数を示す。

鬼係が回り終えると太鼓の音がやみ、鬼すべ堂の中央正面から鬼松明、鬼係、宝蔵松明の順に出ていく。鬼係は体制をすぐに整え斎場の広場を右回りで三周半する。氏子会長席に近づくと会長は卯杖で鬼に一撃を加え、煎り豆を投げる。鬼係一行は広場を三周半し、氏子会長に三回打たれて所定の場所に退散する。こうして鬼すべ神事は終了する。

終了後、氏子会長に向かって右から、警固、燻べ手、鬼係、松明が各取締に従って集まり、氏子会長に「異常なし」と経過報告をする。最後に会長、総取締の順に「鬼じゃ―」と叫んだ後、全員で「鬼じゃ―」と叫び、解散となる。

解散後の斎場では、人々が打ち破られた板壁の破片を拾い、残り火で焦げ目をつけて持ち帰る。玄関に祀り、火除けのお守りと古くから言い伝えられている。また本殿脇では鬼豆が授与される。

令和四（二〇二二）年に実施された鬼すべについては、令和三（二〇二一）年一二月九日付けで新型コロナウイルス感染症対策について通達がなされ、これに対して同意書を提出し、事前に各町で取りまとめた上で、奉仕が認められた。

各町においても、例年の高校生の部活単位の参加を断った。中学生以下は不参加であった。引退した年代の参加がみられた。氏子の家族程度などの範囲で奉仕者を厳選した。また接待も中止、あるいは大幅に縮小された。

当日、奉仕者全員に黒いマスクが配布された。

（森　弘子）

四　畑のどんど焼き

【指定等】

種類　豊前市指定無形民俗文化財

名称　畑のどんど焼き

指定年月日　平成一四（二〇〇二）年二月一二日

【テーマ】一「大火」

【別名】どんど

【地域の概要】

豊前市は福岡県の東部、大分県との県境にほど近い海岸部に位置する田園都市で、面積は一一一・一七平方キロメートルに及び、その七割を山林が占めている。北は周防灘に面し、南には標高一〇〇〇メートルを超える犬ケ岳や標高七八二メートルの求菩提山を中心とした山並みを抱える。畑地区は豊前市の南西に位置している。この地域は明治二二（一八八九）年に築城郡松江、畠中、中村、角田、畑の五村が合併して角田村となった。その後、昭和三〇（一九五五）年に八屋町、角田村、山田村、千束村、三毛門村、黒土村、横武村、合河村、岩屋村が合併し「豊前市」となったが、畑という地名は、地区名として残り、現在に至っている。

【伝承地もしくは実施場所】豊前市大字畑七〇一（水神社）

【実施時期】

二月一四日に近い土曜日又は日曜日（かつては二月一四日）

【伝承組織】

「畑地区どんど焼き保存会」によって、実施・継承されている。この組織は、畑地区に鎮座する水神社の氏子が中心となって構成されている。

【由来・伝承】

どんど焼きは日本各地に残る火祭りで、元は旧暦の一月一五日に行われていた無病息災、五穀豊穣を祈る農村行事であった。一般的などんど焼きの形態は、竹の柱を支柱として、藁や松、杉などを束ね塔のように積み上げるが、畑地区では小屋掛けという変わった形態で執り行われる。

畑地区で行われるどんど焼きの起源は不明であるが、六五年前には現在のものよりは小さいものの、既に小屋を建て、地区（以前は畑地区の五つの区域）ごとに実施していたといわれる。石組の囲炉裏を作り、そこで火を焚いていたため、火の番をするために番小屋が建てられるようになった。昭和三〇（一九五五）年頃までは子ども達だけの行事で、材料集めから組み立て、火を点けるまで一切大人が関与していなかったという。一時期三〇年ほど中断されていた時期があったが、平成元（一九八九）年に地元の子ども会が中心となって復活した。現在は「畑地区どんど焼き保存会」として、水神社の氏子を中心に実施・継承している。新型コロナウイルス感染症の影響により、令和二（二〇二〇）年二月に実施したのを最後に、現在は休止中である。

写真一　小屋づくり

【実施内容】

一　小屋づくり

一月中旬頃に材料（カズラや藁、竹、茅、間伐材など）の切り出しを行い、一月下旬から二月初旬に小屋の建設を行う。小屋を建てる場所、大きさは決まっており、大きさは平面で四メートル×五メートル程で、高さは決まっていない。この小屋は「おこもり小屋」や「どんど小屋」と呼ばれている。

二　おこもり

おこもり小屋が立ち上がり、本番までの一週間程度、毎晩地元の人たちがおこもり小屋に集まり、大人は酒を酌み交わし、子どもはお菓子や餅を焼いて食べる。このおこもりには、元々は神に対し身を清めるという意味があったという。

三　火入れ（巻頭図版）

二月一四日、どんど焼きの日の夜、予め古くなったお札や注連飾りなどが壁に括り付けられた小屋に、二〇時頃に無病息災、五穀豊穣を祈り、火がつけられる。火は勢いよく燃え上がり、山合の谷に竹が弾ける音をこだまさせながら、小正月の火祭りは終わる。

【類似行事・関連行事】

・原井のどんど焼き（豊前市）
・馬場のどんど焼き（豊前市）

（中内　華奈）

写真二　おこもり

写真三　火入れ前の小屋

五　嫁ごの尻叩き

【テーマ】一四「新婚祝い」

【地域の概要】

春日市は福岡市の南に隣接する市である。市域は牛頸山（標高四四七・九メートル）から長く北に延びる標高三五メートル前後の低丘陵にほぼ含まれ、西の那珂川、東の御笠川へつながる複雑な形状の谷が入り組む地形上にある。面積は約一四平方キロメートル、北は福岡市博多区・南区、東南は大野城市、西南は那珂川市に接する。福岡都市圏のベッドタウン地域として発展している。

小倉地区は、春日市中央部よりやや北に位置する。江戸期、小倉村は筑前国那珂郡に属した。明治二二（一八九九）年、上白水村・下白水村・須玖村・春日村と合併して春日村となり、昭和二八（一九五三）年に春日町、昭和四七（一九七二）年に春日市となった。

明治二三（一八九〇）年、九州鉄道株式会社雑餉隈駅（現ＪＲ九州福岡南駅）が開業し、大正一三（一九二四）年には九州鉄道株式会社（現、西日本鉄道）春日原駅が設置された。この福岡市への交通の便の向上が、純農村地区であった小倉地区の生活に変化を及ぼした。戦時中には軍需工場や行員寮ができ、春日市内には米軍基地もできた。昭和三〇年代に、県道三一号線の整備が行われたことなどもあり、地域は急速な宅地化が進み、現在住民の三分の一が他所からの転入者である。しかしながら、地域には昔ながらのコミュニティが存在し、虫追い、盆綱、宮座などの昔ながらの年中行事も行われている。

【伝承地もしくは実施場所】春日市小倉三丁目三七　小倉住吉神社

【実施時期】一月一四日　一七時～二四時

【伝承組織】住吉神社氏子会

小倉区には、かつて三つの水利組合があったが、農業人口の減少により合併し、「保存会」（水利財産保存会）と称し、神社や墓所、溜め池の保全など、かつて村落共同体で行ってきたような事を引き続き行っている。この組織を中心に、長寿会（老人クラブ）、自治会の三組織から代表を出し、氏子会役員会を組織。この組織が中心になって嫁ごの尻たたきを実施している。以前は青年団が中心になって左義長作りからまつり当日の食事の準備までしていた。

【由来・伝承】

『福岡の民俗文化』（佐々木哲哉・一九九三年三月）に、「太宰府市水城では以前一四日に〝ジョウメ〟といって、初嫁の尻を叩いて回る行事があった。木を細く削ったものを束にして紙で巻いた粥杖というもので叩くのであるが、多く打たれると沢山子を産むといわれている。近くの春日市小倉でも同じ日に、村の住吉神社に初嫁が集まり、雑木の大柱を焼く行事のあと、藁束を縄で巻いたもので尻を叩かれる。糸島郡ではゾウメキ（にわとこ）の枝で作った刀で子ども達が「嫁ごの尻叩き、叩かせんもんな鬼産め蛇産め」と唱えて、初嫁を叩いて回り、玩具や御菓子を貰っていた。」という記述があり、現在では春日市小倉にのみ伝承される同様の行事が、平成の初めまでは聞き取りでき、さらに遡れば、より多くの地域で行われていたことが推測される。

『諸国図会年中行事大成』には、一月一五日粥杖の項に「粥木にて女の腰を打てば子を生むまじなひと云」と註書きに続けて、「狭衣云」「枕草子云」として、『狭衣物語』『枕草子』の関連文章を記述したあと、諸国の粥杖の実例を述べている。続いて、爆竹（とんど）并吉書揚について述べる項では、山科家より主上に献ずる左義長について記し、洛中の家々でも、今暁、竹を建て、注連飾り・吉書を焼き、「とんど左義長」と囃す。またその火で小豆粥を煮たり、餅を焼いたりする。灰を屋敷の四面に撒けば蛇が近寄らないなどの事を記し、大坂・兵庫・近江などの事例を挙げ、その中に三毬杖、毬杖との関連も述べている。

『狭衣物語』、『枕草子』は宮廷の出来事を記すが、宮廷行事が江戸

時代までには諸国庶民にまで広がっていたものか、あるいは小正月の行事として、民間に広く行われていたものが、宮廷でも行われていたのかは定かではないが、いずれにしても、春日市小倉で行われている、新婚の嫁が家に居着き、子宝に恵まれるようにという祝いをもって、また左義長を伴って行われていることは興味深い。

嫁ごの尻たたきは第二次世界大戦中、戦後、廃絶していたのを昭和五七（一九八二）年に復活させたが、昭和二八（一九五三）年一月発刊の『春日町郷土誌』（春日町氏子総代会）には、「毎年正月一四日夜左義長の場所で行われる。場所は住吉宮社前広場に村人達集まり、青竹数一〇本を持ち寄り、周囲一丈余りの束を作り夕に入り之に火を放ち炎々附近は昼の如し。其の年の内に嫁し来りし新婦が礼装にて社に参拝する途中を子ども達は二三尺の藁棒を以て新婦の尻を叩き巡るの風習である」と記されている。新婦の動きも子ども達の動きも自由に見えるが、平成六（一九九四）年発刊の『春日市史』では、「正装した嫁が神社拝殿に集まり、一同拝礼の後に区長から祝辞を受け、その後、境内の広場の左義長の周りに集まり、左義長に点火後、子どもが待ちうけて尻を叩く」と報告しており、現在では、さらに神事の部分が厳格化している。また子ども達の動きも、以前のように騒ぎながら叩く、思いっきり叩いては逃げる等のことはなく、秩序正しく動き、わらの棒で叩くというより、撫でる、触るという方が適切な動きとなっている。

なお、同じ春日市内では新婚夫婦を祝う祭りとして、国指定重要無形民俗文化財の「春日の婿押し」が、同日行われる。

【実施内容】

たたき棒の製作

令和四（二〇二二）年一月一四日実施の「嫁ごの尻たたき」に使用するたたき棒を、令和三（二〇二一）年一二月一八日、小倉公民館で製作。たたき棒作りは、以前は年が明けてから、九日頃行われ、年によっても異なっていたようだ。製作指導は長寿会他の大人が一二人、春日中学校の生徒男女二人、春日小学校生徒男女五人が参加。小倉区に子ども会はないので、希望者を募る。材料は今年度に採れた那珂川市産の稲わらと既製品の縄（わらロープ）を購入する。

手順

①小さな熊手（レーキ）でワラ束一掴みをこさいで、余分な枝分かれ部分を落とし、硬い部分だけにする（これが最も重要であるとのこと）。

②今年度産のわらロープを三尋分切る。

③ワラを足で踏んでピンと張った状態で、横にしたワラ束の根元から巻き付けていく。この時、ロープをしっかり張って、きつく巻き付ける。巻いた部分が持ち手になる。持ち手が長い方が格好良い。

④巻き終わりの部分を折り返し、ロープの端と輪っかの部分を残して一緒に巻き込む。

⑤ロープの端を④の輪っかに通して、しっかり締めて完成。

⑥住吉神社でお祓いを受け使用する。

左義長の製作

①一月一四日までに保存会・長寿会で竹取り。青竹数一〇本である。

②一月一四日九時から一二時に井桁状に木を組み、竹を建て、まわりを縄で固定する。中程の高さに注連縄を張り巡らせ、頂上に「謹賀新年」と書いた書き初めの旗をたてる。

③作業者には昼食としておにぎりが振る舞われる。

④一五時より正月飾りの焼却受付開始。

神事

一七時より祭りの説明等のアナウンスが入り、一七時一〇分、住吉神社本殿にて神事が開始する。修祓、祝詞奏上に続いて玉串奉奠では、氏子総代→保存会代表→宮座代表→小倉区自治会長→小倉長寿会代表→新婿・新嫁の順に拝礼が行われた。その後、以上のほか、参列して

いる親族など、一堂に盃が配られ、宮司が御神酒をついでまわり、宮司の「誠におめでとうございます」の発声で一同御神酒を頂く。その後、氏子総代の挨拶、新婿父の御礼の挨拶があった。氏子総代の挨拶では、「嫁ごの尻叩きが江戸時代から続く伝統行事であり、これを大切に守っていかなければならない」と言い、新婿父の挨拶でも「小倉地区の伝統行事に参加させてもらい光栄である」と述べた。その後記念撮影があり、新婿・新嫁は本殿と左義長のある広場の中間の土手に腰を下ろして待機していた。

左義長・嫁ごの尻たたき

一八時に子ども達は集合し、揃いの法被、たたき棒を受け取り、諸注意を聞く。法被は火の粉が服につかないようにとの配慮からである。また、たたき棒の製作に関わった子どもは自作のたたき棒を使用する。

左義長の会場では、初めての試みとして地元のなごみ太鼓が演奏され、神火が、氏子総代から保存会会長・自治会会長・長寿会会長に手渡されると、自治会会長を先頭に、長寿会・保存会会長が並んで続き、その後に、新婿・新嫁が続いて社前の石段を下りる。神火を持つ三人は左義長の周りの所定の位置に分かれて待機し、新婿・新嫁は、左義長より少し離れた所に立つ。

一八時三〇分左義長に点火。ひとしきり燃え、火の粉が収まった頃、一八時五〇分頃から嫁ごの尻たたきである（写真一）。左義長の周りを新婿・新嫁が歩き、その後に、たたき棒を持った子どもが行き、代わる代わる新嫁の尻に棒で触れる。ある程度の所で終了し、子どもはワラのたたき棒を手に帰宅する。この棒は魔除けとして、縄を巻いてない方を上にして家の玄関に一年間立て掛けておく。

終了後に新婿・新嫁、自治会長にはマスコミのインタビューなどがあり、一九時三〇分には、つばき庵（社務所集会所）で祝賀会となる。祝辞のあと祝めでたを唄い、乾杯、懇談となり、最後に新婿が御礼の言葉を述べた。

二〇時一五分からは、各家庭より持ってきた正月飾りを左義長に入れて順次焼却していく。この間、来訪者には振る舞いがあり、二四時に消火となる。

写真一　左義長・尻叩きの様子

【行事開催の現状】

令和四（二〇二二）年一月一四日開催の嫁ごの尻たたきは、五年ぶりの開催であり、このように整備された形での開催は初めてであるという。今年の新婚夫婦は、前年参加の予定であったが、令和三（二〇二一）年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となり、今年参加してもらうことになった。しかしその前三年間は新嫁で、行事に参加してくれる人がなく、該当者がいても断られる場合が多く開催できなかった。

断る理由は、伝統行事に価値を感じていない。必ず一月一四日に開催するため平日になることも多く、仕事に差し障る。近年の女性に関する考えの変化から、この行事の意味合いに疑問を持つ等もあげられる。しかし、伝統行事として続けていきたいとの考えを持つ人々も、【伝承組織】の項で述べたように、地域組織を改編し、伝統行事を存続できる体制固めや、祭事のやり方を整備するなどの努力をしている。初嫁の該当者がなく、嫁ごの尻たたきが行われない年でも、左義長は行ってきたという。自治会長によっては、消極的な意見を述べる人もいたが、現在の自治会長は、地域の伝統行事として継承したいと考えているという。

（森　弘子）

六　石釜のトビトビ

【指定等】

種類　福岡市指定無形民俗文化財

名称　石釜のトビトビ

指定年月日　平成一七（二〇〇五）年三月二四日

【テーマ】一八「正月・小正月」

【地域の概要】

福岡市早良区大字石釜は、福岡市の南部、福岡県と佐賀県神埼郡の境をなす背振山地の金山（標高九六七メートル）北麓に位置する。地区内には、隣接する大字曲淵の曲淵水源地を源とする室見川が東流し、博多湾へと向かっている。この川に沿うように、三瀬峠を経て福岡市と佐賀市を結ぶ国道二六三号線が走り、両都市を結ぶ最短コースとなっている。

江戸時代、この地は石釜村と称し、周辺の八つの村とともに脇山郷を形成していた。明治初期の石釜村は本村（一八戸）、上石釜（一六戸）、北（七戸）、新飼（九戸）、古原（一〇戸）、東（四戸）、大畑（一二戸）、下畑（六戸）、塔ノ原（二戸）、多々羅（七戸）の一〇の区域から成り立っていた。

その後、明治二二（一八八九）年に内野、西、曲淵、飯場とともに内野村を構成し、早良郡早良村、同早良町、福岡市西区の大字を経て、現在福岡市早良区に属している。

現在、大字石釜には上石釜、中石釜、下石釜の三村落が含まれている。このうち中石釜は本村上、本村下、新飼という三つの組から、下石釜は東、小原、多々良、下ノ畑、原という五つの組から構成されている。

【伝承地もしくは実施場所】福岡市早良区大字石釜

【実施時期】一月一四日直近の土曜日

※数年前までは一月一四日に行われていたが、成人の日が変動制になったのに伴い変更

【伝承組織】

現在、石釜のトビトビ保存会と子ども育成会が主催する行事として小・中学生の男女が参加して行われている。戦後、一時廃絶する昭和三六（一九六一）年以前は、「石釜ではワッカシ組の青年達が初正月を迎える家に男の子には藁で作った馬の人形・女の子の家にはエビの人形を持って夕方から村中をまわる。（北九州大学民俗研究会 一九七〇 一一七）」という記録があり、かつては若者組の行事であったことがうかがえる。

【由来・伝承】

小正月の夜に神の使いとされる子どもたちが藁で作ったトビを被り、集落の一軒一軒を回ってワ（輪の形をした注連縄）を渡す来訪神の行事の一種である。

トビトビの起源は明らかではないが、藁で作ったトビ（稲積みの笠）を身に付け、注連を渡して水をかけるなどのことから、石釜地区では豊作や雨乞いなどの祈願を込めた行事として伝わっている。一方、トビは稲の美称である古語「富草」の富と同義であり、そこには稲の精霊（稲魂）が宿るとされ、トビトビは稲作を予祝する行事であるとする説もある（金田 二〇〇二 一六二）。

子どもが減少したことで昭和三六年頃から一時廃絶していたが、子ども会から復活を希望する声があがり昭和五二年頃に復活した。

【実施内容】

※令和五（二〇二三）年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止。報告は過去の事例を参照しながら執筆した。

一　準備

実施日の一週間前の日曜日に保存会や子ども育成会などが藁製のワ、エビ、ウマ、トビを製作する。材料は青色がかった糯米（もちごめ）の新藁を使用する。

まず、準備した藁の枯れた部分を取り除いて整え、藁を一握りほどに束ね、納屋の梁に渡した縄に結わえて四人一組で綯っていく。一人は藁の束の根元を固定する役割、あとの三人で注連を綯う。藁を三等分にし、それぞれを左綯いにしながら、捻じり上げるように綯っていく。穂先まで綯ってから、藁で結ぶ。一本の注連縄ができたら、それを藁でしごくことで注連の撚りが安定し、緩まなくなる。その後、はみ出た藁を鋏で切って整え、輪の形に止めて完成する。ワは、トビトビに参加する軒数分を作るため全部で一七〇個ほど作る。

エビの作り方はワとほぼ同じだが、ワで使用した藁よりも、さらに丁寧に枯れたり汚れたりする部分を取り除き、ワよりも一束を一回り大きくする。エビの場合は、はみ出した藁をそのまま残し、細い縄で頭にあたる根元と穂先を、威勢の良いエビの形を模すように湾曲させて結ぶ。はみ出した藁はエビの足を表現している。

ウマは、藁を一本の長い縄で巻いて作る。材料は糯米の藁の特に青々としたものを用い、一本ずつの枯れた硬い節を取り除いて青い芯の部分のみにする。まず、藁で約二〇メートルの細長い縄を綯い、ほかに胴体や鬣（たてがみ）、尻尾といった藁製の部位を用意する。全ての部位の準備を終えたら、藁の束を結び、胴の部分と頭から前足にする部分とを組み合わせて針金で仮止めする。そして、頭部から縄を巻き始め、最後まで一本で巻き上げる。途中で、鬣に見立てた穂先を一本ずつ巻き込む。次に、前足は足先から巻き、胴には藁の束を足して厚みを一定にして形を整えながら巻き、尻尾に当たる穂先の束を巻き込む。そして、前足と同じ要領で後足を巻き、はみ出た藁を切り、形を整えて完成する（写真一）。

写真一　ウマの制作

トビは一抱えほどの藁を束ね、束ねた上の藁を一摘み程度、両手に取り、捻るように編んで、片方を下に残す。もう片方と次の一摘み程度の藁を同じように編んで、先の片方を下に残す。これを繰り返し、穂先は縄状に綯って止めて完成する。ちなみに、石釜では冬場に農家で里芋の保存で用いる芋床の上を覆う藁をトビと呼んでいる（写真二）。

写真二　トビの制作

二　実施

一八時、行事に参加する小中学生の男女、三〇人ほどが石釜公民館に集合する。七地区をそれぞれ一コースとして子どもたちを割り振り、世話役である大人の引率のもと、軽トラックに乗って移動する。これは以前に比べて交通量も増え、危険が多くなったことなどが理由のようである。

子ども達は三、四人で一組となり、一軒一軒を訪ねてまわる。そのうちの一人が訪れた家の前でトビを被り、ワを盆に載せて、玄関先でしゃがんで待つ。新生児のいる家の場合、男の子ならウマが、女の子ならエビがこれに加わる。他の者達も戸口の前に進み、一斉に「トォー

ビ、トォービ」の掛け声で来訪を告げる。

家の者は子どもたちの声に応じて戸口に現れ、ワを受け取り、その代わりに餅や菓子、祝儀などを盆に載せる。トビたちが餅などを受け取ると、家の者は用意していた水をトビに向かって掛ける。一方、トビは水を掛けられながら逃げていく。この時に、「トビが餅をもらう前に水をかけられたら、家に入って暴れてもよい」（松村　一九九七四二）とする伝承も残る。

こうした一連の流れを繰り返しながら、各組は数一〇軒ずつの家を回っていく。一時間ほどで回り終えると、公民館に戻り、子ども達は母親などが準備した夕食をとり、数々の返礼品を分配して行事は終了する。

頂いたエビやウマは、荒神様を祀る神棚に供えるが、近年は床の間や玄関に飾る家もある。翌日に、ワを屋根に投げ上げたりする家もある。

（石井　和帆）

七　相島の恵比寿祭り

【テーマ】一八「正月・小正月」、二三「恵比寿祭り」

【別名】恵比寿様、七福神祭、十日恵比寿

島の人たちは親しみを込めて本行事を「恵比寿様」と呼んでいる。帳面や恵比寿が担ぐ竹につける酒樽には「七福神祭」と記載されており、過去の調査報告からも、「七福神祭」という名称であったと考えられる。昭和三七年頃までは一月一五日の行事だったが、恵比寿祭りが広く一月一〇日に行われていること、新暦と仕事の関係から一月一〇日に変更になった（深野編　一九七二　五六）。その影響からか今では「十日恵比寿」と呼ぶ人がおり、福岡市博多区東公園の十日恵比寿神社の正月大祭に行く人もいるので、それにならっているのではないかと説明する人もいる。

【地域の概要】

糟屋郡新宮町は、福岡県の北西部に位置し、北は古賀市、南は福岡市、東は久山町に接し、西は玄界灘に面する、面積約一九平方キロメートルの町である。町の南東部は立花山をはじめとする山地で、山麓から続く町中央部はなだらかな丘陵、町北西部は海に続く平地となっている。町の約六割が海抜四〇メートル以下となっている。ＪＲ鹿児島本線、西鉄貝塚線、国道三号、国道四九五号が南北に走っており（新宮町地域協働課　二〇二一）、博多駅から電車で二〇分ほどの場所にある。

相島は新宮漁港から北西約七・五キロメートル海上にあり、周囲は六・一四キロメートル、面積は一・二二平方キロメートルである（新宮町誌編集委員会編　一九九七　八五五）。

名称には変遷があり、藍島とも書かれた。明治二二（一八八九）年に上府・下府・新宮・湊・相島の五箇村が合併して新宮村になり、昭和三〇（一九五五）年に立花村と新宮町が合併して現在の新宮町ができた（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編一九八八八〇、七二〇）。

江戸時代、相島は江戸幕府や福岡藩にとって重要な島であった。福岡藩は相島に遠見番所を置き、異国船の警備に当たった。その番所では、定番二名と足軽三名が交代で見張りをし（新宮町誌編集委員会編　一九九七　八七一―八七三）、足軽の子孫は現在でも三軒屋と呼ばれている。また、相島は朝鮮通信使の旅程に当たり、一行が来島した。島ではそのための供応・接待が行われ、負担は重かったという（新宮町誌編集委員会編　一九九七　八七四―九〇一）。

島では漁業が行われ、明治から大正にかけて島の人口が増加し、昭和三五（一九六〇）年の戸数は二五一戸、人口一三一八人に達したが、その後、沿岸漁業が不振となり、島外に職を求めたため、人口が減り始めた（新宮町誌編集委員会編　一九九七　八六一―八六二）。令和五（二〇二三）年三月末の人口は一二三人、一一九世帯となっている（新宮町　令和四年度 町名別人口・世帯数 https://www.town.shingu.fukuoka.jp/gyosei/gaiyo/2/1/3054.html）。

【伝承地もしくは実施場所】糟屋郡新宮町相島

【実施時期】一月一〇日

かつては旧暦一月一五日に行われていたが（新宮町誌編集委員会編　一九九七　九四九）、その後、新暦一月一五日となり、さらに一月一〇日に変更になった。

【伝承組織】若潮の会

多くの子どもが高校生になると島を出るが、男性は島に帰ってくると若潮の会に入る。本来は四〇才で退会するが、人が少ないためその年齢を過ぎた人も入っている。漁業者、漁業協同組合職員、島に仕事で来る人だけではなく、地域おこし協力隊で島に来た人も

入っている。
かつては「青年団」で担っていた（新宮町誌編集委員会編　一九九七　九四九）。

【由来・伝承】

恵比寿・大黒・三福神が、島の家々を回る行事である。大漁祈願の祭りと言われているが、かつては漁業だけではなく農業も行われており、島の人達がお参りに来るなどしてきたという。三番目の神は「三福神」ではなく、「福禄寿」（新宮町誌編集委員会編　一九九七　九四九）とされることもあったようだが、平成四（一九九二）年の調査では「三福神」とされ（新宮町誌編集委員会編一九九二　一二二）、現在の三福神の衣装の冠にも「三福神」と書かれている。以前は多くの家に上がっていたので二組の神が、二手に分かれて回っていたという。

家々を回る際には、大黒は小槌、三福神は連木で家の塀や壁を叩いていく。これは、神様から幸をもらう、家に福が来る、縁起が良いと言われている。

若宮神社にお参りする時や、恵比寿が家に回ってきた際には、自分の家の正月の餅と、大黒が持っている若宮神社に置かれて縁起が良い餅を交換して食す。一年の福、新しい幸を与えてもらうという。一年間の家族の健康を祈って餅を交換する。

【実施内容】

本報告は令和二（二〇二〇）年の恵比寿様（以下、恵比寿祭りを「恵比寿様」と表記する）の調査と、関連する八大龍王祭の調査（令和五（二〇二三）年）に基づいている。新型コロナウイルス感染症拡大の間も、家に上がることはしなかったが実施されたという。

準備は前年から行われる。八大龍王祭で掛魚を作って奉納し、それを恵比寿様までとっておいて恵比寿が担ぐ竹に掛けるため、最初に八大龍王祭について説明する。

八大龍王祭の由来

八大龍王祭（以下、「龍王祭」と略す）は、一一月一五日に行われる。島の西の海岸に、周囲七五〇センチメートル、横二六五センチメートル、高さ二一六センチメートルの石があり、これが八大龍王の御神体とされている。以前は海の渚にあったが、県道拡幅工事のため県道の横に上げられた（新宮町誌編集委員会編　一九九七　九四六）。

大漁祈願・安全祈願の祭りであるが、今となっては区の祭りなのか、漁業者の祭りなのか判然としないところがあるという。『新宮町誌』及び桜田勝徳によれば、寛政九（一七九七）年一〇月一五日の『旧来慣行八大龍王祭禮記録』に次のような由来が記されているという。「龍王祭は其昔丸木船有りし節、當島の人能々凪にて松の下へ行き磯見を致し候処、鮑おびただしく鮑の上々には居り、又其の上には居り最も山のごとし。丁斗漁船にびたびたと云ふ程突きとり、其帰りに船頭何某狂気と成り、様々口ばしりて、當島黒土に成ん。微塵に成んと様々狂乱し候へば、所者共驚き様々詫言申し、所中にて龍王祭仕候半と御理り申候へば、夫から狂乱も鎮まり、所繁盛にて島中栄え弥々祭り繁昌あり来り候事云ふ斗なし」（新宮町誌編集委員会編　一九九七　九四七）。この記録には他に祭りの献立や、島の神々や定番、足軽、寺に届ける供え物やしきたり等が記されている（桜田　一九八一　二五七―二六二）。

現在では、前日の一一月一四日を中心に供物の準備が行われ、一一月一五日朝に、八大龍王をお参りしてから御神酒をいただき、焼魚・巻魚を持ち帰ることが中心となっている。以前は、座家において本座が行われていた（深野編　一九七二　四七―四八、新宮町誌編集委員会編　一九九七　九四七―九四九）。祭りに参加している人々の記憶では、祭りの前後三日間は、準備や片付けも含めて組の人たちみんなで御飯を食べて賑やかだったという。今回は準備の後に、参加した男性たちによって飲食が行われた。

八大龍王祭の準備

島は北・中・南の三つの組に分かれているが、そのうちの一組が三年に一度当番を担う。令和五（二〇二三）年は北組が当番で、準備を担当した。龍王祭の掛魚作りは、一箇月ほど前から行われる。海が時化で漁に出られない時に、塩をたくさんいれたプラスチックの桶の中に、腸をとった鯛や鰯、シイラをつけておく。途中で一度取り出し、腹の中の塩を入れ替えて、さらに桶につけておく。

写真一　竹串の作製

龍王祭の前日、一一月一四日の八時頃から、男性たちが相島ふれあい館に集まって分かれて作業を行った。

まず、外で桶から魚を取り出して塩を拭きとっておく。また、竹を削って竹串を作る（写真一）。

一方、室内では、「焼魚」、「巻魚」を作る（写真二）。以前は、藁に火をつけて魚をあぶっていたというが、現在はあぶっていない。元々、焼魚は火であぶった鯛、巻魚は藁を巻いた鰯のことを指していた（桜田一九八一　二五二、新宮町誌編集委員会編一九九七　九四八）。相島には現在農家がいないので、藁は新宮町の農家からもらっている。

写真二　焼魚・巻魚を作る

焼魚・巻魚は次のように作る。小さい鯛に竹串を刺したものを作る（焼魚）。それから鰯の口に藁を一本差し込んでから尾まで藁を斜めに巻いていき、また、頭の方に巻きながら戻ってきたものを作る（巻魚）。そしてその鯛の上に鰯を載せてさらに藁で括る。これを一二〇個、すなわち一二〇軒分作る。

それから大きい鯛で「掛魚」を作る（写真三）。二尾の鯛をハの字型になるように針金で結び付ける。それから、板をエラの部分に差し込む。板と同じ長さの藁を束ねたものを上に載せる。注連縄を右綯いと左綯い一本ずつ綯って、藁束の上から結びつける。右に右綯いの注連縄、左に左綯いの注連縄がくるようにする。この作業は、年長者に当たる詳しい人が次の世代の人に教えながら行った。

写真三　掛魚を作る

また、お膳の準備をする。若手漁師二人が海にアワビを取りに行く。シイラを木の板の定規にあてて決められた長さに切る。女性達がお供えの下準備をして、膳に盛り付ける。盛り付けられたものは、焼魚・巻魚一組、シイラの塩づけ（「すびたし」と呼

写真四　お膳

ばれる）二切れ、アワビ二切れ、ヒラヒジキ、二段に重ねた白餅、大根を長方形に切ったもの二つと、大根を短冊状に切ったもので、大根の上には酢味噌をかける（写真四）。これを六膳作る。これは本座が行われていた時の引付膳と同じものであるようである（新宮町誌編集委員会編　一九九七　九四八）。御飯も炊いておく。

八大龍王の石の前に松を二本立て、竹を通して注連縄を張る。それから「奉納八大龍王祭」「奉納　豊漁殷賑」と書かれた白い旗を一本ずつと、「奉納　八大龍王祭」の青い旗を二本立てる。各漁船は大漁旗をかかげる。

八大龍王祭の実施

五時頃、島の子ども達（小学生の男子）と若潮の会のメンバーが、島を「ユーユーエー」と言いながら一周する。これは島中の神を起こすためであるという。以前は特に島の中央の権現様（高妻神社）のあたりで一番大きな声を出していたという。

区長たちは五時頃、掛魚やお膳を持ってお供えに行く（写真五）。掛魚は八大龍王の石に二掛、若宮神社に二掛、恵比寿神社に一掛、若宮神社境内の恵比寿に一掛奉納することになる。お供えする順番は、恵比寿神社→八大龍王→若宮神社（境内の恵比寿）となっている。お膳に載せたものは、「お椀」と呼ばれる藁で作った器に盛り付けて竹にさげる。また、白飯もお椀に盛って同様に竹に下げて箸をつける。それぞれの場所に掛魚と同じ数だけ供える。

八時頃、組ごとに旧道を通って八大龍王まで行き、お参りする。

写真五　八大龍王と掛魚

その時、供物の白飯と掛け魚の腹の中を少しむしって食べる。それから若宮神社・若宮神社境内の恵比寿に参り、三組杯で御神酒をいただき、焼魚・巻魚をもらって帰宅する。恵比寿神社まで行き、お参りする人もいる。一五日朝、お参りに来られなかった人の分の焼魚・巻魚は組ごとに配られる。巻魚・焼魚は、一年間、家の神棚や玄関の荒神様にあげておくが、玄関に刺しておく人もいるという。航海安全・家内安全のためだという。昭和七（一九三二）年の桜田の調査によれば、漁に出る際には両手で之を持って拝むと、運が強いと言い、この魚にまつわる奇跡が色々とあったという（桜田一九八一　二五二）。

女性達は男性のお参りが終わった後に八大龍王にお参りに行く。八大龍王の境内地は靴で上がってはならず、本来は裸足（靴下）でお参りするという。

掛魚と供え物は、一六日に下ろして海に流す。旗や大漁旗も片付ける。掛魚をもらいたい人はもらって帰り、塩を抜いて雑炊にしたという。また、恵比寿様に使う掛魚は保管しておく。

恵比寿様の実施

神様になる人を決める

年の最後の若潮の会（令和元（二〇一九）年一二月二七日）の際に、会員の中から恵比寿、大黒、三福神を決めた。決め方は、まず、「お神」を決めるための籤を引く順番を決める割り箸の籤を引く。それからそれぞれの神様の名前の一文字が書かれたピンポン玉の籤を引いて、神様になる人を決める。他の役割として随行者がいる。

準備

令和二（二〇二〇）年は、相島きずな館に四時に集合して、朝食をとった後、顔におしろいを塗ってから顔を描いた。自分で描いたり、会員に描いてもらったりするが、顔は決まっているため、過去の写真を見たりしながら描く。衣装は手作りでこれに着替えるが、

恵比寿は金と銀を基調とした衣装を纏う。大黒は小槌を持ち、三福神は連木を持つが、連木とは、蒲鉾を作る時に魚をすりみにする道具である。随行者は着物を着用する。

若宮神社への参拝

五時三〇分に島の氏神の若宮神社に移動し、拝殿の正面外側には、掛魚と酒桶をくくりつけた竹が立てかけられる。竹は、家々を回る際に、恵比寿が担いでいく（写真六）。拝殿の上座に左から、恵比寿、大黒、三福神の順に戸の方を向いて座す。端には随行者がつく。恵比寿の前に酒、イリコ・スルメ・昆布を混ぜたもの、丸餅が置かれる。

神社で一番最初に栄唱唄（栄昌歌）を歌い、打ち込みをするのは恵比寿と決まっているという。六時頃になると、参拝者がオシオイと呼ばれる、賽銭の代わりとされる小石を鳥居右の恵比寿等境内末社にあげてお参りしながらやってくる。オシオイは神社の前の道路から参道へ入るところに置かれている。

拝殿に上がった参拝者は御初穂（お金）を渡す。神様たちは栄唱唄を歌うが、お参りに来た人が帰るまで歌い続けなければならないという。女性も参拝に来るが、拝殿に上がれるのは男性のみのため、恵比寿が出てきて御初穂を受け取り、餅を交換する。

写真六　恵比寿

写真七　餅を交換する

家々を回る

夜が明けて八時半頃になると、神様たちは拝殿を出て、家々を回り始める。大黒は餅が入った袋を持っていく（写真七）。若宮神社を出ると右に曲って回り始め、購買所近くで休憩をして北の方に行く。空き家も含めて回ると言い、回る家の順番は事前に紙に書いている。順番を間違えないように、できるだけ同じ道は通らないようにして回る。次のような歌を大きな声で歌いながら回るが、口伝えであることから、歌詞については諸説あるのであわせて記しておく。

祝うたぁ　祝うたぁ
（よーたーよーたー）
恵比寿様がひーなった
（恵比寿山が火になった、
恵比寿様が回る日になった）
石堂口まで焼けていた
（石の内まで焼けていた）
焼けていたらでーすこい
あー、もちもちだごだご

写真八　大黒と三福神が家を叩く

写真九　家々を回る

その時、家々の塀や壁だけではなく、自転車等まで小槌や連木で叩いていく（写真八）。家から出てきた人たちは御初穂をあげたり、餅を交換したりする。赤ちゃんを抱っこした母親が家から出てきて、大黒が頭を小槌でなでることがあるが、風邪を引かないようにする御利益があるという。

昔はどの家も神様を家に上げたが（写真九）、訪問したのは店が二軒、家が三軒、それから漁協、相島小学校・新宮中学校相島分校だった。二〇年程前は二〇軒の家が上げていたが、勝手に上がり込むこともあったといい、それから、今のように声がかかったところだけに上がるようになったという。家では、御神酒、蒲鉾、数の子を出すことが多いという。クジラ御飯といったお祝いごとに食べるものを出す家もある。

神様を上げる家には、御三宝が供えられている。栄唱唄の二番に歌われているように三宝に「橙、みかん、串柿、ゆずり葉、もろもき、いか、昆布」を載せるが、三、五、七といった数にする。

上がったところでは、まず主人をはじめとした人々が神様と順に酒を酌み交わし、栄唱唄を恵比寿・大黒・三福神と歌うが、随行者も「お願いします」「歌っちゃれ」と指名を受けて歌うこともある。唄は一人、一番ずつかぶらないように歌う。唄は奇数でないと終われないと言い、七人歌った家もあった。恵比寿を務めた人によれば、小学生の頃から唄を知っていて、それぞれ自分が歌いたい、得意な唄を歌っているという。参加してきた人たちは、先輩が歌っているのをみて覚えた、先輩から教わった唄を歌ってきたといい、一人が歌える唄の数は多くないという。したがって、以下に記す九番までの歌詞を見てこんなに唄があったことがわかったという人もいる。過去の新宮町の調査では、七番が栄唱唄、一・五番が新築歌、一三番が若水迎えの歌とされている（新宮町誌編集委員会編　一九九二　四二―四三）。以下、印刷された歌詞をそのまま記すが、恵比寿が歌っていた一番長い八番については、他にも歌ったことがある人がいたので聞き取り、また実際歌われたものを記す。

歌う時はまず、恵比寿が「イエー（二拍手）ヨイトサーノ（二拍手）モヒトツセーノ（三回拍手）」と打ち込みをする。それから恵比寿が歌って、また打ち込みをする。その後順に、大黒・三福神・随行者、頻度は高くないというが家や施設の人が歌うこともある。その間、他の人たちは酒をいただく。最後に恵比寿がもう一度打ち込みをする。この時は恵比寿が八番の歌、大黒が一番の歌、三福神が六番の歌で、その他、二・四・七番が歌われた。歌い手以外は、手拍子と囃し詞を入れる。

栄唱唄

一、正月二日に芽立つ桑の木の森とな（コラショイ）アラ茂りしその下で（アラマタソコダヨ）鶴と蜂と鶏と酒盛り（コラショイ）アラ鶏唄えば鶴は舞い蜂はな（コラショイ）アラごでん中をナーエさしまわるションガエー

二、まず正月の景色には門にな（コラショイ）アラ二本の松立てて（アラマタソコダヨ）お家にゃ年縄注連飾り橙（コラショイ）アラみかんに串柿（アラマタソコダヨ）ゆずり葉、もろもき、いかに昆布三方にゃ（コラショイ）アラ白きご米をナーネのませするションガエー

三、正月二日の初夢に白きな（コラショイ）アラねずみが三つくだる（アラマタソコダヨ）また三つ連れて六つくだるこちのな（コラショイ）アラお家に金運ぶ（アラマタソコダヨ）その金寄せて蔵建てて孫子な（コラショイ）アラ栄えてナーエ末繁盛ションガエー

四、カナギやカナギ数多いふるこな（コラショイ）アラかんこにしんこまで（アラマタソコダヨ）かわいやに（名前・船名）積み込まれ初句な（コラショイ）アラ相島へとナーエ走り込むションガエー

五、こちの旦那さんなぁ良い子持ち総領な（コラショイ）アラ息子

が家督もち（アラマタソコダヨ）二番息子が金持ちで三番（コラショイ）アラ娘が衣装持ちで（アラマタソコダヨ）その娘が嫁入りするときにゃタンスな（コラショイ）アラもちやら長もちやら（アラマタソコダヨ）そのときゃわたしもナーエ小樽持ちションガエー

六、まずめでたいは海鳥の十二な（コラショイ）アラ卵を産み揃え（アラマタソコダヨ）十一時立つ時は親とな（コラショイ）アラ酒盛り黄金の銚子（アラマタソコダヨ）呑めや大黒ナーエあら唄えや恵比寿ションガエー

七、まずめでたいは高砂の池のな（コラショイ）アラ水際に稲植えて（アラマタソコダヨ）一穂とりては千石の二穂な（コラショイ）アラとりては万石の（アラマタソコダヨ）三つや四つ五つ穂な（コラショイ）アラとりては富士の山（アラマタソコダヨ）その米寄せて出雲の酒屋の酒にするその酒（コラショイ）アラ呑んでたつ人は（アラマタソコダヨ）命永らえナーエ末繁盛ションガエー

八、いざなぎやいざなぎ（コラショイ：これは昔の人は歌っていなかったという）アラいざなぎ山の楠を船にな（コラショイ）アラ造りて今朝おろす（アラマタソコダヨ）一に大黒二恵比寿るうにな（コラショイ）アラ船玉飾りて（アラマタソコダヨ）黒金帆柱おし立てて龍帆な（コラショイ）アラみ縄は三味の糸（アラマタソコダヨ）綾と錦の帆をまいて吹き来る（コラショイ）アラ嵐を帆に受けて（アラマタソコダヨ）大波小波を乗り越えて初句な（コラショイ）アラ相島へとナーエ走り込むションガエー

九、まずめでたいは芋種の穀たち（コラショイ）アラ茂りしその下で（アラマタソコダヨ）枝に千余の子を付けて夜はな（コラショイ）アラ黄金のナーエ露受けるションガエー

歌詞の最後は、「エース　エス」と言う。

一六時頃までかかって島の家々を回った。最後は恵比寿が持っていた竹の先につけた鯛を外し、随行者が「ありがとうございます」と言って、鯛を海に戻した。

【類似行事・関連行事】

十日恵比寿（恵比寿祭り）（福岡市西区西浦浜　恵比寿神社）

一月一〇日に、新しく入った漁業者（救難所の若手）が男女二人の恵比寿に扮し、祝いめでたを歌う。祝いめでたは、歌詞は一五番まであって博多と節が違う。

聞き取り調査によれば、本行事は昭和三〇年代に復活した。当時は一六才で中学を卒業して漁師になったが、同年が七～八人もいたことから、籤を引いて恵比寿を決めていた。恵比寿は四人おり、浜の家々を回って上がっていた。子ども達は「通りもん」と言って山車を曳いて回ったという。博多人形師である小島与一の弟子が来て作った人形を飾っていたというが、昭和五〇年代に行われなくなった。現在は、恵比寿を作って御神は入れるが、家々は回っていない。西南学院大学国語国文学会民俗学研究会の報告書に、西浦の当時の十日恵比寿の事例がある（西南学院大学国語国文学会民俗学研究会編　一九八二　五二）。

（田中　久美子）

八　歩射祭

【テーマ】一八「正月・小正月」、一三「若者・成人儀礼」

【地域の概要】

志賀島は、福岡県福岡市東区にある周囲一一キロメートルほどの陸繋ぎの島である。かつて玄界灘に浮かぶ島だったが、海の中道という砂州で九州と陸続きになっている。

島の名は、『風土記』には「資珂」、『延喜式』には「志加」、『和名抄』には「志珂」、『万葉集』には「志賀」とある。また『筑前国風土記』を引いた『釈日本紀』には島名の由来がある。気長足姫尊（神功皇后）が船で新羅に向かうとき、夜この島に停泊した。まず侍従の小濱に火を探させたが、早く手に入れて戻ってきた。次に侍従の大濱が「近くに家があるか」問うたところ、「この島は打昇浜と近く、地形も相続いている。ほとんど同じ土地といってよい」と答えた。そこで「近の島」と言ったものを訛って、「資珂の嶋」と呼んでいるとある。このことから神功皇后の新羅の役に、大濱と小濱も随従したと思われる。応神天皇紀によれば、大濱は阿曇蓮の祖である大濱宿祢という。

【伝承地もしくは実施場所】　福岡市東区志賀島　志賀海神社

【実施時期】毎年一月一五日に近い日曜日　かつては旧暦一月一五日

【伝承組織】

志賀海神社の神職、社人、八乙女、氏子総代に加え、射手、矢取り、地頭で祭を進める。

社人は、大座の大宮司・禰宜・別当、小座の検校・宜別当・楽座と座があり、各々一良から四良までと家筋で決まっている。

八乙女は、神社に奉仕する年長の女性である。本来八人だが、現在は四人で、実際に祭りに奉仕する者は三人の時もある。

島内は勝馬、弘、志賀島の三地区に分かれる。さらに、馬場町、本町、弘、勝馬、西町、新町、中町の七町内に分かれ、各町内から基本三人の氏子総代で計二一名がいる。しかし、今は一八名である。祭場作りや大的などの道具製作は氏子総代による。

「射手」は高校生を中心とした男性、「矢取り」は小学生男児、「地頭」は町内自治会会長。各々八人で、一人ずつ組んで座を形成する。誰がどの座となるかは、話し合いで決定する。

【由来・伝承】

若者が弓を射る正月行事で、一人前になるための通過儀礼と、弓を射ることによってケガレを祓うこと、さらに小正月の豊穣祈願が一緒になったものと思われる。矢を射るが、流鏑馬と違って馬には乗らない。そのためこの祭りの名がある。かつて志賀島に人々や家畜に被害を及ぼしていた土蜘蛛がいたが、これを阿曇百足ら八人の射手が退治したことに由来する。無病息災、五穀豊穣・豊漁を祈願する。

【実施内容】

準備（年末までの準備）

a 選出

前年の一一月ごろから、弓を射る若者「射手」八人の選出が始まる。男子高校生を中心に声をかける。かつて神社や総代は関与せず、「世話人」や古参射手を中心に、島内の若者を集めたというが、近年対象者がおらず、氏子総代が幅広く声をかけて射手を集めている。今総代を務めている人達は六〇代後半の人が多いが、彼らの時代には若者も多く、射手になりたい人は多かった。志賀島に生まれたからには射手になるのは当たり前だった。その昔は志賀町内の者に限られていたが、その後勝馬や弘からも射手になっている。さらに現在は、そもそも島内に若者がいないため、志賀島在住でなくとも良しとし、島外近郊の者でも親戚が島に住むなどの縁故で射手となっている。一二月には射手は決定し、弓道場「わたつみ館」での練習が始まる。一一月二三日

頃には、総代がわたつみ館の庭に練習用の的を設置し、射手がいつでも練習ができるようにしている。本番まで個々時間をみつけては練習に励む。ただ基本的な射方は、弓道の先生を招いて指導を受けている。しかしそれよりも先輩、世話人から習い、先輩の射方の真似をする人がほとんどである。そのため体を大きく前傾した独特の射方が受け継がれている。

「世話人」には、射手を二、三回務めた二〇歳代の者が、後輩の面倒をみようと名乗り出て就任している。令和四(二〇二二)年の調査では、島内の者が二人、近郊の者が二名就任し、計四人だった。世話人は射手選出には関与しなかった。

歩射祭の組織は、「射手」八人、「矢取り」と呼ばれる子ども達八人、そしてこれらの上にたつ「地頭」八人からなり、各々御座を組む。社人の座と同様に、「大宮司四良」、「禰宜四良」、「別当四良」、「大宮司五良」、「禰宜五良」、「別当五良」、「検校」、「宜別当五良」の八つの御座である。射手は地頭になり代わって矢を射る。一月五日、「クジ取り(「地頭ぎめ」)」といって、射手が代行する地頭をクジで決めていたという。その後社人が地頭になっていたが、現在ではそれもままならず、地区の自治会長が務めている。「矢取り」は、小学生(令和四(二〇二二)年は小学校二年生から六年生)が務め、射手と組んで祭りを進めていく。射手八人のうち、誰がどの御座になるかは射手同士の話し合いで決めるが、経験者が大宮司四良となり、新参者は禰宜四良・五良と決まっており、もめることなく決まっていくという。大宮司四良に誰がなるかという点が一番重要で、よく話し合うという。この座には明確な上下関係があり、五良より四良が上であり、新参者は古参に皆従う。射手は世話人に従う。

b「胴結締(どいじめ)」

一月二日八時頃から、わたつみ館で氏子総代が集まり「胴結」を作る。「胴結」は、藁に撚りをかけて八本束ねたものを三二本作り、これを大縄で上下二箇所巻いて締めたものである。閏年は三三本になる。高さ八六センチメートル、径六〇センチメートルほどで、推定五〇キログラムにもなる。かつては一五〇キログラムにもなった。藁は勝馬の不浄がないところ、つまり忌がないところから入手する。かつて弓の練習用の的だったというが、今は歩射祭の前日の「胴結舞」に使う。禰宜四良の射手が胴結を背負い頓宮まで運ぶ。そのため背負えるように、上下の大縄に背負い用の藁を取り付け、さらに晒を巻いた。この日の作業は六時間以上かかった。

二日の一八時半より、わたつみ館にて「固めの式」を行い、射手と矢取りが初めて顔合わせをする。矢取りの衣装合わせも同時に行った。かつて一月一〇日の十日恵比須の頃から、「お宮どまり」といい、射手と矢取りが神社に宿泊して結束を固め、様々な作法を習った。新型コロナウイルス感染症拡大の関係で、令和四(二〇二二)年は歩射祭前日に射手が宿泊しただけで、矢取りは宿泊しなかった。

一月五日、総代によって大的の製作を行う。志賀海神社の古札から護符を取り出し、的の材とする。また竹の筒を十字に組み、その交点を大的の中心として、大的の枠を作る。それに竹を縦に四分の一に割ったものを大小五本用意し、丸く形成して骨組みとする。径六尺九寸で、紙を貼った上に、中心部と外を二重に黒く塗る。半紙を八枚外に垂らして、蜘蛛の足とする。乾燥させながら四日間かけて完成した。

同時に、大的を射る場所を整える。参道には、すぐに大的を設置することができるように、地面には柱を固定する穴がある。大的から一一間(約二〇メートル)のところから射るように整える。

かつては八日に、射手によって矢篠(やじ)を製作した。神社付近の山から竹を伐りだして加工する。一三日に「矢祓い」といい、射手が家々にその矢を射こんでいった。現在は皆瓦葺になったので、この習慣はなくなった。その代わり、胴結舞の後、氏子総代が町内毎に手分けして、一軒ずつ清められた矢を配って回る。「ポスト」と言って玄関先に投げ込んでいく。

祭り前日

a 胴結舞

二日一〇時から、氏子総代が製作した胴結を背中に背負って、神社下から頓宮まで移動する。射手は全員白衣白袴、鉢巻、白足袋姿で、世話人、矢取りは平服である。胴結の上には笹を挿す。雄竹と雌竹で、これに注連縄をかける。また三本の福笹も挿し、鯛と「大漁満足」の札が付いていた。神社下で胴結、弓矢とともに、射手はお祓いを受けた後、新参者の禰宜四良が胴結を背負う。首から麻紐で繋いで、五円玉で固定した八個のダイダイを下げ、「杖」を持つ。杖は全長約一一〇センチメートルで、上部の長さ二九センチメートルの楕円状の頭部の中央に二重丸、それを挟んで上に「鶴」、下に「亀」と書かれている。その上端部を持って目の高さに構え、参道の幅いっぱい右に左に揺れながら進んでいく。他の射手は、後ろから補助しながら、上下に激しく胴結を揺さぶっていた。世話人は歩みを促し、矢取りは後ろからついていく。三味線、太鼓、笛の音に合わせて、「伊勢音頭」を歌いながら進む（写真一）。頓宮の前に着くと、「舞能の舞」で、杖を目の高さに持ったまま他の射手の「舞能の岸の姫松や」に合わせて時計まわりに廻り、「ポスト」と応じる。他の射手から上下に激しく揺さぶられる。これを三回繰り返す。終われば、「ポスト」、「ヨイヤ」といって次の新参者に交代し、同様に舞う。志賀島独特の舞で、度々奉納される。そしてわたつみ館まで、また禰宜四良が背負い戻っていく。

「伊勢音頭」とは、

注連縄をなー飾りて　門松立てて
アラヨイトイセ　アラハレワト　セ
そして春待つ　アヤンデセ
屠蘇の酒
アコリャコリャ　アヤアトコー　セーノアヤァオイトナ
アレモセ　コレモセ　ササナンデモセ

という歌詞で、この後伊勢、安芸のことなどを謡い、八番で「志賀のナー沖には　瀬が二つある」と志賀島を読み込んで続き、最後は「御祈祷、御祈祷」で締める。「伊勢音頭」というが、近年地元では「わたつみ音頭」とよぶ人もいる。射手は就任すると「伊勢音頭」の歌の練習を行うが、検校は太鼓の役なので、歌わず太鼓の練習をする。胴結舞は、まさに成人儀礼たるもので、新参者が当日きちんと矢を射ることができるように心身を鍛えられている。

この後、射手はわたつみ館で昼食となるが、エビフライや魚フライをおかずに、吸い物と御飯を食べる。吸い物と御飯は、必ず三杯食べなければいけない決まりがある。この後の夕食、当日の朝食も同様に三杯食べなければならない。夕食からきなこ餅もメニューに加わり、これも三個食べなければならず、お腹いっぱいになるという。その他、食事には規制があり、今は十日恵比須から歩射祭が終わるまでは、四足のものは食べてはいけないという。つまり牛や豚は食べないが、鶏肉は可能だった。禰宜四良・五良が食事の用意をする。昔は調理もしたが、今は配膳、お代わりをよそい、片付けをするだけである。かつてこれらの禁制はもっと長い期間守ったようである。酒も三度飲むという。

写真一　胴結舞

b 勝馬詣り

同日の午後、島の北部の勝馬沖にある沖津宮に参拝する（写真二）。射手は上半身裸で褌姿に足袋を履き、海岸に集まる。騎馬戦の形で新参者は馬となり、胴結舞で使ったダイダイを下げ、脇差を持った古参

を一人担いで島に渡る。御神酒の一升瓶も運ばれる。島では、まず古参が岩場に上り、新参者が海中から取ってくる「ガラモ」という海藻（ホンダワラ）を吟味する。「違う」と何度か捨てられた後、やっと古参に認められる。厳重なる禊であろう。やがて認められるとガラモを頭に捧げ、胴結舞と同様に「舞能の舞」を舞う。終わると、全員で山頂の沖津宮に掛け声とともに上がっていく。沖津宮でガラモを捧げて三度廻ってから神前に供える。そして持参したダイダイを半分に割って盃にして御神酒を飲む。ガラモは食材や薬材、さらに製塩や肥料として使われ、古来非常に有用かつ貴重のものとし、ガラモの舞は、ガラモの豊漁祈願としている。

写真二　勝馬詣り

次に体を拭いて白装束となり、仲津宮に移動する。拝殿内にコモを敷いて、四人ずつ向かい合って座り、沖津宮と同じことを行う。「舞能の舞」である。まず三分の一ほど広げた扇を目の高さに構えて三回廻る。「舞能の岸の姫松や」を全員で唱える。区切りで必ず「ポスト」に「ヨイヤ」と掛け声をかけあう。全員終わると、扇を閉じて晒で巻いた脇差でポンと床を叩いて立ち上がる。『志賀海神社祭事資料集』（福岡県文化財調査報告書第二四集、福岡県教育委員会、一九六二）では、手ぬぐいを面前に捧げたという。外に出て、またダイダイを半分に割って盃にして、御神酒を世話人や周りの者に振舞った。

これら一連の儀式は、「位上げ」の儀式である。この儀式で、射手は「社人」となった。神になったともいい、「位上げ」した射手は特別に扱われた。店が閉まっている夜遅くでも、射手が買いに来れば、店を開けていたという。

c お潮井かぶり

一八時、射手と矢取りの小学生が、お潮井で身を清める。褌に白足袋姿で、わたつみ館から大鳥居を通り、フェリー乗り場の横の海まで「わっしょい」の掛け声で走っていく。そのままの勢いで円陣を組んで海に入り、「ああ大海や大海や、沖の白波背に受けて、むすんで肩にアビラウンケン」と三度唱えてから頭まで海に浸かった。「アビラウンケン」とは仏教用語の五字明で、大日如来の内面の悟りを意味する。ここでは呪文として覚えられている。冬の夜の海は冷たく自然と早口になる。そして今度は頓宮まで走っていき、頓宮前に用意された大桶に入った真水をかぶる。「ポスト」と言いながら手桶で水を汲んでかぶり、そしてついに大桶ごとかぶって身を清めた（写真三）。

写真三　お潮井かぶり

d 押手固（おしでがため）・勝手固（かってがため）

一九時、装束を整えた射手は、隊列をなしてわたつみ館から頓宮に向かう。白装束に肩に波模様が入った手ぬぐいをかけている。先頭の射手は、右手に弓と矢二本を持っていた。射手のうち検校一人が、矢取り二人が持つ太鼓を叩き、それに合わせて「伊勢音頭」を歌いながら進んで行き、頓宮前で歌の最後まで歌った。一人ずつ頓宮の中央に進み、手ぬぐいを広げて二つに折り、額の高さで捧げる。頓宮前に並ぶ他の射手が歌う「舞能の岸の姫松や」に合わせて、時計回りに廻る。「舞能の舞」だ。三回廻ると、「ポスト」「ヨイヤ」と言って、手ぬぐ

いを肩にかけてから頓宮を出て交代する。五人が行った後、今度は一人が弓を持って頓宮の中央に進み、「押してー、押してー、押してー」と言い、左手で弓を構えて前に三度押し、「勝手がつきました」と右手を右肩につける。「押手固・勝手固」である。「押手」とは、弓を持つ方の手、弓手のことで、右手で弦を引き、弓手で弓を押すことが弓を引くときの基本動作を表している。「勝手」とは、右手を指す。交代で新参者五人が行った。そして行きと同様に列をなして「伊勢音頭」を歌いながらわたつみ館まで帰り、わたつみ館の前で最後まで歌い終わった。参道の宝篋印塔の前でも行った。

その後二〇時から神社に上がり、「大習し」と言い、明日に備えて通しの練習をした。射手は、このまま神社に宿泊する。

祭り当日

a お潮井

祭り当日の五時頃、神社近くの海岸のお潮井場で、射手が清めを行う。褌に白足袋姿で、「わっしょい」の掛け声とともに、真っ暗な中神社から駆け下りてくる。一行は、お潮井場の海に入って円陣を組み、「ここを祓いたつるは高天原なれど、洗いながすも洗いゆすぐも荒磯の波」と三度唱える。何度か肩まで海に入ってから上がり、「わっしょい」の掛け声で神社に戻っていく。これを三度繰り返す。最初は八人揃って行ったが、あとの二回は新参者五人だけで行った。そしてお潮井の砂を桶四つに取って、神社に帰っていき、大的の設置場所に置いた後、神前にお供えされる。

次に神社で「大的の出立」がある。ブリの吸い物、タクアンと決まったメニューでの食事である。わたつみ館に戻って、別にギンダラをおかずに、汁物、御飯を食べた。

b 神事

九時に神事が始まる。射手、矢取り、世話人も参列する。射手は立烏帽子、白衣・袴、白色狩衣（禰宜座だけ赤色）、白足袋、草履で扇子、手ぬぐい、脇差を持つ。矢取りは白衣・筒が太く裾が狭い軽衫で、足元は白の脚絆、水色の手甲、帯も同色である。頭には白鉢巻、肩には手ぬぐいをかける。世話人は、正装の白衣・袴で黒羽織を着る。神事の中で、大的、弓矢、射場が清められた。

今宮社で神事の間、本殿では射手による「直会」がある。拝殿に四人ずつ向かい合って座り、「舞能の舞」を行う。そして一人ずつ御神酒をいただく。『福岡市史』民俗編一（福岡市史編集委員会、二〇一二）によれば、ひと通り盃が行き渡ると、新参の射手が舞能を舞ったとある。

c 的廻り

「イトウベンサシ」という役がある。令和四（二〇二二）年に初めて務めた人物は、矢取りも射手も経験があり、神社より声をかけられて就任したという。以前は社人が務めていたが、高齢のため引退した。かつて大宮司一良が務めると決まっていた役である。『福岡市史』民俗編一では、イトウは射手、ベンサシは弁指（差）と推察されている。中世の領主の職名「弁済使」が語源で、近世には浦庄屋の異称であるとされる。土蜘蛛を退治した中心人物阿曇百足の役がイトウベンサシという。射手の長を務める者で、大的当日しか登場しない。立烏帽子、白衣・軽衫、白足袋に草鞋、赤色の襷をかける。

神事がすべて終了した一〇時半頃、拝殿前階段下の斎庭に、イトウベンサシと射手が椅子に座っている。まずイトウベンサシが前に出て、総代が務める矢取りから弓矢を受け取る。弓は黒白のだんだらで、祭用の強弓、雁又の矢という。まず二本の矢を右手で上から取って後ろ手に構えてから、左手で弓を中心、左、右と手刀を切ってから受け取り腰に構える。矢取りが下がった後、イトウベンサシは矢を前に持って三歩前に進み、右足を一歩引くと同時に弓に矢をつけ、右手で後襟に挿していた扇子を取る。扇子で地面近くまで撫でるように動かして手前までくると同時に、左足を上げて構える。合わせて拍子木を一度鳴らす。そして右手に扇子、左手に弓矢を高く上げ、石段下の大的近

くまで進んでそのまま待機する。以下、射手が大宮司四良から順に同じことを行い、ゆるく円を描いて並ぶ。その間、世話人が射手の装束や姿勢を直していく。全員揃うと、「的廻り」である。社人が背負う大的を先頭に、斎庭を時計回りに三度廻る。土蜘蛛を追い回す姿ともいい、士気を高めているようだ（写真四）。

そして着座した後、順に矢取りに矢を戻す。最後の射手が矢を戻して、椅子に触れたか否かで、射手全員が拝殿まで石段を駆け上がる。拝殿前にはイトウベンサシが座って待ち構えており、射手は順に、扇子の端部でイトウベンサシの顎を撫でる。かつては射手が「大宮司さんお笑いなっせ」と声をかけて、イトウベンザシが大笑いして応えていた。令和四（二〇二二）年は、笑わずに撫でられただけだった。

写真四　的廻り

写真五　天地四方祓

d大的

いよいよ舞台は射場に移る。大的が射場の所定の位置に取り付けられる。そして射的の前に、まずイトウベンサシが石橋（育民橋）の前で、矢取り（社人）から弓と矢を受け取る。橋に上がり、山門に向かって「天地和合して東西南北悪魔を祓え」と言った後、東、西、南、北の順に、「えい」という掛け声とともに、上方と下方に矢を射る仕草をする。「天地四方祓」である（写真五）。その後矢取りに弓矢を渡して、橋を渡る。射手、矢取りも橋を渡り、射的に備えて所定の位置につく。イトウベンサシは、「矢祓い」に移る。朝射手が取ってきたお潮井を先頭に、矢取り（社人）とともに大的の所まで進む。大的の中心部にかけられた二尺ほどの小さな黒い的「こまなか」に向けて二本の矢で三回射る。三尺ほどの近距離から射ており、三本とも命中した。その度に「ヨイヤー」と、的の周辺にいた氏子総代から声が上がる。最初の一矢は抜くが、あとは的に刺さったまま的を外した。昔藩主が縁起物として、この的を買い受けにきたこともあったという。お潮井を先頭に、こまなかを持った矢取りに次いで、イトウベンサシは戻っていく。その矢は神前に供えられた。『福岡市史』民俗編一では、イトウベンサシの矢祓いが終わってから初めて射手、矢取りは橋を渡り、射場に向かったという。細かな動きは、変わってきているようである。

次に射的に移る。的から一一間のところにゴザを敷いて射場とした。上には注連縄が張られている。射手は四人ずつ向かい合って、胡坐座で座る。座り方は沖津宮、拝殿での直会と同じく、大的に向かって奥左に大宮司四良、右に禰宜四良、その前右が別当四良、左に大宮司五良、その前右に禰宜五良、左に別当五良、最前列左が検校、右が宜別当五良。この順に射ていく。隣同士組んで射るが、奥と最前列は、射るときに左右位置を代える。一人が一手二本で三回、八人で計四八本矢を射る。まず矢

写真六　大的

の先端部をお潮井が入った手桶に突っ込んで矢を清める。そして立ち上がり弓矢を構えて、楼門側の奥に座る神職の前で右、左、正面と、一度後ろに体を反らしてから一拝する。射場に向かって、一礼をして、片肌を脱いで弓を構える。世話人が袖を整えたり、射手の補助をする。先輩の指導という独特の前傾姿勢で皆矢を射る（巻頭図版・写真六）。大的の周りに総代と矢取りが待機しており、一手終わる度に総代が矢を抜き、矢取りが世話人に届ける。的に当たれば、周りから「ヨイヤー」と声があがる。そして大的に向かって、「ポスト」と連呼しながらお潮井をぶつけて清めていく。また大的から射場までも世話人によってお潮井が撒かれ、常に清めが意識されている。

的に当てることを目指しているが、全部当てることは「位負け」の恐れがあるとして、わざと一本外した。また逆に一本も当たらないと「スノコリ」といって縁起が悪いので、祭りの後に海岸に行き、お潮井で清めたという。また途中で射手の親が海岸にお潮井を取りに行き、大的に当てることもした。お潮井の清めの力は強く信じられていて、令和四（二〇二二）年は、矢が当たらない射手の背中に、世話人がお潮井を投げつける場面があった。驚くことに、その後すぐに的中した。四本まで外すと、お潮井を投げつけている。

最後の矢が放たれた後は、祭事を見守っていた人々が大的を破り、その下の神社の護符を取って持ち帰る。「的破り」である（写真七）。かつて荒神様にお供えをしていたが、現在は一年間の無病息災のお守りとして持ち帰られる。

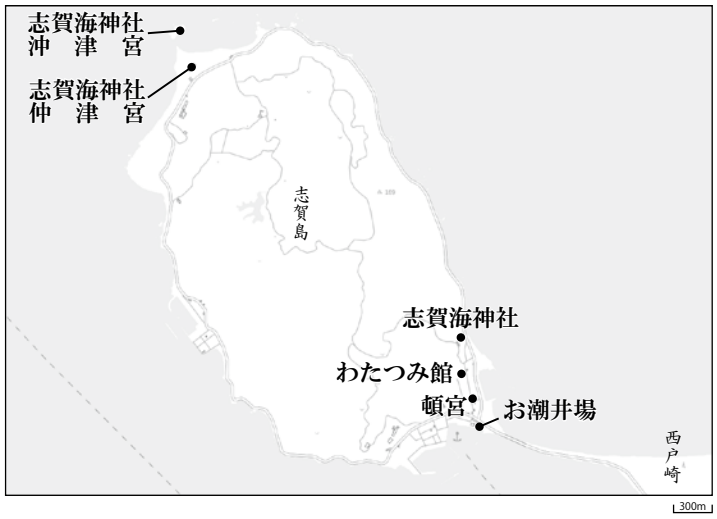
全てが終わると、神職の前に全員揃い、射手の長の「〇年〇月〇日（実施日）、志賀海神社、ヤー」に続き、射手全員で万歳三唱をする。令和四（二〇二二）年はスノコリがいたためしなかった。

写真七　的破り

e 直会

令和四（二〇二二）年は地頭を交えて店で行った。本来直会は、射手が地頭宅を訪れて接待を受けていた。その後「位落とし」といい、射手とその家族は、「伊勢音頭」を歌いながら、射手の全員の家を廻って宴をもった。神から一般の人に戻る機会という。

（吉田　扶希子）



図一　実施地の地図

九　百手祭り・大飯喰らい

【指定等】

種類　糸島市指定無形民俗文化財

名称　淀川の百々手祭り

指定年月日　平成二六（二〇一四）年三月三一日

【テーマ】一〇「競技」、五「供物・料理」

【地域の概要】

糸島市は福岡県の西端に位置する。糸島半島及びその基部を占め、北西は玄界灘に臨み、美しい海岸線が続く。東は福岡市西区、西は佐賀県唐津市に接し、南には脊振山系の山並みが連なる。市の中央部を東西にＪＲ筑肥線、国道二〇二号・国道二〇二号バイパス、西九州自動車道が通り、ここを中心に市街地が広がり、また福岡市への交通至便であることから住宅地も急増した。一方、農業、漁業も盛んな市である。

明治二九（一八九六）年、怡土郡と志摩郡が合併して糸島郡ができた。成立時は一九箇村、前原村に郡役所が置かれ、明治三四（一九〇一）年、前原村は町制施行した。その後何度かの、合併や離郡・離村を経て、昭和三〇（一九五五）年に志摩村、二丈村が成立、昭和四〇（一九六五）年にそれぞれ町制を施行し、糸島郡は三町になった。平成二一（二〇〇九）年、前原市・志摩町・二丈町が合併し糸島市となった。

旧二丈町は、深江村・一貴山村・福吉村が合併し成立した。糸島市の西端に位置する。その名の由来ともなっている二丈岳は、海岸にそそり立つ十坊山、浮嶽から女岳、羽金山、獅子舞岳、雷山へと続く脊振山系の一峰、標高七一一メートルの山である。この山から流れ出る淀川の流域に、本祭りの開催される淀川天神社を氏神とする淀川の集落がある。現在は天神社を氏神とする一般的な農村と見えるが、天保一一（一八四〇）年の「淀川組　神社仏閣書上」によると、深江神社の宮司でもある誕生山秀学院や不動堂を管理する英彦山成円坊末派山伏の宝厳坊、同じく泉蔵坊等が住む宗教的な場所であった。

【伝承地もしくは実施場所】糸島市二丈淀川　淀川天神社

【実施時期】一月二五日（現在は二五日に近い日曜日）

【伝承組織】淀川行政区

各戸の代表二〇名（本来のこの集落の戸数と考えられるが、分家したり、現在では少子高齢化の影響で、必ずしも二〇人出ているというわけではない）

祭りは、毎年選任される代表者の「座元」と補佐役の「寄子」四人が一切を取り仕切る。

【由来・伝承】

「百手祭」は正月から春にかけて、的に向かって矢を射て、その矢の当たり具合で吉凶を占ったり、悪霊退散を念ずる儀礼で、全国的に行われている。宮中において毎年正月一七日に行われていた射礼（歩射の競技の一つ）が庶民の間にも広く行われるようになったものと考えられる。福岡県下でも志賀海神社の歩射祭、豊前市八屋の厳島神社・行橋市の蓑島神社の「百手祭」など同義の祭りが行われている。

淀川の百々手祭りは、むしろ直会の方が「大飯喰らい」としてよく知られている。天保一一（一八四〇）年の「淀川組　神社仏閣書上」（川上家文書）には淀川天神の祭礼として「百手之祭」が記載されている。本文書には「大飯喰らい」についての記述はないが、この祭りでしか使用しないという膳の箱には文久四（一八六四）年とあり、また明治一八（一八八五）年からの座元帳が存在していることから、少なくとも一五〇年以上継続してきた祭りといえる。

【実施内容】

百々手祭り

一一時から、弓と矢と的を神前に供え、祓えと年の初めの祭典が行われる。弓はイソヅキの生木でこしらえた素朴な形、矢は篠竹を節ごとに交互に皮を剥ぎ、矢羽根として椿の葉を差し込む。天保一一（一八四〇）年の「神社仏閣書上」には「桑の弓、蓬の矢にて百手の的矢等仕り」とあり、江戸期には材料が異なっていたものと考えられる。祭典の後、神社前の道を挟んだ公民館の前に設けられた的に向かって弓を射る。

的は筵の前にカゴメアミという魔除けの編み方で組んだ竹を立て、三重の円を描いた大的を貼り付ける。三重の円はコンパスで下書きをして、墨でなぞってあり、中心の黒丸の中に白い「△」が描かれている。三角のとがった方が上に来るよう的紙の上下に上・下を表記している。

平成二六（二〇一四）年に行った指定のための調査では、伝統的な作り方が確認されたが、令和五（二〇二三）年一月二二日の調査では、的を設置する場所は同じであるが、的は、周りは竹、中は金網となっており、三年ほど前から金網を使うようになったという。またかつては、長方形で縦置きされていたが、正方形で菱形状に設置するというように、向きが変わっており、的の三重円も、二重目が細く、円の中心の三角も白丸の中に黒い三角となっている。

写真一　神職による弓射

弓射の次第は、まず宮司が的のお祓いをし、五矢ずつ三度の弓射をする（写真一）。宮司は深江神社の宮司が兼務している。その後、各戸の代表二〇名が、順次五回ずつ三度の弓射を行い、最後に的を取り外し、全員が横一列にならび、二丈岳に向かって一斉に弓射を行う。これを「山打ち」と称する（写真二）。山打ちが終わると弓は直ちにへし折り、焼却される。これらの所作が何を意味するのか不明であるが、この集落にとって二丈岳が大切な存在である事は間違いのないことである。

なお祭り前日、座元と寄子が各戸を周り切り銭と切米一升を徴収する際、藁縄に結び目を作って数を数えるという伝統的な方法が現在でも行われている。

写真二　山打ち

大飯喰らい（巻頭図版）

「大飯喰らい」と称される直会は、かつて座元の家で行われていたが、現在は天神社前にある公民館で行われている。座敷にはコの字型に人数分の高脚の膳が並べられ、床の間を背にした上座に、宮司を中心に長老が着座し、右座、左座ともほぼ年齢順に各家の代表が着座、下座に初参加者が座る。膳は「本膳五菜の膳」（写真三）といわれ、左上に芹と鯨の煮物、右上に鰯二尾と大根なます、中央に大豆と大根の煮物、右下にアオサと鰯と豆腐の味噌汁が置かれている。問題の御飯は左下、初めは普通に盛られた御飯の上に酒杯が伏せて置かれている。座敷は女人禁制で、台所と座敷の仲介は座元と寄子が行い、料理を準備する座元と寄子の婦人達は座敷に入る事はしない。しかし現在ではこの行事が有名になり、テレビカメラが入ったり、ゲストの女性が座につく事も拒めない状況となっている。

写真三　五菜の膳

座敷の中央には飯櫃が置かれ、それを取り囲むように給仕方として座元と寄子が控えている。直会が始まるとまず、座方が上座より順に酌をして回り、酒杯を傾けてから御飯を食べ始める。最初の御飯は全部食べ終わる前に、給仕方に飯椀を奪われ、給仕方はその飯椀に山盛りの御飯を盛って返す（写真四）。その御飯も上の部分を食べた段階で持って行かれ、さらに高盛りにして返される。杓子を椀の三方に差し入れて寄子が三人がかりで固めて高盛りにする事もあるという。

「もうだめ」という客と「食べろ」とけしかける座方のやりとりがあちこちで繰り広げられる。祝い事のあった者や初参加者は特に攻め立てられ、箸が休みがちになるといきなり徳利に入った「祝い水」を頭からかけられる。時が過ぎて、食欲も限界を超え、座方に降参し、だんだんあたりが静まってくると、塩気のある重湯が飯椀に注がれ、完食すると膳が下げられる。

全ての客の膳が下げられると、今度は座元と寄子の膳が並べられ、客が給仕方となり座方の労をねぎらう。その膳が下げられると、翌年の座元と寄子を選ぶ籤引きが行われる。三方に盛られた籤には「座」「寄子」「又の事」の三種類の文字が書かれている。令和五（二〇二三）年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、神事、百々手のみで、「大飯喰らい」は行われなかったため、神事終了後、拝殿に於いて籤引きが行われた。

現在、他に類例を見ない大飯喰らいは、「奇祭」、「ユーモア溢れる行事」などとマスコミなどに評されるが、かつては裃姿の戸主が祭りに臨み、女人禁制であったことなど厳粛な祭りであったという。

（森　弘子）

写真四　大飯を盛る寄子

一〇　和布刈神事

【テーマ】五「供物、料理」

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　和布刈行事

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和三三（一九五八）年四月三日）

【地域の概要】

関門海峡の最も狭い所に面する神社で、九州島の最北端である。「早鞆瀬戸」といい、非常に流れが速いところである。神代において日子穂穂手見命の「海幸・山幸」に由緒あるところで、中に一つの洞門があり、急潮奔騰するので「速戸」といい、社名にもなった。「早友大明神」「隼部明神」「隼人社」とも史料では記される。仲哀天皇により仲哀天皇九（二〇〇）年創建された。祭神は、天照大神の荒魂である撞賢木厳之御魂天疎向津媛命、別名瀬織津姫である。月の神で、穢れを祓う禊の神、潮の満ち引きを司る導きの神ともいう。

【伝承地もしくは実施場所】北九州市門司区大字門司　和布刈神社

【実施時期】

旧暦一二月三一日から一月一日。同日二時半から四時頃の干潮時に和布と荒布を取る。

調査は令和三（二〇二一）年一月二四日から二五日実施。

【伝承組織】和布刈神社の神職と氏子

【由来・伝承】

神功皇后の新羅の役の折、ここで阿曇磯良が神功皇后に満珠・干珠という珠の操り方を授けた。そして凱旋の時に神功皇后がお礼に和布を献上し参拝されたことに由来するという。その様子を再現した神事で、神社の始まりでもある。和布と荒布とは、やわらかい布・荒々しい布で陰陽を表し、満珠・干珠でもある。

和布刈神社の高瀬家には満珠・干珠の「しるし」が伝わっており、和布刈神事の時のみ、宮司によって神前にお供えされる。かつては満珠・干珠を手に海に入っており、珠のおかげで潮が引くとされていた。

『吏部王記』という醍醐天皇の第四皇子重明親王の日記に、「元明朝和銅三（七一〇）年豊前国隼人神主和布刈御神事の和布を奉る」とあり、歴史がある神事である。

昔はこの尊い神事を見ると目がつぶれるといい、決して見ることはできなかった。神罰を恐れて厳守されていた。拝観が可能になったのは戦後のことである。戦後の復興の折、先代宮司が公開に踏み切った。その際、神事の前に、豊前神楽の奉斎も始めた。また、神職が海に入ると、潮が二つに割れて海に道ができるともいう。この晩氏子は、明かりを消し門戸を閉じた。停泊中の船も消灯した。

『和布刈神社記録』の記事によれば、文政一三（一八三〇）年、ワカメが育っておらず、二寸ほどの和布を二本刈り取ったという。また慶応二（一八六六）年には和布が一本もなく、代わりに荒布だけを刈り取り、神前に供えたこともあった。神社では、和布の量や長さなどは問題ではなく、神事を行い、その形を行うことが重要だという。

和布は、「天皇陛下廿五年目ノ御祝賀」で献納されたこともあった。

【実施内容】

神社創建時より一八〇〇年続く神事。神楽は戦後のことである。

湯立神楽（豊前神楽）

二三時に和布刈神社広庭にて、湯立神楽を奉納する。黒土神楽講に

よる豊前神楽の奉納である。奉斎者の高齢化により一〇年間途絶えたことがあったが、平成二一（二〇〇九）年に復活した。斎庭の中央に「湯鉾」と呼ばれる長さ一〇メートルもの柱が立つ。先端に齋竹が付く。その上端部から三方向に綱が張られる。湯鉾の近くには湯釜が設置される。高さ二メートルと高いところに設置される。笛・太鼓・鉦の演奏がある。

まず駈仙（みさき）という鬼が斎場を走り廻って清める。手には鬼杖を持つ。オニンボウやシカンジョウともいわれる九〇～一二〇センチメートルほどの竹の棒で、両端に切紙の房が付く。魔除けと招福の意味がある。斎庭場を清める舞、陰と陽（天と地）の融合・交合、五行の輪廻を祈る駈仙神楽という。

やがて五匹の鬼の内、三匹が湯鉾に上ろうとするが、うまくいかない。そのうちの一匹だけ一〇メートルを上りきる。これは演出で、他の鬼は途中までしか上れない。上がった一匹の鬼は、湯鉾上部に取り付けられた神名が書かれた紙を落とした後、逆さになったり、逆さのまま手に持った花火を回したりした（写真一）。そして逆さになったままで、湯鉾から下方に張られた綱をつたって下りてくる。

設えた祭壇に拝んだ後、四方を祓い清め、穢れを取り除くための神随神楽、そして神職によって湯釜の湯を使った火と水の融合を祈る火鎮神楽が続く。そして神職によって、湯釜の脚の間の三方向を通り、湯釜を沸かすために用いた焚火の火の上を三回歩く火渡りを行う。全面に修験の影響を見ることができる。約二時間半で終了した。

写真一　湯立神楽

和布刈神事

準備　和布繁茂の祈年祭　冬至

毎年冬至の日に、和布繁茂の祈年祭（神事のみ）を行う。

準備　松明製作　一二月一日

『和布刈神社記録』によれば、

男女竹ヲ取リ交ゼ松明二体分ヲ造ル。但シ小キ竹ヲ二ツ割リテ用ユ。女竹モ二ツ割ヲ用ユ。女竹ハ男竹ノ三分ノ一交ゼ用ユ壱丈アマリ。右松明は柱ヲ建棚ヲ結ビテ割リ竹ヲ並べ周リニ注連縄ヲ引キ渡ス。製造古□ヨリ本日ニ限ル。若シ本日ノ天気雨天ニ成ント見受タラバ、前日又ハ前之日ニモ拵へ置クベシ。実ハ前月十五日頃拵へ置テ宜シ。朔日ノ製造ニテハ上干シニナラズ十二月廿日頃ハ必ズ結フテ内ニ入レ置クベシ。弐体ニ製造ス。結ヒ節五ツ所トス。

とある。松明の製造は、本日、つまり旧暦一二月朔日である。しかし雨天の場合は前日、前々日、前月一五日頃でもよいとしている。儀式的なことはせず、早めに裏山から男竹と女竹を取って乾燥させておく。男竹はまっすぐ太く、女竹は小さく二色になっている。この男竹と女竹を合わせて松明を作る。

同記述には、松明を作るには、「百姓三戸」が当たるとあり、特定の氏子の一族が当たることもあった。今はなく、氏子全員で行う。また前日より別火生活を送り、身を清めて臨むとある。和布刈神事においては、三日前から別火とした。「和布刈神事の話」には、旧一二月二五日に、神事に奉仕する神職などが潔斎を始めるとある。

当日の神事

社務所の前近くの広庭に、四隅に齋竹を立てて注連縄を張った中で火が起こされている。かがり火（忌火）である。鑽火で起こした火で、松明に灯すための火である。二時、まず神職が忌火を祓い清める。そして別の神職三人が本殿の方から一列になって鳥居をくぐり、火のところまでやってくる。烏帽子に狩衣で、水色の袴をたくし上げ、白足袋に草履姿である。先頭の神職は手に忌鎌を持ち、二番目の神職は、竹を束ねた長さ二・五メートルほどで紙垂がついた松明を抱え、最後の神職は、ユズリハとウラジロと紙垂が付いた手桶を両手で抱え持つ。

ここで松明に火をつける。松明は二本用意された。二本目は予備だが、現在は取材に応えるため、その機会を知らしめるものである。一本は一〇分間ほどで燃え尽きてなくなる。

神職三人は来た道を戻って鳥居をくぐり、そして拝殿の前の階段を下り、干潮の海に入る。一人が松明で照らす中、一人が忌鎌で和布・荒布を刈り、もう一人が持つ手桶に入れる。刈り方には決まった所作があるが、神社で伝えられているもので、代々互いに見て覚えるものとされる。（巻頭図版）。

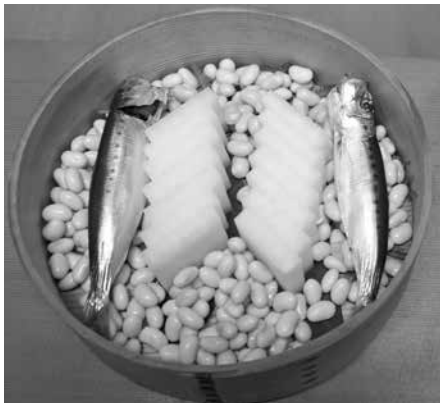
刈り取られた和布・荒布を神前に供え、航海安全、豊漁を祈願する。和布、「鏡の餅」「神酒」「海魚」の他、特殊神饌の「力の飯」「歯固」「福噌」を供える。熟饌である。「力の飯」は、小豆御飯を右手でしっかりと握って、手指の形を残して、左に八個、右に七個、計一五個を真横に並べる（写真二）。「歯固」とは、大豆を茹でたものの上に干鰯二匹を両端に縦方向に並べ、その間の中央部分に三センチメートル角で厚さ五ミリメートルに切った大根をハの字形に一五切並べる（写真三）。「福噌」は、小豆の炊いたものと大根の千切りを味噌に混ぜたものを丸い曲げ物の中央部分に盛る（写真四）。古式の神饌で、いずれも丸い曲げ物にウラジロを敷き、その上にユズリハを敷いて盛り付ける。これらの特殊神饌は、三種の神器を意味したもので、「力の飯」が珠、「歯固」が剣、「福噌」が鏡である。

この特殊神饌を用意するのは宮司だけに許されたことで、一子相伝である。神事の後、松明を灯したかがり火に投じておさめた。三時過ぎに終了した。

直会は和布と丸餅が入った味噌汁である。和布は前日関門海峡で採取された天然もの、餅は焼かずに用い、白味噌で作る。また境内で、お下がりのお供え和布が一箱五百円で販売されていた。

この神事が終わって、初めて関門海峡での和布漁が許される。

写真二　特殊神饌「力の飯」



写真三　特殊神饌「歯固」

写真四　特殊神饌「福噌」

【類似行事・関連行事】

対岸の住吉神社（山口県下関市）でも同日同様に、「和布刈祭」と称した祭りが秘儀で行われる。六時に和布が供えられ、神事が行われた。神功皇后が関門海峡の和布を神前に供え、人々の幸せを願ったという話に由来する。

島根県出雲市の日御碕神社でも行われる。旧暦の一月五日に、宇龍港の権現島に祀られる熊野神社で行われる。成務天皇六（一三六）年一月五日早朝、一羽のウミネコが海藻を神社の欄干に三度かけて飛び去った。不思議に思った神職が海藻を洗って乾燥させると、それは和布になったという。当日、浜辺から権現島の間に大漁旗をなびかせた漁船が六隻並ぶ。赤い下帯をつけた男性が「舟橋」という板を船にかけて神主が島に渡る。「舟唄」という歌とともに、舟は権現島に着けられる。神主が箱めがねを使い、竹の先につけた鎌で新しい和布を刈り取って神前に供え、豊漁を祈願する。この神事が終わって初めて、日御碕和布の刈り取りが許される。

（吉田　扶希子）

一一　藁の大人形

【テーマ】四「つくりもの」、一五「悪霊防ぎ」

【別名】大人形まつり

「大人形」は高齢者を中心に「ううにんぎょう」と発音されることがある。

【地域の概要】

柳川市は福岡県の南西部、筑後平野に位置している面積約七七平方キロメートルの市である（柳川市の概要：https://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/shisei/shinogaiyo/shinogaiyo_ichi.html）。北は大川市と三潴郡大木町、筑後市、東はみやま市、南西は有明海に面している。矢部川、筑後川の河口にあたる地域である。

下八丁は柳川市両開地区にあり、柳川市の南部に位置している。江戸時代は筑後国山門郡東開村に属し、東開村と西開村が合併して明治二二（一八八九）年に両開村となった。昭和二六（一九五一）年の合併で柳川町、昭和二七（一九五二）年に柳川市となった。昭和二八（一九五三）年に柳川市有明町となる（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八八　一二九、一一二六―一一二七、一四五五）。

田中吉政が慶長六（一六〇一）年に入封し、慶長年間（一五九六～一六一五）に干拓のために作ったとされる三〇キロメートルにわたる堤防は、「本土居」（慶長本土居）と呼ばれた。新たに開発された土地は「開地」とされ、内側の「本地」とは区別された（九州歴史資料館分館柳川古文書館　一九九四　一）。下八丁は、その以南にあたる干拓地であり、下八丁開の干拓は、堤伝の研究によれば、延享三（一七四六）年から天明年間（一七八一～一七八九）にかけて行われたという（堤　一九六八　九六―九七）。また、柳川古文書館の研究によれば、天明前だとされている（九州歴史資料館分館柳川古文書館　一九九四）。

現在の両開地区は有明町と大浜町と橋本町の三つの行政地に分けられ、さらにその中に下八丁のような行政区がある。干拓地名は、干拓地の広さや、土地を開いた人に因んでつけられていることが多い。それぞれの行政区には神社があるが、海童神社や龍神宮が多く、海や干拓に関わる神であるとされる（柳川市史編集委員会編　二〇〇四　一三九）。かつては半農半漁だったという。下八丁上は二四世帯、下八丁中は一九世帯、下八丁下は三四世帯となっている。

【伝承地もしくは実施場所】

柳川市有明町下八丁　龍神宮（海童神社）

【実施時期】二月一日（かつては旧暦二月一日）

【伝承組織】

下八丁は上、中、下に分かれており、三年に一度、大人形製作の当番を担当する。一軒から一人出て大人形を製作する。

お参りには、下八丁の住民だけではなく、東ノ切、舎人の住民が来ることもある。

かつては、青年が大人形の製作から、川に流すところまで行っていたが、青年が少なくなり三地区が輪番で祭りの世話を担当するようになった（柳川市史編集委員会・別編部会　二〇〇二　三三六）。

【由来・伝承】

一五〇～二〇〇年前、干拓地が完工されて人が住むようになった頃、コレラが流行して村が全滅しそうになった。この時社僧を招いて悪疫退散の祈願を行ったのが始まりである。産神とされる龍神宮（海童神社）で毎年旧暦二月一日に藁の男女の大人形を作って、祭りを行うようになった。神事が終わると氏子が年の数だけ藁の大人形の周りを回るのは、自分が持っている悪疫をこの神に移して、無

病息災、悪疫退散を願うためである（この由来は印刷され、平成三一（二〇一九）年二月一日が平日であったことから見学に来た小学生に配布された。また、堤伝の研究（堤　一九六八　九七）にも同様の記述がある）。

大人形を川に流すことについては、次のような別の聞き書きがある。天保年間にこの地域に疫病の流行があり、この地に来た祈祷師が、大人形を作ってこれに疫病を移して川に流したら病が治ると言ったことで始まったという（柳川市史編集委員会・別編部会二〇〇二　三三六）。

現在では無病息災を願って祭りを行っている。戦後、若者がいなくなり、祭りが途絶えたところ、ケガをする人や、不慮の死を遂げる人等が出るようになったため、話し合いが行われ再開された。祭りをやめると疫病が流行るという人もいる。土日に行って欲しいとの要望があるが、二月一日でなければならないと考える人もいる。

【実施内容】

一　大人形づくり

令和二（二〇二〇）年は、八時から大人形の製作を行った。三地区がまわり番で製作しているが、神社がある下八丁上の氏子が当番だったため、神社の前の私有地で製作した（写真一）。

材料の藁は、農業を行っている家が半分程あるので、長めの稲藁を事前に用意しておく。また、藁を束ねるために麻縄等を用いる。まず、藁をすくが、手ですくのは昔から道具を使ってすいてはいけないと言われてきたためである。その藁で、手、足、顔と胴体、男性の性器の各部分をそれぞれ製作する。毎回、同じ人が担当するという。男性の性器の先には白い布をつける。性器は誇張して作らなければならないと言い、昔の人も子孫繁栄を願ったのではないかと考える人がいる。当番ではない、下八丁中・下の人たちが、出来具合を見に来るので、きれいに製作することを心掛けている。実際に、「昨年は人形がスリムだった」と昨年の担当者が見比べていた。各部分の製作は一〇時に終了した。

次に、鳥居の柱に大人形を立てる。向かって左の柱が女性の人形、右の柱が男性の人形となる。竹を胴体に差し込みそれに手足を取り付け、組み立てながら柱に据え付ける。女性の性器はタイラギの殻とみかんの皮でつくり、美容院から髪の毛をもらってきて陰毛とする。

顔を描いているのはいつも同じ女性で、顔と胸と臍は、それぞれ事前に紙に描いておく。大人形の組み立てが終わると、その紙を貼り付ける。最後に、藁をつなげて作った大きな輪を、上部は鳥居の笠木の上に載せ、下は石柱のあたりに置くようにして設置する。完成すると、鳥居をくぐれないようにロープが張られ、「立入禁止」の紙が貼られる。

それから拝殿へ向かい、神事の準備を行う。拝殿に注連縄をめぐらせ、それに御幣を下げ、幕を張り、榊を飾ると一二時になる。

二　神事とお参り

一四時に日吉神社から女性宮司が来て拝殿と大人形の前で神事が行われた。下八丁の年頭のお祭りとしての意味もある。鯛やお御供さん、米、根菜、酒、塩といったものをお供えする。

大人形の頭の上と鳥居の柱の下に御幣が立てられるが、大人形に魂を入れると考えられている。それが終わると、八の字に年の数だけ大人形の周りを回り、自分が持っている悪疫を大人形に移す。年の数が多い人の中には、一〇才分を一回として数える人もいる（写真二）。

直会は当番の地区が担当し、当番でない地区からは、区長が神事から夕方に人形を送るまで参加している。

三　大人形送り

一八時頃、参拝者が途絶えると、拝殿を片付け、大人形を鳥居から外し、崩して送ると、祭りは終了となった。

かつては二二時頃、青年が全裸で人形を川に流しに行っていたが、大正四（一九一五）年頃から褌をはくようになった。その際は会話、女性や子どもが近づくこと、流してから振り向くことは禁止され、きちんと流したか、途中に藁が落ちていないか別の者が確認に行くほどの念の入れようであった。昭和三〇年代頃から当番地区が祭りを担当するようになり、青年部の男性が下着姿で人形を流し、その後、酒宴が開かれた（柳川市史編集委員会・別編部会二〇〇二　三三七―三三八）。裸で人形を流していたのは、人形につけた疫病が身体につかないようにするためだという。現在は裸ではなく、普段着で行う。

このようにかつては女人禁制の祭りで、宮司も男性だったことから、以前、女性宮司に担当が替わる際に、神事を執り行っても良いか地区に確認したことがあった。すると女性宮司でもかまわないとのことで、神事が執り行われている。

写真一　大人形の製作

写真二　藁の大人形

流した人形が海苔養殖の網にかかり苦情が出たので、一度燃やしたことがあった。しかし、その後亡くなる人が出たため、また川に流したこともあった。

（田中　久美子）

一二　粥占（かゆうら）

【テーマ】一一「占い」、二五「粥占」

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　飯盛神社のかゆ占

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和三六（一九六一）年四月一八日）

【地域の概要】

福岡市西区は、福岡市の西部に位置し、旧早良郡の西部と旧糸島郡（怡土郡・志摩郡）の東部、博多湾中の能古島、玄界灘の玄界島・小呂島を含む。区の東境を室見川が流れ博多湾に注ぐ。室見川東岸地域は、福岡市早良区となっている。

当該地区は江戸期までは早良郡飯盛村であったが、昭和四七年一月六日の福岡市区の設置等に関する条例によって西区となった。西側は糸島市に接するが、その市境には背振山地から北へ派生する西山（標高四三〇・一メートル）、飯盛山（標高三八二・四メートル）、叶岳（標高三四一メートル）、高祖山（標高四一六・一メートル）などの山々が連なる。

旧飯盛村は、飯盛山およびその山麓にある。飯盛山の秀麗な姿を望むことができる扇状地上には、吉武遺跡、羽根戸原遺跡（羽根戸）、浦江遺跡（金武）など旧石器時代以来の遺跡があり、吉武高木遺跡はクニの成立と展開を知る上で特に重要な遺跡として、平成五（一九九三）年に国史跡に指定され、現在は「やよいの風公園」として整備されている。以来、この地区は水田が広がる農業地帯として存続してきた。

粥占が行われる飯盛神社は、飯盛山山麓にあり、社伝に拠れば、文徳天皇の勅願により貞観元（八五九）年社殿を建立、和気清友を勅使として下向させたとあり、応永年間に百町の神田があったとされている。

『筑前国続風土記拾遺』には「当郡の惣社にして、七村（飯盛・吉武・金武・羽根戸・四ケ村・田村・野方なり）の産土神也。所祭神三座、伊弉冉尊、左は宝満神、右は八幡大神なり。いにしへハ上宮・中宮・下宮有、因て後世に三所権現といふ」とあり、神社書上記等にも「早良郡宗廟」とみえる。飯盛神社の文永八（一二七一）年の社領坪付に惣田数七三町二段二杖とある。その社領の範囲と、応永四（一三九七）年の「飯盛宮行事役屋敷注文案」に示された、祭事に携わる各村行事役の分布を併わせると、その勢力範囲が、ほぼ早良平野の全域に及んでいたことがうかがわれる。

飯盛山は、ご飯を盛ったような形に見えることからその名がついたと言われるが、三角錐の美しい山容から、また室見川に注ぐ複数の川の水分の神としても、昔から信仰されてきた山であることは想像に難くない。山頂からは永久二（一一一四）年銘の瓦経が出土しており、結縁衆の中に「早良郡司壬生信道」の名も見える。

【伝承地もしくは実施場所】福岡市西区大字飯盛・飯盛神社

【実施時期】　毎年

二月一四日一一時―穂垂菜祭、二〇時―貝嘗祭・粥炊き

二月一五日六時―粥盛り

三月一日六時―粥開き・かゆ占

※令和三（二〇二一）年より新型コロナウイルス感染症拡大の影響と粥元老齢化のため暫定的に左記の日程で行われている。

二月一四日九時―穂垂菜祭、一〇時三〇分―貝嘗祭・粥炊き、一九時―粥盛り

三月一日六時―粥開き・かゆ占

【伝承組織】

飯盛神社のかゆ占保存会―飯盛神社、青柳本家、青柳分家、大内家

【由来・伝承】

年のはじめにその年の作柄の豊凶を占うのに、粥を用いることは全国的に行われている。一般的には小正月に行われる事が多く、やり方は、その年の月の数だけ竹管、葦管などを粥に入れ、中に入った粥や小豆の分量でその年の豊凶を占ったり、粥棒と呼ばれる柳やヌルデの棒に割り目をつけて粥の中に入れ、付着する量の多少で豊作を判断する方法が多いが、北部九州独自の方法として、粥または飯を伝来の鉢に盛り、半月から一箇月放置して、それについたカビの種類やカビの生え具合により、その年の豊凶や天候を占うというものがある。筑後川流域に多く分布し、福岡市西区飯盛神社の「かゆ占」が福岡県指定、筑紫野市筑紫神社の「粥卜祭り」が筑紫野市指定を受けている。また神社ばかりでなく福岡市城南区東油山正覚寺など寺院で行われる場合もある。本項ではその中でも最も古い文書を有し、江戸期の方法まで知ることができる飯盛神社のかゆ占を採りあげる。

飯盛神社には、宮司家牛尾氏と元神職青柳氏の子孫の家に伝わった多くの古文書があり、そのうち鎌倉～南北朝期の中世文書三二点が福岡市文化財に指定されている。その他近世文書も多く、社領坪付や年貢米についてのものが多いが、年中行事を記録したものもあり、年中諸祭の変遷を現代まで辿ることができる。

本項に上げる粥占については、文永八（一二七一）年の「正月元三之次第事書写」（青柳文書）に「一月一四日　ほだれ御供、夜　とうの口あけ、十五日朝　粥・鈴開、二月朔日　御供」が記されている。本文書には年間を通じての神事とそれに供えるべき品々の明細も記されている。永承四（一五〇七）年の「飯盛宮神事定文案」（牛尾文書）には粥占については記されないが、明和三（一七六〇）年の「飯盛宮大宮司牛尾家年中行事帳」には、「一月十四日　穂垂御供、夜　洞ノ口鈴披之祭・粥炊き、十五日朝　粥供え、二月朔日　粥披き」と、ほぼ現行の行事と同じと思われる祭事の次第が記されている。天明六（一七八六）年の「飯盛宮旧来社記」（牛尾文書）でも、同じ祭事の流れが記されるが、二月一日の粥披きが「豊作御粥例」になっている。なお新暦採用により、現在は一月遅れの二月一四日粥炊き、一五日粥供え、三月一日粥開きとなっている。

永承四（一五〇七）年の「飯盛宮神事定文案」には、前時代に行われていた仏事は全く記されず、朔日の月次祭、武射、節供、九月九日の祭礼程度しか記されていない。『筑前国続風土記拾遺』に詳しく記されるように、乱世に神領をなくし、多数いた神職・社僧も悉く農夫となり、牛尾氏のみが存続という事態に至ったことが大きな原因であるが、それと同時に、上宮・中宮・下宮という三社構成が崩れ、下宮だけが三神を祀る形で残り、神宮寺と七ヶ寺の末寺も、文殊堂を残すのみとなり、三所権現と言われた神仏習合の祭事は事実上行えなくなった。

粥占は青柳氏が伝えていた行事と考えられ、明和三（一七六六）年になり、青柳氏を「社僧」として祭に復帰させることで、復活したと考えられる。なおかつては、村内に粥本という田字があり、この田で作った米を用いて粥を炊いた。そこを耕作する家筋も在り、明和の年中行事帳には、善七・半次両家が隔年に耕作し、神酒、神饌（ひらき大豆・大根の酢和え）も隔年に奉納したとあり、粥を仕込む水の高さは、牛尾宮司家の一子相伝で、粥田を耕作する二家が、釜炊きをしたとある。また牛尾宮司は、「かつては穂垂菜田という田があり、青柳氏の土地であり、早稲を作りそのワラで注連縄を作り、米は粥炊きに使っていた」と言う。祭の担い手が時代により変わっていく中にも、祭儀は踏襲されてきた様が伺える。

【実施内容】

一　二月一三日夕刻　大内家当主が米、大根・人参・牛蒡各三本、鯛三尾を御供として牛尾宮司邸に届ける。

境内には、「かゆ占神事・二月十四日～三月一日」として上部に神事の様子を写した写真六枚を配し、下部に「古代の太占の一つ、起源は弥生時代に遡ります。早稲・中手・晩稲の一番良い時期を占う古式祭。神人共食の貝嘗めに粥元神人が仕えます」とし、その下に「＊秘事と

して、伝承されています！」と朱書きで大書した、飯盛神社が出した告知が貼り出されている。

二　二月一四日一一時　穂垂菜祭（ほだれなさい）

前日大内家より届けられた米で炊いた飯を、粥占に用いる錫鉢に高盛りにし三方に載せ、その前に半紙を敷いた三方に皮をむいた大根・人参・牛蒡・鯛を盛った供物を供える。

穂垂菜祭典は神職のみで行い、祭典終了後、お供え三膳のうち一膳を持って粥元の大内家に粥焚きの依頼に行く。粥元は古くより青柳家が勤めてきたが、明治以降に、江戸期より大庄屋だった大内家が、粥開きにも立ち会っていたという経緯から、粥元として加わったという。大内家では届けられた供物を床の間に供え、拝礼が行われる（写真一）。

三　粥焚きの準備

粥占調仕所の建物のまわりには青白の幕が張り巡らされ、「飯盛神社の伝承神事かゆ占　おかゆ炊き中　乞う静寂」の立て看板が建てられる。

粥を炊く釜やカマドの準備、粥用の米、神饌の準備は青柳家が行う。

粥―研いだうるち米二升はサカエ重に入れ、その上に別々の皿に盛った茹でた小豆、塩を載せる。

神饌―たっぷりの削り節をかけた大根ナマス、ひらき豆（大豆を煮たもの）。それぞれ重箱に入れ、栗はい箸を添える。

写真一　供物を大内家床の間に供える

四　二月一四日二〇時　貝嘗祭（かいなめさい）

粥元三家当主は、この時だけ、白衣・袴・白格衣・立烏帽子に威儀を正し祭典に臨む。但し令和三（二〇二一）年からは、粥炊きの時と同様白衣に黒紋付き羽織姿、それぞれの家の跡取り子息は白衣で拝殿に上がる。

①御戸口開―粥元三家の当主が神殿の簾を上げる。

②献饌―角樽の御神酒、雌雄の鮑の殻、米・小豆を入れたサカエ重、大根ナマス・ひらき豆を入れた重箱を神職と粥元三家当主が順番に供える。

③祝詞奏上、拝礼

④撤饌―お供えをおろし、八脚案の上の中心に雌雄の鮑の殻（各三方に一つずつ）、神殿に向かって右に三方に載せたひらき豆、左に削り節をかけた大根ナマスを置き、ひらき豆・ナマスには栗はい箸をつける。角樽には「洞ノ口」と墨書がある。向かって右台下に設置し、粥元の一人がお酌としてつく

⑤貝嘗

先ず宮司と青柳本家当主が、鮑の殻を盃にして雄貝、雌貝の順で交互に神酒を頂く、神酒は別の粥元が角樽から柄杓で汲み注ぐ。続いて宮司と青柳分家、宮司と大内家、宮司と跡継ぎ達と順番に貝嘗めを角樽の神酒がなくなるまで行う（写真二）。一口飲むごとに大根ナマス、ひらき豆を栗はい箸で手に取り肴として食する。

盃につかう鮑の貝殻は志賀海神社から贈られたもので、宮司の代替わりごとに贈られ、飯盛神社からは榊を贈ると言うしきたりがある。現行の鮑は「平成五年十月奉納　あわび貝壱対　志賀海神社」と書いた木箱に収められている。

この事については、「早良郡宗廟飯盛宮旧末社縁起略」の「洞ノ口鈴披ノ祭正月一四日夕」の項に文永八（一二七一）年四月の年紀入りの記事として、「この鮑貝は昔当社繁栄の頃、志賀島の漁師が

写真二　神酒を頂く宮司

勅を受け年々大小の鮑を持ってきて神前に供え、帰りに飯盛山に登って榊の枝を伐り土産として島中の家に配った」ということが記されており、志賀海神社のお田植え祭の田植え歌にも飯盛山が歌われるなど、古くからの両者の関係をうかがわせる。

五　粥炊き

①貝嘗め祭が終わると粥元は粥調仕所に集まり、手桶の水（一斗八升）を入れた大釜にサカエ重の米と塩・小豆を入れる。

②神職が竈祓いをし、神殿から運んだ忌み火で点火する。

③神殿で粥炊き始めの太鼓を打ち鳴らし、神職が「大祓詞」を奏上する。

④カマドの番は、火加減を覚えさせるために粥元の跡取りの仕事とされる。水が煮立つまでは強火、その後は弱火を保つ。

⑤煮立ってきたら大きなシャモジで混ぜ始める。焦げ付かないよう、粥元が交代で休みなく混ぜ続ける（写真三）。

⑥粥焚きが佳境に入ると粥元からの連絡で、神殿でまた太鼓を鳴らし「大祓詞」を奏上。

⑦炊き上がりの判断を下すのは、青柳本家当主。炊き始めから三時間ほどで、シャモジですくって落ちないほどになると炊き上がりである。

⑧炊き上がりを知らせる太鼓が打ち鳴らされ、大祓詞が奏上されると、大釜に蓋をし、火を消して粥元等は一度解散する。

写真三　粥を混ぜ続ける

六　二月一五日六時　粥盛り

①粥元は神殿で祓いを受けた後粥調仕所に入る。青柳本家当主が粥の表面にできた膜を栗はい箸で取り除き、粥を手桶に移し拝殿に運ぶ。

②拝殿では八脚案の上に錫製の鉢が三つ並べてある。それを挟んで粥元青柳本家当主は宮司と向きあって座し、栗はい箸を使って粥を盛る。青柳分家、神職が補佐をし、均等に粥を鉢に盛る（写真四）。

③粥納―神前に向かって右から「早田」「中田」「晩田」と書いた箱に収め、粥元が、神殿の奥に箱を供える。

七　三月一日六時　粥開き、粥占

①宮司の祝詞奏上に続き、粥元は蝋燭を灯して神殿の上の浜床に上がり、そこに置かれた八脚案のまわりに、青柳本家を中心にして坐す。

②神職が木箱を納めた神前の御簾を上げ、まず早田の木箱を台の上に下ろす。音を立てず、息を吹きかけないようにして、木箱のふたを明け、蝋燭の明かりで粥の表面を照らし、カビの生え具合を検分する。

③同様に中田、晩田と検分してゆく。

④三つ揃ったところで、個々にカビの長さや色合いからその年の稲作について判定する。

⑤宮司が「お試しの結果うかがいます」と声をかけ、早田から順に、毛付、水、虫、風、ミノリの各項目ごとに聞いていく。最後に全体としての「総位」を聞く。

⑥粥占の判定方法は、青柳家、大内家に口伝で継承され、判定は三家の合意で決定される。

⑦終わると粥は拝殿の一番手前に置かれ、粥を載せた案に粥占の結果が張り出される。稲作が盛んだった頃は、粥占の結果を見ようと近隣の農家が大勢参拝して、それを参考に作付けしたという。

⑧総て終了後、粥は、かつては食していたが、現在は裏山の竹林に埋め、筍の初物が採れると神前にお供えしている。

（森　弘子）

写真四　粥を鉢に盛る

一三　英彦山神宮御潮井取り

【テーマ】九「村連合」、三三「修験・山伏」、三八「禊ぎ祓い」

【地域の概要】

添田町は福岡県の東南部に位置し、南部は英彦山や鷹巣山を境に大分県日田市、中津市と接している。西部は釈迦ケ岳、大日ケ岳、戸谷ケ岳などの山系を持ち、朝倉郡東峰村及び嘉麻市、田川郡川崎町と接している。（※添田町公式サイト参照：https://www.town.soeda.fukuoka.jp/）

【伝承地もしくは実施場所】

福岡県東南部に位置する英彦山と、行橋市沓尾海岸の「姥ケ懐」を中心に、福岡県北東部に流れる祓川、今川流域が含まれる。

【実施時期】

毎年二月二八日（又は二九日）～三月一日の二日間。英彦山の重要な行事である「松会祭」の前に行われる。

明治以前では、陰暦の正月（一月）二六日～二月二日にかけて行われ、二七日の未明に御汐井採りが行われていた（Grapard 二〇一六、一七四）。

【伝承組織】

かつては一〇人の「惣方」という、英彦山の神道系の行者が実施し、一〇頭の馬を使用した。

現在の構成員は四人で、二人は英彦山神宮の神職、二人は「徒衆」という氏子である。氏子は、一人が総代会長（旗持）、もう一人が運転者（かつては牛馬持と言われた）である。道中の各所神社、公民館、神職宅、有力者宅、一般住民宅に立ち寄る為、地域によって伝承されている行事とも言える。

【由来・伝承】

御汐井とりは古くから行われているが起源は不明である。その発祥は平安時代まで遡るとも言われているが、証拠は薄い。文安二（一四四五）年の英彦山の年行事資料に記述は無いため、それ以降に始まったと考えられている。御汐井とりそのものは、厳密な儀礼規則に従い深夜に秘儀に行われ、伝承は秘伝である（Grapard 二〇一六、一七四―一七七）。

御汐井採りは、英彦山神宮で実施される様々な祭典行事に用いられる清めの汐を汲みに行く行事である。英彦山から流れ出た水が祓川及び今川となり、両川の共通河口では海の潮水と合流する。その合流した潮水には、神聖的な特性があると信じられており、その潮で参道、神輿などを清め祓う。

英彦山は明治時代以前では、九州における修験道の中心であったが、明治五（一八七二）年の修験宗廃止令により廃止された後、神道向きに変遷したが、この御汐井採りでは修験道の影響が残る。松養家蔵『吉書集議』の記録（年号不明）によると、汐井採りは「先山伏」により行われており、一九七〇年代初めの調査では、参拝者が神職を「やんぶし（山伏）さん」と呼んでいた（佐々木　一九七二、一四三）。現在でも、法螺貝という修験道の道具が重要な役割を果たしている。

【実施内容】

概要

御汐井採りには、英彦山の年中行事において重要な役割があり、現在は二日かけて行われる。

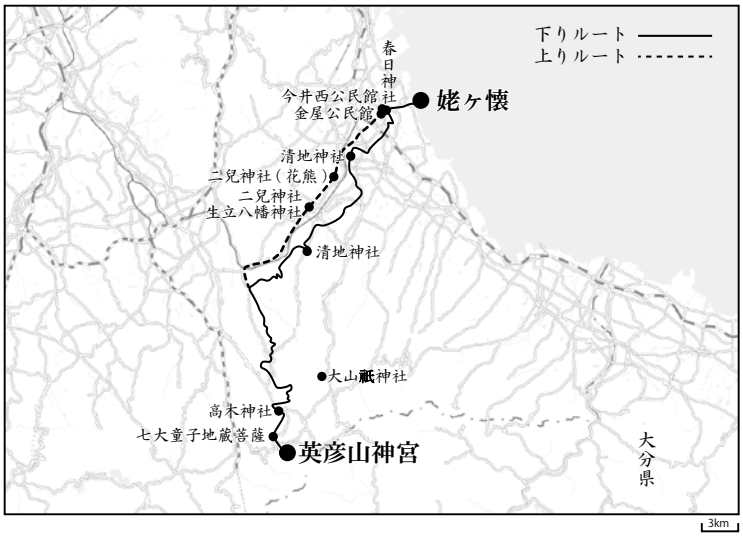
神職二人、付添い二人の計四名と荷物を載せた車で、英彦山神宮から今川、祓川流域の九里八丁（約三九キロメートル）の道をたどり、一日かけて行橋市沓尾海岸の「姥ケ懐」まで向かう（写真一）。そこで、深夜に秘義として竹筒で汐を汲み、近くの住民宅で一夜を過ごす。翌日その汐を神宮まで持ち帰り（写真二）、参道、神輿などを清める。

一日目の海岸向き（二月二八日）と、二日目の神宮帰り（三月一日）

それぞれの道中で、今川、祓川周辺地域の各所神社、参拝者（英彦山の信仰者）宅、公民館などで儀礼（祭典、大祓、法螺貝吹きなど）を行い札、玉串などを配る。そこでは玉串や札を神体として、邪気を払い、場を清め、参拝者宅では家内安全等を祈願する祈祷が行われる。そのお礼として、参拝者は神職に初穂料、寄付金を納め、直会を挙げる。神宮への帰路の前半は、一日目の海岸向きとは違う道を通り、立ち寄る神社なども一日目とは異なるが、後半は同じ道をたどる（図一）。その為、一日目と二日目で二度立ち寄る家と、片道でしか立ち寄らない家がある。どちらも儀礼の内容は変わらないが、海岸向きの儀礼を「今日の御祭り」、神宮帰りの儀礼を「御潮井祭り」と呼び、御潮井祭りでは各家庭に若布や浅利が配られる。

かつては、今川に沿って海岸まで向かい、祓川に沿って帰路につき、一五の集落が直会を用意していた（Grapard 二〇一六、一七四）。

神社における祭典と各家庭における祭典には相違がある。前者では「大祓い詞」が奏上される場合が多く、後者では奏上されない。各家庭では「屋払い」と呼ばれる短い祈禱が行われる。参拝者宅で一礼、修祓、祝詞奏上、祭主玉串拝礼、参列者玉串拝礼、一礼が行われ、法螺三唱によって家の邪気を払う。



図一　御潮井取りのルート

御汐井採り　沓尾海岸姥ヶ懐

御汐井採りは秘儀的な儀礼であり、見ると目が潰れると伝えられている。姥ヶ懐は、沓尾海岸にある二つの岩が抱き合うような姿をした岩窟の名であり（写真三）、地域の人々によって守られている。この岩窟には、「海幸山幸」に登場する豊玉姫が、生まれたばかりの我が子を残して去った場所であると伝えられており、残された子が石窟内から滴る乳で育ったという伝説が名の由来とされている。

二八日の二三時半に裸で禊を行った後、四人全員が海岸から五〇メートルほど海に進み、肩まで汐に浸かる。これは、竹筒を縦にして汐を汲む為であり、筒を横にしてはならない。汐を汲む筒を「汐井筒」と呼び、二本用意され内一本は予備である。筒は真竹を用い、節三つ分、長さは足から腰の高さくらいまでで、水が五リットル程度入る。

写真一　英彦山を下る一行

写真二　英彦山参道を上る一行

汲んだ汐は一年を通して、英彦山神宮における様々な神事に用いられる。

各家庭での事例

二八日の午前中、一時間半程かけて赤村にいる有力者宅に寄る。天忍穂耳尊（あめのおしほみみのみこと）が描かれた英彦山神宮の掛け軸の前で、神主が玉串を置き、祝詞奏上、参拝、祭典を行い、法螺貝を吹く。その後、参拝者が掛け軸の前で拝礼し直会を挙げる。参拝者と構成員四人全員が料理と酒を頂く。直会後、家の外（玄関前）で禰宜が参拝者に向かって法螺貝を三回吹き、その後参拝者の頭の上で法螺貝の口を手の平で叩く「貝伏（かいぶせ）」を行う。これは山伏の祈祷の名残であり、無病息災を祈願するものである。

屋主の話によると、いつ頃から御汐井採りに参加しているのかは不明。昔は御汐井採りの構成員は四人ではなく八～一〇人程で、荷物運びや牛馬等がいた。徒歩で沓尾海岸に向かう際の行程は現在と同様二日であり、道中に寄る家は全て地域の有力者宅であった。

神社での事例

三月一日の朝、行橋市の春日神社で祭典が行われ、一五人の氏子が集合する（写真四）。全員年配の男性で、農業などに携わる者達である。氏子達が拝殿に集まり次第、祭主の禰宜が祭典を行う。祭典の構成は、一礼、修祓、大祓い詞奏上、祝詞奏上、祭主玉串拝礼、参列者玉串拝礼、祭主一拝となり、祭典後には「貝伏」を行う。祭典などは行わず、拝殿前での参拝のみの場合もある。

屋祓い

春日神社の祭典後、神職が禰宜組と権禰宜組に分かれ、金屋地区の家々で屋祓いを行う（写真五）。それぞれに案内人が付き、祓う家へと案内する。各家までは御幣を振り、法螺貝を吹きながら歩いて向かい、一〇～一三軒程度周る。各家は春日神社の氏子とは関係ない。御汐井採りの数週間前に役員が御汐井採りの開催を知らせ、屋払いが欲しい家は玉串の寄付金を出しておく。

写真三　姥ヶ懐

写真四　春日神社での祭典

市場（いちば）地区の御祭り

市場地区は今井祇園社の仮の宮があったとされる場所にある。奥に御神座及び直会の場所が設けられ、御神座には、掛け軸・御幣・酒等が祀られている。「市場での御祭り」とも言われている。老若男女問わず二〇人程が集合する。祭典の構成は、一礼、修祓、祝詞奏上、祭主玉串拝礼、参列者玉串拝礼、一礼である。市場は山と川の水が合流する神聖な場所であり「貝汁（浅利）」が振舞われるので、祭典後は、貝汁が中心の直会を実施する（写真六）。直会後は参加者全員に「貝伏」を行う。

二〇〇〇年代に姥ヶ懐の砂浜に新しい道路を作る計画が立ち上がり、砂浜が壊される恐れが出たため、自然と景観を守るために地域住

民による反対運動が始まった。この地域の住民たちは御汐井とりを知らなかったが、行事について調べ上げ、姥ヶ懐の重要さを反対の論に取入れる事で反対運動を後押しした。運動はある程度成功し、道路の代わりに橋が建てられ、姥ヶ懐と浜は守られた。反対運動が終わった後も、地域住民は御汐井とりを大切にし、現在も祭典に参加している。

【類似行事・関連行事】

山笠のお汐井とり

（カーター　ケイレブ）

写真五　金屋地区での屋払い

写真六　市場地区での直会

一四　御田植祭（おたうえまつり）

【テーマ】一七「生業の神」

【別名】求菩提山のお田植え祭り　※松会神事のうち「田植え行事」

【地域の概要】

福岡県の東部、大分県との県境に程近い海岸部に位置する豊前市は人口二四〇〇〇人余の地方都市である。東に周防灘（すおうなだ）、西には標高一〇〇〇メートルを越える犬ケ岳（いぬがたけ）を有し、古から伝えられる伝統文化と、豊かな自然に恵まれる一方で、少子高齢化と人口減少に直面する地域でもある。

市内には今も多くの民俗芸能が伝えられ、その内容は春季に各神社で執行される神幸祭、秋季に奉納される神楽などが特徴的である。そうした民俗芸能の成立にはその地域の歴史的環境が大きく影響を与えているという側面があり、ここではその歴史を整理しておきたい。

豊前という地名が成立するのがいつかは明確ではないが、『続日本紀』文武天皇二（六九八）年の条に豊後国の地名が登場すること、正倉院に伝わる大宝二（七〇二）年の豊前国上三毛郡（かむつみけのこおり）戸籍が存在することから、この頃までには豊前国が成立していたと考えることができる。その範囲は関門海峡から国東半島にいたる地域で、現在の福岡県北九州市門司区、小倉南区の一部から京都郡（みやこ）、行橋市、田川市、田川郡、築上郡（ちくじょう）、豊前市と大分県の中津市、宇佐市が含まれる。

本地域は古来、渡来系の集団が多い地域として知られ、先に述べた正倉院に伝えられる戸籍には「秦」、「勝」などといった姓が多く見られることは周知のことである。加えて先行する六世紀後半には朝鮮半島系の特徴を示す竪穴式住居、七世紀代には土器や古墳にも特徴的な要素が確認できる等、歴史的な特性として捉えられる。豊前国の成り立ちはこうした歴史風土の下に形成された。

【伝承地もしくは実施場所】豊前市大字求菩提　国玉神社　中宮松庭

【実施時期】三月最終日曜日　※但し二九日を下らない

【伝承組織】求菩提山お田植祭保存会

【由来・伝承】

松会は、求菩提山や英彦山を始めとする旧豊前地方の修験道寺院で行われた神仏習合の祭で、①神幸祭、②田行事、③幣切り行事の三つで構成され、旧暦の二月二九日に執り行われていた。以下、その本来の形態を整理しておく。

祭りはまず、神幸祭で神輿が繰り出される。神輿には仮に神に姿を変えた仏（権現）が乗るとされ、その前では豊作祈願の「仁王経（にんのうきょう）」が読誦される。続いて田行事が行われ、幣切り行事が祭の最後を飾る。田行事の行われる広場を「松庭」、そこに立てられた柱を「松柱」と呼ぶが、幣切り行事では、山伏が御幣を背に持ってその松柱を登り、柱の頂から真っ白な御幣を切り落としてみせる。切り落とされた御幣は神の御種子であり、それは松庭に蒔かれた籾種と交合するとされ、その年の豊年満作が約束されるというわけである。

求菩提山の松会の起源を特定することはできない。ただ田行事の衣装箱が残されていて、その蓋に「建暦三（一二一三）年二月二十九日」の墨書銘があり、鎌倉時代にはすでに松会が行われていたことがうかがえる。

【実施内容】

「松会」はもともと神仏習合の祭りで、現在求菩提山では国玉神社の大祭として「神幸祭」と「田行事」のみが伝えられ、「幣切り行事」は戦後途絶えたままとなっている。祭は毎年三月二九日を下らない最終日曜日に実施され、国玉神社中宮前の広場（松庭）で、春の種蒔きから秋の採り入れまでの農作業を真似ての所作がユーモラスに演じら

れる。祭はまず午前中に神幸祭として御神輿二基が御旅所に向かう御下りが行われ、そのあとに松庭で神楽の奉納（岩屋神楽講）が執り行われる。そして午後から「遣巻」と呼ばれる御神歌に合わせて、いよいよ「御田植祭」が始まる。その内容は

①畦切り（写真一）

菅傘を被った白装束の男が畦草を刈る様子を演じてゆく。すると草の中から蜂が出てきて暴れるため、慌ててそれを追い払う様子が観衆の笑いを誘う。

②田打ち（写真二）

花笠を被った稚児が登場し、二人ずつ歩み出て木製の鍬と棒を叩きあわせて田打ち（鍬で耕す）の所作を真似る。

③畦塗り

鍬を担いで現われた白装束の四人の男達が、大げさな動作で畦を塗って行く。水が漏れないように丁寧に塗ろうとするが、観客から「腰が入っちょらんぞ」とか「水が漏れよんど」などとやじられる。

④田鋤き（写真三）

のっしのっしと張子の牛が登場し、田を鋤いて行く。懸命に手綱を操る牛使いをあざ笑うように、牛は反対方向に進んだり、寝転んだりとなかなか言うことをきかない。そのユーモラスな掛け合いがこの祭りの最大の見せ場で、松庭に観客の笑い声が響き渡る。

⑤種子蒔き

ようやく田ごしらえが終わり、菅笠に白装束の一人の男が神前で種籾の入ったタボを受け取り静かに種を蒔き始める。その年の豊作を願うように四方に種を蒔いてゆき、最後にこの籾をもらって帰ると豊作になるという。

⑥田植え（写真四）

ここで花笠に赤色の袴をはいた稚児が登場し、御神歌に合わせて田植えの所作をする。その所作は形式的なもので、苗に見立てた石菖蒲の束を手にとって演じられ、かわいい子ども達の単純な動きがかえってほほえましく映る。本来は早処女による所作であったかと思われる

写真一　畦切り

写真二　田打ち

写真三　田鋤き

写真四　田植え

が、今は子ども達がその役を担っている。

⑦孕み女・うない（写真五）

女装をした孕み女（身持ち女）と、うない（初花乙女）が登場し孕み女は大きな鉢にてんこもりの御飯を抱え、うないは柄鏡と櫛で髪を整えながらユーモラスに松庭を廻る。途中産気づいた孕み女をうないが介抱したり、寄り添いながら進んでゆく。「孕み女・うない」は生命の誕生を豊作に擬えたもので、穂ばらみを期待する所作という。

⑧田誉め（巻頭図版）

最後に傘をさした神官を先頭に演者全員が「ほーう、ほーう」の掛け声とともによくできた田んぼを誉めながら松庭を廻る。この時、演じる者、観る者とが一体となって大合唱となり、祭りを締める。こうした所作は近隣の他の田行事には見られず、求菩提山で特徴的な所作といえる。

御田植え祭りを演ずる人たちは松役と呼ばれ、かつては修験者（山伏）がこれを行っていたが、現在は麓の岩屋地区の保存会の人たちが祭を支えている。最後に神楽が一番舞われ、駈仙鬼（みさきおに）を先頭に晒で引かれたお神輿が御旅所から本殿に向かう御上りが行われ、祭りは終了する。

写真五　孕み女・うない

【類似行事・関連行事】

豊前修験道最大の祭礼である「松会」はかつて英彦山を始め主要な山々で行われていた。しかし明治五（一八七二）年の修験宗廃止令により、多くの修験者が山を去ったことで修験の山は急速に衰退していった。一方で山に残ったその末裔と、新たに神社組織の氏子となった人々により「松会」は細々と継承されてきたが、多くの労力を要する幣切行事は普智山等覚寺（ふちさんとかくじ）のみで継承され、田行事も英彦山と桧原山正平寺（ひばるさんしょうへいじ）、松尾山医王寺（まつおさんいおうじ）で継承されるにすぎない。

（栗燒　憲児）

一五　山誉め祭（やまほめさい）

【テーマ】一七「生業の神」

【別名】山誉種蒔漁猟祭（やまほめたねまきかりすなどりのまつり）　山誉漁猟祭（やまほめかりすなどりのまつり）

【地域の概要】八「歩射祭」参照

【伝承地もしくは実施場所】志賀海神社（福岡市東区志賀島）

【実施時期】
　毎年四月一五日・一一月一五日。かつては旧暦二月一五日・一一月一五日。

【伝承組織】八「歩射祭」参照

【由来・伝承】
　起源は不明。神功皇后の新羅の役の際、神功皇后の御前でこの神事を披露すると、神功皇后は興味を寄せられ、「志賀の浜に打ち寄せる波が途絶えるまで伝えよ」といわれたという。

【実施内容】
　以下、令和二（二〇二〇）年一一月・令和三（二〇二一）年四月の調査による。
　準備として、境内の拝殿階段下の祭場である斎庭にコモを敷き、階段下に神籬（ひもろぎ）をお潮井砂で固めて盛り固定する。拝殿の中央から延長した地点である。
　九時からの神事に先立って、拝殿で社人三人により前祓いの祓詞の奏上が約二〇分行われる。八乙女も同席する。終了後、神職が登壇し神事となる。そして祭場の神籬も祓い清める。神事中の祝詞奏上後、「八乙女の舞」の神楽を奏上する。八乙女はこの時は四人が参加した。一番神前に座る八乙女の一人が太鼓を叩き、後ろに二人が鉦を打ち鳴らす。それに合わせて、一人が鈴を振り鳴らしながら右に三回旋回する舞である。参加人数によって、舞手や鉦の人数が増えることもある。八乙女の舞について詳細は「神幸祭」を参照されたい。年間の大祭のときには、必ず舞を奏上する。その後今宮社でも神事を行う。
　一〇時二〇分神事終了後、楼門の手前にある石橋の太鼓橋の手前で、宮司が社人より種籾を受け取って石橋にあがり、まず正面参道方向の南に向かい三度種籾を蒔く。続いて西方向と時計回りに四方向に種籾を蒔く。山誉種蒔漁猟祭の「種蒔き」で、四月のみ行う（写真一）。
　続いて、境内で「山誉漁猟祭」となる。まず「山誉め」である。拝殿下の境内の斎庭にコモが敷かれ祭場となる。その前の拝殿から階段を下りたところで、拝殿の中央部分の延長線上に、山で採った約二メートルの椎の木を盛砂で支えて固定する。「神籬」である。
　志賀海神社の背後に位置する志賀三山の勝山・衣笠山・御笠山を誉める。社人が神職の見守る前で祭を行う。
　まず社人の「大宮司一良」が神籬から一枝手折り、その枝で三山を祓う（写真二）。正面に構えた後、右方から左方、上方と円を描くように三回廻す。これを神籬に向かい正面の勝山、右手の衣笠山、左手の御笠山と三方向で行う。枝を次の社人「禰宜一良」に渡し、同じ所作をする。「別当一良」も同様である。
　次いで、社人「大宮司一良」が白扇を開いて右手に持ち、正面で打ち合わせる「礼拝」をする。これを三回繰り返し、正面、右手、左手と三方向で行う。次の社人「禰宜一良」に渡し、同じ所作をする。

写真一　種蒔き

写真二　枝で山を祓う

写真三　礼拝

「別当一良」も同様である。扇を合わせる動きに合わせて、後方で楽屋の社人が拍子木を鳴らす（写真三）。

次に扇を襟の後ろに挿した社人「別当一良」が笏を正面に構え、「ああら、よい山、繁った山」と正面、右手、左手と三山を誉める。その後正面を向いて笏を構え、「あらぶれる　正木（まさき）のかずら　いろまさる　このこまに水をかい　はみをあたえよ」という。

次いで山の猟に関する掛け合いである。社人二人が右手に杖、左手に犬の綱を持って神籬前に並ぶ。古くは、犬役の子が登場していた。向かって左の社人の「一良」が、「山は深し　木の葉は繁る　やまびこの声か　鹿（か）の声か　聞き分けたりとも　覚え申さず」と言う。するともう一人の社人「二良」が、「一の禰宜殿には　七日七夜の御祭　ごしゅに食べ酔い　ふせって候」「五尺の鹿　七かしら八かしら　まぶしの前を通る鹿　何となさる」と言う。すると、最初の社人「一良」が「その時は　志賀三社　志賀明神の御力をもって　一匹たりとも　逃しはせぬ」と答える。そして神籬の下の盛土に向かって矢を射る。鹿を射ているのだ。「えーいっ」との掛け声で勢いよく、二本の矢を用いて、一人で三度矢を射る。神籬の盛土には、二本の矢が刺さっている。

最後に漁の部分である。コモの後方にいた社人三人が、右、正面、左と三方向に外に向かって座る。後ろ手に藁で作った鰭を両手で持ってパタパタと左右に動かし、鯛を表現する。その前で二人の社人「禰宜二良」「別当一良」は、足の親指に綱をかけて櫓を起こし、対面して立って櫓を漕ぐ。社人「禰宜二良」が「君が代は　千代に八千代にさざれ石の　いわおとなりて　苔のむすまで　あれはやあれこそは　わが君の御舟かや　うつろうがぜ　みがいに命　千歳（せんざい）という　花こそ咲いたる　沖のおんづの潮早（しおはや）にはえたらぬ　つるおにくわざらぬ　むれんだいむれんだい」というと、社人「別当一良」が「志賀の浜　長きを見れば　いくよへぬらん　香椎路に向いたる　あの吹上の浜　千代に八千代まで　今宵夜半につき給う　御舟こそ　たが御舟にてありけるよ　あれはやあれこそは　阿曇の君のめし給う　御舟なりけるよ　いるかや　いるか潮早のいるか　磯良が崎に　鯛釣る翁」という。そして社人「禰宜二良」が「いくせで釣る」、社人「別当一良」が「よせてぞ釣る」と、この掛け合いを三度繰り返して終わる（巻頭図版・写真四）。

昔は、山誉めから漁、最後に狩の所作の順であった。詞唱も少しずつ変化している。

両年とも新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため直会は実施されなかったが、「鰭ごはん」を配布した。直会には通例、鰭の炊き込みご飯の「鰭ごはん」のほか、ワカメや赤魚の汁もの、ニンジン、ダイコンの味噌和えの「ヌタアエ」を用意する。

（吉田　扶希子）

写真四　漁の部分

一六　沖詣り海神祭

【テーマ】一六「自然現象に対する祈願」

【別名】

沖詣り　オキメーリとも発音していた（石橋　一九八〇　一七七）。

【地域の概要】

大川市は福岡県の南西部、佐賀県と福岡県の県境に位置する面積三三・六一平方キロメートルの市である。北は佐賀県神埼市と久留米市、西は佐賀県佐賀市、東は三潴郡大木町、南は柳川市に接している。筑後川の下流に位置する地域である。

昭和二九（一九五四）年に三潴郡大川町、三又、木室、田口、川口、大野島の五村が合併して大川市となった。市内には国道二〇八号、三八五号、四四二号が通っており、対岸と橋で結ばれているが、架橋以前は渡船で結ばれていた（大川市教育委員会編　二〇〇二　一）。

風浪宮が鎮座する大川市酒見は、近世には三潴郡北酒見村と南酒見村に分かれており、久留米藩領であった。明治九（一八七六）年に合併して酒見村、明治二二（一八八九）年に合併して大川町が誕生した時に大字酒見となった（大川市教育委員会編　二〇〇二　七五）。大正橋から北を南酒見・北酒見、南を中原と呼んでいた。南酒見は現在、宮内と呼ばれている。

令和三（二〇二一）年に火清鳴弦御祈祷と沖詣り海神祭の調査を行い、令和四（二〇二二）年に宮内の大御幣製作の調査を行ったが、その最中に新型コロナウイルス感染症が拡大したため、令和五（二〇二三）年に北酒見、宮乙名、大祭に関連する行事の調査を行った。なお、宮乙女に関しては、宮乙女が二〇年程前から記録してきた『風浪宮宮乙女名歳時記』とあわせて聞き取り調査を行った。

【伝承地もしくは実施場所】花宗川、筑後川河口、有明海

【実施時期】旧暦四月一日

【伝承組織】

風浪宮宮司、神職、宮乙名、氏子総代、役員、大川漁協連絡協議会関係者である。宮総代は各町内（一三町内）に一人ずついる。船は大川漁協の関係者が出している。

【由来・伝承】

風浪宮は大川市大字酒見にあり、「おふろうさん」と呼ばれている。社伝によると、神功皇后は三韓親征の帰途、船を葦原の津（榎津）に寄せた時に、船の辺りより白鷺が艮（北東）の方へ飛んで行き、皇后は磯良丸に鷺の留まる所を見るように言った。この場所を「鷺見」と言い、後に「酒見」と言うようになった。また、神功皇后は武内宿禰にこの場所に少童命を祀るように命じ、仮の宮を建てて少童命を祭らせ、磯良丸を神主と定めた。この宮を年塚宮と言う。行幸した所を大后の宮（現在は皇后社（宮）、オゴドンと呼ばれている）と言い北酒見にある。この日は一二月二九日だった。後に磯良丸は皇后の命を受け、鷺が留まったところに社殿を新築し、年塚の宮より遷座したのが、現在の風浪宮である。磯良丸は常陸国の人で、皇后の船頭であったという（福岡縣三潴郡役所編　一九二五　二六九―二七〇）。福岡県指定天然記念物の「白鷺の樟」が本殿のそばに建っているが、この樟は鷺の止まったところであると言われている（『風浪宮宮乙名由來記』）。

風浪宮の祭礼に携わってきたのが「宮乙名」である。宮乙名が伝えるところによれば、「風浪宮宮乙名とは仲哀天皇九年一〇月神功皇后三韓征伐の砌り奉仕した艦師の子孫である」という。この時全国から集められた船、三千余艘を指揮したのが阿曇磯良麿であり、現宮司阿曇氏の祖である。阿曇氏の同族か配下として奉仕したのが、宮乙名の先祖である。磯良丸、六浪丸、古賀丸、與賀丸、石橋丸、徳丸といった船の名前が残されており、磯良丸は現宮司阿曇氏で、他の五艘が宮乙名の船名である。五艘のうち、六浪丸と與加丸が二軒あるので七軒

が宮乙名である。神功皇后帰途の際、磯良丸以下六艘が選ばれて、榎津の浜までお供したとされる。社地を定めた時、磯良丸以下八名は神官として奉仕したが、経費等の問題があってか七名は宮乙名として、日常はそれぞれの生業に就き、注連卸祭や御神幸祭、海神祭（沖詣り）、御田植祭には必ず招集参列し、一七五九年後の今日まで榎津に居住して奉仕してきたという。田中吉政の時代、燈明田として五町三反歩を寄進されたが、その内八反三畝が宮乙名の座田であり、その収入により座祭りを行っていたという。また、風浪宮の大祭の時には、宮乙名は裃着用帯刀し、藩主の名代よりも上座に着席を許され奉仕したと伝えられている（『風浪宮宮乙名由來記』）。

『寛文十年久留米藩社方開基』の風浪宮に関する部分に、榎津に「地役之もの」と伝えられる五人の長がおり、風浪宮の社役を勤めてきたとあり（古賀正美解読、古賀幸雄編集校訂　一九八一　一四八―一四九）、大正一四（一九二五）年の『福岡縣三潴郡誌』には、「地役之もの」が今では「宮乙名」と称していることが記されている（福岡縣三潴郡役所編　一九二五　二七二）。宮乙名は世襲により引き継がれてきたが、都合により引き受けられなくなった場合は、親族や宮乙名を理解し、数々の行事に奉仕できる家が受け継いでいる。現在は四軒で、一軒は後継者を思案しているといい、三軒が欠員となっている。

沖詣り海神祭は海の神を祀る祭りで、航海安全、豊漁祈願をする。風浪宮本殿より大御幣を海に持って出て、持ち帰るのが目的とされている。宮乙名の明治四三（一九一〇）年生まれの父親は、戦時中も沖詣りをしていたと言い、昔は船にエンジンがついていなかったので、手漕ぎで行ったという。新造船があれば御座船とする。かつては、男性だけで沖詣りをしたという。

【実施内容】

一　火清鳴弦御祈祷（ひきめんごきとう）

風浪宮では蟇目神事のことを「火清鳴弦御祈祷」と表記し、呼び習わしている。風浪宮では沖詣り海神祭の前に、地域を清めて邪気を退散する重要な神事として位置付けられている。「火清」は氏子や崇敬者の身体を魂から清め家々の竈の不浄を祓うこと、「鳴弦」は弓の弦を弾く音の法力で悪魔を祓うことであるという。祈祷は三日間にわたって複数回行われ、令和三（二〇二一）年は、四月二三日～二四日は、八時、一四時、一八時の三回、二五日は八時、一四時に行われ結願となった。ここでは、二五日一四時の最終回の様子を述べる。

昇殿して祈祷を受ける氏子総代らと、社殿の前に座って祈祷を受ける人たちがいる。かつては昆布売りの店が出たというが（大川市教育委員会編　二〇〇二　一〇九）、現在は神社が社殿の前で販売している。昆布である理由は、昆布は海のものだからであるという。祈祷では、折り畳んだ昆布を白紙で包み、それを三〇センチメートル程の竹に挟んだものを持ってお祓いを受け、家に持ち帰ってから食す。

祈祷では、宮司らによってまず祝詞等が奏上された後、弓と矢を用いて「鳴弦」と「蟇目」が修される。宮司は「邪気」という文字が多数墨書きされた的を鏑矢で射る。この的は神職が心を静めて枠組みを決め、一気に描いたものだという。この後、宮司が昇殿者に対して鳴弦するが、神職が参拝者と昆布を大麻で祓う。同様に拝殿前の参拝者にも行う。

終了後、氏子総代が沖詣り海神祭の相談をする。

二　沖詣り海神祭

皇后社への遥拝

令和三（二〇二一）年は、五月一一日（旧四月一日）に沖詣り海神祭が行われた。

まず、有明海に向かう前に、宮司らが花宗川を船で遡上して、北酒見の皇后社（オゴドン）に行き、神功皇后を迎える。

下の宮の鳥居前は、道路を挟んで花宗川が流れているが、「風浪宮神船御寄せ所」という立て札が立っており、竹が二本立てられ注連縄が張られ、ガードレールの切れ間から、川に降りられるようになっている。八時三〇分頃には、そこに小さな船が一艘待っている。船の持

ち主である漁師によれば、以前は別の漁師が船を出していたが高齢になったので、代わりに七～八年前から船を出すようになったという。例年、二艘の船が花宗川を進んでいく。もう一艘は太鼓船で、太鼓を叩きながら進んでいくが、新型コロナウイルス感染症対策のため、令和二（二〇二〇）年から、一艘のみとなった。

九時三〇分頃に宮司と神職二名が、大御幣二本と、大麻一本を持って乗船すると、五分ほどで皇后社の前に着き、船で時計回りに三回まわる。皇后社の前の土手には竹が立てられ、注連縄が張られているので、その近くまで船で行き遥拝する。この皇后社が立っているところは、神功皇后が葦原を分けて上陸した場所だとも言われている。現在でも周辺に葦が生えているが、片方の葉だけの「片葉の葦」の伝説が語られている。かつてこの祠を廃して風浪宮に移し、礼拝せずに船出したところ、途中で大しけに遭い、命からがら引き返し、旧来の作法に基づいて船出し、事なきを得たと伝えられている（石橋　一九八〇　一七七）。

人が通る橋の下を行く時は、お祓いしながら通る。大御幣を橋の上から通すことが可能な場所では、橋の上で待っている氏子の人達に大御幣をいったん渡し、橋をくぐり終わると、橋の反対側から大御幣を受け取ってまた船を進める。風浪宮の前を過ぎて、途中の向町水天宮と榎津庄分日吉神社では船上から遥拝し（写真一）、そのまま花宗川を下って筑後川に入り、大川漁港に到着した。以前は宮乙名だけではなく、一般の人たちも日吉神社から乗船し、帰りは全員ここで上陸し、風浪宮まで歩いて帰ったという。これは、神功皇后が着船したという伝説によるものだという（大川市教育委員会編　二〇〇二　一三二）。

写真一　榎津庄分日吉神社への遥拝

三段浮かしの製作と海神への供えもの

大川漁港で船を乗り換え、三隻の船で有明海に出た。新型コロナウイルス感染症拡大以前は、氏子・崇敬者も乗船し、全部で五～六隻、四〇人程度になったという。

宮司と宮乙名は「御座船」に乗船する。紋付袴の宮乙名四名が乗船した。この船は磯良丸船で先頭には、「磯良丸」の旗一本、五色の吹き流し一本と、大御幣を一本ずつ船の左右に括り付けて、注連縄を張る。二号船は「與賀丸」の旗と五色の吹き流しをつけ、氏子総代や役員が乗り込んでいる。この時は、会長、副会長、総代の五名であった。三号船は「六浪丸」の旗と五色の吹き流しであり、神職二名が乗船した。座元の家の旗をつける。御座船をほかの船が追い抜かしてはいけないことになっている。

一一時頃に出航して新田大橋の下を過ぎると宮乙名が手を洗い御神酒をいただき、三段浮かしを二つ製作し始める。三段浮かしは海神（少童命）への供え物である御神酒とお御供さんを載せて流すためのものである（写真二）。まず、手で握れる位の量の藁を取り、それを藁で結わえて束にしたものを長く繋げて輪を作り、さらに藁を繋げてその上に輪を作りながら一つ目の輪と結わえ、もう一つ輪を作って、二段、三段と重ねる。輪の中にも藁を入れ込む。次に百田紙を敷き、竹筒三本と御幣三本を交互に藁にさして、麻緒で竹筒と御幣を結び、竹筒には御神酒を入れる。それから中心に土器を三つ載せて、お御供さんをそれぞれ一つずつ

写真二　御座船と三段浮かし

盛り付ける。お御供さんは米を一升炊いてから円錐状にしたものである。通常は白米で作るが、海神祭の時は、宮乙名が小豆御飯を炊いて全部で一五個作ってくる。完成してから再度御神酒を頂く。一二時前に宮乙名が船から流すが、他の船の者も一緒にお参りする。

干潟の祭壇と神事

そのまま祭場となる場所に船を進めて停泊し、昼食を取りながら海水が引くのを待つ。一四時二〇分頃、大人の膝位まで海水があるが、氏子総代たちが依り代に使う樫の木や笹や道具等を担いで船を下りる。漁業者たちも慣れた様子で設置を手伝う。祭壇は北の方に向かって、すなわち風浪宮の方を向いて置かれる。笹を四本立てて注連縄をめぐらせ、中心に樫の木を立てる。笹の両側に一本ずつ大御幣を立てる。その前に祭壇を置く。供物として、お御供さん九個、調理したグチを二匹必ずお供えする。グチは帰りの船で食べる。「グチを食べて、愚痴を飲み込んで帰る」という。

他は酒、ナス、ダイコン、キャベツ、ニンジン、キュウリ、サツマイモといった野菜と、ミカン、リンゴ等の果物、とろろ昆布、いりこである。また、昔はしていなかったが海苔を専門とする漁業者もいるため、のり網を設置し、豊作を祈願している。

一五時三〇分頃から神事が行われる（写真三）。神事を終えると、お御供さんを参列者でいただく。海産物を採ったりするが、すぐに潮が満ちてきて、一六時には乗船した。

写真三　海神祭

新型コロナウイルス感染症が流行する前は、お謡いをする船もあり、いつもは参加者もたくさんいて賑やかな祭りであるという。他にも潮干狩りをしている船もある。遊覧船が出て神事を見学する人もいる。

一八時三〇分頃に漁港に到着すると、宮司と神職、宮乙名は風浪宮本殿に大御幣を入れ、神事が行われた。

宮司が子どもの頃は、沖詣りの日は小学校を欠席させられたという。沖詣りの帰りは、漁港で船を乗り換えて、潮が満ちるのを待って、日吉神社まで行き、そこに青年団が提灯を持って待っていたので、風浪宮まで歩いて行列して帰ると、二一時頃になったという。

三　大祭の準備と大御幣作り

大御幣（大御幣さん）は、毎年、大祭に合わせて北酒見・宮内・宮乙名それぞれの座祭りの際に製作される。出来上がった大御幣は大祭で担がれた後、これまでの大御幣の古いものを一部外し、新しいものを足して沖詣り海神祭に持っていく。

大祭は旧暦の一二月二九日であったが、風浪宮の祭りで串柿やミカンなどの正月飾りを購入すると正月の準備に間に合わないからと旧暦一一月二九日に変更になったという。しかし、旧暦であると毎年期日が異なり不都合であることから、一月二九日に変更になったが（大川市教育委員会編　二〇〇二　九五）、仕事が休めないということで、さらに現在の二月九日から三日間となった。一月二九日となったのは、昭和三一（一九五六）年からだという（福岡放送局郷土資料調査委員編　一九五六　一二）。

以下では、令和五（二〇二三）年の大祭とそれに向けた準備・諸行事について述べる。

【一月一五日】　口あけ祭

宮乙名の座元の家の床の間に風浪宮の掛軸をかけて遥拝し、お供えは特上酒、塩、米、いりこ等である。新酒をいただきながら、大祭の話し合いをする。宮乙名のみで行う。

【一月二八日】北酒見の大御幣作り（写真四）

北酒見は一六組あるので、一六年に一回、座元が回ってくる。御幣作りと、大祭時に御幣を担ぐ役割がある。座元は年の順等、その時に話し合って決めている。戦前は土地の有力者が受けていたという（大川市教育委員会編　二〇〇二　九八）。

座元の家や公民館の玄関に竹を立てて注連縄を張る。一四時頃、宮司と神職が座元宅を訪問して、二時間近くかけて大御幣を作る。床の間に風浪神社の掛軸をかけ、ニガマ竹・百田紙・麻緒を用意しておく。また、米一合五勺をビニール袋に入れたものを二つ用意する。竹はまっすぐで長いものを選ぶ。宮司が御幣を切って、神職がニガマ竹を整えてから切れ込みを入れ、御幣を挟み込む。百田紙は一〇枚重ねる。米は百田紙で包んで竹を中心にして麻緒で結ぶ。御幣ができあがると、宮司・神職と座元、宮総代の四名で、できあがった御幣を組み立てて大御幣にする。まず、折った百田紙を縦に挟んだ竹を二四本まとめて麻緒で縛る。その中心に御幣を挿す。さらにその周りに百田紙を横に挟んだ御幣を八本、紙を合わせるようにして配置し麻緒で縛る。さらに四本の御幣を合わせ麻緒で縛る。また、四本御幣を加える。それから、竹に包むように百田紙を巻く。竹の下の方に、米を百田紙で包んだものをつける。それから御幣の和紙を開く。最後に八乙女が持つ二本の御幣を取り付けるが、これは大祭当日、宮乙名が取り外す。床の間に移動させ拝む。

写真四　北酒見の大御幣づくり

【一月二九日】

①鳥居に注連縄を張る

九時頃から宮内の人達が鳥居に竹を立てて注連縄を張る。以前は注連縄は宮内が綯っていたが、現在は大木町の人にお願いして作ってもらっている。また、竹は以前は宮内と北酒見でそれぞれ一本ずつ用意し、八女市黒木町まで大型トラックで採りに行っていたので、大変な作業であった。拝殿の注連縄は北酒見が担当し、一二月にかける。

②裸ん行の準備

九時頃から、風浪宮絵馬殿にて樽神輿と松明を製作した。参加団体は青年会議所（ＪＣ）、大川商工会議所青年部（ＹＥＧ）、有志の会の三団体であるため、神輿は三つ製作した。松明は各自持ち帰って作ってもよいし、風浪宮で作ってもよい。松明は竹に木の枝を挿しこんで白布又は赤布を巻き付け、その後ワイヤーで補強して製作する。樽は、酒樽に竹四本を縄で括って製作する。元々は風浪宮本殿に置かれていた樽を使用していたが、現在は酒屋から酒樽を入手している。竹は竹林の所有者から入手する。

松明と神輿製作後に、日吉神社（大川市榎津）で一〇時からお潮井とりが実施された。神事は風浪宮宮司が取り仕切る。一礼のち修祓、祭典・道具祓い、お祓い、大祓詞奏上、お潮井入れの箱を水で祓う、玉串奉奠である。お潮井は砂であり、風浪宮にて事前に準備しており、お祓いを済ませている。砂は川砂や山砂を使用し、「お潮井砂入れ」からビニール袋に取り分けて参加者に配布する。これを各自で持ち帰って、裸ん行の前に、事故が無いように玄関で体や足元をお祓いする。

③北酒見の座祭り

一〇時三〇分から座祭りが行われる。床の間に風浪神社の掛軸をかけ、前日に作った大御幣を持ってきて置く。祭壇にお供えのニンジン、大根、ゴボウ、レンコン、スルメ、イリコと、灯明、榊、御幣を祭壇に供えて神事が行われる。それから、トウワタシの儀が行われる。お謡三番（養老・風浪）が、座元・総代・神職の順で披露され、当番の隣組と次の当番の隣組の座元、隣組長と盃が交わされた。直会は新型コロナウイルス感染症防止のため行われず、弁当の持ち帰りとなった。

④宮内の大御幣作り、座祭り

宮内の座祭りは、令和四（二〇二二）年の内容を取り上げる。宮内の大御幣作りと座祭りは一月三〇日だった。宮内は二〇組まであるが、一三～一四年に一度、組単位で順番が回ってきて、座元は隣組長が受けるようになっている。しかし、高齢者しかいない家や、平日に大祭があるが仕事で休めない等の事情がある人、不幸があった家は避けて座元を決める。男性が買い物に行き、神門に幟り旗をあげて下す。

大御幣の作り方や手順は、北酒見と同様である。宮内は引き続き一七時から公民館で祭壇を組み立てて大御幣を安置し、鯛、酒、米、ゴボウ、大根、キュウリ、りんご、昆布、ミカンを供える。そして、座祭りの後、戸渡しが行われた。お謡「高砂」「春栄」を謡い、盃を交わした後、現在の座元から次の座元に書類が入った木箱が受け渡された。打ち込み（「祝いましょ　ポンポン（拍手）　もうひとせ　ポンポン（拍手）　祝うて三度　ポンポンポン（拍手）」）をして終了となった。

【二月三日】神馬祓い・注連卸祭

風浪宮で流鏑馬騎手、牧場の関係者立ち合いで神馬祓いが行われる。宮内が神門に幟り旗をあげる。北酒見は二月五日に幟を立てる。

一七時半過ぎに宮乙名が紋付袴で風浪宮に参り、社務所前で船名・名前入りの提灯に火を灯し、神職を先頭に鳥居前まで移動し、神事が行われる。その間総代が松明の火を燃やし続ける。その後直会があり、途中、お謡三番「風浪」が披露され、酒を酌み交わす。「風浪」は明和・安永頃に作られ、天保年間に久留米藩主の目に留まったものであるという（鶴久　一九七〇）。二〇時頃、葦で作った松明に火をともして榎津橋（東橋）に向かう。神職は大正橋まで見送る。酒見と榎津の境の榎津橋に着くと、松明の火を提灯に移し替えて帰宅する。松明はクドさん（荒神さん）や神棚に一年間置いておく。この時から料理には動物の肉や油物は出ない。

【二月六日】流鏑馬追い

流鏑馬（大川市指定無形民俗文化財）に使う的、弓、矢、胡籙、鞭を藁や竹等で総代や神輿方が事前に作る。五色の幣がついた冠をかぶり鞭を持った騎手と神職の二名の後に神職や総代が続き、「おー」という声とともに拍手しながら社務所の玄関から建物の中を駆けて浄祓いを行う。以前は、宮司の家の全ての部屋を一周していたと言い、家の中の魔を払う行事だという。

【二月七日】宮乙名座祭り

①七五三練

一〇時頃から、宮乙名座元宅に宮乙名が緑色の紋付袴で集まる。床の間には風浪神社の掛軸をかけ、三宝に米、塩、いりこを供え灯明をあげてお参りする。手を洗い御神酒を座元から順にいただき、座元の家の門にかける大七五三縄を編む。まず藁を五・五・三（左）、七・五・三（右）本に分けて取り、東へ編んでいく。さがりは三三で、門の広さによっては三五とする。綯い終わったら飛び出た藁を切って整え、縄に沿って丸めていき、綯った細い注連縄で縛る。これを中央において御神酒をいただき、お椀に入った蓋がついた根つき青菜を食べた（真似をする）後、床の間に置いてお参りする。根付き青菜は、神功皇后が榎津の浜に上陸した際、油屋に立ち寄ったところ、茶も汲まず相手にしないので、酒屋に寄ったところ、師走で多忙だったにも関わらず、酒強飯（さかこわい）を出し、炊く時間がないので生野菜を出し、箸は葦を切って歓待したことに基づく。

②道具祓い

お潮井詣り（巡幸祭）の御先船の稚児が座る布団や旗等のお祓いを、神職が各宮乙名の家を回って行う。

③御幣紙切りと御幣づくり

昼食の後、一四時過ぎに宮司と神職が御神酒をいただき、宮司が大御幣に必要な御幣を切る。宮乙名はニガマ竹を整え、神職は百田紙を

竹に挟んで御幣を作っていく。百田紙は二〇枚重ねる。米と玄米を用意し、百田紙に包む。

④七五三卸祭

一五時過ぎに宮乙名は家の門に竹を組み、床の間に置いていた大七五三縄をかけてシデ（御幣紙）を下げる。御神酒、果物、野菜、鯛等をお供えし、宮司により神事が行われる。

⑤大御幣作り（写真五）

宮司と神職は御幣紙を切り御幣を作り終えると、掛軸を参って一時帰宅する。宮乙名は床の間の前で順に御神酒をいただき、根つき青菜を食べる（真似をする）。それから宮乙名だけで大御幣を組み立てていく。百田紙を縦に竹に挟んだ御幣の下に二枚ずつ交互に百田紙を敷いて竹を麻緒で固定する。横に百田紙を挟んだ御幣は、宮内や北酒見よりも高い位置に麻緒で結んで固定する。四本の御幣も同じく高い位置に固定し、竹に百田紙を巻いて麻緒で固定する。その上から百田紙を縦に挟んだ御幣を同じ位の位置で四本の御幣を固定して竹に百田紙を巻く。八乙女が持つ御幣を四本取り付ける。百田紙に包んだ玄米と米を下部に付ける。中心に最後の一本をさして、御幣を開いていく。以前は、宮乙名の大御幣だけが御幣紙を開いて、宮内・北酒見の大御幣は御幣紙を開いていなかったので、宮乙名の大御幣が豪華に見えたというが、最近は二地区も開いている。大御幣が完成すると大御幣を囲んで再度、御神酒と根つき青菜を順番にいただく。

写真五　宮乙名の大御幣づくり

座元の宮乙名が大御幣を担いで家の中を回ってお祓いし、床の間に置く。

宮乙名の大御幣を担ぐA氏が到着し、宮乙名と一緒に掛軸を拝む。A家は代々宮乙名の大御幣を担いできたが、風浪宮から家も離れており、宮司をはじめ宮乙名もこれを不思議に思っていた。二〇年ほど前A氏の親族が語ったのは次のような話だった。神功皇后が榎津の浜に到着した際、鷺が飛んでいったが葦が茂っていて道が分からなかった。たまたまアオ（淡水）を汲みに来ていた地元の作り酒屋の職人であったA氏の先祖が、白鷺の樟まで道案内したことにより大祭で大御幣を担いできたという。一度は役目を辞退したことがあったが、また大御幣担ぎをするようになった。

御幣一対と注連縄をA氏、宮乙名は持ち帰って家に飾り、八乙女の家にも渡す。また、大祭の時に注連縄をトラック（船）にも付ける。

⑥座祭り

座元宅で宮司、神職、A氏、宮乙名で直会がある。まず、小学校低学年以下の男児二名が三つ組の盃で酌をする。酌をした子どもは今回、お潮井詣りで船に乗る。途中、「風浪」が座元、神職、宮乙名一名によって披露される。また、打ち込み（「皆さんお手を拝借　祝いましょ　ポンポン（拍手）　もうひとせ　ポンポン（拍手）　祝うて三度　ポンポンポン（拍手）」）をする。その後、御飯、味噌汁が出るが、御飯茶碗に「茶」と呼ばれる酒が急須で注がれるので飲み干す。直会が終わると、宮司、神職、A氏は帰宅する。

⑦とわたし

床の間の前に座り、上げ底になった木椀で、座元から時計と反対回りに九回御神酒をいただき、根つきの青菜を食べる（真似をする）。マッチで回数を数える。さらに座元は一杯飲み、一年間座元を務めたことと、次の座元を引き受けてくれるようお願いする。次の座元は受諾し、

御神酒をいただく。また、次の座元は、その次の座元にも、何かあった場合に座元を引き受けてくれるようお願いし、受けてもらう。座元は退席する。

⑧大の字

座元が謡をあげながら、大根を半月切りにして、皿の上に大の字に並べて盛り付け、下部に塩を載せたものを持って、部屋の中に入ってくる。それを宮乙名の中央に置き、蒲鉾等をつまみながら酒を飲んで、しばらくして行事は終了する。通常は〇時頃まで行われる。

四　大祭（二月九日～一一日）

ここでは特に、各地区や宮乙名に関することを中心に述べる。風浪宮大祭の名物は串柿で、縁起物（無病息災・子孫繁栄・家運隆昌）として授与している。八女市黒木木屋からも売りに来ている。旧暦一一月二九日が大祭だった頃は、正月の準備も兼ねているだけではなく、串柿の値によって米の相場を占っていたという（大川市教育委員会編　二〇〇二、宮武　一九四三［一九三七］）。

【二月九日】本祭典、舳先祭

一〇時過ぎに、北酒見、宮内の座元、A氏が座元宅より大御幣を担いで風浪宮を訪れ、拝殿での祭典に参列する。

舳先祭が一四時から行われ、裃で潮井、太鼓持ち、先祓、大御幣（座元が担ぐ）、宮司、神職、御幣持ちと行列をなして、下の宮で拝んだ後、北酒見の皇后社に向かう。皇后社で住民も参列して神事が執り行われ、地区を回って風浪宮に戻る。

【二月一〇日】

宮乙名は一一時から、各宮乙名宅を順番に回って船を作っていく。かつては馬の上に大きな布団を載せてその上に稚児の男児が座っていたが、昭和三八（一九六三）年からトラックになった。当時この変更は、「もともと船で御供するのが当然なので、トラックに船の形を取り付けたところ好評を博した」と好意的に受け止められたという（『風浪宮宮乙名由來記』）。船をかたどった板をトラックに取り付けるが、当時、和船を製作する造船所が幾つもあったので、そこに頼んで作った。

近年、馬に戻したいという話があるが、馬のレンタル料が高く、かつお潮井詣り当日の朝、馬の上に布団を載せて仕立てられる馬の扱いに慣れた人がいなくなったので、現実的には難しいという。

お発座祭が一四時から行われ、裃で、潮井、太鼓持ち、先祓、大御幣（座元が担ぐ）、宮司、神職、稚児で行列をなして下の宮を参った後、年塚宮まで行き神事が行われ、神輿を引いて風浪宮に戻る。

裸ん行

参加者は若津神社に一九時に集合し、風浪宮に向かって松明・神輿を担いで走る。令和五（二〇二三）年は、新型コロナウイルス感染症対策のため約八〇名の参加であった。走る順番は、YEG、有志の会、JCの順であった。「わっしょい」の掛け声とともに、若津神社から明治橋を通り、大川銀座、中原、大正橋を通過し風浪宮下宮に至る。道中で、「邪気退散」の文字が書かれた大うちわを持った衆が観客に向かってうちわを仰ぐ。これは観客の邪気を祓うための行為らしい。風浪宮下宮でいったん待機し、一斉に風浪宮入りとなる。最後に樽神輿が風浪宮に入り風浪宮入りは終了となる。風浪宮入り後、お祓いの儀、お祓い、二礼二拍手一礼、打ち込み、かがみ割りを実施して行事は終了となる。令和五（二〇二三）年は新型コロナウイルス感染症対策のため、ふるまい酒はなかった。

【二月一一日】

お潮井汲み

八時三〇分頃、総代、神馬、流鏑馬の馬二頭が日吉神社にお潮井汲みに行く。

御発輦祭

拝殿に八乙女、宮乙名、稚児が上がる。神輿方により神輿を三基順に拝殿に上げて神を神輿に移すが、その時稚児は扇を耳に当てて宮司に付き添う。それが終わると御幣を持った八乙女は、四方に三回拝礼する。

お潮井詣り（市内巡幸）

風浪宮―中原―榎津―日吉神社―明治橋―若津神社―風浪宮を巡幸する。先祓い、潮井、的・弓・矢・胡籙、大御幣を載せた台車、御先船・六浪丸（次の座元）、神馬、潮井、賽銭箱、金幣、神輿、馬に乗った神職、宮司・崇敬会関係者・市内関連団体、古賀丸、與加丸、石橋丸、徳丸、八乙女、流鏑馬二頭、その他地区関係者、牧場関係者等が徒歩で行列に参加する。洗濯物を干している家の前では行列は進めず、行列から見えないようにし、取り込んでから再度出発する。

その後、下の宮で御神幸祭が行われ、舞の奉納が行われる。

流鏑馬

流鏑馬が参道から下の宮の間で行われ、騎手は二名である。一名の騎手は、父親が騎手だったのがきっかけで三〇年務めている。親族からは佐賀競馬の調教師や大井競馬場で活躍する騎手が出るなど、馬に関わってきた家系だという。自身は乗馬クラブに行って練習をしたという。今後は地域の中から若手の騎手を育成したいと考えている。

馬で下の宮の的まで走る途中に五色の御幣が取れて地面に落ちるが、みんなが欲しがると言い、観客は競って拾う。

三回行われるが、二回は馬で下の宮の前まで走ってくるといったん立ち止まって弓矢を受け取り、構えられた一枚の的を射る。最後の一回は二枚の的を重ねて構え、それを射る。「コロナ退散」というようなことを大きな声で言い、一度で的を射た。

かつては大祭が終わってから大御幣は分割されて棒の先に取り付けられ、青年達が春の彼岸に各家を祓い清めて回り、沖詣りの際に奉持されたという（大川市誌編集委員会編　一九七七　一二五七）。

【類似行事・関連行事】

沖祭り（柳川市大和町鷹ノ尾・鷹尾神社、柳川市大和町中島）

鷹尾神社で旧暦六月一三日に行われる、海上安全や豊漁を祈る行事である。また、有明海の北部を神領とした鷹尾神社の「鷹尾の海」に由来する行事である。「竜宮島」と呼ばれる鷹尾道祖之御瀬で神事が行われる。ここは昔の有明海の海岸線にあたり、神功皇后は筑後川から有明海に出て鷹尾に上陸し、鷹尾の宮で軍議を定め、田油津媛を討ちに行ったという（大和町史編纂実務委員会編　二〇〇一）。それから、五色の吹き流しをつけた漁船に六合校区の区長や総代が乗船し、まず上流の聖母宮まで行きそれから有明海に向かう。潮が引いてから土饅頭を作り御幣を立て、その周りを竹や葦で囲み御幣の前に祭壇を設け、お供えをする。両側に竹を立てて吹き流しをつけて参道を作ると、こを神様が歩くといい、神事が行われる（写真六）。柳川市大和町中島でも祇園祭前日に沖祭りが行われる。乗船して海に参るが、祭壇は作らない。

（田中　久美子・梶佐古　幸謙）

写真六　沖祭り（鷹尾神社）

一七　叶院千灯明

【テーマ】四「つくりもの」、一五「悪霊防御」

【地域の概要】

福岡市は福岡県の西北部に位置する政令指定都市である。明治二二（一八八九）年、古くからの商都博多と城下町福岡が合併し福岡市が誕生した。順次周辺の郡部と合併し、現在では中央区・博多区・東区・南区・城南区・早良区・西区の七区で構成される、九州の中心とも言うべき大都市となった。市域の北は玄界灘に面し、南はその平野部を取り囲むように立花山、油山、脊振山、金山などの低山が連なっている。博多区は、現在では那珂郡・席田郡を包摂する広い範囲となっているが、古くからの所謂博多は、博多湾に面し、那珂川と御笠川下流の石堂川に限られた地域に東西を画し、南は矢倉門のくぼ地までの十町四方の地であった。

戦国時代の戦乱からの博多の復興は、豊臣秀吉が行ったとされる「太閤町割り」と言われるもので、四水四応、四神相応、七条袈裟に擬える七七、四十九願を表し、博多を一山の七堂伽藍にたとえたものという。天正一五（一五八七）年、六尺五寸四分の間杖（ものさし）をもって、一の小路（市小路）を測量基点として行われた。街割は、七小路・七厨子・七番・七口・七観音・七堂である。七堂は、石堂・辻堂・奥堂・普賢堂・瓦堂・萱堂・脇堂の七堂で普賢堂町は普賢菩薩を祀る堂が置かれたことによるという。また別説として、唐人がもたらした普賢菩薩像を祀る堂があったからともいう。博多祇園山笠等でよく知られる「流」は、現在もなじみの太閤町割りの中核で、元来は七流であった。一流は、一〇町内外の町からなり、これが戦国時代からの博多復興の町組織であり、自治行政の単位であると共に、山笠・松囃子などのまつりの運営組織ともなった。

普賢堂町は、元来は厨子流、現在は東流に属する。博多の南東寄りに位置する東西道に面する町で、古い面影を残している。通りの東には西教寺、聖福寺塔頭の幻住庵があり、南に扶桑最初の禅窟といわれる聖福寺、博多綱首謝国明が大檀那となり聖一国師が開いた承天寺などの大寺院が並ぶ。第二次世界大戦の空襲を免れた博多東部は、古い町並みの残るところや、古い寺院が多いことから、近年「博多旧市街」と呼ばれ、福岡市の観光施策が進展している。

【伝承地もしくは実施場所】

千灯明は、福岡市博多区上呉服町の叶院

辻祈祷は、博多区上呉服町（旧普賢堂町上・普賢堂町下・寺中町）

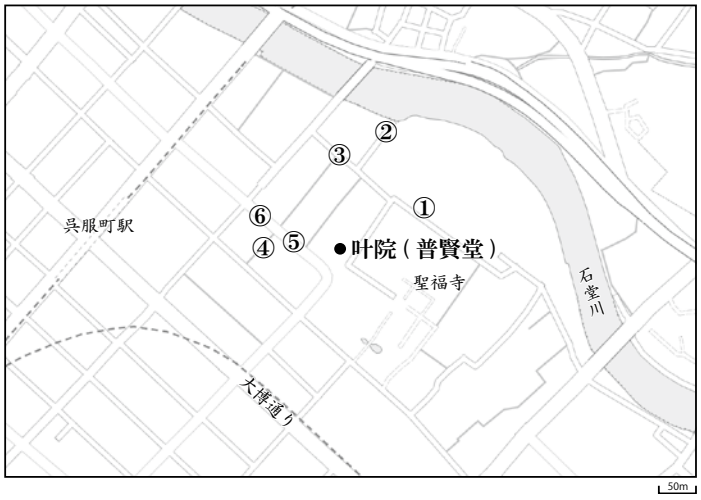
【実施時期】七月二四日　夕刻

【伝承組織】千灯明保存会

基本的には、旧普賢堂町上・普賢堂町下・寺中町の古くからの住民に博多祇園山笠で加勢に来る人々が加わって自主的に作った組織である。

【由来・伝承】

千灯明が行われる叶院は宝満山配下の在宅山伏の寺。江戸中期に開院したと考えられる。歴代住職の中には、隣接する聖福寺の仙厓和尚（一七五〇～一八三七）や、画家の斎藤秋圃（一七六九～一八六一）と親しく交わった者もあ



図一　叶院の位置と辻祈祷の順路図

り、彼らが描いた肖像画が遺されている。

千灯明は、享保一七（一七三二）年の享保の大飢饉で亡くなった人の霊を弔うために始められた。この事は、千灯明の際に住職が読み上げる表白でも毎年読み上げられる。

『博多山笠記録』によると、かつては博多の各町、ちょっとしたお堂や小祠、地蔵様や濡衣塚などの伝承地でも、子どもを主体に千灯明が行われていた。太い青竹を千灯明を行う場所に合わせて適当な長さに切り、二つに割ってその中に砂を入れ、ホタテ貝の殻を並べて、種油を注いで、灯芯を置き点火するものが一般的だったという。

冷泉町の宝照院では、現在もこの方法で八月七日に千灯明を行っている。貝洗い、千灯明の設営、寄附集めなど、すべて子ども組の頭の指導で子どもがやった。今は燈明を消す役は大人がしているが、それも昔は灯すのは女子、消すのは男子で、

「セーントウミョウ、セントウミョウ、トモシテキヤスガ、セントウミョウ」と男子が消して回れば、女子は根気よく「キヤシテ、ツクルガ、セントウミョウ」（消してつけるのが千灯明）と点火した。

現在は、ほとんどの所で行われなくなったが、冷泉町の宝照院、桶屋町のお不動さんでも行われている。

【実施内容】

七月二四日夕刻までに普賢堂筋の通りの三箇所（各町内に一基）に大絵燈籠を掲げ、通りに面した家々では、各家が趣向を凝らした小灯籠を作り飾る。大絵燈籠には、大浜流灌頂と同様の勇壮な武者絵が描かれている。元々は各戸に小灯籠を灯したが、灯さない家が増えたため、大絵灯籠を造るようになったというもので、古くからのものではないという。

叶院境内の門から本堂の間に、子ども達の腰の高さくらいの台を設置し、幅二〇センチメートルくらいの板を渡し、その上に真砂を敷き詰め、カワラケを並べ、カワラケには菜種油、トウジミを入れ、準備する（写真一）。子ども達は、町中を太鼓を叩きながら、大声で千燈明の開始を告げて回る。

暗くなり始めると、叶院本堂に町内の主だった人が三々五々集まり、読経が始まる。読経は、表白に続き、九条錫杖経、観音経、普賢菩薩・観音菩薩・不動明王等の諸真言である。読経が終わると辻祈祷に出かける。住職の後に子供たちが従い、大きな団扇で住職を煽ぎながら行進する。

ただし、近年は子どもの減少により大人も従う。住職は辻の決まった場所で法螺貝を吹き、読経する。まず、聖福寺と幻住庵の間の道の辻、次に石堂川岸まで行き、次に左衛門蒲鉾の辻など、旧三町を囲む道を往ったり来たりしながら祈祷して結界をきる。（図一参照）

寺に帰ると千灯明である。

セーントウミョウ、セントウミョウ、

キヤシテトモセバ、セントウミョウ

（千灯明、千灯明、消して灯せば、千灯明）

子供たちは元気に歌いながら、砂を敷いた台に乗せられた灯明皿のトウジミに、赤松の小枝で作った点火用松明で火をつけていく。すると、大人たちが横から団扇や扇子で消していく。そうするとまた子ども達が点火する。狭い境内では千灯明と言われるほどの灯火を一気につける事はできないが、こうして付けたり消したりすることで、千の灯火が灯された事になるという。境内や町は遅くまで子ども達の歓声や、ほろ酔い加減の大人たちで賑わう。

住職（昭和四一年生まれ）の話によると、自分が子どもだっ

写真一　叶院千灯明の様子

た五〇年ほど前は、すべて子どもで行った。台の下に砂が盛ってあり、赤松の松明の火を砂に挿して消し、トウジミにかざして、また火をつけた。木なのでなかなか着火せず大変だったが、灯明皿の油をしみこませたりして着火したという。つまり、赤松の小枝へ火を付けたり消したりと言うことだったという。時代により、また場所によっても少しずつやり方が異なるようだ。

通りは縁日の賑わいで、数箇所に、ジュースやビールを冷やし大人達は、三々五々集まって飲み喰いし談笑する。子ども達は、かき氷やボンボンすくいなどを楽しんだりしている。

新型コロナウイルス感染症が拡大していた三年間は、千灯明については中止、法要は通常通り行った。辻祈祷は初年度一度中止にした他は、毎年行った。

【類似行事・関連行事】

大絵燈籠

大絵燈籠は宝暦五（一七五五）年の大風雨、翌年の疫病流行で亡くなった人々の霊を供養するために始められた「大浜流灌頂（おおはまながれかんじょう）」のものが規模も大きく有名である。海老崎雪渓画の大燈籠は、福岡県有形民俗文化財に指定されている。また東区箱崎の「人形飾り」の際も大絵燈籠が掲げられる。

桶屋町お不動さんの千灯明（写真二）

博多区御供所町、旧上桶屋町の通りから入る狭い路地の奥にひっそりと不動堂があり、円空仏を思わせる素朴なお不動さんが祀られている。上桶屋町不動尊講で守り、お不動さんのお札も世話人が摺る素朴なお札である。町内二〇軒ほどに配り、火除けのお守りとされる。七月二八日、境内に七福神の描かれた幕を張り、千灯明が行われる。幕は明治三五（一九〇二）年四月に上桶屋町若者中が寄進したものを、平成二三（二〇一一）年に京都で修理した。幕で囲われた空間に灯明台を置き、蝋燭を立て、お不動さんの火をつけて灯りを灯す。大人たちが消すと、子供たちが「セーントウミョウ、セントウミョウ……」と歌いながら、柄をとりつけたロウソクで灯していく。終わると子ども達にはお菓子と花火が渡される。

宝照院（ほうしょういん）の七夕まつり（写真三）

博多区冷泉町（れいせんまち）、旧竹若町にある宝照院で、八月七日、月遅れの七夕の夜、千灯明が灯される。割竹に砂を入れた台に、貝殻を並べ、油を張り、ジミを浸して灯りを灯す。ここでは、辻祈祷が主体で、千灯明のやり方自体は、博多の町々で古く行われた方法を伝えているが、子ども達がつけたり消したりすると言うことはない。本堂では護摩祈祷が行われ、別の山伏数人が宝照院を囲む町、竹若町、万行寺前町、箔屋町の境界の辻八箇所で、町の外に向かって般若心経をあげ、ホラ貝を吹く。浴衣を着て、提灯を手にした子供たちが山伏の後ろに従う。

宝照院は、令和五（二〇二三）年六月、宝満山麓太宰府市内山に移転した。辻祈祷は引き続き行われているが、千灯明は移転に伴い、令和三（二〇二一）年までで、中止となった。

（森　弘子）

写真二　桶屋町不動さんへの路地

写真三　宝照院の七夕まつり

一八　風旗（かざばた）

【指定等】

八女市指定文化財である林業関係資料に、風の神の祭祀に関する記述が見られる。

種類　八女市指定有形民俗文化財（第一四七号）

名称　臼ノ払の林業関係資料（内「臼ノ拂愛林組合規約」）

指定年月日　平成二八（二〇一六）年七月二七日

【テーマ】二八「風旗」

【名称】風の神さん、綾部八幡様

【地域の概要】

臼の払（うすはらい）地区は林業が盛んな地域であり、風の神のほか、山の神を三箇所祀っている。

※日向神ダムそばの山間地に位置する地理的環境や、地域で使われていた道具が「林業遺産」に指定されるなど、林業が盛んであった点などを適宜補足する。

【伝承地もしくは実施場所】

八女市矢部（やべ）村臼の払地区　風神宮

【実施時期】

例年一〇月一六日頃に行われている。

令和二（二〇二〇）年は一〇月一七日土曜日に実施された。

【伝承組織】

八女市矢部村の飯干（いいぼし）地区にある臼の払地区の住民によって行われている。同区では、「臼ノ払山の神・風の神保存会」が組織されている。

【由来・伝承】

臼の払地区で風害が多く、農作物の豊穣に恵まれなかったため、昭和四（一九二九）年の始めに、風害による被害が少なくなるようにとの声が上がった。そこで、佐賀県三養基（みやき）郡中原（なかばる）に鎮座する、風除けの神として知られる綾部八幡様（綾部八幡神社）を奉祭し、風害を免れようにと協議がまとまり、長田米吉、仁田原菊次郎が代参し、御守札を受けて帰った。

綾部八幡宮より御守札を拝受したのち、天神山に祀ることが考案され、二名の地権者から一五歩ずつ、計三〇歩の寄贈を受け、各戸より人を出して土地を開墾し、「八幡様」を安置して祀った。その後、昭和一〇（一九三五）年には尊像を安置し、神官を呼んで「開眼祭」が行われた。

昭和四〇～五〇年代を境に、しばらく途絶えていた時期があったが、平成二四（二〇一二）年に地区の有志を中心に再興の機運が高まり、八女市地域づくり協議会を通して補助を得るなどして、「風神祭」として再び祭礼を行うようになった。

なお、春に行われる「願立て」に対して、秋に行われるこの日のお祭りのことを「願成就」と言う人もいる。

【実施内容】

一　神事の準備

令和二（二〇二〇）年一〇月一七日の祭礼当日は、八時半からしめ縄作りを行った。藁は一〇月初旬に刈り取られたものが使われる。地区の個人宅の倉庫で行われ、臼の払地区の男性が一〇名程度参加した。

しめ縄作りの手順は、倉庫天井の梁に縄を掛けて藁を吊るし、三人で藁を足しながら綯っ

写真一　しめ縄づくり

ていく（写真一）。完成したしめ縄は、倉庫内で行う神事の際に掛けられた後、最終的に風の神を祀る祠（風神宮）の前にある榊の木に掛けられることになっている。

しめ縄作りと同時に、藁ツトを計八本作る。藁ツトの中には、干物のいわしと赤飯が入れられる。また、細い竹を切って、酒を入れる筒も作る。

二　神事としめ縄のかけ替え

しめ縄作りなど、神事の準備が終わった後、同じ個人宅の倉庫内で一〇時二〇分頃から神事が行われた。

倉庫内にしめ縄をかけ、その手前に祭壇を配置し、米、酒、根菜、塩の他、先ほど作られた藁ツトを供える。この時、参列者は天神山という山の中腹にある風の神が祀られている祠の方を向いている。

一〇時三〇分頃に神事が終了すると、代表者二名が風の神の祠に参拝する。風の神が祀られている祠は、個人宅から数一〇〇メートル離れた山中にあり、登り口までは車で移動し、そこから一〇分ほど山道を登る。代表者二名は神前にて二礼二拍一礼し、しめ縄を古いものから新しいものに掛け替え（写真二）、藁ツトを二つ神前に供えて下山する。なお、しめ縄は翌年まで一年間掛けたままにされる。

写真二　しめ縄のかけ替え

三　直会

神事が終わり、しめ縄が掛け替えられた後、場所を臼の払地区の集会所へ移して直会が行われる。現在は集会所で行われているが、以前は二軒の家が座元となり、座元宅を宿として行われていた。

比較的近年まで地区の女性たちが食事を作っていたが、負担を軽減するため、現在は仕出し弁当を注文している。

四　その他

例年七月一五日、風神宮の祠のそばの木に、幅一尺の麻で織られた「旗」が掛けられる。旗には掲げられた年月日（「令和二年七月十五日」）とともに、「祈」という文字が記されている（写真三）。

寸法や文字はやや異なるが、麻を用いる点や七月一五日に風除けを祈念して木に掲げられる点などは、臼の払地区へ風の神が勧請された佐賀県みやき町の綾部八幡神社のもの（「風旗」）と同様である。

写真三　掲げられる旗

【類似行事・関連行事】

①綾部八幡神社の「旗上げ神事」

佐賀県みやき町の綾部八幡神社では、例年七月一五日から九月二四日まで境内の大公孫樹の幹に竹竿を介して麻で織られた旗を掲げ、風鎮を祈願する「旗上げ神事」が行われている。この時、掲げられた旗の様子は細かく観察され、なびき具合や巻き具合をもとにして風雨の予兆や農作物の豊凶が占われることになっている。

なお、前述のとおり、臼の払地区で祀られている祭神は、同神社から勧請されている。

②福岡県筑後地方の「カザバタ」

筑後川中流域の福岡県側には、「カザバタ」と呼ばれる風止め祈願

の旗を掲げる習俗が広く行われている。

佐賀県の綾部八幡神社の旗とは、木に旗を掲げて風止めを祈願するという点では共通しているが、旗の形状に大きな違いがあり、綾部系の旗が正方形に近いのに対して、筑後川流域に分布する旗は幅三〇センチメートル、長さ一メートル以上とかなり細長い。また、旗に記された文字のパターンも異なる。筑後川流域の旗では、風の神として祀られることの多い「級長津彦神（しなつひこのかみ）」をはじめ、神々の名前が多く記され、風止めを願う文言も記されている。

分布域は筑後川中流域であり、東西では西端が福岡県小郡市、東端は久留米市田主丸（たぬしまる）であり、南北では南端が久留米市草野（くさの）町、北端が福岡県朝倉市である（現地での確認に基づく）。なお、これまでのところ同様の形状の旗は筑後川を挟んだ対岸の佐賀県側では確認できていない。

この「カザバタ」の例として、福岡県小郡市の大中臣神社の例を記す。同神社では、例年七月に行われる「ご願立て」の日に旗を掲げる。この旗は「カザバタ」と呼ばれている。

令和元（二〇一九）年の場合、七月一一日に行われた。当日は、スーツ着用の上、氏子である東福童、西福童の関係者が計二一名参集し、一一時から神事（「ご願立ての御祭り」）が行われた。神事が終了後、境内の木に新しい旗が掲げられる（写真四）。旗には、「大中臣神社　天之御柱神　地之御柱神　天神地祇八百萬神五穀豊穣風止祈祷」の文字が記されている（写真五）。

写真四　境内の木に掲げられたカザバタ

形状は幅三〇センチメートル程度、長さ一・七メートル程度であり、旗の上端に竹を通している。境内に掲げられる際には、大木に竹竿を介して、旗が結び付けられる。旗は翌年のこの日まで掲げられたままにされる。

神事が終了すると、近くを流れる宝満川の川沿いに移動し、「水神祭」が行われる。水神祭では、大水が出ないことや川での事故がないことを祈って水利組合や区の土木委員が参加して行われる。神事に先立ち、水神棚の設置が行われる。

他にも、この日には「神璽守護給」と書かれた神符を東福童、西福童にそれぞれ一〇本、一三本ずつ竹竿を介して地区の各所に立てられることになっている。

（亀崎　敦司）

写真五　大中臣神社のカザバタ

一九　久富の盆綱曳き

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　久富の盆綱曳き行事

指定年月日　平成八（一九九六）年七月三日

【テーマ】一九「盆」、三〇「盆綱」

【地域の概要】

筑後市は、筑後平野東部から西・南流して有明海に注ぐ矢部川の中流北岸に位置している。東は八女市・八女郡広川町、北は久留米市、西は三潴郡大木町、南は柳川市・みやま市に隣接する面積約四二平方キロメートルの市である。市の中央をＪＲ鹿児島本線と、国道二〇九号が南北に貫いている。市の中心部にある羽犬塚は、江戸時代に宿場町として栄えた（筑後市史編さん委員会編　一九九七　六）。

江戸時代には、久富村は初め柳河藩領であったが、久留米藩領となる。明治二二（一八八九）年に羽犬塚村、昭和二九（一九五四）年には筑後市となった（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八八　一一三七）。久富の人口は二六二九人、一〇八〇世帯である（筑後市行政区別人口・世帯数　令和五年四月三〇日　https://www.city.chikugo.lg.jp/var/rev0/0035/1177/1235216568.pdf）。

【伝承地もしくは実施場所】筑後市久富　久富観音堂

久富観音堂の行事である。盆綱の製作は、隣接する久富熊野神社で行われる。子ども達が盆綱を持って地区をまわる。

かつて、久富の氏神は熊野区の熊野神社であったが、熊野神社の氏子ではなくなったため、昭和三一（一九五六）年に、熊野神社の分霊を久富観音堂に祀った。その後、その場所に久富熊野神社を建設し、観音堂を現在の場所に移動した。

保存会の「盆綱曳きの由来」資料によれば、農村であった久富の中心はこの観音堂で、「観音さん夜渡」などの行事が行われ、雨ごいの時には母親に連れられて子どもも毎晩、観音堂に行ったという。戦時中はここから出征したと伝えられる。

【実施時期】八月一四日

【伝承組織】

久富観音堂盆綱曳き保存会と久富区民によって実施されている。久富区の公民館の行事であるが、久富東区も一緒に行っている。

保存会は七〇人ほどで構成されている。構成員は、公民館役員、宮総代、久富東評議員、子ども会役員、伝承者、協力員からなる。

子ども会は四団体ある。「伝承者」は子どもの頃から盆綱曳きに携わってきた人で、「協力員」には、これまで公民館の世話人を経験した人がなる。協議員は久富区の役員で、隣組から選ばれる。

参加できる子どもは小学校四年生～六年生の男子だが、現在は希望があれば二年生から参加できる。

福岡県の無形民俗文化財に指定される前は、隣組と公民館で行っていた。

【由来・伝承】

盆綱曳きの由来・伝承については、『筑後市史』に記載されているが、それに脚色した話が、関係者等に配布されている。ここからは三つの由来・伝承を知ることができる。

まず、久富の龍化山徳随寺の本堂が、第四代住職釈宗伝によって寛永三（一六二六）年に建立された。その落成の日に、目連が地獄に落ちた母を綱で引き上げたという説話に従って、門徒が盆綱曳きを盆行事として始めたというものである（筑後市史編さん委員会編　一九九八　五九）。

また、地獄に落ちた亡者たちを、盆の三日間だけでも極楽に引き上

げて、楽しく過ごしてもらおうと綱を引いているともいう（筑後市史編さん委員会編　一九九八　五八）。昭和の初め頃、当時の住職によって盛んに説いて回られたものであったという（靏　一九八六　九二）。

もう一つは、寛永一八（一六四一）～寛永一九（一六四二）年の大凶作で、飢餓や病気による死者が多く出たが、特に子どもの死者が多かったため、その霊を慰めるために、寛永二〇（一六四三）年から盆綱曳きが行われるようになったというものである（筑後市史編さん委員会編　一九九八　五九）。

本行事は、昭和三八（一九六三）年から中止となったが、昭和四六（一九七一）年に再開された（筑後市史編さん委員会編　一九九八　五八―五九）。

【実施内容】

一　事前準備

新型コロナウイルス感染症拡大のため、令和二（二〇二〇）～令和三（二〇二一）年は、神事も盆綱曳きも全て中止となり、令和四（二〇二二）年に三年ぶりに行われた。ここでは、令和四（二〇二二）年の盆綱曳き当日の盆綱製作、盆綱曳きと、令和五（二〇二三）年の鬼角と腰蓑と盆綱心作り、菰の収集について述べる。

盆綱曳きの準備は、通常六月下旬の総会から始まる。

（一）鬼角と盆綱の心作り（一日目）

事前準備は久富熊野神社境内に集合して二日間行われ、伝承者の指導で作業を進めた。

まず、令和五（二〇二三）年七月一七日の八時三〇分～一二時まで、鬼角と盆綱心作りが行われた。

参加者は副会長、宮総代、伝承者、協力員、久富行政区、久富東行政区、子ども会、久富公民館の五〇名であった。

材料は、前年秋に収集・乾燥させた稲穂を保管し使用する。収集量は約二二・五立方メートルになる（幅三メートル×奥行五メートル×高さ一・五メートル）。鬼角・腰蓑用の藁は、事前に藁打ち機、藁打ちを使用して柔らかくしておく。藁を水にくぐらせるだけで編みやすくなる。次に、藁の余計な葉などを取り除いてストローのみにする。

a　鬼角作り

鬼角の製作は、伝承者によって行われる。作り方は伝承者によれば以下のようになる。

藁の長さは、約八〇センチメートルが平均である。綯い方は左綯いである。

① 藁の穂先が左向き（五本）と右向き（五本）で計一〇本を束ねる。
② ①で束ねたものを二つ用意し、左綯いで①を継ぎ足し、延長しながら縄を製作する。縄の長さは子ども用で約一・六メートル、縄の両側は角になるよう、先端を尖らせる。
③ ②で製作した縄に、①を中央より綯いこみ、一回り太くする。反対側も同じである。
④ ③を子どもの頭に合わせてクロスさせる。交わる部分は、縄目をよじってできた小さな輪っかに片方を挿入する。
⑤ 角になるよう、先端は④の作業をもう一度行い、完成させる。

b　盆綱の心作り

盆綱の心作りは、伝承者以外の参加者が行う。

① 材料は購入した縄（左綯いが無いため、右綯いの縄）を使用する。
② 約一五メートルの二本の縄

写真一　鬼角作り

を使用して左綯いで作る。縄がほどけないよう、約五メートルおきにタコ糸で縄を結んでおく。

③ ②で製作した縄に、約二〇メートルの縄で綯いこみ、一回り太くする。これを三本作る。

④ ③で作った三本の縄を、繰り返し同じように綯い、一本の盆綱の心を作る。

（二）菰の収集と腰蓑の製作（二日目）

二回目の八月六日には次の作業を行った。①「菰」の採集、乾燥、②伝承者による鬼角作りの続き、③腰蓑作り、④子ども服等（黒シャツ、黒短パン、黒靴下、黒靴）のサイズ合わせ。

参加者は、会長、副会長、宮総代、伝承者、協力員、久富行政区、久富東行政区、子ども会、久富公民館、当日参加予定の子どもと保護者の約九〇名であった。菰の収集以外は八時～一二時まで行った。

a　菰の収集、乾燥

山ノ井川（大木町）で、六時から菰を収集した。以前は当地周辺のクリークに繁茂していたが、護岸工事で収集できなくなった。採取した菰は久富区の牛舎跡で三～四日、少し青みを残し乾燥しすぎないよう乾かす。

かつては久富にも良い菰がたくさん生えており、子どもが川の中に入って泳ぎながら取っていた。現在は、事前に大人が一〇人がかりで大木町まで行き、川に膝まで入って、二トンダンプカー一台分を切ってくる。令和四（二〇二二）年は、二年間盆綱曳きを行っていなかったため、長い菰が取れた。

b　腰蓑の製作

複数人が同時に作業できるように、小縄をフェンス等に括り付けて作業を行っている。子どもも保護者も協力して製作する。

伝承者が作成した資料を以下参照する。

小縄の長さは一五〇～一八〇センチメートル程度である。

① 左端の五～八センチメートルから始める。

② 二本の藁を手に取る。穂の先端は下、根側は上向きである。

③ 一回目は上部（根側）を七～八センチメートル残して、小縄に二回まわして固定する（結びつける）。

④ 二回目以降は一回目の藁の上に重ね、手前に二回まわして小縄に巻き付ける。

⑤ 腰蓑（横）の長さは七〇～八〇センチメートル位にする。

⑥ 腰蓑（縦）の長さは四〇～五〇センチメートル位とし、先端は切り落とす。

鬼角と腰蓑は以上のように集まって作っているが、一日作業しても作り終わらないため、高齢者に頼んで自宅で作りためておいてもらう。

二　盆綱曳き当日の準備

（一）盆綱綯い

令和四（二〇二二）年八月一四日は七時過ぎから準備を始めた。鳥居の注連縄をかけ直し、両側に竹を立て、公民館に横断幕を掲げた。

事前に準備した藁や菰は、すぐに使えるように、適当な太さに束ねて、久富熊野神社の拝殿内に入れておいた。盆綱を綯うのは、久富熊野神社であるが、場所を借りているだけだと説明される。

最初に盆綱を綯うための準備を行う。久富熊野神社の注連縄を取り外す。それから盆綱の心を滑車に通す。水引虹梁に縄をかけ、その先を盆綱の心に結びつけ、縄は参道の方に引っ張っておく。ぶら下がった盆綱の心に菰二束と藁一束の根本を上にして合わせ、上からしっかり縄を巻きつけて縛っておく。そして、藁や菰はすぐに手渡しできるように拝殿から出して近くに置いておく。藁は菰の三分の一ほどの長さである。

綯う準備ができたら、長さを決めるために、盆綱を曳く子どもと大人の人数を確認する。盆綱を綯う三名、縄を引く二名、菰や藁を綯い手に渡す三名が必要だが、交代しながら製作する。

最初に結んだ菰と藁を三つに分ける。三つに分けたそれぞれに綯い手のうち二名の男性が菰、一名の男性が藁を持ってきて、右にねじって足す。それから、「よいしょ」「はい」と声をかけながら左側の人に渡し、左綯いに綯っていく。綯い進んだら適宜、縄を引っ張ってできあがった部分を引き上げる。菰と藁は同じ位の量で綯っていくというが、綯っていない部分の様子を見ながら、菰か藁を受け取って足している。太い綱にしたい時は、菰の量を増やしているという。

八時になると、観音堂には高齢の女性三人が訪れ、掃除をしたり、お供えものの支度を行ったりする。それから「南無観世音菩薩」と書かれた旗を二本立てる。

九時過ぎに盆綱が出来上がったが、盆綱を下ろし、頭の部分は鳥居の近くまで持っていく。もう一方は、「盆綱は観音堂から出る」ため、観音堂の前に持ってくる。綱には持ち手の引綱をつける。

かつては、綱が二本あったと報告されている。時期は不明だが、オヤボンヅナとコボンヅナを二本作り、オヤボンヅナは小学生、コボンヅナはそれ以下の子どもたちが曳いていた。曳く途中で、ワケモンドン（青年たち）のニクジ（意地悪）があって、後ろから綱を引っ張って前に進めないようにしたという（靏　一九八六　九二）。また、戦前は、大盆綱は高等小学校の子ども、小盆綱は尋常小学校の子ども達が曳いたという（上野　一九八七　二〇九―二一〇）。

（二）子どもを鬼にする

子どもを鬼（餓鬼）にするために、顔や体に煤を塗る。鬼は地獄の釜番であるという。六〇年位前までは、地区に三箇所あった共同浴場の煙突の煤を使っていた。この頃、煙突の掃除をして煤を取るのは子どもの役割だった。現在は、八女市の製材所から購入している。煤は細かくしないと体に塗った時に痛いため、ふるいにかけて小さくし、水で溶いておく。

九時頃になると子ども達が準備のため、神社に隣接する久富公民館に集まってくるが、黒か紺の水着に黒い鉢巻き、黒いソックスになる。黒い鉢巻きをしたのは令和四（二〇二二）年が初めてで、汗で煤が流れて目に入らないようにするためだという。保護者たちが溶いた煤を体に塗っていく。以前は目の周囲も煤で塗っていたが、子どもが嫌がるので塗らなくなった。煤を塗り終わった子どもから、鬼角と腰蓑をつける。六〇年前は、褌にも煤を塗って、草履を履いていたという。

写真二　盆綱綯い

昭和の初め頃は、子どものタイショウは、全身を藁で包んだような格好をしていたという（靏　一九八六　九二）。

九時四〇分から開会式が行われ行政区長や、保存会会長のあいさつ等が行われたが、徳随寺の住職も参加した。新型コロナウイルス感染症が拡大していたので、子ども達は陰性かどうかを確認して参加した。子ども達はマスクをしていないため、観客には距離を取るようお願いがあった。

三　盆綱曳き

例年は三キロメートル位歩くが、子どもに無理をさせないために、令和四（二〇二二）年は、コースを短くし、令和五（二〇二三）年は、通常のコースに戻した。昭和六一（一九八六）年の調査によれば、当時は盆綱を曳いて回るコースは決まっておらず、その年によって道を決めていたとのことであった。昔は畦道のような小径にも入り込み、村の隅々まで走り回ったという（上野　一九八七　二一一）。

新型コロナウイルス感染症が拡大する前は、参加者が六〇～七〇

人いたが、令和四（二〇二二）年は無理をして参加者を集めなかったため、半分の三四人程であった。令和五（二〇二三）年は四四人参加した。二年間行事が中止となり、最上級生として参加できなかった子どももいたため、中学生も参加した。

一〇時に子ども達が盆綱を曳いて観音堂を出発した。先頭の引綱は四人の子どもが持つ。かけ声は「ピッピ（笛の音）ワッショイ、ピッピ（笛の音）ワッショイ」だが、叫ばないように通達があった。

一〇時一〇分、天神神社で休憩をしたが、ここは雨乞いの神であるため、子ども達は社殿に上がって、足をバタバタさせて、雨が降るようにお願いした。

一〇時四〇分頃戻ってくると、公民館前の中庭に入り、円状に盆綱を置き、子ども達は中に入って、万歳三唱を行った。その後、子ども達は小学校のプールに泳ぎに行っている。盆綱等は熊野神社の北側ですぐに燃やす。

かつてはクリークや、神社の前の用水に入って煤を落としていた。文化財に指定される前は相撲場があったので相撲をとっていたが、指定されてから、相撲は行われていない。上野によれば、戦前までは盆綱を使って土俵を作っていたという（上野　一九八七　二一一）。また、一軒ずつ回って、農家は藁、それ以外は一〇～二〇円のお金をもらっていた。志をもらったら、そこは回らなければいけないと言い、上久富まで回っていた。

鬼角と腰蓑は各自家に持ち帰り、屋根の上に投げ上げていたという（鶴　一九八六　九二）。

（田中　久美子・小林　勇作）

写真三　久富観音堂

写真四　盆綱曳き（二〇一八年）

写真五　天神神社（二〇一九年）

図一　盆綱曳きコロナ時ルート

図二　盆綱曳き正規ルート

二〇　流灌頂（福岡市）

【指定等】

無し。ただし、同行事で用いられる大灯籠絵については下記の通り。

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　「大浜流灌頂大燈籠（旧名称　博多大浜流灌頂大燈籠）」九点

指定年月日　昭和三三（一九五八）年七月二六日（四点）

追加・名称変更　平成一四（二〇〇二）年四月五日（四点）

追加指定　平成一六（二〇〇四）年三月五日（一点）

【テーマ】一九「盆」

【別名】大浜流灌頂

【地域の概要】

大浜流灌頂が行われる福岡市博多区大博町は、福岡市の中心より北東に約一・五キロメートル、博多区の北西に位置する。西は福岡県道四四号線（大博通り）、北は福岡県道六〇二号線（那の津通り）に接し、那の津通りの北には福岡サンパレスやマリンメッセ福岡、博多中央ふ頭がある。東は御笠川が流れている。同行事は大博町にある一区から六区の自治組織の範囲で行われている。江戸時代は、竪町浜、浜口町浜と呼ばれていた。明治七（一八七四）年から昭和四一（一九六六）年は、大浜町一丁目から四丁目となっている。

令和四（二〇二二）年九月末現在で一〇〇六世帯、一五〇五人が暮らしている（令和四年公称町別　世帯数及び人口（日本人のみ））。(https://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/10782/1/2022machibetsu.xlsx　二〇二二年一〇月現在)

【伝承地もしくは実施場所】福岡市博多区大博町一～六区集会所

【実施時期】八月二四日から二六日

【伝承組織】

当番は大博町の町内の区分けで担っていた。平成二四（二〇一二）年度までは、大博連合（一区から五区）が二年、大博六区が一年を交互に務めていたが、令和四年より大浜流灌頂継承保存会に一本化して運営している。

伝承によるとかつて仮設の施餓鬼堂は、旧大浜町一丁目主催で行うことになっていたが、台風に吹き飛ばされるという事件が起き、翌年から他の町内の申し出により、大浜町一丁目が一年、大浜各町の連合会が二年の持ち回りで設置するようになったという。

【由来・伝承】

宝暦五（一七五五）年、暴風雨のため博多湾で溺死した人びとや家屋倒壊によって圧死した人びと、翌年の伝染病流行のために亡くなった人びとの霊を弔うために施餓鬼供養を行ったのが始まりとされる。その際、東長寺を隠居した僧侶が竪町浜に知足庵を結んで、東長寺の僧侶たちを呼んで施餓鬼供養を行ったとも、住民有志が惨状を見かねて、東長寺に供養を依頼したとも言われる（福岡市史編集委員会　二〇一二　一三七―一三八）。

【実施内容】

令和二（二〇二〇）年から三（二〇二一）年にかけては新型コロナウイルス感染症の影響で中止になっており、本件は令和元（二〇一九）年以前及び令和四（二〇二二）年の調査事績を元にしている。

一　施餓鬼堂の設営と大灯籠の設置（写真一）

八月二四日の一七時頃より施餓鬼堂を設営する。施餓鬼堂は祭りの時だけの仮設である。施餓鬼堂は、これまでは「流灌頂通り」に設置されていた。大博連合は、大博通りの東にある筋・大博町五一〇号線

とふれあい通りの西にある筋・大博町五〇六号線の間に、六区は「ふれあい通り」とその西の筋大博町五〇六号線の間の通りに、それぞれ設けられていた。令和四（二〇二二）年より旧大浜公民館の解体計画を機に、瑜伽（ゆが）稲荷神社に隣接する倉庫を大博町一～六区集会所として改修したことで、施餓鬼堂は集会所一階に設けられることになった。瑜伽稲荷神社は、『筑前国続風土記拾遺』（青柳種信（広渡正利　福岡古文書を読む会　一九九三　一七九）によると「智足庵　東長寺末寺也。庵内に大師堂瑜伽社あり」とあり、また『筑前国福岡区地誌』（三原恕平（田坂大藏校訂）一九八〇　三三五）には「智足庵址　町ノ北ニアリ眞言宗古義派東長寺庵室ナリ明治六年廃ス跡に大師堂アリ」と記されており、知足庵跡とされる地である。

また同日、竪町筋と那の津通りの交差点に建つ供養塔にも盆提灯と祭壇が設けられる。「斎藤家年中行事」『近世福岡博多史料』（秀村選三　一九八一　三六五）には、「流勧請也、浜ニ仮屋ヲ造、施俄鬼也」とあり、江戸時代の流灌頂では施餓鬼堂は浜に設けられていた。

道路使用許可時間に入る一八時頃、博多の絵師・海老崎雪渓（一八七六―一九四一）などが制作した武者絵を描いた大灯籠が四基掲げられる。ただし令和四（二〇二二）年は雨天により二四日の設置を見送った。大灯籠は、かつて町内一六箇所の辻々に建てられていたという。平成元（一九八九）年までは、大灯籠二基を大博連合が、一基を大博六区が設置し、大灯籠に使用しなかった数点の大灯籠絵は旧大浜公民館内で公開されていたが、解体計画に伴い展示スペースがなくなったことを受け、展示は行われなくなった。また、以前は木枠の内側から照明を当てていたが、令和四（二〇二二）年より若手世代への負担減のため三基は外側から照明を当てる形に変更した（写真一）。

今では大浜流灌頂の目玉ともなっている大灯籠の由来については定かではないが、大浜流灌頂継承保存会が所有する大灯籠絵に絵師・野方一得斎高清のものが含まれている。明治一二（一八七九）から三一（一八九八）年の作例が確認されることから、明治一〇から二〇年代には大灯籠が掲げられていたと考えられる。

写真一　大灯籠

また、江戸時代の地誌『筑前名所図会』（奥村玉蘭（田坂大藏・春日古文書を読む会校訂）一九八五　二一六）には、「七月廿五日流灌請の法事あり、其夜ハ此辺の家々燈明茶菓を献じ、偶人様の見せものを出して、さながら盆中の賑いに異ならす」とあり、同書が完成した文政四（一八二一）年には、人形を用いたつくり物があったことがうかがえる。明治後半には、広場に使い古した蚊帳を張り巡らせ、岩山や森などの背景をつくり、飾り山笠の人形などを据えた大掛かりなつくり物の写真が残されている。このような人形を用いたつくり物は、昭和三〇年頃までは実施されており、町内の個人宅等で公開していた。

平成に入り、かつて家々に飾られた今月今夜と書かれた「花笠灯籠」や露店のにぎわいを取り戻そうと、大浜まちづくり協議会が各団体に呼びかけ、平成四（一九九二）年に結成された浜友会（はまゆうかい）を中心に、様々な出店が並ぶようになった。

二　法要

八月二四日の一九時頃より、施餓鬼堂にて法要が始まる。法要には東長寺に保管している大日如来、弘法大師、不動明王をはじめとする仏像や仏画が仮設した祭壇に祀られるほか、施餓鬼用の祭壇「施餓鬼棚」も別途設けられ、祭壇には蓮の葉の上に生米とナスやキュウリ、サツマイモなどの季節の野菜を刻んだ御物飯が供えられる。祭壇には、大型の位牌として水難者、有縁無縁者、戦災死亡者、水子の名があり、町内の新仏や先祖の供養を含め、広く死者供養の法要となっている。

祭壇の脇には複数の盆提灯（博多提灯）が吊るされている。かつては初盆の際に親類等から贈られる大きな盆提灯を町内から持ち寄っていたが、住宅事情等の関係で盆提灯を贈る風習が風化しており、盆提灯は現在既存のものを使い回している。施餓鬼堂の外には今年初盆を迎える新仏の卒塔婆と五色の旗が建てられ、卒塔婆は五色の紐を伝って大日如来と結縁する。

法要には東長寺の住職、僧侶二名（かつては五名）のほか大浜流灌頂保存会のメンバー、初盆を迎える町内の家族が参列する（写真二）。

翌二五日は前日同様一八時頃前より施餓鬼堂の準備を行い、順次人びとがお参りに訪れる。一九時より前日同様に東長寺の僧侶が施餓鬼堂で三〇分程法要を行う。一八時（道路使用許可時間）を迎えると、大灯籠が設置される。

最終日となる二六日、一八時頃から施餓鬼堂でのお参りや大灯籠の設置が行われる。一八時半より竪町筋と那の津通りの接合地点にある供養塔（享保一八年・一九年　餓死霊魂供養塔　寛政二年造立）にて東長寺の僧侶による法要が一五分程行われ、その後施餓鬼堂で前二日同様に法要が行われる。二一時前に精霊流しのため施餓鬼堂の前に精霊船である西方丸を据え、簡易の祭壇が設けられる。祭壇の供え物（生花や菰）、紙卒塔婆などを入れる。かつては初盆を迎える家が各々に西方丸を仕立てていたが、近年は一艇を共同で使用している。二一時より東長寺の僧侶による読経と参列者の焼香を経て終了となる（写真三）。

以前は西方丸を博多湾の防波堤の先まで持って行き、沖まで運んでいた。浜では住職が読経し、参列者は一緒に手をあわせていたという。港湾の地形の変化や海に精霊船を流せなくなったことから、現在は施餓鬼堂の前で読経を行い祭具等の一切を含め東長寺の節分祭の時に燃やしている。

（河口　綾香）

写真二　法要

写真三　精霊送り

二一　流灌頂（大任町）

【テーマ】一九「盆」

【別名】精霊流し　二四日盆

【地域の概要】田川郡大任町今任原・下今任地区

江戸時代、小笠原藩の添田手永と伊田手永に属していた地域が、明治二〇（一八八七）年に七つの村が大行事村、三つの村が今任原村となった。明治二二（一八八九）年に両村が大任村となり、昭和三五（一九六〇）年に町制施行して大任町となったが、十輪院のある今任原と行事に従事する下今任地区は旧今任村に属していた。

【伝承地もしくは実施場所】

田川郡大任町大字今任原の高野山真言宗松霊山十輪院及び彦山川河岸。

江戸時代中期の創建と伝えられる高野山真言宗十輪院の行事である。本尊は江戸の大火の時に小笠原藩邸への延焼を食い止めたとされる鎮火地蔵尊である。鎮火地蔵大祭では、塔婆、灯籠（万燈）供養、精霊流しが行われる。十輪院は九州二四地蔵寺霊場会五番札所である。

【実施時期】令和四（二〇二二）年八月二四日

十輪院の本尊鎮火地蔵尊大祭に合わせて施餓鬼大法会が行われる。地蔵盆の最後の儀式が流灌頂である。地域の人々には「二四日盆」という民俗行事名で知られており、「流灌頂」は一般的ではない。それに附随して下今任地区が行ってきた講が行われる。また、例年なら一七時半からお籠りがあり、近隣の桑原地区の人々と共同で実施している。令和四年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった。かつては一六時から子ども相撲も行われていたが、区内の子供が減少したことにより、現在は休止された。町営住宅が建設され人口が増えたこともあり、現区長が復活を提案したが、怪我の防止などの運営の諸問題が解決できず実施できていない。かつては、大人の奉納相撲もあったと伝えている。例年なら、二〇時からは地蔵盆踊りが行われるのだが、それも新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止になっていた。この大祭の一環として行われる、この盆踊りが「十輪院の地蔵盆」と称され名高いものである。四〇年ほど前までは、花火が打ち上げられ、門前に多くの露店が出て賑やかで、踊り手は近隣市町村からやってきた。音頭取りや囃子方は地元が多かったが、川崎町米田地区や添田町豊川の青年団が音頭取り・囃子方を揃えてやって来ることもあった。地元の口説き手の中には仮装した者も多く、女性もいた。口説いている最中に他の者が口説を横取りして、揉めることも多かったと伝えられている。平成一三（二〇〇一）年にはひょっとこ踊りの全国大会で優勝した田川市のチームがやって来て踊りを披露した。

【伝承組織】

下今任地区には、東・西・南・北の四組があり、そこから座元二人が選ばれ、二四日盆の講及び精霊流しなどの諸行事を行う。区長が責任者を務める。お籠りや供物は、区の経費で賄い、相撲の景品や子ども達への菓子の費用は寄付を募る。下今任地区には「地蔵尊御祭礼帳」が保管されている。なお、当地域は農村地帯である。

塔婆・灯籠供養そして流灌頂は、十輪院が真言宗の儀軌に則って行う。十輪院は平素は檀家組織で運営されているが、二四日盆のような行事では、檀家と信者そして、地域の人々の協力のもとで実施される。参拝者は地域の人々だけではなく、広域からも集まっている。本堂には、芸能人であるＩＫＫＯさんの盛り花も供えられていた。

【実施内容】

一　塔婆供養・先祖代々追善供養

当日は土砂降りの雨にもかかわらず、多くの参拝者が本堂に詰めて

いる。多くが初盆を迎える家の人々である。大祭法会は、納骨堂供養に続き、二一時から読経が始まった。内陣の鎮火地蔵尊を取り囲むように、僧侶達が本尊に向かい読経をする本尊供養が行われ、続いて住職が参拝者に向かい、塔婆に記された供養者の名前を一柱ずつ読み上げ、その合間に信者による御詠歌が唱えられる。先亡精霊塔婆供養がある。その間も塔婆供養は続けられ、先祖代々追善菩提供養も続いていく。読み上げられた塔婆は本堂前に供えられる。

二　施餓鬼供養

全長二メートルの精霊船は、檀信徒が事前に作り、本堂内向かって左手に安置されている。初盆の特別灯籠供養の読経、そして塔婆供養が行われ、最後に参拝者全員が「南無大師遍照金剛」の御宝号を唱えた。

その後、精霊船の前で施餓鬼の作法が行われ、観音経・般若心経が読誦されるなか、参拝者が焼香する。

三　説教

高座に上った僧侶が、施餓鬼供養の由緒を語り、目犍連が餓鬼道に落ちた母を救い出したことに始まる法会が「施餓鬼供養」であることや、弘法大師の教えなどに関する説教があり（写真一）、本尊の鎮火地蔵菩薩のいわれ、そしてこの法会が初盆の霊、御先祖の霊、無縁の霊を供養するものであるとの話であった

写真一　説教の様子

準備中

四　流灌頂

施餓鬼流灌頂法会の読経が終ると、檀信徒によって精霊船が本堂から運びだされる（写真二）。船の帆には「弘誓丸」と記されており、紙製の万燈飾りが付き、船には供養者の塔婆と精霊への供物がたくさん載せられている。本堂の外に出ると、リヤカーに載せられてその引き手に一反木綿が結び付けられ前に伸ばされる。僧侶らの印磬（おりん）や銅羅、銅鉢が打ち鳴らされる読経に先導され、供養される霊の縁者たちは戒名の記された六角灯籠を手にして、精霊船につながる木綿の綱を皆で曳いておよそ三〇〇メートル離れた彦山川へと向かう(写真三)。激しい雨だったが、このとき時だけは雨が止んだ。檀信徒はみな仏のおかげだと納得していた。区長や座元たちは、この雨の止み間に川へ急ごうと話していた。川までの道程で信号を横断する場所などには人を配して車を誘導し、檀信徒縁者の安全を配慮していた。

僧侶らが、堤防の上に並び読経をするなか、精霊船は河岸に降りて行き、彦山川の上流に舳先を向けて安置された。そこには、反射素材のベストを着た区の消防団や役員が待機している。縁者たちは、別途持ってきた供物と手にしていた灯籠をすべて船に載せ終えると、堤防に上がり、精霊船を見下ろす。

写真二　精霊船を持ち出す

準備中

五　精霊流し

僧らの読経が続くなか、消防団長が精霊船に火を放つ。彼らは地元の消防署と連絡を取り、船を焼く許可をとっている。それにもかかわらず、この火を見た近隣住民が火事と通報することがたびたびあるという。

僧侶と檀信徒は、読経しながら勢い良く燃え上がる火を見守り、船が燃え尽きるまで、合掌して霊を送る。昔は実際に精霊船や灯籠などを川に流していたといわれる。川の水量が減った頃から、汚染防止のために焼却するようになった。燃え尽きると読経も終わり、僧侶と檀信徒は十輪院に戻る。消防団は河岸に残って最後の火の始末をする。この行事は、以前は日付が変わる頃まで行われていたが、近年では二二時半過ぎには終了するようになっている。

（福間　裕爾）

写真三　精霊流しに向かう人びと

準備中

二二　動乱蜂（どうらんばち）

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　動乱蜂

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二日

（旧指定　昭和三一（一九五六）年一月一六日）

【テーマ】三一「花火」

【別名】花火動乱蜂

【地域の概要】

久留米市（くるめし）は県の南部に広がる筑後平野のほぼ中央に位置する、筑後地方の中心都市である。東はうきは市、南は八女市（やめし）、筑後市（ちくごし）、西は筑後川を挟んで佐賀県三養基郡（みやきぐん）、北は朝倉市（あさくらし）、大刀洗町（たちあらいまち）、小郡市（おごおりし）に接する。九州一の河川筑後川が市の北境を東から西に流れ、豊穣な沖積平地を形成し、市の南側には八女市との境界をなす耳納（みのう）山地が屏風を立てたように連なり、市の中央部の高良山（こうらさん）へと至る。

高良山（標高三一二・三メートル）は、古来、水陸交通の要衝、軍事的要衝に位置し、古くより高良玉垂命を祭神とする霊山と仰がれ、様々な歴史を展開してきた。動乱蜂が行われる山川町本村（やまかわまちほんむら）は、北西山麓に位置し、ここから高良山頂には二〇分ほどで登ることができるという。江戸期は御井郡（みいぐん）阿志岐（あしき）村に属した。阿志岐村は明治九（一八七六）年、西に隣接する神代（くましろ）村と合併して山川村となった。本村の中にある東林寺は久留米藩主有馬家の祈願寺である。氏神は王子山の高良御子神社（王子宮）。動乱蜂の行われる場所は神社の上にある王子池の畔である。花火動乱蜂の際の神は、高良御子神社の境内社「王子若宮八幡宮（おうじわかみやはちまんぐう）」で、この集落の花火の元締め古川氏の神であったという。

【伝承地もしくは実施場所】

久留米市山川町本村　王子若宮八幡宮（王子山の高良御子神社境内にある古川家の神）

【実施時期】毎年九月一五日（旧暦八月一五日）

九時―子ども神輿　一五時―祭典　一九時―花火開始

【伝承組織】無形民俗文化財花火動乱蜂保存会

本村に住む五〇歳代以上の者約二〇人

（会長は経験豊富で熱心な人が選ばれる）

【由来・伝承】

慶安年間（一六四八）、有馬藩の砲術指南役初代古川安太夫元純が三井郡阿志岐村（山川村本村）の地に居を構え、余技としての花火製造を行ったことに始まると伝えられる。

『花火動乱蜂の由来』（文化財指定申請書に添付）には、次のように記されている。

動乱蜂は、旧三井郡山川村本村王子山若宮八幡宮神事として古来承継され、毎年旧八月一五日（現在新暦九月一五日）王子山頂に於て悪魔退散・五穀豊穣の祈願として打揚げ、実施されてきたもので、その源は遠く江戸時代に遡ると伝えられる。

当初は、爆薬の光と音に神秘を感じた住民の素朴な祈りとして、小規模に行われてきたものであったが、その後慶安年間（西暦一六四八年）、有馬藩砲術指南役初代古川安太夫元純が余技として花火の改良を行ってから、古川家が花火製造の家元として代々秘伝を伝え、更に天保年間（西暦一八三〇）に至り、古川辰之進が住民に広くその改良された製法、その他数多の花火の製法を教えた結果、本村住民は総てその製法を会得し、近隣に比類ない花火師の村として有名になった。

然るに第二次世界大戦勃発とともに、数百年の歴史を誇る郷土芸術としての動乱蜂は、薬研等の製造用具を金属回収により提供され、そ

の跡を断ち、花火の製造も廃れ、今日ではわずかに古老の口より漸く語り継がれるのみの状況に至った。

右記文章に続けて、古川家系図（直系のみ）、王子宮の位置図、花火打ち上げ会場見取り図、動乱蜂櫓の製法、古川家文書等について述べられている。

また別の資料では、前記由緒書きの第二次世界大戦以下の記述ではなく、次のように続けられている。

不幸にして古川新一郎氏が大正年間に花火製造中に爆発を起こし、自分は爆死、妻女は重傷、家屋は焼失して多くの文献をも灰燼となった。しかしながら、なお二、三の資料が残っていて、中に「動乱蜂」の製造工程をうかがうに足る資料として次のようなものがある。

＊初目録　自縁流砲術ヶ条術書　直行書　純美写
＊後目録　自縁流砲術ヶ条術書　直行書　純美写
＊免　状　自縁流砲術ヶ条術書　直行書　純美写
＊安政四己年九月吉日　自縁流棒篠矢砲律　古川元典作之

これらの文献中に

筒玉合わせ、玉込、玉細工、灰焼、硫黄拵え、焔硝煮、薬合せ、合薬法立等、詳細に記している。

【実施内容】

一　動乱蜂の巣の製作

櫓は日曜日を中心に作り、花火の取り付けは当日。

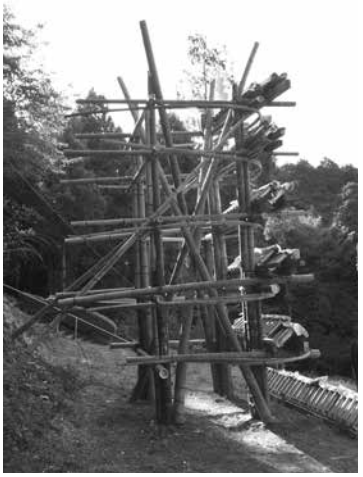
櫓を組む竹は、村中の寺町にある竹を伐り、油抜きして使用する。

孟宗竹は、「柱竹」五メートルのものを四本、「内竹」六メートルのものを四本、「四方囲み竹」三・五メートルのものを二〇本準備し、井桁に組む。蜂の巣にする竹には真竹の柔らかいもの約九～一〇本を使用、楕円形に曲げて、五段に井桁に取り付ける。楕円の長径は三メートルと二・五メートルのものがあり交互に設置する。一番上の輪は五メートルの高さの所に設置され、巣の総高は六メートルにもなる（写真一）。

六〇年ほど前までは、作った巣（櫓）を池の畔の大きな木に結びつけ、吊り下げていたが、現在は、池の畔の一段高いところに、常備の支柱を立て、固定して着火する。

かつては、花火も村で作っていたが、現在は花火は業者（みやま町高田花火）に特注でつくってもらっており、径一〇センチメートル、高さ四五センチメートルの鉄の筒に入れて本村に運んでくる。五段の段ごとに筒口を池に向けて、隙間なく取り付ける。

次に動乱蜂の作り方について先の資料に記載されているものを記す。



写真一　完成した櫓

①小蜂

［薬品材料］硫黄・硝石・消炭（松）

［資材］木臼・杵・スイノウ・薬研・小竹（内径五～六分）樫木の押棒・木槌・なた・錐・導火紙

材料を各々木臼の中にて杵をもってつき、荒粉を馬尾（マナオ）或いは絹糸にて作ったスイノウによりふるい落とし、更に薬研にかけて粉末とし硝石六十匁に対し硫黄二十匁、炭粉三〇分の割合にて、再び薬研にて摺り合わせて調合する。そのよく調合された薬品を枯れた小竹（前年秋季に伐採して保管したもの）に入れて、樫の木の押さえ棒を木槌にて打ち、長さ二寸くらいに薬品を圧縮して二～三分位の所に止紙をほどこし、その上より竹を切り、更に竹の表紙を剥ぎとり、高さの中心部に錐穴を両方へ通し、それへ導火紙（奉書紙又はキズキの和紙を硝石の水溶液にて煮込み乾燥させ煙硝を塗りつけ細く丸めてよりあげたもの）を通す。

②親蜂

［資材］枯竹（内径一寸）・さじ＝竹べら

枯竹に煙硝を長さ三寸位と五寸位の二種類を用意し、その中に薬品を「さじ」二、三杯入れては、竹筒の内径に合う樫棒を木槌でおさえながら詰め込み、止紙の外よりこの竹を切り竹筒の表皮を剥ぎ取り、三寸位の竹筒の方は中央部に小蜂と同様に導火線を通し、五寸位の竹筒は節の方に錐穴をあけて導火線を通して、発火を容易ならしめる。

③爆音

［資材］柔らかい紙（奉書のようなもの）・女竹・丸導火

猛威をふるう雷鳴は塩酸加里と鶏冠石を各々粉末として塩酸加里六、鶏冠石四の割合で調合するものであるが、混合すれば自然発火さえ起こす非常に危険な工程であり、これを混合するのには、柔らかい紙の上で極く少量づつ熱を生じないようにゆっくりと混合させる。雷鳴を詰めるときは枯らした女竹（内径四分位のもので長さ一寸五分位）に導火紙を竹の内径の大きさに堅くより、一方からこれを五分位竹筒に入れ、筒の切口より丸導火を約七分位の長さに切り、片方の口より塩酸加里を柔らかく詰めて紙で押さえ、なお紙（ヨコ一寸五分・タテ八分）で竹の尻を糊張りして、日陰干して乾かす。蜂筒につめるときは丸導火を竹筒口まで十字型に切開き、火導を容易ならしむる。

④仕掛

［資材］孟宗竹・ビンツケ・小竹の管・土又はもみがら・合せ紙

よく枯らした孟宗竹（内径〇・五尺　長さ一・五尺）の筒口より一尺～一・五尺位の下部の節の上に導火穴をあけて小竹の管を指し、周囲にビンツケを塗り（引火を防ぐ）底部に火薬を入れ、その上に蜂と雷鳴を混合して仕込み、粉末煙硝をふりかけ、約八分め位につめて紙で押さえ、その上に土又は籾殻を入れて合わせ紙（厚紙）でおおいをする。

⑤蜂巣

［資材］蜂の巣・綱火

高さ六尺余、巾四尺位にて中央部が太くなり五段の輪を作り、すべて生竹と藤かずらにて作り上げ、この中に前記の筒を五〇本ほど結びつけ、更にこの蜂の巣を高い松の木の梢にくくりつけ、綱火により点火する。

二　まつり当日

九時　お祓いをして子ども神輿が出る

神輿は村中を回る。昔は担いでいたが、現在は子どもが少なくなり、台車に乗せて曳いて回っている。神輿の進行とともに爆竹が鳴らされる。終わると池の畔に持っていき、小さな花火をつける。昼頃から境内に提灯を吊す。蜂の巣に花火を設置する。仕掛け花火などの準備をする。仕掛け花火は業者が準備する。火災防止のため山に水を撒く（前日も撒く）。

一五時　祭典　王子若宮八幡宮の祠の前

王子若宮八幡宮は高良御子神社境内の、本殿に向かって左手の一段高いところにある。玉串奉奠は参列者全員（区長・花火役員全員・山川センター長・市議会議員など）が行う。

一九時　王子池にて花火開始

仕掛け花火・打上げ花火の後、動乱蜂に点火する。点火は市長が行う（写真二）。点火した火は導火線を伝って、池の向こうの巣に到達し、点火される。蜂が一度に飛び出したように花火が炸裂する（巻頭図版）。

新型コロナウイルス感染症が拡大した三年間は、王子若宮八幡宮の境内に神輿と蜂の巣の小型のものを据えて、祭典のみ行った。令和五（二〇二三）年には全面再開し、全国版のテレビ番組で放映された。

（森弘子）

写真二　花火に点火

二三　ヒョウカリライ

【テーマ】三「鉾・旗」

【別名】

「ヒョウカリイライ」「ヒョウカリーライ」と表記されることもある。子ども達が「ヒョウカリイライ」と歌うことから来ている呼称であると思われる。漢字は「評価利大」「評価利鯛」「評価地鯛」があてられる。

【地域の概要】

福岡市西区は福岡市の北西部に位置し、西は糸島市と接している。西浦は糸島半島の突端に位置し、玄界灘に面している。『筑前国続風土記』によれば、西浦に人が住むようになったのは、対馬の宗氏の一族らが初めであったという（貝原　二〇〇一　五一六）。江戸時代には志摩郡に属し、明治二二（一八八九）年に小田・草場・宮浦・玄界島・小呂島と合併して小田村となり、明治二九（一八九六）年に北崎村と改称した。北崎は本地域の広域通称名によっている。昭和三六（一九六一）年には福岡市となった（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八八　四五九、一〇二五）。福岡市西区今宿から、車で博多湾沿いを走る福岡志摩前原線を進むと、三〇分ほどで西浦に至る。

西浦は岡と浜から成っており、岡では農業、浜では漁業が行われてきた。白木神社の祭神は五十猛命で、元は妙見山にあったが昭和三六（一九六一）年に疫神社の境内に移動した（北崎村々誌編纂委員会編　一九六一　一五六）。水害の被害があったからだという。妙見山に社があった頃、漁師は船で沖を通る時は、妙見山の前で帆を下して遥拝していたという（西南学院大学国語国文学会民俗学研究会編　一九八二　六二）。

由来にあるように、西浦は鯛の水揚げで有名であった。

『筑豊沿海志』には、「西浦鯛網地漕網の名は、世已に定評あれば、今更らにこれを弁ずるの要なし。その始めは、今を去ること、実に百八十一年前、元文二年にあり。その後寛政二年百二十八年前、鯛二艘張を始めしといふ。而して藩主黒田家に、本浦の鯛を献上したるは、これより先、安永二年百四十五年前、に始まり、爾来継続して、明治維新の際に及べり」、「大正四年十一月、辱くも今上陛下御即位の大典を挙げさせ玉ふや、大嘗祭机代物として、本浦に於て乾鯛調進の台命を蒙れり」とあり（筑豊水産組合編　一九一七　六五一、旧字体は新字体に改めた）、江戸時代から西浦の鯛網はよく知られ、献上されてきた。明治三五（一九〇二）年に、西浦漁業組合が設立された。大正時代にはタイ地漕網が有名となり、見物に来る人も多かったという（福岡県筑前海沿岸漁業振興協会　一九九八　一六〇）。また、二軒の網元を中心とする旦那衆、船頭衆の二つの組織があった（西南学院大学国語国文学会民俗学研究会編　一九八二　二六）。鯛の他にイワシの水揚げが多く、明治時代の終わり頃、イワシ揚繰網が導入されたが廃業後、船頭衆組はタイ網（地漕網、二双張網）に転換し、昭和一七（一九四二）年頃から、タイ二双吾智網へと発展した。当時は三～五トンの手漕ぎで船二隻に一六人が分乗して、一五統が操業していた。現在のような大型の二双吾智網になったのは、太平洋戦争後である。この集団を組と呼んで水揚げは組の内部で平等に分配してきた（福岡県筑前海沿岸漁業振興協会　一九九八　一五九―一六二）。

吾智網の船は二隻の船で網を引くため、本船の一号船と二号船で一組となっており、現在の乗組員は四～五人である。本船には船頭や作業をする人達が乗り、二号線は舵を握る一人が乗る。

【伝承地もしくは実施場所】福岡市西区西浦浜

白木神社、恵比寿神社で祭典が行われ、その後、恵比寿や各漁業者の家の外に祀られている稲荷を回る。元漁業者の家の稲荷を回ることもある。令和元（二〇一九）年は、白木神社、白木神社下の稲

荷、白木神社階段下の稲荷、恵比寿神社、田町波止場（石恵比寿様）、漁協の他、一八軒の家の稲荷の合計二四箇所であった。白木神社の階段から社殿までの途中にある稲荷は、元は満鷹丸等の漁業者の家で祀られていた稲荷で、祀ることが難しくなったため、神社の境内に移されたものだという。

漁業者は祭典の前に、自分の家の稲荷や、漁船にお参りする。

【実施時期】九月第一土曜日

令和元（二〇一九）年は九月七日に行われた。

かつては九月一一日に行われており、祭日が平日で学校があっても、「旗振りの方は帰って下さい」と放送があると、帰宅して祭りに参加していた。現在は土曜日に変更になったが、九月一一日以前に行わなければならないという。

【伝承組織】福岡市漁業協同組合西浦支所　西浦の漁業者

【由来・伝承】

「漁祭り」と呼ばれており、大漁祈願、航海安全、利益を大きくする、家がずっと豊かに続いていくように祈願するだけではなく、魚の供養の祭りであるという。

漁協では、ヒョウカリライには、「評価利大」という漢字を当てている。職員によれば、以前から漁協の黒板にこのように書かれていたといい、魚の評価を大きくするという意味ではないかという。一方、「評価利鯛」「評価地鯛」とも書くという。

評価利鯛については次のような話がある。「『評価利鯛』って書くとじゃなかろうかっていわれとります。・・・いわれは、江戸時代のことでっしょうな。西浦の鯛というたあ、そりゃあ有名じゃったらしいもんな。ところが、鯛があんまりとれすぎて、今でいうたら豊漁貧乏ですたいなあ。鯛の値がさがってしもうたげなもん。そこで困っとるとば聞かっしゃった殿様が鯛の値段ば決めてやらっしゃったげな。そこで殿様にお礼ばするとと、鯛がこれからもとれますごとお願いしたということじゃろうといわれとります。」（福岡市立北崎小学校百年誌編集委員会編　一九八〇　一四〇）。また、漢字は不明だが、「その昔、鯛が獲れ過ぎたときに、黒田の殿様が、『ヒョウカはソコソコに』といって相場を決められたことに由来する」（西南学院大学国語国文学会民俗学研究会編　一九八二　五九）という。以上のように、鯛が取れ過ぎたために、福岡藩主が鯛の相場を決めたことに由来するという。

さらに、八〇代後半の男性は「評価地鯛（じだい）」であるとおじいさんが言っていたと聞いたという。「ヒョウカ」は鯛の値段、評価するという意味で、「リイライ」は「地鯛」、つまり、昔は鯛網、地引網で鯛を引いていたことを表しているという。それが言いやすいように「リイライ」に変わったのだという。また、歌の最後に「ヒョコ」と言うが、それは「そこ」が「ヒョコ」に変わったと言い、すぐ「そこ」の浜で、地引網を引いていたのだと説明する。

「ヒョウカリイライ」の語は古い朝鮮語だという説もあるが（福岡県筑前海沿岸漁業振興協会　一九九八　三五〇）、これは能古島で小学校の先生をしていた高田茂廣が提示した説であり（高田一九八七）、先のように西浦で伝えられてきた話とは異なると考えている人もいる。

家が豊に続く、「豊家（ほうか）」に由来すると言う人もいる。

【実施内容】

旗と法被

旗は暖簾のような形になっているが、船名の下に四角い切れ込みがあり、二隻の船を表している。昔からこの形だったと言い、現在のものもそれを真似して作られたという。現在は、「吾智網組」と言うが、昔は、「鯛二双組」と呼んでいた。だから、鯛を二尾描いて、その下にそれぞれ船名と波の様子が描かれているのではないかという人もいる。

旗の数は合計一〇本であった。まず、吾智網の船が八組あるので、合計八本になる（ただし、本調査後一組解散したので、令和五（二〇二三）年は七組となった）。旗に書かれた船の名前は、「大和丸」「大洋丸」「第一満應丸・第二満應丸」「海鳳丸・大慶丸」「福洋丸組」「順洋丸」「弘壽丸」「大生丸」で、船の名前が二つ書かれているものは、一号船と二号船でそれぞれ異なる名前がついているものである。赤い旗と吹き流しがついた旗を持った子どもも練習で参加した。

それから「中型組」の旗が一本ある。これは一人で漁船に乗っている人一三隻でグループを作って、中型組としている。

最後に漁協の旗が一本で、漁協の旗は漁船の旗とは異なり、和紙で作られている。

旗振りをするのは、小学生～中学生までの男子で、白い法被も多かったというが、現在はほとんどの子どもが青色の法被を着用している。背中には船の名前や、「大漁」の文字、鯛が波間を跳ねる様子が描かれている。元は船頭やその親戚の子どもが務めていたが、現在は子どもが少なくなったので、北崎校区やその周辺から頼んで来てもらうことがある。

準備

令和元（二〇一九）年は九月七日に実施された。

六時頃から、竹採りをして、卸売場で魚さばきが行われた。これらは男性によって行われる。採ってきた竹は、上部の葉だけを残して後は落とし、節の部分をきれいにする。

各船頭の家に船員の妻達が集まって、男性達がさばいた魚を使って料理を作る。料理は鯛めし、きゅうりと魚を酢味噌で和えたなますである（写真一）。鯛めしは御飯と具の鯛を一緒に炊くのではなく、別々に準備してから混ぜ合わせる。鯛とささがきにしたゴボウを醤油と水かみりん（酒）で煮る。ゴボウを入れることによって魚の臭みを消し、ゴボウはアクを抜きすぎないことによって香りが活きる。鯛の具を御飯と混ぜる際には、御飯の白い部分があることでおいしくなるので、白い部分を残している。鯛めしは家によって味が違い、このように盛大な料理を作るのは、ヒョウカリライだけであるという。

鯛の内臓を取って一人一匹分、あら炊きを作ってきたが、好みもあり作らなくなった船もある。

鯛めしとなますが出来上がると、「船にあげる」ためのお重を二つと、神社に持っていくお重を準備する。お重の中には器に盛った鯛めしとなますを入れるが、空いた部分には鯛めしをたくさん詰める。残りの鯛めしは、おにぎりにする。

旗を竹に結び付けて、旗振りの子どもが法被を着て神社に行く準備をする。

祭典と家回り

家の外に祀られている稲荷をお参りして灯明をあげる。それから、お重と酒を持って船に行く。船の神様にも鯛めしやなますを供えるだけではなく、舳先の表の立つや、ロープを巻き上げる部分にも鯛めしとなますや酒をかけてあげる（写真二）。

一一時から白木神社で祭典が行われるので、漁業者は旗を持った旗振りの子どもと一緒に神社に向かう。神社に着くと、船の名前が書かれた赤い布を、賽銭箱上の鈴のところに麻の紐で縛って奉納して祈願し、参拝する。それから、境内の

写真一　鯛めしとなます（大和丸）

稲荷社や金毘羅様に船と同じように、鯛めし、なます、酒をあげてお参りする。白木神社には鯛めし、なます、鯛を二尾腹合わせにしたものや、野菜・果物が供えものとしてあがる。神事が行われ、拝殿に上がらない若い男性や子ども達は神職からお祓いを受ける。

三所神社の神職が和紙に文字を書いて神前にあげる。旗には「白木神社産土大神五十猛大神大海住大神海上安全大漁満足祈攸守給幸給（海の右側の下の部分は母）」、左側に小さく「西浦海子連」と、神社名、祭神名、祈願内容を書くことになっている（写真三）。祭典が終わると拝殿の外にそれを持って出て、漁協の竹に麻の紐で結び付ける。

その旗から大人たちが一文字ずつ、最近は船の数が少なくなったのでもう少し多い場合もあるが、ちぎって折り畳んでそれぞれの旗の上の部分に結び付ける。残りの部分は漁協の旗になる。

それから拝殿の前で、大人の指導で子ども達が歌と動作の練習をする。

「せーの　ヒョウカリイライ●
リイリ●イライ●　リイライ●　リイライ　リイリ●イライ●　ヒョコ」
（歌詞の●の部分で、竹で地面を打つ）

「ヒョコ」と言ったら、その場で時計回りに一周回る。これを三回行う。**【伝承地もしくは実施場所】**で示したように、二四箇所で行った。白木神社の三箇所で行った後、恵比寿神社に移動して祭典の後、歌った。回る順番は漁協から子ども達に知らされているので、子ども達は、波止場の石恵比寿や漁協、一八軒の家を順次回っていく（写真四）。一三時三〇分頃回り終えた。

漁協の旗とした和紙は、漁協の神棚に一年間あげておく。

各船では鯛めしやなます、その他自分たちが食べたい料理を囲んで食事をする。

新型コロナウイルス感染症拡大により休止していたが、令和五（二〇二三）年から再開した。

（田中　久美子）

写真二　船にお供えをする

写真三　漁協の旗

写真四　稲荷を回る

二四　筥崎宮神幸行事

【テーマ】三二「神幸行事」

【別名】放生会（九月一二日～一八日）の行事の一つとして行う。

【地域の概要】一「玉取祭」参照

【伝承地もしくは実施場所】筥崎宮（福岡市東区箱崎）とその氏子域

【実施時期】隔年、西暦奇数年九月一二日から一四日

【由来・伝承】

『福岡県神社誌』上巻に、以下のようにある。

昔時極めて盛大なるものにて、毎年博多の課役として新船三艘を造り、それに神輿を奉じて供奉し、衣冠の装いを輝かし、音楽の声を響かせて、海上を博多夷町の頓宮即ち今の大浜町の恵比須社に渡御の儀あり、還幸の際は一旦神輿を浜の浮殿に駐め参らせて後、本社殿に還御あらせらるることとなれり。其の御神幸の際に御供を炊ぎたる所即現今の博多御供所にして実に厳かなる神事なりしが、天正戦乱の世頓宮の炎上と共に一時廃絶の止むなきに至り、其の後元禄一四年神職の祈願によりて国主綱政より神幸料の寄進あり、今の神苑内の松林中に頓宮を造営して再興せらる。其れよりは元の如く博多の浜への神幸は止み、松原の頓宮に隔年毎の神幸式を行わるる事となりたり。即ち八月一二日夜の子の刻に三座の神輿出御あり、一三日は頓宮に御駐輿の上、一四日の夜亥の刻に還幸、而して一五日の早天には還幸式を終えて放生供養あり、流鏑馬を執り行う。又神幸なき年は流鏑馬に次いで猿楽五番、及び相撲の奉納等行われたり。斯くて神幸式は維新の後も其のまま続けられ、現今に於いても隔年にいと厳重に執行せらる。

海上渡御を行っていたが、天正年間（一五七三―九二）戦乱によって頓宮が炎上して廃絶した。そして元禄一四（一七〇一）年再興し、今の形になっている。

なお、出御、還幸の時間、順路、行列の構成順など、時代により変遷している。

【組織】

筥崎宮神職・氏子総代（箱崎・筥松・馬出・千代・吉塚・東吉塚）祭典委員から駕輿丁世話人会、供奉世話人会、祭典委員会、責任委員会で構成される。

【実施内容】

毎年九月一二日から一八日に放生会が行われる。そのうち西暦奇数年のみ御神幸を実施する。一二日にお下り、一四日にお上りとなる。

準備

七月下旬頃から各々の委員会の打合せが始まるとともに、伶人の奏楽の練習も始まる。

まず、神輿に遷す御神体の下に敷く「コモ」を用意する。四五センチメートル四方の薦三枚を作る。糟屋郡辺りで取った茅を薦編機で編む。平成時代までは飾職の有馬氏が編んでいたが、令和元（二〇一九）年より神社で用意している。

九月一日

五時半に子ども達が神社に集まり、「お触れ」を行う。鐘と太鼓を叩いて神社周辺を回り、神幸行事がある放生会であることを告げる。通称「一ノ戸」と呼ばれる海門戸、帝大前、米一丸と、阿多田、寺中の三町内が行う。一日は七時半頃まで、一二日と一四日も同様に行う。しかし、一四日だけ寺中はやらない。そして一二日・一四日は、「一ノ戸」だけ御神幸の最中の休憩中にも行っている。

早朝のお触れは、道中は「カーン」と静かに叩くが、神社に入ると、「ドンカン、ドンカン、ドンカンカン」と独特のリズムで激しく叩く。

そして、「注連おろし」を行う。神社で用意した注連を氏子の町世話人がいろいろなところにかけていく。境内の一の鳥居や筥松、境外の神社前の道路、海門戸、阿多田、小寺などの境、四台の獅子台、三台の楽・太鼓台などである。

夕方、箱崎浜にて「神輿きよめ」を行う。一七時半頃、触れ太鼓、鐘を合図に、氏子総代、駕輿丁、供奉町内の若手取締などが神社に集合する。駕輿丁がお祓い後に神輿庫から神輿を舁きだし、楼門前に一ノ戸、二ノ戸、三ノ戸と並んだ後、各々に鐘と太鼓が付き、お潮井浜に向かう。浜では、海に向かって、本殿と同じように右から一ノ戸の順に並ぶ。神輿の一ノ戸側に輿丁、祭典委員、総代、三ノ戸側に供奉町内の若手が並び、神事が行われる。お祓い後、神輿の前の戸張を上げて扉を開け、飾職が薦（御草座）の先端を海水に浸す。そして潮井テボにお潮井（砂）を採って、神輿を清める。次に一ノ戸から順に神輿の床に薦（御草座）を敷いて、扉を閉めて終わりとなる。神職は触れない。来たときと同じように宮に戻り、神輿は神輿庫に納める。約一時間のことである。

九月一二日　お下り

a 初日祭と神霊遷し

○時、「初日祭」が行われる。かつては三時開始だった。神職、伶人、飾職、御炊（みかしき）、駕輿丁、祭典委員が参列する。宮司によって、七日七夜中秋祭祭典が執行される旨の祝詞が奏上された。熟饌（かつてオゴクゴといった）を供える。

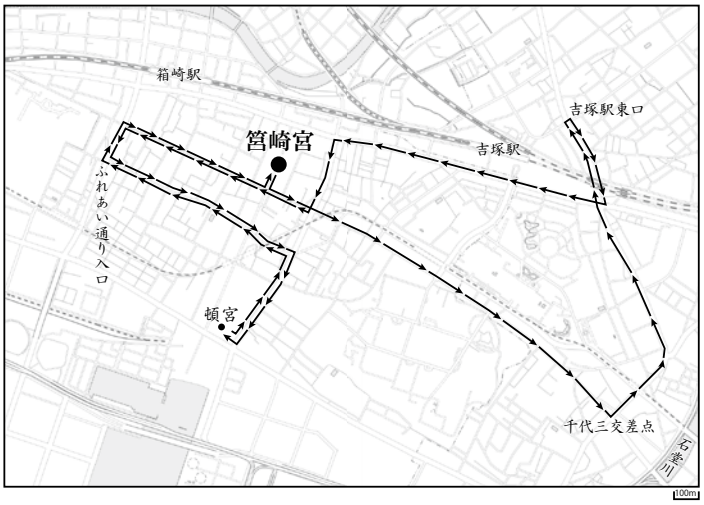
かつて御炊の鶴田家が熟饌、戸簾家が野菜盛りと役割が決まっていたが、今はなく、神社で用意する。賄舎で二升二合の御飯を炊いて神饌所に運び、曲物の台に三座分を均等に盛り付ける。杓子でつぎ分けながら上を押さえ、各々高さ一五センチメートルほどの円錐形にする。それに五本の注連藁をかける。注連藁は、縄を綯わず新藁を二本すごいて根元を結び合わせたもので、最初の三本は結び目を手前にして御飯盛りにかけ、反対側で縒って余った穂先を上に立てる。残りの二本は、前と反対側から回して三本の間にかけ、先端を向かい側で縒って穂先を立てる。最後に五本の穂先を上部でくくる。三本の藁の結び目がある方を表とし、三方に載せる。御炊は入浴して体を清めた後、白丁に烏帽子と草履姿で、白布で口を覆って臨んだ。

続いて「神霊遷し」である。斎主である宮司が「安らかに神輿に遷り給え」と祝詞を奏上し、駕輿丁が神輿庫から神輿を舁き出し、飾り職が神輿の屋根に鳳凰を付ける。消灯して真っ暗な中、神輿に神霊が遷される。一時頃にはすべて終わる。

一五時、本宮夕御食祭にて献饌される。

b 行列の行程

お下りは、一二日一八時に出発する。本宮から馬出・千代本通り通過、千代三丁目交差点を左折、千代交差点を通過、西鉄千代町バス停より左折、妙見交差点を経由して吉塚本町にて折り返す。吉塚駅前から御所内、宮小路を経て本宮前に御駐輦、そして休憩後箱崎町通過九大前、海門戸より網屋町を経て潮井参道を下り、頓宮に到着する（図一）。遠くまで廻る。行列の先導は、各町内の代表二名があたる。本宮から九大医学部正門前が馬出、そこから妙



図一　お下り・お上りルート

見交差点までは千代、そこから吉塚駅までは吉塚・東吉塚、そこから本宮までは馬出、そこから頓宮までは箱崎・筥松である。

c行列の構成

令和五（二〇二三）年のお下り行列の構成は、以下の通りである。

先導―提灯【三町】―提灯二（赤地菊花御紋高張）―先駆神職―祓司（騎馬）―清道付提灯二―清道【海門戸・帝大前・米一丸】―太鼓【海門戸】・鐘【海門戸】―錦旗（纏）【消防団】―火王・水王付提灯二―火王・水王【海門戸・帝大前・米一丸】―御旗付提灯二―八ツ旗【海門戸・帝大前・米一丸】―以下八ツ旗が七台

＜一ノ戸＞大榊【網屋】―賽銭箱二【海門戸・帝大前・米一丸】―幣帛（獅子頭）【海門戸・帝大前・米一丸】―伶人【箱崎組】―小鉾【二又瀬】―随身二―駒形二―御飾職―賽銭箱二【海門戸・米一丸】―紫指羽翳・菅指羽翳【海門戸・帝大前・米一丸】―一ノ戸神輿（小丸提灯二がつく）―絹傘―戸付神職（騎馬）―氏子総代【馬出・吉塚・東吉塚】―稚児【馬出・吉塚・東吉塚】

＜二ノ戸＞太鼓・鐘【寺中】―大榊【網屋】―幣帛（獅子頭）【小寺】―伶人【馬出上組】―小鉾【二又瀬】―随身二―駒形二―御飾職―賽銭箱二【小寺】―紫指羽翳・菅指羽翳【小寺】―二ノ戸神輿（小丸提灯二がつく）―絹傘【二又瀬】―戸付神職（騎馬）―氏子総代【千代】―稚児【千代】

＜三ノ戸＞太鼓・鐘【阿多田】―大榊【網屋】―幣帛（獅子頭）【寺中】―幣帛（獅子頭）【阿多田】―伶人【馬出下組】―小鉾【二又瀬】―随身二―駒形二―御飾職―賽銭箱二【寺中・阿多田】―紫指羽翳・菅指羽翳【寺中・阿多田】―三ノ戸神輿（小丸提灯二がつく）―絹傘【二又瀬】―戸付神職（騎馬）―宮司―後駆神職（騎馬）―氏子総代【箱崎・筥松】―稚児【箱崎・筥松】―一般供奉者

「神職」は、神馬に跨り参列する。「清道旗（せいどうき）」は、神職によって清められた道であり、神輿を先導する（写真一）。「鐘・太鼓」は、前述したように、「お触れ行事」にも打ち鳴らす。「ドンカン、ドンカン、ドンカンカン」である。

「火王・水王」は、天孫降臨のときに先導した猿田彦神に由来する。神輿行列の案内役である。「八ツ旗」は、八幡神誕生の時、八本の旗が天より舞い降りたことに由来する。筥崎宮の大祭には境内に掲げる。「大榊」は、山車に飾られている。「賽銭箱」は、二人で持ち、神輿に参礼して氏子が賽銭を投じる。投じた後は、箱を上下に揺らして礼をする。「伶人」は、雅楽を奏じる楽人。笙、龍笛、篳篥を演奏する。「随身」は、神の警衛と威儀を示す。「駒形」は馬の頭部で、神の乗り物とされる馬を象徴する。筥崎宮の神馬の白馬を表す。神具の「威儀物」には、小鉾・弓・太刀のような武器の他、絹傘・菅指羽・紫指羽もある。「神輿」は、三柱の祭神のため三基ある。一ノ戸、二ノ戸、三ノ戸と呼ぶ。家の前を通る時に、沿道の人々は神輿を拝む。「天蓋」は、行列が始まるまでの間、神輿の上を覆う。（巻頭図版・写真二）

令和元（二〇一九）年とは行列の順番を変更した。祓司は清道の

写真一　清道旗

写真二　神輿

後だったが、清道の前に変わった。お下りもお上りも大榊の前に、白幣、小榊、太刀、弓、金幣があったが、令和五（二〇二三）年には無くなった。大榊の後に、半月、幡多があったが無くなった。一ノ戸・二ノ戸の神輿の後にも白幣、小榊、太刀、弓、金幣があったが無くなった。毎回見直しが行われている。

各々の神輿に、輿丁取締二名、輿丁頭二名、随身二名、提灯持ちが一二名つく。駕輿丁奉仕は、令和五（二〇二三）年は一ノ戸を郷口町・社領、二ノ戸を上社家町・宮前町・馬場町、三ノ戸を下社家町が担当する。これは毎年移行しており、令和元（二〇一九）年には一ノ戸を下社家町、二ノ戸を郷口町・社領、三ノ戸を上社家町・宮前町・馬場町だった。なお、令和三年（二〇二一）は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止となり、令和五（二〇二三）年の担当は、令和三（二〇二一）年をそのまま担当とした。また、氏子総代の奉仕は、令和五（二〇二三）年のお下りは、一ノ戸は馬出・吉塚・東吉塚校区、二ノ戸は千代校区、三ノ戸は箱崎・筥松校区である。お上りでは移行し、一ノ戸は箱崎・筥松校区、二ノ戸は馬出・吉塚・東吉塚校区、三ノ戸は千代校区と、お下りとお上りで移行する。但しお上りの一ノ戸の供奉は、必ず箱崎・筥松校区が行い、お下りの一ノ戸を箱崎・筥松校区が務めることはない。各々の人選は、町内で決める。

そして頓宮には、「走り込み」をして入る（写真三）。頓宮に対して直角に曲がって入る。スタート地点に取締、約八〇メートル離れた角には宰領、約三〇メートル離れた頓宮前には神職が待機する。各々神具を持ったまま、力強く駆け抜けて頓宮入りをする。神輿も同様である。二二時頃、約四時間かけて行われたお下りは終わる。

写真三　走り込み

九月一四日　お上り

頓宮に神輿は二晩泊まられる。一二日は神職一名と飾職、一三日は神職一名が頓宮に詰めて、神さまをお守する。その間一三日・一四日一三時の朝御食祭、一五時の夕御食祭がある。神饌は、米、神酒、肴、果物、塩・水の五種を三座分用意する。

一四日一八時半、お上り（還幸）の神事を行い、一九時に発輦する。お下りと逆のコースをとる。お下りと同じように箱崎町の箱崎三丁目バス停を通過し、本宮に二〇時一〇分頃戻る。お上りとは違って、約一時間半ほどである。行列の先導は、箱崎・筥松の代表があたる。

本宮に戻れば、「走り込み」である。本宮に対して直角に曲がって入る。スタート地点に取締、約五〇メートル離れた角には宰領、鳥居をくぐり約七〇メートル離れた頓宮前には神職が待機する。お下り以上に激しく走り込んでいく。三基の神輿のみ、拝殿を駆け抜けて内陣に突っ込む。

神輿が楼門を通り抜けると、すぐに「神霊遷し」となる。神輿が昇殿するとともに明かりが消される。飾職によって神輿の屋根の鳳凰が外され、神輿庫へ神輿は遷される。神殿で祝詞が奏上され、すべてが終わる。二一時頃である。神事が終わると、楼門が開かれ、人々が流れ込み、参拝している。

（吉田　扶希子）

二五　志賀海神社神幸行事

【テーマ】三二「神幸行事」

【地域の概要】八「歩射祭」参照

【伝承地もしくは実施場所】志賀海神社（福岡市東区志賀島）

【実施時期】一〇月第二日曜日

【伝承組織】志賀海神社社人、氏子、八乙女

八「歩射祭」参照

特別なものとして、「宰領」が行列の全体を管理する。家で決まった役で、志賀の藤野家、宮本家、宮本家、中島家の四家の男性である。また「八軒の浦公」という「中西八家」は、神功皇后新羅の役の際、櫓を持って追従した八人の有能な漁師の家筋と伝えられる。

【由来・伝承】

旧暦九月一日、現在一〇月一日「男山祭」にて、神幸を行うか否か神意を問うところから始まる。「御神幸あらせられる」のクジが出た場合、御神幸祭を「夜渡祭」と称し、旧九月八日に行っていた。旧九月九日例大祭「国土祭」を行う。「おくんち」である。ここまでが一連の祭りである。

かつてこのクジの結果で御神幸祭の斎行を決定していたため、数年斎行が続いたり、逆に数年斎行されなかったりという状況になり、次第に支障をきたしてきた。そこで近年、二年に一度、西暦奇数の年に「御神幸祭」、偶数年に「夜渡祭」と交互に行うようにした。現在は、一〇月一日の「男山祭」、一〇月第二日曜日の「御神幸祭」・「夜渡祭」、その翌日に「国土祭」を行う。

【実施内容】

一〇月一日「男山祭」

神事の中で、「おみくじあげ（神占）」によって、今年御神幸を行うべきか、やめるべきか決定する。椎の木の御幣で三方上のクジを取っていたが、今は祭主が手でクジを取り上げ、その場で読み上げる。クジには、「御神幸あらせられる」もしくは「御神幸祭あらせられぬ」と記される。祭主から祭司に渡し、「宰領」に渡し、再度宰領から発表する。

現在は、奇数年に「御神幸祭」、偶数年に「夜渡祭」を実施するように決めているので、形式上クジを取り上げるが、結果にあったクジがあらかじめ用意されている。

拝殿での神事、今宮社の神事が終了後、行列をなして頓宮に下る。先頭は「清め」で、氏子総代が手桶に入ったお潮井を椎の木の枝葉で撒きながら進む。ついで氏子総代が祓串を持つ。ついで「男山」という社人が進む。以下神籬、神職、氏子総代、七つの町内の各自治会長と続く。宰領も全体を見ながら参列する。道中全員で、「やあ　男山　峰のとー　やおよろず　昔も　今も　なすよしも」と唱え、男山の社人が、首から掛けた拍子木を一度打ち鳴らす。適宜間をおいて、片道六回ほどこれを繰り返す。この歌から、祭りの名は付いている（写真一）。

そして頓宮で神事を行ったが、祝詞の後、神職が頓宮の四隅を奥左から奥右、入口側左、入口側右と、祓串とお潮井で清めていく。これで頓宮での神事「清め祓い」が終わる。御神幸祭・夜渡祭に先立って、頓宮を清めた。

写真一　男山祭

還幸も同様に列を成し、「やあ　男山　…」と唱え、男山の社人が首から掛けた拍子木を一度打ち鳴らしていく。神社に着くと、拝殿に神職、社人と、神社で待機していた八乙女が揃う。まず祭主が拝し、社人の「これにて男山祭をお納めいたします」との声で、すべて終了となる。

同日、一の鳥居につける竹笹二本も用意する。笹下の長さが約八メートルある。後日取り付けられる。夜渡祭の場合は二本を同じ長さにし、御神幸祭の場合は、片方だけ約一メートル高くして、周囲に御神幸を行うことを知らせている。

一〇月第二日曜日「御神幸祭」

一九時から始まる。拝殿には中心から両脇に三個ずつ雪洞（ぼんぼり）が置かれる。拝殿も四隅には、四神旗がある。本殿近くの玄武、白虎の側には、御神紋旗、五色旗もある。祭主、社人、八乙女が拝殿に並ぶ。前祓いが終了後、神職が登壇して「本殿御神幸祭」、そして今宮社に移って神事がある。

神饌は、「和稲（精米した米）」、「荒稲（籾殻付き米）」、「酒・甘酒」、「餅」、「海魚」、「川魚（例年ハヤの甘露煮、令和五（二〇二三）年はヤマメの甘露煮）・海菜（昆布とスルメ）」、「寒天」、「野菜・松茸」、「果物・栗」、「菓子」、「塩・水」の一一台（「」が三方一台分）である。頓宮でも同じである。今宮社でも内容は同じで、三方の台数が五台に変わるだけである。

続いて、また本殿に戻り、「本殿発輦祭」となり、御祭神が神輿に遷られる。神輿は三基で、「一ノ戸」「二ノ戸」「三ノ戸」とされ、綿津見三神がそれぞれ遷られる。修祓の後、本殿外陣に、正面に一ノ戸、その右に二ノ戸、左に三ノ戸と並ぶ御神輿に御神霊をお遷しする。消灯し、真っ暗な中で行われる。発輦祝詞を奏上し、納手（おさめて）という柏手を打った後出御となる。一つの御神輿を八人で担当して、拝殿前部より運び出し、奏楽とともに頓宮へ下る。なお、令和五（二〇二三）年の調査時は雨のため、太鼓が傷むことを配慮して、奏楽は出なかった。

本殿御神幸祭の頃には、行列は宰領の「よびだし」によって楼門の辺りに順に並んで出発に備えていた。宰領は行列の道具を出すほか、陣頭指揮を執る。一ノ戸は本町・新町・中町・西町、二ノ戸は弘・馬場、三の戸は勝馬が担当した。三ノ戸だけ赤色の狩衣を着けるが、これは神輿に付く社人の座に基づいている。一ノ戸には大宮司座と検校（けんぎゅう）座、二ノ戸には別当座と宜別当座、三ノ戸には禰宜座と楽座が供奉する。禰宜座だけが赤い狩衣を着けると決まっているため、三ノ戸に供奉する者は赤狩衣となる。行列の大刀や御剣などの様々な役は、地区内で決定する。御先祓、神社紋入り赤提灯、火王・水王、龍頭、神輿と行列が続く。宰領は自由に動き、全体を見て采配を振るう。行列は男山祭同様「やあ　男山…」と全員で唱えながら、子ども達の奏楽に合わせて進む（巻頭図版）。

行列の特殊な役の一つ「水夫長　櫓」は、「八軒の浦公」という「中西八家」が奉仕する。神功皇后新羅の役の際、櫓を持って追従した八人の有能な漁師の家筋と伝えられ、御神幸の行列にも櫓を持って参加する。安政四（一八五七）年に神職で国学者の宮崎大門が記した『志賀嶋所聞録』に古老伝説として、「八人乃海士爾米櫃登桝登乎賜比岐今志加大神乃神幸爾此氏人与理桝乎御輿乃前爾指上氏上奉留支乃本奈理又桝形乃画多留白旌乎此日建氏仕奉留支乃本奈理」とある。褒美として桝をもらった伝承にちなみ、枡形を家紋としている。

獅子は、二人一組で獅子頭と尾を扱い、案内人と共に町毎に各戸を廻っていく。一軒につき二頭の獅子が訪れる。青の長法被を着た子ども達は、「きゃーん」と言って玄関を開ける。家人は長生きできるとか、頭がよくなるといい、獅子の頭を触る。子ども達のために菓子が用意され、賽銭とともに渡される。廻り終わると集会所に戻り、食事の接待を受け、菓子を分配する。子ども達は、額に巻いていた神社の紋入りの鉢巻を記念に持って帰った。そして令和四（二〇二二）年はなかったが、例年であれば、御神幸・夜渡祭の行列に参加する。行列に参加した獅子には、紅白の布をねじった「じよう口」が付けられており、母に抱かれ、じよう口同様のねじり鉢巻きをつけた男乳児がこ

れをとっている。

行列の構成は以下のとおりである。（令和五（二〇二三）年）

【一ノ戸】御先祓一名、御紋章入り赤提灯二名、御先押二名、火王一名、水王一名、龍頭一名、奏楽手二名、御太刀三名、御矢袋一名、御宝物一名、御台弓二名、御潮井二名、祓串一名、水夫長　櫓八名、男山三名、八乙女御幣四名、八乙女四名、獅子、鞨鼓一名、大榊一名、御剣一名、御履一名、御幣一名、提灯持ち一名、神職、本町提灯、西町提灯、御棒先二名、丸戸名赤提灯二名、丸戸名赤提灯二名、神輿八名、大傘一名、新町提灯、中町提灯、奏楽（ささら・笛・太鼓）、太鼓持ち

【二ノ戸】御先押二名、御宝物一名、獅子、大榊一名、御剣一名、御履一名、御幣一名、提灯持ち一名、神職、馬場町提灯、御棒先二名、丸戸名赤提灯二名、神輿八名、丸戸名赤提灯二名、大傘一名、弘提灯、奏楽（ささら・笛・太鼓）、太鼓持ち

【三ノ戸】御先押二名、御宝物一名、獅子、大榊一名、御剣一名、御履一名、御幣一名、提灯持ち一名、神職、勝馬提灯、御棒先二名、丸戸名赤提灯二名、神輿八名、丸戸名赤提灯二名、大傘一名、勝馬提灯、奏楽（ささら・笛・太鼓）、太鼓持ち

同日「御神幸祭の頓宮祭」

頓宮に到着し、二一時半頃「頓宮祭」となる。頓宮にはテントが張られ、蓆が敷かれる。準備が整うとすぐに神事が始められ、祝詞奏上後、三つの舞が奉納される。日本の芸能の祖形ともいわれる古い舞である。

まず「龍の舞」である（写真二）。裃姿の一人の若い男性、これは社人ではなく、島民から選ばれた者である。頭に鹿の角をつけた龍頭を捧げ持ち、笛の音に合わせ、身体をくねらせながら舞う。まるで龍が天に昇るかのようである。実は獅子頭で、場を清める獅子舞である。獅子は龍であり、どちらも水神とされる。龍神信仰である。鹿の角に関していえば、神社に奉納の風習がある。神功皇后が対馬で鹿狩りをして、鹿の角を奉納したことに始まる。

次に八乙女が奉仕する「八乙女舞」である（写真三）。神功皇后の新羅の役の際、龍宮への水先案内人として阿曇磯良を海底より誘い出す時に舞ったという話に基づいている。太鼓・鈴・鉦を演奏しながら歌い舞う。一番神前に座る八乙女の一人が太鼓を叩き、一番後ろの二人が鉦を打ち鳴らす。それに合わせて、舞人が間に立ち、左手に扇、右手に鈴を持ち、鈴を振りながら右に三回廻るという古式の舞である。その時々で参加する八乙女の数が異なるのが現状で、舞人と鉦が各々一人の場合もあるが、増えることもある。令和五（二〇二三）年は計四人だった。

最後の「鞨鼓の舞」は、「細男舞」とも「礒良舞」ともいう。社人楽座が奉仕する。顔を白布で覆い隠し、鞨鼓を首から下げて、「舞能の岸の姫松や」と唱えながら右に旋回し、正面で鞨鼓を一度打つ。これを三回繰り返す。「舞能の舞」といい、動きは小さく、亀の甲羅の上で舞っていることを表している。現在も社人が務めている。「舞能の舞」は、志賀海神社の祭りでは度々登場する。この鞨鼓の舞は、八

写真二　龍の舞

写真三　八乙女の舞

乙女舞とともに、神功皇后伝承に基づいたもので、体中に貝や海藻が付いている姿を恥じ、顔に白い布を被せている阿曇磯良の姿という（写真四）。

玉串奉奠し頓宮発輦祭終了後、還幸祭に向けて頓宮を発輦する。本殿に到着後、直ちに本殿還幸祭となる。神饌は、「和稲・荒稲」、「酒・甘酒」、「海魚・川魚」、「野菜・松茸」、「果物・栗」、「塩・水」の五台だった。無事神さまが戻られ、すべてが終わるのは、まもなく日が変わる頃である。

写真四　鞨鼓の舞

一〇月第二日曜日「夜渡祭」

「夜渡祭」は、神輿ではなく御幣三本が下る。行列の内容も、獅子は同様だが、ほかは御神幸祭とは大きく変わり、水王・火王、龍頭、水夫長櫓もなく、御神幸祭と同様に「やあ　男山…」と唱えるが、楽もない。そして頓宮での「龍の舞」などの舞もない。頓宮祭で、祭主が警蹕をかける時に、御幣に神おろしをしている（写真五）。

写真五　夜渡祭

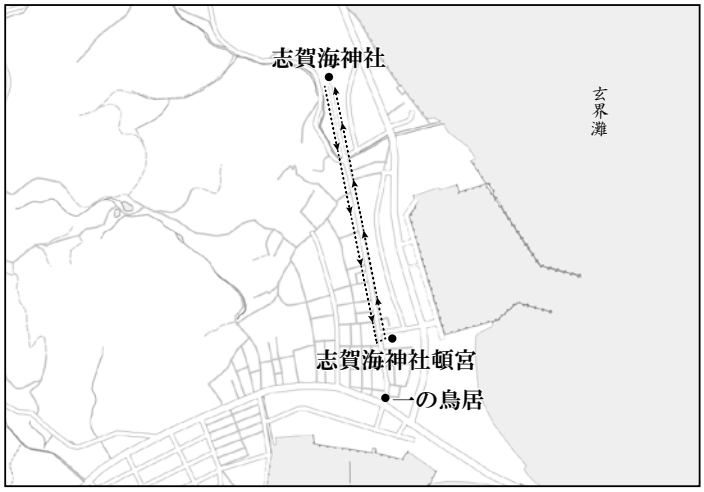
「御神幸祭」「夜渡祭」の翌日「国土祭」

大祭のため、神饌の数も多い。内容は、「和稲・荒稲」、「酒・甘酒」、「餅」、「海魚・川魚」、「海菜・寒天」、「野菜・松茸」、「果物・栗」、「菓子」、「塩・水」の九台を三神に供えるので、計二七台になる。拝殿で、八乙女の舞の奏上があった。今宮社には同内容で七台の神饌が上がり、神事を行った。

この日は神事後、一二時頃から流鏑馬が行われる。二頭の馬が出て、これに乗り走りながら的を射るものである。小笠原流で、流鏑馬保存会が奉納する。かつて流鏑馬の後相撲を行っていた頃は、相撲姿で飾りをつけた褌をしめた若者が、馬の口とりをしていた。今はない。

準備が整うと、神社の石段下で、二頭横並びで馬上のまま神職により祓いを受ける。その後、海岸のお潮井場近くまで進み参拝する。そしてもう一度神社石段下に戻り、祝詞を奏上する。

そしていよいよ流鏑馬が始まる。まず神社の下からスタート地点の一の鳥居まで、参道をゆっくり歩いて道を確認する。神社に向かって左側に三つの的がある。これを三度走って射る。今回はどれも外さずに的を射ていた。参道での流鏑馬が終わると、一本西側の裏道に入り、神社からの東西に通じる道と交差する辻で、ちょうど猿田彦の石碑があるところで的を射る。このとき馬は走ることはなく、ゆっくりと歩いて来て射る。打ち止めである。最後に神社石段下に戻り、参拝して終わりとなる。



図一　お下り・お上りルート

直会は、国土祭終了後に行われる。令和五（二〇二三）年は四年ぶりだった。献立はどのお祭りでも同じで決まっており、サワラご飯（サワラの炊き込み御飯）、お吸い物（ワカメ、赤魚）、ヌタアエ（ニンジン、ダイコン、魚）、刺身（その時期のもの）である。

（吉田　扶希子）

二六　福吉神幸祭（ふくよしじんこうさい）

【テーマ】九「村連合」

【別名】福吉くんち、白山神社秋季大祭、神事（じんじ）など。

【地域の概要】

「福吉神幸祭」と言った場合、通常は「福井地区」と「吉井地区」で行なわれる神幸祭の総称として用いられている。本項目では、この福吉神幸祭のうち「福井地区」で行なわれている福井神幸祭を中心に取り上げ、「吉井地区」およびその周辺の類似行事である「深江神幸祭」については末尾にて触れることとする。

福井神幸祭を行う地域は、旧怡土郡（いと）の福井村・佐波村（さなみ）・大入村（だいにゅう）・福井浦にあたる。『福岡県地理全誌』によれば、これらの村はいずれも福井村の内であったが、元禄四（一六九一）年に佐波村・大入村・福井浦が分かれて別村になったとある。同年は、この地が唐津藩から幕府領に代わり、土井氏が入封した年にあたっており、それを期に分村が行われたものと考えられる。なお、各村の戸数・人口は、福井村（九八戸、四六二名）、佐波村（八〇戸、三七一名）、大入村（七七戸、三二二名）、福井浦（二三戸、人口不詳）となっている（『福岡県地理全誌』）。

【伝承地】白山（はくさん）神社（糸島市二丈福井（にじょうふくい）四九〇九）

【実施時期】毎年一〇月第二日曜日

【伝承組織】福吉地区（旧怡土郡（いとぐん）の福井村・佐波村・大入村・福井浦）

【由来・伝承】

福吉神幸祭は、秋の恵みに感謝を捧げる祭りとされており、江戸時代後期から約四百年間は続くと伝えられている。

実際、近世の資料に、「毎年恒例之大祭九月十九日」「神輿ヲ松原仁神幸仕候」（『神社由緒書　福井村・同浦』（山崎竜文書））と記されていることからも、松原への神幸が近世以来行われてきたことが裏付けられる。

また、『福岡県地理全誌』の白山神社の項には、次のように記されている。

祭神伊弉諾尊伊弉冉尊菊々理姫命。祭日九月十九日。此日ハ神輿ヲ松原ニ神幸ナシ奉ル。大入・佐波・福井浦の村民供奉ヲナス事、今ニ例ナリ。古ヨリ宮座ト称シテ祭田ヲ寄附シ祭礼ヲ執行シケルカ其事今ハ絶タリ。棟札アリ。銘ニ従保延七歳辛酉至元禄八年乙亥。相当五百五十五暦ト記セリ。外ニ元亀元年午九月、御幸ノ連名書ヲ村民今ニ所蔵セリ。

この記事によれば、九月一九日の祭礼において松原までの神幸があったこと、大入・佐波・福井浦の人びとが供奉していたこと、以前は宮座によって祭礼が行われていたことなどが分かる。また、当社の棟札の銘に保延七（一一四一）年には社殿があったと記されていることや、元亀元（一五七〇）年の神幸の連名書が残っていることなども記されており、当社と神幸祭の歴史的由緒を知ることができる。

【実施内容】

以下、令和四（二〇二二）年一〇月九日に実施した大入区での現地調査を中心に、関連資料で内容を補いつつ行事の内容を説明する。また、令和五（二〇二三）年一〇月八日の吉井神幸祭、同一五日の深江神幸祭の調査により、関連行事の項を補った。

一　前夜祭（宵宮祭）

祭り前日の第二土曜日には、前夜祭がある。二〇時から福井白山宮で祭典があり、稚児舞の奉納の後、御奉遷といって神体を神輿に移す儀礼が行われる。

二　大入白山神社祭典と大名行列の出発

行事当日の八時、大入白山神社で祭典が始まる。ちょうどその頃、大名行列が公民館を出発する（写真一）。公民館を出る際には、公民館前の広場を左回りに三周回る。順番は、刀（三人）→大筒（二人）→弓矢（二名）→挟箱（二人二組）→大傘（二人一組）→立傘（二人一組）→羽熊（四名）→赤鉄砲（赤児と両親）の順である。刀・大筒・弓矢は正装した児童、挟箱から羽熊までは紺の着物に水色の帯をした児童と青年達、そして最後に着物を着た幼児と、その幼児を抱っこひもで抱えた母親、赤鉄砲を持つ父親が続く。行列が出ていくと、公民館に残った女性達が掃除や片付けを行う。

祭典が終わる八時二〇分頃、行列が大入白山神社に到着し、大名行列の一同も拝殿に入る。

写真一　公民館を出発する大名行列

三　大名行列の構成と所作

大名行列は、「エイッ　エイッ」という掛け声に合わせて足を進める。なお、履き物は本来草鞋履きであったが、かなり前から地下足袋を履くようになっている。また、挟箱は、以前は裸足で行列に参加することになっていたという。

刀・大筒・弓矢を持つ子ども達は、道具を両手で持って右肩に載せて進む。

挟箱は二人で組になり、挟箱を持つ方は挟み箱を右肩に載せ、挟箱を持たない方は両手を左右に広げ、「エイッ」の声に合わせて掌の向きを変える。その際右の掌が上であれば、左の掌は下にと、向きが逆になるようにする。

大傘は二人で組になる。大傘を持つ方は、「エイッ」の声に合わせて腰を低く沈めつつ、左足を左前方に大きく踏み出す。そして、左足のかかとの後に右足のつま先を添えるように立てる。次に右足を右前方に大きく踏み出すと、左足をその後に添える。これを繰り返して進む。また、大傘は右手で持って右肩で担ぐ。「エイッ」の声に合わせて掌の上で大傘の軸を右回り、左回りに回転させて進む。大傘を持たない方は、足の運びは持ち手と同じで、「エイッ」の掛け声に合わせて右手の甲を額の前に振り上げると、左手の甲は背中の腰の辺りまで振り下げる。これを左右交互に繰り返して進む。

立傘は二人で一組となり、その所作は大傘と同じである。

羽熊は四人一組となる。羽熊は右手で持って右肩に乗せて支える。「エイッ」の声に合わせて左足を前に出し、右足をその横に添える。手は、左手を水平に伸ばし、掌を下に向ける。次に右足を前に進めると、左足をその横に添え、左手は下に下ろす。

赤鉄砲は、初宮着物を着た〇歳の男児を、母親が抱っこひもで抱え、その脇にスーツを着て赤鉄砲と竹刀を持った父親が並んで進む。なお、赤鉄砲と竹刀は、今は神社が用意しているが、昔は家で準備していたという。また、行列に参加するのも以前は父親だけであったが、現在では両親で参加することもある。子どもが少なくなっているので、令和四（二〇二二）年度は三年ぶりの参加となった。

道中には注連を付けた榊を挿した場所があり、そこに差し掛かると、挟箱・大傘・立傘の持ち手が交代する。新しく持ち手となる方の一人が「代わるぞー」の掛け声のあと、手を二回叩いて合図をすると、持ち手を右側から追い抜いて前に進み、進行方向と逆方向を向いて、持ち手と向かい合う。大傘と立傘の持ち手は、傘を両手で逆さに持って円を描くように回す。そして後の持ち手が前の人に道具を渡すと、渡された方は進行方向に向き直り、行列を続ける。

四　大名行列が福井白山神社に集まる

八時半頃に大入白山神社を出発する（写真二）。大入西口にて、人

写真二　大入白山神社を出発する大名行列

写真三　福井白山神社

員と荷物を車に移し、九時四〇分頃までには福井白山神社に入るように調整して出発する。

なお、福井白山神社に到着する順番と時間は、最初の佐波は九時七分頃、続く大入は九時一〇分頃、福井（東・西）は九時四七分頃である。九時五七分に神輿の前で神事が開始される（写真三）。修祓・祝詞・撤饌と続き、市長の挨拶がある。

五　お下り

一〇時二〇分に「お下り」となり、神輿と行列とが福井白山神社を出発し、松原にある番所御旅所に向かう。以下に、令和四（二〇二二）年度の大入白山神社神幸祭行列（写真四）を示す。

行列の先頭には、道を清める役の人が進む。桶に入ったお汐井に榊葉をつけ、その榊葉を左右に振って、道をお汐井で清めながら進んでいく。

写真四　お下り

その後を大名行列が進む。最初が福井東である。順番は、赤鉄砲（幼児と両親）→御幣（一人）→挟箱（四人二組）→大傘（二人一組）→立傘（二人一組）→羽熊（三名）である。

その後に大入の行列が続く。順番は、刀（三人）→大筒（二人）→弓矢（二人）→挟箱（四人二組）→大傘（二人一組）→立傘（二人一組）→羽熊（四人）。

続く佐波は、挟箱（二人一組）→大傘（二人一組）→立傘（二人一組）→羽熊（三人）。

最後の福井西は、挟み箱（二人一組）→大傘（二人一組）→立傘（二人一組）→羽熊（四人）である。

続いて楽人と神輿となる。雅楽楽人の先頭は太鼓（一人）で、棒をわたして前後二人で担ぐ。続いて篳篥（一人）・笛（三人）・神輿の順に進む。神輿は台車に載せて移動する。神輿の担ぎ手は厄年の男性（八人）である。その後を稚児舞の女児（三名）、宮司・神職と続き、最後に一般の参列者が進んでいく。各地区の神社役員は「奉納」と書かれた色とりどりの旗を掲げて進む。

大入は、紺の着物に水色の飾り帯、手には手甲、足は紺色のゴム足袋を着ける。赤鉄砲一名、刀三名、大筒二名、弓二名、挟箱四名、大傘二名、立傘二名、羽熊四名であった。

福井は東西の二区に分かれており、東は、藍の着物に水色の帯で、足は脚絆に白のゴム足袋を着ける。挟み箱四名、大道具一名、立傘二名、台傘二名、大道具二名、稚児舞一名、刀一名、赤鉄砲一名であった。

西は、藍の着物に白い帯を着け、足は脚絆を巻いて白いゴム足袋を履く。挟箱二名、立傘二名、台傘二名、大道具三名、大道具一名、稚児舞二名、行事二名であった。

佐波は、藍の着物に水色の帯、脚絆と足袋に草鞋履きである。挟み箱二名、大傘二名、立傘二名、羽熊四名で、いずれも青年が務めていた。

六　御旅所祭典と海上パレード

一一時には番所御旅所に到着し、祭典がある（写真五）。最初に神職が海に向かって祓い、その後、祝詞奏上、稚児舞と続く。稚児舞は三人の小学生女児が赤扇や鈴を採り物にして、右に左に旋回する舞である。稚児舞が終わると、宮司・福井区長（総代・楽師代表も一緒）・大入区長（総代も一緒）・佐波区長（四地区の総代も一緒）、厄年代表（神輿担ぎの六名）、崇敬会代表、糸島市長、糸島警察署長、市議会議員、福ふくの里社長の順に玉串を奉納する。続いて撤饌、宮司一拝があり、一一時四〇分頃に祭典が終了となる。その後、直会がある。

写真五　御旅所での祭典

本来は直会の後に餅撒きを行うが、令和四（二〇二二）年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、餅撒きの代わりに餅配りを行った。また、例年通りであれば御旅所前の海で、大漁旗で飾られた漁船による海上パレードが行われるのだが、やはり新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった。

この間、御旅所近隣の家にフリコミをする。本来フリコミは白山神社への還御終了後に行うのであるが（後に詳述）、この辺りは神社から距離があるため、御旅所祭典に合せてフリコミを行っている。

七　お上り

一一時五〇分頃には「お上り」となり、福井白山神社に向けて出発する（写真六）。一二時二二分に神輿が到着すると（写真七）、神体を本殿に戻し、宮司が祝詞を唱える。一二時三五分に祭典が終わり、宮司挨拶があって終了となる。

写真六　お上り

祭典終了後は各区に戻る。大入区では、車に人員と荷物を積み込み、福井白山神社を出発する。大入公民館に到着すると、そこから再び行列を組んで大入白山神社へ向かい、その後、行列は公民館に戻り、一四時頃には行事終了となる。なお、この行程はその年の当番区や天候によって変更されることもある。

写真七　白山神社に還御

八　フリコミ

その後、フリコミ(写真八)が各家々を回る。フリコミの際には、挟箱・大傘・立傘などが各家を訪れ、大名行列の所作をしながら家の玄関前まで進む。そして、挟箱を先頭にほかの子どもや青年達が立ち並び、「言うぞー」の声を合図に、「エイッ　ふりこむところは大繁盛　エイッ」と全員で祝言を唱えて終わる。終わると、一同は頭を下げて「どうもー」

と挨拶をし、御祝儀やお菓子、ジュースなどを貰うと、次の家のフリコミへと向かう。フリコミの時間はおよそ三〇秒ほどである。

フリコミを頼む家は氏子の家であるが、その際には、病気平癒などを祈願する人もいる。また、座舞といって、組で頼んだ場合には組毎に炊き出しを行うこともある。

この年、大入地区では、フリコミをやりたいという子どもや若者が多かったので人員を選抜した。昔は大百姓の子どもや若者たちが優先だった。子どもたちはお菓子がもらえたり、お小遣いが稼げたりするので、こぞって参加していたという。

各家へのフリコミが終わると、祭りはすべて終了となる。

【類似行事・関連行事】

本項目冒頭にも記したとおり、糸島市の旧怡土郡には、同様の浜降りの神幸行事が多くみられる。東から順に、深江神社の深江神幸祭（一〇月第三日曜日）、浮嶽神社・吉井白山宮の吉井神幸祭（一〇月第二日曜日）、鹿家白山神社の神幸祭（一〇月第二日曜日）となる。これらの地域は、近世初期にはいずれも唐津藩に属していたが、延宝六（一六七八）年以降、幕府領・唐津藩領・中津藩領・対馬藩領などに分かれたものである。

いずれも大名行列を伴った神幸行事であり、海の御旅所へとお下りが行われることや、複数の村連合で行われる特色に共通性がみられる。

しかしその一方では、それぞれの地区の違いも認められ、各地区の人びともその差異を自覚して、自分たちの地区の特徴として意識しているようである。たとえば、本行事の特徴ともいえるフリコミの歌詞を挙げても、次のような違いが認められる。

【深江神幸祭】

○元町

せーの、いえーとこさーさっさー、とこさーさっさっさー、ふりこーむところーはー金の山、いえーい、とこさーさっさー、とこさーさっさー、ふりこーむところーはー金の山、いえーい、とこさーさっさー、ふりこーむところーはー金の山、いえーい、とこさーさっさー、とこさーさっさー、ふりこーむところーはー金の山、いえーい。

○宮小路

さんはい、いえーえい、いえーえい、いえーい、いえーい、すたこらさっさー、こりゃさのさっさ、はさみばっこもつより、かか（嫁のこと）もたせ、いえーえい、いえーえい、いえーい、いえーい、すたこらさっさー、こりゃさのさっさ、ふりこむーところーは金の山。いえーい、いえーい、いえーい、いえーい、ラスト、いえーい。

【吉井神幸祭】

○吉井上

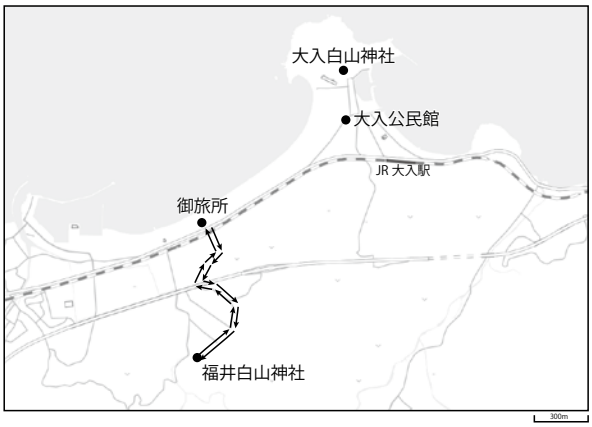
やるぞー、ヘイ、ヘイ、ヘイ、ヘイ、ヘイ、ヘイ、ラストー、ヘイ、ふりこむところ、大繁盛、ヘイ。

○吉井下

ヘイ、ヘイ、ヘイ、イクゾー、ヘイ、ふりこむところはなお繁昌、ヘイ。

（須永　敬）

写真八　フリコミの様子



図一　お下り・お上りルート

二七　八所宮神幸行事

【指定等】

種類　宗像市指定無形民俗文化財

名称　八所宮神幸行事（宵宮の神幸を中心として指定）

指定年月日　平成三〇（二〇一八）年九月二八日

【テーマ】三二「神幸行事」

【伝承地・実施場所】

宗像市吉留三一八六　八所宮境内及び御旅所の往復

【実施時期】

毎年一〇月第三土曜日に宵宮の祭典及び神幸（お下りを行う）。日曜日に日付が変わり還幸（お上りを行う）。日曜日には午前に秋季例大祭の祭典、午後に子ども相撲などの地域行事が行われる。

【調査時期】

平成二七（二〇一五）年から平成二九（二〇一七）年の調査を基に作成

【由来と伝承】

八所宮は社伝によると、神武天皇東征の折、赤馬に乗った八所明神がこの地に訪れ鎮座し、祀られたことに由来する古社である。古くからこの地域一帯に広く信仰圏を有し、室町時代の応永五（一三九八）年の年紀を有する梵鐘には「赤馬庄鎮主八所大明神」と刻む。なお、この梵鐘は豊臣秀吉が持ち去り厳島神社に寄進したため、現在は厳島神社末社の豊国神社（通称、千畳閣。廿日市市宮島町一―一）の軒下に吊されている（広島県指定文化財）。

江戸時代に編纂された『筑前国続風土記附録』巻之三三、宗像郡・中、吉留村の「八所宮」の項には、吉留、武丸、藤原、名残、徳重、石丸、赤間、陵厳寺、三郎丸、田久、遠賀郡城畑の一一箇村の産子が寛延の初（一七四八）年に秋季祭礼の神幸を再興したと記す。このように宗像地域一帯に広く産土神として信仰されていた神社である。

現在も秋季例大祭は「八所宮さまのお宮日」として地域住民に親しまれている。宵宮の神幸は、神社と御旅所（頓宮）を往来する「お下り」と「お上り」によって構成され、特に行列組が奉仕する「古式大名行列」が有名である。「お下り」は土曜日二二時に本殿前を出発し、御旅所で祭典を行い、日付が変わる〇時過ぎを待って「お上り」が始まる。神幸が終わるのは一時過ぎであり、深夜の神幸という古い祭祀形態を現在も伝えている。日曜日は午前中に秋季例大祭の祭典があり、午後には境内の相撲場で子ども相撲などの地域行事が開催される。

【実施内容（準備）】

（一）幟立て

神幸路では、各地区が担当して幟が立てられる。拝殿前から御旅所手前の神幸橋まで幟が点在し、秋空の風に吹かれる幟の風景は、祭礼期間を象徴する風物詩となっている（写真一）。幟には力強い四字の祈願が記されている。

表一　各幟の担当地区と場所・文字

担当地区・団体	幟の場所	幟の文字
吉本	神幸橋の北東	「澤被羣物」
中ノ尾	神幸橋の北西	「威輝庶民」
武本	一の鳥居のたもと両端	「於顕神霊」「既麗民康」
宮ノ尾	神の橋の東の両端	「明徳雅馨 長宮今」＊
宮ノ尾婦人会	現人神社前	赤幟。字はなし
久戸	拝殿前の石段上の両端	赤幟。字はなし

＊長は長福寺、宮は宮ノ尾、今は宮ノ尾地区の小字である今成をさす。

（二）獅子楽

獅子楽とは、太鼓と篠笛から構成され、神幸では古式大名行列に先

立ち、行列組の演舞の間に演奏される楽であり、宮ノ尾地区が担当する（写真二）。一〇月に入ると平日二〇時から練習が始まる。場所は宮ノ尾公民館であり、楽器も公民館に保管されている。祭礼当日は神社所有の太鼓を屋台に吊して使用するが、練習用の太鼓を地区で別に購入している。「獅子楽」と称するが、地区の人々は「フエフキ」と呼び慣らしている。

練習は三分ほどを繰り返し五番（二〇分弱）演奏し、秋季例大祭直前の本番を意識した際には、一〇番（三〇分ほど）演奏が続く。当日の「お下り」では、神幸橋を過ぎると傍らに寄り、続く行列組の最後尾である草履取の演舞が終わるまで演奏する。「お上り」においても同様に先に神社に到着しているが、行列組が最後に拝殿・本殿を右回りに周回しつつ演舞を始めると、草履取りが演舞を終えるまで翼廊（廻廊）付近で演奏する。行列組と不即不離の関係にある楽である。

写真一　神幸橋に立てられた幟

写真二　神幸行列の獅子楽

（三）古式大名行列

神幸行事の中でもっとも衆目を集め、歴史文化的要素を色濃く伝えているのが「古式大名行列」である。案内パンフレットや祭礼時の立て看板でも「（古式）大名行列」と称しているが、大名に当たる城主はいない。内訳は御鷹・御手振・御刀・鉄砲・長刀・半弓・大弓・目付・立槍・白羽熊・御鳥毛・山〆・毛羽熊・手笠・大笠・挟箱・草履取というように、すべて道具持ちの従者から構成される（写真三・四）。実際に演舞する当事者の間でも、「大名」を冠することはなく、「行列」あるいは「行列組」と呼び慣らしている。

神幸に伴うこのような行列は全国各地にみられ、「奴行列（やっこぎょうれつ）」あるいは単に「奴」と称し、その独特の所作を「奴振り」という。この名称の方が見た目の実際に適うのであるが、福岡県下にある奴行列一八件のうち八件で「大名行列」と称している。

行列組では神幸への奉仕であるとともに、見物人の目を強く意識して、「型」の伝承が行われている。祭礼当日は参道の両端に見物人が並んでおり、練習（「地ならし」と称する）では姿勢や所作、すなわち見た目を重視した指導がなされる。

例えば、御手振（おてふり）から大笠まで共通する所作の型として、顎を引いて目線を少し下げ、かつ目線を隠すように腕を横にして高く上げる（写真三）。二列で進行する場合は、前後左右の間隔を一定に保つために、直角に曲がる場所では内側の者は足を横に振り前進せず、外側の者は大股に進む。それも目線を下げたまま判断しなければならない。子どもたちにはこれが難しく、

写真三　神幸行列の鉄砲

念入りに指導が行われる。

目付より後は奴姿の青年が長柄の道具を担当する。道具は常に真っ直ぐに立てる必要があり、バランスを崩して落とすことは決して許されない。白羽熊・挟箱・草履取は、「エーイ、エーイ」の掛け声も担当する重要な役割である（写真四）。『福岡県神社誌』はこの掛け声について「神さびたる御神幸の楽の音に和し、静寂なる深夜、星空に澄み亘る」と記録しており、行列組が伝統としてきた特徴を端的に表現している。各地の神幸に伴う大名行列では、持ち物を投げ渡したり、戯けた所作を見せたりして、見物人を魅了する行事もみられるが、八所宮の神幸に奉仕する大名行列では、「神さび」た時空を体現する役割を担っているところに、特徴があるといえよう。

写真四　神幸行列の白羽熊

このような個人技と集団演舞（「足揃え」と称する）を指導するのは、監督と呼ばれる、自らも行列組を子どもの時分から経験し、草履取りまで務め上げた大人達である。少年・青年がそれぞれの役割を担って参加し、監督である大人とともに行列組を組織している。子ども達は年齢とともに担当する祭礼具を替え、その都度監督や年配の経験者から指導を受け、大人になっていくのである。

（四）奏楽

石井・石井原地区が担当する神輿を先導する楽であり、内訳は竜笛（横笛）・篳篥（ひちりき）・太鼓からなるいずれも雅楽器である。太鼓を担ぐのは土師上地区であるが、近年は福岡教育大学の学生を雇っているという。

以前は先代から受け継いだ竹製の雅楽器を使用していたらしいが、現在は神社で購入したプラスチック製である。当日の太鼓は神社で保管されているため、練習は手持ちのもので代用している。場所は個人宅の庭で立ったまま行う。かつては家の前の通りに篝火を焚いて、本番同様に歩きながら演奏していたそうであるが、現在は庭での音合わせを中心としている。

平成二九（二〇一七）年の調査では、仕事を終えて来た人から個別に楽譜を前に練習を始め、人数が揃えば音合わせするという、のどかな練習風景であった。雅楽器の演奏は慣れるのに三年間はかかるといわれ、初めは太鼓から入るが、その後は竜笛と篳篥のどちらに進むかを選択するという。

（五）八所宮お神楽くらぶ

クラブの歴史は長く、創設は昭和六二（一九八七）年である。前宮司夫人と友人達との尽力により、子ども達に教えたことに始まるという。平成二九（二〇一七）年の調査では、吉武小学校と城山中学校の女子生徒一五名が所属し、高校生も一人いる。秋季例大祭のほか歳旦祭（正月）、春季大祭（三月）、新嘗祭（一一月）で浦安舞を奉納する。専属の巫女ではなく、クラブとして活動している点で珍しい。小学校四年生から六年間習った中学三年の同級生四人が、この年に初めて悠久舞を奉納した。浦安舞の衣装は八領保有しているが、悠久舞の衣装は母親達の手作りによる。今後も機会があればほかの舞にも取り組んでいく予定であるという。また現在はCDであるが、雅楽器の演奏も自前でできるようになりたいと、向上心は高い。

神事に伴う奉納舞なので、巫女経験者の女性に指導を受けている。調査当日も練習（「お稽古」と称する）は昼休憩を挟んで五時間に及び、お辞儀や手の広げ方、檜扇の持ち方や回し方など、所作の一つ一つに細やかな指導がなされていた。型を中心に所作と心構えが伝授される点は、行列組の練習風景と同じである。

平成二五（二〇一三）年から巫女として「お下り」に参加している。

御神幸行列の中で唯一女性によって構成される。頓宮の祭典には参列せずそのまま解散する。なお令和二（二〇二〇）年より八所宮神前神楽舞保存会に改称し、活動の幅を広げている。

【実施内容（祭りの進行）】

（一）宵宮の祭典

土曜日一八時より、拝殿で祭典が行われる。参列するのは奉斎会、氏子総代、一般参詣者、行列組の代表である。献饌、祝詞奏上のあと、参列者が順に榊を奉納する。そして消灯され、宮司が警蹕の声を発しつつ、御神体の依代（よりしろ）を拝殿内に用意された三基の神輿に遷す（「御霊遷し」と称する）。終わると点灯して祭典終了である。

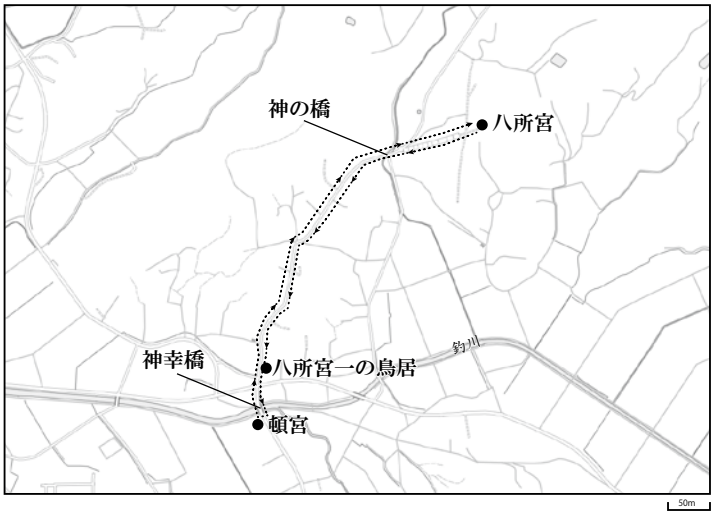
一九時から境内の舞台では、奉納演芸が幕を開け、境内は一気に賑やかになる。社務所内では祭典の参列者や参拝者への直会が振る舞われている。奉斎会の人々も次々に訪れる参拝者の対応に忙しい。境内全体が祭礼日特有の高揚感に包まれていく。露店も数軒並んでいるが、以前ほどの活況はみられないという。

（二）神幸

「お下り」は二二時より始まる。二一時三〇分過ぎに奉納演芸は終わり、静けさを取り戻した境内で、拝殿周囲は神幸行列の人々で混雑し、参道沿いには「お下り」を見学するために人々が集い始める。行列組では点呼とともに担当する祭礼具が手渡される。獅子楽は屋台を組み立て、赤い幕を垂らし、太鼓を吊す。獅子頭と三基の神輿を担当する久戸（くど）・中ノ尾・武本（たけほん）・城南ケ丘の四地区の人々も集合し、用意された白衣を纏っている。四地区は毎年持ち回りで担当しており、大神輿の年は重くて大変だという。雅楽を演奏する石井・石井原地区の服装も他の行列参加者が白衣を纏うのに対して、烏帽子を被り青緑色の表着を羽織っている。出発前に各地区の名を記した高張提灯に火が灯され、社務所前がライトアップされる。

土曜日は宵宮にあたるが、参拝者はこの日の方が多い。お参りを済ませ、奉納演芸を観覧し、最大の目当てが「お下り」である。社務所前および現人神（あらひと）社前の参道が、「お下り」を見学する二大スポットとなっている（図一）。

神幸は全体で一五〇人を超える盛大な行列である。地区ごとに役割分担があり、行列を構成している。二二時、行列組の拍子木の音が響く中、マイクで紹介された順に拝殿前の階段を下りて出発する。



図一　お下り・お上りルート

表二　平成二八（二〇一六）年の行列構成

名称	人数	内訳（担当地区・役割など）
神職	一	御幣を左右に振り御神幸路を清めながら先導する
先導	一	氏子総代会会長
高張提灯	一	武本中（提灯に記された地区名。以下同じ）
獅子楽	一九	宮ノ尾地区担当。太鼓を吊した屋台と篠笛奏者
高張提灯	一	久戸的場町
御鷹	六	これより古式大名行列。小学校低学年生が木製の鷹を捧げ持つ
高張提灯	一	久戸浦ヶ谷組
御手振り	二	編み笠を被り目線を下に、握り拳の両手を上げたまま進む
御刀	二	刀の入った筒を左方に持ち、右手で顔を隠し進む
高張提灯	一	安の倉上組
鉄砲	六	袋に入った鉄砲を左方に持つ。右手で顔を隠し進む
長刀	二	袋に入った長刀を左方に持つ。右手で顔を隠し進む
高張提灯	一	吉本中
半弓	二	大弓一挺に小弓一〇本を左方に持ち、右手で顔を隠し進む
大弓	二	大弓二挺に大弓九本を左方に持ち、右手で顔を隠し進む

氏子総代	一	
目付	一	行列組はこれより青年となり、服装が奴姿となる
高張提灯	一	吉本中
立槍	二	筒状の鞘の付いた長柄（槍）を右方に持ち進む
御鳥毛	二	クジャクの羽で作った毛鞘の長柄（槍）を右方に持ち進む
白羽熊	二	後に体を反らす所作とともに、上に長柄を突きだして白羽熊をフワッと広げてみせる。「エーイ、エーイ」の掛け声とともに演舞を披露する
毛羽熊	二	黒と茶交じった毛鞘の長柄（槍）を右片に持ち進む
白羽熊	二	
高張提灯	一	高六組中
手笠	一	長柄の先に大名の笠が取り付けられている
高張提灯	一	中ノ尾東組
大笠	一	大名に差し掛ける大笠（傘）
挟箱	一	左右交互に膝を曲げて腰を落とし、爪先立ちをくり返す。「エーイ、エーイ」の掛け声とともに演舞を披露する
挟箱	一	
草履取り	一	大名の草履を高々と持ち、鋏箱と同様のゆっくりとした所作で進む
高張提灯	一	城南ヶ丘組
監督	一〇	人は拍子木、八人は指導のため先に所定の位置へ。ここまでが行列組
獅子頭	四	この年は久戸地区担当。獅子頭は台車に固定されている
高張提灯	一	瀬戸組
唐櫃	四	高六。頓宮の祭典で供える神饌を収めている
高張提灯	一	高六組中
奏楽太鼓	三	土師上地区担当。雅楽器の釣太鼓である
奏楽	七	石井・石井原地区担当。楽器は竜笛と篳篥
高張提灯	一	石井原
氏子総代	一	
氏子総代	一	
御賽銭箱	二	安の倉地区担当。神幸中に見物人が近付きお賽銭を入れる
高張提灯	一	安の倉下組
巫女	七	八所宮お神楽クラブが巫女装束で「お下り」のみ参列
高張提灯	一	土師上組
八所宮宮司	一	かつては騎馬。現在は徒歩で頓宮に向かう
高張提灯	一	吉本中
氏子総代	一	
大神輿	一六	この年は城南ヶ丘地区の担当
大神輿	一	この年は城南ヶ丘地区の担当
高張提灯	一	城南ヶ丘組
氏子総代	一	
中神輿	一〇	この年は中ノ尾地区の担当
高張提灯	一	中ノ尾西組
氏子総代	一	
小神輿		この年は武本地区の担当
高張提灯	一	武本中
奉斎会会長	一	奉斎会が御神幸の最後尾を勤め、頓宮の祭典にも参列する
高張提灯	一	八所宮奉斎会会長
奉斎会理事	二	

以上、総勢一六三人からなる御神幸行列が、約四〇分をかけて順に出発した。

参道を下り終わると、しばらく演奏・演舞はない。一の鳥居の手前から再び釣川にかかる神幸橋まで行列組の演舞が再び始まる。「お下り」はおよそ一時間半ほどである。深夜であるが県道を通過する車もあり、信号の変わり目を見計らって進む様は、いかにも現代の風景である。

「お下り」が終わると、すぐに釣川沿いの頓宮で祭典が始まる。参列者は拝殿の祭典とほぼ同じであるが、奏楽の人々が加わり神事にあわせて雅楽を演奏する。釣川より深夜の澄んだ水を「お汐井」として、柄の長い杓を使い汲み取り、献饌とともに神前に捧げ、祝詞奏上、榊奉奠が行われる。祭典後は、その場でお下がりを参列者でいただく。

この間、神幸行列の他の人々は、それぞれの休憩場所（公民館など）で待機している。行列組は吉武地区コミュニティセンターの調理場を借りて、監督の夫人たちが饂飩（うどん）とおでんを準備している。深夜なので子ども達もお腹をすかせており、体も冷えるので、ありがたい。県道を行き交う車やコンビニエンスストアの灯りが間近にある中で、昔ながらの振る舞いが行われている。

日付が変わる〇時を過ぎてから「お上り」となる。日程が週末とされたり、「お下り」が一時間早くなったりするなど、現代の事情に合わせて変化している中で、深夜の御神幸や、日付をまたがって頓宮に滞在するなど、祭礼本来の古い形態が守られている。「お上り」は同様に頓宮から一の鳥居まで行列組の演舞が行われるが、幼年者が担当する御鷹は「お下り」のみの参加である。

境内に戻ると、社務所前から拝殿・本殿を時計回りに行列組の演舞

が再び行われる。獅子楽の演奏の下、拝殿を回り終えた行列組は、南翼廊前に待つ宮司・奉斎会会長の拍手に迎えられる。

終わった順に速やかに道具は倉庫に片付けられ、獅子楽の屋台も手早く解体され翼廊の天井に 片付けられる。行列組に対して宮司と奉斎会会長から慰労の言葉があり、全員の一本締めで行列組の奉仕は終わる。それに前後して神輿が還御する。三基とも拝殿内に安置されると奉仕は終わりであり、白衣などの装束を脱いで引き上げていく。深夜の二時になろうかという時間である。

(三) 秋季例大祭の祭典

翌日一一時から拝殿で秋季例大祭の祭典が行われる。それに先立ち、奉斎会の人々は、車で地域に設置した案内看板を回収し倉庫に収納したり、拝殿内の神輿を神輿庫に片付けたりと忙しい。

参列者と式次第は前夜の本殿祭とほぼ同じであるが、この時は祝詞奏上のあと、浦安舞が巫女二人によって奉納される。八所宮お神楽くらぶの奉仕である。祭典は三〇分ほどで終了し、最後に宮司・奉斎会会長から挨拶があり、無事に秋季例大祭が終わったことが告げられる。

(四) 奉納子ども相撲大会など

午後から境内では、奉納子ども相撲大会とお手玉大会が催される。これは子ども会の主催である。子ども会では女子の行事も必要と考え、相撲の後に奉納舞台上でお手玉大会を催している。本来は一四時からの予定であったが、平成二九年は台風接近の予報が出ていたため、時間を早めて行われた。前夜に行列組で頑張った子ども達の姿も土俵にみられた。両行事が終了後、奉納舞台上で表彰式が行われた。

表彰式の後、舞台上から、宮司・奉斎会会長・奉斎会メンバーの計三人が丸餅を撒く。舞台下ではそれまで相撲やお手玉に参加していた子ども達はもちろん、保護者や直会などの準備を担当していた夫人達も加わって、しばらく境内が賑わう。その余韻の中で秋季例大祭に伴うすべての行事が終わった。

【地域の概要】

最後に現在の神幸行列の担当について付言しておく。神幸行列は地区ごとに担当が決まっており、担当する行列の間に地区名を記した高張提灯が入るなど、氏子圏総出の祭礼であることが神幸行列に体現されている。八所宮に伝わる天和三（一六八三）年に編纂された『八所大明神御縁起』には、「その神幸の行烈誠に厳威にして、人をして畏敬感動せしむ。」と記し、これは現在の神幸にも通じる表現であり、神幸行列が歴史文化の色濃い行事であることがうかがえるが、現代の社会情勢に合わせた変化もみられる。

行列組の道具をすべて使用すると、その人数は一〇〇余人に上るという。かつてはそれほどの規模がみられたのであろう。平成二二（二〇一〇）年からの行列組参加者数を通覧すると、四〇余名（さらに監督が一〇人前後）で奉仕している。少子化の影響は致し方ないが、むしろよく維持しているともいえ、そのためには人材育成に向けた意識改革があった。

古式大名行列はそもそも猿田・平山・松丸地区の申し出により、三地区の青少年が行列組を組織して始まったという。現在は他地区の青少年も参加するようになり、他地域出身でも吉武に在住していれば、参加できるように間口が広げられている。このように枠を広げ、縁のある男子・男性に声をかけている。その結果、吉武の子ども達は、幼年期から行列組に参加し、中学生、高校生、大学生になってもそのまま行列組のメンバーとなる。

とはいえ、このようにして人数を確保すると、当然ながら諸方面で配慮を必要とする。たとえば親が経験していない家庭の子どもには、親や子の反応を見つつ声をかけている。練習の在り方も伝統的な厳しさと現代的な風潮との折り合いなど、これまでとは違う接し方が必要となる。練習風景や道具の手入れ、練習後の話し合いに立ち会ってみると、監督同士の入念な打ち合わせの下、適度な厳しさと明るい雰囲気が絶妙であった。地域の子ども達に伝えることを第一義にして、現在の行列組は運営されている。地域全体のこれからを見通し柔軟に対

応した、行列組の自発的な取り組みの成果であろう。

さらに、行列組参加者の内訳をみてみると、城南ヶ丘地区の青少年が多く、平成二七（二〇一五）年に一三人、同二八（二〇一六）・二九（二〇一七）年には一一人である。これはかつての三地区の合計人数に並ぶ数字である。新興住宅地として誘致した城南ヶ丘地区を、吉武学区に編入し、伝統的な祭礼への参加に導いた先人の先見性の賜物であろう。城南ヶ丘地区は久戸・中ノ尾・武本と並んで、獅子頭及び大中小三基の神輿を毎年交替で担当している。

【関連行事】

八所宮の神幸行列で一角を占める「古式大名行列」から伝播したもの、あるいは参考にされたものとして、牟田尻の天満宮（宗像市牟田尻一五九一）、鞍手の剣神社（鞍手郡鞍手町木月一三四九）の秋季例大祭における「大名行列」がある。ともに大名行列の奴を模した服装・道具・所作により、神幸行事に賑やかさを添えている。

（末松　剛）

二八　平等寺の宮座

【テーマ】六「頭屋・宮座」

【別名】白鬚神社の宮座

【地域の概要】

平等寺は、宗像市中央部に近い弥勒山の南西にあり、赤間宿と鐘崎湊を結ぶ街道沿いに位置している。

『福岡県地理全誌』には、平等寺村は戸数四九戸、人口二七五名とある。職分はほとんどが農業である。平等寺という村名は、かつてあった古寺の名に由来しているとされ、応安六（一三七三）年の今川了俊の書状にも村名がみえるとある。

【伝承地もしくは実施場所】宗像市平等寺五一八　白鬚神社

【実施時期】毎年一〇月第三日曜日

【伝承組織】

宮座は、五軒当場を中心に行われる。五軒当場は、平等寺地区から輪番で選ばれ、座元を務める五軒の家のことである。五軒当場のうち、「一番当場」が総支配、二～五番当場はその加勢を務める。なお、この一～五番の順番は後述する当場渡しの際の「釣りみくじ」によって決められる。

この宮座行事は、元々「神家」と呼ばれるイットウの本家筋にあたる一四軒の家（「十四祖」）が世襲で務めていた。しかし、明治三〇年頃までにはこの形が崩れ、村中で宮座を務めることになった。なお、白鬚神社の境内にはこの「十四祖」を祀る石祠が祀られている。

近年、行事を実施する当場の家の減少にともない、宮座の合理化が急速に進行している。以前は三〇戸ほどの家で受け持っていたが、高齢化等の理由から当場を抜ける家が増えたため、令和五（二〇二三）年現在では一六戸だけとなった。以前なら五軒当場が回ってくるのは六年に一回程度であったが、今では三年に一度回ってくる計算となる。行事を続けるためには簡素化が必要ということになったため、近年では祭日を毎年一〇月一七日から一〇月第三日曜日に変更したり、供物の製造を外注するなどの取り組みが始められている。

写真一　白鬚神社

【由来・伝承】

白鬚神社（写真一）の祭神については、『福岡県神社誌』に、猿田彦神、天鈿売神、須佐之男神、倉稲魂神と記される。また、本行事について次のような記載がある。

往昔より生神の別名ありて、毎年九月九日の宮座祭にはオゴクウを桝形に盛りて神前に供する慣あり、而して不思議にも刃物にて切取りしが如く真半分だけ無くなるは之れは神々の聞食し給ふ事実として茲に始て宮座祭を執行す。若し聞食されば何時迄も宮座祭を執行する事を得ず、幾回も繰返して之を供え代へ、斯して聞食されし事実を見て、始めて御座を取り行ふと云ふ事跡今尚残りて其の祭儀の厳なる事は他に比類なく御神威の顕著なる事は近郷に聞へ崇敬者多し。

枡形に盛った御供を神前に捧げると、刃物で切ったように御供が無くなり、それを神様が召し上がった証とする点は、今日の宮座行事にも引き継がれている。

【実施内容】

令和五（二〇二三）年一〇月一五日に実施した調査を基準に作成した。なお、令和四～五年にかけて行事の簡略化が推進されたため、平成二七（二〇一五）年一〇月一七日、および平成二八（二〇一六）年

一〇月二日に実施した『新修宗像市史』編さんに伴う調査や、参考文献を元に、それ以前の姿についての情報も補った。

一　神田

平等寺白鬚神社のすぐ前には神田（じんでん）があり、以前はこの田から収穫された米が宮座で奉納され食されていた。田の広さは一反五畝二六歩で、管理と耕作はその年の五軒当場が担当していた。

四月一〇日に種まきの準備をし、二〇日に種を蒔く。五月六日に田植えをする。植えるのは粳米と餅米であるが、以前は黒米と赤米であった。九月二二日にはその年と翌年の五軒当場によって稲刈りを行い、一〇月七日に行われる各班の宮座で新米が供えられ、皆で食した。そして、同月一七日の白鬚神社の宮座にも、この新米が供せられていた。

この神田の米を使わなくなってから、すでに一〇年ほど経つという。農家の人自体が減っていることも大きな理由の一つである。神田自体は、他の人に小作に入ってもらうこともあれば、放っておくこともあるという。このように、現在では神田の米を神饌に用いることはないが、平等寺地区内で収穫された新米を使って神饌を作っている

二　宮座の準備日程

宮座に先立つ一〇月一日の早朝、五軒当場による御汐井取りが行われる。御汐井は神湊（こうのみなと）や勝浦浜（かつうらはま）などから取ってくる。その際には、海水とともにワカメやヒジキなどの海藻や真砂を取って来る。以前は「七村七箇所」を回って取ってきたという。また、以前の御汐井は竹筒で六本分を取ってきたが、今では一本分のみである。御汐井は白鬚神社境内の御汐井台に納め、宮座とその準備の際に御汐井として用いられる。

一〇月四日の八時からは神社境内の掃除があり、一〇月七日前後の日曜日には、東・中・西各班の宮座（後述）が班ごとに行われる。

一〇月一〇日の八時からは公民館前の作業場で注連下ろしがある。午後には神職を招いてお祓いの神事があり、その後拝殿や鳥居、境内社などに新しい注連縄を取り付ける。鳥居にも飾り竹や注連縄が張られ、幟が二本立てられる。また五軒当場の自宅入り口には注連を張った飾り竹が立てられ、宮座の前後一週間飾られる。作業が全て終わったのち飲食がある。

以前は、宮座前日となる一六日の一三時から、公民館で餅つきが行われていた。また、宮座当日の一七日二時からは、公民館で宮座の神饌作りが行われていた。しかし、このような神饌作りも令和五（二〇二三）年から簡略化され、その多くを外注することになった。

三　各班の宮座（村座）

宮座に先立って、東・中・西で各班の宮座が行なわれる。以前はこれを「村座」と言った。行事の日時は不定であるが、現在は一〇月七日前後の日曜日に行われることが多い。班の宮座は班内の二軒の家が当番を務める。当番の役は順回りで回ってくる。

平成二八（二〇一六）年に行われた東班の宮座を紹介すると、東班は一六軒の家で構成されており、その年の当番の家は二軒である。家回りで順番が回ってくる。当日の一一時頃、各班の当番が白鬚神社に行き、神社と境内社にその年にとれた新米を供える。その後、各班の宮座が行われる会場に向かう。会場は自宅や公民館など、班によって様々である。会場では班内の人達が集まって飲食をする（写真二）。この時に、その年にとれた新米が振る舞われる。また、その際の料理は鶏のすき焼と水炊きと決まっていた。

なお、この行事が「村座」として行われていた頃は、五軒当場のうちの一軒（総支配）の家で行っていた。その際は甘酒やどじょう汁などが振る舞われていた。しかし、大人数を収容できる家が少なく

写真二　各班の宮座（東班）

なったことから、いつの頃からか各班に分かれて、それぞれで行うようになった。

なお、この行事も近年簡略化の流れを受けている。令和五（二〇二三）年の時点では、料理の定番であった鶏のすき焼を止め、仕出し弁当をとることにしたり、外食に行ったりと、それぞれ班ごとに負担軽減に努めている。しかし、実施日は一〇月の第一日曜日のまま変わっていない。

四　宮座の供物

宮座の供物は、宮座当日（一〇月一七日）の六時頃から、平等寺公民館にて、五軒当場の人びとによって調製、準備される（写真三）。以前は、〇時頃から準備をしていたが、令和五（二〇二三）年以降は、おこわを蒸すのではなく炊くことにして時間を短縮したり、掛魚を前日のうちに準備して冷蔵したり、餅などの調製を外注するといった変更を行い、神饌調整の負担を軽減することになった。

宮座の際に供えられる供物は次の通りであり、その作り方や供え方については、過去の行事を記録したノートや写真などを参考にしている。そこに記された供物は次のとおりである。

〇白鬚神社本殿の供物

【上段】桝形御供・玄米・白米・鏡餅（左から順に。以下同じ。）

【中段】舌餅・酒（土器）・酒（瓢箪）・掛魚

【下段】御汐井・果物（柿五個・栗一五個・ミカン五個）・昆布・大根

五本このうち、枡形御供・鏡餅・舌餅には栗長箸を添える。また、神社拝殿の神床に、種子俵二つと榊二本、御神酒二本を供える。

〇ミサキ様（境内社）の供物（写真四）

写真三　供物の準備

【上段】舌餅・酒・枡形御供・掛魚

【下段】御汐井・昆布・果物（柿五個・栗一五個）

〇十二社供物（ミサキ様以外の境内社への供物）

小丸餅・玄米御供・酒・掛魚

なお、これらの供物には、次のような特徴的な神饌が含まれている。「枡形御供」は、玄米のおこわを升の中に入れて固め、輪注連をかけたものである。また、末社に供える「玄米御供」は三角型に固めて輪注連を掛けたものである。「舌餅」は、楕円形に伸ばした五枚の餅を重ね、藁で結んだものであり、形状が牛の舌に似ていることから「お舌餅」と呼ばれる（写真五）。「掛魚」は二尾の鯛を藁縄で括り合わせた供物である。神社拝殿の神床に供える「種子俵」（写真六）は、神田から収穫した粳米と餅米の種籾が入った藁苞のようなものである。なお、令和五（二〇二三）年より、ミサキ様・稲守社・若八幡宮・竈神社以外の末社は掛魚ではなく、煮干しに変更された。

本殿の供物を供えるのは男性である。供物を供え終わると、当場の人びとはミサキ様・末社・本殿の順に参拝して回る。

五　神事

一〇月一七日八時四〇分から神事が開始される。参加者は神職と五軒当場である。神職は、正面に向かって拝殿内に着座し、五軒当場は拝殿に供えられた種子俵の前に横一列に並んで着座する。着座順は左から、五番当場・三番当場・一番当場・二番当場・四番当場であり、一番当場が中央になるように座る。

最初に神職より、宮座祭祭典開始の挨拶があり、祓詞が唱えられる。続いて修祓が行われ、大祓詞の後、宮司が神殿・ミサキ様・末社・参列者一同の順に回り、

写真四　ミサキ様への供物

紙垂を付けた榊を用いて祓う。続いて神職による祝詞奏上がある。祝詞の末尾では「奉る御食聞こし召せと、畏み畏み申す。」と唱えられる。続いて神職の玉串奉奠、五軒当場の玉串奉奠がある。五軒当場の奉奠順は、一番当場から順番に行われる。一五分ほどで神事は終了となり、中休みとなる。

六　枡形御供の判断

神事が終了すると、神職はミサキ様・末社の順に拝礼して回る。神殿に戻ると、神前に供えられた枡形御供の様子を何度も確認しに行く。枡形御供に大きな亀裂が入っているのを確認したら、それは神様が御供を召し上がったことの証とされる。令和五（二〇二三）年の調査時には、神事が終わって九分ほど経った時点で、枡形御供の角に線状の亀裂が入っていたため、お召し上がりになったと確認された（写真七）。

神職がお召し上がりを確認すると、御供に向かって拍手を打ち、その旨を五軒当場に伝えるとともに、拝殿の太鼓を叩いてお召し上がりを知らせる。また、当場より町内放送を行い「神社当場より連絡します。おあがりになりましたのでお参りください。」と地区の人びとにアナウンスをする。

昔は、召し上がりが中々確認できないこともあった。その際には五軒当場の行いに問題があったのではないかということで、再度精進潔斎をして御供を全て作り直したこともあったという。

写真五　お舌餅

写真六　種子俵

七　当場渡しと釣り神籤

枡形御供を神様が召し上がったことを確認した後、拝殿では当場渡しが行われる。長机の拝殿側に神職が着座し、神殿に向かって左側に現当場（上座から一番～五番の順に座る）、右側に新当場が着座する。現当場と新当場とが一列に向き合って着座する形となる。

新しく当場を担当する五人が、和紙の紙片に自分の氏名を書いて神職に渡す。神職はその紙片を掌で転がして小さく丸め、折敷の上に載せる。そして神職が榊に付けた麻紐の先をその上に垂らすと、紙片がその麻紐に吸い上げられる（写真八）。最初に吸い上げられた紙片に書いてあった人が一番当場となり、以下、二番、三番の順に決めていく。

最後に、参加者全員での直会があり、御神酒と簡単なおつまみが振る舞われる。

【類似行事・関連行事】

宮座行事は北部九州地域に広く認められるが、この宗像地域は宮座祭祀が濃厚に分布している。宗像地方の宮座については、同地出身の宗教社会学者古野清人によって、詳細な報告がまとめられている〔古野　一九四〇、同　一九七五〕。

（須永　敬）

写真七　召し上がりが確認された枡形御供（左上部に半円状の亀裂が走っている）

写真八　吊り神籤

二九　能古島白鬚神社おくんち

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　能古島白鬚神社おくんち行事

指定年月日　昭和五八（一九八三）年三月三一日

【テーマ】六「頭屋・宮座」

【地域の概要】

能古島は、博多湾の中央部に浮かぶ島である。残嶋とも記されることがあるのは、神功皇后が帰国した折に、この島に住吉の神霊を残し、異国降伏を祈ったため残嶋と名付けたという伝説に拠るものである。

島は東西に約二キロメートル、南北約三・五キロメートル、面積は三・九五平方キロメートルである。『福岡県地理全誌』には、戸数は一二五戸、人数は四八一名。本村・江口・西・北浦の四箇所に人家があると記される。また、居民は廻船に乗って四方に往来し、また農を事とし、雑業を交え、山中の芒を屋根葺き用に販売するなどと記されている。

【伝承地もしくは実施場所】福岡市西区能古七一九　白鬚神社

【実施時期】

おくんちが行われるのは毎年一〇月九日である。おくんちといえば、通常九月に行われるものであるが、白鬚神社のおくんちは、戦前に旧暦で実施されていた頃も陰暦一〇月九日に行われていた。このように一月遅れでおくんちを行っていた背景には、廻船業に比重を置いていたこの島の特殊事情があったのではないかと考えられている。なお、一一月二八日にも例祭が行われており、そちらは「おまつり」と称されている。こちらは氏子の役員だけで行われる簡単な祭典だけである。

【伝承組織】能古島白鬚神社おくんち行事保存会

【由来・伝承】

白鬚神社の祭神について、「筑前州早良県残島白鬚大神本縁起」（享保二〇（一七三五）年）には、猿田彦大神・天鈿女命・八十枉津日神・大直日神、合殿として斯香神・住吉神の名が記されている。一方、戦時中にまとめられた『福岡県神社誌』には、神功皇后、猿田彦命、三筒男命、三少童命とあり、現在では、住吉大神・神功皇后・志賀明神など、とされている。このように、近世から現代にかけて、当社祭神の変遷が認められる（佐々木　一九九三　四二二―四二三）。

行事の起源は不明であるが、本行事には、モリモンと呼ばれる特徴的な神饌が供えられるとともに、その随所に宮座儀礼が認められることから、この地方の宮座祭祀の典型例を示す事例と考えられている（佐々木　一九九三　四一五）。これまで重ねられてきた研究の結果、同行事は近世以降、大きく変化することなく、その形態をある程度保ったまま現在に至っていると考えられている（福岡市　二〇一二　一六五）。

【実施内容】

以下、令和元（二〇一九）年一〇月八、九日に実施した現地調査、及びおくんち行事保存会作成の資料を基準として、行事を報告する。また、適宜参考文献の情報を参照した。

なお、本行事は東・江ノ口・西・北浦の各町内にて、それぞれのトウ元を中心に行われていた。しかし、今日では一軒の家でトウ元の役を務めることは負担となっており、複数の家が協力してトウ元を務める方式で行われることが多くなっている。これを「字モリ」と呼んでいる。今回の調査では、いずれの町内も「字モリ」の方式で、それぞれの集会所に集まってモリモンの準備を行っていた。

一　注連ない

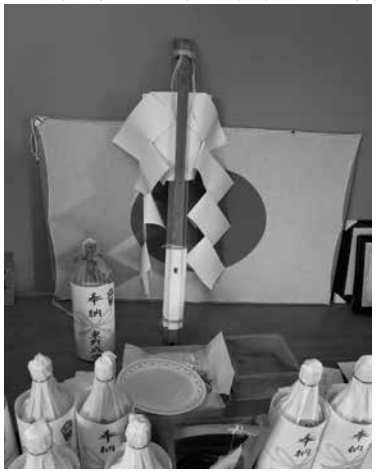
一〇月一日の九時頃から、東・江ノ口・西・北浦の各総代と世話役が、白鬚神社拝殿に集まる。仕事始めの昆布とスルメで御神酒を頂いてから、注連をなう。

神社用としては、鳥居の大注連、拝殿前の注連、拝殿の内回し用注連、末社用の小注連一一本を作り、これらはその場で掛ける。一方、トウ元用として、床の間用・門注連、オキョウ用を各地区分、各一本ずつ作る。これらは各トウの家に持ち帰る。一三時頃には各字のトウ元から酒・肴が運ばれて慰労する。

二　注連卸し

一〇月四日早朝に注連卸しをする。トウ元の玄関先には、オシオイ砂を盛り、そこに竹を一本建てて注連を掛けた「門注連」を建てる（写真一）。また、総代は神社に行って御幣を受け取る。この際には大きな声で「貰いに来ました」と叫ぶ。大声を出すのは白鬚様の耳が遠いからだという。御幣を受け取ると、トウ元の家の床の間に飾る（写真二）。そして、宿を訪れた神職により注連卸しの祭典が行われる。夕方になると子ども達が「注連参らっしゃれよ」と触れて周ると、字の各戸からトウ元の家に一人（男性）が参拝に来る。宿では、御神酒となます、煮染め、がめ煮などの簡単な振る舞いがある。一九時頃には次のトウ元を決める話合いがもたれる。

写真一　門注連（北浦）



写真二　トウ元の床の間に飾られた御幣（東）

三　舟作り・竹串作り

江ノ口では注連卸しの日に、東と西は八日の朝に舟を作っていたが、現在作っているのは東のみである。北浦は元々舟は作らない。また、字モリの場合には日曜日に作業をすることもある。

舟作りはトウ元の家の庭先で行われるが、現在では字モリで行われることが多いため、令和元（二〇一九）年の東の舟作りは、福岡市立能古老人いこいの家で行われた。五〇本ほどの篠竹をロープで編んでつなぎ、三箇所をそれぞれ二本の竹で挟んでロープで固定する。舟の先にあたる部分には笹葉を残しておき、藤蔓で巻いて束ね、舟の水押のように反らせて固定する（写真三）。長さは約八・五メートル、幅は約一メートル。舟の御祓いやモリモンの容器洗いなどもこの時に行う。

四　ヨド（宮座の前日）

一〇月八日、神饌の調理をする。このことを「キリモリ」と言う。始めるにあたって、まず榊葉に浸したお汐井（海水）を座敷や作業場に振って、清める。一〇時頃、オキョウ水（御供水）を汲みに行く。東と江ノ口は能古小学校裏山に湧くゴリン水（五輪水・五厘水）を、西と北浦は田んぼのかしらの水（それぞれの字の田に注ぐ最上流の水口）を汲む。このオキョウ水を使って粳の新米を炊き、御供を作る。東では、宿の庭先に設けた竈で御供を炊く。御供を炊くのは両親健在の男性である。この御供が炊き上がるまでの間に、集会所内でモリモンを作る。

キリモリで準備するのは、竹の串七〇〇本、柿二〇〇個、栗一三キログラム、蜜柑二〇〇個、ナマノクサケ（塩押

写真三　舟（東）

しした小鯛に御幣を巻いたもの）数尾などである。

一五時頃からキリモリが始まる。集会所の中にビニールシートを敷き、その上で作業を行う。

モリモンは、竹を削った串（写真四）に栗・柿・蜜柑を挿し、それをホテに差し込んで、半円状に隙間無く盛り付けていく。竹串を刺すホテは、植物の茎を束ねて円筒形に切りそろえたものである。各町内で作り方が異なり、東は水芋の茎を束ねて茅で覆ったもの、江ノ口はサツマイモの蔓を茅で覆ったもの（写真五）、西は水芋の茎だけ束ねたもの、北浦は干した水芋の茎とサツマイモの蔓を束ねたものを使う。また、東・江ノ口・西では、モリモンの容器の底にはナマノクサケを入れる(写真六)。東・江ノ口は一尾、西は二尾入れる。北浦は入れない。

本社用の大モリモンは、柿・栗・蜜柑を持った台をそれぞれ一つずつ作る（計三台）。末社用のモリモンは柿・栗・蜜柑を取り混ぜた小さな物を作る。末社用は各字で作る数が異なっており、東は七台、江ノ口は四台、西は四台、北浦は三台作る。果実が刺さった竹串を、容器に入ったホテに下の方から順番に刺していく。完成が近づくと、たき板を使って、隙間なくきれいな半円形になるよう形を整えていく(写真七)。

写真四　竹串作り（東）

写真五　ホテ作り（江ノ口）

モリモン作りが終わると、部屋に敷いていたビニールシートを剥がして、薦を敷き、その上でオキョウ苞作りが行われる（写真八）。これに関われるのは、二親健在な者のみである。オゴクを運ぶ者（一人）、ユリに移すもの（一人）、ユリでこねる者（一人）、苞に包む者（二人）の四人が一組となって作業をする。オキョウ苞を作る間は、口に半紙を挟んで無言で作る。作り方は各字で少し違いがあり、東・江ノ口はユリの中にオゴクをいれてこねるのに対し、西は手で握って作る。また、北浦は木臼に入れて棒杵で搗いて作る。そして、苞の底にナラの葉・カシワの葉・土器など地区ごとに決められたものを敷いて少量の飯を盛り、その上に円錐形に形を整えた御供を乗せる。御供を苞で包むように覆い、穂先を束ねると、藁束（ムスデ）を下から順に巻き上げていく。その際東では、二人が向かい合い、藁束を交互に重ねながら巻き上げていく。穂先近くまで巻くと、藁束を縛って固定する。これも本社分と末社分とを作る。

全ての供物が整うとキリモリは終わる（写真九）。夕方になって、子ども達が「キリモリ、参らっしゃれよ」と町内を触れて回る（写真一〇）と、人びとは集会所に集まり、慰労の宴が開かれる。

写真六　モリモンの容器とナマノクサケ（西）

写真七　たたき板を使ってモリモンを整形する

この日の夜、オゴクを炊いた釜にお湯を注いで、オゴクの残りに麹を加え、オロヘイという、一夜限りの甘酒を仕込む。

五　宮座当日

一〇月九日の一〇時の少し前、トウ元家の床の間の前に、御幣持ちの子供とその父親（子供の介添として母親が座の横につくこともある）、保存会の会長（一名）と世話人（二名）が、向かい合って座につき、鯛・鱠・汁物を頂き盃事をする。これをミタテ、あるいはミタテの膳という（写真一一）。ミタテは一〇分ほどで終了する。

御幣持ちは、三～五歳くらいの男児が選ばれる。元はトウの跡継ぎが適任とされていた。家に該当する子どもがいない場合には、近所や親戚の子供を頼んで勤めてもらった。御幣持ちは、袴に刀を腰に差した装束で、前頭部には金（銀）紙でつくった三日月型の紙を貼る。本来は、前頭部を三日月形に残して、残った髪は剃り上げていたのだが、それが略されて現行のように紙型を用いるようになっている。

ミタテが終わると、モリモンを家の外に出し、舟に乗せる。一〇時二五分、行列がトウ元の家を出発（写真一二）し、御幣持ちと神饌を白鬚神社の鳥居前まで送る。三〇分に白鬚神社前に到着する（写真一三）。

写真八　オキョウ苞を作る（東）

写真九　北浦のモリモン

一〇時四五分頃から、東（写真一四）・江ノ口・西・北浦（巻頭図版）の順に参道入りし、神饌を神社に運び入れる。鳥居をくぐる前に、世話人が榊に浸したお汐井や砂のお汐井を一人一人に振りかけて清める。その際につかった榊や柄杓は、拝殿脇にある汐井台の上に備える。また、参道を進む際、モリモンは左肩にかついで運ぶ。各字の拝殿内の並び順は、東が奥右、江ノ口が奥左、北浦が手前右、西が手前左である。

写真一〇　触れ周りの子供たち（北浦）

六　祭典

一一時に神事が始まる。神職は姪浜住吉神社から招いている。神職・信徒総代・御幣持ちとその父親は渡殿に着座し、その他は拝殿に座る。

先ず始めに修祓を行い、開扉・献饌と続く。献饌は、神酒・洗米・塩・野菜・果物を供え、続いて一の膳（三方に栗・柿・蜜柑を載せ、その上に柏の葉を敷いて洗米・掛鯛・柳箸を供えたもの）、各字のオキョウ・モリモン・オロヘイ、神殿両脇の矢大臣（矢五郎様）に神饌の順に供える。献饌の際には口に和紙を挟み、神饌に息が掛らないようにする。また、これと併行して末社への献饌も行われる（写真一五）。

神職による祝詞奏上の後、御幣返還と穀霊渡しが同時に行われる。御幣返還とは、本殿の神職に御幣持ちが御幣を返す儀式で、穀霊渡しでは、新穀を包んだおひねりが神職から御幣持ちに授けられる。この新穀は、その日に炊く御飯に混ぜて食される。その後玉串奉奠があり、撤饌・閉扉となり神事が終了する。

七　直会

祭典が終わると直会がある。総代とトウは拝殿の中で直会をし、境

内では字ごとに幕を張り、集まって飲食をする。また、撤饌を戸数分の袋に分けて、各家に持ち帰る。東は六二軒だから六〇袋に分ける。江ノ口は二八袋作る。西は六一、北浦は三〇袋弱。

八　トウ渡し

翌年のトウ元が決まっている場合には、おくんちの翌日にトウ渡しが行われる。今年のトウと世話役が、来年のトウ元を訪れ、祭りの道具等を引き継ぐ。御幣持ちも同席する。新旧のトウが向かい合って口上を述べ、神酒を酌み交わし、簡単な直会をする。

写真一一　ミタテ（東）左側中央の子供が御幣持

写真一二　集会所を出発する御幣持ちと父親、世話人（東）

写真一三　舟に載せられた供物（東）

写真一四　境内入り

写真一五　境内社へのモリモン

【類似行事・関連行事】

北部九州に広く見られる宮座行事の一環として位置付けられるとともに、オキョウ苞やモリモンといった特殊神饌が伝わるなど、近世以来の祭祀の姿を保持している。福岡市域には、鳥飼八幡宮や三宅若八幡神社などに、これに類似した特殊神饌の事例がみられることから、それぞれの関係性が指摘されている（佐々木一九九三　四四二）。

（須永　敬）

三〇　薦替え

【テーマ】六「頭屋・宮座」

【別名】岩屋神社の薦替え

【地域の概要】

東峰村は、平成一七（二〇〇五）年三月二八日に小石原村と宝珠山村が合併して発足した自治体で、福岡県朝倉郡に属している。福岡県中央部の東端に位置し、大分県日田市と隣接している。総面積五一・九七平方キロメートルのうち山林原野が約八六パーセントを占め、南北に延びる。

岩屋神社周辺の東峰村大字宝珠山は英彦山火山山地の西部に位置している。英彦山火山山地は支脈を西に延ばし、釈迦ヶ岳、斫石峠、大日ヶ岳を経て筑前国と豊前国の境を小石原まで伸びている。また、支脈の一つは大日ヶ岳から南に延び、その中の標高三三六メートル地点に岩屋神社が建立されている。岩屋神社一帯は火山活動と風化浸食によってできた安山岩質集塊岩の林立した奇岩群が形成する山地である。昭和二五（一九五〇）年には耶馬日田英彦山国定公園に、昭和三五（一九六〇）年には宝珠岩屋として権現岩・熊野岩などが福岡県天然記念物に指定された。

【伝承地もしくは実施場所】

福岡県東峰村大字宝珠山四一四一番地ほか　岩屋神社

【実施時期】閏年の一〇月一九日（旧九月一九日）

【伝承組織】

薦替えは岩屋神社の氏子である竹地区・岩屋地区・栗松地区によって伝承されている。行事を執り行う氏子は、全体責任者の総代会長が一名おり、三地区から総代が一名ずつ選出され、その下に同じく三地区から選出された神社委員一三～一四名からなる。

【由来・伝承】

岩屋神社の創建は継体天皇二六（五三二）年に善正上人が開基したと言われる。『筑前州上座郡寶珠山邑岩屋神社來歴畧記』によると欽明天皇八（五四八）年のある日、突然、光り輝くものが天から岩屋の岩上に降ってきた。社僧達が登ってみると、岩屋の絶頂の岩上に光明に輝くものがあり、それを宝珠石と名付け岩屋神社の御神体として祀り神殿を造ったとある。大化四（六四八）年閏九月一九日には、宝珠山の二人の老農に託宣があり、宝珠石を薦で包んで祀ったとされる。これ以降は閏年の九月一九日には、夜中に目隠しをし、口に榊の葉をくわえて手探りで数枚の薦を残して薦を取り替えるため、誰も宝珠石を見たものはいない。薦替えのときにものを言うと口がきけなくなり、宝珠石を直接見ると目が潰れると言われている。

【実施内容】

準備

令和二（二〇二〇）年九月一五日、薦を編むためのカヤの刈り取りを行う。以前は自生しているカヤを使用していたが、年々自生のカヤが減少しているため現在は畑を借りてカヤを栽培している。また以前は根元から刈り取るために鎌を使って手刈りしていたが、現在は草刈り機を使用して作業を行っている。カヤ場としている畑は管理のために薦替えが無い年も刈り取りを行っている。

写真一　カヤの影干し

刈り取ったカヤはその場で仮選別を行う。仮選別されたカヤは肩に担げる程度の束にまとめられる。令和二（二〇二〇）年の薦替えで準備されたカヤは三〇束程であった。

刈り取ったカヤを竹地区にある牛舎跡地（地元の人は「ダンチ」と呼ぶ）に運び込み、改めて選別を行う。選別では色が悪いもの、成長が悪く短いもの等を選り分け、根元の芯にあるゴミを取り除いていく。選別が終わると牛舎内ではぜ掛けをして日陰干しにする（写真一）。直射日光や雨にあたるとカヤの色が悪くなってしまうためである。選別作業中もカヤを積み重ねたままにしておくと蒸れて熱を持ち、色が変わってしまうため作業を中断する際は広げた状態にする。きちんと干せると綺麗な緑色になる。

令和二（二〇二〇）年一〇月一一日八時、総代・神社委員合わせて一四名が岩屋神社境内に集まり、薦編みと注連縄作りに分かれて作業を行う。薦編みは専用の編み台を使用する。編み台は四台ある。編み台には五対のコマがついていて、対になるコマを前後に交差するようにして編み上げる（写真二・三）。

写真二　薦編み

写真三　編み上がった薦

薦の編み方は次のとおりである。対になるコマに左からそれぞれ一～五の番号を付けた。編み台の上に五本一束程のカヤを置き、一、三、五のコマを交差させる。またカヤを置き二、四のコマを交差させる。この作業を繰り返していく。コマには全長五メートルほどの藁紐が巻き付けてあり、約一・五メートル四方の薦を編み上げることができる。薦は祭日までに一三枚を製作する。

一〇数年前までは神社役員が個人宅で編んでいたが、個人宅で編むと薦の大きさにばらつきがでるため、境内に参集して編むようになったという。

この日の作業の他、一〇月一五日に薦編み作業の続き、一〇月一八日に注連縄の房飾り作り、同日夕方に三升三合三勺のもち米を搗き、二段重ねの餅を祭礼当日に一三箇所に供える。これは交換する注連縄と同じ数である。餅は赤餅と白餅があり、赤餅には小豆で作った塩餡を載せる。

祭礼当日

令和二（二〇二〇）年一〇月一九日、八時に総代・神社委員が岩屋神社社務所に集合する。総代会長の挨拶の後、全員で御神酒をいただき、一三箇所の注連縄を取り替える作業に取りかかる。連縄は薦替えの有無にかかわらず、毎年のおくんちの際に取り替える。その間、総代会長はお供え物の準備を行う。お供えはオゴクサマ（新米）、鯛、餅、シトイ（シトギ）、オアシ（アオキの枝で作った箸）を供える。本殿には上記の他、生米、いりこ、塩、根菜、葉物、成物を供える。

八時二〇分、岩屋神社境内に移動し、注連縄に房飾りを取り付けていく。九時、社域の一番下にある鳥居から注連縄を取り替える作業が始まる。一〇時、宝珠石が祀られている岩屋神社本殿の注連縄の取り換えと掃除・畳の準備を行う。一一時一五分、本殿へのお供えを三名で運び、運び終えると本殿でお参りする。一一時四〇分、境内に取り替えた古い注連縄を集め、燃やす。

昼食後、一二時五四分、薦を準備し本殿に向かう。本殿向かって左側に薦を並べていく。このとき、宝珠石に薦を被せたときになるべく綺麗なものが表面に来るように調整していく。一三時三〇分、神職、村長ら来賓が本殿に到着する。岩屋神社には神職は常駐しておらず、近隣の神社に依頼して祭礼行事の際に来ていただいている。

一三時四〇分、神職、総代会長、村長が本殿に上がり、神事が始まる。祝詞の奏上、修祓を終え、薦替えが始まる。まず宝珠石へのお供え物と宝珠石を囲っていた木枠を取り外す。その後、作業を行う六名がさらし布で目隠しをし、口には榊をくわえ、薦の周りに張られた注連縄を四名が手探りでほどき、取り外し、残りの二名に手渡していく。目隠しをしているため、作業が難航する場面が見られる。

注連縄を外すと、宝珠石にかけられた古い薦を四名が外していき、二名が運び出し、本殿の外で待機している神社委員に手渡していく（写真四）。一番外側の古い薦は茶色に変色しているものの、内側にある古い薦はまだ緑色を残している。一二枚の古い薦が取り外されると、新たな薦一三枚を掛けていく。掛け終わると、一本の長い注連縄を宝珠石の上面から一段目、二段目、三段目と巡らせながら結んでいく（写真五）。

一四時三六分、注連縄を張り終え、目隠しを外し、宝珠石を囲う木枠・お供え物を元に戻していく。神職・総代会長・村長が再び本殿にあがり、例年行われているおくんちへと移行していく。薦替えの間、作業する氏子はもちろん、総代、来賓らの参列者は一言も言葉を発せず、厳かな雰囲気の中で行われた。

一四時五三分、全ての神事が終了する。総代会長、来賓は直会が行われる社務所に向かう。神社委員は本殿の片付けを行い、取り替えた古い薦を境内に運び、燃やしていく。直会ではお供え物の鯛を使った煮物料理等が振る舞われる。

（内野　嗣昭）

写真四　古い薦を取り外す

写真五　新しい薦に張替え注連縄を張る

三一　献水神事・水占い

【指定等】
種類　吉富町指定無形民俗文化財
名称　壺神社の献水神事と水占い
指定年月日　昭和六〇（一九八五）年四月一日

【テーマ】一一「託宣・占い」

【別名】壺神社の献水神事と水占い
「御神水奉献祭」、「お水汲み」とも呼ばれている。

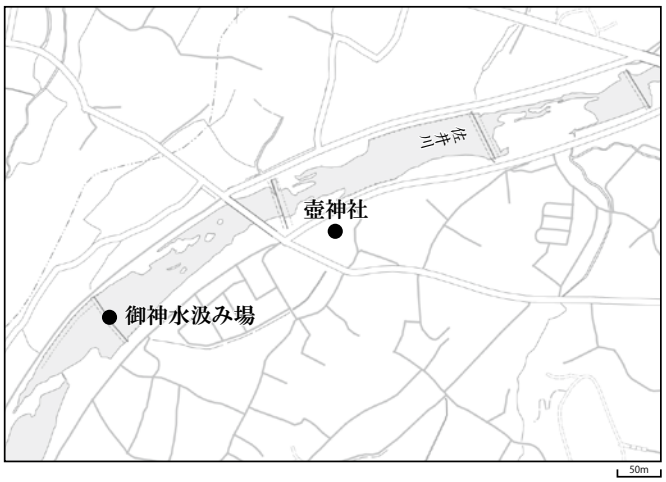
【地域の概要】
吉富町は、福岡県の最東端に位置し、北は周防灘、西は豊前市、南は上毛町、東は大分県中津市に接する。面積は五・七平方キロメートルである。町の中央を東西に県道一一三号線が走り、豊前市と中津市を結んでいる。令和二（二〇二〇）年一〇月の世帯数三〇二六、人口六七二七人で、就業人口の多くは第二・三次産業であり、第一次産業就業者は減少傾向である。

土屋は、町内の西側に位置し、佐井川の流域、豊前平野東部に位置する。地名の由来は、「垣をめぐらせた相当身分ある土屋氏の屋敷があったことから土屋垣の名が起こり、その後、土屋と略称される」（吉富町誌一九五五）とある。

江戸期は、豊前国上毛郡土屋垣村で、明治二二（一八八九）年までの村名である。はじめ小倉藩領で寛永九年から中津藩領、慶応三年佐井川以西のみが小倉藩領となるなど、歴史的には中津地域との関係が深く、それは現在も続いている。

明治一一（一八七八）年の戸数六一、人口三〇五。同二一年の戸数五四・人口三〇一、反別一九町七反（『福岡県地理全誌』三）。同二二年東吉富村の大字となり、昭和一七（一九四二）年からは吉富町の大字となり現在に至る。令和二（二〇二〇）年の国勢調査では、世帯一七五、人口四二八人（男性二〇九人・女性二一九人）で、人口は増加している。区内の七組の内、四組から七組は新興住宅地である。面積〇・四四平方キロメートル、平成二九（二〇一七）年時点で、土屋区一六一戸のうち、農業を営む家は一割にも満たない。

【伝承地もしくは実施場所】
築上郡吉富町土屋　壺神社
（図一）



図一　行事の実施地

【実施時期】
一〇月一四日（壺神社の秋祭り）

時期については、大正一四（一九二五）年の神事に使用する器の箱に、旧一〇月一四日の筆書きがある。また、「昭和一一年発行の小倉郷土会の雑誌『豊前』には新暦一〇月一〇日に行った」との記載もある（吉富町誌一九五五）が、古老たちの話によれば一〇月一四日午前五時に祭典を執り行うよう伝えられているという。

【伝承組織】
土屋地区で伝承され、祭りでは、宮司、神社総代、引き受け組で運営が行われる。神社総代が三名で、引受け組とは、自治会の下に、隣組が七組（四～七組までは、新興の人達である）あるが、この組を引き受け組といって、その年の祭りの世話をする組が年ごとに割り当て

られている。引き受け組は、元々は五軒単位で受けていた（平成一五（二〇〇三）年まで）。このほか、運営には有志の参加もある。

【伝承・由来】

いくつかの伝承があるが、それらを要約すると、弘安（一二七八～一二八八）の頃に、土屋村の守神の御神体が盗難にあった。ある夜、土屋村の長である土屋三郎左衛門という人に夢で神霊の降臨を告げるお告げがあった。彼は、隣村の神主重松大和守盛氏と相談した結果、居置ノ淵に水を張り小壺を沈めた。そして村人の主だった六人が一七日前から体を浄め、神楽を奏しながら、渕の東岸で神の降臨を七日七夜祈願した。満願の日、弘安四（一二八一）年辛巳一〇月一四日の明け方、急に空が明るくなり、たなびく雲の中から一条の火柱が走り、明星の神が壺中に天降った。三郎左衛門は直ちに渕に飛び込んで神霊の宿った壺を奉じ、村人の六人が小祠を新築して、星壺大明神と称し、土屋村の氏神として祀った。一年後、明星を壺の中に納めたものの、水が蒸発するのを恐れた土屋三郎左衛門が、一年後に再び川に飛び込み、神が壺の中に永遠に留まるようにと同じ渕の水を汲んで壺にいれた。この出来事が、神事の起因となったといわれている。

なお、宮の坊が裏手にあったので宮ノ渕とも呼ばれる。神社の南側の崖下がくれ込んだ大変深い渕で、奥には渕主の大鯰が住んでいるという。また、吉富町大字幸子（こうじ）の山国川筋の海老が渕に杵を落としたところ、宮坊の渕まで流れてきて、浮かび上がった、という伝説もある（吉富文化財協議会 一九八四）。

【実施内容】

祭りの準備　九月の始め頃、自治会の役員会で協議される。その後、引受け組と打ち合わせを行う。二週間前に、〆の子（藁さがり）製作（写真一）、一週間前に注連縄の張り替えを行う。前日にお水汲み場の注連縄を張り、祭典の道具等の準備を行う。水汲み用の手桶は、事前に神社総代が持ち帰り水に浸けておく（写真二）。

写真一　〆の子つくり

写真二　水汲み用の手桶

祭り当日　四時三〇分から関係者が集まり準備を始める。そして、神殿前の幣殿に神社総代・囃子方・祭り引受け組・自治会長等が集まる。幣殿の中央には引受け組から選ばれた奉仕者(献水の水汲み者)が、裸に新調の白褌・ワラジ履きの姿で注連縄を張った手桶の前に座す。水汲みの奉仕者は、本来少年が担当するが、少子化もあって探すのに苦労しており、今年は、壮年の男性が行った。本来、奉仕者については、「病弱の者から優先したといわれる」（吉富町役場編 一九五五）。

①修祓の儀　五時から神事が始まる。「三時の記載もある」（吉富町役場編 一九五五）。それに合わせ祝詞囃子が神事の間奏される。水器具・奉仕者にお祓いを受ける。修祓の儀が終わると、奉仕者は闇夜の中、手桶を持って駆け出し、約二〇〇メートルほど離れた佐井川上流の水汲み場へと向かう。

②御水採りの儀　奉仕者は、佐井川に入り注連縄を張った所定の場所（巻頭図版）で手桶に御神水を汲んで神社へ戻る（写真三）（※佐井川で奉仕者が水を汲む姿は撮影不可）。本来、御神水は、神社横の「宮

写真三　お水採りの儀

写真四　御神水碑

の坊の渕」で汲んでいたが、現在は埋められ、御神水碑が建つ（写真四）。

同時に神殿では宮司による大祓詞が奏上され、開扉に際し御簾が下げられる。神社総代（マスク・白手袋着用）は神殿の南側廊下で奉仕者から水の入った手桶を受け取る。

③神水奉献の儀　宮司が御簾の下から差し出した大器（片口鉢）を神社総代が受け取り、手桶の御神水を柄杓で注ぎ入れる。満水まで入れて、御簾の下から宮司に戻す。宮司は大器から小器に御神水を移し、御神体の御壷に奉献する。一年間に御壷から蒸発した減水量を小器で注ぎ入れて満水にする。小器の残水を大器に戻す。大器の残水を御簾の下から神社総代に差し出す。

④残水拝見の儀　神社総代は大器の残水を長老達に見せ、御壷に納まった御神水の多寡を協議する（図二）。御壷に多く納まれば、翌年は相当の水が必要である事を意味し、旱魃の前兆である。逆に少ない納まりは、翌年は雨の多い年であると占う。理想は六分程度の納まりで、七分位の納まりは、まずまずの年とされる。このときに気をつけなくてはならないのは、占いは、御壷に納まった残水で行い、大器の残水の多少量ではないということである。

長老達によって協議された後、参拝者一同に残水を見せて（写真五）、翌年の降水量を占った結果を説明する。令和二（二〇二〇）年の結果については、「納まりはやや少なく、来年、雨は多いだろう」との報告があった。

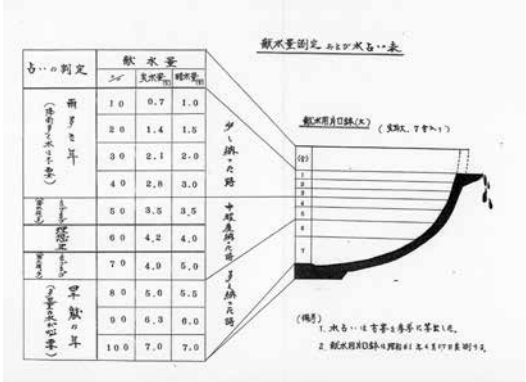
参拝者への拝観説明が終わると、大器の残水は奉仕者が汲んだ手桶に戻す。奉仕者は、神社総代より手桶を受け取り、渕跡の御神水碑に返し、献水神事は終了する。神事の所要時間は、約一時間であった。

これに、引き続き「秋祭り」が執行される。次第は、次の通りである。

①献饌の儀・②修祓の儀・③祝詞奏上・④一同列拝・⑤撤饌の儀

この後、例年であれば午後から「土屋神楽」が奉納されるが、今回は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため中止となった。令和元（二〇一九）年の記録では、一三時から一七時までと、一時間の直会を挟んで、一八時から再開し二一時頃まで行われたようである。

（長谷川　清之）



献水量測定　みとが水石…表

石…の判定	献水量		
	少し	気水量(1)	略水量(1)
雨多き年（降雨多く水はけ良）	1.0	0.7	1.0
	2.0	1.4	1.5
	3.0	2.1	2.0
	4.0	2.8	3.0
平年（まずまずの年）	5.0	3.5	3.5
	6.0	4.2	4.0
旱魃の年（雨少なく水はけ悪）	7.0	4.9	5.0
	8.0	5.6	5.5
	9.0	6.3	6.0
	10.0	7.0	7.0

献水用ロ鉢（大）（実物、7号ハット）

少し鉢・大路

中程度鉢・大路

多し鉢・大路

（備考）
1. 水石…は吉事を春季に等しむ。
2. 献水用ロ鉢の開始は、年々変化する。明らかに

図二　献水量測定及び水占い表

写真五　残水拝見の儀

三二　どんきゃんきゃん

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　どんきゃんきゃん（広田八幡神社神幸行事）

指定年月日　昭和五四（一九七九）年三月六日

【テーマ】三二「神幸行事」

【名称】ドンキャンキャン、廣田八幡宮神幸祭、風流

【地域の概要】

みやま市瀬高町文廣及び本郷は、市の中心部から北北西に位置し、北、東は筑後市、西は柳川市と隣接している。文廣及び本郷は矢部川とその支流である沖端川の分岐点に位置する平野部の農村である。矢部川の東岸が文廣、西岸が本郷である。農業従事者が多く、ナスやキュウリなどの生産が盛んである。

文廣には、中世の諸相を伝える碑が残されている。神社の南には大永五（一五二五）年造立の自然石図像板碑「筑後国下妻郡広田庄本郷之村芳司町笑酒施主板橋助種」（通称エベスサン）がある。碑中の板橋氏は、文永一一（一二七四）年頃、南筑後に設置された三市場の一つ芳司市場を管轄していた板橋家と関係があるとされている。

本郷では、天文一二（一五四三）年、肥前（龍造寺）の軍に対抗するため、檀大炊助が本郷城を築城した地とされ、その子孫檀（壇）氏は天正一五（一五八七）年以降世襲大庄屋に命じられた。柳河藩三代藩主立花鑑虎の時代には、原町往還（薩摩街道）の経路が変更され本郷は参務交代の駅路となった。

明治一二（一八七九）年、芳司村と隣接する吉岡村が合併し文廣村となり、本郷村とともに山門郡に編入した。一〇年後、文廣村、本郷村は本郷村として合併している。明治四〇（一九〇七）年からは瀬高町の一地区となった。平成一九（二〇〇七）年、山門郡山川町、三池郡高田町と合併しみやま市となった。

各地区はいくつかの小区「小路」からなる。文廣は橋口、大城戸（または中小路）今町、作出、本郷は本郷町瀬戸島、仲土居、小路、作出からなる。この小区はさらに数軒からなる「小路（小組とも言う）」に分かれており、特に文廣はこれらの小路が祭祀組織である宮座の「座組」に関係している。

【伝承地もしくは実施場所】

みやま市瀬高町文廣、みやま市瀬高町本郷、廣田八幡宮

【実施時期】

一一月三日（平成八（一九九六）年から）

（『廣田八幡宮縁起』（元禄一四年）中では、一一月一九日、明治時代は一二月二一日、昭和時代に一〇月一七日など複数回の変更あり）

【伝承組織】

みやま市瀬高町文廣一七二　廣田八幡宮

どんきゃんきゃん保存会

（以上、福岡県無形民俗文化財指定時の継承団体）

廣田八幡宮の（廣田家）を中心に、宮座「本座」・「新座」（文廣）、「本座」・「神座」（本郷）、宮総代の他、区長会や消防団、水防団（本郷）、どんきゃんきゃん保存会など複数の団体により伝承されている。

なお、江戸時代は柳河藩領の下妻郡に属していた本郷村、大江村、芳司村（現文廣）、吉岡村、久良原村、折地村、今寺村、古賀村も氏子圏となっていたが、現在は文廣、本郷がその範囲となっている。

【由来・伝承】

廣田八幡宮は社伝によると、神亀元（七二四）年に創建、住吉大神・応神天皇・春日神を祭神とする神社である。秋季大祭は、一一月一九

日に宇佐宮から本郷の仮宮（現在の本郷聖母宮といわれる）へ迎えた後、文廣の廣田八幡宮に迎えたという八幡神勧請の故事にならった行事である。

筑後地方の秋祭り「風流」の特徴である大太鼓に、御幣や晴着を人形（ひとがた）に飾った大名行列を組み込んでいる。同地では、廣田八幡宮の祭神・応神天皇が本郷の聖母宮の祭神である母・神功皇后の元へ御神幸し、年に一度会いに行く祭りと語り継がれている。太鼓と鉦の音に由来する「どんきゃんきゃん」と呼び親しまれるこの祭りは、大祭のひと月前から行われる一連の儀礼の総称でもある。

【実施内容】

令和二（二〇二〇）年から四（二〇二二）年にかけては新型コロナウイルス感染症の影響で中止になっており、本件は、平成一八（二〇〇六）年から令和五（二〇二三）年までの筆者の調査事績を基にしている。ただし、平成二四（二〇一二）年は、七月の記録的大雨（九州北部豪雨）の影響で本郷の北を流れる沖端川が堤防決壊し、多くが洪水被害を受けたことで中止となった。また変遷の過程を確認する上で昭和五五（一九八〇）年に行われた「緊急民俗文化財分布調査　福岡県山門郡瀬高町大字文廣字芳司」の調査データ及びこれを基に編纂された『福岡県史　民俗資料編　ムラの生活（下）』（西日本文化協会一九八八）を参考にした。

本稿は、同行事の大きな要素である宮座の儀礼と神幸祭を中心に記載する。本行事は様々な役割を持つ組織、担い手が同時多発的に行動する。よって各組織の仕組みと役割を整理した上で、各内容は地区ごとに記述した。

一　組織と役割

（一）座元と宮座

座元は本行事の中心的役割を担うもので、後述する各宮座から計四軒が務める。

宮座は廣田八幡宮の祭祀組織で、特定の家筋で構成される「本座」（文廣・本郷）と、その他の家で構成される「新座」（文廣）、「神座」（本郷）に大別される。「本座」は、初代宮司・廣田早胤の末弟速具の子孫・板橋家、次弟彦信の子孫・檀（壇）家、草分けの一族から構成される。

（文廣本座）

廣田家（廣田八幡宮）、鬼丸家、井上家、古賀家、橋本家、森家の六軒からなる。古くは一四軒、平成一六（二〇〇四）年までは七軒で構成されていた。明治一〇～四〇年代、昭和九（一九三四）年の本座の祭帳には「神課（じんが）」という構成員の呼称がみられる。現在は転出や後継者不足等から一部親類や別の家が本座を引き継いだ場合もあるが、基本的に世襲制がとられている。

座元は古くは神籤で決めていたが、経済的負担の点から現在は先述した順で務めている。座元の年に不幸があった場合は翌年の座元へと役が移る。座元の役割は、古くは祭礼費の財源だった神饌田（本座田（ほんざでん））の耕作、本座（儀礼）の宿（やど）、祭礼期間の世話、神事への出席などである。

（文廣新座）

文廣の全戸で構成されている。文廣本座は新座にも加入している。座元は、橋口（小組として東・西）、大城戸または中小路（小組として橋口大）、今町（小組として板・板本・奥・北）、作出（小組として東・中・西・北）の小路の輪番制である。各小路は四年に一度座元を出す年が回ってくる。『福岡県史』調査時には小路として大城戸の表記がみられる。現在は中小路の呼称が一般化しているが、祭りなど公的に使う際は大城戸の名が使用される。当番となった小路から一軒が座元を務める。各小路における小組は記録帳の記載（もしくは神籤）に従い座元を回す。座元の役割は新座（儀礼）の宿、祭礼期間の世話、神事への出席などである。

（本郷本座）

大庄屋を代々務めた檀（壇）家の長男筋を筆頭に一から一〇組（二〇〇六年頃までは一一組）の座組からなる。座組は主に本分家関係のある数軒からなる。世襲制で新規加入は認められず、脱退も「本座会議」での審議、承認が必要になる。

一組から順に座元を務める組が回る。当番となった座組の一軒が座元となる。座組で座元を回す順番は、本分家順もしくは神籤で決まる。座元の役割は、本座（儀礼）の宿、祭礼期間の世話、神事への出席などである。

（本郷神座）

本郷本座以外の各戸で構成された一一組の座組からなる。座組は親戚関係もしくは関係性が不明瞭な場合もある。組間、組内での階層性は特にみられない。新規世帯の加入は基本的に本郷神座になる。座元の役割は、神座（儀礼）の宿、祭礼期間の世話、神事への出席などである。

（二）御神幸にかかる組織、役割

先頭より鼻長天狗（二面）、風流旗（八旗・現在なし）、獅子頭（一対）、大名行列、神輿、神輿傘、太鼓・鉦（本郷）、みゆき衆、高張提灯（八灯・現在三灯）、太鼓・鉦（文廣）、ボテボテ、宮司、座元となっている。

（鼻長天狗、神輿傘）。

本郷の中年、壮年が担う。

（獅子）

赤黒一対の獅子で、大名行列にはあまり加わらず、地区内の家々を神出鬼没に回る。本郷では当年の座組の行列を「あがった」者二名が担当し、廣田八幡宮から本郷聖母宮までの渡御の間を担う。本郷聖母宮からの遷御では文廣が担う。文廣では新座の男性が務め、座元を務めた翌年に担い手となる。

（大名行列）

本郷の男性が務める。通称「ヤッコ」と呼ばれる大名行列の毛槍等については一〇から四〇代（かつては一四から二四歳頃）が務める。鋏箱四名、スッポウ二名、台笠（でがさ）二名、バンバラ四名、毛槍を担当する先（さき）（シロ）四名、一番四名、二番四名、三番四名、次（つぎ）四名、後（あと）四名からなる。鋏箱から順に年齢や役割が上がる仕組みとなっている。祭り当日の行列の責任者を三番、大名行列全体の総責任者「頭（あたま）」（一名）が後を務める。

大祭では、背に半紙で作った菱紋を付けた半纏に角帯、手甲、布脚絆、草鞋を身に着けた姿である。道具の受け渡しに独特の所作がある。

（神輿）

渡御の際は本郷（現在は四〇から五〇代）、遷御の際は文廣の男性（若者、中年）が担う。文廣では青年を「あがった」者（ＯＢ）、本郷では行列を「あがった」者（現在は中年壮年）が務める。

（太鼓）

太鼓は文廣・本郷に一張ずつある。太鼓を奉納する「太鼓打ち」は、小学五年生前後の男子二名が三年間務める。文廣では作出を除く小路から選ばれる。指導は太鼓打ちを「あがった」者が務める。

祭礼時は上衣に袴を着用し、襷掛けする。頭部には御幣を付けたシャグマを身に着ける。両地区では演目、所作、音色も異なる。御神幸では神輿の後ろに本郷、文廣の太鼓が続く。

（鉦）

竹棒に直径約四〇センチメートル、重さ約二五キログラムの円柱状の鉦を吊るしたもので各地区三面ある。主に太鼓や囃子方を務めた者が務める。竹棒を担いだ二人のうち、一人が木槌で鉦を叩く。文廣で

は太鼓の奉納時に祭太鼓謡を謡う。

（みゆき衆又は囃子方）

文廣の小学校高学年を中心とした男子が務める。昭和五〇年代頃までは一三から一五歳の男子であった。太鼓（アンヤ太鼓またはアイア太鼓）一名、笛六名からなる。現在は囃子方、アイア太鼓という呼び方で使われている。大祭前日から当日にかけて麻の裃を着て神事や奉納先で太鼓や笛を奏する。笛二名は文廣作出より、それ以外は橋口や大城戸、今町などから選ばれる。

（高張提灯）

御神幸の際に神輿の後に続くが、現在は遷御の際に神輿の先導を行う。文廣新座の子どもが担当する。現在は三灯使用されている。

写真一　稚児（ボテボテ）

準備中

（稚児）

文廣でその年に生まれた男児が務める。現在は少子化のため長男に限らず、また未就学児まで務めることができる。宮参り（紋入り）着物に襷を結ぶ。手甲布、飾り撥を手に持たせ、色御幣を背に挿す。子の父親は「ボテボテ」と呼ばれる千代紙で装飾した太鼓と御幣を付けたシャグマを持つ。稚児は父親に抱かれて（かつては肩車）御神幸に参加する。通称「ボテボテ」と呼ばれる（写真一）。

（馬の番）

文廣では、昭和五〇年代頃まで流鏑馬が行われており、当時は廣田八幡宮のカンミウマの世話をする馬番がいた。大祭の数日前から別火で過ごし、身を清めて白着物を身に着けお籠もりをした。祭り当日、神輿の渡御前に馬の番は矢部川で身を清めたという。

（その他・世話方）

文廣の小路（橋口、今町、作出から一名ずつ、計四名からなる。各小路での世話役で大祭前日の神輿の準備や当日の食事などの世話を行う。主に一六歳以上の若者（現在は四〇代頃まで）が担うもので各小路の若者が年齢順に務める。最年長まで回した後は最年少に戻る。当番年に不幸があった場合は翌年の者が務める。

（その他・氏子男性）

文廣、本郷では男性全員が祭りに参加する。藍色の長着もしくは羽織を着用する。文廣では六〇歳で引退となる。

二　大祭前の準備

一〇月一日、本郷では座元の敷地内に竹の先に藁を取り付けた「ボンテン」を建てる「ボンテンタテ」が行われる。ただし文廣はなし。同日、大名行列の毛槍の準備（タケキリ）が行われる。練習用の毛槍を製作し、本郷聖母宮にて大名行列、太鼓の練習が始まる。

文廣では文廣公民館、作出公民館で囃子方の練習が始まる。笛二名は作出が担っており、祭りが近くなると文廣公民館に出向き合同練習を行う。

大祭の二〇日ほど前より文廣の太鼓の練習が本座座元宅で始まる。指導は太鼓打ちを「あがった」者が行う。

三　宮座の儀礼

宮座の儀礼は各宮座で幾分か異なる。以下は、実施日に添って各宮座の儀礼を記載する。

（一）本郷

本郷の宮座の儀礼は、一〇月最終日曜日に行われる。本座、神座は、一年交代で午前、午後に行う。本事例は本座が午前、神座が午後の場合である。

（本郷本座）

九時頃、本座の座元宅にて「本座」（「本座祭」「座」「座祭」とも表現される）が行われる。参加者は、宮司、座元、当年座組の男性、「大幣（おおべ）」（次年の座元）、「大幣」の座組で次の座元を務める者、「小幣（こべ）」（再来年の座元）である。

本座は、座元宅の神前（神棚前）で神事が行われる。修祓、大祓、四方拝、祝詞奏上、玉串奉奠など神道の作法に則り行われる。その後、御神酒とスルメをいただく。座敷に場を移し、上座右側に宮司、当年座組（座元、次回の座元、男性一名）、左側に、来年の座組（宮司の向側に大幣、次回の大幣）、小幣が座る。

全員が着座するとお謡三番となる。宮司が盃に御神酒を満たし一番の謡い出しをする。謡い終わると盃の御神酒をいただく。二番を座元、三番を大幣の順で同様に行う。お謡三番が終わると直会となる。直会の料理は、本膳に二の膳、三の膳を加えたもので、以前は献立・引き出物を書いた記録に従って出されていた。近年は仕出し屋に頼んでいる。古くはこの日のために座組でどぶろく（甘酒）を作っていた。座元を神籤で決める座組は、お謡い後に神前で神籤を行う。

写真二　本郷本座の節刀渡し

準備中

直会の終盤、太鼓打ちが座元宅を訪れる。太鼓打ちは本番とは異なる絣の衣装を着用する。宮司が祝詞をあげた後、オガミ、ヒーヨー、（演目名不明）、マクリ、ドンキャンキャン、ミチヒキ（以上演目名）を叩く。

膳が引かれると「節刀渡し（せっとうわた）」が行われる。宮司の前に置かれた膳の前に座る。宮司の祝詞奏上後、膳に置かれた椀に酒が注がれ、新藁を三つに分けたもの「スホウ」（一束一三本）を、二つは交差させ、一つは横に椀上に置く。宮司がスホウを一束ずつ六つの椀につけていく。宮司の合図により一斉に椀を取り、飲んだら椀を返して置く（写真二）。

本座での一連の儀礼が終わると、座元、座組の次回の座元は「受前送り（うけまえおく）」のために大幣宅へ移動する。大幣宅では、大幣の座組の男性が合流する。先述の内容同様に神棚の前で神事を行う。続いて座敷に場を移し、お謡三番、直会となる。

かつては、座元の務めとして同日から毎朝鉦を叩く風習があった。祭り当日、本郷の人々はこの鉦の音を聞いて起きだしていたという。

写真三　本郷神座の座元宅

（本郷・神座）

午後の座は、太鼓打ちから始まる。内容は先述の通りである（写真三）。

太鼓打ちが終わると神座となる。神座の参加者は、宮司、座元、当年座組の男性二名、大幣、大幣の座組の代表者二名である。本座と同様に神事、お謡三番、直会となる。神座では「節刀渡し」は行わない。

続いて「受前送り」のため大幣

準備中

宅へ移動し、神事、お謡三番、直会となる。参加者は、宮司、座元、当年座組の男性二名、大幣、大幣の座組の男性二名である。

（二）文廣

文廣の宮座の儀礼は、一一月一日に行われる。午前中に本座、午後に新座である。

（文廣本座）

文廣本座の「神座（じんざ）」（現在では「座」や「本座祭」と呼ぶ）を行う。参加者は宮司、本座、太鼓打ち二名、女性一ないし二名（かつては未婚）。

本座は、太鼓打ち（普段着）の音を合図に玄関先に張った注連縄をくぐり、玄関入りするところから始まる。太鼓打ちは神事の間叩かれる。神課は紋付き袴、未婚の女性は正装で参加する。

座元宅に安置されていた厨子、送り幣、帳箱を床の間に設えた神棚の前で神事を行う。座敷に場を移し、コの字型に着座する。正面に宮司（廣田家）、宮司の左に廣田家（分家・廣田八幡宮が本座を務める場合は分家が代理となる）、右側（右座）に森家、古賀家、鬼丸家、左側（左座）に橋本家、井上家に分かれて着座する。

まず「御熨斗」として和服の女性が熨斗を載せた三方を宮司の前に運び（写真四）挨拶を行う「熨斗出し」が行われる（写真五）。次に「御茶」としてお茶とかつおの削り節をかけた漬物に箸を添えた膳が各自に運ばれ、お茶が振舞われる。これらは未婚の女性が務めるものであったが、「熨斗出し」は平成二一（二〇〇九）年頃から行われなくなった。

かつては「御茶」の後、「御神酒」として白紙に昆布、するめ、土器を載せた膳が運ばれた。若手の男性二名が酌人として座敷の中央に座し、御神酒を宮司、左座、右座の神座より交互に注ぎ、再び宮司で終える所作があったが平成二一（二〇〇九）年時点では行われていない。

続いて本膳が運ばれ、太鼓打ちが酌人として中央に座し、お謡三番が行われる。一番を謡い宮司が御神酒をいただく、同様に二番では座元が、三番では翌年の座元「受前（うけまえ）」に盃が回る。続いて直会となる。以前は本膳「打附本膳」が運ばれると、一の膳（ヒラ・尾頭付きの魚、ナマス、キツボ（煮豆）、飯、汁物）の食前に飯椀の蓋に冷酒が注がれた。一の膳を食する間に甘酒が注がれ、続いて二の膳として盛り付け、刺身、巻き寿司、味噌和えが出された。食前にお謡三番があり、一番ごとに三つ組盃が宮司、左座から右座へ交互に回り、これをもって御神酒から熱燗へと酒が変わったという。これ以降の直会の酌人は未婚の女性が務めていたが、平成初期には太鼓打ちが酌人へと変化している。

直会後「節刀渡し（またはトウワタシ）」が行われる。

節刀渡しでは太鼓打ちが酌人を務める。宮司を除く各自の飯椀の蓋に御神酒を注ぎ宮司の前の膳に置く。宮司の合図で一斉に御神酒を飲み干す。この時、塩と削り節を添えた大根が出される。以前は、宮司が椀に口を付けた後、節刀渡しの膳（先述の大根）が出され、座元が御神酒を飲み干すと、ほかの本座（神課）も競うように飲み干していた。

写真四　熨斗出し①

写真五　熨斗出し②

準備中

準備中

続いて宮司から受前に厨子、神体幣、祭帳箱が渡される。

「受前送り」（節刀送りとも）のため、宮司、本座は受前宅に移動する。神棚に持ち込んだ祭具、御神酒、昆布、スルメ、米などを供え、神事を行う。座敷に移り「御茶」、お謡三番を行い終了となる。以前は、一番後お茶が引かれると、取肴三種の膳が出され、三つ組盃に注がれた御神酒が宮司、座元、受前の順に回った。二番では座元が御神酒をいただき、盃を宮司に戻して左座右座の交互に盃が回った。最後に三番を謡い終了という所作であったという。

一九時頃、本座と座元の小路の各家から一名（かつては神職、本座、太鼓打ち）が神社境内（かつては座元宅）で注連打ち唄を唄いながら注連縄をない（シメウチ）、鳥居や地区内の神社、宮司宅など八箇所の注連掛けを行う。現在では注連打ち唄は唄われていない。

（文廣新座）

新座もほぼ本座と同様の内容であるが、座元宅に注連縄は張らないため玄関から入る所作はない。また太鼓打ちもない。

出席者は座元、受前、当年座組の次の座元、受前の座組（次回の座元含む）の六名に宮司を加えた計七名である（写真六）。新座では、神事、御茶、お謡三番、直会、節刀渡しが行われる。御茶では、蒲鉾、ちくわ、なますの膳が出される。同時にカツオ一尾の身をほぐしたものをショウガ醤油でいただく特徴がある。以前はオオサバであったが近年はカツオなどで代用している（写真七）。また一連の儀礼では酌人は出席者以外の座組の男性が務める。

その後、受前宅に移動し、神事、御茶、お謡三番、直会となり終了となる。

四　大祭前日

（文廣）

一一月二日一九時頃、神社拝殿で世話方の指導の下神輿の飾りつけを行う。若者はロープで神輿を締め晒を巻く。囃子方は、神輿や鏡を磨き、榊や御幣を神輿に飾る。神輿の準備が整うと神輿の前に獅子と鼻長天狗を据える。かつては前日に禊のために矢部川に向かったが道中に女性と遭うと家に戻り出直す風習があった。同じ拝殿では、ボテボテや太鼓打ちのシャグマに取り付ける色御幣などが準備される。

（本郷）

一一月二日五時、本番用の毛槍の準備「タケキリ」が一〇月一日同様に行われる。

一三時、座元宅の座敷にて「太鼓飾り」が行われる。太鼓飾りは、本座と神座が一年交代で行う。座組と特定の四軒（かつては大城（おおぎ）家が世襲）が集まり、神棚にお参りし、御神酒をいただいて飾り始める。太鼓打ちのシャグマに付ける御幣、大太鼓に付ける御幣を作り、取り付けるほか太鼓の着付けを行う。準備が整うと「タマシイイレ」を行う。宮司は参加せず太鼓飾りの代表が竹棒で太鼓を一三回叩く。お謡三番

写真六　御茶

準備中

写真七　カツオ

準備中

後直会となる。太鼓は当日朝まで飾る。

五　神幸祭（どんきゃんきゃん）

（一）廣田八幡宮、座元

八時半、廣田八幡宮で神事が行われる。宮司、囃子方、座元（紋付き袴）、区長、宮総代などが参加する。議員や行政、教育委員会関係者などが参加する。神事後、文廣公民館（かつては宮司宅）で直会となる。

座元は自宅に戻り、各地区の太鼓の順路に従い太鼓の奉納を迎える。昼過ぎ、文廣の太鼓が宮司宅で奉納する。同時刻近くに座元は廣田八幡宮に参集する。大名行列が到着次第拝殿で神事を行う。御神幸では神輿の後ろに宮司、座元が続く。矢部川の大和堰を渡り、河川敷の三本松にて神事を行う。本郷聖母宮にて神事、直会を行う。本郷の聖母宮での神事を終えた後、文廣本座以外の座元は解散する。宮司と文廣本座、囃子方は廣田八幡宮で待機し神輿と太鼓を待つ。神輿を拝殿に据え、太鼓が戻り境内で奉納を始めると、御神体を神殿に移す神事を行う。神事後、直会を行い座元とともに神輿の飾りを解く。

（二）文廣

○時、廣田八幡宮拝殿で暗闇の中、神輿への「神霊遷し（みたまうつ）」が行われる。囃子方も参列し楽を奉納する。囃子方は「ヨドンバン」として拝殿でお籠りをする。かつては一週間前から別火精進していた。

五時頃、太鼓打ち二名が廣田八幡宮に集合し矢部川へ向かう。全裸になり川で身を清める。道中に人に遭うと再度神社からやり直す。その後着付けを行う。

廣田八幡宮での神事と直会が終わると、本座宅で太鼓の飾り付けが行われる。飾り付けは本座が行う。

午後から、本座に藍の着物を身に着けた男性が集まり太鼓の奉納（ふれ太鼓）が始まる。集落内の寺社等に奉納する（写真八）。現在は、本座、橋本家（天満宮の世話人）、印接寺、屋須多神社、印鑰（いんやく）神社、潮斎（しおい）神社、お弘法さん、廣田家（本座に出席する分家）、エベスサン（笑酒の碑）、次年度の座元、新座（作出以外の小路の座元がいる場合）、宮司宅に奉納する。太鼓は、太鼓打ちのほかに太鼓の経験者が補助として打つ場合もある。

大名行列と本郷の太鼓が境内で奉納し、神輿が渡御に出ると境内で太鼓を奉納する。三本松まで奉納すると、本郷小路の八幡宮で本郷の行列と太鼓が聖母宮に入るまで待機する。小路の八幡宮で奉納し、本郷聖母宮から神輿が遷御のために出発すると境内で太鼓を奉納する。

聖母宮を出発した後、神輿と太鼓は作出屋須多神社に奉納する。作出より座元が出る年は座元宅に太鼓を奉納する。矢部川の堤防沿いに廣田八幡宮に向かう。神輿は拝殿に据えられる。拝殿では、囃子方の楽のなか、御霊を神殿に移す儀式が行われる。神事には文廣本座が出席する。その後直会を行い、神輿飾りを解き終了となる。

太鼓打ちは、太鼓打ちの自宅を回り、再び本座に戻り打ち止めとなる。

昭和五〇年代までは柳河藩主立花宗茂による奉納の起源をもつ流鏑馬が矢部川の堤防行われていた。獅子は朝に行われる廣田八幡宮での神事の後、本郷が受け持ち本郷内を回る。聖母宮での神事を終えると拝殿に据えられた獅子は文廣の担当となり文廣の家々を回る。本来は神殿に神輿が戻る際に獅子も戻されるが、深夜過ぎに神殿に戻ることもあった。

写真八　文廣の太鼓

準備中

（本郷）

早朝、本郷の男性は、地区内の銭湯もしくは家庭で身を清める。現在は少なくなったが尾頭付きの魚を添えた膳を食する「イッコンズワリ」をする家もある。

九時頃、大名行列の担い手は聖母宮に参拝、三番の主導で御神酒、肴（生大根・かつおの削り・いりこ）をいただく。その後、松本家（神幸行列の獅子が天災で流された際に発見されたとされる場所）、各座元（太鼓飾りを行った宮座が先）、集落のエベスサン、水天宮、八幡宮、五社宮、檀家庄屋跡、天満宮に大名行列と太鼓を奉納（フリコミ）し、矢部川の大和堰を渡り廣田八幡宮に向かう。奉納順は座元の位置で多少前後する。大名行列では鋏箱が、「祭ん歌」、「哀ん歌」と呼び親しまれる歌を歌いながら行列を先導する。

一五時頃、廣田八幡宮にて大名行列と太鼓を奉納する。神事後、拝殿から神輿が出され、境内で奉納する太鼓の周囲を三回半時計回りした後、御神幸が開始される（写真九）。矢部川の大和堰を渡り、河川敷の三本松で大名行列と太鼓を奉納する。途中、薩摩街道沿いにある新茶屋と呼ばれる地で休憩し、聖母宮に向かう。道中太鼓はミチヒキと呼ばれる演目を叩く。

写真九　大名行列

一六時三〇分頃、聖母宮で大名行列と太鼓を奉納する。境内を三回半回って据えられた神輿と獅子を前に、宮司、座元、獅子、区長らによる神事、お謡三番、直会を行う。以降獅子は文廣と交代する。

聖母宮での奉納を終えると中土居八幡宮にて奉納（フリドメ）し、太鼓は解散となる。大名行列は松本家に戻り、毛槍の先端を切り落とし、各役職の挨拶、次年の頭の指名、手締めをして解散となる。

本郷では一一月四日、「ボンテンダオシ」が行われる。祭具を座元（太鼓飾りをした方）へ持っていく。

祭りの一週間後、行列の若者たちはシメイエと呼ばれる打ち上げが行われる。

令和五（二〇二三）年より再開したが、宮座の儀礼の簡略化のほか、担い手不足により大名行列が中止されることになった。また道中の神輿や太鼓は、車に載せて移動に変更になった。文廣では、囃子方ならびに太鼓役の子どもの参加が見送られている。

（河口　綾香）

準備中

三三　はやま行事

【指定等】

種類　福岡県指定無形民俗文化財

名称　はやま行事

指定年月日　昭和五一（一九七六）年四月二四日

（旧指定　昭和三六（一九六一）年一一月二日）

【テーマ】五「供物・料理」

【別名】

早魚神事ともいう。また、本報告で紹介する一連の行事（神楽・浦安の舞・はやま行事・献魚包丁式・ひれ舞）を総称して、「奈多おくんち」あるいは「秋大祭」ともいう。

【地域の概要】

奈多は、海の中道の付け根付近に位置している。博多湾と玄界灘に臨んでおり、「奈多浦」とも記されることがある。『福岡県地理全誌』によれば、戸数二四一戸、人数一二四七名、職分の半数以上が雑業と記されている。船数も八一隻と、そのうち漁船が六二隻とあり、漁業従事者が多かったことがうかがえる。

【伝承地もしくは実施場所】

奈多公民館（福岡市東区奈多二丁目一四―二）、及び各地区公民館

【実施時期】一一月一九日（以前は旧暦一〇月一九日）

【伝承組織】

奈多志式神社の秋大祭（奈多おくんち）に奉納される行事である。奈多にある西方、前方、牟田方、高浜の四地区のうち二地区の若者が、塩鯛を料理し、神に献饌する早さを競う行事である。早魚行事保存会によって伝承されている。

【由来・伝承】

『福岡県神社誌』によると、志式神社の祭神は、火明神・火酢芹神・豊玉姫神・十城別神・雅武王・葉山姫神とある。旧暦の正月上旬に参拝者が多かったといい、火難・盗難・難産を免れるという信仰があったことが記されている。旧社格は村社である。本社は平戸の志々伎神社であり、志式三郎天神とも呼ばれる。

伝説では、神功皇后の三韓出兵に際し、当地に軍議所を置いて水軍の本拠地とした際、皇后に生きた大鯛を料理して献上したのが早魚行事の起源であると伝えられる。

その後は、豊漁祈願を願うため、網元大綱の漁場権利取得をめぐる競争として長年続けられていたが、争いが絶えないため、今日のように古式を伝承する神事として伝えられることになったという。

【実施内容】

一　祭りの準備

以前は問屋（木下家）又は、尾形（浜崎家）を座元として、庭に神楽舞台を作り、行事を行っていたが、現在では、奈多中央公民館の講堂に舞台を組んで行事を行っている（写真一）。舞台は一九日当日に組み立てる。舞台中央の上にはテンシキという神楽の天蓋のようなものをとり付ける。十字に組んだ木材に榊の枝を四方に向けて結びつけたもので、五色のシデが四方と中央に一つずつ

写真一　はやま行事の舞台（中央上部にあるのがテンシキ）

下げられる。行事には宇美神楽も舞われる。神職は稲光氏（綿津見神社・志式神社など四社を兼務している）である。

二　祭典と宇美（うみ）神楽

一九時半ころ、公民館で祭典が始まる。祓詞・修祓に続き、降神の儀が行われ、神職が神楽で使われる採物に向かって警蹕を唱える。祭典は五分ほどで終わり、続いて宇美神楽代表の挨拶があり、七番の神楽を奉納する旨の説明がある。榊舞・浦安の舞と神楽が続く。神楽は、天磐戸の演目が終わる二三時半頃に一旦休止し、後述のはやま行事を挟んで、再開される。

写真二　稽古の様子（高浜）

写真三　稽古の様子（牟田方）

三　稽古

その頃、はやま宿と呼ばれる公民館で、はやま行事の稽古が執り行われている（写真二・三）。以前、稽古の場は女人禁制とされていた。

高浜公民館・牟田方公民館では二〇時頃から稽古が始まった。これに先立つ一七時頃にクジを引きを行い、「料理人」・「鰭さし」・「すり鉢かかえ（すり鉢持ち）」が選ばれる。昔は、青年団の二四～五歳の幹部が担当し、年齢集団の卒業の行事として、はやまを切るのが一人前とみなされる条件とされていた。しかし、現在では人が足りない場合もあり、その際には他の地区から助太刀に来てもらったり、他所の二四～五歳の人にお願いして来てもらったりすることもある。参加できるのは一度だけであり、独身男性に限られる。

選ばれた青年たちは、古老や先輩の指導の下、稽古を行う。練習は普段着のままで行われる。また、稽古の際には練習用の鯛とまな板、木包丁、箸を使う。また、過去のはやま行事のビデオなどを見て行事の流れを確認したりする。

稽古を付けるのは地区の年長者である。まな板を引く時には「板の角度はそのまま」、前に進み出るときは「チャッチャッチャと」、腕や足に負荷が掛る姿勢では「がまんせい」、「辛抱すれ」、見せ所では「見せれ」、「威張れ」、「よかよか」などと、大声で檄を飛ばし、悪い点を修正したり、良い点を誉めてやったりする。

四　水垢離

二二時半頃になると、青年たちと役員が志式神社に集まる。そして、高浜・牟田方両地区の青年（提灯持ち・料理人・鰭さし・すり鉢かかえ）、計八名が褌姿となって奈多の浜に出て、水垢離をする。水垢離を終えると、中央公民館に向かい、神楽座入りをする。現在、はやま着物は自治会のものを使っているが、昔は稽古をしている間に母親が反物から縫い上げて、はやま着物を仕立てたという。

五　合わせ

二三時半頃に宇美神楽の天磐戸が終わる頃、公民館の控室で合わせを行う。本番に用いる道具（鯛・まな板・包丁・柳箸・折敷）が用意されている。最初に出場の順番を決めるくじ引きが行われる。最初は予備のクジ引きで、こよりのクジを引いてくじ引きの順番を決める。そのあと本番のクジを引く（写真四）。クジの先端の髪が広がった部分に数字の「1」か「2」が書かれている。令和元（二〇一九）年度

は高浜→牟田方の順となった。そして、両地区が並んで、行事次第を通しで練習する。日付が変わった〇時頃、御神酒・スルメ・昆布を頂くと、合わせも終了となる。

六　天神たずね・天神舞

その頃、神楽では天神たずねが演じられる。この天神たずねと、献魚包刀式、ひれ舞までが一連の神楽となっている。天神たずねは、天神と乙大夫とが繰り広げる舞で、志式三郎天神を探す乙大夫が筑前の奈多にて天神と出会い、一献傾けつつ、火難・盗難除けや大漁などの神徳を取り付けようとする。続いて、盃を手に取って天神が舞う天神舞があり、その後、お汐井を振って舞台が清められると、献魚包刀式となる。

七　はやま行事

〇時二〇分頃、舞台の東側に稲光宮司・問屋（木下氏）・総代、西側に宇美神楽・網元（尾形氏）・町内会長がそれぞれ入場し、（写真五）、左右に分かれて座る。（この東西は数年毎に交代する）。続いて高浜町内会の青年が提灯持ち・鰭さし・料理人・すり鉢かかえの順に入場し、牟田方の青年達が続く。青年たちが

写真四　くじ引き

写真五　舞台に入場

一列に立ち並び、正面を向いて礼をする。続いて、両地区から料理人一人が前に進み出て、鯛・包丁・箸を載せたまな板を、左手の親指と人差し指の間に挟んで高々と上げ、左腕をまくる。続いてまな板を右手に持ち替え、同様の所作を繰り返す。続いてまな板を両手で支えて高く掲げて前に進み出る。そして、演者から見て左・右の順に体を回す。続いて後を振り向いて、まな板の上の鯛を客席に見せるよう高く掲げると、大きな拍手が沸き起こる（写真六）。ひととき見せ場を作ると、再び正面に向き直る。この方向転換や回る際には足を畳から離さずに、にじるような所作をして体を動かす。

写真六　鯛見せ

正面を向くと、鯛の腹側を客席の方に向けてまな板を置く。料理人を中心に、演者から見て左側にすり鉢かかえ、右側に鰭さしがそれぞれ並んで座る。青年達は腕まくりをしてから腕を組む。その後方には提灯持ちが提灯を掲げて立つ。

「見事なお魚お料理召され」の声がかかると、太鼓の音を合図に料理人がまな板に手を伸ばし、右手で奥、左手で手前側を持ってまな板を高く上げ、ドン・ド・ドン、と三回、大きな音をたてて畳に打ち付け、鯛の腹が演者を向くようにまな板の向きを変え、ドンと大きく畳に打ち付ける。

続いて、料理人が包丁を高く掲げてから、トン・ト・トンと三回大きく包丁の腹で鯛を打ち付ける。鯛をひっくり返すと、料理人は鰭の横に包丁を置いて鯛をまな板に押さえつける。料理人の右にいる鰭さしが、左腕を料理人の首に掛けて、右手で鯛の鰭を引きちぎり、取った鰭を折敷に載せて「鰭受取」（神楽座元の主人）の所に届ける（写

写真七　鯛をさばく

真七）。この鰭をどちらが早く届けるかが競争となっており、勝った地区は豊漁になると伝えられている。昔は勝った方が良い漁場を取ることができたため白熱した戦いとなったという。令和元（二〇一九）年は牟田方青年団が早く鰭を供えた。

鰭が取れると、今度は料理人の左にいるすり鉢かかえが、鯛の頭を取って折敷に載せる。続いて鯛を裏返すと、料理人が身の上部を包丁で押さえつけ、すり鉢かかえが鯛の片身を持って引き剥がし、再度鯛を裏返して、残った片身も引き剥がす。剥がした身は、一枚ずつ料理人のまな板の上に戻される。その際、すり鉢かかえは、最初の一枚は、「やっちゃできました（「良くできました」の意）」、二枚目は「立派なこっちゃ」と声を出す。料理人は、まな板の上の切り身に向かって包丁をもって大きく振りかぶると、ゆっくりと包丁で三回撫でるような所作をしてから、包丁で身を抱えるようにして、鰭さしの前の折敷に移す。最後は、料理人が包丁をまな板の上に置き、三人が腕まくりをして腕を組んで構え、終了となる。開始を告げる太鼓の合図からここまで、一分もかからずに終了する。客席からは大きな歓声と拍手が沸き起こる。青年たちは一礼すると、道具を持って退場する。この時さばいた鯛は、安産の守りとされて小さく切り分けられて配られる。

八　ひれ舞

はやま行事で取った鯛の鰭は、女竹一二本（月の数）で作った竹の御幣に結びつけられ、続く神楽「鰭舞」の採り物となる（写真八）。

写真八　鰭さし

烏帽子狩衣姿の一人舞。右手に鈴、左手にヒレをもって登場し、正面を向いて座る。鈴を置いて、ヒレを左右左に振った後、ヒレを左脇に挟んで二拍一拝。鈴と太鼓を合図に、「榊葉に　木綿とりしでて　誰が世にか　神の御室と祝いそめけん」と唱えて立ち上がり、舞い始める。演目の間、笛・鐘・太鼓の楽が入る。

このひれ舞で使われた鰭は、翌日のエビス祭りの後、海に納められる。

【類似行事・関連行事】

県内には、魚を用いた行事が散見される。嘉麻市中益の万年願相撲では、相撲後のトウ渡しの際に素手で鯛を捌く。また、太宰府市通古賀の王城神社の宮座では、金串と包丁を使って、手を触れずに体を捌く。また、「はやま」の名を持つ行事として、小郡市にも「早馬祭り」や「早馬舞」が見られ、中に稲穂を入れた藁馬を担いでいく行事となっている〔久野　二〇一〇　一四一〕。

（須永　敬）

三四　山人走り

【テーマ】三三「修験・山伏」

【地域の概要】

福岡県の東部、大分県との県境に程近い海岸部に位置する豊前市は人口二四〇〇〇人余の地方都市である。豊かな自然に恵まれる一方で、少子高齢化と人口減少に直面する地域でもある。

市域は一一一・一七平方キロメートルに及び、全体の約七割を山林が占め、佐井川流域に開析された扇状地は古代より本地域の中心をなしている。その地勢は北を周防灘に面し、南には標高一一三一メートルの犬ケ岳を中心とした山並みを抱える。東は一級河川である山国川を挟んで中津平野が広がり、西は英彦山山系から延びる舌状の山稜により旧築城郡と画されている。

こうした地形上の特徴から、その文化圏は山国川流域を中心に築上郡東部と豊前市、そして大分県中津市の旧中津市、旧三光村を含むエリアで集約されると言っても過言ではない。事実、神楽の形態、神社で行われる神幸祭やその祭礼に登場する傘鉾や祇園の山車など、共通点は驚くほど多い。その結果、市内には今も多くの民俗芸能が伝えられ、その内容は春季に各神社で執行される神幸祭、秋季に奉納される神楽などが特徴的である。

【伝承地もしくは実施場所】

豊前市大字山内　嘯吹八幡神社とその周辺

【実施時期】一一月二七日

【伝承組織】嘯吹八幡神社氏子

【由来・伝承】

嘯吹八幡神社が現在地に遷座したのは約八〇〇年以上前という。

初山宮司家の外に神社の祭祀に関与する屋敷を次官といい、かつては二六軒あったという。その次官は二座に分かれていて、下河内の座と山内の座である。氏神様を氏子に代わって一年間お守りすることをこの二座で引き受け、その座替えをする日が一一月二七日であった。

【実施内容】

次官による神事として伝承されているもので、山内と下河内それぞれ一二人の次官がいたが、今は五軒（山内二軒、下河内三軒）に減っている。山人は頭屋と呼ばれ、毎年当番で次官が勤めている。

祭の前日、山内の当屋は榊を根っこから引き抜いてきて夜神前に供え、各次官の家に挨拶に回る。当日の早朝には山内の次官が八尋の浜にお汐井とりに行き潮垢離をし、岩岳川（永久）の宮ノ下にある畑の

写真一　神社を出発する次官

写真二　七ツ石

写真三　山内集落を駆け抜ける

大根三本を抜き、その跡に御幣を立て岩岳川で大根を洗って帰る。黒酒、白酒（甘酒と清酒で代用）、大根三本、汐筒、幣付きの榊二本を神前に供える。

午前一〇時に次官（羽織、袴）が集まり本殿で祭典（シバ座）を行った後、鳥居の見える場所（社務所前）に斎場を設け、案の上に神饌を移す。そして、二人の当屋は白装束に白足袋、草鞋履きで、注連縄を腰に巻きそこに鉈を差して口には榊の葉をくわえ準備が整う。

午前一一時、斎場で宮司の持つ神の宿った榊の神籬を握り、掛け声とともに宮司が榊を離すとそのまま走り出す。鳥居をくぐり、県道を横切り、山内集落を抜けて「歳越えの坂」にある「七ツ石」を途中並んで走りながら目指す。

「七ツ石」では向かって右端の石に山内の、左の端には下河内の山人が正座して心の中で祈を念じる口上を唱えるという。そしてそれぞれ次の年の当屋の家に向かって走り始める。その行程二～三キロメートル程である。

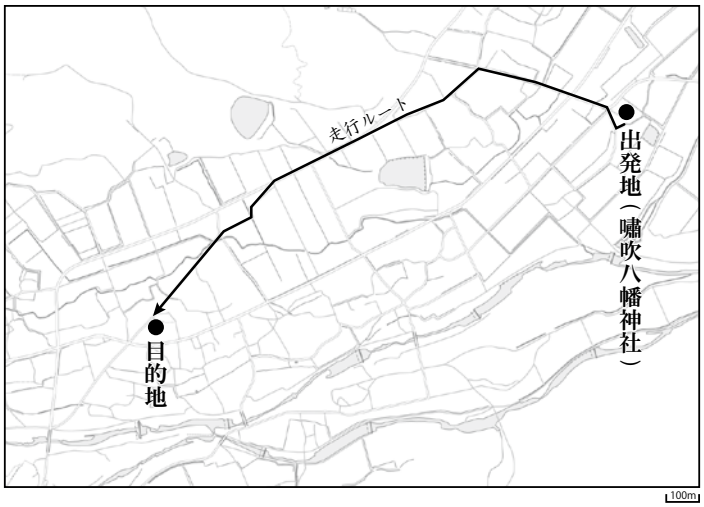
到着した山人は草履のまま座敷に上がり、来年の当屋から御神酒を大杯で三杯頂いたところで斎戒を解く。下河内では腰の鉈を渡すことを「頭屋渡し」という。また、座敷には菰を敷くことから「菰座」と呼び、午前中には終わる。

山内は一二頃来年の当屋の家で宮司、次官が集まり祭典を行った後、当屋渡しを行う。下河内は一四時頃から同じく祭典を行い、当屋渡しをし、終了となる。

なお、次官とは福岡県の京築（けいちく）地域と大分県の北部に見られる祭祀組織で、その表記は地域によって様々である。本来神官を補佐する役柄で、地域の神社と何らかの関係を持つ家柄によって、構成されていたという。

【類似行事・関連行事】

嘯吹八幡神社が鎮座する山内地区からさらに南にゆくと、岩屋地区がありその鎮守として日吉神社がある。この日吉神社にも山人走りの神事が伝えられるが、その内容はずいぶんと異なる。以下、その様子を文献から引用して記し参考としたい（栗焼　二〇〇六）。なお、祭りは氏子の高齢化などで現在は行われていない。



図一　次官の走行経路図

大河内の日吉神社に祀られている神様は、求菩提山を守るため京都からはるばるとお迎えした神様だといわれています。この神様は京都の日吉神社から海路、瀬戸内海を通り、沓川の浦に着いてそこから岩岳川に沿って岩屋に着いたといいます。そして法覚寺の裏山にある「おとんごぜ」という場所に落ち着いたといいます。これを知った村長は夜が開ける前に数人の村人を連れてお迎えに向かいますが、その時村人の一人が打ち振る「ヒイトギ」で明かりを取りながら村長の家まで案内したといいます。途中、夜も明けたので「ヒイトギ」を道路わきの土中に突き刺していった

ところ、不思議なことに数日してその「ヒイトギ」の木から柿の芽が出だしたそうです。一方、神社を建てるまで村長の家の座敷を仮御殿として過ごされる神様のもとには村人が代わる代わる酒やご飯を差し上げたそうです。「ヒイトギ」から芽吹いた柿木は爾来、日吉神社のご神木として大切にされ、今は何代目か分かりませんが根元はこげているといいます。「おとんごぜ」とは窟におられた神様という意味でしょうか。「ヒイトギ」は松明の代わりに使われた明り取りで、燃え残りの薪の先に残る火のこと。

由来を裏付けるように、日吉神社には「山人走り」という儀礼が伝えられています。祭りは一〇月初申日の午後に執り行われます。当日、神社に次官六人（以前は一二人）と山人一人、それに宮司が一四時に集まり、昨夜作った粥を入れた桶二つを神前に供えます。次官の一人が御供殿でお盆の形をした器（白木）に赤飯、粢、ご神木から取った小さい柿の実を三つ乗せ、これを八つ（次官と宮司の分）整え、甘酒一桶、清酒一升を備えて控えます。

次官は口に榊の葉をくわえ、御供殿から神殿へ並び手送りで献饌、玉串奉奠を行います。山人は山仕事の姿（荒縄を腰に巻き、鉈を差す）で御幣の付いた榊の枝を持って、神殿裏で待機します。本殿左の疫神社で祭典が始まり、修祓のあと山人が「ユードウ」という声を出し、このときからカミガカリとなります。直ちに山人は境内南側の鳥居を走り出て旧道を通り二〇〇メートルほど先のご神木（柿木）へと向います。目指す場所は時代によって変わってきました。大正時代までは元宮といわれる「おとんごぜ」（旧岩屋小学校の裏山の祠）まで、昭和初期からは「神の柿」を継ぐ若木があり、山人の走る距離は短縮されましたが、元宮の神に祈りをささげる山人の役割に変わりはありません。「神の柿」につくとそこで荒縄を解き、この縄で持ってきた榊をご神木に縛り付けた後、神社へ帰りカミから人へ戻るといいます。疫神社祭典終了後、本殿から拝殿へ撤饌を行い、拝殿での直会で終了します。なお、山人の役は次官が輪番で務める慣わしです。

以前は旧道を走る山人に石を投げつけたといいます。それは山人はカミであるので痛くないという、古い神事儀礼によるものです。由来にある求菩提山を守護する神様とは、天台宗比叡山鎮守日吉山王権現ともいわれ、三諦即一の思想が修験道に緩用される中、思想的影響を与えた結果とも考えられています。

（栗焼　憲児）

三五　亥の子

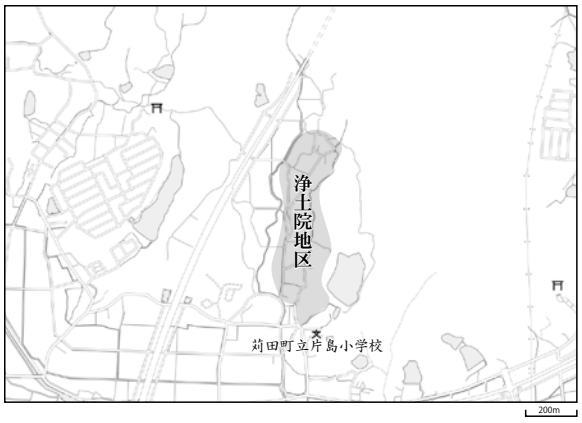
【テーマ】三四「亥の子」

【別名】浄土院地区の亥ノ子祭り

【地域の概要】

苅田町は、福岡県の東北部に位置する。瀬戸内海の西端の周防灘に面した京都平野の北端部に位置し、南側の行橋市と北側の北九州市に挟まれた工業を主産業とする町である。東側の海岸沿いには国道一〇号線が南北に走り、西側には、貫山（標高七一一・六メートル）、水晶山（標高五三一・三メートル）、高城山（標高四〇九・五メートル）、カルスト台地の平尾台（標高三五〇～六〇〇メートル）等の丘陵がそびえる。

浄土院地区は、苅田町の中央部の南側に位置し、高城山の山稜から南に延びる扇状地状の谷部に形成された地域である。大字下片島地区の中に位置する。集落内は、浄土院川が北から南に流れ、東西に流れる長峡川に合流する。長峡川に沿い県道須磨園南原曽根線が通る。さらに西側には南北に東九州自動車道が走る。浄土院地区は、比較的地理的条件はいいが、市街化調整区域内のため、新たに他地区からの住民が家を建てるのが難しい。地域の主産業は農業であったが、近年、兼業化が進んでいる。また、第二次、第三次産業への就業が進んでいる。



図一　浄土院地区の位置図

歴史的には、江戸時代、片島村の一部として小倉藩領の京都郡新津手永に属していた。地名の浄土院はかつて地区内にあった寺院名に由来するという。片島村は、幕末期に上片島村、下片島村に分立したようである。その後、明治二二（一九八九）年に小波瀬村、昭和三〇（一九五五）年に苅田町の地区として現在に至る。

明治三（一八七〇）年戸口統計（苅田町誌）では、戸数・人口は、下片島村四七、人口一一三とある。現在、下片島の世帯数八五、人口二〇五人（二〇一五年国勢調査統計）である。

【伝承地もしくは実施場所】

京都郡苅田町下片島区浄土院地区　浄土院地区内の各家々

【実施時期】

一一月第一土曜日（調査は令和二（二〇二〇）年一一月七日に実施した）

現在の実施日については、いつからこの日になったかは不明。

【伝承組織】

浄土院地区の年中行事であり、区長が中心に行事を采配するが、元々は子どものみで行う行事である。最近は、防犯の関係もあり大人が同伴する。当日も区長の他は、子どもと保護者のみで、世話や指導は年長の子どもがおこなう。

【由来・伝承】

地元での聞き取りでは、厄払い・五穀豊穣を願ったものと伝えられている。そのために、子ども達が地区内の家々を廻り、玄関先で、「亥ノ子づち」で地面を叩きながら、「亥ノ子さんウタ」を唄っているという。また、「亥ノ子を祝わないと火災にあう」と聞いていたと言う人もいた。

さらに『苅田町誌』では、亥ノ子・亥子について、

「昔は「亥子餅ちょ搗かんもな鬼にょ生め蛇生め角の生えた子を生め」と怒鳴りながら藁束で作ったいのこづちで門口をボトゝ叩いてまわり、庭に飾られたお供えを取って食べる行事があった。二月亥の日に田に降りた田の神（亥の神）が、一〇月亥の日に仕事を終え家に帰るので新穀で餅を搗いてお迎えする日である。庭の隅に臼を置き、上に新藁を敷き一升瓶でお供えをする。これを黙って取って食べれば病気をしない」と記されている。（苅田町誌編纂委員会　一九七〇）

【実施内容】

事前に準備するものとして、当日地面を叩く際に使用する円形の握り手のある棒状の「亥ノ子づち」（地元ではこづちと呼んでいる）がある。最近は、材料の藁が入手しにくくなっていることもあり、二年前に作ったもの（公民館で住民が集まり夏頃製作した）が丈夫で本年も使用できることから今年は作っていない。壊れたら作り直すようにしている。作り方は、インターネットで他地区のものを参考にした。この時製作したものは、握り手にカラーテープなどの補強を行っている。大きさ・形状などは手造りのため、ばらつきが見られる。他方でこれとは別に祖父が作った「亥ノ子づち」を使っている子もあった。これらの「亥ノ子づち」は、行事が終わると個人で保管する（写真一）。写真の亥ノ子つちは、全長六〇センチメートル、にぎりの幅一六センチメートルである。

参加人員は、子ども七人と同伴の保護者、区長を併せて二〇名程である。行事には、中学一年生までの子どもが参加する。保護者同伴で〇才から参加している例もある。女子は恥ずかしがって出たがらないともいう。行事に参加した子ども達の一部は、地区外の木ノ元や片島地区に住んでいる。浄土院地区は、新たに他地区からの移住が難しく、家を建てられないため、子どもの数は少ない。しかし、今年は、子ども達の数を制限したそうである。子どもの数が多くなるとお菓子などの準備が大変になるため、できるだけ地区外は遠慮してもらったらしい。

当日、公民館に集合した後、一八時半過ぎから町立片島小学校近くの個人宅を訪れる。まず、最初に家の門口に子ども達が一列に並び、「亥ノ子づち」で地面を叩きながら「亥ノ子さんウタ」を二度唱える。終わると玄関が開く、子ども達は、「今晩は」とあいさつをしながら、中に入り、家人からお菓子の接待を受ける（巻頭図版）。これを一軒ずつ、繰り返し行う。玄関は、子ども達が開ける場合もある。また、留守をしていたり気づかない場合もあるので、家人が玄関などにお菓子を置いておくこともある。

写真一　亥の子つち

最初の家が地区の下側（海側）にあたり、ここから北側の浄土院集会所を過ぎ上（山側）の方へと向かい、地区内の三三軒ほどを巡った。最終的に二〇時三〇分頃、最後の家を訪問し、余った分のお菓子を全員で分けて、解散した。一軒あたりでおこなう「亥の子づき」の時間は、おおよそ一分から二分以内で、平均一分半くらいの場合が多かった。今年は、下側から上側へと進んだが、「亥ノ子」を行う順路（上・下、奥・前等）は、特に決まっていない。

毎年、いのこ歌の歌詞を紙に書いてお菓子と一緒に配っている家がある。以下、その歌詞である。

いーのこさーんのばーんに
もちをつーかんいえは、
おにうめじゃーうめーつのはーえた

これらの歌は特に集まって練習するのではなくて、毎年、参加しながら覚えるそうである。

「亥の子づき」の方法については、順序等決まっているが、迎える方の家々では、接待の仕方についてそれぞれ差異がある。現在は、子ども達にお菓子を渡すのが一般的であるが、そのほか、めざし、いりこなどの魚類、おから、ゆで卵、日本酒、さらに、ボールペン、メモ帳などの文房具も用意されていた。これについては、「三年前までは、多くの世帯が餅（かきもち・おはぎ等）を用意していたが、子ども達があまり喜ばないのでお菓子に変更となった」（同伴の保護者女性の話）、また、「時代が新しくなるにつれ、酒のほかにジュースや茶などが振る舞われた。養命酒が振る舞われたこともある」という（同伴の保護者男性）。

それに対し、昔ながらの様子を伝えているものとして、「かつては尾頭付きの魚、酒（日本酒）、新米（御飯）などが参加した子ども達に振る舞われていた。めざしやいりこを振る舞うのはその名残である。うちでは、昔から（記憶では五〇年前から）めざしを用意していた」（訪問先の高齢女性）、との話も聞かれた。

また、ゴザの上に、米一枡と日本酒、ろうそく、魚を盆に載せている家も一軒見られた。「米の御供は、本来収穫された稲穂を一束用意する。今年は準備できなかった」（訪問先の高齢女性）との話も聞かれた。聞き取りは、地元の聞き取りを苅田町教育委員会が行い、浄土院地区にも情報提供を受けた。

【類似行事・関連行事】

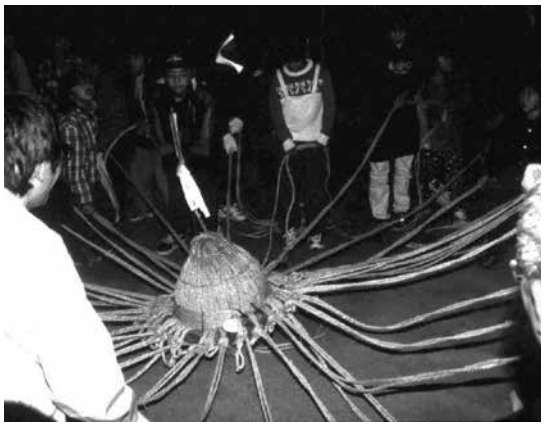
亥ノ子について、京都平野周辺では、最近は行われているところは少ないが、いくつかの自治体史にその記録が散見する。そのなかの参考事例として『行橋市史下巻』「九章民俗 第三節　マチ場の暮らし」を紹介する。

「亥ノ子・・・下正路や金剛丸あたりでは、一一月の最初の亥ノ日に「亥子様祭り」が行われていた。亥の子は、収穫を感謝し祝う行事である。田に刈り残した四・五株をこの日に刈り取り、新米で餅をつき、竹筒に餅をいれ、屋根の上に放り投げる。モグラ打ちといって、地面をトントン叩きながら家々をまわった。亥ノ子が過ぎるとコタツをだしていた」（行橋市史編纂委員会二〇〇六）。

※「亥ノ子石」の例

旧豊前国の田川郡のうち、川崎町の旧川崎地区の東川崎・永井・太田の三地区では、「亥ノ子づき」の際、「藁鉄砲（亥ノ子つち）」ではなく「亥ノ子石」を使用する（写真二）。東川崎では、亥ノ子石をカマス（藁製の穀物入れ）に入れて周囲に引き縄を付けて使っていたという。永井のものは手が込んでおり、人頭大の丸い石に縄をぐるぐると巻き付け、形を整えて藁玉をつくり、周囲に引き縄を付け、上部に御幣を付けている（写真三）。大田では、須佐神社境内に亥ノ子石が保管されている（写真四）。

（長谷川　清之）



写真三　永井の「亥ノ子」風景

写真二　永井の「亥ノ子石」

写真四　太田の「亥ノ子石」

三六　おしろい祭

【テーマ】六「頭屋・宮座」

【地域の概要】

朝倉市は福岡県のほぼ中央部、福岡市の東南約三〇キロメートル、久留米市の北東約二〇キロメートルに位置し、南は筑後川、東は大分県日田市、西は福岡県朝倉郡筑前町、北は飯塚市、田川郡添田町に接する。市内を西から東南へと貫く国道三八六号から南側は平野を形成し、北側は古処山をはじめとする標高八〇〇～一〇〇〇メートル級の山々が連なる。平成一八（二〇〇六）年、甘木市・朝倉市・杷木町が合併して朝倉市が誕生。当該祭りが行われる大山地区は、杷木町松末地区にある。

大山は大山川に沿って細長い山峡の集落が形成されており、一番上の家から一番下にある家まで二キロメートルも離れている。集落の最上部奥村に大山祇神社がある。さらに上ると大山峠を越えて、朝倉郡東峰村宝珠山と大分県日田市畔倉山の間に出る。大山川は、平地に出たところで赤谷川と合流し筑後川に注ぐが、平成二九（二〇一七）年の九州北部豪雨の際、赤谷川とその上流で合流する乙石川流域の松末地区は、全滅するほどの大きな被害を被った。大山は上の方は砂防ダムのお陰で被害は少なかったが、下の赤谷川近くでは数軒の家が流され、神事に使う米を作っていたマツリダ（祭田）も流失した。

小早川時代の「指出前之帳」では大山村の田三町九反余、畠一町七反余と見え、「慶長石高帳」には慶長七（一六〇二）年の検地高一五七石余、うち大豆四八石余と見え、古くから人の住んだ地域と考えられる。元禄五（一六九二）年には家数二九・人数一七三（「田圃志」）、寛政六（一七九四）年は家数四九・人数二五二、馬八、牛二〇と記されている（「郷村帳写」井手家文書）。九州北部豪雨で家、田が流された数軒が村を離れ、現在は四六戸である。

【伝承地もしくは実施場所】朝倉市杷木大山字山ノ神　大山祇神社

【実施時期】一二月二日　二時から

【伝承組織】大山行政区

大山は大山川に沿ってひらけた細長い集落で、現在上組三班、大山下組四班の七組がある。以前は八組であったが、豪雨により離村者が出たため七組となった。一組は五～一〇軒、戸数が少ないところに当番が回った場合は、加勢を頼んだりする。また各組では組内で当番がまわり、当番が回ってきた組の中の当番を「元方」という。元方は一〇〇年以上に一回ほどしか回ってこない。当番が回ってきた組は、毎月の清掃、花柴上げ、注連縄作り、夏のオヨド、宮座（おしろい祭）など年間を通して神社の世話をする。マツリダ（神田）は七畝あり、元方が田植えして稲を育て、その米の藁で注連縄など神事に必要なものを作った。

【由来・伝承】

大山祇神社は元々「山神社」と言われていた。山の神は女の神様といわれ、この祭りは山の神が化粧をすることを意味するという。氏子の繁栄と新穀の豊作を神に感謝し、翌年の五穀豊穣を祈願する。直会の最中に氏子達の顔におしろい（粢）を塗って興じることは、既に江戸期の地誌類に見える。この「おしろい」は家に帰り着くまで洗ったり落としたりしてはならず、火の中に入れると火事になり、牛馬の飼料に混ぜて飲ませると無病息災と言われる。また「おしろい」がよく顔に付着するほど、次の年は豊年だとも言われる。

江戸期の地誌類には次のように記されている。

『筑前国続風土記附録』上座郡大山村

山神マルヤマノマエ　山祇命を祭れり。鎮座の始詳ならす。十一月二日に祭れり。この日神饌粢を備て祠官を初、産徒の男女面に

しとぎをぬりて興をなせり。此神事古よりのならわせなりとそ。

『筑前国続風土記拾遺』上座郡大山村

山神社　奥村に在。十一月二日粢をもて供物とす。社人神坂氏を始、産徒の男女皆面に粢粉を塗て興をなす。これ古来よりの例式なり。

また、大山祇神社のご神体は明和三（一七六六）年に造り替えられており、体銘に「明和三年丙戌正月吉日田大肥庄吉竹、半田覚兵衛」と記されている。（杷木町史編さん委員会　一九八一）

【実施内容】

一　祭りの準備

幟立て

祭りの前日の一二月一日に行う。老齢化して作業には困難を来している。

注連縄張り

祭の一週間前に、当番の組全員が集まり、注連縄を綯い、注連張りをする。以前はマツリダで米を作り、その藁を使用したが、水害でマツリダが流失したため、現在は村内の農家に早くから頼み、機械刈りしないようにして、長い茎を確保してもらう。

注連縄は、神前に張る大注連縄二、カンヤ（神屋カ、直会食を仕上げる建物）、末社二、手洗場に張る。

粢作り

以前は当番がマツリダで取れた新米で作ったが、今は新米を精米所に頼み、祭り前日までに粉にしてもらう。神前に供える粢と顔に塗るものは、固さが異なる。お供え用をまず作り、神前に供える。顔にぬる粢は、神事が終わるころ作り始める。水を多くしてドロドロ状態に捏ねる。

藁苞つくり

注連縄と一緒に作る。二個一セット

直会食の調理

直会食は三日前から、当番の組の女性が公民館で下ごしらえをし、当日カンヤで仕上げる。

直会食（写真一）の献立（七〇人分作る）

・押し寿司……三合の寿司飯で扇の地紙型と三角形の押し寿司を一つずつ作る。型から取りだしそれぞれの上にピンクと黄緑のそぼろをのせ、その上に鰤の刺身を一切れずつ乗せる）

・ヌタ……大根・人参の千切り・しめさばを酢味噌で和える。

・吸物……板蒲鉾を三等分した一切れを斜めに切ったもの・柚の香を、昆布だしの汁に入れる（椎茸は村でも採れるが使った事はない）

・煮しめ……竹輪（一本を二切れにしたもの）・人参二切・牛蒡二切・野菜昆布二・里芋二個（良いところだけを取る）・大根二切・コンニャク二切・ジャジャ豆（大豆一升を前日に炊いて味を馴染ませる。昔はイリコを入れていた）・生いわし（申し送り帳にはメザシとある）

＊大根は大きい大根を輪切りにして真ん中の良いところだけを煮る。切れ端はヌタに使う。人参も形の揃うところだけを斜め輪切りにして、切れ端はヌタに使う。

＊お供え・直会食に使う野菜は、すべて元方で作る。

二　神事

お供え

鯛一尾・酒一升・甘酒一升・白飯一盛・赤飯一盛・米一升三合・塩一キログラム・野菜（蕪・大根・人参）・果物

粢二段一盛

修祓・斎主一拝・献饌・祝詞奏上

玉串拝礼

斎主・神社総代（上下）・大山生産森林　組合長・大山区会長（上下）・大山生産　森林組役員・座元代表・　来賓

撤饌・斎主一拝

三　直会

・拝殿に向かい合って並んで座る。

・食事が運ばれる。女はカンヤから食事を出し拝殿下で座元に受け渡す。拝殿には上がれない。

・食事が揃うと森林組合長などの挨拶があり、御神酒が注がれる。乾杯した後食事となる。

・直会が始まると、カンヤではおしろいを作り始める。捏ねた米粉にさらに水を加え、ドロドロ状態にする。

・宴会の半ば頃に、湯飲みに甘酒が注がれると、神職の顔から最初におしろいを塗り始める。次々に粢が塗られていくが、おしろいは必ず下から上に塗っていく。酒を十分に飲まないとおしろいがつきにくいと言って、燗酒もどんどんまわる。おしろいが良く付着するほど翌年は豊作だという。おしろいは、拝殿の外で見ている見物客にも塗られ、あたりは笑いに包まれる（写真二）。

頭渡し

宴もたけなわとなった頃、拝殿の一角でトワタシが行われる。

神職を中心に神職の左側に当年の座元代表三名、右側に来年の座元三名が向き合って座り、当年から来年の座元に神職の手を介して盃が渡され、次年度の座元が「来年は〇〇組が座元を務めます」と宣言して終わる。宮座の申し渡し書や物品は、後日次年度の座元宅に届けられる。

拝殿は宴会で盛り上げり、トワタシも厳粛な雰囲気はなく、実際何時から行われたか分からないほどの状況の中行われた。

藁苞のみやげ（写真三）

トワタシが終わる頃から、三々五々帰り支度を始める。食事の残ったものは、座元が一人ずつ藁苞に入れる。藁苞は、二つで一つになっており、肩に振り分けに担いで、持って帰る。

おしろいは乾燥してくるにつれて顔が引きつってくるが、家に帰り着くまで落としてはならない。火の中に入れると火事になると言われ、牛馬の飼料に混ぜて飲ませると無病息災だとも言われる。

本調査は令和元（二〇一九）年一二月二日に実施した。令和五（二〇二三）年六月の補足調査で、新型コロナウイルス感染症が拡大した時も行われた事を確認したが、直会食は、女性たちの申し入れにより、令和三（二〇二一）年から作られておらず、各自弁当を持ち寄って、直会をしたという。今後も大変手がかかる調理は行われない可能性が高い。

（森　弘子）

写真一　直会食

準備中

写真二　おしろいを塗る

準備中

写真三　藁苞のお土産

準備中

三七　御供納（ごくおさめ）

【指定等】

種類　久留米市指定無形民俗文化財

名称　八丁島（はっちょうじま）の御供納

指定年月日　昭和六〇（一九八五）年六月二日

【テーマ】一五「悪霊防ぎ」

【地域の概要】

行事の行われる久留米市宮ノ陣町八丁島は、近世の八丁島村にあたる。筑後川支流の大刀洗川下流の右岸に位置する水田地帯である。村内には、行事の舞台となる八丁島池があり、天神堀ともいう。

【伝承地もしくは実施場所】

久留米市宮ノ陣（みやのじん）町八丁島　天満神社・天神堀、及び八丁島地区。

【実施時期】

毎年一二月中旬の土・日曜日（令和元（二〇一九）年は一二月一四、一五日）。古くは旧暦一一月一四、一五日に行われていたが、明治期に現在の祭日に変更された。

【伝承組織】

世話人・区長・八丁島御供納保存会によって行われる。行事運営の中心となるのは、当番組の人びとである。八丁島は、西・中ノ切・田中・奥・南池・北池・古賀茶屋（こがんちゃや）の七組に分かれており、当番は七年に一度回ってくる。この組は、古くは「八丁島七座」と呼ばれていた。調査を行った令和元（二〇一九）年は「西」が当番を務めた。

なお、以前は東の宮と西の宮とに分かれ、交互に実施していたが、明治期に東西の宮が合祀された結果、現在のような形で行っている。

また、行事の準備から実施に至るまで、女人禁制の祭りとされており、行事を知る地区の女性は鳥居の内には入らない。

【由来・伝承】

御供納は、収穫祭と人身御供譚にまつわる魔祓いとが合わさった行事とされており、いくつかの人身御供譚が伝えられている。

①城主に殺害されて池に沈められた家臣が大蛇となり、災難が続くため、毎年村人が一人ずつ人身御供として差し出された。

②「おかね」という女房が蛇身の正体を見破られて池に戻り、災害が続くため村の子どもを毎年一人ずつ人身御供としたが、ある時訪れた高僧の勧めにより、玄米三斗三升を飯にして、池に納めるようになった。

③八丁島城主の娘菊姫は、既に岩屋城の高橋家に嫁ぐことになっていたが、秋月氏からの縁談を断ったところ攻め込まれた。勝ち目がないため、菊姫を殺し、その首だけを高橋家へ嫁入りさせた。その後この菊姫の怨霊が人びとに危害を加えたので、毎年一〇歳未満の男子を人身御供に出すこととなり、後に三斗三升の玄米を炊いて筒に入れ、池の中に納める行事になった。（久留米市史編さん委員会　一九八六、八丁島御供納保存会　二〇〇六）

また、『福岡県神社誌』は、例祭について次のように記している（大日本神祇會福岡県支部　一九四四）。

当神社は例祭の前日夕、禊を池にて行ひ、男兒三四才より十才迄の者約十人位潔斎をなし、精進家に入り、女人を禁じ男子のみにて手伝を奉仕し、夜に入り丑の刻に大刀洗川の禊場に至りて禊をなし、往きの路と帰路を異にして辻々人家に至り祝ひの言葉を述べ廻り、神社拝礼を終へて精進家に帰る。午後祭典奉仕一同参列、終りて米三升三合を煮きたる御供と神酒及其器を唐櫃に奉持して神職と共に列をなし、前日禊せし池に至り舟に乗り込み神職は御供、兒童は神酒其他の器具一切を水中に納む。此の時鏑矢、

雁又矢を射放つ、是等の行事を終りて解散す、而して此の神事は神座元より奉仕す。若し御供沈まずして浮べば、神座を申し送ることを得ず翌年も奉仕すべき神法なり。

【実施内容】

以下、令和元（二〇一九）年一二月一五日に実施した現地調査を中心に、関連資料で内容を補いつつ、行事の内容を説明する。

一　行事の準備

九月二九日に御供納世話人が、神職に挨拶・相談に行く。この際、今年の奉納人の子どもについても伝える。子どもは、当番区の三歳から小学校六年生までの男子から選ばれる。家に不幸のあった子は務められない。また、過去に務めた子どもも務められない。令和元（二〇一九）年は一名（三歳児）であったが、その前年は三名の子供が務めた。昔は三人兄弟が選ばれ、一番年下が「本御供」、次が「笹御供」、一番年長が「手伝い」とした（久留米市史編さん委員会　一九八六）。なお同日、世話人の話合いも行われる。

一〇月二二日に第一回本座話合いがあり、御供納に際しての役割分担を決める。一一月中旬には注連縄や、御供米を入れるヤカゴ、お潮井を汲む竹筒などが作られる。一二月一三日には、禊ぎ場所や水取り場所の最終点検のほか、祭り期間中に使う者や食料の買い物を行う。

一二月一四日の一〇時頃から、公民館・天満神社・天神堀の注連縄取り付けを行う。また、船の掃除や、供物の買い出しを行うとともに、各会場の準備を行う。

写真一　お潮井汲み

二　お潮井くみ

一二月一四日一六時に、天満神社で神事が執り行われる。拝殿には子どもとその父親が座り、後ろに役員が並ぶ。その際、女性はお宮に入ってはいけないとされる。神事の後、砂川原付近の床島水路までお潮井くみに行く。お潮井は道を清めるために用いる。容器は一本の青竹の中央を細くなるように削り、その箇所を折り返して縛り、持ち手としている。お潮井を汲む道具も青竹を用いたもので二本用意されている。禊場までは、宮司が御幣を振って道を清めながら進む。道の要所には御幣が立てられている。禊場でお潮井を汲み（写真一）、再び八丁島天満神社まで戻るが、その際、往路と復路とでは同じ道を通らないようにする。

三　本禊

二三時半頃、奉納者たちが宮司とともに天満神社に参拝した後、本禊ぎに出発する。宮司は榊で道を清めながら先頭を歩く。一行は「ヨーイソラ」と掛け声を繰り返しながら禊場に向かう。辻にさしかかると祝い歌を歌う。現在は「祝いましょう、祝って三権（三拍）、もう一つとせ（三拍）、ヨーイソラ」であるが、『久留米市史』には次のようにある。

「祝いましょう（二拍）、もう一つとせ（二拍）、祝うて三献（三拍）」（久留米市史編さん委員会　一九八六）。

○時頃に禊場に到着すると、宮司は装束を脱ぎ、禊場に立てられた御幣に向かって全身を浄める。寒中でもあり、子どもが水に入るのは膝下までである（写真二）。なお、かつては加茂ヶ池と大刀洗川・筑後川の三箇所で禊をしており、往復で七キロメートル程歩いていた。身を清めることが重視されてお

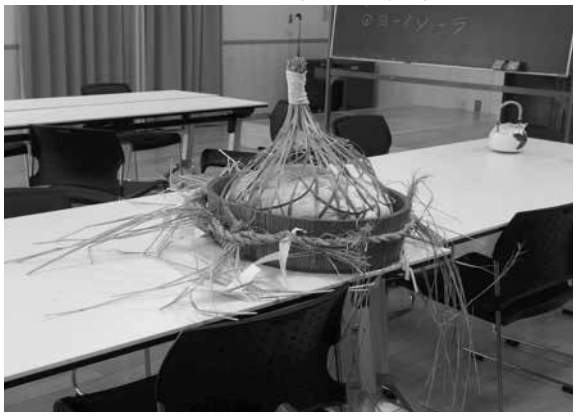
写真二　本禊

り、その際には肩まで水に入っていたという。

禊が終わると、子ども宅前と池に立ち寄り、それぞれでお祓いをする。○時四五分には天満神社に戻り、参拝して行事終了となる。その後、奉納者親子はそのまま天満神社に泊まるのだが、近年は隣接する公民館（集落センター）に泊まっている。

四　御供

天神堀に沈められる御供は、先述の伝承通り天神堀に棲む大蛇への人身御供の代わりであると伝えられている。三斗三升三勺（約七・五キログラム）の玄米を炊いて、三三本の女竹で作ったヤカゴに納めたものである（写真三）。前日（一四日）の夕方には玄米を水につけて準備し、一五日（当日）の朝に蒸して、ヤカゴに包み、桶に入れて、長櫃に収められる。



写真三　御供

五　神事

一五日の一四時頃、天満神社に宮司・奉納者・自治会長・宮総代・座元などが集まり、神事が執り行われる（写真四）。最初に長櫃に納められた御供を宮司が祓う（写真五）。

続いて天満神社にて祭典が開始される。一同礼の後、宮司が祓い清めの祝詞を唱え、献饌に続いて宮司が祝詞を奏上する。祝詞では、三〇〇有余年の歴史ある祭りであること、菊姫物語や人身御供の伝承があること、昭和六〇（一九八五）年に久留米市の文化財に指定されたことなどが紹介される。また、三升三合の玄米を大蛇・龍神に供えて御心を鎮め、翌年の五穀豊穣を祈ることが唱えられる。

写真四　天満神社での記念撮影

祝詞奏上が終わると、参拝者による玉串拝礼が行われる。神社役員のほか、衆議院議員、市会議員、国会議員秘書などの奉奠が終わると、祭典は終了となり、副市長や八丁島区長による挨拶がある。

写真五　御供を祓う神職

六　御供納

一五時頃、天満神社から天神堀に向けて出発する（写真六）。行列順は、塩撒き→潮振り→宮司→→玄米担ぎ→親子→弓矢持ち→船頭、その他。池に到着すると、玉太郎宮竜宮姫前にて神事がある（写真七）。

神事が終わると、竹筒に入ったお潮井を池に注ぐ。船の前方に御供を載せ、その前に宮司が座る。船の中央には奉納人親子が座り、船の艫には竿持ちが立つ。出船すると、楠の生えた島の周りを右回りに回る（写真八）。最初の一周は神職が笛を吹きながら回る。二周目は神職が唱え言を唱えながら回る。最後に御供を池の水に浸けながら「竜神の神」と三回唱え、「エイッ」の掛け声とともに御供を池に沈めると（写真九）、ほぼ同時に、島を龍に見立てて弓が三本放たれる（写

真一〇）。船上の宮司が切紙を撒き、岸に船が着くと、かわらけを割って池に投げ入れる。最後に副市長の挨拶が終わると、婦人会によるぜんざいの振る舞いがある。

七　当渡式

一七時頃に当渡式がある。「戸渡」と記されることもある。今年の当番（西）から来年の当番（中ノ通）に役渡しをする。来年の組の人が二人ほど来て、謡い三番を披露し、帳面類の引き継ぎをする。当番の時に困るのは、地区に一〇歳以下の男の子がいないときで、その際には、福岡や大牟田に出て行った人の子どもに頼むこともある。

【類似行事・関連行事】

久留米水天宮（すいてんぐう）でも、一二月一五日に白米と魚を池に納める水神祭りがあったという。筑後川中流域における川祭りの水神祭りとの共通性の指摘もある（久留米市史編さん委員会　一九八六）

（須永　敬）

写真六　天満神社を出発する

写真七　天神堀での祭典

写真九　御供を池に沈める

写真八　島の周りを舟で廻る

写真一〇　天神堀の島と放たれた矢

三八　ウシサマ

【指定等】

種類　糸島市指定無形民俗文化財

名称　旧怡土郡のウシサマ

指定年月日　令和五（二〇二三）年三月三〇日

【テーマ】三五「丑祭り」

【別名】ウシサマ、ウシドン、丑の日さん、タノカミサンなど

【地域の概要】

糸島市は福岡県の最西部に位置し、糸島半島の中央部及び西部と、その南側から南西の福岡県最短部の一帯を市域とする。北側と西端部は玄界灘に面し、東側は福岡市に接する。南部は背振山地があり、佐賀県と接している山岳地域で、南西部は唐津市に、南東部は佐賀市に接する。なかでも、怡土郡と志摩郡は明治一一（一八七八）年に行政区画として発足した。

二丈地域は昭和三〇（一九五五）年に怡土郡の一貴山村、深江村、福吉村が合併し、二丈村が発足。その後、昭和四〇（一九六五）年に二丈村が二丈町になり、平成二二（二〇一〇）年に糸島市となる。

前原地域は明治三四（一九〇一）年に志摩郡の前原村が前原町になり、昭和六（一九三一）年に波多江村、加布里村と合併、昭和三〇（一九五五）年に雷山村、長糸村と合併して新町制による前原町になる。その後、昭和四年（一九九二）年に前原市となるが、平成二二（二〇一〇）年に糸島市へ生まれ変わった。

【伝承地もしくは実施場所】

旧怡土郡と旧志摩郡を中心とした糸島市域一帯

【実施時期】霜月の初丑の日

【伝承組織】

糸島市の農家。令和四（二〇二二）年の時点でウシサマを実施している農家は、糸島市内の前原地域で二軒、二丈地域で二軒の計四軒。

【由来・伝承】

かつて佐賀県北部から福岡県筑前地方に見られた農家における稲の収穫儀礼。旧暦の霜月の丑の日を選んで行われたことからウシサマ、ウシドンなどと呼ばれている。

この日は、二月の初丑の日に田圃に降りた作神様（田の神様）が稲の収穫後に、お帰りになる日とされている。そのため、農家の土間に祀られている荒神様のクド（竈）の上や荒神様を祀る棚の下に臼を置いて祭壇を作り、供物を供え、そこに作神様を田圃から家に迎えて送り出す。つまり、ウシサマは作神様を指し、この行事は稲の豊作を感謝する農耕儀礼といえる。

かつては多くの農家が行ってきた農耕儀礼であるが、現在は旧怡土郡を中心とした糸島市域一帯で数軒を残すのみである。

【実施内容】

※新型コロナウイルス感染症拡大のため、実施を見送っている家もある。諸事情により調査不可なため過去の事例を参照して執筆した。

一　準備

一〇月頃の稲刈りの時期に、田圃の隅に行事で使用する稲穂を刈らずに一年の月の数と同じ一二株を、閏年の場合は一三株を残しておく。稲株をそのまま田圃に残しておくと稲穂を鳥に食べられてしまうので、藁で丁寧に覆い隠す。藁束を稲穂が見えないように被せ、数箇所を結び、行事用の稲穂を確保しておく。

二　実施

平成二五（二〇一三）年一二月一三日（二番丑の日）、糸島市多久

地域のとある農家では、早朝にウシサマへ供える餅の準備を始める。餅搗き杵と臼を用い、その年に収穫した糯米を使用する。搗きあがった餅は、上下が同じくらいの大きさの鏡餅にする。下に置く餅は白餅、上に重ねる餅には炊いた小豆をまぶす。また、この時に神棚や仏壇、荒神様へ供えるための小豆をまぶした小餅を作る。

夕方になると、農家の主人が収穫せずに残しておいた稲穂を刈り取りに田圃へ向かい、稲穂を覆っていた藁を外し、稲を鎌で手刈りする。六株ずつ束ねて二束にしてかたちを整え、肩に担いで持ち帰る。地域によっては整えた稲束を棒の両端に差して持ち帰ることもある。

この際、豊作で稲が重たいというウシサマへの感謝を表現するために、いかにも重そうな身振りをして稲束を持ち帰る。

自宅に戻ると、稲束を荒神様の前に置き、鏡餅、柳箸、季節の野菜や魚一尾、一〇センチメートル四方のヘギ（折敷）に炊いた新米を三角に盛り上げて端にナマスを添えたものなどを供える（写真一）。また、神棚には灯明、柴、神酒、小豆をまぶした小餅などを供える。

写真一　ウシサマへのお供え

供物が揃ったら、家族がそれぞれお参りして、ウシサマの行事は終了する。翌日、お供えした鏡餅を分けて近所に配る。

（石井　和帆）

三九　白糸の寒みそぎ

【指定等】

種類　糸島市指定無形民俗文化財

名称　白糸の寒みそぎ

指定年月日　平成二八（二〇一六）年三月三一日

【テーマ】一一「託宣・占い」三八「禊ぎ祓い」

【別名】寒禊ぎ

【地域の概要】

糸島市は福岡県の西端に位置する。糸島半島及びその基部を占め、北西は玄界灘に臨み美しい海岸線が続く。東は福岡市西区、西は佐賀県唐津市に接し、南には脊振山系の山並みが連なる。市の中央部を東西にＪＲ筑肥線（福岡市営地下鉄と直結）、国道二〇二号・国道二〇二号バイパス、西九州自動車道が通り、中央部を中心に市街地が広がる。また、福岡市への交通至便であることから住宅地も急増した。一方、農業、漁業も盛んな市である。

明治二九（一八九六）年、怡土郡と志摩郡が合併して糸島郡ができた。成立時は一九箇村、前原村に郡役所が置かれ、明治三四（一九〇一）年、前原村は町制施行した。その後何度かの合併や離郡・離村を経て、昭和三〇（一九五五）年志摩村、二丈村が成立、昭和四〇（一九六五）年にそれぞれ町制を施行し、糸島郡は三町になった。平成二一（二〇〇九）年、前原市・志摩町・二丈町が合併し糸島市となった。

糸島市白糸行政区は脊振山地の獅子舞岳（標高八四一メートル）山麓にあり、旧前原市に属する。中世には宇美八幡宮領荘園長野庄、近世は怡土郡長野村となった。糸島市から脊振山地を経由して佐賀方面に通じる長野峠の途中、標高約三〇〇メートル地点にある。村内を流れる川付川の上流には、福岡県指定名勝白糸の滝がある。小倉山小蔵寺は、天竺僧清賀上人が開いたという怡土七ヶ寺の一つで、現在の白糸の滝近くにある小蔵寺の地ではなく、白糸集落一帯にあり、寒禊ぎの行事が行われる熊野神社は、その鎮守神、観音堂は堂宇であったと伝えられる。熊野神社には熊野三所権現を祀り、観音堂には室町後期の作とみられる木造観音菩薩立像、木造勢至菩薩立像、木造如来形立像、江戸時代の阿弥陀如来坐像などが安置されている。熊野神社には天文一一（一五四二）年、原田隆種が小蔵寺鎮守権現の社を再建した由記された棟札があり、中世には宇美八幡宮神宮寺（糸島市川付）の社僧長嶽山瑞雲寺の支配を受け、現在も宇美八幡宮宮司家が祭祀を司っている。

【伝承地もしくは実施場所】糸島市白糸　熊野神社、観音堂、川付川

【実施時期】

一二月の第三土曜日・日曜日（平成二六（二〇一四）年、以前は一二月一七日・一八日、旧暦で実施の時は一一月一七・一八日）

【伝承組織】白糸行政区

白糸行政区長（氏子会長）の下に総代三名（区の役員を兼ねることもある）、宮方二名（装束を着て神事の手伝い）。

白糸区に住む五歳以上の男子。

【由来・伝承】

『筑前国続風土記』には、「一一月一八日祭禮あり。女人の参詣をゆるさず。」とあり、遅くとも宝永六（一七〇九）年には行われていたものと推察される。宮司（昭和二五年生まれ）の話によると、「自分が二〇歳の頃に四〇〇年の歴史と言っていたので、四五〇年以上の歴史と言えるのではないか。白糸の集落では、元岡（福岡市西区）の疫神社で受けてきた掛け軸を祀り、毎月常会が今でも行われている。昔疫病が流行ったときに、山伏が禊ぎをするようなことがあったのでは

ないか」と言う。ちなみに、熊野神社宮司は、川付川の本流長野川（ながのがわ）の下流の糸島市川付にある宇美八幡宮宮司でもあり、先祖は江戸期までは、高野山金剛峯寺に属する長嶽山瑞雲院寶蔵坊で、熊野神社をも統轄していた。

【実施内容】

白糸の滝の下流にあたる熊野神社の南西約一五〇メートルの川付川で御国米（ごこくまい）と称する新米四升を研ぎ（写真一）、炊きあがった飯を高盛にしてその傾き具合により新年の吉凶を占う祭りである（写真二）。米を研ぐ間、同行の男性達が、同川のすぐ下流で円陣になって禊ぎをする。

祭礼は〇時から始まる。

二三時四五分、寄せ太鼓の一番太鼓が鳴らされると、家々で酒盛りしていた男たちが準備して家を出始める。五分から一〇分後に二番太鼓が鳴らされ、村の青壮年の男たちが裸に白鉢巻き、フンドシ姿で集まってくる。足は地下足袋、裸足、運動靴などを履いている。境内には「寒禊ぎ参加者各位」として「身体に入れ墨、タトウーをしている人の参加をかたくお断りします」の貼り紙がしてある。拝殿には注連縄を巻き中にそれぞれに四升の米を分けた新米の入った桶、御神酒が供えてある。参加者が神殿前に集まり、〇時に三番太鼓が鳴らされると祭典が始まる。

写真一　御国米を研ぐ男衆

写真二　白飯の高盛

まず大祓が奏上され、修祓、お祓いは桶を担ぐ三人（写真三）から始められ、御神酒を頂いた後、桶が役員から担ぎ手に手渡される。担ぎ手は元来年男が選ばれたが、現在は年男がいない年もある。彼らは桶を肩に担ぎ、竹松明に先導されて長野川に向かう。時刻は〇時一〇分を回っている。村中の男たちは次々に御神酒を頂き、順次、駆け足で後に従う。この間、宮司は神殿で祝詞を奏上し、祭典を進める。桶を担いで川に向かった三人は川に入り、段になっているところで一列に並び御国米を研ぐ。「白糸氏子中」と書かれた、高提灯の灯りを頼りに、清らかな川水で七回研いで、七回濯ぐ。この間、男たち数一〇人は円陣を組んで禊を行う。円陣の中には警官数人が紛れており、風紀を乱す行為のある者は排除したりする役目を負っている。寒風の中、川に浸かり禊を行い、あるいは水を掛け合ったりする姿は勇壮で、川岸には多くの見物客がいる。しかし橋の上から見下ろす形で見物することは禁じられている。

新年の吉凶を占う神事で、神聖な川で米を研ぐことが大切なところであるが、そちらに目をやる者はほとんどいない。禊の場面が勇壮で象徴的であることから禊が主役であるかのごとく捉えられがちで、禊が終わると祭りの参加者や観衆の多くは急激に減っていく。

その一方で神事は粛々と続けられる。研いだ米は神社に持ち帰り、羽釜に移して御飯を炊く。御飯を炊く薪はすべて竹で、木材は使わない。炊き上がった御国米は、ユリに入れ四等分し、正方形の折ぎ盆に、三つの円錐形の高盛飯と、一二の小さな円錐形に形作られる（写真四）。一二は一年の月の数で、旧暦で一三月ある閏年には一三個作る。三台の高盛飯は、それぞれ一升ずつで、神前に供えられ、その先端部の傾きで吉凶を占う。占いの基準は明らかではないが、大豆、水米、麦、吉備（黍）、陸米、小豆、菜、粟の八つの作物が八方向に割り当てられる。夜明け頃には、先端は一方向に傾き、それによって来年の作柄を占う。

直会食は、こんにゃく飯のまん丸いおにぎりに白菜・高菜・大根な

どの漬物である。こんにゃく飯は神事とは別の米を使い、ちぎったこんにゃくを入れ、醤油だけで味付けしたものである。神事の始まりから直会の終わりまで、女は一人も係わらない。刃物を使ってはならないという禁忌があり、コンニャクも漬物も手でちぎる。漬物を手でちぎるのはなかなか大変で、酒も回り大いに賑わう。二時半頃すべて終了する。

調査は平成二七（二〇一五）年に実施し、令和五（二〇二三）年六月に補足の聞き取り調査を行った。新型コロナウイルス感染症が拡大した時は役員だけで実施したが、少人数だけで寒い川に入り禊ぎをすることは非常に辛かったという。

（森　弘子）

写真三　御国米を入れた桶を運ぶ三人

写真四　御供作り

四〇　川まつり

【テーマ】二七「川祭り」

【別名】水神祭り、かっぱ祭り

なお、水神祭りの後に「山野の楽」が実施されるため、祭り全体を指して奏楽祭、楽祭、牛馬祭、楽打、河童祭りともいわれ、氏子安全、牛馬安全、五穀豊穣祈願、火災除けの祭りともされる。

【地域の概要】

旧稲築町（現在嘉麻市）は旧嘉穂郡（飯塚市・嘉穂郡八町）の中央部に位置する。町中央部には遠賀川の本流が流れ、支流の山田川と合流している。これらの両川の流域には広大な田地が広がり、筑豊地域有数の穀倉地帯でもあった。

一方、明治三一（一八九八）年以降、三井財閥による山野炭鉱を手始めに石炭採掘が進められ、石炭荷積・運搬のため筑前山野駅（昭和三九（一九六四）年には廃止）が出来るなど、筑豊有数の炭鉱の町として栄える。しかし昭和三〇年以降閉山する炭鉱が出て、昭和四〇（一九六五）年の山野炭鉱ガス爆発を契機とし、昭和四八（一九七三）年旧稲築町の炭鉱は閉山する。

平成一八（二〇〇六）年三月には山田市・碓井町・嘉穂町と合併し、嘉麻市となる。現在では農業従事者も減少するなか、稲築地域では、漆生の河童と相撲をとる話や、口春「三郎丸の大クス」の話にあるような、牛にいたずらして木に縛り付けられる河童の話などの河童伝説にちなんで「なつきちゃん」といわれる河童の像を建立し、河童による地域おこしも実施している。

【伝承地もしくは実施場所】

嘉麻市山野若八幡宮領、祇園社（須賀神社）境内経晴社鳥居前の水神棚

【実施日】

毎年の秋分の日（九月二三日）、福岡県指定無形民俗文化財ヤマノンガク（「山野の楽」）の奉納が行われるガクサイ（楽祭）の二日目に実施される。

往古は六月晦日の夏越祓いの日に実施されていたというが、以前は八月の社日に実施されていたともいう。明治四三（一九一二）年九月二四日の「奏楽祭規約」では、「毎年秋分の日に実施」とあり、この時期には、現在の秋分の日に実施したものと考えられる。

【伝承組織】

福岡県指定無形民俗文化財「山野の楽」保存会（会長永富康嗣ほか二〇名で構成される。（令和五（二〇二三）年五月現在）（以下「保存会」と記す。）とマツリザ（祭座）によって実施される。保存会は平成六（一九九四）年、稲築文化ふれあい伝承館（以下「伝承館」と記す。）の完成時に組織されるが、それ以前は祭座が楽祭の世話人となり実施していた。

祭座はかつては、山野にあった五軒の庄屋が輪番に当番の座元となり実施していたという。その後、五軒単位で一つの祭座となって輪番で行うようになったという。しかし、その運営も難しくなり、昭和三〇年代後半には、山野地区一組から一二組までの各隣組単位で輪番に祭座を受け持つようになった。そして、現在ではそのうち一〇組が祭座となり、一〇年に一回巡ってくる。

五軒単位で祭座を担っていた時代には、楽打ちの練習始めの小屋入りから、前日の〆上祭り、御幣切り、口開座、当日の水神祭りに使用する棚や供物、本座といい、ホンゼン（本膳）とよばれる楽方の食事の準備や接待、太鼓下座など楽祭にかかる準備から後片付けまで、その経費も含めて実施していたという。そのため、祭座の座元になった家では、本座を行うために、畳や障子の張替えなどその負担は大変だったという。

【由来・伝承】

水神祭りを行う由来については、九州各地に残っている河童伝説がある。福岡県内では、筑後川流域や遠賀川流域に濃厚に残っている。豊前地域には民俗芸能としての風流「カッパ楽」、筑後楽ともいわれ、大分県玖珠郡、日田郡、下毛郡といった大分県西部地方に伝えられる楽打ちがある。その伝承には平家落人が筑後川を渡って逃げてきたという伝承とともに、亡くなった人の霊がカッパとなり、水難事故をはじめとする様々な災厄をなすので、その霊を鎮魂させるために行うということが聞かれる。

前述のように旧稲築町地域には河童伝説が残る地域であり、八月にカワマツリが実施される。このカワマツリとは別の水神祭りの由来伝承として、「山野の楽」の由来伝承に河童伝説が深く関わっている。

「山野の楽」は寛元二（一二四四）年、立岩別府管内総鎮守として宇佐八幡宮の御分霊を勧請した際に、宇佐大宮司公高が伝えたものとされる。一方で農耕牛が多く死んだため、占師に尋ねると「水神様の祟りであるから楽打ちを宇佐神宮に習ってするとよい」と告げられたことから始まったものともいわれている。これは旧碓井町下臼井西の水神祭りの由来にも、「ある年、牛馬が多く死んだので、地区内三四戸が座祭りで水神祭りを行うようになったとされる。」とあり、この地域の水神祭りの由来伝承として、牛馬安全と水神信仰が結びついていることを物語る。

また、明治一三（一八八〇）年に一度楽を中断したところ、山野地区で火災が頻発したため、筑後の寅烝という占師に占ってもらうと、「家が三軒になるまで楽打ちをやめないと誓ったのにも関わらず、その制約を破ったために、若八幡宮の東側にある溜池の河童が腹を立てている」と告げられた。そこで、明治二三（一八九〇）年に復活して、それ以後は休まず現在に伝わる。これら占師の素性は不明であるが、いずれも民間宗教者が関与し、災厄の原因を水に係る神霊の祟りとしている点は留意される。

なお、これらとは別に、昔、山野の溜池には河童が住んでいたが、土地を開墾して、溜池を埋め立ててしまったため、河童の住処がなくなってしまった。そのため、河童が怒って水の便を悪くしたために火災が起きるようになった。そこで河童に遠賀川（嘉麻川）の白門に移ってもらおうとお供えとお祭りをしたのが、秋分の日に行われる「山野の楽」の祭りであるとの河童伝説に関わる由来・伝承がある。ここには、同じ河童の怒りでも、人間が環境破壊（溜池を埋める）をしたことによる水の神霊の怒りが、火災という災厄をもたらしたので、その滅罪のために実施するという新しい由来伝説も生まれている。

【実施内容】

「山野の楽」が行われる、楽祭の二日目（秋分の日）一〇時、若八幡神社拝殿にて、宮司はじめ神職、神社関係者（氏子会）、祭座、山野の楽保存会、楽方・囃子方と来賓の参列の下で神事（奏楽の儀）が行われる。

祭典終了後、楽方は若八幡宮横にある伝承館に集まり、本座が持たれる。伝承館内に祭壇を設え、本膳（鯛・膾・吸物、漬物、御神酒）を一膳だけ神前に供え、「一献流し」といい、楽方、祭座、杯を回す儀式が執り行われ、柿の葉寿司や弁当による中食の接待がある。かつては祭座の座元の家で楽方の人数分の本膳が用意され、饗膳が行われていた。

この本膳行事が済むと、楽方は遠賀川（嘉麻川）の白門にある茶屋ノ元橋のところまで、若八幡宮横から採ってきた、柳の枝を持って長着姿で歩いて行く。昔は木造の橋で、口春との境界だったが、県道敷設の際にコンクリートになり、現在の場所に移動している。川には注連縄が張ってあり、オシオイトリ（お潮井とり）が行われる。

まず、楽方の年長者が鯛の頭を川の中に投げ込み（写真一）、柳の枝を川の水に浸して、持ち帰る（写真二）。この柳は、昔は茶屋ノ元橋のそばにあったものだが、県道敷設のために神社横に移植したものという。

各人祇園社境内ヘバル（経晴社）前の平地にある水神棚に供えて、

参拝する（写真三）。

かつては本膳に出された鯛を食べた後、鯛の頭を白布に包んで川まで持って行って流していたとされる。この理由については不明だが、川に住む神霊に対する供物の一種であろうと思われる。

水神棚は榊を中心に、その周りに、二メートルほどの笹付の女竹（篠竹）を四方に立て、笹なしの女竹約一メートルの長さのものを二〇本で編んだ棚を設け、その上部五〇センチメートル程のところに注連縄を巡らせ、各一辺には、紙垂と稲穂を三箇所、計一二箇所取り付ける。その四柱の竹にワラワン（藁椀）を下げる（写真四）。藁椀は稲藁を七回半巻いて椀型に成型したもの。現在は店で売っている鳥の巣を利用したものを吊っている。なお、榊にも大きな御幣が飾られる（写真五）。

水神棚には鯛一尾、オゴク（御供、白飯を押器に入れて三角錐に成形したもの）三個、煮しめ（蓮根三、蒟蒻二、里芋三）、米一升、酒一升、塩を供える。藁椀には柿、栗、川魚（鮒）を少しずつ入れる。かつては、里芋、蓮根、蒟蒻を煮干しで焚き、その上に栗と柿を入れ、こしょう味噌をつけて火に炙った、干した川魚を乗せていた。

オゴクをはじめワラワンに供えるものは宮司宅で準備し、それらを祭座の男性が水神棚に供える。

一三時三〇分から、保存会及び祭座、神社役員が参加の元で、神職による水神祭りの神事が行われる。この間、楽方等は衣装の準備のために伝承館に移動する。神事終了後、伝承館より高張提灯、祭座の代表、氏子会、区長、保存会、太鼓を先頭に楽方行列を組んで地域内を巡る。山野第一公民館、大宮司跡（喜蔵の庭）にて楽打ちがあり、そこから稲穂を草鞋につけて巡行し、若八幡宮の馬場にて水神棚のある祇園社の方に向かって楽打ちが行われる。以前は水神棚の前で行われていたという。

写真一　川に投げ込む鯛の頭

写真二　柳の葉を川につける

写真三　柳の枝を水神棚に供える

楽方は、この楽の特徴でもある背にゴヘイ（白幣束）四五枚を付けた約二メートルのヒサオ（幣竿）を担ぎ、胸に太鼓をつけた中学生男子一二名、囃子は笛方四名、鉦方と太鼓方各二名の小学生四名の計二〇名で構成される。楽は鎮魂を意味する「笛楽」、祈願を意味する「歌楽」の二つがあり、二列に向き合って並んで踊る。

楽が終了した後、水神棚の棚や飾り、供えた柳やワラワンの供物は、そのままの状態に置かれている。川に流すというような話はなく、かつては火で焼いたりしたものだという。

嘉穂地方では、このような水神棚を作って行う水神まつりが各地でみられる。またかつてのカワマツリ行事は、遠賀川（嘉麻川）流域で八月に水神棚を作って行われていたが、現在では神事のみを実施するところが多くなっている。ただ、神社境内に常設の水神棚を有し、こ

のような風流楽を伴っているのは、山野地区だけにみられる特徴の一つといえる。

【類似行事・関連行事】

福岡県の河川流域には水神を祀る例が多くみられる。民俗学研究者である故佐々木哲哉氏によれば、県内の水神まつりは「御願掛け」と「御願成就」の二つの要素があるという。前者は本田作りへ移行する前、田の水口又は取水口にあたる川瀬に水神棚を作る際に行うもの、後者は旧暦八月一日の八朔の周辺、田の水落としをする際に水神棚をかけ、稲が実るよう祈願するもので、本来はこの二つの儀礼が対応していたものが、一方が欠けて一回だけ実施しているところが多くなっていると指摘している。

写真四　水神様の供物

写真五　水神棚の飾り

県内各市町村史をみると、四月～五月に実施するところが県南及び東部地域に多い。田植あるいはサナブリ後としているのが、添田町、豊津町（現みやこ町）、穂波町（現飯塚市）、大平村（現上毛町）、若宮町（現宮若市）、飯塚市、川崎町など遠賀川流域と甘木市（現朝倉市）、吉井町（現うきは市）、田主丸町（現久留米市）といった筑後川流域にみられる。

名称的には、カワマツリ、スイジンサマの祭りのほか、県中央から北部にはダマツリ（「駄祭」）の名称で、水神＝田の神＝牛馬安全の信仰となっているものがみられる。県中西部には、落水直前の九月（八朔）に実施される水神祭りをダブリュウ（「駄浮立／駄風流」）とするところがある。県東部から中央部にかけては「七瀬祓い」「瀬祓い」と称し、田植開始前に水の恩恵と五穀豊穣を水神に祈願するところもある。特に県中央部のダマツリには豊前坊参り等が行われているように、修験色が強いようである。概してその多くが「座祭り」の形態で行われ、共同祈願の要素を強く残しているところにも特徴がある。

形態的にみると、竹を四隅に立てて注連縄を張って棚を作る「水神棚系」と、竹に藁で作ったツクリモノを吊るして、川など水に関連する場所に立てる「水神竹系」に分類される。さらに「水神竹系」は「藁苞」を吊るすもの（「藁苞型」）と藁で船型に作った「藁船」を下げるもの（「藁船型」）に大きく分類される。なお、これらが混合しているところもみられる。

「水神棚系」の祭りは主として筑後川周辺流域より北にあるほとんどの地域、遠賀川水系にて行われ、県内中西部にかけて多くみられる。

七月初旬（現在では第一日曜日）、糸島市深江地区では、川や海に入る前に、子どもを水難事故から守り、成長を祝うための川祭りが行われる。海浜に、長さ一八メートル程度の笹竹を約三メートル四方に立て、笹竹の上部に子どもが「八大龍王川之神」と書いた習字紙、茄子やキュウリなど夏野菜の絵を描いた紙を結びつけ、周囲に注連縄を巡らせた祭壇を作って水神祭りが行われる。そこには、仏教的な要素とともに七夕行事との関連をうかがわせるものがある。

「水神竹系」「藁苞型」が筑後および県南部地域である、大木町をはじめ筑後市、柳川市、瀬高町、三潴町、田主丸町、吉井町、上陽町など旧三潴郡地域、山門郡、八女郡地域とする筑後川、矢部川水系の地域にみられる。「水神竹系」「藁舟型」が県東部地域の一部行橋市、豊津町にみられる。時期は異なるが、「瀬祓い神事」が行われる地域でもあり、県内で地域的特徴が見いだせる。

（吉留　徹）

第五章　今後の展望

本章では、福岡県として無形の民俗文化財に関して取り組むべき課題を述べて、本書の総括としたい。

令和三年に刊行した『福岡県文化財保護大綱』では、本県における民俗文化財に係る課題を挙げている。以下にその課題を簡単にまとめる。

①民俗文化財の体系的な調査・把握に加え、指定の考え方についての整理。

②無形の民俗文化財は人から人へ伝承されていくものであるため、時代に合わせて内容的な変化を認めざるを得ない部分があるものの、どの程度変わっているのか、追跡調査が必要。

③②の観点から、調査による記録の作成が重要な作業として位置付けられるため、専門的視点による調査や、映像による記録作成も必要。

④有形の民俗文化財の資料の保管の問題と県内全域を対象とした体系的な情報収集の必要性。

本事業では、市町村文化財主管課の協力を得て基礎調査を行い、その中から委員会で選択したものを詳細調査の対象とした。つまり、県内全域の祭り・行事を基礎調査レベルで把握することができたということである。

また、今回の事業によって、詳細調査もしくは関連行事調査の対象となった祭り・行事については、過去に市町村や県によって実施された調査との比較が可能になると考えられる。この調査の段階で、行事の様子を写真で撮影し、場合によっては記録動画を撮影しているものもあるため、課題②と③の一部分を達成することができている。今後このような記録物のアーカイブ化を進めることによって、祭り・行事の適切な保護の一助としたい。

さらに、無形の民俗文化財には、風俗・慣習、民俗芸能、民俗技術があるが、今回の調査で風俗・慣習の一部の悉皆的な調査を実施することができた。また、福岡県では、過去に『福岡県の民俗芸能』（昭和五三年）、『福岡県の民俗芸能―福岡県民俗芸能緊急調査―』（平成四年）、『福岡県の諸職』（平成二年）といった調査を実施し、無形の民俗文化財の各種別の調査を行ってきた。

しかし、過去に行った調査から三〇年以上が経ち、現在どのような伝承状況にあるのか定かでないものも多い。このような観点から、課題の②は継続的に実施していくべきものであり、それは祭り・行事に限ったものではないと言える。なお、『諸職』については、令和二年に追跡調査を行った結果、やはり現在では失われているものが多くあることが判明し、この傾向は、少子高齢化や人口減少等によって、他の種別についても今後加速していくものと思われる。

このような重要な文化財の滅失を防ぐために保護が必要であり、保護する際には客観的な指定の基準が必要である。しかし、福岡県には民俗文化財を指定する際の独自の基準は無く、国の指定方針に準拠するような形でこれまで保護を実施してきた。したがって、今回祭り・行事の悉皆的な調査を実施したので、他の種別についても順次調査を行い、全体を体系的に整理し独自の指定の考え方について整理する必要がある。

最後に、今回の祭り・行事調査では、市町村文化財担当職員・地元保存会の皆様に多大なる御協力と御尽力を得た。本事業のような悉皆的な調査を実施する際には、地元の協力と理解が必須であり、地元無しでの調査は成り立たない。文化財は地元で守られ、また継承されてきたものであるため、福岡県では今後より一層、市町村・地元との連携を深め、県内の文化財の適切な保護に邁進していきたいと考える。

（梶佐古　幸謙）

第六章　基礎調査一覧

本章では、県内にある六〇の市町村が実施した基礎調査の一覧表を示す。調査については、第一章の図一に示した旧市町村単位を対象に実施した。

以下の表には、まず地域の区分について示す。旧市町村は全部で三三七箇所あり、それぞれについて、地区名（旧村名等）、郡名（旧郡）、藩、現市町村名を示す。番号は旧市町村の通し番号で、基礎調査一覧表の番号と対応している。

この表の次に、基礎調査一覧表を示している。これは、右記した地域区分を基にして、県内六〇市町村文化財行政主管課の協力のうえ作成し、事務局がとりまとめた。

それぞれの行事ごとに、行事名、行事の実施日、実施内容、テーマ等を記載している。

（梶佐古　幸謙）

地区名一覧表の一

番号	地区名	旧郡	現市町村
1	箱崎町	糟屋郡	福岡市
2	大川村		粕屋町
3	古賀町		古賀市
4	勢門村		篠栗町
5	志免町		志免町
6	和白村		福岡市
7	立花村		新宮町
8	篠栗町		篠栗町
9	志賀島村		福岡市
10	須恵村		須恵町
11	小野村		古賀市
12	仲原村		粕屋町
13	青柳村		古賀市
14	新宮村		新宮町
15	多々良村		福岡市
16	香椎町		
17	宇美町		宇美町
18	久原村		久山町
19	山田村		
20	吉武村	宗像郡	宗像市
21	赤間町		
22	河東村		
23	南郷村		
24	東郷町		
25	神興村		福津市
26	上西郷村		
27	福間町		
28	津屋崎町		
29	勝浦村		
30	田島村		宗像市
31	池野村		
32	岬村		
33	神湊町		
34	大島村	宗像郡	宗像市
35	若松町	遠賀郡	北九州市
36	八幡町		
37	岡垣村		岡垣町
38	遠賀村		遠賀町
39	水巻町		水巻町
40	中間町		中間市
41	香月町		北九州市
42	上津役村		
43	折尾町		
44	黒崎町		
45	戸畑町		
46	島郷村		
47	芦屋町		芦屋町
48	直方町	鞍手郡	直方市
49	新入村		
50	小竹町		小竹町
51	宮田町		宮若市
52	福地村		直方市
53	下境村		
54	頓野村		
55	木屋瀬町		北九州市
56	植木町		直方市
57	剣村		鞍手町
58	古月村		
59	西川村		
60	山口村		宮若市
61	笠松村		
62	中村		
63	若宮町		
64	吉川村		
65	碓井町	嘉麻郡	嘉麻市
66	千手村		

地区名一覧表の二

番号	地区名	郡名	現市町村名
67	足白村	嘉麻郡	嘉麻市
68	宮野村		
69	山田町		
70	大隈町		
71	稲築町		
72	庄内村		飯塚市
73	頴田村		
74	笠松村		
75	飯塚町	穂波郡	
76	二瀬町		
77	幸袋町		
78	鎮西村		
79	穂波村		
80	大分村		
81	上穂波村		
82	桂川町		桂川町
83	内野村		飯塚市
84	小石原村	上座郡	東峰村
85	宝珠山村		
86	松末村		朝倉市
87	杷木町		
88	志波村		
89	久喜宮村		
90	高木村		
91	朝倉村		
92	宮野村		
93	大福村		
94	三奈木村	下座郡	
95	金川村		
96	蜷城村		
97	福田村		
98	立石村		
99	上秋月村	下座郡／夜須郡	
100	秋月町	夜須郡	
101	安川村		
102	甘木町		
103	馬田村		
104	三輪村		筑前町
105	夜須村		飯塚市／筑前町
106	大野町	御笠郡	大野城市
107	水城村		太宰府市
108	山口村		筑紫野市
109	筑紫村		
110	二日市町		
111	御笠村		
112	太宰府町		太宰府市
113	山家村		筑紫野市
114	福岡市	那珂郡	福岡市
115	警固村		
116	豊平村		
117	南畑村		那珂川市
118	春日村		春日市
119	岩戸村		那珂川市
120	安徳村		
121	三宅村		福岡市
122	日佐村		
123	那珂町		
124	八幡村		
125	住吉町		
126	堅粕町		
127	千代町		
128	席田村	席田郡	
129	鳥飼村	早良郡	
130	樋井川村		
131	原村		
132	田隈村		
133	入部村		
134	内野村	早良郡／怡土郡	

番号	地区名	郡名	現市町村名
135	脇山村	早良郡	福岡市
136	姪浜町		
137	能古村		
138	金武村		
139	壱岐村		
140	西新町		
141	前原町	志摩郡	糸島市
142	今宿村		福岡市
143	今津村		
144	元岡村		
145	野北村		糸島市
146	桜井村		
147	北崎村		福岡市
148	可也村		糸島市
149	芥屋村		
150	小富士村		
151	福吉村	怡土郡	
152	深江村		
153	一貫山村		
154	長糸村		
155	雷山村		
156	怡土村		
157	周船寺村	怡土郡／志摩郡	福岡市
158	鳥飼村	三潴郡	久留米市
159	荒木町		
160	安武村		
161	大善寺町		
162	三潴村		
163	犬塚村		
164	大溝村		大木町
165	江上村		久留米市
166	城島町		
167	青木村		
168	木室村		大川市
169	木佐木村		大木町
170	三又村		大川市
171	大川町		
172	川口村		
173	田口村		
174	昭代村		柳川市
175	蒲池村		
176	大莞村		大木町
177	西牟田村		久留米市
178	大野島村		大川市
179	大和村	山門郡	柳川市
180	東宮永村		
181	城内村		
182	三橋村		
183	柳河町		
184	沖端村		
185	東山村	下妻郡／山門郡	みやま市
186	山川村	山門郡	
187	西宮永村		柳川市
188	瀬高町	下妻郡／山門郡	みやま市
189	両開村	山門郡	柳川市
190	大牟田町	三池郡	大牟田市
191	飯江村		みやま市
192	高田村		
193	開村		
194	銀水村		大牟田市
195	三池町		
196	三川町		
197	駛馬町		
198	玉川村		
199	古川村	下妻郡	筑後市
200	水田村		
201	福島町	上妻郡	八女市
202	長峰村		

地区名一覧表の三

番号	地区名	郡名	現市町村名
203	三河村	上妻郡	八女市
204	光友村		
205	辺春村		
206	串毛村		
207	木屋村		
208	大淵村		
209	矢部村		
210	黒木町		
211	豊岡村		
212	横山村		八女市／広川町
213	川崎村		八女市
214	北川内村		
215	忠見村		
216	上妻村		
217	上広川村		広川町
218	中広川村		
219	下広川村		久留米市／筑後市／広川町
220	羽犬塚町		筑後市
221	岡山村		八女市
222	八幡村		
223	北山村		
224	白木村		
225	笠原村		
226	姫治村	生葉郡	うきは市
227	山春村		
228	大石村		
229	御幸村		
230	吉井町		
231	千年村		
232	江南村		
233	福富村		
234	星野村		八女市
235	船越村	竹野郡	久留米／うきは市
236	田主丸町		久留米市
237	水分村		
238	竹野村		
239	柴刈村		
240	水縄村		
241	川会村		
242	山本村	山本郡	
243	草野町		
244	大橋村		
245	善道寺町		
246	久留米市	御井郡	
247	国分町		
248	上津荒木村		
249	櫛原村		
250	合川村		
251	山川村		
252	宮ノ陣村		
253	弓削村		
254	北野町		
255	大城村		
256	金島村		
257	大堰村	御井郡／竹野郡	大刀洗町
258	高良内村	御井郡	久留米市
259	御井町		
260	味坂村	御井郡／御原郡	小郡市
261	小郡村		
262	御原村	御原郡	
263	立石村		
264	三国村		
265	太刀洗村		大刀洗町
266	本郷村		
267	門司町	企救郡	北九州市
268	小倉町		
269	大里町		
270	東郷村		

番号	地区名	旧郡	現市町村名
271	松ヶ江村	企救郡	北九州市
272	足立村		
273	曽根町		
274	企救町		
275	板櫃町		
276	西谷村		
277	中谷村		
278	東谷村		
279	香春町	田川郡	香春町
280	勾金村		
281	採銅所村		
282	赤村		赤村
283	津野村		
284	添田町		添田町
285	彦山村		
286	大任村		大任町
287	伊田町		田川市
288	猪位金村		
289	川崎町		川崎町
290	後藤寺町		田川市
291	糸田町		糸田町
292	金田町		福智町
293	赤池町		
294	方城村		
295	金川村		田川市
296	苅田町	京都郡	苅田町
297	小波瀬村		
298	白川村		
299	椿市村	企救郡／京都郡	行橋市
300	諫山村	京都郡	みやこ町
301	久保村		
302	黒田村		
303	稗田村		行橋市
304	延永村		行橋市
305	行橋町	京都郡／仲津郡	
306	今川村	仲津郡	
307	簑島村		
308	今元村		
309	仲津村		
310	祓郷村		行橋市／みやこ町
311	豊津村		みやこ町
312	泉村		行橋市
313	犀川町		みやこ町
314	城井村		
315	伊良原村		
316	節丸村		
317	上城井村	築城郡	築上町
318	下城井村		
319	築城村		
320	八津田村		
321	椎田町		
322	葛城村		
323	西角田村		
324	角田村		豊前市
325	山田村	上毛郡	
326	八屋町		
327	千束村		
328	三毛門村		
329	黒土村		
330	横武村		
331	合河村		
332	岩屋村		
333	西吉富村		上毛町
334	友枝村		
335	唐原村		
336	南吉富村		
337	東吉富村		吉富町

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1	北九州市	46	脇之浦はだか祭	若松区脇の浦	1月10日	毎年1月10日に若松区大字小竹の脇之浦漁港一帯で行われる。豊漁と航海の安全,家の繁栄を祈願する祭事で,400年近い歴史を持つ伝統行事。さらしを腹にまいた男衆が,力石を妙見神社に奉納する。妙見神社での若潮くみに始まり,妙見・恵比須・白山神社への若潮奉納,そして,白山神社からは松明とともに下山し,さらし腹巻姿の青年達が歓声を上げて海に入り,力石を探し,恵比須神社に奉納する。現在では,祭りの形は多少変化したが,冷たい冬の海に若者達が勇ましく飛び込んで行くのは,海に生きる者達が大漁と安全と暖かな家庭を祈る素朴な姿であり,古来より変わることのない祈りとなっている。	17,21
2	北九州市	35	十日ゑびす祭	若松区浜町	1月9～11日	「商売繁昌で笹持って来い」という掛け声とともに福笹つきの縁起物の福引きを行う。この祭りには正月気分から抜け出し,「今年も一生懸命働きますからえびす様どうか守って下さい」という誓いと願いが込められている。	17,23
3	北九州市	278	尻ふり祭り	小倉南区井手浦	1月8日	出雲の国で,須戔嗚尊がその地域の人びとととともに八岐大蛇を退治した時,尻尾が平尾台の麓の井手浦まで飛んできたところ,その年は10数年ぶりの大豊作になったという伝説に因んでいる。春の農作業を始める1月8日,井手浦公民館前の広場に,ワラで作った4mを超える大蛇が,2本の松の木に掲げられる。その大蛇の前に祭壇を設け,宮司と保存会2人の計3人が,弓矢や弊などをお尻に当て,海・山・川の掛け声に合わせ左右に大きく振る。お尻を大きく振るほど大豊作になるといわれているため,「もっと振れ,もっと振れ！」と賑わいをみせる。その後,宮司が大蛇を三本の矢で射とめ,太刀で3か所斬るしぐさをして,大蛇退治は終了する。	6
4	北九州市	272	わいわい祭	萩崎	1月16日	古来より鬼門除けのお祓いと言い,夕刻に人びとが集まり,行列をつくって町内を回る。行列が四つ辻にくると神官がまずお祓いをし「一つ祝ってくれ」と呼び,みんなが「祝おう」「祝おう」と声を合わせて応える。17時頃から神社にて神事を斎行し,どんど焼きの火入れをし直会が行われる。	15,18
5	北九州市	267	和布刈行事	門司区門司	1月下旬～2月中旬で毎年変動	和布刈神事は神功皇后が三韓征伐からの凱旋を祝って,自ら神主となり,早鞆の瀬戸のワカメを神前にささげたという古事に由来している。昔は「神事を見ると目がつぶれる」と言われ,神罰を恐れて拝観する者はいなかったが,戦後から拝観は解禁となった。行事は,毎年旧暦元日の早朝に行われる。横代湯立神楽が奉納された後,3人の神職が干潮の海に降りて鎌でワカメを刈り採り,それを神前に供えて航海の安全,豊漁を祈願する。漆黒の闇を背景に烏帽子,狩衣,白足袋に草履姿の神職達が,松明を頼りにワカメを刈り採る様子は幻想的で,関門海峡両岸の人びとに春の訪れが近いことを感じさせてくれる。	5,18
6	北九州市	273	貫のお祓い	小倉南区貫	3月最終日曜日	元慶7(883)年に鈴石八幡宮として建立されたと伝えられる荘八幡神社の祭り。元和5(1619)年時の小倉藩主,細川忠興が宇佐八幡宮の放生会を復活させた際,鈴石八幡宮(後に荘八幡神社に改称)においても神輿を造り,武運長久・五穀豊穣を祈念して“大祓い”の大祭を斎行しようとしたもで,それが現在「貫のお祓い」の名称で,毎年3月末に行われている。当日,氏子である貫地区の人達が作った花傘や子どもの樽神輿が随従して御神幸を行う。御神幸は,貫川沿いを通り無病息災の“お祓い”をし,「お旅所」に立ち寄って神事を行った後,神社におのぼりをして終了となる。	4,32
7	北九州市	46	乙丸のほら貝まつり	若松区乙丸	4月15日	およそ200年前から行われている伝統行事で,御神体のほら貝にお神酒を入れて飲むと,不老長寿の薬になると言い伝えられている。この伝統にちなみ,神主が祝詞を上げた後,御神体のほら貝に実際にお神酒を入れて,参拝者にふるまう。『ながいきほら貝』(貴船神社にまつわるお話)「若い船乗りが嵐にあい,ある岸辺に打ち上げられ,若く美しい一人の女の人に会いました。女の人は,600歳だと聞いて若者はびっくりしました。女の人は,25歳の時に病気にかかって死にそうになります。その時,息子が拾って来てくれたほら貝の肉を食べると元通り元気になり,年を取らなくなったのです。この貝は,年をとらない宝物の貝として,毎年4月15日に祭りをするようになった。」	5
8	北九州市	271	吉志の二十六夜	門司区吉志	4月26日	天疫神社の境内にある五穀神の春祭りで,地元で「ろくや」と呼ばれる神幸祭。御輿を先頭に高さ約2.5mの花傘鉾が随従し,吉志区内を回り,約1km離れたお旅所の「笠松」に向かう。	2,29,32
9	北九州市	273	曽根の神幸行事(開作神事)	小倉南区曽根新田南	5月3日	1台の山が提灯山,幟山,人形飾山へと三様に変化する形式を持つ市内唯一の祭礼。5月3日には,曽根・朽網地区の7台の人形飾山が揃う。	2,29,32
10	北九州市	276	八坂神社の祇園祭	小倉南区長尾	5月4,5日	祇園祭は貞観年中(859～877),京の都に疫病が流行した時,勅を奉じて神泉苑に66本の矛を立てて祇園の神を迎えて祭り,洛中の男児が祇園社の神輿を神泉苑に送って厄災の除去を祈ったのに由来し,平安時代の中頃からは規模も大きくなり,空車,田楽,猿楽等も加わって盛んな賑わいを見せてきた。室町時代になると町々の特色ある山鉾のあったことが『祇園社記』に記されている。応仁の乱(1467)で都は灰燼に帰し,祇園祭も中絶したが,明応9(1500)年には復活,その時から山鉾巡行の順位を決める鬮取式が侍所で行われることとなった。以後,町衆の努力により山鉾の装飾にも贅を尽くすようになり,近世には度々の火災で多数の山鉾が消失したが,その都度,町衆の心意気によって再興し,今日に至っている。	2,29,32
11	北九州市	35	二島祇園	若松区東二島	7月中旬	昔の山笠は背の高い岩山だったが,現在では一般的な人形飾山の曳山(東二島2台,二島1台)になった。祭りの前日に飾り付けられた山笠は,1日目の午後からそれぞれの地区を運行する。夕方,日吉神社を出発した新輿が参道入口の一の鳥居まで下がると,お迎えの東二島の山笠2台が先山,後山となって,一の鳥居下～西天神町境(折り返し)～一の鳥居下～二島駅前を通過して,お旅所の田神社まで神幸する。途中,二島駅で東二島の山笠は帰り,一の鳥居下までお迎えし御神幸に合流していた二島山笠がお旅所までお供する。翌日の夕方,田神社で発輿祭を済ませて「おのぼり」の御神幸となる。今度は東二島の山笠2台がお迎えに行き,二島山笠と一緒になって随従する。二島駅で二島山笠は帰り,後は東二島の山笠2台が神輿お供して神社に帰る。	2,29,32
12	北九州市	35	小石提灯山笠	若松区宮前町	7月中旬	戸畑祇園の提灯山笠の元になったといわれている山笠行事。高さ12段からなる提灯山笠。昭和28(1953)年を最後に姿を消したが,平成9(1997)年に復活。昔のように町内を担いで廻ることはできないが,小学校の校庭で勇壮な様を見ることができる。	2,29,32
13	北九州市	44	前田祇園	八幡東区前田	7月第3月曜日を最終日とする3日間	第4章,第1節,特論1「祇園山笠」参照。	2,29,32
14	北九州市	36	枝光祇園	八幡東区	7月24～26日	鎌倉時代の建久5(1194)年の創建と伝えられる枝光八幡宮の山笠。正確な起源は不明だが現在資料として残っているのは,明治25(1892)年に,戸畑祇園大山笠で使われる幟大山笠の幕を新調したという資料がある。古い写真資料が現存しており,その写真から大正時代には枝光祇園が行われていたことがわかる。現在のような人形山笠の起源も不明だが,明治・大正時代は幟大山笠,戦後からは人形山笠であることは資料的に残っている。	2,29,32
15	北九州市	275	茶屋町祇園	八幡東区	7月24～26日	飾り山笠と子どもちょうちん山笠が町内を回る。	2,29,32
16	北九州市	36	大蔵祇園	八幡東区	7月上旬	北九州市八幡東区大蔵で350年以上の歴史を持つ祭り。高低差が激しい大蔵地区にて行われる大蔵祇園は北九州市内のほかの祇園祭とは異なり,御神輿のみで御神幸する。350年の歴史の中で担ぎ手不足などの問題もあり,牛に引かせたり,トラックに乗せて運行した時代もあったようだが,平成に入り「氏子青年会」が結成され,本来の人の手による御神幸を毎年行えるようになった。乳山八幡神社での神事の後,御神輿は勝山勝田神社を経て,年ごとに異なるコースで御神幸を行い,担ぎ手は各町内の御旅所で休息を取りながら御神輿を運行する。お供え物は各町内で,それぞれ工夫されている。	32

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
17	北九州市	36	中央町祇園	八幡東区	7月中旬	官営八幡製鐵所の誕生から,その城下町として栄えた八幡東区中央町。この地域で戦前から続けられている祇園山笠は,人形飾り山笠が八幡中央区商店街アーケードや中央町周辺及び東田地区を昼夜練り歩く。	2,29,32
18	北九州市	44	黒崎祇園行事	八幡西区黒崎	7月18～23日	第4章,第1節,特論1「祇園山笠」参照。	2,29,32
19	北九州市	42	引野祇園	八幡西区	7月下旬	平成30(2018)年に50周年を迎えた。例年7月中旬に笹山を経て本番3日間人形飾りの山車が町内を練り歩く。最終日は洞南地区の競演会となり,暗闇の中,右や左に激しく競い合う。	2,29,32
20	北九州市	42	穴生祇園	八幡西区	7月下旬	最終日は洞南地区の競演会となる。	2,29,32
21	北九州市	42	小嶺祇園	八幡西区	7月下旬		2,29,32
22	北九州市	42	上津役祇園	八幡西区	7月下旬		2,29,32
23	北九州市	42	竹末祇園	八幡西区	7月下旬	神棚等に笹を立てそれを担いで運行する簡素な作りの山笠。博多祇園山笠の起源には施餓鬼棚を担いで練り歩いた事が始まりといわれ,最も初期の姿を残した山笠と言われている。最終日は洞南地区の競演会となる。	2,29,32
24	北九州市	55	筑前木屋瀬祇園祭	八幡西区木屋瀬	7月第2土,日曜日	昔は獅子頭を先頭に神輿,山笠などが並んで地域内を回る御神幸本来の形式をとっていたが,現在では2台の山笠が町を運行する形になっている。本町六町の赤山笠と新町七町の青山笠の2台の山笠が町中を練り回った後,勢い太鼓の響きに合わせて須賀神社境内に走り込む。これを初日は「奉納」,2日目は「宮入り」という。また,長崎街道を2台の山笠が駆け抜ける「追山」も行われる。祭り初日の夕方,一番山,二番山(順番は隔年交替)が並んで須賀神社に入り,お払いを受ける。それが済むと山笠はそのままにして勢子だけが各々提灯を持って近くの遠賀河畔にお汐井とりに行く。その後,リーダー(掛け合い)2人の指示で町中を練り回る。祇園囃子は太鼓のみ。昔の山笠は9m以上もある「岩山」(はりぼての岩を高く積み上げ,人形を飾る形式の山)であったが,大正初期の電線架設以来,4mほどの現在の人形飾山(曳山)に変化した。	2,29,32
25	北九州市	41	畑祇園	八幡西区畑	7月第2土曜日	畑祇園は,畑貯水池の奥に鎮座する尺岳神社の境内社である須賀神社に古くから伝えられる祭礼。御神幸は夕方から始められ,白木谷山笠,本谷山笠の順で神移しが行われ,境内を練った後おくだりに移る。曳山は台上に神殿を乗せ,その下に豪華な刺繍を施した幕を張り巡らせた神輿本来の形式をそのままに伝える。高さ5mの曳山が急勾配の参道を一気に駆け下りる。駆け下りたあと,提灯にロウソクが灯され,夕闇の山道を厳かに進んで行く。畑貯水池でお汐井とりを済ませた山笠は,参道をおのぼりし,神事を終える。山笠は,筑前地域には珍しく豊前国に伝承する形態を遺している。	2,29,32
26	北九州市	42	洞南肆地区山笠競演会	八幡西区相生	7月第3日曜日	引野・竹末・穴生第一の各自治区会と相生商連の山笠行事を平成11(1999)年から合同の山笠競演会として実施しており,相生町大通り一帯で,大山笠による山笠競演会と太鼓競演会が行われる。	2,29
27	北九州市	44	鳴水祇園	八幡西区	7月中旬	鳴水祇園山笠は貴船神社の氏子により古くから行われている祭礼。一時中断していた時期もあるが,昭和61(1986)年より人形飾り山笠奉納を再開した。平成12(2000)年には貴船太鼓保存会の鳴水水神会が発足し,子ども達へ太鼓や鳴水の伝統行事等の継承活動を行っている。現在貴船神社奉賛会,鳴水青壮年会,鳴水水神会が協力し,黒崎第5自治区会の町内会とともに鳴水山笠実行委員会として御神輿・人形山笠奉納を行っている。また,貴船太鼓保存会では,各地のイベントや老人ホームのイベントなどで年間を通して太鼓の披露会を開催し,貴船太鼓や鳴水山笠の継承活動を行っている。	2,29,32
28	北九州市	45	戸畑祇園大山笠行事	戸畑区	7月第4土曜日を挟む前後3日間	昼は幟山,夜になると提灯山へ姿替えを行う。幟山は勾欄付きの山笠台に神霊を納める祠を据え,その周囲に紅白の幟12本を立てる。前面には紙製の巨大な前花,後に豪華絢爛な見送りがあり,山笠台を切幕,水引幕で飾る。夜になると飾りを全て取り去って,山笠台上に四角錐状にヤグラを組み,12段の横木に計309個の提灯を付ける。	2,29,32
29	北九州市	35	小石観音寺四万六千日	若松区中畑町	8月9日	安産の観音様や「頼まれ観音」として広く知られている小石観音寺で,護摩焚きや火渡りなどが行われる。四万六千日とは,この日にお参りすると,四万六千日お参りしたのと同じ功徳があるからといわれている。	17,23
30	北九州市	46	脇田祇園	若松区安屋	8月中旬	安屋海岸の八幡岬に鎮座する大比叡神社の祇園祭として,毎年8月中旬の2日間に行われる。起源は言い伝えなどから,江戸時代後期と考えられており,御神幸には2台の人形飾山(舁山と曳山)が随従する。	2,29,32
31	北九州市	36	八文字焼	八幡東区皿倉山	8月8及び13～15日	昭和20(1945)年8月8日に起こった「八幡大空襲」では,中央,尾倉,前田,黒崎,枝光の中心部が被災し,死傷者は約2,500人,焼失家屋は14,000戸にも及んだ。その空襲による戦没者の慰霊を行い,また,八幡の平和のシンボルとして,毎年8月8日(八幡大空襲の日)とお盆の8月13日～15日に,皿倉山の八文字焼が行われる。※死傷者数等は「八幡市史続編」による	1,19
32	北九州市	278	お糸祭り	小倉南区呼野	8月第4土曜日	享保年間,灌漑用水の不足に悩む呼野の里のため,自ら堤防工事の人柱となった14歳の少女,お糸を供養する祭り。お糸池での水神祭に始まり,お糸供養盆踊りや花火大会などが催される。	39
33	北九州市	272	小文字焼	小倉北区	8月13日	お盆の13日の夜,小文字山山頂で90分に渡り,「小」の火文字が赤々と燃え続ける。	1,19
34	北九州市	273	天疫神社の御神幸	小倉南区田原	10月8日	以前は,旧暦9月8日に行われていたが,新暦になってからは10月8日に行われるようになった。子どもを祭りのために学校から早退させることができなくなったので,現在は休日に行なっている。第二次大戦中は,青年が少なく神事のみ行われていたが,戦後復活した。昭和27(1952)年頃は神輿を担いでおり,その後しばらくは氏子が神輿を担いで,町内を巡幸していたが,次第に担手が少なくなり,やがて神輿と台車に乗せる今の形態となった。	2,29,32
35	北九州市	35	恵比須祭り	若松区浜町	4月2～4日 12月2～4日	「おえべっさん」として親しまれる「若松えびす祭春季大祭(4月2～4日)・秋季大祭(12月2～4日)」は,商売繁盛,海上安全,家内安全を祈る祭りとして,毎年多くの参詣者が訪れる。祭りの3日間は200～250軒の露店が沿道に並び,街の軒々には御神燈「鯛提灯」2,000燈が,そして境内には300燈の大提灯が揺れ,街や境内を幻想的に照らしだす。また,十日えびす(1月9日～11日)では,商売繁盛,家内安全の祈りを込めた新春の「福笹福引」があり,1年間葉が落ちない笹と縁起物が当たる。	17,23
36	北九州市	55	子どもえびす(こども頭行事)	八幡西区木屋瀬	12月3日に近い土,日曜日	昔は数え年の11歳,現在では小学校4年生の男の子を頭と呼ぶ,子どもが主役のえびす祭り。笹山車を作り紅白の幕にその年の頭の名前を書き町内を引き回す。	2,13,17,23
37	北九州市	46	岩屋祇園	若松区岩屋			2,29,32
38	北九州市	43	則松祇園祭	八幡西区則松			〃
39	北九州市	42	涼天満宮祇園祭	八幡西区上の原			〃
40	北九州市		火まつり行事	若松区久岐の浜	7月21日	昭和29(1954)年に,若松区出身の芥川賞作家火野葦平が,「戦後のすさんだ世の中を明るく照らそう」と,高塔山の頂上でかっぱ達を招待する祭りを初め,これに賛同した多くの人びとが高塔山を目指し,たいまつを掲げて登ったのが始まり。この「かっぱ祭り」と「たいまつ行列」をあわせて「火まつり行事」と言い,美しいたいまつの行列が,まるで輝く糸で山肌を縫うように進む光景は幻想的。	1
41	福岡市	140	初庚申大祭	早良区藤崎	1月の初庚申	災難が「さる」縁起物として猿面,福笹を頒布。玄関等に掛けて厄除けとする。これを求めて夜明け前から長い列ができる。	39,18

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
42	福岡市	128	金隈の鳶の水	博多区金の隈	1月2日	蓑と笠を被った姿からトビに見立てられた子ども達が家々を回る。各家ではトビに水をかけ祝儀を渡す。ある時,疫病が流行し多くの子どもが亡くなったため,その後子どもの健康を祈願し新年に福を招く意味を込めて始まったという。	18
43	福岡市	142	恵比須大祭	西区今宿	1月3日	赤い褌姿の子どもが4つの組に分かれ,木製の玉を持って家々を回る「玉せせり」を行う。迎えた家では玉に神酒をかけ,子どもに菓子などを渡す。	18,21,23
44	福岡市	1	玉取祭	東区箱崎	1月3日	第4章,第3節,1「玉取祭」 参照。	18,21,23
45	福岡市	136	玉競祭	西区姪浜	1月3日	事代神社(西区愛宕浜)での祭典の後,玉を受けた締め込み姿の漁師らが,姪浜の町中で激しく玉を競り合いながら住吉神社へと向かい,神前に奉納する。	18,21,23
46	福岡市	125	住吉三日恵比須大祭	博多区住吉	1月1～3日	開運祈願や福引等があり,「ふく娘」が参拝者に一年間の開運・幸運を授ける。	18,23
47	福岡市	129	七草祭	中央区六本松	1月7日	「七草祭」の神事に続き,境内で巫女と敬神婦人会等が大鍋で七草粥を作り,参拝者に振る舞う。	18,20
48	福岡市	130	ほんげんぎょう	南区柏原	1月7日	境内に竹を組み,夕方の神事の後,火を入れて,正月飾り等を焼く。かつては集落の辻々で行われていた。	1,18
49	福岡市	130	ほうけんぎょう	城南区片江	1月第2日曜日	運動場の中央に長い竹に笹や藁を組んで作った櫓を設け,年男や年女の小学生が火をつけて,正月飾り,門松,注連縄や古くなったお守りなどを燃やす。	1,18
50	福岡市	138	ほうけんぎょう	西区金武	1月7日	竹の櫓を組み,それを燃やして無病息災を祈る。かつては「あかぎれ焼こうひび焼こう泣くもんな口焼こう」といいながら,手や足をあぶっていたという。	1,18
51	福岡市	123	ほんげんぎょう・もぐら打ち	博多区板付	1月7日	青竹でつくった2基の櫓の先に「五穀豊穣」「無病息災」の幡をつけ,弥生人を模した貫頭衣を着た代表により火が付けられる。子ども達によるもぐら打ちも行われる。	1,18
52	福岡市	122	どんど焼き	南区高木	1月第2日曜日	かつて「ほうけんぎょう」と呼ばれ,この火にあたると病気にならないといわれた。平成5(1993)年頃から校区行事として「どんど焼き」を開始。	1,18
53	福岡市	125	追儺祭	博多区住吉	1月7日	追儺の祭典では鬼を追う豆まきが行われ,注連縄を焚き上げる炎の周りを逃げ回る鬼を捕らえ「鬼縛り石」に縛り付ける。その後,凶を吉に取り換えるという「鶯替え」を行う。	1,15,18,22
54	福岡市	142	鬼すべ	西区今宿	1月7日	稲藁で作った角と襷をつけた鬼が,介添えの青年たちと押し合いながら上町を回って歩く。その後境内に戻った鬼を松葉の煙で燻し,鬼すべ堂に追い込む。境内では鶯替えが行われる。鬼すべ行事で鬼たちが隣組みを回っている時に上町天満宮境内で,木彫りの鶯を取り替えて幸せを願う鶯替え行事を行う。拝殿前には手作りの木うそが並べられ,参拝者はそれぞれが持参したうそと,新しいうそを交換して持ち帰る。	1,15,18,22
55	福岡市	114	閻魔まつり	博多区中呉服町	1月16日	閻魔像の開帳が行われる。閻魔堂内の奪衣婆にこんにゃくを供えると,子どもの病気を治し,母乳の出が良くなると伝えられる。	18,39
56	福岡市	114	十日恵比須祭	中央区伊崎	1月10日	漁業組合員や子ども達が木の玉を担いで福浜,伊崎,唐人町一帯の家々を回る。町を回り終えた後は,玉を海に放り込み海中でしばらく競り合い,再び恵比寿神社に玉を納め行事が終わる。	17・18,21,23
57	福岡市	132	十日恵比須	早良区野芥	1月10日	福笹の頒布と福引が行われる。「恵比須汁」(水炊き)奉仕や注連縄等の焚き上げも行われる。	17, 18 23
58	福岡市	126	正月大祭	博多区東公園	1月8～11日	商売繁盛祈願の参拝客で毎日夜遅くまで賑わう。8日を初恵比須,9日宵恵比須,10日を本恵比須,11日を残恵比須と称する。	17,18,23
59	福岡市	147	十日えびす	西区西浦	1月10日	かつては漁師になろうとする数え年16歳の若者が恵比須神に扮し祝詞を述べていた。恵比須神社にて,恵比須神に扮した2名の若者を囲んで祭典が行われる。	18,23
60	福岡市	114	大黒天年頭大祈願祭	博多区中呉服町	1月10日	博多の豪商神屋宗湛がお告げで本能寺の変を逃れたことにちなんで、寄進されたとされる大黒天にちなんだもの。	18,39
61	福岡市	134	石釜のトビトビ	西区石釜	1月14日に近い土曜日	「トビ」と呼ばれる大きな藁束を頭から被った子どもが家々を回り,男児が生まれた家には藁の馬を,女児が生まれた家には藁のエビを,その他の家には輪注連を配る。迎えた家ではトビに水をかけ,菓子や祝儀を渡す。昭和30年代に廃れたものを,昭和52(1977)年に復活させたもの。	18
62	福岡市	9	歩射祭	東区志賀島	1月15日に近い日曜日	阿曇百足の土蜘蛛退治伝承にちなみ,若い射手が大的に向かって48本の矢を射る行事。この日までに新参の射手は,朝夕の潔斎と数々の礼儀を経て一人前の射手衆の資格を得なければならない。矢が黒的に当たると観衆が「ヨイヤァ」とはやし,最後の一矢が放たれると観衆が「的破り」をして行事を終える。	10,13,18,24
63	福岡市	147	お日待	西区宮浦	1月22,23日		
64	福岡市	143	十一日まつり	西区今津	成人の日の前の日曜日	登志神社の氏子である上町・寺小路・東町と,四所神社の氏子である本町が行う年頭の祭り。町ごとに山車と神輿を出し,町内を練り歩き「祝うた」の掛け声とともに各戸を訪ねる。かつて今津に荷揚げされた貢物を大宰府の役人が検分した後,山車に乗せて引き回し披露したのが始まりだと地元では伝えられている。	8, 18
65	福岡市	132	お粥開き	早良区野芥	2月1日	1月15日に神殿に納めた粥のカビの付き具合を見て,同社氏子がその年の豊凶を占う。	11,25
66	福岡市	130	粥試し	城南区東油山	2月1日	1月15日に神殿に納めた粥のカビの付き具合を見て,同社氏子がその年の豊凶を占う。	〃
67	福岡市	114	節分厄除大祭	博多区上川端町	2月2日	2日11時に節分福迎祭(大お多福くぐり初め),17時から「鬼神楽」奉納。3日9時から節分大祭,同10時から豆まき。	39
68	福岡市	114	節分大祭	博多区御供所町	2月2日	2日1時から前夜祭。3日10時から節分大祭。豆まきは本堂前特設舞台で随時行われえ,七福神やお多福に扮した留学生,裃姿の年男や年女が登壇する。	〃
69	福岡市	138	飯盛神社のかゆ占	西区飯盛	2月14日 3月1日	第4章,第3節,12「粥占」 参照。	11,25
70	福岡市	125	御田祭	博多区住吉	3月7日	境内に作った苗床に種籾をまき,五穀豊穣を祈願する。育った苗は,6月の「お田植え行事」の際に使われる。祭典終了後,那珂川市伏見神社の「岩戸神楽」が披露される。	17,39
71	福岡市	1	春季社日祭	東区箱崎	3月の彼岸に近い戌の日	春のお汐井取り。箱崎浜の砂は,竹製の「テボ」籠に入れておき,外出時に体に降り掛けるなど,日頃からお祓いに用いられており,特に社日に取ったものが重用される。このお汐井を求めて多くの参拝者が訪れる。	39
72	福岡市	144	神楽祭	西区桑原	4月	四所神社の境内にある拝殿を舞台にして「田島神楽」を招いて行われる。以前は高祖神楽を呼んでいた。舞台前には地域の人びとがお弁当を持ち寄り,飲食をしながら神楽を観覧する。途中には,年男年女による餅まきなども行われる。	39
73	福岡市	9	山誉種蒔漁猟祭	東区志賀島	4月15日	第4章,第3節,15「山誉め祭」 参照。	17
74	福岡市	16	春季氏子大祭	東区香椎	4月17日直近の土曜・日曜日	隔年(西暦偶数年)開催の神幸式を実施。17日「お下り」,18日「お上り」。両日本宮・頓宮で「香椎宮奉納獅子楽」(県指定無形民俗文化財)の奉納	32
75	福岡市	9	お大師様	東区志賀島	昭和の日	島内各所に祀られる弘法大師のもとを人びとが巡礼する。島内には,10数か所の接待所が設けられ,参詣者にふるまいが行われる。	8,39
76	福岡市	138	武射祭	西区飯盛	4月29日	魔除けと開運を祈願して,鎧兜で身を固めた射手が矢で的を射る。明治初期に途絶えたものを,昭和58(1983)年に復活。平成23(2011)年からは4月29日(昭和の日)に開催。	24

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
77	福岡市	114	福岡市民の祭り　博多どんたく港まつり	福岡市全域	5月3,4日	2日は前夜祭を開催。3日は明治通りどんたく広場でパレード。どんたくにあわせ「博多松囃子」の巡行が行われる。	8
78	福岡市	126	子ども祭	博多区堅粕	5月5日	「神体の衣冠の木造は何処からともなく飛んできたもので,子どもが好きであるからこれを担いだり投げたりすれば子どもは達者になると云はれてゐる。」(博多年中行事)由来がある※日程は6月5日	12
79	福岡市	136	姪浜東町事代神社の獅子まわり	西区姪浜	5月15日	2体の獅子頭を頭上に載せて,町内の家々を回る。	26
80	福岡市	1	さつき大祭(五月大祭)	東区箱崎	5月27日	日露戦争の日本海海戦勝利に由来する。かつて「海戦記念日」として賑わった。博多湾では自衛隊による「海上慰霊祭」が行われる。	39
81	福岡市	114	夏祈祷大般若会	博多区	6月2日	夏季の安全を祈願する。博多祇園山笠振興会の本部役員も当番法被姿で参列し,祈祷札が山笠に取り付けられる。	37
82	福岡市	136	姪浜住吉神社祇園河童祭り	西区姪浜	6月2,3日	この夏を怪我や事故がないように祈願し,河童面を頒布する。	39
83	福岡市	157	宮崎安貞翁顕彰祭(宮崎安貞祭)	西区女原	6月4日	「農業全書」を著した宮崎安貞翁の偉業を称え,遺徳をしのぶ。	39
84	福岡市	1	池島殿祭	東区箱崎	6月第4日曜日	池島殿は「手足様」とも言われ,草鞋を供え病気平癒を祈る。	39
85	福岡市		高宮八幡宮獅子まつり	南区高宮	6月不定	神社での夏越祓の後,獅子頭を2基の神輿状の台に乗せて,それぞれ4名の子どもが担いで神社周辺の民家,店舗を門付けして回る。	26
86	福岡市	136	姪浜の獅子まわし	西区姪浜	6月30日	2体の獅子に扮した子ども達が町内を回る。町内の家々の玄関先にオシオイを置いていく。	26
87	福岡市	138	金武丸天神社の獅子ごもり	西区金武	7月月1日	2体の獅子を頭の上にのせて町内を回る。	26
88	福岡市	114	博多祇園山笠行事	博多区	7月1～15日	7月1日の箱崎浜でのお汐井とりから始まり,15日早朝の追い山笠まで続けられる。流れ舁き,朝山,集団山笠見せと何日も市中をねり,15日早朝に全山笠が櫛田神社の境内に集合し,一番山笠から順に須崎町の廻り止めまで約5キロを疾走し,それぞれ当番町に帰り,解体して終わる。	2,29
89	福岡市	131	荒江櫛田神社の獅子まわし	城南区荒江	7,9月第2土曜日	獅子頭を抱えて持ち,町内の家々を回る。7月を「御願立て」9月は「御願成就」として行われる。	26
90	福岡市	142	今宿横町祇園神社大祭	西区今宿	7月14日	櫛田神社の流れをくみ,毎年7月14日に行われる。夕方5時より,厳正な神事の後,子ども達が今宿海岸でお汐井取りを行い,次に200kgもある子ども山笠(舁き山)を水ハッピ姿の子ども達が担いで,町内を練り回る。	2,29,32
91	福岡市	138	金武妙見神社の獅子まわし	西区金武	7月15日	2体の獅子頭を軽トラの荷台に載せて町内を回る。終了後は,行事で使用した獅子頭が1軒ずつ家々を泊まる。	26
92	福岡市	140	祖原獅子祭り	早良区祖原	7月15日	大人が獅子頭を担ぎ,町内の家々に門付けを行う。	26
93	福岡市	144	元岡八坂神社祇園祭	西区元岡	7月第2土,日曜日	朝から神事が行われる。夜には,元岡祇園ばやしと元岡獅子舞の奉納が行われる。	15,2
94	福岡市	147	小呂島の祇園山笠行事	西区小呂島	7月15日	6月下旬に宮浦の三所神社に御神体を受け取りにいくところから始まり,7月上旬に4日をかけて山笠が作られる。山笠の基礎部分の組み立て,飾り作りなど全ての工程を地元の方が自ら行う。3本の舁き棒を有している点や,飾りに魚や昆布など海に関する飾りが多用されている。山笠の中で歌われる祝い唄も島独特のもの。北部九州には博多山笠の影響を受けると考えられる山笠が点在しており,市内にもいくつかの事例が認められる。北部九州に広く分布する山笠が離島の漁村において特色ある地域的展開を遂げた一事例として重要。「総合的な学習の時間」の一環として小中学生による子ども山笠もある。	29
95	福岡市	130	提灯とぼし	城南区東油山	7月17日	東油山の子どもが,松明を灯しながら神輿を担いで町内を練り歩く。享保の飢饉の際,神仏に灯明を上げて悪病退散と無病息災を祈ったのが始まりと伝えられる	39
96	福岡市	140	中西宮地嶽神社の子ども獅子まつり	早良区西新	7月25日	太鼓,神輿の順で神社周辺の地域を回る。	26
97	福岡市	132	野芥櫛田神社の獅子舞	早良区野芥	7月不定	お潮井取りの後,獅子頭を載せた神輿と山車が町内を練り歩く。夕方からは青年による門付けが行われ,22時頃から2体の獅子頭を頭上に乗せて押し合いが行われる。	26
98	福岡市	129	鳥飼八幡宮子ども獅子まわし	中央区今川	夏越大祭前の日曜日	獅子頭を乗せた神輿状の台を子ども達が担ぎ周辺地域を回る。行列には沿道の住民から水がかけられる。	26
99	福岡市	6	奈多高浜の獅子舞	東区奈多	7月第3日曜日 11月20日 1月2日	獅子頭を被る人と,後ろで幕を持つ人の2名の若手が町内の家々を門付けする。門付けの際には「トゥルルルル」という巻き舌による音声を発する。	26
100	福岡市	6	奈多西方の獅子舞	東区奈多	〃	〃	26
101	福岡市	6	奈多前方の獅子舞	東区奈多	〃	〃	26
102	福岡市	6	奈多牟田方の獅子舞	東区奈多	〃	〃	26
103	福岡市	114	万四郎さま	博多区下呉服町	7月20日	殺された万四郎を供養するために始まったとされ,博多夏祭の先駆けである。	39
104	福岡市	6	祇園祭	東区奈多	7月第3土,日曜日	志式神社の野舞台「奈多の志式座」(市指定有形民俗文化財)で芝居の奉納がある。天明4(1784)年の疫病と飢饉を鎮めるため,万年願として芦屋の歌舞伎を買い奉納したのが始まりと伝え,以来一度の中断もないという。	15
105	福岡市	1	地蔵祭	東区箱崎	7月23,24日	網屋地域の各地蔵堂が開かれて行われる。	37
106	福岡市	1	人形飾り(地蔵祭りの人形飾り)	東区箱崎	7月23,24日	地蔵の縁日に,玄関先に人形を飾って箱庭を作り,子どもが地蔵堂や各家庭の人形飾りを回る風習を受け継ぎ,平成8(1996)年から綱式天満宮に人形を集め地域全体の祭りとしている。	19
107	福岡市	114	地蔵祭り	博多区	7月23,24日	博多の各町内にある地蔵堂などで行われる。千灯明が行われるところもある。	37
108	福岡市	114	千灯明	博多区	7月24日	第4章,第3節,17「叶院千灯明」　参照。	19,37

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
109	福岡市	132	賀茂神社の子ども獅子	早良区賀茂	7月25日	神輿状の台に乗せられた獅子頭が町内を回る。	26
110	福岡市	6	下和白大神神社の獅子廻り	東区和白丘	7月28日	下和白及び周辺地域の関係者宅,店舗などを門付けする。巻き舌で音声を発しながら,2頭の獅子頭が順番に家の中に入っていく。そして,家人の頭の上に獅子頭を軽く戴せて出ていく。	26
111	福岡市	114	今泉若宮神社の獅子祭り	中央区今泉	7月最終土日	夏季大祭の中の行事として行われ,神社周辺の商店などを門付けする。	26
112	福岡市	114	紺屋町子ども獅子祭	中央区大名	7月不定	獅子頭,太鼓,鐘,提灯,賽銭箱の順で行列を組み,店舗,一般世帯を門付けして回る。	26
113	福岡市	133	東入部熊本の獅子まわし	早良区東入部	7月30日	2体の獅子頭を抱えて,大人と子どもが町内を走る。途中には,沿道の人びとより水がかけられる。	26
114	福岡市	133	東入部中通の獅子まわし	早良区東入部	7月30日	神輿状の台に乗せられた獅子頭が町内を回る。	26
115	福岡市	16	唐原の祇園山笠行事	東区唐原	7月13日の前の日曜日	山笠の基礎部分の組み立て,山笠に使用する部品の製作,人形の飾りつけまで,すべての工程を地元の人間が自ら担う。唐原の山笠で使用される人形は,前年に博多山笠の飾り山で使用されたもの。	29
116	福岡市	147	宮浦の獅子まわし	西区宮浦	7月31日	2体の獅子頭を抱えた子ども達が家々を回る。玄関先にはオシオイを置く。	26
117	福岡市	9	祇園祭	東区西戸崎	7月博多祇園山笠後のどこか３日間	16日に演芸大会,17日に剣道大会と相撲大会,18日午後に「舁き山」行事が行われる	29
118	福岡市	138	飯盛の夏越しの獅子回し	西区飯盛	7月25日に近い日曜日	2体の獅子頭を抱えた若者達が,氏子区域の家々を回る。	26
119	福岡市	130	「盆綱」夏祭り	城南区堤丘	7月最終土曜日	朝から境内で,伝統行事保存会の指導の下,地元の小中学生が加わり,盆綱作りを昼頃まで行う。	30
120	福岡市	9	七夕祭	東区志賀島	8月6.7日	玄界灘沿岸各地から漁師が大漁旗を掲げ参拝に訪れ,葉を身に着ければ無事であるとされる「事無柴」や「志賀茶」を受ける。	20
121	福岡市	140	紅葉八幡宮獅子まつり	早良区高取	8月第1土曜日	神輿と門付けを行う獅子頭が3組にわかれて待ちを回る。家の軒先で,神職が短い祝詞を奏上した後に,子ども達が「商売繁盛,課内安全」と唱和し,首からかけた賽銭箱に初穂料を入れてもらう。行事前には,氏子役員2軒の家に獅子頭が数日間泊まる。	26
122	福岡市	114	辻祈祷(七夕)	博多区冷泉町	8月6日	ほら貝を吹きながら町の辻を回り祈祷する。院内では千灯明が灯され,護摩祈祷も行われる。	37
123	福岡市	147	草場の盆綱引き	西区草場	8月15日	藤の蔓を絡め合わせて作った綱を引き合う。	19,30
124	福岡市	157	宇田川原の盆綱引き	西区宇田川	8月15日	藁で作った綱を集落の真ん中を通る通りで引き合う。	19,30
125	福岡市	147	玄海島の盆綱引き	西区玄海島	8月15日	ロープを港近くの広場で引き合う。	19,30
126	福岡市	132	田隈の盆押し・盆綱引き	早良区野芥	8月15日	精霊送りが終わると,青年達が集まり肩車をしてお互いに押し合う。頃合いを見て,カヤを撚り合わせて作った綱で綱引きが始まる。綱が切れるとそれをつなぎ合わせる間,盆押しが行われる。	19,30
127	福岡市	147	西浦のかずら引き	西区西浦	8月16日	午後4時からクズの蔓を撚り合わせた綱による「かずら引き」が行われ,続いて「盆相撲」が行われる。相撲が終了すると「精霊流し」となる。	19,30
128	福岡市	114	閻魔祭	博多区中呉服町	8月16日	閻魔像の開帳があり,十王図が境内に並ぶ。閻魔の脇の奪衣婆像にこんにゃくをあげると病気のあくを取ると言い,母乳の出や下の病に功徳があるともいう。「こんにゃく婆さん」として親しまれている。	39
129	福岡市	114	濡衣祭	博多区千代	8月16日	無実の罪を着せられ殺された「濡れ衣」伝説の娘を供養したとされる石碑の前で行われる。	39
130	福岡市	1	米一丸供養	東区箱崎	8月18日	前日に幟を立て,18日11次より称名寺の僧侶によるお施餓鬼の読経がなされる。	39
131	福岡市	136	大施餓鬼供養	西区姪の浜	8月19日	文政11(1828)年から続くという。20時から盆踊り,21時から精霊送り。	37
132	福岡市	114	博多高砂連大施餓鬼	博多区博多駅前	8月21日	大正元(1912)年建立の「高砂連供養塔」で物故者を供養する。初盆の家から寄進された博多提灯を並べ,盆踊り等が行われる。	37
133	福岡市	114	阿弥陀地蔵夏祭り	博多区大博町	8月24日	夕方より海元寺による法要が行われる。お堂には町内の人びとがお参りに来る。町内会による出店がある。	
134	福岡市	114	飢人地蔵大施餓鬼	博多区中洲	8月23,24日	享保の飢饉で死亡した博多の人びとを供養する。参拝者に飴湯の接待。24日20時から灯籠流し。	19,37
135	福岡市	114	大浜流灌頂	博多区大博町	8月24～26日	第4章,第3節,20「流灌頂(福岡市)」 参照。	19,37
136	福岡市	147	放生会(千度まいり)	西区宮浦	9月第1日曜日	神社にて風止めを祈願する神事をした後に,地元の人びとによる直会が行われる。	39
137	福岡市	1	筥崎宮神幸行事	東区箱崎	9月12～14日	第4章,第3節,24「筥崎宮神幸行事」 参照。	32
138	福岡市	147	ヒョウカリライ	西区西浦	9月第1土曜日	第4章,第3節,23「ヒョウカリライ」 参照。	3
139	福岡市	1	放生会大祭	東区箱崎	9月12～18日	福博に秋の訪れを告げる風物詩。約600mの参道に露店が立ち並び,期間中には神事のほか「神にぎわい」として様々なイベントが開催される。15日が放生会大祭。	39
140	福岡市	1	秋季社日祭	東区箱崎		秋のお汐井取り	39
141	福岡市	137	能古島白髭神社おくんち	西区能古	10月1，4，8，9日	第4章,第3節,29「能古島白髭神社おくんち」 参照。	5,6,8
142	福岡市	138	飯盛神社流鏑馬行事	西区飯盛	10月9日	約170mの参道を疾走しながら3か所の的を狙う。中世以来の伝統を持つ。昭和52年(1977)年に,伝書に従い行事形態・装束が整備され,平成3(1991)年から保存会を発足させ実施している。	10
143	福岡市	9	志賀海神社神幸	東区志賀島	10月第2日曜日	第4章,第3節,25「志賀海神社神幸行事」 参照。	32
144	福岡市	125	秋季例大祭(相撲会)	博多区住吉	10月16～19日	神功皇后が相撲を奉納したという故事から「相撲会祭」ともいわれ,少年相撲大会が開催される。この年は25年に一度の式年遷宮を記念し,式年遷宮大祭として開催された。16日に神幸行列,19日に少年相撲大会,流鏑馬の奉納。	10

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
145	福岡市	16	秋季氏子大祭(香椎宮秋季氏子大祭)	東区香椎	10月17に近い日曜日	おくんち。「香椎宮奉納獅子楽」(県指定無形民俗文化財),流鏑馬の昭和12(1937)年以降途絶えていたものを,昭和63(1988)年に復活させたもの。	10
146	福岡市	114	博多くんち	博多区上川端町	10月23,24日	23日に秋季大祭,翌日御神幸行列が行われる。10月23日の祭りは昭和28(1953)年以降のこと。	32
147	福岡市	147	畑中の獅子舞	西区宮浦	10月28,29日	獅子頭を首から綱でつるし,神体の前面に下げて,家々を門付けして回る。	26
148	福岡市	147	おくんち	西区宮浦	10月29日	毎年10月29日に新嘗祭が行われており,28日の前夜祭には神社から仮殿まで神輿の渡御が行われる。また,法被姿で神社に集まった子ども達が,獅子を担いで家々を回り,町内の安全と無病息災を祈る。	26,32
149	福岡市	136	鎮火祭(愛宕神社鎮火祭)	西区	11月1日	鎮火の神で有名な愛宕神社。福岡の火災を防ぐ目的で,伝統を受け継ぐ古式豊かな神事が行われる。	39
150	福岡市	125	歩射祭	博多区	11月7日	弓を射て家内安全や疫病退散を祈願する。学生の武道,杖術,抱筒等の奉納がある。	10,24
151	福岡市	9	山誉種蒔漁猟祭	東区志賀島	11月15日	第4章,第3節,15「山誉め祭」 参照。	17
152	福岡市	6	はやま行事	東区奈多	11月19,20日	第4章,第3節,33「はやま行事」 参照。	13
153	福岡市	129	宮座献饌祭	中央区今川	12月4日	神功皇后凱旋の際,12月4日に鳥飼村で夕食を出したところ,皇后は大変喜び,この地に泊まったとされる。鳥飼八幡宮の宮座では,この時の膳を模して祭りを行う。	6
154	福岡市	114	人形供養	博多区博多駅前	12月第2土曜日	境内で,四代正木宗七作の「延命地蔵尊像」が発掘されたことを機に,博多人形と縁深い寺として,昭和54(1979)年から人形供養と,博多人形師物故者慰霊祭が行われている。	39
155	福岡市	124	福岡義士祭(義士祭)	南区寺塚	12月14日	昭和10(1935)年,東京・泉岳寺を模して赤穂四十七義士之墓が建立された事を機に,地元の有志により始められた。戦後一時中断の後,昭和28(1953)年に復活。	39
156	福岡市	114	かぼちゃ大祭(南瓜供養)	中央区天神	冬至	毘沙門天に開運厄除けを祈願し,参詣者にカボチャ料理,ギンナン飯を振る舞う。	37,39
157	福岡市	114	年越厄除大祭(厄除大祭)	博多区	12月31日	若八幡宮の「若」が「にゃく」と読めることから,「厄」八幡とも呼ばれ,旧年のお札や縁起物を納め,新年に備え厄払いをする。深夜まで続く大晦日の風物詩。	39
158	福岡市	1	御胞衣祭	東区箱崎	12月31日	応神天皇誕生の際,箱崎の海岸に胞衣〈胎盤〉を埋めたのが大晦日であったことから,その場のしるしとして植えられた「筥松〈はこまつ〉」に供物を捧げる。	39
159	福岡市	1	なまこ餅つき	東区箱崎	12月31日	応神天皇誕生の際には,大晦日の夜を徹して胞衣を埋めたため,正月の鏡餅をつく暇がなく,箱崎の漁師が代わりにナマコを献上したという故事により,白丁・腰みの姿の漁師たちがナマコの形に似た「なまこ餅」をついて奉納する。この餅は元旦の三元祭に供えられる。	39
160	筑紫野市	109	筑紫神社粥占行事	原田	2月15日 3月15日	米を研いだりする水は境内の井戸から汲んでいる。2月15日にはその井戸を祓い清める神事から始まり,その後に鑽から採火し粥焚きが行われる。粥を盛るのに使用される金属製の鉢には「文化二年丑年」の年号が刻まれている。3月15日の粥占祭りでは粥占判断委員の合議の上で行われる。	25
161	筑紫野市	110	夏季大祭(オヨド)	二日市	7月14日	祇園祭の前日にヨドと呼ばれる宵祭りが行われ,各地で多彩な催しがある。この祇園様のヨドが祇園社以外にも広がり,新しく生じた旧暦6月中の夏祭り一般をさすようになり,様々な地域で産土神や観音様,薬師様の夏祭りまでもオヨドと呼ぶようになった。中でも特に賑わいを見せるのが二日市八幡宮のオヨドで,7月14日の夕刻から子ども神輿がでる。境内には舞台が立ち,仁和加や芝居などが催され,宮相撲も奉納される。	2,36
162	筑紫野市	109	夏越し祭り(茅輪くぐり)	筑紫	7月19日	夏季に流行する悪疫を除去し,家内安全を祈願する。	39
163	筑紫野市	110	丑湯まつり	二日市	7月土用丑の日		39
164	筑紫野市	109	獅子舞	下見	7月最終日曜日	村中の男が年齢に関係なく参加する。獅子が舞う事はなく,雌雄の獅子頭をそれぞれ持ち,お祓いしながら一軒ずつ家を廻っていく。家の戸や壁を叩き家の中の邪気を追い払う。	26
165	筑紫野市	110	瓜封じ	武蔵	7月第4土曜日	九州最古といわれる武蔵寺では,夏の土用丑の日に願い事を書いた紙を瓜に貼り,薬師如来様に1300年来の祈祷をもって捧げると,災厄や病気,悩み事を瓜に封じ込むことができ,1年間の無病息災や家内安全等の願い事が叶うとされている。	5
166	筑紫野市	111	施餓鬼法要	天山	8月1日	本来は8月17日の行事だが,地域内の僧侶を招く関係で8月1日に行われている。当日は昼に「オトキ(お斎)」という精進料理が出される。13時から法要が始まり,前半は僧侶6人による読経がある。本堂の外陣入口に作られた施餓鬼棚には初盆を迎える人の位牌が並べて置かれる。位牌の前に置かれている木桶に盛られた御供飯にはセガキバタと呼ばれるものが立てられる。	37
167	筑紫野市	113	大施餓鬼供養会	山家	8月18日	江戸時代に飢饉の原因となった害虫を供養するために行われた。当日は本堂に施餓鬼棚が設置され,同院の歴代住職の位牌及び信者の位牌が並べられる。境内の4か所にも施餓鬼棚が設けられ,卒塔婆が並べられる。また,本堂及び境内には初盆が住んだ家から奉納された盆提灯が所狭しと飾られる。	37
168	筑紫野市	110	神幸祭	二日市	10月25日		32
169	筑紫野市	111	観音講,数珠繰り	柚須原			8
170	筑紫野市	111	七瀬まつり(夏祭り)	原		原では夏に行われる七瀬まつりに,ムラ内の川の7か所に男竹を使って膳棚を作る。祈願内容は疫病退散と水利の守護である。渇水期の潤いと疫病除けの祈願を意味する。	27
171	春日市	118	嫁ごの尻たたき	小倉	1月14日頃	前年中に同区に嫁いできた花嫁が,盛装して住吉宮に参拝にくるのを,待ち受けていた子ども達が,ワラを巻いた棒で花嫁の尻をたたくという風変わりな習俗。嫁が家に居着くようにや,子宝に恵まれるようにとの願いを込めているといった解釈がある。それが済むと,左義長に点火する。現在は,盛装した花嫁が神社に参拝後,自治会長から祝辞を受け,その後境内の広場の左義長の周りに集まり,左義長に点火後,待ち受けていた子どもが尻をたたいている。「尻たたきは野蛮」との声もあり大戦中に途絶えていたが,昭和57(1982)年に復活した。前年中に結婚した者がなく中止になる年もあるが,現在でも氏子中心に祭りは守られている。	14
172	春日市	118	春日の婿押し	春日	成人の日の前日	花婿を含む氏子たちが裸になり,神宮の前で御祓いを受け,御池での樽せりへと移行。その中でもみ合ううちに割られた樽の一片を手にした人がこれを神棚に供え,五穀豊穣と開運を祈願する。	14
173	春日市	118	盆綱引き	小倉	8月15日頃	お盆近くの夕刻,仏さま送りが済むと盆綱引きが行われる。公民館の広場,カヤとフジカヅラで編んだ綱を子どもと青年たちが3回引き合う。引き始めるたびに「祝いめでた」を歌う。綱は3回目の引き合いの最中にナタで中央から切断される。勝ち負けにはこだわらない。祭りの由来は,祖先の霊を慰めるためとも,豊年の年の占いとも言われている。	19,30
174	春日市	118	宮座	小倉	10月17日	氏子総代をはじめ,19戸の宮座によって昔からのしきたりに従い,半煮え献立と牛の舌餅をお供えして,祭礼をする。	6

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
175	大野城市	106	オヒカリあげ	下筒井	毎月1,15日	以前は氏子で集まって行っていたが,現在は氏子1人で行っている。	1
176	大野城市	106	ホンゲンギョウ	上大利	1月13日前後	以前は1月8日に行っていたが,現在は1月13日前後に行っている。開催場所は,かつては老松神社正面の道と道との辻で行っていたが,現在は老松神社境内で行っている。竹は近所の山林から採取しており,以前は青年団が切り出してきて,準備をしていた。ホンゲンギョウのヤグラを組むのには経験が必要。	1
177	大野城市	106	ホンゲンギョウ	下大利	1月の日曜日	以前は1月7日松の内の早朝にリプラ(下大利1丁目18番)付近で行っていたが,現在はきりの良い日曜日に,水城跡欠堤部付近で行っている。ホンゲンギョウで注連縄を燃やし,家からアルミホイルに包んだ餅を持ってきて,ホンゲンギョウの火で焼き,無病息災を願い持ち帰って食べる人もいる。	1
178	大野城市	106	ホンゲンギョウ	中	1月第1,2日曜日	三叉路で組ごとか,近隣数戸の共同でホンゲンギョウを行っていたが,現在は中公民館前の公園で区民全体で行っている。注連縄を燃やして,その煙で歳神様をお送りする。無病息災を願って,自分の家の鏡餅を持ってきてホンゲンギョウの火で焼いて持って帰る。現在はぜんざい用の餅を焼くのが主要になっており,鏡餅を焼く人は減ってきている。ホンゲンギョウで燃えた笹の葉が飛び,近隣からの苦情により,年々実施が困難になってきている。	1
179	大野城市	106	ホンゲンギョウ	牛頸	1月7日	正月の期間を終了し,日常生活を始めるにあたって,一年の幸せと健康を祈る行事。1月7日早朝,近所の注連縄や1月2日に書いた書き初めなどを燃やしていた。お供え餅をホンゲンギョウの火で焼いて食べれば病気にならないと言われ,書き初めの燃えかすが高く空に上がれば字が上手になると言われている。	1
180	大野城市	106	ホンゲンギョウ	山田	1月上旬	以前は個々の家で行っていたが,現在は山田公園で行っている。	1
181	大野城市	106	ホンゲンギョウ(どんど焼き)	釜蓋	1月最初の日曜日	以前はどんど焼きと呼んでいたが,現在は併記している。公園で行っているが,開催場所の確保が年々厳しくなっている。	1
182	大野城市	106	どんと焼き	乙金	成人式前日	かっぽ酒をふるまう。点灯式は新成人が行う。	1
183	大野城市	106	どんど焼き	上筒井	1月	かつてはお宮の横の川で行っており,御笠川の竹を使い,子ども会主催であった。	1
184	大野城市	106	どんと焼き	大池	1月第2日曜日	平成3(1993)年から行っている。	1
185	大野城市	106	どんと焼き	瓦田	成人の日	以前はホンゲンギョウと呼んでいたが,現在はどんと焼きと呼んでいる。一時期途絶えたが,平成22(2010)年に復活させた。近所の人が鏡餅をもってきて,どんど焼きの火であぶり,ぜんざいなどを作っていた。	1
186	大野城市	106	どんと焼き	下筒井	1月第1,2日曜日	以前は田んぼで行っていたが,田んぼがなくなり神社の境内で行っている。	1
187	大野城市	106	どんと焼き	栄町	1月第2土曜日	子ども達には焼き芋をふるまい,大人は酒を飲んで楽しむ。	1
188	大野城市	106	どんど焼き	南ヶ丘1区	1月第2土曜日	昭和49(1974)年から始めている。	1
189	大野城市	106	どんど焼き	南ヶ丘2区	1月第2土曜日		1
190	大野城市	106	どんど焼き	平野台区	1月第2日曜日	平成24(2012)年から復活。中学生など多くの人とヤグラを作っている。	1
191	大野城市	106	どんど焼き	つつじが丘区	1月第2土曜日		1
192	大野城市	106	春ごもり	山田	4月第3土曜日か日曜日	太宰府市の石穴神社の宮司がお祓いをして,直会を行う。以前は各家から弁当を持ち寄り,神事の後に莫蓙を敷いて食べていたが,現在は神社の中にブルーシートを敷いて仕出し弁当にしている。雨天の場合だけ公民館を使う。	6
193	大野城市	106	春ごもり	釜蓋	4月15日に一番近い日曜日	10時から地禄神社で神事を行い,12時から直会。お神酒は供えたものを頂き,食事やつまみは持ち寄る。かつては農閑期(4月は麦の収穫後)に始まった。春のおこもりは,還暦と厄年の人が鉢盛とお神酒を献上するのが慣例になっている。区の親睦が目的なので氏子でなくても参加可能。	6
194	大野城市	106	春ごもり	上大利	4月第1日曜日	以前は4月15日,現在は4月第1日曜日に斎行。老松神社拝殿に手作りしたり,購入したりした弁当を持ち寄って会食をする。何軒かは折敷に御飯を盛って,神前にお供えして持って帰っている。	6
195	大野城市	106	春ごもり	下大利	4月第1日曜日	以前は4月中旬,現在は4月第1日曜日に老松神社の氏子だけで斎行。下大利は4組があり,祭りは順番に組の当番制でお供えものと直会を賄う。	6
196	大野城市	106	春こもり	畑詰	4月15日前後の日曜日	厄祓いを行う。男の前厄のときに太宰府市にある石穴神社の宮司に来てもらい,お祓いをする。	6
197	大野城市	106	春ごもり	中	4月第1日曜日	掃除をして,10時から太宰府市の石穴神社の宮司に作物が順調に育つように五穀豊穣の祝詞を上げてもらう。総代・副総代・地域代表が玉串を奉納して,お神酒を飲んで直会をする。おこもりは氏子53戸5班全員が参加する。直会の飲食はお宮でしなければいけないが,公民館を借りて行っている。	6
198	大野城市	106	春ごもり	御陵	4月第3日曜日	掃除をして,10時から太宰府市の石穴神社の宮司に作物が順調に育つように五穀豊穣の祝詞を上げてもらう。総代・副総代・地域代表が玉串を奉納して,お神酒を飲んで直会をする。おこもりは氏子5班が参加する。直会の飲食はお宮でしなければいけないが,公民館を借りて行っている。	6
199	大野城市	106	春ごもり	上筒井	4月15日前後の日曜日	神社を「村」と「宿」に分けて呼ぶことがある。村(上筒井)は宝満神社,宿(下筒井)は黒男神社。	6
200	大野城市	106	春ごもり	雑餉隈町	4月10日	氏子は原則夫婦で7家族14人で開催日を変えずに行っている。おこもりは男女関係なく参加して,男性が旗などを立てて,女性が料理を用意する。	6
201	大野城市	106	春ごもり	瓦田	4月15日	おこもりの祝詞は太宰府市の石穴神社宮司に上げてもらっている。祝詞を上げた後に直会を行う。氏子は干支の順番に12の当番を作り,順番に回して行う。1～9番までが瓦田区。10～12番までが釜蓋区。当番の親族を除いて,新しく区に移り住んだ人は当番に入ることはできない。	6
202	大野城市	106	春ごもり	下筒井	4月中旬の土曜日	以前は拝殿に家庭で作った料理を持ち寄って集まり,子どもから大人まで氏子の家族みんなで集まっていた。現在は氏子代表だけ集まって行っている。拝殿で総代が先導して「敬神生活の綱領」をみんなで読んだ後,公民館のホールで直会をしている。氏子は4月の総会で当番を交代する。当番は2年に1回変わる。上筒井(宿)が2年,下筒井(町)が2年で交代する。	6
203	大野城市	106	春ごもり	畑詰	4月15日に近い日曜日		6
204	大野城市	106	春ごもり	牛頸	4月19日	氏子全員で行う。	6
205	大野城市	106	おせったいひき	牛頸	4月21日	子どもが学校から帰宅する時間(14時頃)をめどに準備を整えて待ち,集まってきた子ども達は,まず祠(弘法大師・不動明王・観音如来その他どれか一体,又は複数合祀)を拝んだ後,菓子を頂いて次の場所(地区)に移動する。参加している子ども達は小学生が主であるが,母親に連れられた幼児や中学生の姿もかなり見られる。	6
206	大野城市	106	およど	牛頸	7月18日	平野神社境内に数十個の御神灯を灯し,一の鳥居から拝殿下までの両側に夜店が並ぶ夏祭り。	36
207	大野城市	106	夏ごもり	牛頸	7月19日		6

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
208	大野城市	106	夏ごもり	山田	7月第3土曜日か日曜日	太宰府市の石穴神社宮司がお祓いをして,直会を行う。以前は各家からお弁当を持ち寄り,神事の後に莫蓙を敷いて食べていたが,現在は神社の中にブルーシートを敷いて仕出し弁当にしている。雨天の場合だけ公民館を使う。	6
209	大野城市	106	夏ごもり	釜蓋	7月15日に一番近い日曜日	10時から地禄神社で神事を行い,12時から直会。お神酒は供えたものを頂き,食事やつまみは持ち寄る。かつては農閑期(7月は田植の後)に始まった。	6
210	大野城市	106	夏ごもり	上大利	7月第2日曜日	以前は7月15日,現在は7月第2日曜日に斎行。老松神社拝殿に手作りしたり,購入したりした弁当を持ち寄って会食をする。何軒かは折敷に御飯を盛って,神前にお供えして持って帰っている。	6
211	大野城市	106	夏ごもり	畑詰	7月15日前後の日曜日	夏ごもりは子どもが病気をしないように昔からお参りしている。	6
212	大野城市	106	夏ごもり	中	7月第1日曜日	掃除をして,10時から太宰府市の石穴神社の宮司に作物が順調に育つように五穀豊穣の祝詞を上げてもらう。総代・副総代・地域代表が玉串を奉納して,お神酒を飲んで直会をする。おこもりは氏子53戸5班全員が参加する。直会の飲食はお宮でしなければいけないが,公民館を借りて行っている。	6
213	大野城市	106	夏ごもり	御陵	7月第3日曜日	掃除をして,10時から太宰府市の石穴神社の宮司に作物が順調に育つように五穀豊穣の祝詞を上げてもらう。総代・副総代・地域代表が玉串を奉納して,お神酒を飲んで直会をする。おこもりは氏子5班が参加する。直会の飲食はお宮でしなければいけないが,公民館を借りて行っている。	6
214	大野城市	106	夏ごもり	上筒井	7月15日前後の日曜日		6
215	大野城市	106	夏ごもり	瓦田	7月15日	おこもりの祝詞は太宰府市の石穴神社宮司に上げてもらう。祝詞を上げた後に直会を行う。	6
216	大野城市	106	夏ごもり	下筒井	7月15日に近い日曜日	以前は拝殿に家庭で作った料理を持ち寄って集まり,子どもから大人まで氏子の家族みんなで集まっていた。現在は氏子代表だけ集まって行っている。拝殿で総代が先導して「敬神生活の綱領」をみんなで読んだ後,公民館のホールで直会をしている。	6
217	大野城市	106	夏ごもり	畑詰	7月16日に近い日曜日		6
218	大野城市	106	六月堂	山田	7月24日	おこもりのような行事で,堂の周りの家10軒ほどが酒などを準備し,山田区全体に声をかける。子ども達が楽しめるようにおもちゃや綿菓子などをふるまっている。	6
219	大野城市	106	夏ごもり	雑餉隈町	7月24日	氏子は原則夫婦で7家族14人で開催日を変えずに行っている。おこもりは男女関係なく参加して,男性が旗などを立てて,女性が料理を用意する。	6
220	大野城市	106	六月堂	雑餉隈町	7月24日	以前は各家から饅頭やお菓子を供え,子ども達は境内を清掃して仏像を新川で浄め,手作りの御神灯を道端に並べ,夜は花火を上げてお祭りをしていた。昭和38年からは人家が多くなったため,花火があげられなくなり,提灯行列に変えた。	1
221	大野城市	106	背中あわせごもり	畑詰	9月1日に近い日曜日		6
222	大野城市	106	秋ごもり	畑詰	9月第2日曜日辺り	新米を炊き,藁苞に入れてお供えをし,その新米を全戸に配る。各家庭がお皿を持ってくるので,少しずつ分ける。	6
223	大野城市	106	秋ごもり	雑餉隈町	10月10日	氏子は原則夫婦で7家族14人で開催日を変えずに行っている。おこもりは男女関係なく参加して,男性が旗などを立てて,女性が料理を用意する。	6
224	大野城市	106	宮座	下大利	10月第1日曜日	以前は10月1日,現在は10月第1日曜日に老松神社の氏子だけで斎行。古くからの宮座株はやめて,氏子会を作っている。地元の人だけでなく,マンションなどの新しい人たちも氏子会に入っており,90人程いる。縄ないの藁は牛頸の住人からもらっており,氏子15～16人で注連縄を作る。春ごもりの時と同じ組の当番制で行う。拝殿と本殿の間の階段に,2か所,新米御飯を置く。	6
225	大野城市	106	宮座	中	10月第1日曜日	中宝満神社と御陵宝満神社の注連縄を作る。朝8時に公民館に集合して2時間くらいかけて作る。注連縄ができ上がったら,すべて一回お宮に持って行き,11時頃から紙垂をつけ,神主さんにお祓いをしてもらう。	6
226	大野城市	106	宮座	御陵	10月第1日曜日	中宝満神社と御陵宝満神社の注連縄を作る。朝8時に公民館に集合して2時間くらいかけて作る。注連縄ができ上がったら,すべてを一度お宮に持って行き,11時頃から紙垂をつけ,神主さんにお祓いをしてもらう。	6
227	大野城市	106	宮座	山田	10月第3土曜日か日曜日	1週間ほど前に注連縄を用意する。福岡県農業試験場や知人の田に藁をもらいに行く。太宰府市の石穴神社宮司がお祓いをして,直会を行う。以前は各家からお弁当を持ち寄り,神事の後に莫蓙を敷いて食べていたが,現在は神社の中にブルーシートを敷いて仕出し弁当にしている。雨天の場合のみ公民館を使う。	6
228	大野城市	106	宮座	上筒井	10月15日前後の日曜日	宮座の時に注連縄を作っているが,作り手も減り,準備も大変なため,購入することもなる。太宰府市の石穴神社の宮司に祝詞を上げてもらう。	6
229	大野城市	106	宮座	瓦田,釜蓋	10月15日	おこもりの祝詞は太宰府市の石穴神社宮司に上げてもらっている。祝詞を上げた後に直会を行う。直会は神社で行うが,宮座は瓦田と釜蓋と一緒に行い,参加人数が多いので公民館で行っている。干支の順に12の当番をつくり,順番に回して行う。1～9組が瓦田区,10～12組が釜蓋区の宮座の当番が注連縄を作る。	6
230	大野城市	106	宮座	下筒井	10月15日に近い土曜日	太宰府市の石穴神社宮司に祝詞を上げてもらった後に直会をする。以前の宮座膳はみんなで料理を持ち寄っていたが,現在はお弁当になっている。	6
231	大野城市	106	宮座	畑詰	10月15日に近い日曜日	宮座当番は新藁で注連縄を作って神前に奉納し,新米の飯を新藁で作った藁苞に入れて神前に供えた後,座衆の全戸に少量ずつ分配する。各家では神棚に供えた上で家族全員で少しずつ食べて新穀への感謝を捧げる習慣が残っている。当渡しは神前で当年と翌年の当番が向かい合って座り,朱塗の神紋入りの盃で酒を酌み交わした後,盃を翌年の当番に引き継ぐことにより当渡しの行事は終わる。宮座膳には「海老」と「人参葉のおひたし」が必須とされていたが,昭和30年代頃から決まりもなくなり,現在は鉢盛と弁当になり,「海老」が「鯛」に変わっている。	6
232	大野城市	106	大日堂のおこもり	田屋	10月15日前後の日曜日	畑詰の黒男神社宮座の時に男性のためにお弁当を作るので,自分達(女性)の分も作って,大日堂に集まってお弁当を食べている。宮座が始まる12時頃に田屋のお宮(大日堂)に集まって14～15時に終了する。祝詞を上げてもらうことはない。小さい瓶に入っているままの状態でお神酒を1～2合お供えし,各自の水筒のコップに少しずつ分けてお神酒を飲む。お供えは各自で赤飯やおすしを作って,大きい折敷に入れてお賽銭と一緒にお供えする。	6

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
233	大野城市	106	宮座	牛頸	10月16～18日	10月1日に注連縄をない，新穀を奉献する。16日の夕刻から当番の家に宮座株を持つ家の戸主が参集し，餅搗と供え物の準備を行う。宮座当番は上座（上牛頸），下座（下牛頸）からそれぞれ一軒ずつが当たっていたため，6年に1回の当番であったが，昭和30年頃から上座・下座を統合して1軒としたため，現在では12年に1回の当番が廻ってくることになった。16日は新米御飯の宮座膳が出され，「餅搗膳」という。この宮座膳に座った戸主たちは一膳の飯を食べると，庭や納屋などに準備された餅搗き場で宮座の餅を搗く。各戸から一升ずつ持ち寄った一斗二升の糯米で三段重ねの鏡餅にするが，この餅搗きは最も神聖な行事であるため，杵は毎年新しい椎の木の上下を削ったものを用い，12人の男達が口々に榊の葉をくわえて餅を搗く。搗き終わると再び座敷に戻り，本膳とお土産まで配っていたが，昭和30（1955）年以降は本膳とお土産は廃止している。翌17日は宮座員は神社に詣り，献饌の儀を行う。御神酒の外に昨夜搗いた鏡餅三段重ね，新穀2盛，大豆二2盛，大鯛1尾，大根2束，ホテ2本を12個の三宝にのせて12膳の箸を添え，拝殿から本殿まで宮座員の手渡しで運び，神主の手で本殿内に納められ，神主による平野祭の祝詞が上げられてこの行事は終わる。ホテは大根に渋柿，山芋，トコロを串刺しにしたものを六本刺して2組作り，それぞれを三宝にのせたもの。18日は氏子により，撤饌の儀が行われ，直会に移る。この時に当渡しを行うが，12個の三宝と神殿の鍵と宮座用のゴザを引き継ぐことによって当渡しの式は終わる。そして，神前中段の広場に新たに起こした焚火で大鯛を焼いて，12人に分配し，御神酒や甘酒で祝宴となり，三段重ねの鏡餅は一つを二つに切って一二片とし，宮座員12名が一片ずつ持ち帰る。宮座膳の準備の外はすべて男のみによって行われる。	6
234	大野城市	106	秋ごもり・宮座	上大利	10月16日	10月16日に斎行。春と夏のおこもりは集まりやすい日曜日に変更しているが，宮座は変えていない。宮座の前に境内の注連縄を掛け替えるため，区の長老が集まって，境内で縄ないをしていた。しかし，5～6年前から，作り手の高齢化や注連縄に使う藁が入手しにくくなったため，縄ないをしなくなった。今は糸島から購入している。藁ゾトも作ってもらっている。宮座当日に境内の注連縄を掛け直す。宮座は昼から太宰府石穴神社の神職にお祓いをしてもらい，食事は神社で行う。食事は弁当を持ち寄って食べる。「いりこ」が定番でお神酒をいただくときや当屋渡しの時も食べる。15時から当屋渡しを行う。次の年に宮座を担当する順番は決まっており，3軒が担当し，だいたい10数年に1回，回ってくる。当屋の中で「かしら」を決めるためにくじ引きを行う。くじは3本の木で先端を紙で包んで，見えなくしてある。「かしら」が決まったところで，公民館に移動する。当屋渡しは公民館でその年に当番だった3軒と次の年に当番になる3軒，氏子総代の7名で行う。新旧の当番6軒で大盃につがれた一升の酒を飲み干すまで回す。当屋の「かしら」には稲穂のついた藁ゾト（献立表が入っている）とユリ（木の箱）の受け渡しをする。「かしら」宅の神棚横にお供え物を置く。	6
235	大野城市	106	山の神	牛頸	10月20日	10月17日におしめ打ちを行う。10月20日に井手組8軒で毎年1軒が当番でお座を行う。	6
236	大野城市	106	山の神	牛頸	10月24日	10月24日に鏡餅を上げて，原組の者でおこもりをする。	6
237	大野城市	106	仕度ごもり	御陵	12月1日	12月1日17時から2時間ほどで行う。神無月に御陵宝満神社の神様が出雲大社の会議に出られて2か月かけて帰ってくるので，12月1日に神様のお帰りを迎える。仕度ごもりでは，火を焚いてここが神社であることを示し，地域の未婚女性が作ったおにぎりを食べながら神様を迎える。現在は世話役が料理を準備しているが，昔は各家庭から料理や酒を持ち寄って分けていた。	6
238	大野城市	106	十日恵比須	雑餉隈町	12月10～12日	氏子は原則夫婦で7家族14人で開催日を変えずに行っている。おこもりは男女関係なく参加して，男性が旗などを立てて，女性が料理を用意する。	23
239	大野城市	106	焼納祭	雑餉隈町	12月10～12日	焼納祭で正月のしめ飾りを1年間保存したものと十日恵比須の笹飾りを焼く。	1
240	大野城市	106	庚申様	上大利	初庚申の日	以前は庚申の日（年に6度ほど）に集まっていたが，今は年に1回，初庚申の日のみに集まっている。以前は4組まであって，それぞれの組で庚申講をしていたが，今は1組の6軒で当番を持ち回りしているので，6年に1度，当番が回ってくる。初庚申の日は朝早くから福岡市の藤崎神社に行ける人だけがお参りに行き，猿面を買いに行き，新しい猿面を玄関先に飾る。初庚申の晩に直会がある。当番の家の床の間に「猿田彦」の掛軸を掛ける。夜の食事に決まりごとはない。	8
241	宗像市	30	松尾神社祭	大社	3月19日		5，17
242	宗像市	30	鎮国寺柴灯護摩供	鎮国寺	4月28日	毎年4月28日に行われる柴灯大護摩供は，不動明王の御開帳，火渡りの行事が行われ，一万人もの人びとで賑う。柴灯大護摩供とは護摩木を焚いて身代わり不動明王を招き，家内安全などの願い事を祈願する仏教の修法である。	33，37
243	宗像市	30	宗像大社春季大祭	大社	4月1，2日	春季大祭は，虫干しを兼ねて宗像大社所蔵の神宝や古文書を一般公開したことから始まり，現在では五穀豊穣を祈り，主基地方風俗舞や地元中学生による浦安舞が舞われる。	17
244	宗像市	22	山田地蔵尊春季大祭	山田	4月23，24日	地蔵尊から受けてきた「虫札」を田畑に立てた。	15，37
245	宗像市	32	厄祭	玄海町	4月4日		39
246	宗像市	32	鐘崎白象祭	鐘崎	5月3日		37
247	宗像市	30	五月まつり	大社	5月5日	古来は秋季大祭と同等の祭りだったが，現在は五月宮の五月会と浜宮社の濱降り修祓を併せて行われている。	20
248	宗像市	34 32	龍宮祭	大島，鐘崎	5月11日	竜宮神社と小夜島神社で神事が行われる。漁は休み，船と酒と鮮魚を積んで，船霊さまにもお酒が供えられ，神職も同行願い，近くても船で参る。お祓いを受けて，帰宅してから御座が開かれる。お参りには紅白の幟を持って参り，婦人は行かない。	17
249	宗像市	22	石かたげ神事	須恵	7月15日	海中の石を福足神の荷物に見立てて海から引き上げる。その時，石を肩にかたげるところからその名がついている。	39
250	宗像市	32	鐘崎山笠	鐘崎	7月15日	漁業の安全と厄疫退散の祈りを込め行われる。電信電燈線の無い時代は，津屋崎山笠と並んで郡内では屈指のものだった。山笠は飾り山笠で，表と裏の両面飾りである。	29
251	宗像市	32	地島山笠	地島	7月15日	昭和23（1948）年を最後に途絶えていたが，昭和46（1971）年に復活。人形二体を飾った花山。両部落を流しがきするため，大人子ども60人ほどで海の中をかき，船に積んで海を渡るという珍しい山笠。	29
252	宗像市	34	大島祇園山笠	大島	7月14，15日	7月14日には飾り山，7月15日には宗像大社中津宮で祭典の後，追い山が行われる。役場から中津宮まで約2kmを，大人の山2基，子ども山2基，計4基の舁山で巡行していく。	29
253	宗像市	30	宗像大社夏越祭（大祓式）	大社	7月31日	夏季に流行する悪疫を除去し，心身の罪，穢れを人形（ヒトガタ）に託して祓い除き清々しい気持ちで毎日を無事に過ごしていくための祈りを込めた神事。巫女の舞の奉納も同時に行われる。	15
254	宗像市	21	赤間祇園	赤間	7月14日に近い土，日曜日		32
255	宗像市	22	水神祭	稲元	7月下旬	不動さんの境内に竹を立てて供物台を作り，藁製のテボ（籠）の中に御供・カケノイヲ・野菜・米・塩などを供える。テボには必ず里芋が入っている。	16，27
256	宗像市	24	田熊山笠	田熊	7月第3日曜日	田熊地区で例年7月に行われている伝統行事で，博多祇園山笠と同じ舁き山形式の祭り。近年は，田熊地区のみならず宗像市内外から多くの参加者が集まる。	29
257	宗像市	34	七夕まつり	大島	8月7日	七夕伝説発祥の地といわれる大島で行われる。中津宮の境内に流れる「天の川」を挟んで牽牛神社・織女神社が祀られる。青笹に願いごとを書いた短冊を結びつけて，浴衣姿で七夕踊りを奉納しながら願いごとの成就を祈る。	19

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
258	宗像市	24	宮座	平清水	10月8日	当日に戸主が紋付,羽織で集まった。氏子総代とホントウバが最前列に座り,あとは年長者順に上座から順に正面に向かって座った。祝詞の後,総代とホントウバが玉串を奉奠し,ほかの者はこれに倣って礼拝した。次にするめと昆布で冷酒を頂き,添えられた扇木箸で御供や牛の舌餅を掌に受けた。	6
259	宗像市	22	宮座神事	平等寺	10月17日	第4章,第3節,28「平等寺の宮座」参照。	6
260	宗像市	30	みあれ祭	大社	10月1～3日	宗像大社の秋季大祭は毎年10月1日～3日の3日間行われ,放生会(ほうじょうえ)ともいい,国家の平穏,五穀の豊穣と海上安全及び大漁を感謝する祭りで宗像最大の祭り。初日の10月1日の初頭を飾るのが海上神幸「みあれ祭」である。この「みあれ祭」は田島の辺津宮(宗像大社)で宗像三女神が一同に会して秋祭大祭を行うために,辺津宮に祀られている(三女)市杵島姫神(いちきしまひめのかみ)様が沖の島にある沖津宮にお祀りしている(長女)田心姫神(たごりひめのかみ)様と筑前大島の中津宮にお祀りしている(次女)湍津姫神(たぎつひめのかみ)様を乗せた2隻の御座船を出迎える祭り。約120隻のお供の船団とともに9時30分に筑前大島港を出港し,神湊(こうのみなと)を目指して約15kmのコースを1時間かけて海上パレードを行う。昔は漁船400～500隻のパレードであったようだが,最近は漁船も減り2009年時点で120隻程度にまで減少している。	32
261	宗像市	20	八所神社御神幸祭	吉留	10月12,13日	第4章,第3節,27「八所宮神幸行事」参照。	2,32
262	宗像市	24	摩利支神社秋季大祭	東郷	10月8,9日		32
263	宗像市	22	宮座	稲元	10月	稲元の座元が交代で持ち廻っている宮座帳の記録によると,昭和51（1976）年の協議事項では御神前の御供物が大幅に廃止された。特に「御舌餅,掛魚,寸型,柳箸,馬のハミ」などが消え,「御神酒,するめ,米,塩に野菜」と簡略化された。平成6（1994）年では飲食も折箱弁当が配られるだけになった。	6
264	宗像市	21	恵比須祭り	赤間	12月第1日曜日	須賀神社の拝殿で開催される。太鼓の合図で拝殿の戸が開き,参加者は券を引き換えて座につく。数回の打ち込みをしながら,神官のお祓い,お神酒をいただき,福引きが行われる。	6,23
265	宗像市	30	鎮火式・古式祭	大社	12月15日		5,6
266	宗像市	23	ヤジマワシ	后曲	8月13日		19,30
267	宗像市	23	原町恵比寿お座祭	原町	12月第1土曜日	祭りの参加者は南郷の住民が主だが,以前は農家ばかりが参加した。	6,23
268	太宰府市	112	斧始祭	宰府	1月4日	斧始祭は,康和3(1101)年に大宰権帥の大江匡房(おおえまさふさ)卿によって始められ,当宮の営繕の作業が計画の通り,平安に滞りなく無事に実施されることを祈念し,年の初めに宮大工の棟梁をはじめ,関係者によって古式により執り行われる神事である。	18
269	太宰府市	112	うそ替え	宰府	1月7日	第4章,第3節,3「鬼すべ・鷽替え」参照。	22
270	太宰府市	112	ホンゲンギョウ	連歌屋,五条等	1月7日	正月7日に全地域で行われていた火焚き行事をホンゲンギョウと呼んでいた。連歌屋ではマチ部の五条では冬の間に子ども達が宝満山まで行って女竹を取っておく。連歌屋では一週間前から子ども達が竹を集めておく。青年たちは7日夜の鬼すべの準備で忙しいからである。	1
271	太宰府市	112	鬼すべ	宰府	1月7日	第4章,第3節,3「鬼すべ・鷽替え」参照。	1
272	太宰府市	112	初天神祭	宰府	1月25日	御祭神菅原道真公に縁のある毎月25日を「天神さまの日」として,御本殿にて祭典が斎行される。その中でも一年の初めとなる1月25日は「初天神祭」として斎行され,大切にされてきた御縁日の祭典。	39
273	太宰府市	112	梅あげ	宰府	3月	梅あげとは,初老を迎える男性(40歳),還暦を迎える男女(60歳)が,それぞれ厄払いとして太宰府天満宮に梅の木を奉納する行事で,献梅行事とも呼ばれる。梅上げ行事は近年,3月の第1土曜日に還暦が,3月の第3日曜日に初老が行うことが多いが,その時々で実施日やコース,進め方を決めるため,世代によって全く異なることがある。太宰府天満宮でお祓いを受けた行列が,三味線・鉦・太鼓のお囃子隊,厄年の人びとと続き,途中から梅の木を曳いた牛が合流し沿道を歩き回る。厄年の人びとは餅を沿道の人達に配ることで厄落としとなると言われている。その後,太宰府天満宮に帰ってきた一行は,牛が曳いてきた梅を境内に植樹する。	39
274	太宰府市	112	厄除	宰府	4月		15
275	太宰府市	112	十六詣り		4月16日	16歳の男女が4月16日に宝満山の上宮に参詣すると,男は一生小遣い銭に不自由せず,女は良縁を得るという言い伝えが,かなり遠くまで広まっていて登る人が多かった。宝満詣りは二度登って参詣すると上宮の神様が「よう来た,よう来た」と喜ばれるが,三度目には「お前は馬鹿か」と言われるなどの話も聞かれる。	13
276	太宰府市	112	宝満山入峰・大護摩供		5月第2日曜日	法螺貝の音を先頭に,山中の霊場を回峰する宝満山峰入り行事が行われる。一の鳥居では古式のままに入山作法が行われ,山頂の上宮や開山心蓮上人の墓前で勤行が行われる。大護摩供では,護摩木に様々な願いを託し御神火で焼納する修法で,宝満山修験会の奉仕により厳修され,引き続き火生三昧(火渡り)の行事も行われる。	33
277	太宰府市	112	太宰府天満宮夏祭	宰府	7月24,25日	7月24日(夏越祭),25日(誕生祭)の両日,菅原道真公の御生誕(旧暦6月25日)をお祝いし,夏を無事に過ごせるように願う「夏越祓え」の神事が行われる。太宰府天満宮本殿入口の楼門前には大きな茅の輪が設置される。7月25日には心字池周辺に約千本のロウソクを献燈し,道真公の御神霊をお慰めする。	15
278	太宰府市	112	太宰府天満宮神幸行事	宰府	9月22,23,25日	御神徳を仰ぎ,五穀豊穣を神明に感謝する大祭。天満宮本殿から,御神霊を奉安したお神輿に,神職や平安時代の装束に身を包んだ氏子たちが共奉し,22日が『お下りの儀』として榎社まで,23日は『お上りの儀』として天満宮まで戻る。牛車も登場して平安絵巻を展開する。25日が例祭で夜は千灯明が行われる。	32
279	太宰府市	112	盆綱	北谷	8月15日		19,30
280	太宰府市	107	宮座	坂本	10月1日	坂本区では組ごと(坂本・関屋・洗出)に塗物の膳椀一式を座の人数分と,座元の入り口に張る紺色で組の名を染め抜いた幕を座元が持ち回りで保管していた。お宮での祭典後,参加者は自宅に戻り正装に着替えてから座元の家に集まる。床の間に八幡大神の御神号を掲げ,年長者から順に座を占め,厳格なしきたりに基づいた献立の膳部が出され熨斗だしの儀礼があって盃事に移る。	6
281	太宰府市	107	宮座	観世音寺	10月9日	神社に全戸の戸主が集まって神職による祭典を行ったあと,各組に戻って組ごとの祭りの座を持つが,それを宮座と呼んでいる。各座元の家の床の間に日吉神社の御神号を掛けて,鶴亀を象った飾り台を置き神饌を供える。	6
282	太宰府市	112	宮座	内山	10月10日		6
283	太宰府市	107	宮座	大佐野	10月11,17日	大佐野は座が2つあり,新座は11日,旧座が17日に行われる。神社での神事の後,直会は座元の家に座を移さず,集会所で行われる。当渡しは宮座の翌日の昼頃にその年の座元宅で行われ,膳椀類・掛軸・祭帳を次の年の当元に譲り渡す。	6
284	太宰府市	107	宮座	国分	10月12日	宮座の当日は神社入口の両脇に白い幡を立て,神前には神饌を供え,その脇に菅公の掛軸と「衣掛天満宮」と書かれた書の軸を掛ける。神職から氏子に榊が手渡され,豊作の祈りを込め神前に捧げられる。神事が終わるとすぐに直会に入り,神職と氏子たちが供物の清酒を戴く。直会には次年度に当番を引き継ぐ「当渡し」の意が込められている。当番は上組・中組・下組の3つに分けられており,1年交替である。かつては厳しいしきたりの中,年長者への礼節をもって進められていた宮座は昭和36（1951）年,氏子達の中で話し合いの場が設けられ,時代の流れに添った行事内容へと再検討がなされ,現在は,老若男女問わず和やかな雰囲気で親睦を深める場となっている。	6

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
285	太宰府市	107	宮座	吉松	10月15日に近い日曜日		6
286	太宰府市	107	宮座	水城	10月15・16日	宮座に先立ち10月朔日に神社で注連打ちが行われる。宮座の前日15日は当番によって神社に幟が立てられ,夕刻になると当番が手分けをして座員の家に案内に廻る。宮座は16日の11時過ぎから神社の拝殿で行われる。	6
287	太宰府市	107	宮座	通古賀	10月不定	この地区の宮座では,座元の床の間に御神号を掲げて,御神酒・御供・懸鯛・鏡餅(一升五号)を供える。座順や宮座の献立に一定の決まりがあり,全員が正装をして集まる。この宮座の特色としては,御神酒が一巡した後に神前に供えていた懸鯛を下げて,真魚箸を用いて手を触れずに調理し,それを吸物肴にする「座魚」の儀式が残っていることである。	6
288	太宰府市	107	秋思祭	観世音寺	10月	旧暦9月9日は重陽の節句で,宮中では観菊の歌会が催され,翌10日にも後宴が催された。道真公はこの後宴で,醍醐天皇からの「秋思」という勅題に対し,これまでの天皇家からの御恩に報いたいという気持ちを詩に詠んだ。これに感激した醍醐天皇よりお召の御衣を授けられ,道真公は人生において最高の時を迎えた。しかしその4ヶ月後に藤原時平の政略により突如として大宰府に左遷された道真公は衣食もままならない厳しい生活を送ることになった。1年後の9月10日,道真公は都での華やかな時を偲びつつ,天皇様にお慕い申上げる漢詩を詠んだ。愁思祭は,この道真公の気持ちを偲んで,その御霊をお慰めするための祭典として,現在は10月上旬に大宰府政庁跡にて執り行われてる。	39
289	太宰府市	107	宮座	向佐野	10月初丑	直会が終わりかけた頃に,その年の当元が御神号(天穂日命)の掛軸・祭帳に懸鯛と御神酒を添えて翌年の座元宅に行き,両年の当元が揃って当渡しをする。座元では本膳拵えをして迎え,相互に当渡しの口上があって本膳の親椀で御神酒の受け渡しをする。	6
290	太宰府市	112	更衣祭	宰府	11月20日	4月20日の更衣祭に対して11月20日に行われる。この度は祭神菅原道真公が冬の御衣に更衣される儀式である。旧暦の時も同月日の深更に行われたので,身の震うような寒さであったという。	39
291	太宰府市	112	恵比寿祭	宰府	12月3日	天満宮周辺を中心に点在する石造えびす像に参拝する。えびす像には地域の人びとの手で注連縄がかけられ,尾頭つきの鯛や紅白の餅,野菜,果物などが供えられる。参拝者には,御神酒や紅白のなます等が振る舞われる。	23
292	糸島市	141	追儺祭(鬼すべ)	前原中央	1月7日	疫病が流行したとき,疫鬼を追い払うために行われたと言われる行事。鬼に扮した氏子たちが,朱塗りのお面をかぶった大鬼を先頭に町内の罪やけがれ,うそを背負って神社を出る。鬼たちは「鬼じゃ,鬼じゃ」のかけ声とともに街中を練り歩く。この日は,家内安全や商売繁盛,学業成就,五穀豊穣,家内安全の祈願が込められた「うそ」が販売されるほか,福引きも開催されている。	1,18
293	糸島市	146	餅押し	志摩桜井	1月10日	若者達が,厄に見立てた大餅を,裸の締め込み姿で水を浴びながら,激しく奪い合う初春祭。この祭りは厄除けと招福を願って古く江戸時代から行われており,餅を持って帰った人には福が来ると言われている。またこの日は早朝より福引が行われるほか,神社の楼門の辺りでは厄年の人たちが参拝者に酒を振る舞い,一般の方にも小さな餅が配られる。	10,15
294	糸島市	152	追儺祭	二丈深江	1月第3日曜日	かつては神社でうそ替えをしていた。現在では厄年の人たちが家々を回ってお祓(はら)いをし,うそを配っている。	18
295	糸島市	152	百々手祭り(大飯喰らい)	二丈淀川	1月25日に近い日曜日	第4章,第3節,9「百手祭り・大飯喰らい」参照。	5,24
296	糸島市	141	百手的射祭	波多江	2月25日	神功皇后が出産が遅れることを神に祈り,その後無事に応神天皇を出産し,その報祭のため,2月25日に神前で「百手的射」を行ったので,現在に至る迄,神職・氏子が的射の神事を例祭に併せて行っている。	10,24
297	糸島市	141	安産成就祈願	波多江	毎月戌の日	犬がお産が軽いことにあやかって,妊娠5ヶ月目に入った最初の「戌の日」に腹帯を締めて母子の健康を祈願する。	12
298	糸島市	141	前原山笠(輪ごし・火伏地蔵祭)	前原中央	7月24,25日	期間中は,9つの町から山笠を出し勢い水を浴びながら「オイサ,オイサ」と元気な掛け声を掛け町内を駆け回る。24日には火伏地蔵,25日には老松神社へ奉納される。	2,29
299	糸島市	145	須賀神社祇園祭	志摩野北	7月13日	毎年7月13日の夜,御神幸行列と勇壮なお潮井取りを行っている。若者が赤獅子・青獅子を打ち振る中,締め込み姿の集団がオイサッ,オイサッの掛け声勇ましく,神社から海岸まで練り歩く。この祭りの起源は古く,神社創建の約400年前に遡ると伝えられ,五穀豊穣と家内安全,夏の健康を祈願する。この日の夕刻には,野北の小学生,中学生のお潮井取りも行われ,夜は神社境内に出店が立ち並び,沿道にはたくさんの見物客が訪れ,祭りの雰囲気を盛り上げている。	2,32
300	糸島市	141	ボンボリ祭(夏越祭)	産の宮神社	海の日の前日	暑い夏を健康に乗り切れるよう願う暑気払いのお祭り。この祭りでは子どもみこし・浦安の舞奉納・ボンボリ献燈が行われる。参道入口には茅の輪が設置され,境内に灯されたボンボリが参拝者をお迎えする。	4
301	糸島市	146	岩戸開き	志摩桜井	7月2日	7月2日のこの日だけ桜井神社の岩戸宮を開き,一般の方も岩戸宮内に入り参拝することができる。午前4時という早朝に行われる神事。	39
302	糸島市	152	深江の川祭り	二丈深江	7月第1土,日曜日	古くから二丈深江地区で続く伝統行事。子どもの水難よけや健やかな成長を願う安全祈願祭で,子ども達が自分たちで行うという特徴がある。子ども達は,前日から公民館に泊り(お籠もり),神事で使う大竹の切り出しや,短冊,お守り作りなどを行う。当日は夜明け前から海岸へ向かい,水神棚を作り,神事終了後,大竹は倒され海に流すと,遊泳が解禁される。	15,27
303	糸島市	141	池田盆綱引き	池田東	8月15日		19,30
304	糸島市	141	泊二区盆綱引き	泊	8月15日		19,30
305	糸島市	149	姫島のかずら引き	志摩姫島	8月16日		19,30
306	糸島市	151	大入かずらの盆綱引き	二丈大入	8月15日	二丈福井の大入行政区の白山神社に伝わる,仏が地獄に落ちた人びとを救い出すために垂らした綱を地獄の鬼たちと引き合う盆行事。氏子達が集めた「かずら」で大綱を作り,広場で二組に分かれ引き合う。綱引きが熱気を帯びる頃,綱は真ん中から断ち切られ,綱引きは終わり,その後,大入海岸に運んだ綱で土俵がつくられ,子ども相撲が行われる。	10,19,30
307	糸島市	149	大祖神社八朔祭(風止め相撲)	志摩芥屋	9月1日	毎年9月1日に八朔祭(陰暦8月1日の祭り)と併せ,台風の大風を防ぎ,五穀豊穣を祈願する神事として「風止め相撲」が行われる。この日は地元の小学生や大人がまわし姿で参加し,奉納相撲を行う。相撲の後はその年八朔を迎えた男児が,化粧回しに紅白の鉢巻を締め,青年力士に抱えられて土俵入りを行い,健やかな成長を祈願する。	10,16,20
308	糸島市	146	流鏑馬・稚児行列	志摩桜井	10月18日	櫻井神社の新嘗祭(秋祭)で行われる古式豊かな行事。およそ150mの参道に50cm四方ほどの的が置かれ,2人の武者が馬で駆け抜けながら白羽の矢で3か所の的を射る。この神事は農耕馬の無事を願って寛永12(1635)年から約370年もの間,毎年欠かさず奉納されてきた伝統行事で,以前は地域の人が農耕馬にまたがって矢を放ち,相撲も奉納されていた。現在は流鏑馬神事と稚児行列が執り行われている。	10,12
309	糸島市	152	深江神幸祭	二丈深江	10月17日に近い日曜日	五穀豊穣大漁祈願祭。深江神社より大名行列が繰り出し,お旅所に着くと,稚児の舞が披露される。海上では,大漁旗を掲げた漁船が海上を舞い,その後お払いを受ける。14時からお上り後,厄入りやお祝い事があった所やお店などに,行列が入って(ふりこむ)いく。	32

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
310	糸島市	151	福吉神幸祭	二丈福吉	体育の日前の日曜日	第4章,第3節,26「福吉神幸祭」参照。	9,32
311	糸島市	152	淀川神事	二丈淀川	10月10日		39
312	糸島市	152	ふいご大祭(女目かくし相撲)	二丈松末	12月8日に近い日曜	五穀豊穣祈願祭。終戦後から始まったといわれ,世渡りの難しさを目を隠し相撲をとる事に例えられている。女性の力士が,七福神の頭巾をすっぽりと頭から被り,正座をし手さぐりで相手を探し当て押し倒すという大変ユニークな行事。	10
313	糸島市	154	白糸の寒みそぎ	白糸	12月第3土曜日(深夜)～翌朝	第4章,第3節,39「白糸の寒みそぎ」参照。	11,38
314	糸島市	146	二見ヶ浦夫婦岩大注連縄掛祭	志摩桜井	4月下旬～5月上旬	桜井二見ヶ浦の夫婦岩に掛けられた長さ30m,重さ1tの大注連縄を,毎年4月下旬から5月上旬の大潮の日に,60余人の氏子達が掛け換え作業を行う。	39
315	糸島市	151 152 155 156	ウシサマ	多久,高祖,川原,二丈松末,二丈福吉	12月初丑(11月に行う家もある)	第4章,第3節,38「ウシサマ」参照。	35
316	古賀市	13	夏越祭り(輪ごし)	青柳	7月晦日	400年余続く伝統的な祭り。茅(ちがや)で作った大きな輪をくぐる「輪越し」が行われ,輪をくぐることで無病息災を祈る。	39
317	古賀市	11	盆綱	谷山	8月15日	盆綱引きは古くから伝わる伝統行事で,谷山の集落内の道路を舞台に,海側山側に分かれて大綱を引き合う。長さ50～60m,太さは10cm以上ある綱を使い,前後だけでなく道路際の壁ぎりぎりまで左右に揺さぶり合うめずらしい綱引き。海側は若手消防団員たち,山側は子ども会のちびっ子たちで,子ども達は綱を引くことで怪我なく無事に過ごせるとされている。	19,30
318	福津市	25	手光春祭	手光	4月11日	春秋二度の祭礼が続いている。	39
319	福津市	25	宮座	手光・冠	10月18日	明治20年代以降の記録では,4組交替で熊野神社の神事を担当し,直会はそれぞれの組で催された。宮座関係記録類も各組で個別に作成。	6
320	福津市	25	宮座	八並	10月11,12日	大正12（1923）年に従来の古座・新座を廃止して「惣宮座」とした。現在は各組廻番制で宮座を続けている。	6
321	福津市	26	宮座	本木	10月17日	旧9月2日に八幡宮の注連おろしがあり,同28日に神事が行われていた。大正期までは神楽も催されていたが今はない。複数の宮座グループがあったが,昭和7年にそれぞれの座が廃止され「村中宮座」となった。今は10月17日に区長・氏子総代・各組長参加による宮座が行われている。	6,15
322	福津市	26	拾月祭(行基祭)	舎利蔵	10月18日	拾月祭は,養老2年に行基が開基したと伝わる舎利山勝宝寺跡の観音堂で開かれる。区長の仕切り。当番が置かれ,堂内で拝んだ後,以前は堂内で直会があったが,現在は公民館で直会をする。各戸1名が出席。以前は町長も出席していた。	6
323	福津市	26	宮座(旧天降神社御祭)	舎利蔵	10月16日に近い日曜日	ほぼ全員参加による宮座。区長の仕切り。当番が置かれ,各戸1名が出席。宮司は来ない。鯛(オス・メス)・塩・いりこ・酒・こんぶをお供えする。祭礼が終わったらお供えをつまみにお神酒をいただく。祭礼後は公民館ですき焼きを食べる。	6
324	福津市	26	種蒔の祭(正月祭)	舎利蔵	1月3日	豊作祈願。呪文を唱え年穀を祈る。祥雲寺の住職が来て(10～11時)お経を上げる。代表者(区長)が座ったまま種もみを蒔く。種もみは掌に乗る程度で,1合くらい。	6
325	福津市	26	宮座(宮座祭)	内殿,古内殿	10月18日	10月18日に区長・区長代理・氏子総代(2名)のほか,1～13組の組長が拝殿に上がって神事を行い,同所で直会を行う。座元は組交替で務める。	6
326	福津市	26	宮座	上西郷	10月11日	明治20（1887）年に「御宮座改革」があり,祭日が10月11日に改められて今日も続く。また従来の株座を廃止し村の共同祭とし,村内組ごとに座元を回すことになった。	6
327	福津市	27	玉せり	福間	1月3日	毘沙門天のお祓いを受けた締め込み姿の男衆が,海で清めた直径31cm,重さ12kgの大玉を先頭に,威勢の良い掛け声を上げながら諏訪神社を参拝する。その後,男衆は海岸へと向かい砂浜や海の中で勇ましく玉を競い合う。	10,18,21
328	福津市	27	恵比須祭り	緑町,南町	1月10日	恵比須社で神事あり。1000円で1～4等の空くじなしのくじ引きがある。昔は漁方の祭り。今は商売人のお祭り。	17,23
329	福津市	27	諏訪神社秋季大祭	(旧福間町)諏訪神社	9月26,27日	自治会長,総代2名が参加。祝詞を上げて祭典があり,その後直会がある。以前は道に砂を撒きながらお下りもあった。	39
330	福津市	27	緑八幡宮秋季例大祭	緑町	10月第1日曜	祭神は応神天皇。神事の後,直会があり,子ども相撲(男女とも)が奉納される。	10
331	福津市	25～27	節句	福間	5月5日	ガメノハ饅頭やチマキなどを作って祝う。長男の初節句には鯉のぼりや吹き流しを庭先に立てて祝う。また午後は農作業は休み。	
332	福津市	28	玉替祭	宮司	1月10日	「金の玉・銀の玉」縁起物・豪華景品が当たるモマ玉を求め,この玉を多くの人と替えることで福徳が増すといわれている。	22
333	福津市	28	宮座祭(正月座)	宮司	1月11日	宮地嶽神社では1月11日と10月21日に宮座があるが,1月を「正月座」と呼び,氏子だけでなく,他村の福間・津屋崎・在自などからも多数の人が参列して営まれる。宮座は通夜堂で行われ,5時から一番座100名が参加して祭典・直会があり,二番座以下は50名ずつが直会に加わり,全部で500名ぐらいの参加者がある。	6
334	福津市	28	宮座祭(オクンチの宮座)	宮司	10月21日	宮地嶽神社では1月11日と10月21日に宮座があるが,10月を「オクンチの宮座」と呼び,トウバは小組合単位で引き受ける。神社における宮座はトウバの小組だけで行い,他は組ごとに座元を決めて,各家から料理を持ち寄って直会をする事になっている。	6
335	福津市	28	方除厄除大祈祷祭(厄除まつり？)	宮司	2月1日	厄年の「やく」とは,神祭りを行う神役の「役」のことであるともいわれる。その役を行うにあたって神様に失礼のないように,飲食や行為を慎み,心身を清浄にするために御祈祷を受けたのが始まりであると考えられている。また,節分といえば「豆まき」であるが,これは厄除けの神事そのもので,宮中神事の「鬼やらい」が民間に伝わったもの。「鬼」は「除(オン)」から,「豆(マメ)」は「魔滅(マメ)」(魔を滅する)から由来しており,「豆まき」は邪気を祓うための神事であると考えられている。「福豆まき神事」は室町時代の頃から行われており,現在も季節の行事として家庭の中に息づいている。宮地嶽神社でも「邪気を払う神事」として,2月2日,3日及び厄除まつり期間中の日曜日に,厄年の方や年男・年女が裃(かみしも)という装束を身に着け,「福はうち,鬼はそと」と福豆(福くじ入り)をまく。	38
336	福津市	28	稲荷初午祭(招福だんご祭)	宮司	2月初午	古来より,お祝いの日に供えられた粉食。あずきだんごは商売繁昌,きな粉だんごは家内安全,みたらしだんごは五穀豊穣,三つの福の三色だんごを5000食無料接待する。お稲荷様のご神徳に,感謝するお祭り。	17
337	福津市	28	不動神社春季大祭(ぜんざい祭)	宮司	2月28日	一心に願いを込めてお祈りすれば「善哉善哉」(ぜんざいぜんざいよきかなよきかな)といってお聞き届け下さる見代わり不動。このぜんざいを頂くと一年中無病息災は疑いなしと言われている。	39
338	福津市	28	宮地嶽神社春季大祭	宮司	4月4～6日	国家の隆昌・皇室の安泰を祈念するとともに,参詣者の健康と五穀豊穣を祈る大祭。衣冠を着装した神職と優美な装束をまとった巫女により厳粛な祭典が行われる。	39

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
339	福津市	28	宮地嶽神社秋季大祭	宮司	9月21～23日	別名「放生会」とも言われる宮地嶽神社最大の祭典。春の農作物の豊作(五穀豊穣)をお祈りするお祭りに対し,神様のお恵みを感謝(神恩感謝)申し上げる祭りで,約600年前より連綿と執り行なわれている。期間中,御神幸祭が行われ,毎年女性演歌歌手が十二単をまとった祭王となり,衣冠姿の神職を先頭に,荘厳な御神輿,毛槍行列,左右大臣など,王朝絵巻さながらの一大行列で,宮地浜から神社まで約2kmの参道を華やかに進んでいく。	32
340	福津市	28	金刀比羅神社御神幸行列	在自	9月9,10日	御神幸と獅子舞がある。神幸行事は,9日の早朝,神社総代・区三役・組長が集まって社頭でお神輿に御霊移し神事を行う。行列は,お手振り2名,太刀袋2名,大弓2名,毛槍4名,ハグマ6名,傘矛,台傘,挟箱2名,計20名。ハグマ見付槍と挟箱が掛け声をかける紋付着の世話人6名。9日に神社から津屋崎天神町のお旅所まで御下りがあり,17時着。昔は一泊していたが,今は20時ごろお上りがある。23時神社に着き,御霊を神輿から本殿に移す神事があり0時頃終了解散。	32,33
341	福津市	28	竈門神社詣り(代参講)	生家	4月14,15日	宝満山に2名詣り,竈門神社で作だめし,大麻を受ける。16日の晩にサカ迎えがある。	8
342	福津市	28	大黒様祭り,大黒様待ち	生家	甲子の日	甲子の日に行う。大黒様,恵比須様の人形が入った社,掛け軸を持って,当番の家で講を行う。	8
343	福津市	28	宮座祭	末広	1月19日 10月19日	波折宮祭り。1軒につき夫婦2名。津屋崎では,旧1月19日と旧9月19日の二回,それぞれの町内で波折神社に参詣した後,町ごとに座元を決め,床の間に波折宮の掛軸を掛け,神饌を供えて神迎えをし,神職に各町を廻って祝詞を上げてもらい,そのあとで直会とトウバ渡しをする。	6
344	福津市	28	祇園祭	末広	7月19日	祇園山笠。末広は岡流に参加。	2,29
345	福津市	28	風止め祈願(風止め籠り)	末広	9月第1日曜日	秋籠り。塩竈神社で210日の風の災害がないように祈願した。各戸弁当持参で皆で食べる。	16
346	福津市	28	オクンチ	末広	10月9日	氏子。波折宮の祭り。10月9日,御神輿が出て御神幸があった。甘酒,栗御飯,ドジョウ汁などを作り親戚などを呼んだ。夜は宮相撲があった。子ども相撲奉納。	10,32
347	福津市	28	津屋崎祇園山笠	岡のニ,岡の三	7月19日に近い日曜日	前後に6本ずつの担ぎ棒を持つ舁き山笠で,水法被に締め込みを締めた参加者により担ぎ上げられ走って運行されるなど,運行形態は博多祇園山笠に近い。ただし山笠の飾りは博多の舁き山笠とは異なり,複数の人形を飾り,屋形や岩,波といった部品で風景を作り,場面を表現するという様式を残したものが運行されている。博多の飾り山笠を縦に縮めたような山笠だが,飾られる人形は当地で作られる津屋崎人形である。	2,29
348	福津市	28	祇園祭(祇園山笠)	北の一	7月18,19日	岡,北,新町。18,19日に行っていたが,現在は日曜日に変わった。1日に山笠の棒を洗い清める。18日は山を飾り,裸参りもある。19日は追い山。	2,29
349	福津市	28	秋季大祭(オクンチ)	北の一	10月9日	波折神社御神幸祭。奉納相撲を行っていた。玄海町,宗像方面からも相撲に来た。各家で作った甘酒を瓶に入れて持って行った。	10,32
350	福津市	28	祇園祭(祇園山笠)	北の二	7月19日	岡,北,新町。山笠がある。漁は休みでみんな参加する。	2,29
351	福津市	28	秋季大祭(オクンチ,秋祭り),波折神社御神幸祭	北の二	10月9,10日	岡,北,新町,天神町。甘酒,栗御飯,寿司などを作る。当番制で津屋崎の町中をお下りの行列があった。お下りの主役は古小路の人達。9日の夜は宮相撲があった。	10,32
352	福津市	28	金刀比羅様のお膳座り	北のニ	10月10日	金刀比羅神社のお膳座りがある。料理は小豆御飯,吸物,ナマスなど。漁業の家はみんなお参りする。クジがあり,掛軸が当たった人は縁起が良いといわれた。	39
353	福津市	28	祇園山笠	新町	7月1～19日	祇園祭。7月19日は追い山。戦後に1か月遅れの7月になった。現在は7月19日に近い日曜日に追い山を行う。	2,29
354	福津市	28	風止め祈願	新町	9月9日	波折宮に農家の人が集まり,神職が太鼓を叩いて祈願する。	16
355	福津市	28	祇園山笠	天神町	7月19日	社頭にて行う。天神町は岡流れ。裸祭,追山笠がある。追山笠は7月19日。	2,29
356	福津市	28	祇園祭(山笠)	東町	7月19日	19日は津屋崎の山笠を波折宮に見に行った。追い山の風に当たると夏病にならないという。山の回った後の飾りをもらって来て,門口にさして魔除けにした。	2,29
357	福津市	28	輪越し祭(夏越し祭)	新町,北の一,岡のニ,岡の三,天神が手回り当番	7月29日	波折神社の夏越祭はワゴシと呼ばれている。参詣者は神社で御祓いを受け,帰りに茅の輪の茅を2,3本抜き取り,小さな輪にして家の神棚に置く。	39
358	福津市	29	千灯明	勝浦浜	8月10,23,4日	男子は10日に観音堂で実施。女子は23日にお地蔵様で実施し1泊する。観音堂に子ども達が御神灯をあげ,お堂の板壁の桟に約20cm間隔で蝋燭を立てて火を灯す。	37
359	福津市	29	豊山神社大祭	勝浦(西東)	9月15日	勝浦放生会。神輿を担当する。豊山神社から御神輿が出発,年毛神社が御旅所となる。年毛神社で直会がある。舞台で氏子達の奉納舞踏などがある。	32
360	那珂川市	117 119 120	ほんげんぎょう	市ノ瀬区中日吉・中組 山田区,中原区,安徳区,別所区,西畑区	1月各地区によって異なる	正月行事の一つで,那珂川市内では市ノ瀬区中日吉・中組(6世帯),山田区,中原区,那珂川市保育所連盟,安徳・別所・西畑区で行われており,市ノ瀬区中日吉・中組は孟宗竹でやぐらを作る。早朝に日吉神社に参拝し,それぞれ家庭から持ち寄ったかど松や注連縄などを納める。那珂川市保育所連盟は五郎丸区の田んぼで「どんどやき」と「もぐら打ち」を行う。この「ほんげんぎょう」が「どんどやき」と呼ばれている。【地区毎の開催日】市ノ瀬中日吉・中組(地区内6世帯):小正月前の土曜もしくは日曜日,山田区:小正月入りの7日前後の日曜日,中原区:正月第2日曜日那珂川市保育所連盟:1月上旬土曜	1,18
361	那珂川市	120	観音山節分護摩たき祭		2月3日		39
362	那珂川市	119	大山祇神社の火たきごもり	西畑	11月第4土曜日	豊穣祈願の祭り。女性の大厄を意味する「33膳の釜飯と黒豆」の料理が用意される。頭屋番は,数日前から椎の木の丸太から「しゃもじ」「木箸」そして新藁を編んで「鍋蓋」を作る。当日は焚き木を束ねて「やぐら」を作り火焚きこもりのかがり火に無病息災を願う。「33膳の釜飯と黒豆」は安産に御利益がると言われ,最近では安産祈願を願う人たちも多く参列する。	1,5
363	那珂川市	120	天皇さまごもり	安徳	4月24日前の日曜日	安徳天皇の御霊を供養することを目的に安徳地区の人びと安徳天皇の命日に集まり,天皇の御霊にお参りし厄除けの儀礼を行うなどして,手弁当での食事会が催される。	39
364	那珂川市	119	伏見神社の祇園祭	山田	7月14日	毎年7月14日に伏見神社で祇園祭が開かれ,岩戸神楽が奉納される。もとは田植えが終わった農家の人達が集まって,一か月ほど練習し奉納していた。現在は農家が減ったので,保存会が行っている。神楽の舞は18番あり,清祓,神話,降神の神楽などに大別され,なかでも「荒神」「問答」は,鬼が境内を勇壮に駆け回り,鬼に抱かれた赤ちゃんは元気に育つと言い伝えがあるため,小さな子どもを連れた家族連れが多く訪れる。	12
365	那珂川市	117	千灯明	不入道	7月17日	不入道の滝一帯に多くの灯明が飾られる。ほら貝の音で山々のよどみを清め,参道には南畑小学校の子ども達と地元の団体「やまもも」の方々の描いた絵画や習字の灯籠が並ぶ。	37
366	那珂川市	120	地禄天神社の宮座	中原	11月25日	お宮のしめ縄を全て新しくする。	6

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
367	那珂川市	119	伏見神社の火たきこもり	山田	11月15日	今年成人を迎えた男子が,那珂川の渕で禊を行い,境内に高く積まれた薪に御神火で火をつける神事。各所で火たきごもりは行われているが,禊の神事としての火たきごもりは伏見神社だけで伝承されている。	38
368	那珂川市	119	高津神社の初午	山田	2月初午	2月最初の午の日に行われる祭礼のこと。「倉稲魂命」を祀り,商家では商売繁盛,農家では五穀豊穣を祈る。神殿には,酒,鯛,米,塩,いりこ,果物,野菜などが供えられる。参拝者は境内の焚火で暖をとり,「かしわご飯」「つみれ汁」「かっぽ酒」などを楽しむ。	5
369	那珂川市	120	地禄天神社火たきこもり	中原	12月第1土曜日	豆入りごはん,大根のおぬたえ,おからを炒めていりこを混ぜた食べ物を氏子さんに振る舞う。	39
370	那珂川市	120	秋季大祭(おくんち)	仲	10月第3日曜日	秋の収穫を祝い神様に感謝し,伝統ある「相撲」や「流鏑馬」を奉納する祭り。秋祭りの総称で「おくんち」とも呼ばれる	10
371	那珂川市	120	八龍神社の盆綱引き	上梶原	盆に近い土曜日	拝殿前で男女に分かれて公民館長の音頭で参拝し,お神酒を大綱にかけて奉納する。長老達の「盆綱引唄」で始まり,唄い終わると「ワッショイ,ワッショイ」と大綱を引き合う。唄う,引き合うを3回繰り返した後,大綱の中央を鉈で叩き切る。大綱が切れたところで「祝いめでた」が唄われ終了する。大綱を切るという行為は,先祖の霊が苦しみの世界に戻らないためという願いが込められている。	10,30
372	那珂川市	117	日吉神社の輪越し	市ノ瀬	7月31日	竹とねこやなぎの枝と茅で輪をつくり,お宮の鳥居の両方の柱に胴を地面に着けて,くくりつけてトンネルを逆さにしたようにする。輪には御幣を割竹に挟んで数十本突き刺す。人びとはこの輪の胴をまたぎ,輪をくぐり,御幣の割竹をとって神前にぬかづく。疫病が除かれ,その夏は息災で過ごすことができるといわれている。	39
373	那珂川市	119	天神社の火たきこもり	後野	11月28日		
374	那珂川市	120	現人神社の輪越し	仲	7月31日	現人神社では参詣人が輪にさしてある茅を抜きとって持ち帰り,家の戸口にかかげると病魔祓いになるという。	3
375	那珂川市	120	裂田神社の火たきこもり	安徳	11月28日		
376	那珂川市	119	伏見神社の輪ごし	山田	7月31日	早朝から刈り集められた長いカヤを束ねて一本の大きな棒にこしらえる。それを鳥居の内側に沿って這わせ,茅の輪として整える。茅の輪の両はしと足元には,伏見神社ならではの装飾が施される。	3
377	那珂川市	119	毘沙門天大祭	別所	冬至	来る年の開運(商売繁盛,家内安全,縁結びなど)を祈り,毘沙門天から「福銭」を借り,借りた人は翌年に倍返しする。福銭は財布に入れておくと一年間お金に困らない言われている。この日だけ参拝者に毘沙門天像が公開される。	5
378	宇美町	17	四王寺毘沙門詣り	四王寺	1月3日	参拝者は,お堂の前に置かれたお盆からお賽銭を借りて帰り,翌年の参拝のときに,借りたお賽銭の倍の額を返し,また新たにお賽銭を借りて帰る。このお詣りをすることで,1年間お金に不自由しないと伝えられている。	18
379	宇美町	17	ホウゲンギョウ	町内各地域	1月7日か7日に近い日曜日	第4章,第3節,2「ホンゲンギョウ」参照。	1
380	宇美町	17	宇美八幡宮御誕生祭	宇美	1月5日	応神天皇は仲哀天皇9（200）年の12月14日に宇美の地でお生まれになったと伝えられており,明治以前はすべて旧暦で12月14日祭神應神天皇御降誕の日で年一度の大祭が行われていた。明治6（1873）年の太陽暦採用以降は,毎年1月5日に行われている。	39
381	宇美町	17	宇美八幡宮三日恵比須祭	宇美	1月3日	境内末社「恵比須社」にて今年一年の商売繁盛をお祈する。	23
382	宇美町	17	春のおこもり	町内各地域	4月	四王寺毘沙門堂,井野本村薬師堂,障子岳本村大山祇神社,障子岳今屋敷須佐神社,障子岳極楽寺,炭焼貴船神社,内野谷大山祇神社,早見疫神社,原田上の五穀神,井野の五穀神で行われる。	8
383	宇美町	17	宇美八幡宮子安祭	宇美	4月中旬	子どもの健やかな成長を祈る祭りとして執り行われ,隔年で井野の頓宮を御旅所として,御神幸が行われる。3基の神輿が約1時間半かけて井野頓宮まで神幸し,神輿舁きや供奉には,宇美八幡宮の氏子があたる。神幸の儀は井野頓宮へ向かう途中御休みの場として浮殿跡がある。	32
384	宇美町	17	オヨド	町内各地域	7月8～18	早見一畑薬師,早見今長谷観音堂,障子岳今屋敷須佐神社,障子岳極楽寺,障子岳本村大山祇神社,原田上貴船神社,神武原大山祇神社で行われる。	36
385	宇美町	17	旭地蔵尊夏祭り	宇美上宇美	7月17日に近い土曜日	子ども神輿が旭地蔵堂を出発し,宇美八幡宮を経由し,地域を練り歩く。	19
386	宇美町	17	宇美八幡宮夏越祭(夏越大祓式)	宇美	7月31日	茅の輪くぐり神事が行われる。	38
387	宇美町	17	盆綱	原田上	8月		19,30
388	宇美町	17	盆綱	障子岳	8月		19,30
389	宇美町	17	盆綱	早見	8月		19,30
390	宇美町	17	宇美八幡宮放生会	宇美	10月15,16日	古くは旧暦8月15日に行われていた秋の大祭で,明治になり新暦により10月15,16日の両日にわたり執行されるようになった。午前中に神事が執り行われ,2日間にわたり各種露店が参道に立ち並ぶ。15日は,夕刻から県指定宇美神楽が神楽殿において奉納される。昭和30年代後半頃まで,参道で流鏑馬が行われていた。	39
391	宇美町	17	丑座	障子岳	12月	障子岳本村大山祇神社	19
392	宇美町	17	庚申講	町内各地域		障子岳・上河原・神武原で行われている。初庚申のみ藤崎や唐津の庚申様に御札を取りに行く地域もある。	8
393	篠栗町	8	篠栗祇園祭	上町	7月第2土曜日	上町地区にある須賀神社の周辺を舞台に毎年7月の第2土曜日に実施されている。同日開催の「篠栗祇園祭り」の中心的な催しで,篠栗流れと呼ばれる地区代表の山を地域の男衆が担ぎ上げ,オイサッオイサッと威勢の良い掛け声とともに,地元の氏神様をお祀りする須賀神社と篠栗駅とを往復しながら奉納する神事。博多祇園山笠と同じく勇壮な舁き山笠であり,また,最後には観衆も一緒になって祝いめでたを歌う。	2,29
394	篠栗町	4	和田八幡宮盆綱引	和田	8月13～15日		19,30
395	志免町	5	石投げ相撲	志免	9月第1日曜日	江戸時代末頃,志免村に牛馬の悪疾が流行し,悪疫退散のために万年願をかけてお祈りをした。悪疫も治まり,その感謝の念を込めて,相撲三十三番を奉納することになったのがきっかけである。戦時下では,体育奨励の意味もあって,子ども相撲・赤ちゃん土俵入りなど初秋の1日を楽しむ行事として定着してきた。	10
396	須恵町	10	ほっけんぎょう	佐谷(上の原,観音谷)	1月7日に近い日曜日	上の原,観音谷は存続。古の添,一の瀬(平成30（2018）年まで存続),立花寺,仲島,永原は廃絶。	1,18
397	須恵町	10	左谷山建正寺十一面観音御開扉	佐谷	4月第1日曜日	この日にだけ,最澄作と伝えられる秘仏・十一面観音立像が拝観できる。御開扉は1年に1度のみで,毎年4月の第1日曜に行われる。当日は地元の人達によるお接待や,子ども達の奉納相撲,花祭りも行われる。	37
398	須恵町	10	地蔵祭り	佐谷	7月		19
399	須恵町	10	お十七夜	佐谷	毎月17日	数珠繰り	8

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
400	須恵町	10	上須恵須賀神社祇園山笠	上須恵	7月24日に近い日曜日	須賀神社を出発し，上須恵地域のほぼ全域をかき山し，須賀神社に戻ってくる。子ども用の山笠もあり，かき山が通る沿道には多数の住民が控え，力水で応援するなどして盛り上がる上須恵地区の代表的な祭りである。保存会は昭和51（1976）年に発足し，以来，当番組と保存会が強力し合い祇園祭を開催している。昭和40年代後半頃に3年間だけ子ども山を巡行させたこともあったが，大人の山笠も復活し，現在に至る。	29
401	須恵町	10	夏越祭	上須恵	7月31日	須賀神社境内に地の輪を設置し，潜ることによって無病息災を願う。境内で子ども達が相撲をとる。	4, 7
402	須恵町	10	いぼの神様・山の神	上須恵（皿山）	7月13, 14, 16日		8
403	須恵町	10	ほっけんぎょう	上須恵（皿山）	1月7日に近い日曜日	皿山は存続。向・高宮，東干田は廃絶。	1, 18
404	須恵町	10	田の神様	上須恵	12月		17
405	須恵町	10	宝満宮奉納相撲・宮座	須恵	5月5日	奉納相撲は，毎年5月5日に宝満宮境内で行われる。宝満宮の春の大祭の後，地元須恵区子ども会育成会が実施し，個人戦・団体戦が行われている。	6, 12
406	須恵町	10	盆綱	須恵	8月15日	宝満宮境内で作られた綱は，集落を清め，先祖の霊が西方浄土に帰る際の乗り物といわれている。集落内を廻り終えると綱を引く。	10, 19, 30
407	須恵町	10	平原毘沙門天祭	甲植木（平原地区）	1月3日	毎年，正月3日の朝7時から夕方頃までお祭りが行われており，伊勢神宮から頂いてきた御札が販売される。その際100円を奉納し，代わりにいただいた50円玉を財布に入れておくと，その年はお金に不自由しないと伝えられている。翌年には古い御札と50円玉を返納し，供養してもらい，新しい御札を頂く。	18
408	須恵町	10	守母神社大祭	甲植木	4月23, 24日	毎年4月23日，24日の両日に祭礼が行われる。この祭礼時に子どもを連れてお参りし，御札をもらって，人形を借り，一年たってこの時に借りた人形と新たに買った人形を奉納して子どものすこやかな育成を祈願する。	12
409	須恵町	10	地蔵まつり（男地蔵・女地蔵）	甲植木	7月23日	宝珠と錫杖を持った男地蔵と甲植木公民館前の小さなお堂に祀られている女地蔵を子ども達が綺麗に磨いて香・花・菓子・果物を供えて祀る。	19
410	須恵町	10	ほっけんぎょう	乙植木	1月7日に近い月曜日	最後に菰を巻き付ける制作方法は，町内の他地区のほっけんぎょうと形態が異なる。	1, 18
411	須恵町	10	獅子舞	乙植木	7月第4日曜日	「四と四の十六文で祝うた～」と歌いながら家々を廻り，人びとの無病息災を祈って，住民の頭に獅子をおしつける。	26
412	須恵町	10	旅石八幡宮奉納祇園相撲	旅石	7月第4日曜日	八幡宮の夏の行事。子どもたちが無病息災を祈願し，境内の土俵で相撲を取る。消防団員による赤ちゃんの土俵入りも行われ，地域へのお披露目が行われる。	12
413	須恵町	10	数珠繰り	旅石	毎月15日		8
414	須恵町	10	十五夜待	旅石	1, 5, 9月15日		8
415	須恵町	10	二十三夜祭	新原	7月23日に近い日曜日	新原地蔵堂の地蔵盆。地蔵堂の仏像は，明治初期の廃仏毀釈の際，宇美八幡宮から難を逃れてやってきた。	19
416	須恵町	10	盆綱	新原	8月15日頃	新原区青年部を中心に早朝から新原地蔵堂の拝殿で綱を作る。夕方に綱を引き，切れ目から御先祖の霊が西方浄土に帰っていくと伝えられている。	10, 19, 30
417	須恵町	10	お庚申様	町内			8
418	須恵町	10	お観音様	町内			8
419	新宮町	7	子ども獅子廻り	原上	1月1日	獅子廻し。	26
420	新宮町	14	磯崎神社玉せり	新宮	1月2日	海から潮井を取って境内にある恵比寿堂に入り，その潮井を互いに掛け合った後，合図とともに参道に盛られた砂の中から石の玉を取り出し競り合う。	18, 21
421	新宮町	14	恵比須祭	湊	1月10日	2つの恵比須座の懇親，神社詣で。	8, 23
422	新宮町	7	恵比須様	三代	1月10日	神社参拝，直会。	8, 17, 23
423	新宮町	14	恵比須祭	相島	1月10日	第4章，第3節，7「七福神祭」参照。	8, 23
424	新宮町	7	節分護摩供法会	立花口	2月3日	厄祓いの護摩供法会。厄年のため厄落としに来る信者は，2月3日の節分に独鈷寺にお参りし，添え護摩木に願い事と，氏名・生年月日を書いて差し出す。住職はそれを護摩壇で真言を唱えながら焼き，悪魔を焼き尽くし幸せを呼ぶように祈る。その後法話をして午前中で祈祷が終わる。	37
425	新宮町	7	祈念祭	原上，三代	2月下旬	豊作祈願。	17
426	新宮町	7	玉島様	三代	3月	神事，直会を行う。	16
427	新宮町	14	人丸神社祭典	下府	4月1，2日	子預け，成長祈願。	12
428	新宮町	14	日籠り	上府	4月第2日曜日	日籠り（近所の親睦）。	8
429	新宮町	14	口開き観音供養祭	上府	4月第1日曜日	伝教大師が帰朝後，横大路家の始祖源四郎と出会い初めて口を開いたとされる場所。歯痛の時に爪楊枝を年の数だけ作って供え祈願することから楊枝観音ともいわれる。以前は日籠りを行っていたが現在は簡素になっている。	8
430	新宮町	14	地神様	夜臼	4月17日	祈祷，直会。	15
431	新宮町	7	報賽祭	原上，三代	4月第2日曜日	神事。	6
432	新宮町	7	大祓祭	原上	6月下旬		15
433	新宮町	14	注連おろし	新宮	7月1日	新宮区内の辻（鬼門）19か所に，注連縄を付けた笹竹を建てる。	15
434	新宮町	7	祇園祭（七夕祭）	立花口	7月上旬	七夕。	15
435	新宮町	14	祇園祭	新宮	7月初旬（田植後）	子ども神輿，獅子廻し，厄払い（満41歳，還暦の人），直会。	15, 26
436	新宮町	14	祇園祭　祈願祭	相島	7月15日	祇園祭（神事），祈願祭（厄払い，日籠り）。	15
437	新宮町	7	瓜封じ	立花口	7月21日	厄除け祈願。	15, 37
438	新宮町	14	夏越祭	新宮	7月下旬	神事，茅の輪くぐり。	10, 15
439	新宮町	7	祇園祭	的野	7月23日	無病息災祈願，獅子廻し，お潮井配り。	26
440	新宮町	14	奉納相撲	新宮	7月20日	子ども奉納相撲。	10
441	新宮町	14	子ども相撲（奉納相撲）	新宮	7月23日	子ども相撲。	10
442	新宮町	14	北向きお地蔵様祭	湊	7月23日	子ども相撲。	10
443	新宮町	14	夏越祭	湊	7月下旬	神事，直会，茅の輪くぐり。	15
444	新宮町	14	祇園祭・輪越祭	下府	7月25日	子ども神輿，奉納相撲，茅の輪くぐり。	10, 15
445	新宮町	7	祇園祭	三代	7月23に近い日曜日	子ども相撲。	10, 12
446	新宮町	14	辻祈祷	新宮	7月15前後の日曜	神事。	2, 15
447	新宮町	7, 14	精霊迎え	町内全域	8月13日	先祖の霊をお墓から家に迎え入れる。	19

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
448	新宮町	7,14	精霊送り	町内全域	8月15日頃	迎えた先祖の霊をお墓に送る。	19
449	新宮町	14	流れ灌頂	新宮	8月16日	精霊流し(初盆)。	19,37
450	新宮町	14	流れ灌頂	相島	8月16日	精霊流し(初盆)。	19,37
451	新宮町	14	観音遷座祭(ドンドンカン)	相島	8月17日	観音様の遷座,海上巡幸。	19,32
452	新宮町	14	八朔祭	新宮	9月1日	祭典。	12
453	新宮町	7	秋の大祭	的野	9月第1日曜日	神事,直会(日籠り)。	6
454	新宮町	7	放生会	原上,三代	9月10日	神事,直会。	39
455	新宮町	7	秋祭(五穀神祭)	立花口	9月上旬	神事,直会,奉納相撲(子ども),日籠り。	10,12
456	新宮町	7	天神社の日籠り	的野	9月25日	日籠り。	6
457	新宮町	14	宮座	上府	10月1日	神社詣で。	6
458	新宮町	7	注連おろし	立花口	10月1日	宮座の行事。	6,17
459	新宮町	7	宮座	三代	10月上旬	お潮井取り,神事,直会。	6
460	新宮町	14	宮座	下府	10月13日	神事,直会。	6
461	新宮町	7	おくんち	原上	10月17日	神事,直会。	17
462	新宮町	14	おくんち	湊	10月下旬	祭典,直会,獅子廻し。	17,26
463	新宮町	14	おくんち	上府	10月17日	神事,直会。	17
464	新宮町	7	おくんち・当座渡し	的野	10月17日	神事,直会,宮当番引継ぎ(当座渡し),お潮井配り,獅子廻し。	17
465	新宮町	14	おくんち(新嘗祭)	相島	10月19日	神事。	17
466	新宮町	7	宮座(新嘗祭)	立花口	10月17日	神事,日籠り。	6,17
467	新宮町	14	神送り	相島	10月27日	お籠り。	6
468	新宮町	7	宮座	的野	10月上旬	神事,直会。	6
469	新宮町	14	御遷宮祭(遷座祭)	上府,下府,湊	10月	18年または20年毎に社殿を建て替え,御神体を古い社殿から新しい社殿に移す。	32
470	新宮町	14	八大龍王祭	相島	11月15日	島の集落は北・中・南の3組に分かれており,その中の1組が当番となり,他の2組はお客となる。準備は約2か月前の魚作りから始まる。鯛や鰯,マビキを塩の中に漬け,焼き魚・巻き魚・酢びたしを作る下準備をする。また時化で出漁出来ない日には山の松の木を切って煮炊き用の薪を作る。ゴクウヤでは,龍王様・氏神様の注連縄,龍王様に立てる松の木2本,お白餅・甘酒・御供米・掛け魚を6掛け,お白餅・オゴクを入れる藁編みの器を8個準備する。祭りの2日前には,豆腐・蒲鉾・野菜の準備をする。	5,17
471	新宮町	7	新嘗祭	原上,三代	11月23日	神事,直会。	17
472	新宮町	14	神迎え	相島	11月27日	お籠り。	6
473	新宮町	7	お通夜	的野	11月30日	神事,迎え火,奉納相撲,参拝者の接待。	1,10
474	新宮町	14	宮座	湊	12月第2日曜日	祭典,直会。	6
475	新宮町	14	森神社祭	上府	12月15日	祭典,森先祖祭り。	39
476	新宮町	14	大日様	上府	4月初旬	森家先祖祭。	39
477	新宮町	7	山の神	的野	12月24日		17
478	新宮町	7,14	年越し祭	町内(相島を除く)	12月31日	神事,除夜の鐘つき,参拝者の接待。	18
479	新宮町	7,14	元旦祭	町内(相島,新宮を除く)	1月1日	神事,参拝者の接待等。	18
480	新宮町	7	大祓祭	原上,三代	12月22日	神事,厄災祓い。	15
481	久山町	19	上山田盆綱引き	上山田	8月15日頃	江戸時代から受け継がれてきたという上山田地区の伝統行事で,かずらで編んだ直径15㎝長さ35mの大綱を切れるまで引っ張り合い,お盆に迎えた先祖の霊を送り出す。山でかずらを集めるところから始まって,毎年100人以上が参加する一大行事である。	10,30
482	久山町	18	中久原祇園祭	中久原	7月8,9に近い土,日曜日	須賀神社において,暑い夏を乗り切り無病息災,安全を祈願して開催される伝統行事で,毎年7月8,9日頃に行われていたが,近年はこれに近い土,日曜日に行われている。土曜日は露店が出店,子どもによる奉納相撲や花火が行われ,町内各地区はもとより町外からも観客が訪れる。日曜日早朝に行われるのが『万度参り』。各人が柿の葉を1枚ずつ神前に供え,10000枚になるまでお参りをする。次に行われるのは『清道廻り(せいどうまわり)』といい,赤褌法被姿の男たちが清道のぼりをもって家々を祓い清めてまわり,須賀神社の境内でお籠りを行う。いずれもこの地区では珍しい行事で,初夏の久山町を彩る風物詩となっている。	8
483	久山町	18	白山宮獅子舞	上久原	1月1日	上久原地区の白山神社において,毎年年越しに合わせて舞われる獅子舞で,昭和57（1982）年から続いている。もともとは昭和2（1927）年に作られた獅子頭に由来しているといわれている。地元有志で組織する保存会により,家内安全と厄払いを願っている。	26
484	久山町	19	若宮八幡宮奉納相撲大会	下山田	敬老の日頃	若宮八幡宮の五穀伸への奉納として明治中期から始まり,毎年敬老の日頃に行われている。相撲大会の後青少年たちが相撲甚句をうたいながら1歳未満の男の子を抱いて土俵入りをして,子どもの健全な成長を祈願している。	10
485	久山町	18	伊野天照皇大神宮春季大会	猪野区	4月20日に近い土,日,月曜日	伊野天照皇大神宮周辺において,毎年4月20日に近い土曜・日曜・月曜日に,五穀豊穣を願って開催されるお祭りである。1日目は祭典とお日籠り,2日目は奉納武道大会,3日目は日籠りが行われる。2日目の武術大会では柔道・剣道の試合が行われ,糟屋地区や福岡市から小中学生が参加する大規模な大会となる。	10
486	直方市	48	春季大祭(擲桃祭)	直方	4月13～15	伊邪那岐尊と伊邪那美尊を祀る神社で,長寿や厄除け,縁結びや家内安全の神さまとして信仰されてる。毎年4月中旬に開催されている春季大祭は「擲桃祭」と呼ばれている。伊邪那岐尊が黄泉の世界から逃れる際に,桃を投げて追手から逃れたことに由来している。災難厄除け,開運を祈願する行事で,厄除の桃菓子と餅まきが行われ,奉納演芸大会なども行われる。	39
487	直方市	48	夏越祭	直方	7月下旬		39
488	直方市	48	直方山笠	直方	7月下旬	供日(くんち,農村で行われる収穫を祝う祭り)として秋に行われる御神幸だが,近年は無病息災を祈る多賀神社の「夏越祭」と須賀神社の「祇園祭」に合わせ山笠を奉納するようになった。明治時代,炭鉱の集積地として栄えた当時,高さ17mを超える巨大で絢爛豪華な山笠をゆっくりと曳き,きらびやかさを誇っていた。その後電線の敷設に合わせ高さを4mとしたことから,絢爛さを出す工夫として観音開きが採用され,曳き山として勇壮さを競い合うようになり,現代の姿へと変化したと考えられている。	29
489	直方市	52	すがら	永満寺	7月中旬	すがらとは虫害追放の行事である実盛送りの別称である。斎藤別当実盛が稲の切株につまずいて倒れ,首を打たれて死んだ恨みでサの虫となり稲に害を加えるという伝説による行事とされている。8月3日の夜,藁で作った実盛人形に紙の鎧を着せ,馬に鞍代わりの藁たばに竹木で刺し立て松明で照らし笛太鼓ではやし「しいらく山から一本足一つ目,しいは川に流せ,虫は山に追え」と送り言葉を喚きながら村内の田んぼの道を練り回り,福地川の川原で害虫の主人公である人形を焼いて害虫を次の村に送り出す。虫害から免れるようになってからも,祖先の労苦を偲び,その霊を慰める年中行事として続いている。	16

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
490	直方市	52	上境の柱松	上境	8月第1日曜日	燕の巣または鳶と呼ばれる竹カゴが先端についた高さ約10m程の棒を立て，松明を投げ入れて，カゴを炎上させる火祭り。行事が終わるまで小太鼓が勇壮に鳴り響く。豊作・無病息災を祈願する行事で，以前は各地で行われていた。	1
491	直方市	52	畑の柱松	畑	8月15日頃	目的も行事の形も上境の柱松とほとんど同じの行事。	1
492	直方市	52	丑相撲	上境	9月1日	牛馬の疫病払いを上境の福地神社に祈願する祭りに奉納する相撲大会で歓進元は同社の氏子中。現在は子ども相撲だけ。優勝には柱松の巣で作った弓と矢を送るのが習わしである。	10
493	直方市	56	筑前植木岡分流大名行列	植木	9月お彼岸の頃	大名行列は，奴姿の参加者が，足軽頭に扮した人物の合図で，左右斜め前に大きく足を踏み出しながら毛槍を振る所作で植木の町中を練り歩く。また，遠賀川でお汐井取りを行う。4年に1回，9月に開催する。	39
494	直方市	53	須賀神社神幸行事	下境	10月下旬	須賀神社で5年に一度の御神幸大祭が行われる。祭りは2日に渡って催され，1日目が「お下り」で2日目は「お上り」となる。この大祭の日に，落下目撃記録のある隕石として世界最古の隕石が一般公開される。この隕石は貞観3年4月7日（ユリウス暦861年5月19日）の夜，武徳神社（現須賀神社）の境内に落下。翌日に深くえぐられた穴の底から黒く焦げた石を掘り出して桐箱に納めて保存したと言う地元の伝承がある。今も天から飛来した石として，丁寧に桐箱に納めて保管されており，桐箱の蓋の裏には「貞観三年四月七日ニ納ム」という墨書がある。また異説として，「下境村祇園社ノ飛石伝記」には，大きな音とともに飛来する物体が目撃され，祇園社の境内にある木にあたって隣家に落ちたため，土の中を掘ると立烏帽子のような形をした黒い石が現れ，珍重なものであるとされて神前に奉納されたとある。この「飛石伝記」に記録された石の形状が直方隕石と酷似しており，同じ神社に２度も隕石が落下したとは考え難いこと，また国外において最古の記録とされるエンシスハイム隕石（1492年）と比べても861年という年代はあまりにも古すぎること，そして桐箱の蓋に見られる墨書の書体や文体は幕末以降のものであることから，江戸時代に落下したものであるという説もある。	32
495	直方市	56	植木天満宮放生会	植木	9月下旬	植木地区は，木屋瀬から分岐する赤間街道の宿場町で，福岡藩や唐津藩の大名行列が参勤交代の際に通っていた。明治になって，大名行列がなくなったため，明治2（1869）年に植木の岡分地区の人達が，御神幸の際に大名行列を再現したのが始まり。奴姿の子ども48名と大人18名が，足軽頭の「ああ，ああ」という合図で，左右足高に踏み出しながら毛槍を振る，領主供奉である古式神幸の姿を残している。祭りは原則4年ごとに行われることになっている。	32
496	直方市	49	剣神社神幸行事	下新入	10月17～19日	5年に一度開催。初日にお下り，翌日にお上りが行われ，剣神社に帰還後，例大祭の式典が行われる。神幸行列に供奉する山笠は，氏子の範囲が広いため10本が立つ。元山（下新入川西）を先頭に各地区から奉納され，これに子ども山笠や稚児行列も加わる。	2, 29, 32
497	直方市	48	多賀神社神幸行事	直方	10月第3土曜日	依代は神馬に乗り錦蓋で覆う。宮司が輿に乗るのも他の神幸と異なる。平安時代風の衣装をまとった優雅な行列風流である。かつては夜間に行われていたが，近年は午後を中心に行われる。旧城下町の周囲を囲むようなルートで町中を巡回し，遠賀川でお汐井取りを行う。4年に1回，10月に開催する。	32
498	直方市	48	直方えびす	直方	12月3日		23
499	中間市	40	川祭（灯籠流し）		8月15日頃	持ち寄られた西方丸を船に乗せ，市役所前の遠賀川河川敷から対岸までお運びする。先祖の霊をなぐさめ，母なる川・遠賀川に感謝の祈りを捧げて，川をきれいにする中間市の伝統行事。	27
500	宮若市	51	とうげ	龍徳	1月13日		18
501	宮若市	51	堂寄祭り	磯光	1月13日		18
502	宮若市	51	ドンド焼き・エベッサン祭り	長井鶴	1月14日頃		1, 23
503	宮若市	51	御星祭	龍徳	2月3日		37
504	宮若市	51	春祭り	桐野本区	3月24日		8
505	宮若市	61	春祭り	笠松	4月4日		8
506	宮若市	61	丑籠り	芹田	4月	牛馬安全のお籠りで町内広く行われていた。芹田では4月頃代参者が英彦山に参りお礼を受けてきており，お籠りは豊前坊山の頂上で行っていた。子どもと大人が別々に座がある。	39
507	宮若市	51	春籠り	太蔵東区	4月		8
508	宮若市	51	春籠り	千石中組	4月		8
509	宮若市	51	春籠り	千石下組	4月		8
510	宮若市	51	春籠り	千石	4月		8
511	宮若市	51	春籠り	如来田	4月		8
512	宮若市	51	春籠り	所田前隈組	4月		8
513	宮若市	51	春籠り	所田奥組	4月		8
514	宮若市	51	春籠り	長井鶴	4月		8
515	宮若市	61	春籠り	四郎丸飯之倉	4月		8
516	宮若市	61	春籠り	四郎丸	4月		8
517	宮若市	61	釘抜地蔵	下有木	4月23日		37
518	宮若市	51	丑籠り	如来田	5月	牛馬安全のお籠りで町内広く行われていた。如来田では，5月にムラの氏神の貴船神社で神職による祭典があり，子どもも全部寄って行われた。	39
519	宮若市	51	お潮井採り	鶴田	6月最終日曜日		8
520	宮若市	51	川祭り・お汐井祭り	鶴田	6月中旬		8, 27
521	宮若市	51	祇園籠り	千石中組	7月15日		8
522	宮若市	51	磯光天照宮の名越祭り	磯光	7月21日		8
523	宮若市	51	お獅子様	太蔵	7月21日	雌雄の獅子頭，猿田彦の赤と青の面が付いた矛，五十鈴に，子ども達は自分の旗を持ち，天照宮の宮司によって各戸のお祓いをし疫神社折祈のお札も各戸に配っていた。	26
524	宮若市	61	上有木廓神社の名越祭り	上有木	7月31日		8
525	宮若市	51	磯光初子宮の祇園祭り	磯光	7月24, 25日		8
526	宮若市	51	宮田祇園祭り	宮田	7月24～26日		2, 29
527	宮若市	51	太蔵春日神社の名越祭り	宮田	7月25, 26日		8
528	宮若市	51	お獅子様	所田	7月上旬		26
529	宮若市	51	お獅子様	本城	7月第1日曜日	生子神社での祭典のあと本白から東に向かって一軒一軒を水越まで廻り，神社に帰って納めの祭典がある。獅子頭には「明治十七年甲申六月直方町有川仁助」と村人13人の銘，鉾にも同年の銘がある。	26
530	宮若市	51	祇園籠り	千石上組	7月初め頃		8
531	宮若市	51	長井鶴八所神社の名越祭り	長井鶴	7月		8

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
532	宮若市	62	お獅子様	宮永	7月		26
533	宮若市	63	日吉神社祇園祭	福丸	7月	祇園祭は田植えが終わった7月15日を中心に,福丸地区の夏の疫病予防のため山笠を建てて盛大に祭礼行事をするようになったもの。以前は町内の福丸と沼口で山笠を立てていたが,現在は福丸地区のみとなった。	8,29
534	宮若市	51	祇園祭	本城	7月第2土,日曜日		2,29
535	宮若市	51	お獅子様	宮田	7月第2土曜日	宮田地方では神官と一緒に獅子を持って各戸を廻る。子どもが面のついた槍とついていない槍,鈴,お汐井を持っていく。家の中で露払いのような形でお祓いをする。	26
536	宮若市	51	千灯籠	桐野本区	8月17日		19,37
537	宮若市	61	釘抜地蔵	下有木	8月24日		37
538	宮若市	51	秋籠り	千石上組	9月		8
539	宮若市	51	秋籠り	千石中組	9月		8
540	宮若市	51	秋籠り	千石下組	9月		8
541	宮若市	51	丑籠り	如来田	9月	牛馬安全のお籠りで町内広く行われていた。如来田では,9月には徳満宮で行っており,朝掃除をし牛を連れて参っていた。	39
542	宮若市	63	平八月祭り	平	9月中旬	「万念願子ども踊り」が舞われる。祭りの前半に黒丸川で水神祭が行われ,流行病平癒,火災防除などの集落繁栄の意味がある。川の岸辺に水神棚を設置するが,護岸工事前は川中に立てていた。	8,27
543	宮若市	51	宮座	脇野	10月18日		6
544	宮若市	51	神送り	龍徳	10月30日	神送りとは,旧暦の9月末日に青年たちが「出雲に行かれる神様を送る」といってお宮でお籠りをし,夜通し火を燃やして太鼓を打ち鳴らし飲食をする行事。	8
545	宮若市	51	磯光天照宮の神幸祭	磯光	10月9,10日	山笠を先頭に神輿その他の祭具を氏子が持参し行列を組んで斉行する。1日目は頓宮(鶴田日吉神社)までの「お下り」,2日目は天照宮に戻る「お上り」が行われる。昭和30年代頃までは笹山で,4～6基の笹山笠で競争を行っていた。現在は2基の飾り山が奉納される。	2,29,32
546	宮若市	61	倉久春日神社のおくんち	倉久	10月16,17日		8
547	宮若市	51	宮座	千石中組	10月		6
548	宮若市	51	宮座	千石下組	10月		6
549	宮若市	60	宮座	山口	10月	宮座株を持っていた家が33軒あり,転出などのときは家格などを考慮して譲渡されていた。それが明治17（1884）年に地区別に分割する話が持ち上がり,同年に決定して現在に至る。今は消滅したところもあるが,畑では12軒が十二支を割りつけて,順回しで行っており,野中にも2組12軒の宮座がある。	6
550	宮若市	63	若宮八幡宮神幸祭大名行列	水原	10月上旬	2年に1度行われている若宮八幡宮のお祭り。清道旗を先導者にして進む大名行列。大名行列は30人位の2列編成で,チリン棒と呼ばれる鉄棒を持った2人が,鉄棒を引きずっては持ち上げて,ぽんと落としながら先導する。その後,挟箱,台傘,立傘というように並び「トーザーイ」で出発し,「エンヤーセーヨイトコサーサーノサエイトコサーノサ」と声をそろえ,独特の身振り・足さばきで進行する。道具を持つのは左側の列で,右側の人は袖先をつまみ両手を広げる。行列の途中に5～6回,右側の列の人に道具を投げ渡す場面がある。大毛・大熊毛・鹿毛を持った人の「エンヤセー」の掛け声で道具を投げ,受け取ると行列の左右が入れ替わり,「オーイ」の掛け声で終わって行列が進んでゆく。	29,32
551	宮若市	51	御神幸大祭	磯光	10月第2土,日曜日		32
552	宮若市	61	霊厳寺秋の大祭	下有木	11月23～25日	直ちに抜け出て,病気などが治癒することから,「釘抜き地蔵」と言われるようになった。釘抜き地蔵尊,苦抜地蔵尊,あるいは,有木のお地蔵様と呼ばれており,安産と子どもの無事成長を祈願する多く参拝者がお詣りをする。	37
553	宮若市	51	塞の神祭り	東町	11月3日		8
554	宮若市	51	神迎え	長井鶴	11月30日		8
555	宮若市	51	神迎え	龍徳	11月30日		8
556	宮若市	61	上有木靡神社の神幸式	上有木	11月2，3日		32
557	宮若市	61	宮座	芹田	11月第1日曜日		6
558	宮若市	51	天照宮の恵比須祭	磯光	12月3日	早朝から午前9時頃まで境内にある恵比寿神社の前で恵比寿座が開催され,神官による祝詞,御祓いの後,お神酒を頂きクジを引く。	14,23
559	宮若市	51	宮田恵比須祭り	宮田	12月3日	早朝から午前9時頃まで境内にある恵比寿神社の前で恵比寿座が開催され,神官による祝詞,御祓いの後,お神酒を頂きクジを引く。	17,23
560	宮若市	61	飯之倉の恵比須祭り	四郎丸飯之倉	12月3日	公民館で,五戸一組くらいの当番で靡神社の神官を呼んで行っている。	17,23
561	宮若市	63	若宮えびす	福丸	12月3日	早朝3時頃に一番座が始まり,一座ごとに景品が当たり,数番座まで行われ,8時頃に終わっていた。現在は福丸だけでなく,若宮町商工会に事務局を置く恵比須座実行委員会が「若宮町恵比須祭り」として町内に広く呼び掛けている。	17,23
562	宮若市	51	社日籠り	龍徳	社日(秋)		8
563	宮若市	51	社日籠り	龍徳	社日(春)		8
564	宮若市	51	六神様籠り	生見			8
565	宮若市	51	延命地蔵さんの祭り	桐野本区			8
566	宮若市	51	おくんち	磯光			8
567	宮若市	61	おくんち	芹田龍田神社			8
568	宮若市	61	おくんち	下有木			8
569	宮若市	61	お潮井採り	四郎丸飯之倉			8
570	宮若市	61	お潮井採り	上有木			8
571	宮若市	51	お獅子様	所田奥組		各戸を廻っていたのは昭和50年代頃まで。	26
572	宮若市	51	お獅子様	所田中組		各戸を廻っていたのは昭和50年代頃まで。	26
573	宮若市	51	お獅子様	所田前隈		各戸を廻っていたのは昭和50年代頃まで。	26
574	宮若市	61	お獅子様	内山		各戸を廻っていたのは昭和40年代頃まで。	26
575	宮若市	61	お獅子様	四郎丸飯之倉		飯之倉では,天満宮で神官による御神籤によって,三浦汐井・千度汐井・相撲・家内籠りのどれを行うかを決定する。その後獅子が組合中を廻り神官も各戸を廻る。	26
576	宮若市	51	お獅子様	脇野		各戸を廻っていたのは昭和10年代まで。	26
577	宮若市	51	お獅子様	生見		生見では氏神様が腹立たれ熱病が流行するのでお獅子様は廻さないとある。	26
578	宮若市	51	お獅子様	長井鶴		各戸を廻っていたのは昭和20年代まで。	26
579	宮若市	51	お大師様	千石下組			8
580	宮若市	61	お大師様	下有木中有木			8
581	宮若市	51	神送り	脇野			8
582	宮若市	61	神送り	四郎丸飯之倉			8

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
583	宮若市	63	神送り	金生			8
584	宮若市	51	神迎え	脇野			8
585	宮若市	61	神迎え	四郎丸飯之倉			8
586	宮若市	63	神迎え	金生			8
587	宮若市	51	観音講	所田中組			8
588	宮若市	51	観音様籠り	龍徳糸田			8
589	宮若市	51	祇園籠り	本城			8
590	宮若市	61	釘抜き地蔵さんのお籠り	下有木中有木			8
591	宮若市	51	庚申祭り	千石上組			8
592	宮若市	51	庚申祭り	所田			8
593	宮若市	51	庚申祭り	本城			8
594	宮若市	61	庚申祭り	芹田上組			8
595	宮若市	51	庚申祭り	宮田千石下組			8
596	宮若市	61	庚申祭り	芹田下組			8
597	宮若市	51	千灯籠	龍徳			8,37
598	宮若市	61	大日如来のお籠り	上有木谷組			8
599	宮若市	51	春祭り	千石上組			8
600	宮若市	61	宮座	下有木			6
601	芦屋町	47	芦屋の八朔行事	芦屋町各地	9月1日に近い日曜日	350年余り続く行事で,初節句を迎える男児の家では八朔の馬を,女児の家ではダゴビーナを(団子ひな)を飾る。八朔の馬もダゴビーナも,その日を祝うと翌2日,夜の明けるのを待って近くの子ども達が先を争って貰いに来る。	12
602	水巻町	39	夏越祭	立屋敷	7月13～15日	輪越祭りともいい,どの村の氏神にも,鳥居の下に菰や萱で大きな輪を作り,注連飾りをした。この輪をくぐりぬけることで夏やみ,悪病を除けるとされ,夏らしい色彩のある祭りであった。子ども相撲も行われている。	4,10,15
603	水巻町	39	夏越祭	二	7月中旬	輪越祭りともいい,どの村の氏神にも,鳥居の下に菰や萱で大きな輪を作り,注連飾りをした。この輪をくぐりぬけることで夏やみ,悪病を除けるとされ,夏らしい色彩のある祭りであった。	4,15
604	水巻町	39	夏越祭	頃末	7月13, 14日	山車(人形山)	29
605	水巻町	39	秋季大祭	吉田	9月28, 29日	堀川水下16ケ村の芝居,見世物,夜店などでにぎわった。遠賀三大相撲(古賀の豊前岳,遠賀村の高屋の天神)の一つである河守様の相撲が行われ,力士は近在はもちろん遠くは四国,関西あたりからも集まった。現在では子ども相撲と神輿が行われている。	9,10,32
606	水巻町	39	秋祭	頃末	10月中旬	神輿と子ども相撲	10,32
607	水巻町	39	例大祭,神幸祭	吉田	10月下旬	神輿と芸能祭り。昔は,「湯立て」といって釜に沸かしたお湯を,竹の笹でふりかけて厄を払う行事,「煥蹴り」火を焚いた後の灰の上を素足で歩くという行事があったが今はない。	32
608	水巻町	39	どんと焼き	猪熊,吉田,立屋敷	1月中旬	松飾やしめ縄を外して焼き捨てる日,この日まで竹を焼いてはならないともいわれ,7日ではなく15日に行うところもある。3が日は部屋を掃くことを忌み,すべての芥はためおいて,この日にしめ飾りと一緒に焼いた。地方によりホケンギョウ,シメオロシ,左義長ともいう。	1
609	岡垣町	37	元朝修正会		1月1～3日	元日は0時から4回の特別護摩が行われる。　※成田山不動寺	1
610	岡垣町	37	疝癪封じ	高倉	1・5・9月の15日	毎年1・5・9月の15日に行われる。体調を崩しやすい年の初めと季節の変わり目に,その厄害を防ぐことを目的に始まったといわれる。現在は,開運・安産・諸病平癒などを祈願する秘法であると捉えられている。	37
611	岡垣町	37	護摩焚き神事		毎月15日	信者の祈願護摩を一枚ずつ読み上げ,火の中に投じ,諸願の成就を願う。　※成田山不動寺	1
612	岡垣町	37	東黒山の祇園山笠	東黒山	7月14日	岡垣町内では唯一山笠が残っている区である。毎年7月14日に祇園山笠を行う。山笠は毎年飾り付けを変え,花山,旗山,台山と彩を変える。「はやり病でたとえ家が3軒になっても山笠を出し,祭りを絶やさない」と願をかけたところ疫病が治まったという。以来「万年願」となって祇園山笠を出している。	29
613	岡垣町	37	開創大祭		10月第1月曜日	本堂前の境内広場に結界を張り,柴燈大護摩壇を荘厳し住職を山主とし,導師並びに九州修験の会の真言行者(山伏)による柴燈大護摩を厳修する。不動寺開創以降の,篤信者,地域住民,先代住職,ご本尊様への努力に対しての報恩謝徳の大護摩祈祷。修法後は燃えた壇木の上を歩く火渡りの儀式を行い,不動様の慈悲の力による聖なる炎に触れ,参詣者各位の身体健康,家内安全,厄難消除,病気平癒,息災延命,商売繁盛等の所願成就を祈念する。　※成田山不動寺	1
614	岡垣町	37	高倉神社秋季大祭	高倉	10月上旬の三日間	海の幸,山の幸の豊穣に感謝し祝福する祭りで,10月上旬に3日間行われる。「おくんち」と言われ,厳かな神事が行われるほか,提灯を手にした行列取締役を先頭に旗や神輿などが連なり,仮宮までの御幸・舞踏・相撲・剣道・弓道大会・神楽などの奉納が行われる。	32
615	遠賀町	38	島津祇園山笠	島津	7月第3日曜日	区の人が年1回感謝の気持ちを表す祭事となっており,老若男女が参加する。山笠を伊豆神社に奉納後,ねじり鉢巻とそろいの法被で山笠を曳き,太鼓と鐘を打ち鳴らしながら地区内を巡行する。折にふれて,掛け声をかける。	2,29
616	遠賀町	38	老良祇園山笠	老良	7月第3土曜日	以前はかき山で青年たちが前を,壮年たちが後ろをかいていた。昭和63年頃は山笠を鉄のソリで曳いて巡回し,神社への帰還は深夜に及んでいた。初山笠の子どもを抱えて山笠に乗せると病気をしないといわれている。現在は境内で初山神事,祝詞の奏上と玉串の奉納,子どもの山車への初乗りを行い,遠賀川にお汐井取りに向かった後に太鼓と鐘を鳴らしながら地区内の約2.5kmの距離を3時間かけて巡行し,1軒ごとに打ち込みを行う。山車が神社を出発する際,帰還する際ともに左右に3回ずつ山車を回転させる回し練りが特徴的。	2,29
617	遠賀町	38	髙田神社の神	虫生津	7月中旬	3年に1回開催される神幸行事。神主が祝詞の奏上,玉串を奉納後,区民が威儀物を以って地区内約1.2kmの距離を練り歩く。神社出発後は途中でお汐井取りを行い,お旅所で祭典を行った後,神社へと帰還する。かつては太鼓や横笛を吹いて巡行していたが,現在はテープに録音したものを再生している。	32
618	遠賀町	38	高家天満宮遷宮御神幸行列	上別府	9月24日	遠賀町において,高家天満宮の神幸行事のみが多少簡略化されたとはいえ,毎年継続して執行されている。毎年9月24日の夜に行われ,神社での祝詞の奏上と御霊移しの儀式が終わった後,神輿の前後に区内4組の12張提灯と,笛・太鼓など28種の威儀物を連ねて,神社からお仮屋公園までの約1.9Kmの距離を2時間かけて往復する。天満宮の神幸行事は地区のおくんちを兼ねており,地区の有志による出店が天満宮に立ち並ぶ。	32
619	遠賀町	38	浅木神社秋祭(前夜祭)神幸祭	浅木	10月7日	夜間に行われる神幸行事。戦前は隔年開催であったが,戦後は5年に1度,平成4年（1992）から3年に1度に改め,平成29（2017）年からは6年に1度開催されている。神社での祭典や御魂移しを行った後,高校生以上の未婚男性が神輿を担ぎ,12張り提灯や威儀物で隊列を組んでお旅所まで太鼓を打ちながら巡行する。お汐井取りで容器として使用する青銅製の御麗水は約200年前に当時の黒田藩主より下賜されたもので,使用する神輿は文化6（1809）年に国主の命で郡奉行永田伊左衛門が再興したもので,昭和52（1977）年に大修理を行っている。	32

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
620	遠賀町	38	牟田神社秋の祭典御幸	尾崎	10月14日	3年に1度開催される神幸行事で,元は愛嶽神社の神幸行事として8月24日の例祭の前夜に行われていたが,大正11（1922）年に牟田神社に移転合祀されて以降は,牟田神社で開催されている。7体の鼻高面を先頭に,太鼓や笛,獅子面などの威儀物とともに神輿を担いで地区内を練り歩き,貴船神社跡地のお旅所までを往復する。	32
621	遠賀町	38	春祭り（祈願祭）	島津,尾崎,広渡,浅木,虫生津,老良	4月中旬～5月中旬	田植え前に今年の豊作を神に祈願する行事で,地区によっては神社の春祭りとして行われている。老良地区では当番組がお宮に初穂料とお供え物(海のもの,川のもの,米,もち米,果物,地野菜)を準備し,区の代表者を中心に祭典が行われた後,車座になって座って直会を行うが,お神酒を飲む前には「いわさか」と言って乾杯を行う。広渡区では「一夜で咲いた菜種の花」の伝承に関連して麦藁くんちと呼んで万年願としている。	8
622	遠賀町	38	お獅子さま	木守	6月上旬	五穀豊穣,厄除け行事。隣組長が芦屋の浜までお汐井取に行き,井手神社に御幣とともに奉納して神事が執り行われた後,獅子頭とともに区の役員の家を訪問して御幣を配布し,お祓いを行う。区内を周り終えた後は神社で直会を行う。	26
623	遠賀町	38	祇園籠もり（さなぼり）	広渡	7月上旬	田植えの終わりを祝して行われる行事で,関係者が神社に集まり祝宴を開き,田の神への感謝と田植えの慰労を行っている。	8
624	遠賀町	38	権現様参り	虫生津	7月中旬	昔大干ばつが起きた際に倉谷権現に雨乞いをしたところ,降雨に恵まれたことがあり,以来万年願をかけて毎年参詣が続けられている。現在は地区の生産組合を中心にお参りし,祠の掃除とお供えものを上げて般若心経を唱えている。倉谷権現は天明年間(1781～1788年)に岩渕の翁(伊藤常足の曾祖父の実兄・常利)からこの地に香春権現の神を祀りたいとの相談を受けて建立されたと石祠に刻文が残るが,建立の次第については翁との約束により刻文に記されていないと言われている。	16
625	遠賀町	38	施餓鬼	今古賀	7月17日	寛文3（1663）年,組頭の柴田次左衛門と林惣右衛門が検田吏に冤罪のため斬首されて以来,村民のため犠牲となった両名の冥福を祈るため,区を上げて施餓鬼供養を行っている。かつては宝樹庵(中ノ堂)と呼ばれるお堂で行われていたが,戸数増加のため公民館で法要が営まれる。	37
626	遠賀町	38	夏越祭	若松,浅木	7月末頃	新年の始まりから半年間で身についた穢れを清めて災厄を祓う神事。浅木神社では神主が祝詞の奏上後,左・右・左周りで神拝詞(となえことば)を唱えながら茅の輪をくぐり,そのあとに区の代表者・参列者が続いて輪をくぐる。くぐり終えた者は茅の一部を持ち帰り,夏越の札とともに玄関などに飾り付け,魔除けとしている。	38
627	遠賀町	38	千灯明	若松	8月中旬	寺の境内にたくさんの提灯を飾り,提灯の輪の中で盆踊りを行う。	19
628	遠賀町	38	地蔵盆(地蔵尊奉納踊り)	鬼津,広渡,	8月23,24日	鬼津区では運営委員を中心に,広渡区では重広組を中心に地蔵尊に盆踊り(思案場所)の奉納が行われている。旧停区ではかつては地区の人が地蔵堂に集まってお籠りをしていたが,昭和30年代ごろから地蔵尊への奉納踊りへと変化した。	19
629	遠賀町	38	風止め	鬼津,広渡,上別府,老良	7月後半～9月初旬	台風や鳥・害虫などによる作物の被害がないよう祈願する行事で,地区によっては神社の秋祭りとなっている所もある。上別府尾倉地区では風鎮祭として行われており,祭典後に参加者による模擬相撲が行われる。	16
630	遠賀町	38	おくんち	島津,若松,鬼津,広渡,木守,上別府,浅木,尾崎,松の本,虫生津,老良	9月後半～10月中旬	昭和35（1960）年,町の公民館提唱により,おくんちの日を全地区10月14・15日に統一するよう定められたが,親睦融和のため元の日程に戻す地区が現れ,現在では上別府区で最初に行われた後,各地区でそれぞれ開催されている。各地区では神社に幟を立て,地区によっては秋祭りや収穫感謝祭,宮日祭として区の代表者が祭典に出席し,直会を行っている。浅木区では公民館に子どもが集まり飲食やお楽しみ会をやるとともに,当番組の家に子どもと大人が集まり飲食をともにして過ごす風習が残る。広渡区や木守区では前日に子ども達による奉納相撲大会が行われている。	8
631	遠賀町	38	お日待	老良	11月30日	日の恵みに感謝するため,一夜を眠らずに当番の家や社に籠り明かす行事で,町内では老良区のみ簡略化してはいるが現在も行われている。以前は当番の家で行われていたが,当番となる家の負担軽減のため,平成28（2016）年頃から神社に集まり,当番組を中心に神事と直会を行うようになった。	16
632	遠賀町	38	お宮座	島津,広渡,別府,今古賀,遠賀川,木守,上別府,老良	10月初旬～12月後半	村の内に神の宿を設けて神を迎え,饗応し秋の収穫感謝や翌年の家内安全,新年の祈願を行う。各区とも神社で祭典が行われ,終了後に公民館に移動して直会が行われるところもある。老良区ではお宮座について書かれた巻物(天明5年)と掛け軸を次の当番に受け渡す当番渡しの儀が行われていたが,平成28年ごろから省略され,お宮座も当番組の家から神社で開催されるようになった。広渡区では神前やお膳に菰の実(こもぐろ)をつけるという風習があったが,現在は行われていない。	6
633	遠賀町	38	恵比寿座	島津	12月10日	島津区の2の組が昔から行っている行事。参加者で恵比寿社の清掃とお参りを行った後,公民館に集まり,主に女性が用意した料理を参加者で飲食する。	17
634	遠賀町	38	歳旦祭(元旦祭)	島津,若松,尾崎,広渡,木守,老良,浅木,虫生津	1月初旬	氏子の繁栄安泰祈願,新年のお祝いとして各地区の神社で開催されている。参列者にはお神酒やぜんざい,みかんなどをふるまう。広渡区ではかつては元旦祭に併せて牛馬に乗って1軒1軒氏子の家を回ってお清めをしていたが,現在は神社に獅子頭を用意し,初詣客のお清めを行っている。	18
635	遠賀町	38	どんど焼き（ほっけんぎょう）	若松,松の本,遠賀川,広渡,木守,上別府,浅木,虫生津	1月中旬	無病息災や家内安全,災厄払いの行事として神社や公園,公民館で執り行われている。神社のある地区では神事後に正月飾りなどを焼却し,参列者にぜんざいやかっぽ酒などをふるまっている。	1
636	遠賀町	38	及第籠り	旧停	3月初旬	かつては男の子は男の子の家,女の子は女の子の家に集まり,春休みに新1年生の歓迎と進級をかねて祝う行事として行われていた。昭和28（1953）年の大水害以降,一時期行事が途絶えていたが,地区公民館の建設により行事を復活させ,今日まで継続して行われている。	12
637	小竹町	50	南良津獅子舞	南良津	7月第1日曜日	宝暦2(1752)年に8年続いた豊作を祝って獅子舞を「秋のおくんち」に奉納したのが始まりとされる。以来,夏の祈祷の際に舞われ,現在に至る。笛,太鼓の楽にあわせて,前楽,古楽,道楽,出端の型がある。	26
638	小竹町	50	小竹恵比須座		12月第1土曜日		23
639	小竹町	50	小竹祇園山笠	勝野	海の日を含む3日間(土,日,海の日)	疫病退散と怨霊沈静を願い,山笠に人形などを飾り,飾り山ごとに動かしていたが,電燈線の架設が進むにつれて,その場に固定するか,高さを低くしてひきまわした。山笠は2年に1度,こどもみこしは毎年奉納されている。	29
640	小竹町	50	地蔵まつり	御徳,赤地	8月23日	町内各所で毎年8月24日に行われ,350年以上も昔のまま継承されてきた地域に根ざした祭り。地蔵まつりは子どもの成長や幸福を願うもので,昔から子ども達が中心で行ってきたが,現在は子どもが少ないため,地域の人びとで祭りを守り続けている。竹を半円に湾曲させてその節に火を灯した参道が特徴的で,提灯や灯籠の灯りとともに,竹アーチからあたたかな柔らかい光が漏れ,夜の道を灯す。	19
641	鞍手町	57	護摩焚き	中山	2月4日		33
642	鞍手町	57	四十四賀	中山	4月4日		39
643	鞍手町	59	安産祭	室木	4月8日		39
644	鞍手町	59	高木薬師大祭	新北	4月8日	高木には,町指定文化財の高木薬師像を祀った仏堂がある。毎年4月と9月の2回,長家組と高木組の薬師様籠りをしていた。各家では,豆御飯かお寿司御飯に煮しめなどのワリコ弁当を持ち寄り,仏前にワリコを供え,明福寺住職のお経の後,堂内でお籠りをしていた。	37

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
645	鞍手町	59	長谷観音大祭	長谷	4月17,18日	4月と10月のそれぞれ17・18日に重要文化財の十一面観音像が御開帳になる。秋は寺の祭りだが,春は区の祭りで,区長が責任者になって運営し,祭りの当番は上・中・下の3組が順番で受け持つことになる。お供えに特徴があり,鏡餅は厚さ5cmを超え,径50cmはあると思われる大きなものを3段重ね,その間には小餅を2段4か所に置いて隙間を作る。大餅の一番下は白餅,中は黄な粉をまぶし,上の餅に小豆をつけていて,五穀豊穣を意味していると言われる。	37
646	鞍手町	57	八剣神社神幸祭	中山	5月3, 4日	5年に1度,神幸祭が行われる。様々な役を担った氏子達が行列をなし,各地区から出される山笠とともに約5kmを練り歩く。竜笛(りゅうてき),篳篥(ひちりき)といった楽器を用いた道中楽は,余天楽(えてんらく)が約250年前の江戸時代から伝承されている。	2,29,32
647	鞍手町	59	四万六千日	長谷	7月10日	観世音菩薩の縁日を差し,この日に参ると四万六千日参ったのと同じ御利益があるといわれる。	37
648	鞍手町	59	お獅子様(祇園祭)	八尋	7月14日	巡回の途中には各クミ毎に,昔から決まった「中宿」で休憩しながら2二日がかりで廻る。旭炭鉱では事務所で一括してお祓いを受け,家ごとには廻らなかった。	26
649	鞍手町	58	お獅子様(祇園祭)	上木月	7月15日	獅子頭を持って,一軒一軒を廻る。各集落ごとに一軒の決められたお休み所があり、獅子頭を安置する場所が設けられる。一行はここで酒肴の接待を受ける。かつては親睦の場であるとともに,農作業の手はずなどを打ち合わせる重要な集まりでもあった。	26
650	鞍手町	58	川祭	古門	7月16日	水に関する祈願として行われる。大溝の岸に水神棚を立てる。棚には米・野菜・果物・トウキビ・イリコ・昆布を供え,左側の竹にはツバメの巣と言われるワラ製の椀を作って下げて塩を入れ,右側の竹には竹筒を下げてお神酒を入れる。	27
651	鞍手町	58	川祭・お獅子様	神崎	7月20日	川祭りでは古門大溝の井樋ノ口前に水神棚を立てる。川祭りの後にお獅子様が行われ,神官が先祓い・鈴・お獅子持ち・槍・太鼓・笛・旗持ちの役を担った氏子達を伴い,神崎地区全戸に札を配りながら祓い廻る。	26,27
652	鞍手町	58	天満宮祭礼	木月	7月25日		39
653	鞍手町	59	土用干し祈願	室木	7月31日		16
654	鞍手町	59	お獅子様	新北	7月	午前に熱田神社,午後に熊野神社で神事を行った後,お汐井配り,槍のお祓い,神主のお祓い,獅子のお祓いの順で各家々を廻る。お祓いに使用する槍からは明治20(1887)年の文字が読み取れる。	26
655	鞍手町	57	祇園祭	中山山ヶ崎	7月14, 15日		39
656	鞍手町	59	お獅子様	永谷	7月中旬に日曜日	夏越祭として古くから地域に伝わる。獅子頭を持って,一軒一軒を廻り,無病息災や五穀豊穣を願う。獅子に子どもを噛ませるとあせもやおできが出来ないと言われる。	26
657	鞍手町	58	日汐井	古門	7月土用の日		8
658	鞍手町	57	お獅子様	猪倉	7月中旬		26
659	鞍手町	57	お獅子様	小牧	7月下旬		26
660	鞍手町	59	地蔵盆(セントボシ)	新北	8月24日	新北の皮剥地蔵では,8月24日の祭礼の夜,中川橋から川沿いの参道にかけて提灯を下げた。これをセントボシと呼んでいた。昔,村に疫病が流行したが栄町だけは病気が流行らなかったことから,これは地蔵様のお陰だという事で祭りが始められたと伝えられている。	19
661	鞍手町	59	新北の神幸祭	新北	10月	熱田神社の神幸行事として行われる。順路は特に決まったものは無いが,熱田神社からマチ筋を通り,長谷川の堤防を上って,入生のお潮井採り場まで行う。道中の御旅所は設けないで,お潮井採り場がそれを兼ねる。帰路も同じ道を行列を組んで神社に向かう。	2,29,32
662	鞍手町	59	永谷万年願盆綱引	永谷	8月14日	毎年8月14日21時から23時にかけて行われる。新教寺山門から藤かずらで作った大綱の両端を勢いをつけて一気に県道へ引き出し,地区を上下に分けたそれぞれの引手によって引き合うもので,永谷地区を挙げての行事となっている。	10,30
663	鞍手町	58	地蔵盆	上木月	8月下旬		19
664	鞍手町	58	観音様の祭	上木月	8月20日		37
665	鞍手町	57	二日籠もり	小牧	9月2日		39
666	鞍手町	58	庚申祭	上木月	9月第1土曜日		8
667	鞍手町	57	丑籠もり	小牧	9月第2丑の日	昔,牛馬に疫病が流行った時に平癒を祈願したことに始まり,万年願の相撲が奉納された事に由来する。現在は子ども相撲が奉納されている。	10
668	鞍手町	59	おくんち	永谷	10月24日		39
669	鞍手町	57	おくんち	猪倉	10月中旬		39
670	鞍手町	58	剣神社遷宮行列	木月	10月16, 17日		32
671	鞍手町	59	おくんち	永谷	10月下旬		10
672	鞍手町	59	おくんち	新延	10月下旬		39
673	鞍手町	59	おくんち	舟川	10月下旬		39
674	鞍手町	57	おくんち	中山	10月下旬	中山商店街のおくんちは八剱神社の秋祭りで,村のおくんちと全く同じようにしていた。ここでのごちそうの中にはおくんち魚と呼ばれるものがあり,これはマビキの事でこの頃が旬であった。神社では幟が立ち,芝居・操り人形・神楽などが上演され,近郷近在から青年が集まり宮相撲が行われた。	10
675	鞍手町	57	おくんち	小牧	10月下旬		39
676	鞍手町	59	おくんち	新北	10月第3日曜日		39
677	鞍手町	58	宮座	古門掛津	11月10日	掛津では,神社での祭典の後,お神酒を頂いて当場の家に集まり,神職を主座にして年長者から座についた。座の給仕は男がすべて執り行い,女は料理作りだけである。宮座の料理で注目されるのは川魚で,新道のおおよそ幅10m,長さ200mのクリークに水車を何台も据えて水を干し,鯉・鮒・鯰・鰻など捕れたものを各人につけた。	6
678	鞍手町	59	納めの観音	長谷	12月17, 18日		39
679	鞍手町	58	宮座	古門中組	12月第1日曜日	中組の神饌は,米1升・掛鯛2尾・神酒・野菜・果物であり,御初穂料は当場が金で包んでいた。お宮での祭典には当場がスミタシ(刺身)を持っていき,直会の時に冷酒の肴にした。その際の服装は紋付であったが,袴は履かなかった。	6
680	鞍手町	58	宮座	古門西原	12月第1日曜日	当場では,一週間前から木戸口に注連を張り「不浄輩神事中不可侵也」の紙札を下げ,家の大掃除と畳替えをした。神饌は,米1升・鯛2尾・神酒2升・鏡餅・塩・昆布・果物・野菜で,これは後でお宮に納めた。	6
681	久留米市	259	玉替祭・成人祭	御井町	1月15日	元は年始にその年の吉凶を占うため参拝者が木製の玉を交換しあう神事であった。交換し合う群衆の中に神官が紛れ,そっと袖より金の玉,銀の玉を出し,それを当てた者にはその年幸運が舞い込むというものである。現在では,参拝者が御籤を引き,景品が当たるという形式をとっている。	22
682	久留米市	246	兜山けしけし祭り	日吉町	3月下旬の日曜日	日吉町順光寺と高良山の奥,けしけし山を結んでの祭典。不遇の天才画家・青木繁の霊を慰める碑前祭で,献花,献茶,献句などが行われる。	
683	久留米市	246	久留米宝恵かご	日吉町	3月春分の日	毎年春分の日に市内の日吉神社と商店街を会場として行われる。宝恵籠に乗るのは久留米では稚児となっており,新1年生がその役を努める。”宝恵籠”30台が日吉神社を出発し,子ども旗行列,惣裁判衆,宝恵山車など総勢約300人の行列が続き,市内を練り歩く。	

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
684	久留米市	246	水天宮春大祭	瀬下町	5月連休中	毎年5月の連休に,春大祭が行われる。5月3日には,禅寺梅林寺僧侶と水天宮神職による,神仏混合の祭祀「献茶祭」が行われます。境内では,表千家による野点(お抹茶接待)も行われる。5月5日から7日にかけては,1年で最も重要な祭祀として水天宮例大祭が催され,さまざまな儀式が行われる。本殿では浦安の舞が奉納され,御神幸祭も行われる。	39
685	久留米市	259	川渡祭(へこかき祭り)	御井町	6月1, 2日	厄落としのため赤べこを着けて筑後川で水をかぶり,そのままお参りしたことが名前の由来である。麓の味水御井神社の清水で禊をした後,ふんどし姿で高良大社まで山道を駆け上がる。境内の楼門前に大きな茅の輪をしつらえ,参拝者には赤手ぬぐいがわけられる。	38
686	久留米市	240	川祭り・成竹大明神祭礼	田主丸町野田　石王	4月第2日曜日	小麦稈用いた藁苞を作り,その中に干したキビナゴを入れる。一筋の男竹に神酒を入れて,ツトとともに葉のついた男竹に吊るす。準備された2本の供物は,筑後川の船着き場と,古川の汲ん場に立てられる。汲ん場に立てるのは,馬が河童に引かれぬようにようにとの思いが込められている。	27
687	久留米市	251	動乱蜂	山川町	9月15日	第4章,第3節,22「動乱蜂」参照。	31
688	久留米市	238	神鉾神社御年紀大祭	田主丸町竹野富本	4月	戌年に御神体披露。浦安の舞奉納。稚児行列。	6
689	久留米市	236	玉替え神事	田主丸町田主丸下祇園町祇園神社	4月15日	現在は神事を行うのみ。元は神輿で商店街を巡回していた。	22,32
690	久留米市	241	川祭り	田主丸町牧	5月	川辺で短冊(住民の名前記載)を掛けた笹を立てる。	27,36
691	久留米市	240	竜王堂の祭礼	田主丸町石垣　石垣観音寺	5月1日	周辺地域の住民が集まり祭礼(読経)を行う。終了後,各集落持ち回りでお籠りをする。	37
692	久留米市	259	大学稲荷冬籠祭	久留米市御井町	12月8日	一年間の厄を払い清らかな気持ちで正月を迎えるための祭り。高良山中腹に鎮座する大学稲荷神社にて,本殿の祭典の後,参拝者が祈願を込めた神木を焚き上げ,その成就をお祈りする。	1
693	久留米市	252	八丁島の御供納	宮ノ陣町八丁島	12月14,15日	第4章,第3節,37「御供納」参照。	39
694	久留米市	248	納め不動火祭り	上津町	12月28日	僧侶が法弓作法,宝剣作法,洒水(本尊・行者・信徒を清める)という伝統に則った儀式を行った後,炉に点火し読経のなか,1年間お不動様の分身としてお護りいただいた御札・お守りを,炎々と燃え上がる智慧の炎で焼き尽くし1年間の御加護に感謝する行事。	1
695	久留米市	166	下田部落祇園祭獅子舞	城島町下田	7月15日の前の日曜日	公民館役員と下田の小・中学生によって執り行われる。雌雄の獅子頭を交代で被り町内を廻る。囃子は男児が打ち,お汐井でのお清めは女児が受け持つ。下田を東西に分かつ地区境では,獅子が背負った邪気を清めるという意味で「炎の舞」が行われる。	26
696	久留米市	166	獅子舞	城島町城島	7月中旬の日曜日	元は青年による獅子舞であったが,昭和40年頃から主体を子どもに移した。その時に揃えた子ども獅子と元からあった大人獅子が二手に分かれて町内を廻る。	26
697	久留米市	239	子ども獅子舞	田主丸町菅原片ノ瀬	7月14日	祇園祭の一環として行われる。獅子は雌雄に分かれて別々に集落内を祓って廻る。	26
698	久留米市	239	秋葉さまの夏祭り	田主丸町恵利三角	7月28日	町内獅子打ち。	26
699	久留米市	238	茅の輪くぐり	田主丸町中尾西郷	7月		4
700	久留米市	240	八幡さまの子ども獅子舞	田主丸町殖木明石田	7月1日	子ども獅子舞。	26
701	久留米市	236	風鎮祭	田主丸町豊城怒田	7月第1日曜日	公民館前に幡を揚げ,神主が祝詞を上げる。	17
702	久留米市	240	獅子舞	田主丸町益生田麦生矢倉八幡	7月第1土曜日か日曜日	昔から青年有志によって行われている。区内を獅子祓いして廻り,獅子の口が開いた時,その中に各家の熨斗袋を入れる習慣がある。	26
703	久留米市	239	八幡さまの夜渡	田主丸町恵利恵利	8月7日	かつては「七夕夜渡」と呼ばれる陰暦7月7日の祭りであったが,現在は8月7日に夏越の茅の輪くぐりと一緒に行われている。本来は子どもの獅子廻しであるが,少子化の影響で現在は役員の大人が廻っている。八幡宮での神事の後,鳥居の前で獅子頭がお祓いをし町内を巡回する。最後は八幡宮に戻り,今度は拝殿の前で獅子頭がお祓いをし終了する。	26,36
704	久留米市	235	子ども獅子舞	田主丸町秋成亀王	8月25日	古い獅子は明治5(1872)年に奉納されている。天満宮で子ども達が獅子打ちを行った後,各戸を巡行する。その後亀王公民館にで片付けをする。	26
705	久留米市	235	子ども獅子舞	田主丸町船越小川	8月25日	子ども達が獅子頭をもって集落の各戸を回る。獅子を迎えた家は御幣を受けると玄関に張り,家内安全と子どもの健やかな成長を祈願する。	26
706	久留米市	255	放生会	北野町	9月14日	毎年9月15日に,五穀豊穣,無病息災を祈願して行われている花火大会で,約300年の歴史を誇る伝統行事。打ち上げ数は約2000発で,打ち上げ場所が住宅地の中心部,観覧場所から50m程度しか離れていないため,頭上で花火が繰り広げられ,かなりの迫力となっている。	39
707	久留米市	158	十五夜さん綱引き(満月綱引き)	大石町	9月	無病息災・五穀豊穣祈願の行事で,大綱の形状が一方の端に丸く輪を作り,他方を二又に分けることから大蛇の姿を表現したとも伝わる。昭和12(1937)年に途絶えたが,昭和52(1977)年に地域によって復活。	30
708	久留米市	240	三夜様	田主丸町益生田三田	9月8日	祭礼を行い,お籠りをする。	39
709	久留米市	241	天満神社夜渡の獅子舞	田主丸町上原　原	9月15日前後の日曜日	天満宮を出発し,赤鬼・青鬼が先導しながら雌雄の獅子一対が獅子打ちしながら原区の各戸を廻る。区内を廻る途中,三津留水神社や区長宅などでは獅子舞が奉納される。舞には楽は無く,獅子方が呼吸を合わせながら行う。天満宮に帰還後,鬼を追いかける形で,天満宮の周りを3周する。	26,36
710	久留米市	238	堂籠り	田主丸町地徳　森山	9月		32
711	久留米市	238	夜渡相撲	田主丸町中尾　西郷	9月23日	子ども相撲の奉納。	10,36
712	久留米市	239	柳瀬おくんち獅子舞	田主丸町八幡　柳瀬玉垂宮	10月第2日曜日	氏子などの家々を廻り,「門付け」と呼ばれる魔祓いを行う。夜に宮に戻り堂廻りが行われ,最後は玉垂宮前で,普通騎馬・振り分け騎馬・走り騎馬と呼ばれる三種の舞(坪舞)が奉納される。この獅子舞にはシュロの皮で編んだ蓑と,雌雄それぞれの頭を紐で結んだ獅子が使われる。	26

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
713	久留米市	238	天満神社の茅の輪くぐり	田主丸町地徳　中原	10月		4
714	久留米市	238	阿蘇神社の夜渡	田主丸町地徳森山	11月		4, 36
715	久留米市	236	虫追い祭	田主丸町	11月中旬	源平合戦の故事に由来する。武者人形2体, 馬1頭が戦いながら商店街, 耳納の市会場を練り歩く。夜は巨瀬川の川原で合戦を行う。現在は3年に一度の開催。	15
716	久留米市	166	御神幸	城島町江上本	12月第1日曜日		32
717	久留米市	238	堂籠り	田主丸町中尾西郷	10，11月	仮宮への御神幸。	32
718	久留米市	238	天満神社くんち	田主丸町地徳中原	11，12月	宮座と神主による神事。	6
719	久留米市	259	高良山獅子舞	御井町	10月10日	「祓い」の意味を最も単純・厳粛な形で表現した獅子舞。昭和36年に中断したが, 昭和52年に保存会が結成され復活。元旦祭や高良山おくんちで奉納。	26, 32
720	小郡市	261	虚空蔵さん祭り	小郡	1月13日	虚空蔵さんの前に置かれた幸運賽銭を借りて財布に入れておけば, 1年中小遣いに不自由しないといわれる。次の祭日に倍にして返す。当日はお堂の前にテントが張られ, 役員が御神酒や餅を用意し, 参拝者の接待を行う。1月13日と9月13日の年に2回行われる。	6
721	小郡市	261	虚空蔵さん祭り	三沢	1月13日	虚空蔵さんの前に置かれた幸運賽銭を借りて財布に入れておけば, 1年中小遣いに不自由しないといわれる。次の祭日に倍にして返す。当日はお堂の前にテントが張られ, 役員が御神酒や餅を用意し, 参拝者の接待を行う。1月13日と9月13日の年に2回行われる。	6
722	小郡市	261	恵比須祭り	小郡	1月13日	毎年1月13日に下町の人びとにより行われている。神官を招いて神事を行った後, 参拝客にお茶とかまぼこを振る舞う。	6, 23
723	小郡市	261	左義長	小郡	1月13日	小正月の火焚き行事。どんど焼きとも呼ばれる。五穀豊穣と無病息災を祈る。	6
724	小郡市	262	左義長	二森	1月13日	小正月の火焚き行事。どんど焼きとも呼ばれる。五穀豊穣と無病息災を祈る。	1
725	小郡市	263	左義長	松崎	1月11日	小正月の火焚き行事。どんど焼きとも呼ばれる。五穀豊穣と無病息災を祈る。	6
726	小郡市	264	粥占い	大保	1月15日 2月6日	御勢大霊石神社の神事。1月15日に新米2合半を炊き, 神前に供える。2月6日に神前から下げて氏子に供覧し, 粥のカビの兆しにより, その年の豊凶や天候を占う。	11, 25
727	小郡市	264	初午祭(初午さん)	西島	2月初午	壇ノ浦の戦いで敗退した平家一門の慈禅尼が岩穴に隠れて霊を祀ったという歴史をもつ黒岩稲荷神社で行われる五穀豊穣・商売繁盛を祈るお祭り。神前に紅白の餅や鯛, 米などが供えられ, 多くの参拝客が訪れる。色とりどりの初午おこしは, お土産としても喜ばれている。	17
728	小郡市	263	権現さん祭り	干潟	3月15日	3月15日, 大字干潟の3つの区(干潟・佐野古・下鶴)で行われる。当日は世話役が祭事の準備をした後, 祭礼を行い, 直会を行う。午後からは子ども達が来てにぎわう。各家庭では, この祭りにコウバシを作り, 権現さんに供えた。コウバシは, 裸麦を釜で炒り, 引き臼でひいて粉にし, 砂糖を入れて甘みをつける。人の悪口を言おうとしても口を動かすと粉が飛び出るので, 言わないようにこれを食べると言われている。子ども達は, この粉を小さな袋に入れてもらい, 木の葉ですくって食べた。花立山の権現さんでは, 干潟・下鶴・佐ノ古の神社総代が神事に参列し, 山の頂上に祭旗を掲げ, 麓の広場まで出店が並び, おこしごめは有名である。干潟区では, 親戚を招き, 酒宴を催している。	8
729	小郡市	261	粥占祭(お粥)	福童	2月15日 3月11日	新米1升で固めの粥を炊き神前に供える。東西南北が示された器に棒が置かれ, 棒が交差する中央を大中臣神社として「東福童・今朝丸・西福童地区」の1年の吉凶を占う。	11, 25
730	小郡市	264	石祭り	大保	4月15日	藁や薪を燃料とした生活から石炭・石油を焚くようになった生活様式の変化に対する信仰として生まれた祭りである。地元の人達の間には, 氏神様の御神体が石であることから, そのたたりを恐れて祭りが始まったとの言い伝えがある。浪曲や仁輪加などが催されたが, 今は祭典だけが行われている。	8
731	小郡市	261	サナボリ(風旗)	大板井	6月下旬	手水舎南側の細い木に立てられる。	3, 28
732	小郡市	261	サナボリ(風旗)	大崎	6月下旬	参道脇の銀杏の木に立てられる。	3, 28
733	小郡市	261	祇園祭	小郡	7月第4日曜日	上町区・東町区・中町区・中央1区・駅前区・新町区・下町区による小郡連合区の合同神事。昼前に神官による修祓の儀, 各区の神社総代による玉串奉奠が行われる。神事を終えた後, お祓いを受けた各区の神輿が, 祇園神社から各区へ出発する。	9
734	小郡市	260	サナボリ(風旗)	上西鰺坂	6月下旬	神殿から見て南西にある木の梢に付けられる。	3, 28
735	小郡市	262	サナボリ(風旗)	下岩田	6月下旬	参道西側の樹木に立てられる。	3, 28
736	小郡市	261	サナボリ(風旗)	寺福童	6月下旬	境内の旗立石に取り付けられた金属ポールに立てられる。夏の例祭で神事を行った後に立てられる。	3, 28
737	小郡市	262	サナボリ(風旗)	二タ	6月下旬	境内の一番高い樹木に立てられる。	3, 28
738	小郡市	262	サナボリ(風旗)	二森	6月下旬	境内の旗立石に取り付けられた金属ポールに立てられる。	3, 28
739	小郡市	260	サナボリ(風旗)	平方	6月下旬	参道北側の樹木に立てられる。	3, 28
740	小郡市	261	サナボリ(風旗)	福童	7月11日	楼門南側の槙の木に立てられる。取り替えは7月に行われる御願立ての日。平成30(2018)年は7月11日の午前中に旗の立て替えが行われた。	3, 28
741	小郡市	262	サナボリ(風旗)	古飯	6月下旬	参道東側の銀杏の木に立てられる。	3, 28
742	小郡市	260	サナボリ(風旗)	光行	6月下旬	神殿西側の樹木に立てられる。	3, 28
743	小郡市	260	サナボリ(風旗)	八坂	6月下旬	神殿西側の銀杏の木に立てられる。	3, 28
744	小郡市	260	獅子舞	上西鰺坂	7月中旬	田植え後のサナボリの行事として, 無病息災・五穀豊穣を祈願し, 集落の青壮年を中心に老若男女, 小学生の児童も含めて参加する。赤黒2頭の獅子が集落を巡回する。	8, 26
745	小郡市	260	獅子舞	下西鰺坂(十楽)	7第1日曜日	老松神社での神事の後に, 雄の赤獅子, その後に雌の黒獅子が後に続き, 太鼓や鉦, 法被を着た子ども達が列を作って地区内の家を巡行する。	26
746	小郡市	260	獅子舞	下西鰺坂(城)	7第1日曜日	老松神社での神事の後, 赤獅子, 黒獅子, 太鼓, 鉦がついて地区内を巡行する。一時途絶えていたが, 城地区の若獅子会が昭和60年代後半に復活させ, 今では若獅子会を中心として行っている。	26
747	小郡市	261	獅子まわし	小郡	7第4日曜日	田植え後のサナボリの行事として, 無病息災・五穀豊穣を祈願し, 集落の青壮年を中心に老若男女, 小学生の児童も含めて参加する。赤黒2頭の獅子が集落を巡回する。	8, 26
748	小郡市	264	夏祈祷	津古	7月初旬	7月初旬, 2日間にわたって行われる。2日目には茅の輪くぐりも行われる。	19

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
749	小郡市	264	茅の輪くぐり	津古	7月初旬	夏祈祷行事の2日目に行われる。前日までに氏子によって作られる茅の輪をくぐり,無病息災を祈る行事。茅の輪前で浄めの水をかけてもらい,一礼して茅の輪をくぐる。神殿までの長い通路を歩き,拝殿正面で二礼二拍手一礼し,神殿に向かって左手に回り,その後本殿の後ろで二礼二拍手一礼し,神殿を一周する。これを3回行う。裸足で行われることと,当日参拝できない家族分の着物を風呂敷に包んで参拝するのが特徴的である。	19
750	小郡市	264	茅の輪くぐり	大保	7月初旬	氏子によって作られる茅の輪をくぐり,無病息災を祈る行事。茅の輪は拝殿を上がったところに設置されるが,新型コロナウイルス感染症拡大時には拝殿前に設置された。女性は右へ3回,男性は左へ3回まわり,二礼二拍手一礼する。参拝者へは茅を数本束ねたものが授与される。	19
751	小郡市	264	ヨド	津古	7月6日	毎年7月6日に行われる。境内には小・中学生がつくった御神燈が灯され,拝殿には大きな提灯,提切(チョウギリ)と呼ばれる組み立て式の櫓門には小さな提灯が下げられる。	8,36
752	小郡市	261	ヨド(夏の例祭)	寺福童	7月末頃の週末	夕方から夜にかけての祭り。16時に神主とともに神事を行った後に小学生(高学年)の男子が相撲を奉納し,女子は灯籠を作って境内各所に配置する。	15,36
753	小郡市	264	ヨド	西島	7月第2日曜日	現在「西島竈門神社よど祭り」として行われている。神社本殿で「さなぼり懇親会」が行われたり,子ども会による「こども神輿区内巡行」や西島ひょっとこ踊り愛好会による「奉納踊り」が催される。	8,36
754	小郡市	261	御願立て	福童	7月11日	作物の成長と無病息災を祈る。東西福童から参加する。	17
755	小郡市	261	川祭り	福童	7月11日	水路で水神を祀る。水の恵みを感謝し,水害がないことを願う。祭りは年に一度,東西福童水利組合と宮司が参加して執り行う。日時は毎年7月11日,大中臣神社の御願立て終了後,「やぐら」は水路の中央に立てられる。材料の竹は西福童区の人が取って来るが,他は両区の人で準備する。祭りでは宮司の祝詞,お祓いに続き,参加者が祭壇に玉串を奉納する。最後に供物の米・塩・酒を水路にまく。	17,27
756	小郡市	263	ヨド	松崎	7月下旬	夏祭り。松崎のヨドは子ども達が中心であり,子ども達が紙灯籠を参道に並べ,神社でお菓子をもらうとのこと。夜には夜店とくじ引き所が出て,賑わいを見せる。	8,36
757	小郡市	263	獅子追い	松崎	7月10日前後の日曜日	田植え後のサナボリの行事として,無病息災・五穀豊穣を祈願し,集落の青壮年を中心に老若男女,小学生の児童も含めて参加する。赤黒2頭の獅子が集落を巡回する。	8,26
758	小郡市	263	夏越祭	松崎	7月15	毎年7月15日に行われる。当日は神官による神事があり,祭壇に米・塩・酒・イリコ・野菜3種・果物3種・ちくわ・天ぷら(丸天)が供えられる。雌雄の鯛が供えられるときもある。神事後,お祓いを受けた札を区境に立てていく。	15
759	小郡市	260	獅子舞	八坂	7月初旬の日曜日	田植え後のサナボリ頃の行事として行われる。無病息災,五穀豊穣を祈願する。神殿での神事の後,赤と黒の獅子と太鼓の打ち手が境内で太鼓や鉦に合わせて舞を奉納し,神殿を3周し町内の各戸を祓い廻る。かつて祭りの担い手は青年周で神社でお籠りもあったが,現在は育成会や区役員協力の下,子ども達が主役となって行っている。	8,26
760	小郡市	264	獅子まわし	大保	8月2日	8月1日夜は社務所に宿泊して,翌2日3時に起床した後,大川(宝満川)で禊を行い,竹筒に神水を汲み,4時半に拝殿でお祓いと御幣を受け,赤青の両獅子を伴い,5時にまず宮司宅へ獅子を追い込む。それ以降は西の方から集落の各家庭を回り,在家の悪魔・穢れを払い,災禍を追い払う。団地では5組と3～4組間の三叉路にて獅子舞による悪魔祓いを行う。	8,26
761	小郡市	261	獅子追い	大崎	8月7日	田植え後のサナボリの行事として,無病息災・五穀豊穣を祈願し,集落の青壮年を中心に老若男女,小学生の児童も含めて参加する。赤黒2頭の獅子が集落を巡回する。	8,26
762	小郡市	261	名月さん	大板井	9月15日	旧暦8月15日の満月の夜,中秋の名月を観賞し,農作物を供えて感謝を表す行事。大板井1区の名月さんは,子ども達が集落の家々を回ってお菓子をもらう行事である。市内各地では同じような形の名月さんが行われており,参加できるのは大体小学6年生までとなっている。	5
763	小郡市	261	名月さん	小板井	9月中旬	旧暦8月15日の満月の夜,中秋の名月を観賞し,農作物を供えて感謝を表す行事。現在は,子ども達が集落の家々を回ってお菓子をもらう行事である。	5
764	小郡市	261	名月さん	福童	9月中旬	旧暦8月15日の満月の夜,中秋の名月を観賞し,農作物を供えて感謝を表す行事。現在は,子ども達が集落の家々を回ってお菓子をもらう行事である。	5
765	小郡市	264	名月さん	西島	9月中旬	旧暦8月15日の満月の夜,中秋の名月を観賞し,農作物を供えて感謝を表す行事。現在は,子ども達が集落の家々を回ってお菓子をもらう行事である。	5
766	小郡市	264	名月さん	津古	9月中旬	旧暦8月15日の満月の夜,中秋の名月を観賞し,農作物を供えて感謝を表す行事。現在は,子ども達が集落の家々を回ってお菓子をもらう行事である。	5
767	小郡市	262	ダブリュウ	二タ	9月23日	水神祭りとして川原に笹竹を立て注連縄を張り供物を供える。川の神に対して川や水の恵みに対する感謝の念と,川に牛馬を入れて汚すことのお詫びをかねて行う行事。水神様が祀られている7か所に笹竹を立て,ナス・芋・鮒・小さく切って括った竹24本などを供物として添える。	17,27
768	小郡市	263	秋の権現さん	干潟	9月15日	毎年9月15日,佐野古区が日方神社(英彦山権現とも呼ぶ)で行う。区の大半を占める福田家の祖先が神社を勧請したからだろうとのこと。当日は氏子が集合し,境内の掃除をした後,祭壇に御神酒を供え,神殿で練り物・おにぎり・菓子などを食べる。	6
769	小郡市	263	放生会	松崎	9月15日	当日の朝に神官を招いて神事を行い,夕方からは夜店が並び祭事が行われる。紙灯籠が神社までの参道に並べられる。野舞台で氏子達がこぞって演芸を披露する。また,くじ引きなどもあり,ふるさとの楽しい憩いの時である。	39
770	小郡市	263	上岩田注連ねり(人形じめ)	上岩田	10月19日	江戸時代から伝わる行事で,収穫したばかりの新藁で上岩田宮座(総代)の人たちを中心に作られる。注連縄奉納後,神官を迎え,五穀豊穣の祈願の神事となる。	4
771	小郡市	263	早馬祭(早馬)	乙隈	10月16日又は17日	家内安全・五穀豊穣の祈りが込められた祭事。座元の家で新しく収穫された稲で早馬を1頭作る。飾り縄を藁の中に入れ,藁を縄で締めながら作っていく。神社での神事の後,早馬を担いで区内を一周する。本来は青年団が行っていたが,戦後は男子が行うようになり,近年は男子が少なくなったことから女子も参加するようになった。飾り縄は各家に持ち帰り,玄関先に掛ける習わしになっている。	4
772	小郡市	263	堂籠り	佐の古	10月31日	10月末に火を焚いて祭神を出雲へ送り,11月末に迎える夜の祭り。焚火の材料は座元が用意する。火のそばにテーブルや椅子を置き,火が焚かれると飲食しながら火の番をする。	15
773	小郡市	263	堂籠り	吹上	10月31日	10月末に火を焚いて祭神を出雲へ送り,11月末に迎える夜の祭り。以前は笹や竹,枝を積んだ櫓作りも世話役の青年会と子ども達が行い,翌朝まで夜通し火を焚き続ける行事だった。平成25(2013)年からは泊まりを止め,21時頃に点火し,23時頃には終了する。櫓も今は大人が作る。	15
774	小郡市	261	堂籠り	大板井	11月30日	神無月の出雲の神集いから戻る祭神を,火を焚いて迎える祭り。毎年11月30日に行われる。出雲へ送る祭りは無い。宮総代や区長など10数名で執り行う。場所は神殿と楼門の間。16時の掃除に始まり,直会をしながら20時半ごろまで焚き続ける。かつては当日の朝にも村内の広場で会食があり,子どもも大人も参加した。神田があった頃に収穫を神社の費用に充てたので,その残りを皆で楽しんだ。	15
775	小郡市	264	堂籠り	三沢	11月30日	出雲から帰る祭神を火を焚いて迎える祭り。毎年11月30日に行う。10月の神送りの祭りは行わない。神殿前の広場に木や竹を組み,日が暮れ始める頃に点火する。氏子は班に分かれており,当番班が準備を担当する。薪は境内の木の枝や竹の他,氏子が持ってくる。かつて薪集めは子どもの仕事で,夜は拝殿に泊まっていた。火焚きも平成22(2010)年ごろまでは夜通し行っていた。	15

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
776	小郡市	264	恵比須座	津古	12月	20軒ほどによって座が構成されており,明治時代頃から今も続いている。1年に2回の座が開かれ,その時に幟を立て鯛と米をお供えする。しかし,平成22(2010)年頃からは1年に1回となり,12月に行われている。おおよそ2反の恵比須座の田圃があり,座元の4軒ずつが交代で米を作る。座の時に鯛を載せる決まった鉢があり,それは座元が持ち回りする。	6,23
777	小郡市	263	恵比須祭り	立石	12月第1日曜日	周辺住民によって回される座。12月3日に行われていたが,勤め人の関係で第1日曜日に行われるようになった。神官を呼んで神事を執り行った後,札を挟んだ細い青竹を次の世話人の背に刺して,世話役の交代を行う。	6,23
778	小郡市	264	川祭り	三沢	12月10日	水神を祀る祭礼で「川祭り」と呼ばれている。毎年12月10日,日吉神社の祭礼の日に住民と神官で行う。水を汚すことを詫びるとともに,水の恵みに感謝し,災害がないことを願う行事。水神を囲む四角に笹竹を立てて注連縄を渡し,笹竹に藁苞や笹竹の束を提げる。女竹で作った棚には供物を供える。祭りの起源は不明だが,大正9(1920)年の資料がある。	17,27
779	小郡市	264	早馬祭(早馬)	横隈	11月第3日曜日	無病息災と五穀豊穣を祈願する行事。隼鷹神社の例祭の行事で,当番の組内全員によって2頭の早馬が作られる。新しい稲束の中に葉のついた竹を中心に籾と大豆を入れ,これを締めて大きな馬の形に作りあげる。	4
780	小郡市	261	七夕祭(七夕さん)	大崎	8月6,7日	6日夜から7日にかけて行われる。市内はもちろん遠方からの参詣者も多く,境内から道路までたくさんの夜店が立ちにぎわう。	20
781	小郡市	261	ヨド	大板井	8月上旬	当日は昼前から神官による神事が行われ,茅の輪くぐりや祭儀が執り行われる。ヨドは昔から続いているものであるが,茅の輪くぐりは平成12(2000)年から始めた。ヨドは大板井1区と小板井1区で行っており,幹事は1年交代であるとのこと。	9,36
782	小郡市	263	ダブリュウ	乙隈		他地域と同じく水の恵みを感謝し,水害がないことを願う行事。地元の方に聞き取りを行ったところ,漢字では「田風流」と書くといい(※他の地域では「馬風流」「駄風流」とも書く),農業的な意味合いが強いとのことである。	17,27
783	小郡市	260	ヨド	平方		夏に子ども達が集い,集落の御堂で一晩過ごす。平成12(2001)年,集落に対象となる子どもがいなかったため中止された。	15,36
784	小郡市	262	ダブリュウ	古飯		牛馬を洗って不浄になったことを水神にお詫びする祭祀。芯の留まっていない笹竹へ,麦藁で作った藁苞にイリコを入れて下げ,イリコ・塩・酒をまいて水神様に断りを言い,門内の世話人の家で会食する。	17,27
785	小郡市	260	川まつり	八坂		水路に「川まつり八坂」の文字が書かれた筒が設置してあり,そこには竹筒と魚,笹飾りされた竹が立ててある。水路の水を落とす前と稲刈り前に,年に2回笹竹を立てるという。近所3軒でやっている。	17,27
786	小郡市	260	ダブリュウ	八坂		水路に「川まつり八坂」の文字が書かれた筒が設置してあり,そこには竹筒と魚,笹飾りされた竹が立ててある。水路の水を落とす前と稲刈り前に,年に2回笹竹を立てるという。近所3軒でやっている。	17,27
787	小郡市	260	ダブリュウ	下西鯵坂(十楽)		4本の笹竹を組み,供物を添えて烏田川に立て,川の恵みに感謝する。	17,27
788	小郡市	260	ダブリュウ	下西鯵坂(京手)	7月第1日曜日	笹竹に,白米のおにぎり入りの藁ツト・ナス・芋・鮒・小さく切った竹2本を供物として添え,京手南の道路沿い水路のブロック塀に立て,川の恵みに感謝する。	17,27
789	小郡市	260	ダブリュウ	下西鯵坂(京手)	10月第1日曜日	笹竹に,藁ツト(中身は空)・ナス・芋・鮒・小さく切った竹2本を供物として添え,京手公民館前の水路横の道路に立て,川の恵みに感謝する。	17,27
790	小郡市	260	ダブリュウ	下西鯵坂(末次)		末次のバス停南の水路に,供物を添えた笹竹を2本立てる。水路の上を両側から笹竹2本を交差させて結び,そこに供物を供え,川の恵みに感謝する。	17,27
791	うきは市	227	鬼火たき	浮羽町	1月7日	前日に裏庭から切出した竹で櫓を組む。中には勢いよく燃えるように杉の葉や稲ワラを,破裂音を出すため青竹を大量に詰め込む。7日早朝,日の出前に櫓に点火し正月飾りなどを焼く。火や灰は,かまどや火鉢に入れ,その火で鏡餅を焼いて食べる。	1
792	うきは市	229,230	本佛寺大黒天祭	浮羽町流川,吉井町屋部	1月8日	各家庭の大黒天を持ち寄って,すす払い法要が行われる。	18
793	うきは市	226	粥占い	浮羽町田篭	1月15日 3月30日	1月15日,宮司あるいは氏子総代が3合3勺粥を炊き,それを陶製の皿に盛り,筑前・筑後・豊前,前後の4区に区分してお粥箱入れ,社殿に収めておく。その後,3月30日にお粥開きを行い,カビの生え方や色の付き方などによってその年の吉凶を占う。	25
794	うきは市	229	大生寺大般若祈祷	浮羽町	1月1～3日	元旦から3日まで盛大に行われる。	18
795	うきは市	229	鳩替	浮羽町隈上	3月29日	昔は金の鳩を青年たちが奪い合っていた,現在は参加者が掛け声とともに数字の書いた札の交換を繰り返し,宮総代が告げる当たり番号の持ち主に真鍮製の鳩が授与される。その後,松明を持った鬼が社殿を3回周って打ち上げとなる。	22
796	うきは市	231	粥占い	吉井町千年	3月1日 4月3日		25
797	うきは市	227	粥開き	浮羽町山北	3月社日	同時に鴨替が行われる。	25
798	うきは市	231	長野水神社の五霊社	吉井町福久	4月8日	江戸時代,寛文3年の大干ばつを機に,山下助左衛門をはじめ5人の庄屋が筑後川が流れる大石地区に堰を造り,掘割を掘って水を引く開削工事を久留米藩に申し出たが,筑後川を利用した用水路開削工事は難事業であるため,藩からの許可はなかなか下らなかった。5人の庄屋は失敗したら処刑になる覚悟で請願書を提出し,この難工事に着手して寛文4(1664)年3月完成に至った。この偉業をたたえて5人の庄屋を祀ったのが長野水神社(五霊社)で,4月8日の春の大祭には,小学生による「浦安の舞」が奉納される。	6
799	うきは市	227	浮羽おくんち行列	浮羽町山北　賀茂神社	4月11日	正平16(1361)年征西将軍懐良親王が九州を兵乱や戦禍から守るため,竹林因三位中将を奉勅使に送り賀茂神社に幣物を奉って,山城国の賀茂祭の格式によって祭祀を行い,天下泰平を祈った。この祭りは代々受け継がれて,今日の「おくんち」として伝わっている。毎年4月11日,五穀豊穣と無病息災を願う伝統行事「浮羽おくんち」が行われる。山北地区の賀茂神社本殿で神事の後,浦安の舞が奉納される。隈上正八幡宮との間を往復する行列には,振毛槍や「子ども楽」,稚児などが並び,時代絵巻を思わせる華やかな行列となっている。	9
800	うきは市	229	鎌替	浮羽町	4月17日		22
801	うきは市	227	ヨド	浮羽町	7月11日		36
802	うきは市	231	獅子廻し	吉井町千年(小江)	7月28日	神社で獅子舞を奉納した後,町内の各家や施設を廻り,そこでも舞を奉納する。各戸を廻り終え神社に帰還後,神社の周りを三周し獅子を奉納する。現在使われている獅子頭は200年以上前のもので,10kg以上あり,胴体はシュロの葉で作られている。	26
803	うきは市	228	ヨド	浮羽町	7月29日		36
804	うきは市	229	えびす祭	浮羽町千足	7月		23
805	うきは市	230,231	吉井祇園	吉井町若宮	7月22,　23日	神幸祭の折に,素盞嗚神社(祇園神社)境内と白壁交流広場,高橋神社に飾り山笠が設置され,吉井祇園囃子が演じられる。御神幸行列は,祇園神社から約1km西の高橋神社までの間で実施され,獅子祓いも行われる。	2,15,26,29,32
806	うきは市	228	万年願相撲	浮羽町	8月25日		10
807	うきは市	226	川祭り	浮羽町姫治本村	9月1日	3本の竹を結わえて川の中に立て,それに鯖又は鰯や茄子を入れた藁苞と神酒を詰めた竹筒数本を掛け,水難滅除を祈願する。茄子を入れるのは河童の好物だからと言われる。	27

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
808	うきは市	233	袋田不動尊	吉井町福益	9月28日		3
809	うきは市	226	川祭り	浮羽町中村	9月	姫治本村と同じような内容で行われる。	27
810	うきは市	226	川祭り	浮羽町日森園	9月彼岸	姫治本村と同じような内容で行われる。日森園では,春の彼岸に水引河童が山から降りてきて秋の彼岸に山に帰ると伝えられており,秋の彼岸の日に行われる。	27
811	うきは市	231	若宮おくんち(毛槍)	吉井町若宮	10月17, 18日	若宮八幡宮の秋祭り。白壁の町並みを毛槍衆が練り歩き,稚児による神幸行列が行われる。また,夜には芸能祭が開かれる。	9
812	うきは市	226	山ん神様	浮羽町中村	12月3日		17
813	うきは市	226	山ん神様	浮羽町栗木野	12月3日		17
814	うきは市	227	三春天満宮火鑽神事	浮羽町三春	12月7日	三春天満宮では,毎年12月7日の例大祭礼式の当日当番区では総出でその準備,一切の世話を行うが,その中にこの古式豊かな火鑽の神事がある。火鑽杵(桧の丸太棒)を火鑽臼に立て,火鑽杵を2人がかりで上から押さえ,その杵にかけた綱の両端を各2～3人で交互に引合い,その木の摩擦によって火を起こす方法である。こうして得られた火を斎火といい,神に供える食べ物の煮炊きのほか,各神前の燈火などの火種として用いられる。	6
815	うきは市	226	山ん神様	浮羽町日森園	12月8日	山神祭では古い祭りの様式が多く残っており,日森園の山神祭では鰯を注連縄に7かけ半つるし,シトギを供えるなどの行事が行われている。	17
816	うきは市	226	山ん神様	浮羽町小塩	12月10日		17
817	うきは市	227	山ん神様	浮羽町大野原	12月13日		17
818	うきは市	229	大生寺虚空蔵祭	浮羽町	2月,9月	旧13日に開運祈願の祭りが行われる。	17
819	朝倉市	102	バタバタ市	甘木八日町	1月4,5日	バタバタ市は元々,門前町の初市であったが,寺が豆太鼓の「ばたばた」を売り出したことから「ばたばた市」の名が付いた。この太鼓を買うと天然痘のあばた顔にならぬと言ったり,子どもの虫よけになると言ったりしているが,安長寺地蔵尊の疱瘡除けの神幸に起因している。	12
820	朝倉市	91	粥だめし	山田	2月15日 3月最初の卯の日	粥を納めた3個の容器を神前に奉納し,3月初卯の日に粥開きの神事を行う。カビによる判定は新神課によって行う。祭事に使われる容器は高杯型の青銅製で,正面に「恵蘇宮」と書かれている。	11,25
821	朝倉市	87	杷木の泥打	穂坂	3月第4日曜日	純白の神衣に着替えた代宮司は,境内に設けられた「神の座」につく。傍らには,神田から運ばれた土で泥がこねられてあり,氏子の中で小学5・6年生の男子12名が代宮司が泥土の中に座ると同時に,一斉に代宮司の体に泥土を塗りつける。大盃で酒を飲み,酔いの回った代宮司は,泥土とともに立上って,雌雄の獅子に先導され,約500m離れた地区外れの道祖神までの御神幸する。この間3～4m毎に用意してある泥土をとって,12名の子ども達が,よろめく代宮司めがけて投げつけ,家も人も道路も泥だらけになる。代宮司の体に泥が多くつくほど,その年は豊作であるといわれている。	17
822	朝倉市	87	杷木神社鎮祭	池田	3,12月	1年中氏子の安全と豊作を守る祭神に,年2回休んで貰うために開催される祭りで,春と秋(3月と12月)の2度行われる。鎮祭期間中は一切の歌舞音曲や大声等が禁じられ,汚物を扱うことも厳禁とされる。鎮祭が終わると魔払いの行事である「サメ矢」が行われる。	24
823	朝倉市	89	久喜宮祇園山笠	久喜宮	7月17日に近い日曜日	祇園様とも言う。元禄8(1695)年に初めて山笠が作られ,毎年地元の方々により輪番で祀られている。祭りの形態としては,先頭に獅子,次に神輿,最後に山笠となっており,大変珍しいものとなっている。一対の獅子は家々を廻る。	2,26,29
824	朝倉市	102	甘木祇園山笠	甘木	7月1～15日	約300年の伝統を持つ須賀神社の祇園祭。現在の山笠神事は,7月1日のお汐井どりに始まり,13日には子ども樽神輿が町中を練り歩き,15日には「追い山」が行われる。	2,29
825	朝倉市	87	須賀神社祇園祭	志波	7月15日	16日に子ども神輿,夜神事が行われ,17日に山笠祭典が行われ,上町地区では16日の夜に大般若が行われる。	2,29
826	朝倉市	102	流灌頂	甘木	8月下旬	施餓鬼供養,流灌頂大法要,千灯明,花火大会が行われる。	19,32,37
827	朝倉市	87	蜷城くんち	林田	10月21日	毎年10月21日の美奈宜神社(林田)の神幸祭が行われ獅子舞が奉納される。祭りに奉納される獅子舞の特徴は,筑前地方に多い伎楽系統の獅子舞とは違って,舞楽を伴わず,芸能的な要素が少ない。子ども達の頭をかむと病気を除き,獅子が猛に暴れれば豊作になるというような信仰に,祓いの獅子の姿がよく伝えられている。神幸祭は秋月種時(秋月氏14代)が永正6(1509)年に社殿を再興した際に神輿や旗を奉納して以来,無病息災と五穀豊穣祈願の祭りとして受け継がれてきた。	26,32
828	朝倉市	94	美奈宜神社御神幸行列	三奈木	10月22日	祭り「三奈木くんち」の中で奉納されている御神幸。御神幸行列の中の羽熊の振込みは参勤交代を模したものなので,参勤交代が定められた寛永12(1635)年以降のことと推測できる。祭りに使用されていた面に文政9(1826)年の記述があるので,その頃にはこの行列も成立していたと考えられている。	32
829	朝倉市	91	恵蘇八幡宮神幸祭	山田	10月第3日曜日	恵蘇八幡宮の秋祭りで,農作物の豊作を祝う。神幸行列は神輿のほかに2組の獅子舞と毛槍が加わる。いずれも昔からの形式を守り続けたため,2通りの形が現存している。形状や舞は,静と動,勇と雅の対照的な振りとなっている。「山田区の荒獅子」は荒々しく早い動きで,雌雄の獅子が互いに噛み合って充足した後,愛情を表す様を描いている。「本きば」と「半きば」の2つの舞があり,後者は前者を半分にしたもの。家々の前では「半きば」を舞う。「恵蘇宿区の獅子舞」は,笛,太鼓による獅子楽に合わせて舞うもので,雌雄の獅子の恋愛の様を細やかに表現している。「もわかれ」と「のり」の2つの舞があり,2部構成になっている。	26,32
830	朝倉市	86	おしろい祭り	大山	12月2日	第4章,第3節,36「おしろい祭」参照。	6
831	筑前町	105	四三嶋の虚空蔵さままつり	四三嶋	1月13日	筑前町の四三嶋地区に,百数十年来,区民を上げて祭祀している「虚空蔵菩薩」があり,この菩薩は秋月藩中山家(四三嶋)が同藩の興膳善人より譲り受けたもので,もともとは,中国の帝室から取り寄せたものと言われている。毎年1月13日と9月13日に城山の麓で開催される「虚空蔵菩薩まつり」は家内安全,交通安全,商売繁盛で知られ,拝殿前の5円玉を借りて,願い事が叶えば次の祭りで倍にして返すという伝統がある。	37
832	筑前町	104	大黒様まつりと物産展	弥永	2月11日	商工会,関係団体による特産品,食品等の販売を行う。名物の大国饅頭,綿菓子,飴湯など美味しい食べ物が並び,福袋の販売や特産品が当たる餅まきなどが催される。「大国様神輿レース」が行われ,手作りの神輿(60kg)を5名1組で担ぎ,参道を駆け抜ける。	17
833	筑前町	105	孝子弥四郎祭	夜須町	4月23日	校内の弥四郎像に花を捧げ,「弥四郎の里」で思いを伝えたり,合唱団による弥四郎さんの歌を聴いたりする。	39
834	筑前町	105	四三嶋獅子廻し	四三嶋	6月最終日曜日	若衆が法被姿で,雌雄の獅子頭と御幣を持って集落の家々を廻り,獅子頭を鳴らしながら玄関より上がり込み,座敷を通り抜けて,縁側より飛び降りる。玄関に出迎えた家人は,若衆に用意していた桶の水を浴びせかける。	26
835	筑前町	104	大己貴神社秋季大祭	弥永	10月23日	大己貴神社の秋季大祭「おくんち」は,700年ほどの歴史を持ち,江戸時代には現在の形になったと言われ,昔からの伝統を受け継ぐ神輿行列には,地域の若手による勇壮な「毛槍行列」,地域の中学生女子が舞う「浦安の舞」が花を添える。秋の収穫に感謝し,地域の安心安全な生活を願う。	7
836	筑前町	105	ホウゲンギョウ	二	1月7日		1
837	筑前町	105	おくんち	中牟田	10月17日		7

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
838	筑前町	104	おくんち	栗田	10月15日		7
839	東峰村	85	岩屋祭	岩屋	5月3，4日	何でも願いが叶うと伝えられる「宝珠石」を御神体とする「岩屋神社」の春の大祭。村人が威勢よく駆け巡る「あばれ神輿」や厳かな「大護摩供養」などが行われる。	39
840	東峰村	85	薦替え	宝珠山	10月19日	大化4(648)年閏9月19日に，村人に「星の玉・を茅薦(かやこも)で包んでまつれ」との神のお告げがあり，それ以来，閏年の旧暦9月19日(現在は10月19日)に，本殿内の宝珠石の薦を数枚残して取り替える薦替えの儀が行われている。	6
841	東峰村	85	福井神社宮座行事	福井	10月最終日曜日	現在は資金がないこと等によって祭りは簡略化された。祭元での杯事等は，最寄りの公民館で簡略化されて行われている(杯事がトウ渡しのことなら神社で，直会なら公民館の可能性)。前年のおほしを開いての占いは行われていない。また，神社でのトウ渡しの後に行われた，新祭元の家の裏山でのわら御輿の1年間の保存も行われていない。	6
842	東峰村	84,85	お獅子回し	宝珠山～小石原鼓	6～7月	6月から7月にかけて一つの獅子頭を各地区に回して実施。赤鬼，青鬼がつゆ払いした後にお獅子がついていく。地区の端まで来ると，獅子頭についている御幣を燃やす。	
843	大牟田市	195	水かぶり	三池上町	1月15日	明治元(1868)年の三池地方の大火事以来，火災除け祈願として行われている三池本町祇園宮の神事。力自慢の若者達が，最重量70kgもある木臼の中に水を入れ，その水をかぶりながら臼を放り投げるという，全国的に見ても珍しい行事。	18
844	大牟田市	195	三池初市	三池	3月1，2日	三池往還は，現在の福岡県柳川市と熊本県玉名市を結んだ脇往還で，大牟田市大字三池一帯は江戸時代の宿場町であった。その宿場町の物々交換から始まったといわれており，約300年以上の歴史を持ち，九州でも最大規模となる200以上の露店が立ち並ぶ。昔からの名物として植木や刃物の競り市が行われるほか，小学生や中学生のブラスバンド，ひょっとこ踊り，太鼓衆響のステージなど様々な催し物が行われる。また「初市風にあたると1年間は風邪をひかない」との言い伝えもある。	39
845	大牟田市	197	うそ替大祭	宮原町	3月24，25日	菅原道真公を祀っている駅馬天満宮の春と秋の例祭。菅原道真公大宰府配流の際，「うそ」という鳥が道真公を慰めたという言い伝えに由来している。コウゾの木を削り着色した「木うそ」を買い求めると抽選でさまざまな商品が当たる。また木うそには番号が記されており，当選番号となった木うそは，その年に幸運が訪れるといわれる金色の「木鶯」が渡される。	22
846	大牟田市	190	二十日えびす	新栄町	4月20日前後	現在では，新栄町アベニューパーキングを会場に，飲食・雑貨・植木苗などの露店が立ち並び，ステージイベントの他，マグロの解体ショーなどが行われている。	17,23
847	大牟田市	195	三池祇園社祭礼行事	大牟田市内各地(代表：三池)	7月第4土，日曜日	第4章，第1節，特論1「祇園山笠」参照。	2,29,31,32
848	柳川市	189	ワラの大人形	有明町下八丁	2月1日	第4章，第3節，11「藁の大人形」参照。	4,15
849	柳川市	183	柳川流し雛祭	隅町	4月3日	春の訪れとともに柳川の町が，雛壇の両脇に飾られる「さげもん」によって華やかに彩られる。女の子が生まれるとその子の幸せと健やかな成長を願い，初節句のお祝いに親戚や祖母たちが一針，一針縫い上げていく。この暖かい風習と華やかな「さげもん」を多くの人びとに楽しんで貰うために始めたのが「柳川雛祭りさげもんめぐり」である。2月11日～4月3日の間に，市内の各地で様々な催しが行われる。	20
850	柳川市	184	沖端水天宮祭り	沖端地区	5月3～5日	沖端水天宮では，5月3日から5日までの3日間，夏場に多くなる水難事故を防ぐための祭りが行われてる。この祭りのときに木製のひょうたんの形をした水難事故防止のお守りが販売される。水と子どもの守護水難除けのほかにも水の恵，農業海の恵，漁業，水商売子授かり・安産の御利益があるとされている。祭りでは，掘割に舟舞台を浮かべ，芝居や別名「オランダ囃子」ともいわれる水天宮囃子が奉納される。	17
851	柳川市	179	鷹尾神社沖祭	鷹ノ尾	7月	沖祭りは，毎年旧暦6月13日に行われ，祭り当日，神主と地元の人たちが矢部川を下って有明海に船を出し，干潟に竹や葦で祭壇を築き，お供え物をして海上の安全と豊漁・豊作を祈願します。またこの日は，祭座と名付けられた輪番の氏子の家に，氏子たちが集まって終日飲食して大いに祝ったそうです。	17
852	柳川市	179	大蛇山(中島祇園祭り)	大和町中島	8月第4土曜日	第4章，第1節，特論1「祇園山笠」参照。	2,29,31
853	柳川市	182	起田の盆綱	三橋町起田	8月第1日曜日		19,30
854	柳川市	182	木元ぼんでん縄	三橋町木元	8月第1日曜日		19,30
855	柳川市	179	鷹尾神社秋季大祭	鷹ノ尾	10月20日	風流(破牟耶舞)を奉納現在の風流奉納については，不明。	32
856	柳川市	182	御神幸行列	三橋町高畑	10月10日		32
857	柳川市	182	どろつくどん(おにぎえ)	三橋町高畑	10月第2土曜日前後	第4章，第1節，特論1「祇園山笠」参照。	2,29,32
858	柳川市	174	日子山神社の風流	古賀	1，5，9月	秋祭りに氏子の青年や児童により風流が奉納される。神社を始め地区内の民家の庭先等で，鉦と鼓に合わせ着飾った2名の舞手が大太鼓叩きつつ舞います。	32
859	柳川市	184	水天宮祭り	沖端	3～5月	夏場に多くなる水難事故防止を祈願する。祭りの際に木製のひょうたんの形をした水難事故防止のお守りが販売される。子ども達は，泳ぐ時にこのお守りを首から提げていた。水と子どもの守護水難除けのほかにも水の恵，農業海の恵，漁業水商売子授かり・安産の御利益があるとされている。	17
860	八女市	203	放生会	本町	9月彼岸	八女福島の燈籠人形が八女市本町の福島八幡宮境内で，放生会の奉納行事として秋分の日頃の3日間に公演される。	39
861	八女市	203	土橋八幡宮神幸行事	本町	10月17，19日	江戸時代前から続くこの行事は，毎年10月17日に本町の土橋八幡宮で神事があり，その後御神霊が神輿に乗って稲富のお旅所まで御幸する。稲富の当番組がおこもりし，八幡様はここに2泊して稲富氏子のお願いを聞く。そして19日，土橋の八幡宮に還幸する。	32
862	八女市	202	川祭	宅間田	4月下旬	水神竹を水中に立てる。	27
863	八女市	202	岩崎の子ども川まつり	岩崎	7月上旬	水難厄除を祈願して行われる。飾り付けた水神竹を子ども達が奉納場所に運ぶ。	27
864	八女市	204,209,234	山ン神祭	仁合，遠久谷，矢部，星野 等	1月16日	正月16日は山の神様の日とされ，この日は山の神様が来て木の数を数えているから山へ行ったり，木を伐採したりしては行けないという。正月のほか，5月・9月の16日も山の神の日と言う。	17
865	八女市	208	五條家御旗祭	黒木町大渕	9月23日	国重要文化財五条家文書の中には，後醍醐天皇最終の綸旨や武家文書など南朝方の動向を物語る史料群369通17巻がある。「八幡大菩薩旗」1幅は，困難な復原事業完了後の昭和51(1976)年に重要文化財に附指定された。「金烏の御旗(きんうのみはた)」と称され，後醍醐天皇が，皇子・懐良親王を征西将軍に任命した時，その「しるし」として，節刀とともに授けられたものと伝えられる。毎年，秋分の日の「御旗祭」で一般公開(雨天時は写真版)を行っている。	39
866	八女市	209	矢数の張的	矢部	3月3日		24
867	八女市	210	黒木祇園祭	黒木町	7月20～22日	今から約300年前の江戸時代中期頃に始まったと言われている。昭和25(1950)年頃に青壮年代の人達が，神幸祭の神輿の代用品として酒樽を神輿に見立てて神輿祭りを始め，今日に至っている。昭和40(1965)年からは本神輿を担いでいる。	39

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
868	八女市	213	柳島の潮井とり(裸ん行)	柳島	1月3日	男達が裸で,町内を流れる矢部川に身を浸して清め,1年間の厄除けと健康を祈願する。現在も小・中学生と青年たちにより継承されている。	16
869	八女市	213	柳島の十七夜(あめがたまつり)	柳島	1月17日	八女市柳島の観音堂前で毎年1月17日に行われ,「あめがたまつり」とも呼ばれている。昔,黒木城主の正室が観音像を抱いて矢部川に身を投げた。その観音像が柳島に流れ着き,飴形売りが藁束を焚いて観音像を温め,飴形を供えたことからこの祭りが始まった。竹や藁で作られた「ほっけんぎょう」に火が灯されると,人びとは1年の無病息災を祈る。	1
870	八女市	213	童男山ふすべ	山内	1月20日	戦前は子どもの行事であったが,戦時中に行事で焚く篝火の煙が敵の目標になりやすいとの理由で軍から中止命令が出た。戦後,同地区の木附光雄らの努力で復活し,川崎小学校児童会の行事として引き継がれた。古墳の周辺を清掃した後,石室の内と外で枯れ木や枯葉をふすべて徐福の霊を慰め,徐福とふすべの由来を物語にした紙芝居を上演する。	1
871	八女市	213	川祭	山内	4月下旬	水神竹を水中に立てる。	27
872	八女市	213	山内水天宮大祭	山内	5月5日	山内水天宮前に露店が並び,近辺の道路沿いや星野川が下に流れる山内橋の欄干に,のぼり旗や行灯が立てられる。山内青空子ども会船太鼓等が行われ,最後に花火が打ち上げられる。小規模の花火大会だが,こどもの日に行われるという珍しい花火大会。	39
873	八女市	214	八女上陽祇園祭	北川内	7月15日	地域の幼児達や,小中学生を中心に,大小合計9基のお神輿が,上陽公民館前からスタートし,町の大通りを巡行する。	39
874	八女市	214	万灯流し	上陽町	8月16日	毎年8月16日,寄口橋と大瀬橋の間のおおよそ300メートルの区間で星野川に灯篭を流す,夏の恒例行事。川を大切にしたいという思いと,ふるさと発見の願いが込められている。沢山の灯篭が,淡い光を放ちながらゆらゆらと水面をすべる。石橋の風景と相まり,幻想的な空間が作り上げられる。	39
875	八女市	215	川祭	忠見	4月下旬	集落の大人達が夏の祈祷として,かんばつ除け,集落安全などを祈願して水路に水神竹を立てる。竹に吊るされる飾り物は,麦藁による酒樽,藁苞,杯,蛸,樫の木で作る鰹節,青竹で作った潮井筒と種類も豊富である。	27
876	八女市	216	祈祷院八朔祭	祈祷院	9月1日	八女市祈祷院で行われる八朔祭はかつて福島八幡宮の方生会,水田天満宮の千灯明とともに八女の三大祭りとしてにぎわった伝統のあるお祭りで,稲作の豊穣を祈念し,防風虫害の厄除けを祈願して行われる。矢部川の河原に多くの露店が立ち並び,家族連れなどで盛況になる。1日目には八朔祭典と子ども神輿,2日目は打ち上げ花火が盛大に打ち上げられる。川面を照らす大輪の美しい花火を見物しようと毎年多くの観客で賑わう。	39
877	八女市	223	恵比須祭	山下	1月15日		23
878	八女市	223	山下祇園祭	山下	7月10日		39
879	八女市	224	山ン神祭	持山	1月16日		17
880	八女市	234	こっぱげ面	星野村長尾,三坂,室山	7月11,14,15日	祇園神社の真新しい御幣をつけた赤獅子・青獅子と,赤鬼・青鬼が夕方になると各戸を廻る。獅子は口を大きく鳴らし,鬼は青竹を振りかざし家の人を叩く。鬼から取った御幣は,悪霊除けの御守りとして各戸の門口に掛けられる。	26,36
881	八女市	214	虚空蔵菩薩祭	上陽町轟地区	9月13日	明治8(1875)年に人家の大半が焼失したとされる轟地区での大火をきっかけに地域の守り神として祀られており,毎年1月13日と9月13日には「虚空蔵菩薩祭」が開催される。この菩薩様は,神仏習合の名残から狛犬も設置されている珍しい神社となっている。また,福銭という,1月の大祭で福銭を納めて御利益を授けて貰い,同年9月の大祭の際に授けて貰った金額の倍の金額を虚空蔵菩薩神社にお返しするという,この菩薩様でしか見られない独特な風習がある。	39
882	八女市	234	室山熊野神社御神幸	星野村室山	11月11日	室山熊野神社は,嘉禄2(1226)年に星野八郎胤実により建立された。縁記によると,初めは宮蔵の仮社(元宮)に祀られたものの,翌年に現在の地へ移され,その時から室山熊野神社と元宮の間で御神幸が始まったとされる。昭和20(1945)年以降は中断していたものの,昭和54(1977)年には,ふるさと運動の一環として,青年団を中心に復活した。現在は,11月の「星のまつり」の際に御神幸を行っている。神幸は宣命(せんみょう)の指示で,太鼓・鉦はテンポを変え,それに合わせて,行列のスピードが変わる。	32
883	八女市	各地域	ニワ祭		3月社日	社日祭の前後に行われる。ニワとは,家の前の広場だけでなく,家屋の中の土間も指す。外ではネップクを広げて穀類を干し,中では農機具の収納場や作業場として機能する。秋の穫り入れの時にニワにこぼれたモミを念入りに掃き集めてとっておき,春先のニワ祭りにこれでおはぎを作ってニワの神に供える。農家ではダゴ祭りやダゴ節句と呼ばれる。	17
884	筑後市	220	熊野神社鬼の修正会	熊野	1月第1土曜日	新年の無病息災を祈願して行われる鬼払いの行事。最後の大松明神事では,直径1.5m・長さ15mの大松明3本に火が付けられると激しく燃え盛り,これを裸の男衆が「刈又」と呼ばれる長い棒で支え,社殿を周回する。	1
885	筑後市	220	左義長	熊野	1月14日	熊野神社の北側空き地にて行われる。神事の後,子ども会代表9人により17時30頃に点火される。火は瞬く間に燃え上がり,厄を焼き払うように,炎が勢いよく左義長を包み込む。その後,参加者に,恒例のお神酒や紅白のお饅頭が振る舞われ,みんなで今年1年の無病息災を祈念する。	1
886	筑後市	220	久富の盆綱曳き	久富	8月14日	地区の小学生達が全身にススを塗り,腰にはワラミノ,頭には角に見立てた縄を巻いて地獄の釜番である鬼に扮し,直径約30cm,長さ約20mの大綱を引いて地区内を練り歩く伝統行事。久富熊野神社を出発して,最後にはまた同神社に戻ってくる。	30
887	筑後市	200	千燈明	水田	8月25日	千灯明の行事は夕方の「裸ん行」「汐井かき」と日没後の「提灯行列」「千灯明」「花火打揚げ」の一連の行事の下に運営されている。楼門や鳥居型の櫓の所々に粘土をつけ,その上に帆立貝の殻を置いて灯油を注ぎ,点火して夜空に楼閣の姿を美しく浮かび上がらせる。	37
888	筑後市	199	きせる祭り	溝口町	12月13日	戦国時代,溝口城主一族が合戦に敗れ,落ちのびる途中で竹筒をキセルの代用にしたという故事にならうもの。溝口地区の住民が座元に集まり,神事を行った後,青竹で作ったキセルで煙草を一斉に吸う。	6
889	筑後市	199	千燈明	溝口竈門神社	9月第3月曜の前の土曜日	溝口城を模したといわれる城型の燈明を組む。	19
890	大川市	171	左義長祭(玉換祭)	酒見宮内	1月14日	参拝者の持って来た正月の縁起物が積まれ,その上に5色の幟が取り付けられた左義長を宮司がお祓いの後斎火により点火する。この神事の後,御殿にて玉換祭が行われる。神社世話役,総代達によりボール投げが始まり,それを受け取った人びとにはお年玉替りの品が手渡される。	1,22
891	大川市	171	風浪宮大祭	酒見宮内	2月9～11日	風浪宮大祭は,筑後地方の三大祭りのひとつに数えられ,地元では「おふろうさん」と呼ばれ親しまれている。この祭りは,邪気退散の願いを込めて昔と変わらぬ伝統衣姿で走る「裸ん行」や,お神輿3基とともに市内を約4kmにわたり巡幸する「お潮井詣り」など多くの神事が3日間に渡り行われる大祭。また,お謡いや太鼓,大川市無形伝統文化財にもなっている「流鏑馬」など各種行事が奉納される。	10,32
892	大川市	171	若津少将祭	向島若津上町	4月第3土曜日	若津港を開き,若津町発展の基礎を固めた久留米藩主,有馬少将頼僅を祀る若津神社の祭りで,その前夜祭として雲助道中が行われる。	39
893	大川市	172	上新田水天宮子ども船太鼓	上新田	5月3, 4日	海中に没せられた祭神,安徳天皇の霊を慰めるため,源平両軍の武将達が船端を叩いたことが始まりと言われる。祭りの日には6時に1番太鼓を鳴らし,午前8時の3番太鼓を合図に祭りが始まる。その時,船太鼓を奉仕する子ども全員が神前でお祓いを受け,そこで船太鼓を奉納する。向町では船神輿を引き,船太鼓を打ち鳴らしながら町内を練り歩く。上新田では町内を練ったあと,飾り立てた漁船に分乗し,太鼓を鳴らして筑後川をパレードする。	2

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
894	大川市	171	沖詣り海神祭	酒見宮内	5月1日	矛を象った高さ2m余りの大御幣2本を風浪宮本殿から運び出し,舟の舳先に立てる。神職2人を乗せた舟は,神社前の花宗川河口付近から約200m遡り,神功皇后を祭った皇后社に「沖詣りに行って参ります」と参拝する。舟はその後,筑後川河口の若津港に向かう。到着後,御座船に大御幣を移し,宮総代や漁協関係者を乗せた随伴の4隻とともに,約50人で沖合を目指して出港する。	16
895	大川市	171	日吉神社の船曳祭	榎津庄分町	5月第2土曜日	「坂本さん」とも呼ばれる。神功皇后がこの地に船を着けられたという伝説に因み,船引きの行事を行う。花や提灯で飾った船神輿を,町内の人達が三味線,笛,太鼓の囃子につれて,掛け声勇ましく町内を引いて回っていた。現在は船御輿が壊れる恐れがあるため,曳かずに展示のみとなっている。	2
896	大川市	171	城町八坂神社獅子舞	榎津城町	6月7日	獅子舞は慶長3(1598)年,立花宗茂公が朝鮮出兵から帰国して以来,400年以上伝承してきたといわれており,神幸祭の発祥も同時期ではないかと推定されている。獅子舞がどこから伝来したかについての詳細は不明。神幸祭自体は毎年行われてきたが,かつてあった獅子舞の演芸が人手不足のため行われなくなり,代替として大正後期から子ども相撲が奉納されるようになった。獅子については現在,獅子頭を掲げて氏子の家を巡幸するのみとなっている。	26
897	大川市	173	田口町祇園祭獅子舞	三丸	7月第2土曜日	「梅津文書」によると「獅子舞は仁平2(1152)年,大善寺玉垂宮に所属する人びとによって熊野神社に奉納されていた」とある。また「御船文書」には,貞和3(1347)年に田口から高良社に獅子舞が奉納されていたと記されており,この間に田口村が獅子舞を修復したと推定される。昔を知る人がなく,活動の歴史は不明である。1回の獅子を舞う時間が約2分と短い事が特徴である。	26
898	大川市	173	西田口祇園祭獅子舞	三丸	7月第2日曜日	祭りの翌日,青年達が赤と黒の獅子の中に入り,町中の家々を一軒一軒お祓いして回る。昔は西田口,中小路,東田口,大西の四地区を回っていた。現在は公民館活動として行われている。	26
899	みやま市	192	粥占御試祭	高田町江浦	1月15日 2月15日	神事名を粥占御試祭と言い,粥に発生する「カビ」でその年の気象や農漁業の状況を予測するもので,古くから江浦八幡神社に伝わる伝統神事である。前年の秋に収穫された御初穂(稲)は,12か月を意味して1升2合を元旦に神前に奉納された後,1月15日に粥として炊き,方位を印した銅鍋に入れ,神殿内に1か月安置される。1か月後の祭当日(2月15日)に神事・お祓いの後,これを取り出し蓋が開けられる。粥に発生した「カビ」の色彩・形状・場所等は毎年異なるので,経験豊かな占い役も時間をかけ慎重に判定する。藩政時代には,柳河藩へ報告されており,藩ではこの報告を元にその年の政策を決めていたと言われる。	11,25
900	みやま市	192	臼かぶり	高田町江浦町	1月第2日曜日	災害除けと豊作を祈願し,1月の寒空の下,朝から身を清め,さらしに草履履き姿の男衆が木臼をかぶり豪快に投げ飛ばす行事。	39
901	みやま市	185	八坂神社の祭礼「風流」(小田祇園)	瀬高町小田	7月第3土曜日	安永4(1775)年6月,上妻郡山下町の八坂神社の分霊が小田村唐尾の地に勧請された。7月13日,祭礼が行われ,小田村内の小田・平田・唐尾・中島4か所による風流(高提灯,太鼓,鉦,フリュウ,各戸よりの提灯の行列)が奉納され,今日に至っている。総人数は200～300名。行列風流は,神輿・詞掌・邦楽の後に小田・平田・唐尾・中島の順で鉦・太鼓・高張傘・鉾などの行列が続き,村内を巡行する。その後,八坂神社前で鉦・太鼓が奏され,神輿が鎮座される。現在は神輿ではなく,その替わりにフリュウと呼ばれる山笠様のものが唐尾だけから奉納される。	2
902	みやま市	188	大人形・大提灯	瀬高町上庄	7月21,24,25日	上庄八坂神社では毎年7月21日に「提灯ぞろえ」という献灯の神事,24・25日には「大人形」の神事がある。大提灯は人物,風景等が描かれ,材料に,魚鱗・魚皮・虫の羽・貝殻・木皮等が使われている。大提灯の由来は,安元2(1176)年,上庄に祇園宮が勧請された際に,白武三郎兵衛という貧しい武士が,雨の降る闇の夜に粗末な提灯と破れた傘をさして御神霊を迎えたという話がある。心から神を崇敬する彼の行為に感激して,後世彼が使用した提灯や傘にちなんで作成し奉納したのがこの大提灯の始まりといわれている。「大人形」は向かって右が八幡太郎義家・左は安倍宗任もしくは貞任を毎年交互に立て中央に祇園宮の被壇を設けている。これは夢の中で徳川家康と立花宗茂とを仲介した祇園神の功徳を表したものとされる。大人形の股をくぐれば,無病息災のご利益があるという。	4
903	みやま市	192	江浦町祇園祭	高田町江浦町	7月第3土曜日	250年の歴史がある伝統の祭りで,四つの山車(二ノ丸・吉原,古町,新町田中の踊り山車)が太鼓と鐘を鳴らして練り歩き,子どもの無病息災を願う大蛇の「かませ」をする様子もある。	2,31
904	みやま市	192	渡瀬祇園祭	高田町下楠田渡瀬	7月	独特のリズムで太鼓や鐘を打ち鳴らし,大蛇山が火を吹きながら地区内を練り歩く。また,子ども達の無病息災を願う親子連れなどが「大蛇咬ませ」を行う姿が見られ,大名行列の名残として、今なお観客を魅了する「雲助道中」では,雲助のコミカルな動きや独特な言い回しがある。	2,31
905	みやま市	185	清水観音縁日	瀬高町本吉	8月9～11日	清水寺夜観音,朝観音とも呼ばれる。古来からこの日に参詣すれば,46,000日お参りしたのと同様の功徳が受けられるといわれ,迷いの心を護摩の浄火に清めて,その功徳を授かるという千手観音大護摩祈祷が終夜行われる。	37
906	みやま市	188	八朔祭	瀬高町下庄	9月1日	稲の豊作を祈願する祭り。「茅の輪」が作られる。	39
907	みやま市	186	竹飯八幡宮放生会奉納花火	高田町竹飯	10月第2日曜日	柳河藩主立花宗茂公が朝鮮の役凱旋後,竹飯八幡宮に祈願成就のお礼に煙火を奉納したのが始まりといわれる。仕掛け花火の稲すり,お城,万穂などは有名で,九州有数の花火生産地ならではのみごとなものである。	31
908	みやま市	188	どんきゃんきゃん	瀬高町文廣	11月3日	第4章,第3節,32「どんきゃんきゃん」参照。	32
909	みやま市	192	大注連縄送り	高田町上楠田	12月25日	上楠田天満宮の祭典に約400年前から奉納されている行事である。以前は,祭典の2日前からかなりの大きさの注連縄を作り上げていたが,現在は,前日に藤カズラを芯にして,直径45cm,長さ6mの大きさに作り上げている。祭典当日は,早朝から身を清めた法被姿の青年達を8人が,大注連縄をかついで座元を出発する。大注連縄は,鐘や太鼓の祭囃子とともに地区内の家々を練り歩き,五穀豊穣,無病息災,家内繁盛を祈願し上楠田天満神社に奉納される。	4
910	大木町	164	川まつり	各地区	4～5月	川祭りの目的は各地域でほぼ相違なく,五穀豊穣と水難防止とされ,笹竹に藁で加工した藁苞や瓢箪,竹筒を飾ることが主流となっている。飾りや行事の進め方は地域によって様々である。	17,27
911	大木町	169	夏越し祭	侍島他	6月30日前後		8
912	大木町	169	上牟田口の獅子舞	上牟田口	7月第2日曜日	明治中期より神社の行事として,悪霊祓い無病息災を祈願して地区中の家々を回ってきた。朝6時,獅子達は花宗川で禊を行う。2頭の獅子は氏子の家の部屋中を走り回って邪気を祓い,お祓いが済むと住人の頭を咬んで次の家へと向かう。	26
913	大木町	176	小入の大橋籠	小入	10月15日	龍(蛇)が住んでいたと伝わる「蛇堀」と呼ばれる堀の岸に水神棚を立て供物を供え,道端に御座を敷いてお祭りをする。この祭りの由来は,大蛇の祟りを恐れての人身御供や,雨乞い祈願という説がある。	17,27
914	広川町	218	清楽茶屋素盞嗚神社獅子舞	日吉	7月15日に近い日曜日	旧暦の6月1日に注連縄が奉納されて,15日に祭礼,16日に獅子舞が奉納される。それが済むと悪疫退散と無病息災を祈って獅子が家々を回る。村算用が行われて祭礼が終わる。	8,26
915	広川町	218	増永祇園神社丁切	川上	7月末	祇園社の夏越の祭りで「町切」とも書く。屋根付きの楼門のようなもので,提灯を吊るすことが出来るようになっており,一本の釘も使うことなく組み立てられている。祭礼分担を示す町区切が語源ではないかと言われている。	4,36

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
916	広川町	219	熊野神社子ども風流	広川	12月16日	別名「ドイドイカンカン」と呼ばれる。その名前の由来は,鉦や太鼓を鳴らして道行きする音が「ドイドイカンカン」と聞こえることによるという。智徳地区は8つの座組から成り,毎年持ち回りで1つの座組が座元として熊野神社の祭祀を務めている。毎年12月16日,その年の座元から来年の座元へ引継ぎを行う「頭渡し」の神事の折,奉納される風流である。地元では「子ども風流」と呼ばれ,太鼓を打つ舞い手はすべて子どもであるのが特徴である。	6,32
917	飯塚市	75	夏越大祓	宮町	6月30日	普段の生活で知らず知らずに触れた罪汚れを人形に託してはらい清め,茅の輪をくぐることにより流行り病などをよける神事。15時から30分おきに計6回実施する。	
918	飯塚市	72	オクンチ	高倉	10月(神主都合)	祭典の後,すべての家で獅子舞を行う。	39
919	飯塚市	83	オクンチ	君ヶ畑	10月1日	各家では餅をつき柿の葉ずしを作り客をもてなした。	39
920	飯塚市	72	綱分八幡宮神幸行事	綱分	10月13日に近い土,日曜日	神楽・獅子舞・子どもの太鼓打ち・神幸行列・流鏑馬・子ども相撲。	32
921	飯塚市	79	秋の大祭	椿	10月第2土,日曜日	獅子舞が奉納される。この獅子舞は大分八幡宮の流れを組むもので,雄と雌の獅子がお見合いをし,恋仲になり,乱舞する激しい舞で,地域の伝統を今に継承している。	
922	田川市	287	風治八幡宮川渡り神幸祭	伊田	5月第3土,日曜日	第4章,第1節,特論1「祇園山笠」参照。	2,29,32
923	田川市	287	五郎瀬神事・水神祭	下伊田	5月	前神幸祭として行われ,水神祭と同日,先に行う。春は大雨・災害,神幸祭の無事,五穀豊穣を,秋は1年の実りに感謝して行われる。水稲の耕作を前にしての水口祓いの意味を色濃く漂わす。	16,27
924	田川市	287	五郎瀬神事・川祭	下伊田	10月第1土,日曜日	前神幸祭として行われ,水神祭と同日,先に行う。春は大雨・災害,神幸祭の無事,五穀豊穣を,秋は1年の実りに感謝して行われる。水稲の耕作を前にしての水口祓いの意味を色濃く漂わす。	16,27
925	田川市	287	七瀬祭	下伊田	6月最終頃	水が豊富にあって稲がよく生育することを祈る祭りと言われる。七つの瀬を治め,治水のために行われる。水口祓い。現在は,水利組合が行い,貯水槽・溜池等の水口でも行われている。	16,27
926	田川市	287	夏越祭・茅の輪くぐり神事	伊田	7月最終土曜日 夕刻	「水無月祓」として古来より続く,夏の悪疫疾病から身を守る清めの神事。茅の輪をくぐることで半年間の罪穢れを祓い落とし,また人形に祈りを込めることで無病息災を祈念する。猫迫地区からの獅子舞の奉納が行われる。	15
927	田川市	287	えびす大祭	伊田	12月3日	恵美須社にて行う商売繁盛祈願祭。御座券の販売,伊田商店街による福引・露店がある。	17,23
928	田川市	287	白鳥神社神幸祭	白鳥町	5月第3土,日曜日	獅子頭はあるが,獅子舞は行わない。	2,29,32
929	田川市	287	白鳥神社夏越祭	白鳥町	7月最終日曜日	茅の輪をくぐり,無病息災を祈念する。	15
930	田川市	287	岩亀八幡神社神幸祭	伊加利	5月第2土,日曜日	獅子頭はあるが,獅子舞は行わない。	2,29,32
931	田川市	287	百手祭り	伊加利	2月日曜日	神家座(昔は十数軒,現在7・8軒)から順番に座元を決め,座元の家の庭に手作りの的(手書きで鬼の絵を描いた)が置かれ,手製の弓矢を一人2本討つ。当たった場所によって,1年の吉凶を占う。大正3年宮座の儀式を廃止して,神前では神供を供えて御神酒をいただくだけと簡略化している。	15,24
932	田川市	288	白鳥神社神幸祭	猪国	5月1, 2日	神幸祭では,正徳3(1713)年に始まったとされる獅子舞が奉納され,動きの激しい曲獅子と穏やかに舞う馬場入りが行われる。夜になると提灯山笠が町内を練り歩く。平成30(2018)年から稚児舞消滅。	2,29,32
933	田川市	288	位登八幡神社神幸祭	位登	4月最終土,日曜日	田川地域における祓い獅子系統のルーツと考えられている位登の獅子舞(市指定)が奉納される。この獅子舞は演技的要素を持つ伎楽系統の獅子舞とは異なり斎庭を祓う「祓い獅子舞」である。「五段の獅子」系と言われる。	2,26,29,32
934	田川市	288	大祖神社神幸祭	金国	5月3日	相撲の奉納有。以前の麦初穂の祭りを受け継いだもの。「神幸」の呼び名は近隣一帯が5月に神幸祭を行っているのに合わせたもの。神社に麦の初穂を供えて祭典を行う。神輿の行列はない。	2,29,32
935	田川市	288	宮日祭り(おくんち)	金国	11月日曜日	陰暦9月9日を「宮日祭り」と呼び,宮座の行事を営む。	6
936	田川市	290	須佐神社神幸祭	下弓削田	5月第2土,日曜日	獅子舞が奉納され,前半は六調子,後半は五段になる。大人舞のみ。祓い獅子系統。	2,29,32
937	田川市	290	春日神社神幸祭	宮尾町	5月第4土,日曜日	岩戸神楽(国重要無形民俗文化財(豊前神楽の一つとして))が奉納される。お発ちの神事(舞,姫舞(令和元(2019)年に6年ぶりに復活))	2,29,32
938	田川市	290	春日神社夏越祭	宮尾町	7月最終土曜日	茅の輪をくぐり,無病息災を祈念する。岩戸神楽(国重要無形民俗文化財(豊前神楽の一つとして))が奉納される。	
939	田川市	290	春日神社神待祭	宮尾町	10月最終土曜日	岩戸神楽(国重要無形民俗文化財(豊前神楽の一つとして))を奉納する。	2,29,32
940	田川市	290	生目神社神幸祭	弓削田	5月第2土,日曜日		2,29,32
941	田川市	290	貴布禰神社神幸祭	見立	5月8,9日	8日の午後,大宮司賄いによるお潮井取が行われ,御立ちの獅子舞が奉納される。同日に神社の境内に水神棚が立てられ,その前で五願成就相撲が行われる。翌9日には獅子が村中の家々を祓い廻っていたが現在はお発ち,お汐井,お着き時に奉納する。相撲場の清祓い,子ども相撲が行われる。	2,10,26,27,29,32
942	田川市	290	若咲神社神幸祭	川宮	5月第2土,日曜日	獅子舞が奉納される。	2,29,32
943	田川市	295	須佐神社の神幸祭	岩屋	5月連休明けの土,日曜日	古楽を以前は行っていたが,子どもが減り現在は行っていない。獅子舞(仗楽系統)は,曲と舞で一対4人で,楽打がともに舞う。平成17(2005)年以降楽打消滅。	2,29,32
944	田川市	295	若八幡神社神幸祭	夏吉	4月第4土,日曜日	獅子舞や楽打ち等の芸能はない。稲穂を模した色鮮やかな馬簾が揺れる幟山笠3基が神輿に続く。	2,29,32
945	田川市	295	日吉神社神幸祭	糒	5月4, 5日	獅子舞や楽打ち等の芸能はない。	2,29,32
946	嘉麻市	66	愛宕神社祭礼	千手	4月13,14日	春祭りは4月の13・14日の2日間。13日は午後から山上で祭礼があり,14時頃から,御神輿下りとなり,本町から横町へお下りになる。神輿はその夜御旅所に留まり,町は防火守護のお汐井まきの行事で賑わう。14日は本町・横町それぞれに祭りの座が設けられ,その後御神輿が神社に御環幸になる。	2
947	嘉麻市	66	苗代ごもり	芥田	5月		8
948	嘉麻市	70	祇園祭	大隈	7月14,15	祇園さんと呼ばれ,旧暦の6月14・15日に行われる。6月の朔日,町の境界でお祓いし,注連縄を張る「道切り」の行事から始まる。これを「しめ卸し」と呼んでいる。	2
949	嘉麻市	70	祇園祭	牛隈	7月15前後の日曜日		2
950	嘉麻市	69	祇園祭	大橋	7月10～22日		2

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
951	嘉麻市	69	上山田祇園祭	上山田	7月第3土曜日～月曜日	3日間にわたり執り行われる。祭りの3日目に「宮移り」という特殊な獅子舞が奉納される。神殿を出て行った獅子達は神殿に戻らなければならないので,雌獅子は神殿へ戻ろうとするが,地域になじんだ雄獅子はなかなか戻らず,それを雌獅子がなだめたり励ましたりしながら連れて帰ろうとする特殊な舞。130段もの階段を2時間かけて舞いながら帰って行く。	2
952	嘉麻市	71	稲築祇園山笠(いなつき山笠)	岩崎	7月15日頃	元は稲築町内の須賀神社(岩崎,口春,山野,鴨生)で行われていた。岩崎では昭和36(1961)年頃まで,東岩崎はなかよし,松山はこばと,西岩崎ではしらゆきの名で子ども神輿が賑わっていた。これを子ども達に受け継ごうと若手有志が発起し,平成10(1998)年に子ども,翌11年に大人の本格的な山笠を作り,祇園祭を復活させた。これに,平成13(2001)年には山田川東側が加わり,東流れ,西流れの山笠が立ち「稲築祇園山笠(いなつき山笠)」になった。	2,29
953	嘉麻市	65	下臼井西盆綱	下臼井西	8月15日	今から150年ほど前に始まったと言われている。山で採ってきたフジカヅラを芯に束ね,それにワラをねじ込んで直径30cm,長さ20mにも及ぶ大綱を作る。かつては,家内安全,無病息災などを祈り,盆の16日に綱引きが行われていたが,現在は8月15日に行われるようになった。綱引きの勝負よりも,綱を引っ張り合って切ることに意味があると考えられてる。	19,30
954	嘉麻市	66	おんばらい	芥田	8月29日		8
955	嘉麻市	66	千灯明	大力	8月	天満宮の夏祭りとして行われる。参道に千灯明が揺れ,夜店が賑わう。この日,親戚の者が多く里帰りしてくるので。家々では御馳走を揃えて待つ。	8,37
956	嘉麻市		田ほめ		8月		8
957	嘉麻市	65	西郷の水神様祭	西郷	9月1日	鳥居のところに水神棚を立て供物を供える。神官がきてホカイアゲをし,その後相撲が行われる。相撲が終わると小餅を作って俵に詰める。この俵は2つ作り,1つは水神様に供えた。	27
958	嘉麻市	66	十一日祭	芥田	9月11日		8
959	嘉麻市	66	芥田の水神祭	芥田	9月13日	五穀豊穣,災害・疫病退散を祈願して「かりがね納」という狂言が奉納される。元は川端にあった水神社に水神棚を設け神事を行う。その後,愛嶽神社にて三番叟や「かりがね納」が奉納される。	27
960	嘉麻市	71	山野の楽	山野	秋分の日	氏子安全,五穀豊穣を願う水神様の祭り。祭りの当日,楽方は白門にある茶屋ノ元橋のところで,お潮井採りを行う。帰りには柳の枝を折り,川の水を浸して,馬場の向かい側にある水神棚にお参りをする。この水神棚は現在備え付けのものとなっている。	16,27
961	嘉麻市	71	水神祭	山野	9月		27
962	嘉麻市	71	水神祭	漆生	秋分の日		27
963	嘉麻市	66	おこもり	芥田	10月		8
964	嘉麻市	66	霜月祭	芥田	11月初午		17
965	嘉麻市	70	献鮭祭	大隈	12月13日	鮭神社は古くに建立された由緒ある神社で,鮭を神の使いとして祀っている,全国でも珍しい神社である。その鮭神社で,毎年12月13日に氏子流域住民・水産関係者が五穀豊穣や無病息災を祈るとともに,その年の遠賀川流域を遡上してきた鮭を奉納する「献鮭祭」が催される。	5
966	桂川町	82	とへとへ	土師	1月14日	来訪神が,家々を回る信仰に基づくもので,夜に行われる。神に扮した里人が家々を巡り,その折に水を掛けられる。	18
967	桂川町	82	もぐら打ち	土師	1月14日	正月14日の早朝に行われる。竹の先に藁を巻きつけた棒で,地面を叩き,土の中に棲むもぐらや害虫を追い払う。	18
968	桂川町	82	春季大祭	土師	4月第4日曜	大祭は神幸と川祭りとに分かれ,上土師と下土師が一年交代で座元を引き受け,川祭りの地区が獅子舞を受け持っている。祭りの前日に当番地区の座元で神輿迎えと獅子迎えがある。大祭当日は早朝に川祭りがあり,泉河内川のほとりに水神棚が立てられ,両座元での御座の後,獅子を舞わし,御神幸のお上りとなる。春祭りでは獅子舞の後に神楽が奉納される。	27,32
969	桂川町	82	七瀬祭り	九郎丸		期日は一定ではない。場所は7か所が定められており,その内1か所に水神棚を立てる。川のほとりのこの祭壇で神官が祝詞をあげ,当元六人が水神棚をの御神酒を各自飲む。他の6か所には竹を1本ずつ立て,藁椀を下げ葉のついた柿を入れる。竹を持って回る人をササカタゲと言う。	16,27
970	桂川町	82	植え上がりごもり・七瀬祭り	土居	6月下旬	田植えの無事終わったことを感謝しその労をねぎらう意味を込めて植え上がりごもりをする。同日に七瀬祭を行う。土居・西土居を通じて七か所に祭壇を設ける。土居の七瀬祭りでは七か所すべてに水神棚を立てる。	16,27
971	桂川町	82	カワントノ相撲(山神社祭礼)	九郎丸	7月14頃の日曜日	昔,松の大木があり,その木の根元にあった石を山の神として祭り,この神に参ると伝染病に掛からないと言われた。山の神の祭りに相撲をとりこの相撲をカワントノ相撲という。	10
972	桂川町	82	かりおとし	内山田	7月25日	天神社の社殿から参道に御神燈をあげる。地元の人は夜お参りをする。他の地域の祇園祭りにあたる。	39
973	桂川町	82	地蔵祭り	土居	8月24日		39
974	桂川町	82	秋季大祭	土師	9月22,23日に近い土,日曜日	大祭は神幸と川祭りとに分かれ,上土師と下土師が1年交代で座元を引き受け,川祭りの地区が獅子舞を受け持っている。祭りの前日に当番地区の座元で神輿迎えと獅子迎えがある。大祭当日は早朝に川祭りがあり,泉河内川のほとりに水神棚が立てられ,両座元での御座のあと,獅子を舞わし,御神幸のお上りとなる。	27,32
975	桂川町	82	お通夜	九郎丸	11月31日		39
976	香春町	279	庚申祭	香春			8
977	香春町	279	神幸祭	香春	5月3,4日	香春神社の神幸祭は江戸中期の宝暦6(1756)年,朝廷より「御幸神事興行」を命ぜられて始まったとされる。当時は旧暦の3月15,16日の日程だったが,現在は5月3,4日に行われる。約200年続いた神幸祭も,明治の初めには郷社となり,香春神社と改称。戦中戦後は人や物資不足で,伝統の祭事の灯は一時途絶えた。復活は昭和60年代前半。「暮らしを見守る御神体をあがめたい」という氏子らが神輿を担ぎ出して神社周辺を回ったことからだった。現在は,神輿3基を担いだ男衆達が,新緑の木々を貫く参道を下る。住民たちに出迎えられながら,田植え間近の地域を巡る。絵巻に記された壮麗さは薄れた。往時に行われていた獅子舞など神幸祭を彩る奉納行事はなく,行列は今や20数人ほど。	32
978	香春町	281	神幸祭	採銅所	4月最終土,日曜日	御神を賜る杉の葉神輿を担ぐ男衆は白装束に身を包み,大幣(おおぬさ)の下に頭を垂れ祭の安全と無病息災を祈願し,採銅所地区の中を担ぎ歩く。古宮八幡神社の神幸祭は日本国内でも珍しい杉の葉で拵えたお神輿で巡行する。	32
979	香春町	281	代参講	採銅所			8
980	香春町	281	お地蔵様の祭り	採銅所	8月24日	24日は地蔵盆で,上採銅所では鈴麦のお地蔵様の祭りがあり,青年会と処女会が盆踊りをし,昭和の中期頃まではニワカや浄瑠璃,花火大会などが行われていた。	19
981	香春町	280	神幸祭	勾金			32
982	香春町	280	春季大祭	勾金	2月11日	毎年2月11日の春季大祭において,町内外の火災消除・五穀豊穣を願い,愛宕権現との関わりから,修験道の最高厳儀と言われる「柴燈大護摩供」を厳修し,併せて信者各位の所願成就の修法を行っている。	37
983	香春町	280	神幸祭	鏡山	5月3日	13時から式典が行われ,大人も子どもも参加して鉦を鳴らしながら神輿を曳き,鏡山地区を巡る。使われる神輿の非常に美しい金箔の飾り,小鳥や鳳凰の装飾は見所。	32
984	香春町	280	宮日祭	勾金	9月14,15日	鶴岡八幡神社では9月の14,15日に宮日祭りをしていた。15日に仮殿に御輿行列し,その後流鏑馬を行って即日還御していた。流鏑馬は各大字(高野・中津原・柿下)が交代で引き受ける。流鏑馬の馬は各大字より3頭計9頭が宮司の御籤で選ばれる。当日朝,馬を庭先に出して「馬盥」に井戸水を入れて,馬の頭から体全体をタオルで拭く。流鏑馬では一騎が計9回弓を射るが,この内3本は絶対に当たらなければならないとされていた。当たった的は矢が付いたまま神前の前の扉の外に立て掛け,お礼の祝詞を奏し,3日間くらい納めていた。	10

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
985	香春町	280	千日参り(数珠繰り)	鏡山	8月10日		8
986	香春町	279	初午祭り	香春		餅を用意する餅座と,酒を用意する酒座があったが,昭和4(1929)年に改正され従来の座は廃止された。それにより,餅つきは餅座の家ではなく神職宅で行うようになり,村の家での座祭は行われなくなり神社での宮座だけになった。	5,17
987	香春町	279	貴船神社の祭り	香春			
988	香春町	279	二十五日祭	香春(五徳)		旧7月25日に神社でお籠りをし,奉納相撲を行っていた。	10
989	香春町	279	稲荷祭り	香春(畑ヶ田)			8
990	香春町	279	山王祭	香春			17
991	香春町	279	天福祭	香春(新町区)			
992	香春町	279	祇園祭	香春(上)	5月4, 5日		2
993	香春町	281	お申様	採銅所	10月		
994	香春町	280	丑祭り(大根祭り)	鏡山		かつて,旧暦の11月丑の日頃に行われていたので丑祭りと称されている。神社に鎮まっている神を村の家に迎えてお祭りをする。鏡山は各区に分かれているので,御神は各区順番に回って来る。御神が来る区は大世話前と言い,集落の男が3人羽織袴に正装し,夜に提灯を点けて神社に神を迎えに行く。御神が来られない時の祭りはかげまつりという。神事と直会が終わり,御神が次の座元に行く時,大根を薄く輪切りにしたものを投げて送り出すので,俗に大根祭りともいう。	17,35
995	香春町	279	神宮院護摩焚		3月第1日曜日	3月第1日曜日に,不動明王採燈護摩供がある。	1,37
996	香春町	280	水神祭	上高野		貴船様の下の川原で水神祭をする。川縁に水神棚を立て供物を供え,祭りが終わると川に流してカワントンに食べさせた。	16,27
997	香春町	281	龍王様の祭				16
998	香春町	281	阿曽隈社の祭				
999	香春町	279	恵比須祭	香春		恵比須社は元は横町の札の辻に祀られていたが,明治になって須佐神社に合祀された。祭りは三番座まであり,5時から始まり,7時に終わる。式が終わってお神酒が配られ,その後くじ引きがある。商工会の建物で実施。	23
1000	添田町	285	柱松神事	英彦山	1月1日	奉幣殿前の境内中央に柱が建てられ,1年の豊作と泰平を祈念する行事として行われている。大晦日17時に神職と総代により奉幣殿で大祓式を行う。その後,23時頃から一般参詣者による除夜祭を行っている。神仏習合の名残で,奉幣殿横の鐘楼に掛けられた梵鐘を撞く。寺院の梵鐘のように撞棒は無く,木槌で撞く。参詣者は木槌を順次渡して撞いて行く。	1
1001	添田町	285	御潮井採り	英彦山	2月末日	松会に先立って山中を清めるための海水を汲む行事。英彦山の場合は内陸にも関わらず,片道36㎞離れた行橋市沓尾浜まで1泊2日の行程で向かう。今日では2月末日に,徒歩と車を使い移動する。夜に浜に着き,海水を汲み終わると宿に戻る。一行は次の日の朝に出発し,今井西公民館などを経由しながら神宮に戻り,神宮に到着後,神事が行われて全行程が終了する。3月2日に,汲んで来た汐井を用いて山中祓いが行われる。	33
1002	添田町	285	祈念御田祭	英彦山	3月15日	御田祭は日程が固定されており,現在3月15日に行われている。当日は参詣者が集まり10時半から祭典が開始され,祭典が終了すると奉幣殿前の祭場で御田祭が行われる。演目は,鍬入れ・畔切り・田打ち・畔塗り・馬杷・机・種蒔き・田植え・飯載女の流れで行われる。御田祭終了後,参詣者は田植えの演目で地面に並べられた石菖を拾ったり,紙の小袋に入れられた種籾を貰ったりする。	17,33
1003	添田町	285	御神幸祭	英彦山	4月第2土,日曜日	英彦山神宮の神幸祭は,田川地区内でもここでしか見られない珍しい形式の祭りが行われる。笛も太鼓の音もない巨大な獅子頭の獅子舞,大きな振りのない厳かな稚児舞,まさかりを使った舞が奉納される。神輿発ちの前には神主さんとお坊さんと山伏が一斉に祝詞とお経をあげるという,独特な形式となっている。	32
1004	添田町	285	除蝗風鎮祭	英彦山	7月11日		16
1005	添田町	285	花見の響	英彦山	4月	特に日付は決まっていないが,旧暦の3月に英彦山で谷の祭りとして行われる。祭典の後盛大な饗宴がある。これは鎮花祭の一つで,花が咲く頃は疫病が流行りやすく,下谷では弁天様,西谷では毘沙門天に谷中の人が集まって参り,花が散るときに飛散して人を悩ます疫霊を鎮め,無病息災・家内安全を願う。祭りは当番で祭主を務め,次の当番の家を「ツウ」と呼ぶ。	33
1006	添田町	285	例大祭・講社大祭	英彦山	9月28日	毎年9月28日に英彦山神宮で行われる例大祭。講社大祭は本来10月7日に行われていたが,昭和30年代に例大祭と合わせて行われるようになった。大祭の後の直会では,英彦山神宮の縁起物が当たる,お鷹くじと言うクジ引きが行われる。最高賞の特等には「金鷹」と呼ばれる金色の小さな鷹像が用意されている。	33
1007	添田町	285	神幸祭	英彦山	9月第2土,日曜日		32
1008	添田町	285	牛くじ神事	英彦山	9月第2土,日曜日	高住神社の神幸祭は,江戸時代から豊前坊秋の大祭として知られる。秋に行う神幸祭はこの祭りだけで,氏子のみならず牛馬蕃息を願う遠近の村人が寄り合い,相撲や牛馬加幣(牛くじ)などで大いに盛り上がったと云われる。現在,9月の第2土・日曜日の2日間に改められ,本物の仔牛が贈呈されていた牛くじ景品の特賞は,牛の置物へと代替されている。また,牛くじは一般に販売されるものとは別に,氏子である英彦山地区の家々に講員として配られる札が駕輿丁札とともに配られ,英彦山の秋の風物詩となっている。	39
1009	添田町	283	神幸祭	上津野	5月3, 4日	高木神社では神幸祭の時に津野神楽が行われる。津野神楽は豊前一帯に分布している岩戸神楽の系譜であるとされ,豊前神楽の一つとして国の無形民俗文化財に指定されている。津野神楽は神輿が出立する時に,万念願を祈念して奉納される。そして,神輿が出た後は夜神楽として奉納される。色鮮やかな衣装に飾りをつけて舞う姿は華やかでありながら,厳かな舞となっている。	32
1010	添田町	283	卯の相撲	上津野	9月	2番卯の日は卯の祭りで,上津野では各家は御馳走をこしらえて飲食し,戦時中まで高木神社での祭典の後に相撲が行われた。これを卯の相撲と呼んだ。この行事は,昔病が流行った時に行われた万念願なので,現在は子ども相撲になって続いている。この相撲は中元寺の瀬成や猪膝の相撲とともに,田川の三大相撲として知られている。	10
1011	添田町	283	宮日祭	上津野	10月13, 14日	上津野の高木神社で行われている宮日祭は古祭と中祭に分かれている。かつては新祭というのもあり3つに分かれていた。古祭は最も古いもので,参加者は旧神課と言われる。旧神課は24軒で2軒ずつ祭元になっており,干支が割り振られている。元々自分の家に割り当てられた干支の年が祭元の当番であったが,近年では家が少なくなり一致していない。中祭は古祭と同様に正月の注連飾り等の準備と宮日祭の一切を行う。	6
1012	添田町	283	合併祭	上津野			8
1013	添田町	283	卯の祭	中津野(奥山地区)		収穫を感謝する祭礼とされている。個人宅にて例年持ち回りで行われる。会場の座敷の一角には「高木神社」と書かれた掛軸が掛けられ,榊の木を2本飾り,その間に注連縄を渡して祭壇が設けられる。祭礼には神職が呼ばれ,祝詞奏上や玉串奉奠などの神事が行われる。	6

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1014	添田町	283	神幸祭	下津野	5月4，5日	上津野では明治時代の中頃まで，下津野では昭和40(1965)年のダム建設以前までは，神幸祭に山笠が立っていた。ただ，過疎化やダム完成による人口減少もあり，今はもうない。添田町の資料などによると，津野神楽は大正時代に創始。昭和20(1945)年には旧犀川町に伝わる伊良原神楽を習得した人が，津野の住民に舞や踊り，歌を広めた。ダム完成で一時途絶えたが，郷土の芸能を残そうと地区の青年会が奮起，昭和46(1971)年に保存会を発足した。現在は，女性4人を含む25人が，豊前一帯に分布する岩戸神楽の系譜を引く舞を伝える。神幸祭では，闇夜の中で色鮮やかな衣装をまとい，4時間半をかけて17演目の神楽を奉納する。	32
1015	添田町	283	宮日祭(餅食い祭)	下津野	11月20～30日のどこか	通称「餅祭り」や「餅食い祭り」と呼ばれる。高木神社の掛軸の前に設えた祭壇で祭式を行う。祭式が終わると祭壇に供えられた木地椀に盛られた高盛飯が参加者全員に振る舞われ，それを食すとお神酒として1椀に2個の餅が入った雑煮が配られ，後は神官も含めてひたすらに餅を食べ続ける。その後，当渡しの盃事が終わると再び酒と餅入り雑煮の接待が続く。明治36(1903)年以降の台帳を伝えており，その記述によれば，餅だけではなく「大酒祭り」の側面もあったようである。	6
1016	添田町	283	合併祭	下津野			8
1017	添田町	285	宮座(卯の祭)	下落合	12月第2日曜日	神事が開始されて間もなくの献饌の際には，神家が和紙を口に挟み，三宝に乗せられた供物を神家から神家に手渡しながら神職の元へつなぎ，神前に供える。この時，供物の中には丑の舌餅が含まれる。神事が終わると神前とは反対側に小さい祭壇が設けられ参列者は体を反対に向け拝礼する。	6
1018	添田町	285	オニビ	落合		落合ではオオニビと呼び14日の夕方，各組が川端で行う。	1
1019	添田町	285	宮座(酉祭)	上落合	12月第1日曜日	宮柱の指示の下，神家の人びととそこから役を回す当場，そして世襲の膳奉行が進める祭り。宮座で神家のみが集まる「株座」である。「酉祭覚書」には祭りの細かな取り決めが記されているが，現在は神家が気楽に永久に祭りが出来るようにと簡略化し，現代に合う形へと変化させ祭りを続けている。	6
1020	添田町	285	庚申祭(コウシンサン)	上落合(共栄地区)	2月		8
1021	添田町	285	神幸祭	上落合	5月3，4日	江戸時代に伝わったとされる上落合地区の獅子舞。楽打ちの太鼓や笛の音に合わせ，雌雄の獅子が舞う。また，背中に赤と黄，緑，白の4色の御幣を着けた園児と児童が2列に並び，笛と鐘の音に合わせて順番に太鼓を打つ楽打ちを披露する。	32
1022	添田町	285	伊勢講(お伊勢さん)	上落合	7月第1日曜日		8
1023	添田町	285	十日観音	上落合	8月10日		19
1024	添田町	284	神幸祭	野田	5月第2土，日曜日	加茂神社の神幸祭は落合地区と野田地区で行われる「野田神幸祭」の1つとなっており，1日目に加茂神社，2日目に野田神社での開催となる。期間中は野田獅子楽を万年願として奉納し，悪疫退散を祈願する。野田獅子楽は江戸時代に日向の国より伝来したといわれる伝統的な芸能。また，楽打ちと呼ばれる子ども達が土俵を回りながら太鼓を叩く催し物も行われ，活気溢れる祭りとなっている。	32
1025	添田町	284	神幸祭	上中元寺	〃		32
1026	添田町	284	霜月神課	中元寺	12月		6
1027	添田町	284	神幸祭	下中元寺	5月第2土，日曜日	瀬成神社では毎年第2土曜日から日曜日にかけての2日間「下中元寺神幸祭」が開催される。期間中はお神輿を担ぎ地区内を回り，境内では奉納相撲が行われる。開催地である瀬成神社では豊宇気姫神の伝説があり，この神のために建てられたのが瀬成神社といわれている。また，河童伝説もあり洪水を知らせ感謝されたものの調子に乗り叱られ詫び証文を書くことになったなど面白い伝説も残っている。	32
1028	添田町	284	瀬成相撲	下中元寺	5月	下中元寺神幸祭の際に奉納される。	10
1029	添田町	284	宮座	添田本町			6
1030	添田町	284	地蔵盆	添田本町	8月24日		19
1031	添田町	284	権現祭	添田本町	10月中旬	権現祭は現在，10月中旬の日曜に行われており，町一・町二・町三・町四で回り当番で行われ，当番となった座元は白山宮宮柱に出立を促す。以前は「3回呼びに来るまで出立しない」と言われ，現御当主も若い頃早く出向くのを母親からとがめられたという。ようやく，宮柱が神社へ出向き，「オト帳」が神殿に掛けられると，神主の祝詞奏上が始まる。参列者への修祓いの後，宮柱から玉串拝礼が始まる。祭典が終わると直会座が始まり，当番渡しが行われる。権現祭りの後，後日組内では内座と呼ばれる権現祭の講が持たれ，今でも広く信仰されていることがわかる。このように今でも厳しい規律で祭りが行われ，添田本町地区の秋の風情として権現祭が行われている。	6
1032	添田町	284	神幸祭	添田本町	5月	添田本町地区の神幸祭の由来については，添田町編『岩石城』によると，古来，5月中旬に上添田にある須佐神社の祇園祭として行われていたもので，文久元(1861)年の記録が西本町(町二区)で保存されている。かつて祇園祭りは，上添田組と町組が共同して祭礼を行い，白山宮から神輿が出て，御旅所に移り，翌日須佐神社に登り，白山宮に還御するものであった。これについて，『郷土史誌そえだ第3号』によると，時代とともに白山権現社から須佐神社等を勧請し，年々祭りが大きくなり，また村人達を動員した祇園祭となり，近郷近在では稀にみる一大行事となったとされる。	32
1033	糸田町	291	田植祭	金村	3月15日	田植祭は毎年3月15日に，上糸田・中糸田・下糸田地区全体の祭りとして金村神社で行われている。毎年春の農業の出発として，その年の豊作を祈る春祭りである。祭りは祭典が15時頃から行われ参列者は金村神社の神社総代や世話役・田植行事の出演者である。祭りの経緯はまず神官が五穀豊穣の祝詞を奏上しそれが終わるとしばらく直会があって模擬農耕行事となる。田植えまでの演技は，草刈り・溝さらえ・畦ぬり・身持ち女の昼まもち・牛を使っての代掻きの順で行われる。その後小学生による，田植舞が奉納され最後に田植えが行われる。	17
1034	糸田町	291	糸田祇園山笠	糸田	5月第2土，日曜日	第4章，第1節，特論1「祇園山笠」参照。	2，29
1035	糸田町	291	六日相撲	糸田町鼠ヶ池	9月6日に近い日曜日		10
1036	糸田町	291	えびす祭		12月10日前後の日曜日		23
1037	糸田町	291	たぎり神事	金村	10月第1日曜日		
1038	川崎町	289	鬼火たき	下真崎	1月		1
1039	川崎町	289	鬼火たき	安宅	1月15日		1
1040	川崎町	289	春祭(神幸祭)	黒木	5月2，3日	2日に準備を行い，3日に神事・餅まきを行う。	32
1041	川崎町	289	祇園祭	東川崎久保	7月第3日曜		32
1042	川崎町	289	祇園祭	西川崎屋敷裏	7月第2日曜		32
1043	川崎町	289	祇園祭	下真崎	7月第2土日	神輿は8人かきで「あばれ神輿」とよばれ，前進・後退しながらくるくる練り回し，時には投げ上げ，さらに中元寺川に入って暴れる。山笠は幟山で，夜には提灯山になる。	2，29，32
1044	川崎町	289	神幸祭	田原	5月3，4日	神輿が戻ってきた4日，獅子舞や祭典が行われて，その後，杖楽殿で白いたすきと白いはちまきを身に付けた杖楽保存会が真刀や鎌を使用した，福岡県指定無形民俗文化財の杖楽が披露される。	32
1045	川崎町	289	神幸祭	安宅	5月4，5日	神輿，山笠，子ども山が連なって，須佐神社と公民館の間を往復する。2tの山笠を男衆が「オイサ，オイサ」と活気づける。須佐神社で祭典，獅子舞が行われ，「暴れ獅子」と呼ばれる，激しく舞う獅子が見どころ。	29，32

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1046	川崎町	289	神幸祭	川崎	5月4，5日	4日に天降神社を出発した神輿は本町地区等を巡り,5日に天降神社に帰ってくる。出発の時と帰って来た時には,太田・永井・東川の獅子舞が行われる。神輿が本町地区などを巡る時には,5段・6調子の太田,曲獅子と呼ばれる永井・東川の獅子舞が神輿を先導する。	29,32
1047	川崎町	289	神幸祭	池尻	5月4，5日	「お上り」と言われる大石神社の約150段ある石段を神輿を担いで一気に駆け上がる。また,池尻地区各所で曲獅子も行われる。	32
1048	川崎町	289	宮座	下真崎	4月29日	下真崎では,昔から決められた家のみ11人で4月29日に須佐神社で座をし,その後当番の家でも座が行われる。参加者は家筋で受け継がれていて,昔は28軒であったのが今は18軒になっている。座元は2軒で務め,その順番は村を右回りにしている。神前の供え物は米・塩・鯛・昆布・根菜・葉物・御神酒である。座での献立は決まっていない。	6
1049	川崎町	289	お日待ち	木城	12月13日	皆で夜明けを待ち,寝てしまうと芋判を押されてしまうという。	8
1050	川崎町	289	山の神祭り	安宅	12月第1日曜日	安宅の貞近組では,昭和25(1950)年頃まで家回りの当番のところに集まり,神職を招いて行っていた。供え物の中に年もち一重ねがあり,そのもちの1つは神職が持ち帰り,残りは参加者で切り分けて持ち帰った。今は希望者だけの参加で,12月の第1日曜日に行っている。	8,17
1051	川崎町	289	お潮井採り	荒平	6月末か7月初頭		37
1052	川崎町	289	山の神祭り	荒平	12月第1日曜	神事後,甘酒・赤飯をふるまう.	17
1053	川崎町	289	火祭り	安宅	10月20日		1
1054	大任町	286	鎮火地蔵祭	下今任	8月24日	住民による火難消除,家内安全の祈願とともに先亡聖霊の供養を行い,おこもりと称して各屋当番で祭祀の座主を務める慣わしである。同時に奉納相撲,盆踊,流水灌頂が行われる。	10,19,37
1055	大任町	286	神幸祭	根元	5月2,3日を中心とした土,日曜日		32
1056	大任町	286	神幸祭	柿原	5月2,3日		32
1057	大任町	286	神幸祭	西白土	5月2,3日		32
1058	大任町	286	宮日祭	西白土	10月15日		17
1059	大任町	286	神幸祭	梅田	5月2,3日		32
1060	大任町	286	神幸祭	成光	5月2,3日		32
1061	大任町	286	神幸祭	福田	5月1,2日		32
1062	大任町	286	神幸祭	道善	5月2,3日		32
1063	大任町	286	神幸祭	東白土	5月3，4日		32
1064	大任町	286	水神祭・駄祭り	東白土	4月上旬		16,27
1065	大任町	286	新嘗祭	東白土	11月23日	事前に京都の貴船神社に「御穂府」と御聖水(1ℓ)を送って貰い,護符は各戸の神棚に,お水は田の水戸に入れる。	17
1066	大任町	286	神幸祭	小林	5月2,3日		32
1067	大任町	286	願成就祭	小林	10月日曜日		
1068	大任町	286	どんど焼きと祭典	秋永	1月第2日曜日		1
1069	大任町	286	神幸祭	秋永	5月3，4日	大任町秋永区の貴船神社では毎年5月3日から4日にかけて神幸祭が行われる。期間中は御旅所である公民館でも神輿が祭られ,五穀豊穣を祈る。また,条件が整えば古くから続けられている「川渡り」があり,地元の声援を受けながら掛け声とともに神輿を担いだまま、川へ入る。神輿を担いだ男たちがゆっくり川を渡っていく様子は地域を活気付けるだけでなく,見る者を圧倒させる。	27,32
1070	大任町	286	神幸祭	峰	5月2,3日		32
1071	大任町	286	獅子祭	峰	8月土,日曜日	8月の土,日のうち1日を決め,貴船神社で祭典。神前に獅子頭二体(赤と青)を備え,虫払いの祈祷の後,2人で1体となった獅子が村中を廻る。いわゆる獅子舞はしない。	26
1072	大任町	286	新嘗祭	峰	11月土,日曜日		17
1073	大任町	286	神幸祭	上元松・下元松	5月2,3日		32
1074	大任町	286	神幸祭	桑原	5月2,3日		32
1075	大任町	286	丑祭	桑原	12月第1日曜日		35
1076	大任町	286	神幸祭	上今任	5月2,3日		32
1077	大任町	286	祇園祭	上今任	7月9日	当日朝,区長,神社総代,祭元等20人位が行橋市の須佐神社(境内にある今井のお祇園さん)に参拝し,祭典の後の直會には神官とともに必ず鱆の刺身で御神酒をいただき,地区全80数枚の護符を受けて帰る。	
1078	大任町	286	新嘗祭	上今任	11月23日	現在は祭典のみ行う。	17
1079	大任町	286	霜月卯大祭	上今任	11月最終日曜日	11月最初の卯の日を原則とするが,最近は祭りの正當の日とされているこの日に「口開き」といって神家全員が揃って祭りの打ち合わせをし,大祭は11月最後の日曜日に執り行う。	
1080	大任町	286	神幸祭	下今任	5月2,3日		32
1081	大任町	286	川祭	下今任	6月24日	地元では天神の御子である運芸速日命が降臨したといわれる「御船の森」で行う。	27
1082	大任町	286	宮日祭	下今任	10月27日		17
1083	大任町	286	新嘗祭	下今任	10月末		17
1084	大任町	286	花祭り	道原	4月8日		37
1085	大任町	286	お籠もり(盆踊り)	道原	8月16日		8,19
1086	大任町	286	川祭	上元松	4月下旬		27,37
1087	大任町	286	宮日祭	小林	10月	神社の願成就祭をして子ども相撲大会をする。現在は相撲大会は実施していない。	10
1088	大任町	286	宮日祭	成光	10月	高木神社大祭の座元が宮日祭を仕切る。甘酒を造って神社の瓶に入れ注連縄を張る。	17
1089	大任町	286	宮日祭	安永	10月15日		17

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1090	大任町	286	宮日祭	桑原	10月		17
1091	大任町	286	宮日祭	上元松・下元松	10月		17
1092	大任町	286	稲荷祭	西白土	5，10月	5月は麦,10月は米の収穫を感謝してお籠りがある。	8,17
1093	大任町	286	稲荷祭	成光	春，秋	春と秋に座祭で行う。2月の初午に祭典を,秋に収穫を感謝してお籠りをする。	8,17
1094	大任町	286	稲荷祭	下今任	4，10月	4月,10月にお籠りをする。稲荷社の前で15時から神官宇都宮誠により祭典を行う。	8,17
1095	大任町	286	稲荷祭	東白土	9月初午	9月の初午の日にお籠り。	17
1096	大任町	286	稲荷祭	道善	春，秋午の日		17
1097	大任町	286	稲荷祭	安高	10月		17
1098	大任町	286	稲荷祭	梅田	11月	祭りは,祭田の収穫があってから,その年内にする事になっているが,座本の都合で11月にしたり翌年の春になる事もある。	17
1099	大任町	286	祇園祭	安永	7月7日	宵祇園で,各戸で手料理を重箱に詰め,安永神社境内の祇園社の祠前に莫座を敷き,或いはテントを張ってお籠りをし,夜を徹したこともある。後通夜をせず家に帰るようになったが,平成3(1991)年から皆作祭と一緒にするようになった。	
1100	大任町	286	川祭	柿原		祭典の後,供物を川に流して水神に捧げる。現在は皆作祭の後に引続き行い、公民館に引揚げて直会を行う。この際「みくじ下ろし」で八月の行事を決定する。	27
1101	大任町	286	川祭	上今任	5月神幸祭の日	虫,風,水難除けの祈祷を,英彦山川原に青竹4本を建て,注連縄を張った祭壇を設けて行う。現在は神幸祭の折,神輿頓宮(お下りの日)の後に行っている。	27
1102	大任町	286	祇園祭	成光		高木神社境内の祇園社。当日は胡瓜は食さない。	
1103	大任町	286	川祭	東白土		地区内の山際を流れる小川に祭壇を設けて行う。お供えに茄子と白菜を用いる。	27
1104	大任町	286	川祭	島台	春，秋	春と秋の二回,英彦山川に面した「水神さんの祠」で行う。	27
1105	大任町	286	地神祭	東白土		祭典を行い座元で直会	
1106	大任町	286	新嘗祭	安永	10月中旬	宮日祭と一緒に行う。	17
1107	大任町	286	秋葉神社祭	秋永	9月第2日曜日	火の神を祀ったこの神社で火災除けの祈願を行う。従来8月24日に行い,子ども相撲を奉納していた。現在は9月第2日曜に変更したが,子ども相撲は実施しておらず,掃除のみしている。	10
1108	大任町	286	社日祭	下今任		神社の境内に祠が2社あり,個人の祠が2社ある。十輪院の住職が同じ日に,この4つの祠を廻ってお参りをする。	
1109	大任町	286	小一郎祭	上今任	12月第1日曜日	神社境内に小一郎社の祠がある。小一朗とは馬嶽城(犀川町)主,新田義高のことで,菊池一族と呼応して戦死した。その怨霊を恐れて神として祀ったもので,豊前,豊後の地方的な民間信仰である。祠にお参りののち座元でお籠り。12月の第1日曜日を祭日とし,座元の祭壇に掛軸「小一郎社」をかける。	15
1110	大任町	286	神待	向田	12月1日	向田では12月1日に出雲大社の神事に合わせて,祭神を迎える神待ちを行った。当日は,神社の祭典,献饌はない。区,向和会,子ども育成部会が協力して神待を楽しいものにする。	8
1111	大任町	286	神待	成光	12月2日	18時から,高木神社で宮司の下で祭典,献饌は,鯛,御飯,清酒,昆布,りんご。	8
1112	大任町	286	神待	道善	11月29日		8
1113	大任町	286	神待	玉川	11月29日	お供えをした後,焚き火を囲んで飲酒接待。日付が変わるまで楽しむ。	1,8
1114	大任町	286	神待	峰	11月土曜日	19時から行う。昔は宮司を招いて祭典をしていたが,現在は招いていない。	8
1115	赤村	282	皆作ごもり	大内田	4月		
1116	赤村	282	神幸祭	大内田	4月最終土,日曜日	神幸祭の中で大内田神楽が奉納される。この神楽は,明暦元(1655)年に始まると伝えられている。大内田地区に牛馬の疫病が流行し,困り果てた村人が,氏神様である大祖神社にうかがいを立て,みくじを引いたところ,「4月に神楽をすればよい」とのお告げがあったため,それ以来,「家が3軒になるまでやめない」という万年願として行われるようになった。現在の神楽は,今から90年ほど前,築上郡の赤幡神楽から神太郎右衛門と言う神職の指導を受け,12名で神楽講を形成して始まった。戦時中は舞手が不足したため一時中断したが,戦後再興した。現在は人手不足のため,神輿の還御は行事としては執り行われていない。	32
1117	赤村	282	神幸祭	小内田	5月4,5日		32
1118	赤村	282	神幸祭	山浦	5月4,5日		32
1119	赤村	282	神幸祭	小柳	5月4,5日		32
1120	赤村	282	光明八幡神社神幸祭	上赤	5月4,5日	約200年前から行われているお祭りで,里に降りてこられた神を迎え,村を案内して,里を見てもらう行事。毎年5月4,5日に行われ,犬山・こども山の2台の山車が光明八幡神社に神輿を迎えに行く。神輿はその後,御旅所で一泊し氏子の人たちは迎えた神と一夜を過ごす。翌日,神は山車のお供で神社へと帰っていく。神幸祭には『五穀豊穣』と『里人の多幸』の祈りが込められている。	2,29,32
1121	赤村	282	我鹿八幡神社神幸祭	下赤	5月4,5日	現在は下赤地区の山笠保存会が中心となって,5月4,5日に行われる神幸行事を執り行っている。	2,29,32
1122	赤村	282	秋葉神社神幸祭	油須原	10月第1土,日曜日	秋葉神社神幸祭は,天保9(1838)年に,油須原地区で大火が起こり,集落のほとんどを焼き尽くしてしまったことに始まると言われている。二度とこのような惨状を起こすまいという人びとの思いが,「天下泰平」「国家安泰」を祈る祭という形になった。現在は農繁期の落ち着く10月の第1週末に執り行われる。	32
1123	赤村	282	ジンガの祭	大内田			6
1124	赤村	282	宮座	大内田			6
1125	赤村	282	小内田おしし会	小内田	8月第1日曜日		39
1126	福智町	294	岩屋神社神幸祭	弁城地区	奇数年の5月第2土,日曜日	弁城地区全体が参加する最大の祭りである。祭りの巡行では,神輿のほかに,笛を用いずに鉦を打ち鳴らす囃子と,上部に取り付けられた4mを超える白い馬簾が特徴の山笠が2日間にわたって町内を練り歩く。祭りの最後を飾る「弁城山笠競演会」では,白馬簾をなびかせ砂塵を巻き上げて旋回する「練り回し」が行われる。毎年各常会が持ち回りで担当する「神輿当番」では,重さ1tもの巨大な神輿を持ち上げる。	2,29,32
1127	福智町	292	南木菅原神社神幸祭	南木地区	5月2，3日	南木菅原神社は,かつてはタカオ神を祀り,貴船大明神と称していたが,延喜元(901)年,菅原道真公が大宰府に赴く途中この神社に立ち寄り休息したといわれ,これを受けて天仁2(1109)年に神社を再建し,天満宮と改称した。神幸祭は明治初年から行われており,当初は8月25日であったが,5月2～3日に変更され,現在に至る。神幸祭における獅子楽は,明治20年代に嘉穂郡庄内町綱分に習いに行き導入したと伝えられている。	32
1128	福智町	294	赤坂神社神幸祭	伊方地区	5月上旬	毎年5月の大型連休中に執り行われる赤坂・白鬚神社神幸祭。5月3日に合戦絵巻を表した華麗な山笠がきらびやかな電装飾を纏い「練り回し」による迫力と掻き手の躍動感が圧巻の「伊方山笠競演会」で始まり,4日・5日と2日間にわたり勇壮な山笠が囃子とともに町内を練り歩く。	2,29,32

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1129	福智町	294	白髪神社神幸祭	古門	5月	毎年5月の大型連休中に執り行われる赤坂・白鬚神社神幸祭。5月3日に合戦絵巻を表した華麗な山笠がきらびやかな電装飾を纏い「練り回し」による迫力と掻き手の躍動感が圧巻の「伊方山笠競演会」で始まり,4日・5日と2日間にわたり勇壮な山笠が囃子とともに町内を練り歩く。白鬚神社では神事の厳かな雰囲気を高める獅子舞や稚児舞も奉納される。	2,29,32
1130	福智町	292	飯土井神社神幸祭	神崎	偶数年の10月第2土,日曜日	偶数年の10月第2土曜日・日曜日には飯土井神社で「飯土井神社神幸祭」が開かれ,高揚感を掻き立てる祭囃子とともに華やかな山笠が神崎地区を練り歩く。神輿が御旅所まで移る「お下り」では,赤鬼と青鬼が竹の棒で子どもの頭を軽く小突き,一人ひとりの厄を払っていく。「泣く子は強く育つ」という言い伝えがあり,鬼と天狗に囲まれて泣く子どもの声が沿道に響き渡る。	2,29,32
1131	福智町	292	稲荷神社神幸祭	金田	10月第3土,日曜日	例年,10月20日以降の土曜日・日曜日に「金田・神崎山笠競演会」が開催され,その競演会の日中には毎年「稲荷神社神幸祭」が行われる。無病息災,五穀豊穣を願う山笠が各地区で村回りを終え,そろいの法被に身を包んだ人びとが稲荷神社前に集結する。勇壮な山笠が見守る中,1200年近い歴史をもつ稲荷神社の境内では,銀杏の大木と社殿との間で獅子楽や稚児舞,巫女の舞いが奉納される。	32
1132	福智町	294	門之脇水神祭(通称　牛まつり)	迫	9月25日	豊作祈念,農耕牛に対する感謝,さらに天災,流行病の年には特別な祭りの様式があった。かつては,当番組中が米2升を持参したり,料理の中心は川魚でなけらばならないといった決まりがあったようだが,現在では,そういった決まり事は時代とともに変化している。	6,8,27
1133	福智町	294	ウマごもり(おこもり)	迫		現在はお参りの習慣がなくなり,おこもりの祭事だけが残っている。	8
1134	福智町	294	庚申待ち	長浦		常会(自治体の会議)の日を庚申待として現在も残っている。期日は,一月もしくは二月おきに会議の内容で決まる,掛け軸を掛けお賽銭を供えお参りする。昔は,月々戸毎の周り当番で座元は床の間に庚申の画像を掛け,神酒を供えて祀る。各々お詣りが終われば酒宴,昔は餅をついて御馳走をしていたが,30年前位には餅に代わって「おこわ」を蒸し清酒３升,吸い物,煮つけ刺身と料理を決め,食後会議が終わり次第,徹夜することなく解散していた。	8
1135	福智町	294	七瀬祭り	旧畑地区	5月上旬	五穀豊穣を祈願し,水神様をそれぞれの七瀬に祀り,簑島か芦屋で海藻と海水を汲んできてお供えした。	8
1136	福智町	294	観音講	中原地区	毎月末の日曜日	現在は,毎月最終の日曜日に,常会として名前のみ残っている。昔は,各戸当番で夕食をともにし,33番唱え,観音信仰の夜を過ごし,お盆の17日の夜は,婦人会全員揃い御詠歌を33番唱え,先祖の祭りをしていた。	8
1137	福智町	294	六夜様祭	春田地区	8月26日	昔,春田地区に難病がはやり,農作物も不作続きで村人が大変困っている時,村の長老の夢枕に,村のほとりに石の神様がいるから,その神様を祀って,8月26日の夜みんなでお参りをしなさいとのお告げがあった。それを聞いた村人は,その石の神様を山の神として祀り8月26日に祭りを行ったところ,難病もなくなり,その年は豊作になった。それから毎年8月26日に六夜様としてお祭りをするようになり,当日は夕方から地区民により,常設の舞台で演芸会が催される。	8
1138	福智町	294	申まつり	前村	正月初猿の日		8
1139	福智町	294	えびすまつり	前村		過去には春と秋の2回行われていたが,現在は春のみの開催となっている。明治28(1895)年4月の事跡は残っているが,これ以前の記録は定かではない。	23
1140	福智町	294	六夜待ち	上弁城	8月下旬	「盆の26日にはお月様が3つ,山の端から上がる」という言い伝えがある。この3体の月を見るために,人びとは右京畑池の堤にムシロを敷いて月の出を待ったという。この日は宵から堤の堤防に集まり,将棋や,座頭唄・歌舞伎・浄瑠璃・浪曲師を雇ったりした。また一時期,杉丸太で小屋掛けをしムシロで囲っての舞台を設け素人芝居を行った。現在でも,毎年,常設の舞台で演芸大会が行われている。	8
1141	福智町	292	ドンド焼き	神崎地区	1月第3日曜日	古いお札や正月飾りを燃やし,無病息災を祈る。	1
1142	福智町	292	神待ち	金田一区	11月30日	元は金田一区の青年団が行なっていたが,現在はユウボク会が行っている。20時頃から集まり神様が出雲から帰ってくるのを迎える。深夜0時頃まで。	8
1143	福智町	292	金田七貴船祭り	持尾貴船,松崎神社(東金田),四郎丸,久永,堀(西金田),黒尾,人見	4月	持尾貴船・松崎神社・四郎丸・久永・堀の5社が集中分祀され,黒尾・人見の貴船神社を合して七貴船となる。古来より農家が祭事を執行していたが,現在ではそれぞれの地区で,4月に貴船祭を行い,祠や境内の保存管理に務めている。	16
1144	福智町	292	相撲大会	神崎地区	9月15日	神崎地区全体で行う。	10
1145	福智町	292	恵比須祭り	金田商店街	11月3日	明治以来,金田の商店街の各隣組で,御座の家の床の間に恵比須様の神像を掛け祭事を行っている。また昭和50(1975)年より恵比須神社奉賛会が組織され,菅原神社の境内の恵比須神社で毎年12月2・3日の2日間にわたり祭典が執行されるようになった。	23
1146	福智町	292	恵比須祭り	菅原神社境内	12月2，3日	弘化3年に金田村の商人が勧講したもので,盛大な祭りが行われていた記録がある。現在は毎年7月に金田の区長・神社総代参列の下に祭典が行われている。	23
1147	福智町	292	七浦潮井行事	金田	4月	4月春分祭を終えて神社総代全員でお潮井を入れる竹筒を作り,苗床に種籾を播く前の適当な日を選び,筑前の国で最も正常な場所といわれる,脇の浦・脇田浦・岩屋浦・柚原浦・山鹿浦・芦屋浦・波津浦の7か所の海岸を巡り,海水で心身を清め,お潮井を持参の竹筒に汲み,持ち帰って神前に供え,五穀豊穣・氏子安全を祈願する。	15
1148	福智町	293	恵比須祭	上野地区原田・常福	12月上旬	原田常福の人達が中心になって組を作りエビス座を毎年11月3日に行った。即ちお得意のお客を招き,酒,食事を饗応した。商売の隆昌を目的としたもの10人で作られていて,費用は明治中期頃50銭宛切り合わせ,座元は順番通りに規定されていた。現在では原田,常福の全員が参加している。	23
1149	福智町	293	イナリ座(宮座)	上野地区堀田	12月8日	堀田22人で組織し,イナリ座を毎年12月8日に行った。イナリ社で宮司のお祓いが終わると,酒,食事をともにした。費用は酒1升,金20銭宛切り合わせ,座元は5軒1組として当番制で廻っている。	23
1150	福智町	293	ビザイテン座(宮座)	上野地区常福・今屋敷	12月巳の日	今屋敷にある弁財天様に(厳島神社)12月の巳の日に催した。常福と今屋敷の15戸で順番で座元をして酒飲食をともにした。費用は当社についていた一反半の田地の収入を以て充当した。現在は2戸宛座元順番制で300円と米3合を切り合わせて継続している。	23
1151	福智町	293	松尾座(宮座)	上野地区薬王寺	12月5日	薬王寺の22戸が松尾神社の宮座を毎年12月15日夕刻より催した。宮司のお祓いがあり,宮に1反の田地が付いていたので,座の催される時に,宮から米1斗と各戸より金50銭と米一升宛切り合わせて,夕食やその他の費用に充てられた。酒と可成りの御馳走で参加者一同賑わった。7月15日に千燈を灯し、子どもの宮相撲をして区民安全の祈願が行われる(万年願)。現在は東側12戸と西側10戸で座元を2組に分けて,交代で費用を負担して継続している。	6
1152	福智町	293	高住神社の宮座	上野地区原	12月10日	原組36戸が全員で毎年12月10日に催した。宮司のお祓いがあった。明治の中頃米3合と20～30銭(現在は200円)切り合わせて,酒,野菜の煮しめ,酢物,汁物等で夕食をともにした。座元は2軒宛の順番で催し,若し費用が不足した場合は座元が負担した。高住神社は一般には豊前坊様と呼び,英彦山神社の分かれと言われている。現在も継承している。	6

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1153	福智町	293	水神様(苗代田植)	上野地区上野,山崎,大久保,鋤木田	田植後	上野には水神様が,即里の福智下宮の裏,里の山崎北田,大久保,鋤木田の大浦と4か所あり,市場地区の鉱害復旧された水田一角に水神祀が農耕の守護神として祀られている。苗代田植,収穫終了後随時各々の地区で宮司のお祓いがあり,お酒を水神様に供え,式が終わると水神様の周囲にゴザを広げて,各自持参の弁当を食べた。宮司には参果一升と弁当を差し上げ,お酒を酌み交わす。明治20(1887)年頃から行われており,現在も継続している。福智下宮浦の水神様の石室の側面に,「昭和二年牛馬安全捻百姓中」と文字が刻まれている。お水をとって神社に参詣した。	27
1154	福智町	293	諏訪社の宮座	鋤木田(旧赤池町)	5月上旬の土,日曜日10月最後の土,日曜日	毎年春秋の2回宮座を開いた。昔は,宮の田からの収入(3反)で費用に充てたが,不足を20銭宛切り合わせた。米3合宛切り合わせたこともあった。お祓いがあって御酒と夕食をともにした。明治中期から始められ,現在は春(5月上旬)秋(10月最後の土日)の2回。宮座を3戸宛順番制で個人の家で開いて続けている。鋤木田区の全部が参加している。お酒とつまみ用の魚少々が用意された。	6
1155	福智町	293	興国寺「花まつり」	上野地区	5月8日	興国寺の花祭り(釈尊誕生祝い)略して8日と呼び,旧暦で行われている。花御堂を飾り中に誕生仏を安置し,甘茶を灌頂して礼拝し,お祝いをする。	37
1156	福智町	293	神幸祭	上野地区		かつては,上野・鋤木田・草場・市津・赤池・神崎・南木・弁城・金田・大熊・福丸と各所で御獅子を奉斎して,笛太鼓で巡回して行われていた。近年では上野所在の四地区のみを巡っている。	26
1157	福智町	293	牛馬願成就(水神祭り)	草場	8月末	300年近く続く祭で,牛馬のいなくなった今も行われている。当時,牛馬が病気で多く倒れ草場の家が3軒になるまでお祀りをしますと願をかけた。昔は,9月の牛(丑)の日松明を焚いてこれを取り囲んで手踊りをし,牛を飼っている家を踊って回りまった。今は8月末日曜日に皆が集まって神主のお祓いの後,歌や踊りで賑わっている。	27,39
1158	福智町	293	草場の皆作こもり	草場地区	7月初旬(田植後)	田植が終わった後に行う。	8
1159	福智町	293	市津地区の宮座	市場地区	9月15日	毎年,9月15日夕方から春日神社と日吉神社と1年ごとに行っている。	6
1160	福智町	293	御神幸・祇園祭	上野地区堀田	4月15日	流行病退散のために祭礼が行われる。昔は毎年6月15日に行われ,山笠が4本建っていた。まず,前日14日に夜御旅所に御幸され(神輿一体,笛,太鼓,手拍子),同晩直ぐに熊野神社に還御された。御旅所より熊野社に還御されることを「お上り」と呼んだ。明治30(1897)年頃山笠が建ったが,後に幟り山に人形を建てる簡素なものとなり,昭和10(1935)年頃,これも中止となった。現在は祭礼のみ行われている。	32
1161	福智町	293	初午祭り	上野地区堀田		昔は,旧2月の初午の日,堀田組婦人部全員で稲荷神社で行った。米1升30銭切り合わせて催していた。参詣者にはニギリ飯,漬物の接待をした。稲荷社にはチリ(子どもが意識を失って痙攣する病気)を癒す神で,安産の神が祀られてあったので諸方面より参詣があった。接待の世話は5人宛当番制で巡回した。現在は組費から支出している。	35
1162	行橋市	303	お通夜	大谷	2月	疫病が流行し,村人も牛馬・犬猫も死んでしまったため,大焚火をして無病息災を祈願する万念願を立てたことが始まり。以来,村では毎年大焚火を焚き総参りをするようになった。このお通夜には,前もって「ツウロ銭」という金を集めて回る。各戸ごとに「生き物の」数だけ払い,「命」1つにつき50円であったが,現在では100円になっている。	1
1163	行橋市	308	英彦山神宮お潮井取り神事一行送迎	沓尾	3月1日	第4章,第3節,13「英彦山神宮御潮井取り」 参照。	33
1164	行橋市	308	神幸祭	今井	4月		32
1165	行橋市	308	神幸祭	元永	4月下旬	数百年前から伝わる春祭りで,神輿渡御・神楽奉納が行われる。大型の神輿2基が須佐神社の長い石段を勇壮に下る様子が見所。	32
1166	行橋市	304	神幸祭	津熊	5月3日	五穀豊穣を祈願する神事。上津熊,中津熊,下津熊の3地区を約5時間かけて練り歩いた後,白装束の氏子たちに担がれた3基の神輿が長峡川へと入り,勇壮な掛け声とともに川を渡る。	32
1167	行橋市	303	万年願 七浦汐汲み	下稗田,前田	4月3日	汐汲みは築城飛行場が出来てから「七浦」は無くなり,長井の浜・椎田浜宮の2か所だけである。汲んだ汐筒四組を今井祇園さん・前田・下稗田の各お宮・竹下家へそれぞれ奉納する。	15
1168	行橋市	312	神幸祭	柳井田	5月		32
1169	行橋市	312	神幸祭	草場	5月		32
1170	行橋市	305	神幸祭	大橋	5月		32
1171	行橋市	309	神幸祭	稲童	5月		32
1172	行橋市	309	神幸祭	道場寺	5月		32
1173	行橋市	308	神幸祭	沓尾	5月		32
1174	行橋市	299	五社八幡神社神幸祭	入覚	5月		32
1175	行橋市	307	蓑島百手祭	蓑島	5月21日	くじによって選ばれた2人の若者が射手となり,神社から少し離れた小祠の前で2張りの弓,2本の矢で大小2張りの的を射る。続いて群集による的壊しや長老によるケーラン団子の奉納行事が展開される。	5,10,24
1176	行橋市	305	夏越祭り	大橋	7月		15
1177	行橋市	299	こずき(こづき)地蔵の子ども相撲	椿市高来	7月	小月地蔵と一般に呼ばれているが,「小月」の読み方から,「子好き地蔵」また「小咳地蔵」とも呼ばれ,幼児の守り神地蔵として親しまれている。相撲は地蔵講の人たちの準備で,地蔵にお酒などが供えられ蝋燭が灯される。天聖寺住職が読経を行い,その後こども相撲が奉納される。	10
1178	行橋市	303	三百度祓い	大谷,新所杉ノ木	7月	健康除厄の祓いの行事。かつては夏越祭の場合だけ,「中臣祓え」を300度奉納していた。現在は中臣祓えを略した「大祓の詞(大祓に読む祝詞)」を夏の土用に入ってから奉納する。これは皆で「大祓の詞」の祝詞を一緒に300回唱和することで自分自身も祓うもの。	15
1179	行橋市	308	今井祇園行事	今井,元永	7月	今井津須佐神社に天下泰平･無病息災等を祈願して奉納される祭礼行事。現在,祭礼期間は7月中旬から8月初旬頃。現在の主な行事は「山」,「連歌奉納」である。山の高さは約15mを測り豊前地方では最大級の規模である。長らく今井西の1基のみであったが,近年,元永地区の山が復興した。「連歌奉納」は享禄3(1530)年に取り入れられたとされる伝統行事。大祭2日目の夜,今井西の山の周辺で執り行われる連歌は「車上連歌」と呼ばれ,笠着連歌の形態が今も残る貴重なもの。	2,29
1180	行橋市	299	十三仏道祓い	入覚	9月27日	「道切り」は総勢6人。まず13か所の十三仏に御供をし易いように掃除をして,アオキの葉を敷く。麓の不動明王から始まり,順を追いながら,邪魔な木や藪を切り払っていく。十三仏の石仏を清め,全てに「おごく」の皿を置いて行く。やがて「御供」の役2人が御供櫃を背負い,十三仏に御供を盛り,念仏を唱え,拝みながら登っていく。役のもう1人は明見寺居残る。頂上の大祖神社で「オスボ」と御供の「大握り飯」を持って登った人たちと合流,参詣し直会となる。道祓いの一行は一気に急坂を駆け下り,明見寺の裏に出て,行事は終わる。	33,37
1181	行橋市	306	願成就・子ども相撲	矢留	9月8日	清地神社の境内に土俵が設けられている。青竹を4本の竹に括りつけ,中に塩をいれた藁スボをそれぞれに提げる。青竹に弊を一杯につけた注連縄を張り,さらにその上の段に,十文字に注連縄を張り,中央に弊を付けた大きな杉の葉の束を提げる。宮司がその土俵を太鼓・シャンカラの奏楽で修祓を奏上する。	15
1182	行橋市	305	風鎮祭	行事	9月1日	風を鎮め,害虫を防ぎ,五穀豊穣を願う。行事地区では以前は210日に行われていた。8月31日には,世話人や青年会の若者が各家の軒下にボンボリを立てて回った。戦前は人出も多く市が立っていた。	16

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1183	行橋市	305	風鎮祭	大橋	9月16日	風を鎮め,害虫を防ぎ,五穀豊穣を願う。正八幡では春の神幸と同様に風鎮祭でも神楽が舞われた。この祭りをクイマツリとも言い,人びとには御馳走を食べる日として記憶されている。	16
1184	行橋市	306	御供盛	矢留	10月10日	豊作を感謝し,来年の五穀豊穣を祈願して神を送る「神送り」の神事。1日から始まる「大祭」は10日の「御供盛り」を頂点とする一連の大祭行事。この「御供盛り」は,古来より農家で厳粛に執行されてきた「九月大祭」であり,中でも「種渡し」の古式をよく残している。	15
1185	行橋市	312	御宮田祭り(オオマツリ)	長江	12月5～10までの日曜日	長江地区では座元ではなく公民館で行われるようになり「村座」は無くなった。同時に「宮座」祭りから,八雷神社の「氏子」祭りになった。氏子祭に性格が変わっても直会の内容・形式は宮座祭を踏襲し,献立も若干の異同はあるが,ほとんど従来のままである。	17
1186	行橋市	312	卯祭	草場	12月	4時に神社の横の広場で大焚火をする。この時すでに禊場には男竹に弊が下げられて堤防に立てられている。その後,当番の三人が榊の葉を咥え,シデ(紙幣)をつけた注連を巻き白米一升を入れた真新しいバケツ・シャモジ・ヒシャクを持ち,川の中ほどにあるカンノ瀬(神の瀬)と呼ばれる場所で全身を水に沈めて禊をした後,白米を丁寧に研ぐ。この米は社務所で炊き上げ,オゴクとして幣殿で神前に供える。	17
1187	豊前市	325	節分祭・牛替神事	四郎丸	2月3日	牛替みくじでは,以前は生きている子牛を賞品にしていたが,昭和38(1963)年から一刀彫になった。	22
1188	豊前市	324	畑のどんど焼き	畑	2月15日前後の土曜日	第4章,第3節,4「畑のどんど焼き」 参照。	1
1189	豊前市	332	求菩提山のお田植祭	求菩提	3月最終日曜日	第4章,第3節,14「御田植祭」 参照。	17
1190	豊前市	326	厳島神社の百手祭	八屋	3月第1日曜日	鬼の股と手を埋めた場所と伝えられる「股手の藪」で弓射が行われる。鬼と墨書した的を掛けて行われるが,弓射の作法は「蟇目の法」と呼ばれる。修験の憑き物落としの修法「蟇目法」との関連を暗示させる。	11,24
1191	豊前市	330 331	嘯吹八幡神社神幸(清原神事)	山内	4月第2土,日曜日	毎年4月の第2土曜日・日曜日に行われる嘯吹八幡神社の春季神幸祭である「清原神事」。1日目は3基の神輿と傘鉾を中心とした神幸行列が,御旅所である清原神事場を目指し,地域を巡行する。夜には神事場に到着し,入り口の二塚神社(猿田彦命,天鈿女命)で祭典を行った後,お着きの神楽が舞われ,初日の行事が終了する。2日目は,昼頃から山内神楽講によるお立ちの湯立神楽が奉納され,同じルートでお下りが行われる。夜には嘯吹八幡神社に戻り,拝殿では遅くまで神楽が奉納され,祭神の帰還を祝う。巡行の途中では決められた場所でそれぞれの神輿が高く天に掲げられ,氏子によって激しく回転させて雄姿を競う。また,お立ちの際に奉納される「湯立神楽」は,古式ゆかしいもので岩戸神楽の真髄ともいえる。	2,29,32
1192	豊前市	325 332	大富神社神幸行事(八屋祇園)	四郎丸	4月29日～5月1日	毎年4月29日から5月1日まで大富神社の春季神幸祭として開催される豊前市を代表する春祭りの1つで,天平12(740)年の「藤原広嗣の乱」に際し,その鎮圧に功績のあった上毛郡の擬大領,紀宇麻呂の凱旋の様子を模したものと言われている。	2,29,32
1193	豊前市	326	足切神社神幸祭	赤熊	4月第3土,日曜日	旧赤熊村を巡行する祭りで,一部宇島と地域が重複する。かつては「公富楽」という楽打ちがあり,「カッパ楽」とも称され,雨乞いの祭りに奉納された。	2,29,32
1194	豊前市	324	畑神幸祭	畑	4月第4日曜日	以前は神輿や御幣,傘鉾など全て担いでいたが,今は台車に乗せている。幟旗は畑小学校があった頃は20人近い子ども達が担当し,傘鉾も囃し方もいたが,現在はテープを流すようになった。子ども神輿も,今では担ぐ子どもが少なく水神社に安置されている。	2,29,32
1195	豊前市	328	三毛門祇園	三毛門	4月第4日曜日	宮守(宮柱)と呼ばれる専門の神職ではない地元神主をかつての庄屋職の三毛門家(現在の別府家)が務め,祭りを取り仕切る。これに各地区代表役員が加わり,年毎に各地区が順番に引き受けとなり,祭りを執行する。	2,29,32
1196	豊前市	330	貴船神社春祭	永久	4月22日直近の土曜か日曜	現在は提灯山(大人)と神輿(子ども)が巡行する。囃子は屋台状の車に太鼓を収め,屋根に御幣を立てる。	32
1197	豊前市	326	宇島祇園	宇島	5月3～5日	神輿と6台の山車が町内を練り歩く。	2,29
1198	豊前市	324	角田八幡神社神幸祭	中村	5月第3土,日曜日	豊前市松江地区の伝統行事で,山車の老朽化や担い手不足などから一度は途絶えたが,地域の人びとの努力により,山車を修復し,復活した。5月中旬の金曜日～日曜日までの3日間,松江地区を祇園車(踊り車)が練り歩き,高〆が張られた辻々では華麗な民舞が奉納され,昔ながらの祭りの様相を残している。奇数年に豊前楽を奉納。	2,29,32
1199	豊前市	329	石清水八幡神社例大祭	黒土	5月3日	朝8時から始まる巡行は夕方にまで及び,全ての経路で神輿を担ぐと言う意味で,昔からの伝統を踏襲している。	2,29,32
1200	豊前市	328	沓川祇園	沓川	5月5, 6日	年毎に各地区が順番に引き受けとなり執行する。金毘羅宮が聖地とされる。	2,29,32
1201	豊前市	330	宗像神社春祭	薬師寺	5月14日	提灯,囃子,神輿,樽神輿(子ども)と続く。囃し方は傘鉾ではなく屋台風の車に太鼓を乗せる。	32
1202	豊前市	330	貴船神社春の神幸祭	挟間	5月12, 13日	本来は御幣を先頭に鉾面,賽銭箱,傘鉾,神輿(大,小)が並んでいたが現在は神輿だけが巡行する。子ども中心の祭り。	32
1203	豊前市	325	須佐神社八朔の節句祭	鳥越	9月3日	行列は,賽銭箱・旗・傘鉾・神輿で構成される。傘鉾は,傘と幕を付けていない。	2,29,32
1204	豊前市	326	菅原神社神幸祭	八屋	10月25日	25年毎の大祭時に神輿が出る(前回は平成11(1999)年)。通常は毎年子どもによる樽神輿が出る。	32
1205	豊前市	332	山人走り	大河内	10月初申	山人は山仕事の姿で御幣のついた榊の枝を持つ。境内南側の鳥居を出て旧道を通り200mほど先の御神木(柿)に向かう。目指す場所は時代ごと変わっている。平成13(2001)年以降は神の柿を継ぐ若木があり,山人の走る距離は短縮された。神の柿にたどり着くとそこで荒縄を解き,この縄で持ってきた榊を御神木に括り付けた後神社へ帰り人に戻る。	6
1206	豊前市	330	山人走り	山内	11月25日	第4章,第3節,34「山人走り」 参照。	6
1207	苅田町	297	白庭神社の福焼き	与原字御所山	2月第2土曜日	文化13(1816)年の大風により多数の死傷者が出たが,御所山古墳周辺は被害が出なかった。大風の後,白庭神社を見ると松の大木が倒れており,村人は神仏が身代わりに立ったと理解し,その松の大木を燃やしたことが起源とされる。白庭神社境内で左義長が行われ,笹で作った竿の先端に2枚からなる福餅を付けて福焼きの火で炙って食べると,その年の無病息災が叶うとされる。かつてはその福餅の間に「大福」「中福」「小福」の当たりくじを挟んでいた。	1
1208	苅田町	298	等覚寺の松会	山口字等覚寺	4月第3日曜日	修験道の最大行事であった松会がほぼ完全に近い形で伝承されている極めて貴重な祭礼である。	33
1209	苅田町	296	苅田山笠	富久町	10月第1日曜日	第4章,第1節,特論1「祇園山笠」参照。	29
1210	苅田町	296	獅子祓い		12月の数日間	1年の罪穢れを祓い退けて新年を迎えるための祭り。氏子地域全域の一戸一戸を神職と獅子が祓い廻る。祓いの日程は区ごとに決まっており,数日間にわたって行われる。	26
1211	苅田町	296	おこもり		7月12日		37
1212	苅田町	296	皆作祭	集区	6月10～15日		17

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1213	苅田町	296	土用おこもり・雨乞い	集区	7月25日又はそれに近い日曜日		16
1214	苅田町	296	盛相祭り	集区	12月19日又はそれに近い日曜日		17
1215	苅田町	297	天一親王祭	白庭神社のみ「字御所山」	5月	座元の家に神職を呼んで,祭典が行われていたが,現在は与原下区公民館で飲食のみ行われる。座元は講員が輪番で務めていた。	8
1216	苅田町	297	左夜神祭	与原字御所山	5月第1日曜日	現在は白庭神社拝殿において直会が行われているが,かつては「サヨノカミ様」あるいは「サイノカミ様」と呼ばれる石碑の前で,お神酒,海や山の幸などが供えられ,神職が祭典を行い,その後蓆を敷いてお籠りをしたとされる。	8
1217	苅田町	297	皆作	与原字御所山	6月第3日曜日	田植え終了時,農家一同が白庭神社の本殿に参拝し,神職を呼んで,豊作祈願を行い,拝殿において直会を行ったとされる。	17
1218	苅田町	297	おこもり	与原字御所山	9月第1日曜日		16
1219	苅田町	297	神幸祭	与原字御所山	10月第1土曜日		32
1220	苅田町	297	春祭リ	片島区	4月24,25日に近い日曜日		32
1221	苅田町	297	秋のおこもり	片島区	9月15日		8
1222	苅田町	297	どんど焼き	片島区	2月14日		1
1223	苅田町	297	春のおこもり	片島区	3月25日		8
1224	苅田町	297	皆作祭典	片島区	田植が終わった休日		17
1225	苅田町	297	願成就相撲	片島区	9月25日		10
1226	苅田町	297	施餓鬼法要		8月16日		37
1227	苅田町	297	亥の子祭り	浄土院	11月第1土曜日	昔は『亥子餅ちよ搗かんもな鬼にょ生め蛇生め角の生えた子を生め』と怒鳴りながら藁束で作ったいのこづちで門口をボトボト叩いて廻り,庭に飾られたお供物を取って食べる行事があった。旧暦2月亥の日に田に降りた田の神(亥の神)が旧暦10月亥の日に仕事を終え,家に帰るので新穀で餅を搗いてお迎えする日である。庭の隅に臼を置き,上に新藁を敷き一升桝でお供物をする。これを黙って取って食べれば病気をしないと言われる。	34
1228	苅田町	298	皆作祭	稲光区	6月23日		17
1229	苅田町	298	お宮座	稲光区	12月2日		6
1230	苅田町	298	お宮座	鋤崎区	12月		6
1231	苅田町	298	どんど焼き	鋤崎区	1月		1
1232	苅田町	298	お宮座	谷区	11月		6
1233	苅田町	298	花まつり		5月8日前後		37
1234	苅田町	298	水神祭		7月第2日曜日		16,27
1235	苅田町	298	お日待ち		12月第1日曜日		8
1236	苅田町	298	水神祭	黒添区	田植え前		16,27
1237	苅田町	298	彼岸祭り	黒添区	彼岸		37
1238	苅田町	298	お宮座	黒添区	12月第1週		6
1239	苅田町	298	お日待ち	黒添区	12月第1週		8
1240	苅田町	298	神幸祭		12月1日		2,32
1241	苅田町	298	皆作	法正寺区	6月19日前後		17
1242	苅田町	298	宮座		12月10日前後		6
1243	吉富町	337	乾衣祭	小犬丸	8月6, 7日	八幡古表神社では4年に1度の8月に夏季大祭として放生会が行われ,傀儡子により国指定重要無形民俗文化財である「細男舞・神相撲(くわしおのまい・かみすもう)」が奉納される。この細男舞を舞う傀儡子に着せる神衣(着物)を奉納・虫干しする神事が乾衣祭である。毎年,子どもの健やかな成長や病気平癒等の様々な願いが込められた神衣が奉納される。神社には,中津藩主から奉納された神衣31枚を含めた約1000枚が保存されており,当日は虫干しされた神衣で社殿は鮮やかに彩られる。また,替物行事として牛替えクジが行われており,景品として昭和30(1955)年頃まで本物の子牛2頭が送られていたが,現在は神牛像となっている。	19,22
1244	吉富町	337	御神幸	小犬丸	9月21日	八幡古表神社の鎮座を記念した大祭で,神輿を先頭に各区の太鼓10基に傘鉾を仕立て,太鼓や笛,チャンガラの囃子をしながら町内の氏子圏内を巡行する。途中,八幡古表神社発祥の地とされ奥の院である皇后石(高さ1.2m,周囲4.6mの巨石)で神幸祭を行っている。	2,29,32
1245	吉富町	337	献水神事と水占い	土屋	10月14日	第4章,第3節,31「献水神事・水占い」 参照。	11
1246	みやこ町	300	権現座まつり	下河内	1月13日	蔵王権現社氏子で行う豊作・雨乞祈願。	6
1247	みやこ町	300	山ノ神祭り	上矢山	2月7日	集落内に祀る小祠(山ノ神)の祭礼。	6
1248	みやこ町	315	百手まつり	犀川帆柱	2月11日	産土神・大山祇神社の冬季祭礼。	24
1249	みやこ町	311	神願祭の弓射	国分	2月11日	産土神・豊津神社創祀に有縁の神願座による豊穣祈願祭。	24
1250	みやこ町	305	権現祭	犀川下伊良原岩屋河内	3月第3日曜日	集落鎮守・鷹窟権現社の祭礼。神願座・百手神事等古様を残す神事。	6
1251	みやこ町	310	獅子祓い	徳永	4月19日前後の日曜日	産土神・五社神社の春の氏子家祓。	26
1252	みやこ町	301	大原神社神幸祭	上久保	4月第1土,日曜	産土神・五社神社の春季神幸祭。	32
1253	みやこ町	300	若宮八幡神社神幸祭	勝山河内	5月2, 3日	産土神・若宮八幡神社の春季神幸祭。	32
1254	みやこ町	313	生立八幡神社山笠	犀川本庄	5月第2日曜を最終日とする3日間	犀川総鎮守・生立八幡宮の春季神幸祭。	2
1255	みやこ町	301	水神祭	大久保	6月	田植期に際しての順天・雨水祈願。	6
1256	みやこ町	301	英彦山参拝	上野	9月15日	大火旧事に因む火伏の代参祈願。	33
1257	みやこ町	316	円座餅つき	節丸	10月7日	宇都宮氏の豊前入部の故事再現の祭。	5

番号	市町村	地区番号	名称	伝承地	実施日	概要	テーマ
1258	みやこ町	316	九日祭	節丸	10月7日	宇都宮氏の豊前入部の故事再現の祭。	5
1259	みやこ町	300	神送り	長川	10月29日	産土神を出雲へお見送りする神事。	1
1260	みやこ町	300	神送り	岩熊	10月29日	産土神を出雲へお見送りする神事。	1
1261	みやこ町	301	神送り	上野	10月29日	産土神を出雲へお見送りする神事。	1
1262	みやこ町	301	神送り	御手水	10月29日	産土神を出雲へお見送りする神事。	1
1263	みやこ町	301	神送り	下久保	10月29日	産土神を出雲へお見送りする神事。	1
1264	上毛町	333	どんど焼	各地区	1月中旬		1
1265	上毛町	334	どんど焼	各地区	1月中旬		1
1266	上毛町	335	どんど焼	各地区	1月中旬		1
1267	上毛町	336	どんど焼	各地区	1月中旬		1
1268	上毛町	334	松尾山のお田植祭	西友枝	4月19日直前の日曜日	修験道最大の祭である「松会行事」のうち「田行事」が継承されたもの。神前で稲作の一連の所作を行い，五穀豊穣を祈る。現在は，天下泰平を祈る勇壮な鉞舞や長刀舞などの刀行事や獅子舞が復興されており，毎年4月19日直前の日曜日に開催される。	17, 33
1269	上毛町	336	とべら祭り	垂水	7月7日	昔は鶏鳴より近郷の者が参詣し，里人の苦木(とべら)の枝を売るのを買い，持ち帰って，門の戸に挿せば疫病の災を避けられると伝えられる。昭和の初めまで，下毛，中津，豊前地区からの参詣が多かったが，今は少ないものの，社務所にはとべらの枝は用意されている。	15
1270	築上町	322	知恵の文殊大祭	下日奈古	2月25日	毎年2月25日に日奈古文化公園内の文殊堂で文殊祭りが行われ，地区の住民がお経を上げてお祭りをする。戦前は文殊祭りの費用を捻出する「文殊田」があったが，農地改革でなくなった。現在は，餅つきを始め，すべてを下日奈古地区で運営している。	37
1271	築上町	317	知恵の文殊大祭	伝法寺	2月25，26日	あらゆる教えを説く仏として知恵を司る菩薩と言われる「文殊菩薩」の，年に1度の御開帳日に行われるお祭り。毎年2月25日，26日の2日間にわたり開催され，初日の昼頃には総勢約20名で練り歩く「武者行列」が行われる。	37
1272	築上町	321	榊山神事(初卯祭)	湊	2月初卯	「榊山(さかきやま)神事」は2月の初卯の日に執り行われる初卯祭で，前後に担ぎ棒を付けた台に神籬(かむろぎ)を立て，これを奉じて村内をねり歩き，榊の木を幣として巡幸する。氏子の家ではこの日，赤飯を炊いて祝う。なお，2月初卯は「八幡神発現の日」であるとされ，この榊山神事は八幡神創祀の最も原始的形態を留める神事ではないかと考えられている。	2
1273	築上町	321	おんだうえ祭り	湊	5月18日	5月18日，湊の浜で苗の形に五色の旗を立てて祝詞を上げ，その御幣を海に流して豊作を祈る。流した御幣を拾って家の神棚に祀る。	2, 17
1274	築上町	317	岩戸楽	伝法寺	5月4，5日	春の神幸祭の神輿の発輿と御旅所(おつき)の時に天下泰平，五穀豊穣を祈願して奉納される。大人の囃子方は円陣の中で笛と口上を奏上する。子どもの舞方は円陣を組みながら，鉦打ち，締太鼓を叩く花楽，頭楽が2人で，衣装は青布の鉢巻，白の浄衣に草鞋，ヘラの繊維の腰簑，5本の御幣飾りを背中に立てて舞う。	17
1275	築上町	321	神幸祭	湊	5月第2土，日曜日	5月の湊地区の神幸祭では神輿の後に御神車と山車(踊り車)がお伴し，車の上で芝居が催される。金富神社は聖武天皇の神亀元(724)年豊前守男人，藤井連毛が勅を奉じて宇佐小倉山に神殿造営の命で築城郡安岐之水戸(湊)の金富の岡に神幸されることになり，社殿を建立した。創祀の頃は矢幡と呼ばれ，次いで湊八幡，絹富八幡，金富八幡と変わり，今日では金富神社と呼ばれるようになった。2月の初卯の日，榊山神事という特殊神事が行われる。	2, 29, 32
1276	築上町	321	夏越祭	湊	7月		15
1277	築上町	317	盆綱	伝法寺	8月14日	大人と子どもがカヅラで作った綱を引き合いナタで切り，子どもがその綱を藪に隠すと，大人が探し出し，3回引き合う。地獄に落ちた者を引き上げるという意味があり，村が3人になるまで続けると願掛けしたと言われている。	10, 19, 30
1278	築上町	323	弓祭り	上り松	2月第1日曜日	家内安全，五穀豊穣を祈願して行われる。輪番制で座元の引き受けをし，弓と矢を作り，矢を放つ。	8, 10, 17, 24
1279	築上町	322	弓祭り	上日奈古	2月第1日曜日	家内安全，五穀豊穣を祈願して行われる。輪番制で座元の引き受けをし，弓と矢を作り，矢を放つ。流鏑馬ともいう。	8, 10, 17, 24
1280	築上町	317	午まつり	伝法寺	12月初午	元和5(1619)年，岩戸見神社に奉納された「つなぎ馬の絵馬(町指定有形民俗文化財)」を祭神に，毎年旧暦霜月初午の日に祭典を行う。行事内容は，宮司が窯を掃き清めた後，6～8升の御ごく(御飯)を炊き，24個のお椀に盛って祭神である絵馬に供える。この24膳は1年の季節の節目が24季あることに由来する。また，ヒキダンゴ(うるち米を粉にして団子にしたもの)や野菜を供え，祭典を行う。神前へは山野のもののみ供え，海川のものは決して供えない。祭典終了後，参拝者は神饌物で直会をする。	5
1281	築上町	318	円座餅搗行事	下香楽	12月第1日曜日	秋祭の神饌の餅を搗く時に，「われも，われも」と大勢がありあわせの棒で搗いたのが始まりと言われ，正徳6(1716)年には既に行われていた。祭前日に地願座が，当日は子ども座，本座を終えて餅つきが始まる。しめこみ姿の男衆が唄に合わせ，1番臼(鏡餅1と小鏡餅12)，2番臼(空臼)，3番臼(12束の新藁を入れた鏡餅と小鏡餅)を搗き，神前に供える。残った餅は無病息災と安産のお守りとして参集者にふるまわれる。餅搗きの間には臼練りとい勇ましい臼の奪い合いが行われる。	17
1282	築上町	319	船迫地区高木神社神幸行事	船迫	5月3日	船迫・高木神社で毎年5月3日に開催。担ぎ手の装束が烏帽子を被り，白い狩衣を身に纏い，草鞋履(わらじばき)という古式に則ったものであり，大変貴重。	8, 32
1283	築上町	318	大まつり子どもの座(霜月祭り)	袈裟丸	12月第1土曜日	組内の子ども達を招いて飯，汁，坪(煮物等を入れたもの)と「串刺し」を出す。串刺しは，竹串に野菜等の山のものと昆布などの海のものを刺したもので，前日から子どもの数だけ準備している。串には，上から順に，りんご，みかん，まんじゅう，里芋，ゴボウ，ニンジン，レンコン，コンニャク，昆布，めざしが刺されている。山と里，海の恵みに感謝をするという意味がある。	5, 17
1284	築上町	321	夏越祭	高塚	7月25日	茅の輪くぐりや高塚楽(町指定無形民俗文化財)が行われる。	15
1285	築上町	322	おこぼさん(大師堂祭)	上岩丸	4月21日	弘法大師窟で4月21日の大師堂祭の日に白餅，ヨモギ餅や山菜などを接待する。弘法大師窟は岩丸六田の山中にあり，天然の岩肌に岩窟を彫り，様々な石仏が安置されている。天明8(1788)年，摂津国大阪の行者「浄海和尚」の創建と言われている。	37

参考文献

青柳種信　一九九三『筑前国続風土記拾遺』上巻　文献出版
赤池町公民館　一九五三「上野手永各社諸祭礼式書上帳（明治二年）」『赤池町史』
上野村　一九三〇「立花家文書」『上野村誌』
アクロス福岡文化誌編纂委員会編　二〇一〇『アクロス福岡文化誌4　福岡の祭り』アクロス福岡文化誌編纂委員会
朝倉町教育委員会　一九八六『朝倉町史』
甘木市史編さん委員会　一九八一『甘木市史下巻』
飯塚市誌編さん室　一九七五『飯塚市誌』
飯塚市史編さん委員会　二〇一六『飯塚市史』下巻
生田昭二・増田浩二編　一九八〇「宇原神社神幸祭明細書」『郷土誌かんだ第四号』かんだ郷土誌研究会
石橋兎三郎　一九八〇『ひきめんごきとう』と沖参り」『大川の昔と今』（おおかわ文庫①）福岡県大川市役所
伊東尾四郎編　一九五四『京都郡誌』美夜古文化懇談会
伊東尾四郎　一九七二「明治一一年の町村分書及當時の状勢調査」『福岡県史資料』第二輯　名著出版
糸島市文化財調書
糸田町編纂委員会　一九八九『糸田町史』ぎょうせい
糸田町文化財活性化委員会　二〇一四『田植祭　糸田祇園山笠』糸田町民俗文化財調査報告書
稲築町　二〇〇四『稲築町史下巻』
上野誠　一九八八「盆綱引きとその伝承―筑後市久富地区を事例として―」『國學院大學大學院紀要　文学研究科』一九輯
植木行宣監修　二〇二一『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣出版
浮羽町史編集委員会　一九八八『浮羽町史』
碓井町誌編集委員会編　一九八二『碓井町誌』
宇美町町誌編さん委員会　二〇二〇『新修　宇美町誌』梅林新市
一九五七「郷土芸能 筑豊の獅子舞を中心として（特別寄稿）」『郷土田川第十号記念号』田川郷土研究会
恵比須神社社務所　一九七五『若松神社誌』
大分県総務部総務課編　一九八六『大分県史 民俗篇』
大分県地方史研究会、古瀬美鈴　二〇一一『大分市内の獅子の巡幸と伝説（上）-敷戸子子神社と弥栄神社の獅子巡幸について-』大分県地方史　第二一二号
大分県地方史研究会、古瀬美鈴　二〇一二『大分市内の獅子の巡幸と伝説（下）-敷戸子子神社と弥栄神社の獅子巡幸について-』大分県地方史　第二一三号
大江考祥　一九八〇「福岡県山門郡瀬高町大字文広字芳司」『福岡県民俗地図』福岡県教育委員会
大川市誌編集委員会　一九七七『大川市誌』
大川市教育委員会編　二〇〇二『大川の民俗』大川市民俗聞き取り調査報告書　第一集
大川市教育委員会編　二〇〇八『大川の民俗』大川市聞き取り調査報告書　第四集
大木町誌編さん委員会　一九九三『大木町誌』
大木町教育委員会編　二〇一九『大木の川まつり』大木町文化財調査報告書
大任町誌編纂委員会　二〇〇四『大任町誌 ふるさと大任』下巻
大山宏　一九八四『到津八幡神社小史』
岡垣町　一九八八『岡垣町史』
小郡市史編集委員会編　一九九八『小郡市史』第三巻通史編
奥村玉蘭（田坂大藏・春日古文書を読む会校訂）　一九八五『筑前名所図会』文献出版
頴田町史編纂委員会　一九八四『頴田町史』
貝原篤信　一九七三『筑前国続風土記』名著出版
香月靖晴　一九九〇『遠賀川』海鳥社
香月靖晴、西日本文化協会『筑豊の祭り』
角川日本地名大辞典編纂委員会編　一九八八『角川日本地名大辞典

四〇 福岡県』 角川書店
粕屋町誌編纂委員会　一九九二　『粕屋町誌』
金田久璋　二〇〇二　『稲魂と富の起源 稲積み・年玉・贈与交換』白水社
河口綾香　二〇〇八　「フォークロア・パラドックス―北部九州の事例から―」『七隈史学』 第一〇号　七隈史学会
河口綾香　二〇一〇　『「祭ん歌」と「裏ん歌」―ある祭礼における猥歌の継承をめぐって―』『七隈史学』 第一二号　七隈史学会
川崎町史編纂委員会　二〇〇一　『川崎町史下巻』
苅田町誌編纂委員会編　一九七〇　『苅田町誌』
苅田町・苅田町教育委員会編　一九九三　『等覚寺の松会　一千年の伝統を紡ぐ』
苅田町教育委員会　二〇二〇　『亥ノ子調査資料』
苅田山笠実行委員会　二〇一八　『苅田山笠レポートその一』
北九州大学民俗研究会　一九七〇　『背振山麓の民俗』 北九州大学民俗研究会
北九州市教育委員会　一九八六　『戸畑祇園大山笠行事重要無形民俗文化財戸畑祇園大山笠行事調査報告書』 北九州市文化財調査報告書第四二集
北九州市史編さん委員会　一九八六　『北九州市史・近代 現代（教育文化）』
北九州市史編さん委員会　一九八九　『北九州市史 民俗編』
北九州市立歴史博物館　一九九五　『小森承之助日記第一巻』
北九州市立歴史博物館　一九九三　『中村平左衛門日記 第十巻』
北崎村々誌編纂委員会編　一九六一　『北崎村々誌』 北崎村役場
鞍手郡教育会編　一九七二　『鞍手郡誌下巻』
鞍手町誌編集委員会　一九九五　『鞍手町誌（民俗・宗教編）』
鞍手町教育委員会編　一九九五～一九九九　『伊藤家家事雑記一～五』天保二年～安政四年
倉富了一　一九七八　『高良山物語』
久留米市教育委員会　一九七〇　『文化財調査報告書』第二集
久留米市教育委員会　一九九三　『郷土の文化財』第六版
久留米郷土研究会　一九七九　『新編 筑後の年中行事十二か月』
久留米市史編さん委員会　一九八六　『久留米市史』第五巻　久留米市
桂川町　一九六七　『桂川町誌』
桂川町公民館　一九六一　『桂川町郷土誌資料 部落編』
小石原村　二〇〇一　『小石原村誌』
幸袋町編集委員会　一九六三　『幸袋町誌』
古賀正美　一九八一　『寛文十年久留米藩社方開基』久留米史料叢書第六集　久留米郷土研究会
犀川町誌編集委員会編　一九九四　『犀川町誌』
犀川町郷土史研究会　一九八二　『郷土誌さいがわ』二号
佐々木哲哉　一九八四　「宗像市大字平等寺」〔西日本文化協会〔編〕『福岡県史』民俗資料編ムラの生活（上）号　福岡県
佐々木哲哉　一九七八　「貴船祭り」『田川市史民俗編』　田川市史編纂委員会編
佐々木哲哉　一九八〇　『福岡の民俗文化』
佐々木哲哉　一九八二　「能古島白鬚神社の宮座」『福岡市立歴史資料館研究報告』第六集
佐々木哲哉　一九八三　「近世飯盛神社の年中行事」『福岡市立歴史資料館研究報告』　第七集
佐々木哲哉　一九八七　「太宰府のまつりと行事」『大宰府の歴史』七
佐々木哲哉　一九九三　『福岡の民俗文化』　九州大学出版
佐々木哲哉　一九九三　「能古島白鬚神社の宮座」〔同『福岡の民俗文化』九州大学出版会（前掲著一九八二の改稿版）〕
佐々木哲哉　二〇一七　「筥崎宮御神幸」『福岡祭事考説』　海鳥社
佐々木哲哉　二〇一七　「筑後瀬高のドンキャンキャン」『福岡祭事考説』
佐々木哲哉　一九七三　「彦山の汐井採り」『英彦山の民俗』　添田町教育委員会
佐々木哲哉　一九八〇　「宗像郡宗像町大字平等寺」『福岡県民俗地図』福岡県教育委員会
佐伯祐史　『土屋壺神社の御神水奉献祭と秋祭り』（私家本）

三松壮一　一九三一　「志賀島雑記」『福岡』No.50　東西文化社
志賀島伝統文化総合支援実行委員会　二〇〇七　『はやま行事　ふるさと文化再興事業』
篠原義一　一九九一　『筑前國鞍手郡永満寺村むかしものがたり』
白川琢磨　二〇〇六　「北部九州における宗教民俗の歴史的動態―二丈町淀川「大飯食らい」を中心に―」『福岡大学研究部論文集 人文科学編』Vol.5 No.6　福岡大学
庄内町誌編集委員会　一九六六　『庄内町誌』
新宮町誌編集委員会編　一九九二　『相島民俗調査のまとめ』　新宮町誌編纂室
新宮町誌編集委員会編　一九九七　『新宮町誌』　新宮町
新宮町地域協働課編　二〇二一　『新宮町町勢要覧』　福岡県新宮町
新修宗像市史編集委員会　刊行予定　『祈りとまつり』　宗像市
新修志摩町史編集委員会　二〇〇九　『新修志摩町史』下巻　志摩町
親和会・平原公民館　一九九五　『平原地区の行事』
末吉武史　二〇一二　「小倉山小蔵寺跡（熊野神社観音堂）」『脊振山系の山岳霊場遺跡 背振山・雷山・怡土七ヶ寺 第二回九州山岳霊場遺跡研究会資料集』
西南学院大学国語国文学会民俗学研究会編　一九八二　『西南学院大学民俗調査報告第一輯』 西南学院大学国語国文学会民俗学研究会
添田町教育委員会　一九七二　『英彦山の民俗』一三八～一五〇
添田町史編纂委員会　一九九二　『添田町史 下巻』
大日本神祇会福岡県支部　一九四四　『福岡県神社誌』上巻
大日本神祇会福岡県支部編　一九八八（一九四四）『福岡県神社誌』防長史料出版社
大平村誌編集委員会　一九八六　『大平村誌』
武内寅男（宇美八幡宮宮司）　一九一五　『福岡縣神社誌料調書』
「十二月十八日　例祭　　年中最大祭ナリ
古例アリ、此日朝八ツ半時滔々太鼓ヲ打テバ邑内ノ荘者一斉ニ境内ニ集ル、此處ニ赤裸トナリ、寒風ヲ冒シ、炬火ヲ翳シ、兼テ準備シアル氏子中ヨリ奉納ノ和稲（約半俵）ヲ大桶ニ谷ノ大川ニ舁キ行キ、此處ニテ神職修祓ノ式ヲ行ヒ、一仝急湍ニ入ッテ禊ス、米ヲ淅グ事七度濯グ事七度終ッテ再ビ掛声勇シク境内ニ向フ、此間約一時間ナリ、季ハ師走ナリ處ハ高山之渓谷ナリ而モ毎年今夜雪ヲ見ル、寒風膚ヲ刮リ、薄氷石ヲ包ミ流水宛然氷ト怪シマル、時、数十ノ裸身河中ニ跳ル、喚聲闇ヲ破ッテ響キ、博撃自ラ起ル、激沫迸リ白煙立昇ル実ニ壮観ナリ、近郷奇トシ此夜男女此山村ニ集マリ、両岸人ヲ以テ満サル宜ナリ、観者渾身ノ血ノ湧クヲ覚ユ、暫テ境内ニ着シ、炬火ヲ薪ニ遷シ飯ヲ炊キ、身体之暖ヲ取ル、漸クニシテ我ニ帰ル、此清浄ナル蒸飯出来上レバ、御食三膳ニ盛ル、其法強イテ之ヲ高クシテ止マズ遂ニ顛頂ノ崩壊スルヲ見テ翌年ノ吉凶禍福ヲトシ、其方向ニ当ッテ旅セズ婚セズ諸事ヲ謹ム、須臾テ是ヲ神前ニ献シ、一仝此處ニ黎明ヲ待チ、種々ノ供物ヲ奉リテ大祭ヲ行フ、今ニ盛ナリ、古来此式ニ加ハル者一年中無病息災ナリトテ老幼モ奮ッテ赴クモノ多シ」
高崎幸誠　一九八五　『久戸郷土史』（私家版）
高崎幸誠　一九八八　『郷土吉武一部の記録』（私家版）
高崎幸誠　一九九一　『氏神八所宮参拝のあれこれ』（私家版）
高崎幸誠　一九九二　『氏神八所宮 第一の神鐘里帰りの経緯』（私家版）
高田茂廣　一九八七　『浜辺の子供たち 学校が遊び場だったころ』　海鳥社
田川市史編纂委員会　一九七九　『田川市史下巻 民俗編』
田川郷土研究会編　二〇〇〇　『川渡り神幸祭　福岡県における川渡り神幸行事調査報告書』
太宰府市教育委員会　二〇一四　『鷺替神事―太宰府市無形文化財調査報告書』
太宰府市教育委員会　二〇一六　『鬼すべ―太宰府市無形民俗文化財調査報告書』
田主丸町誌編集会編　一九九六　『田主丸町誌第二巻ムラとムラびと』上
筑後市史編さん委員会編　一九九七　『筑後市史』第一巻　筑後市
筑後市史編さん委員会編　一九九八　『筑後市史』第三巻　筑後市

筑紫野市史編さん委員会　一九九九　『筑紫野市史』　下巻
筑紫豊　一九八二　『金印のふるさと　志賀島物語』改訂
筑穂町　二〇〇三　『筑穂町誌』　下巻
筑穂町誌編集委員会　二〇〇三　『筑穂町誌』
筑豊水産組合編　一九一七　『筑豊沿海志』　筑豊水産組合
鎮西村　一九六三　『鎮西村誌』
堤伝　一九六八　『近世以降柳川地方干拓誌』　九州干拓協会
津屋崎町史編集委員会編　一九九七　『津屋崎の民俗第一集』　津屋崎町史民俗調査報告書
津屋崎町史編集委員会編　一九九八　『津屋崎の民俗第二集』　津屋崎町史民俗調査報告書
鶴久二郎編　一九七〇　『久留米藩謡曲全集解説』鶴久二郎
靏理恵子　一九八六　「綱引きの民俗―九州地方の事例を中心に―」『日本民俗学』一六三
東峰村教育委員会　二〇二一　『東峰村文化財記録保存　岩屋神社薦替えの神事記録保存』
東峰村教育委員会　二〇〇七　『岩屋神社遺跡』
鳥栖市教育委員会　二〇〇九　『鳥栖市誌 第五巻 生活民俗編』
戸畑市教育委員会　一九五六　『戸畑祇園大山笠』
豊津町誌編纂委員会　一九八五　『豊津町誌』
豊津町史編纂委員会　一九九八　『豊津町史 下巻』
中田考一　『風浪宮宮乙名由來記』私家版（出版年不明、一九七九年か）
福岡縣三潴郡役所編　一九二五　『福岡縣三潴郡誌』福岡縣三潴郡役所
中野等　一九九六　「近世有明海の海浜干拓」『近世有明海沿岸干拓資料調査―福岡県古文書調査報告書―』　福岡県立図書館
永松敦　一九九一　「正月七日の火焚き行事と呪符」『福岡市博物館研究紀要』創刊号
西日本文化協会編　一九八四　『福岡県史 民俗資料編 ムラの生活』上巻　福岡県
西日本文化協会編　一九八八　『福岡県史 民俗資料編 ムラの生活』下巻　福岡県
西日本文化協会編　一九八八～一九九五　『福岡県史　近代史料編福岡県地理全史』一～六巻
直方市史編さん委員会　一九七八　『直方市史 下巻』
野沢龍　二〇〇二　『日本の獅子舞（Ⅰ）』第17回国民文化祭とっとり2002アジア獅子舞大会参考資料
博多祇園山笠振興会　一九七五年　『博多山笠記録』
博多湾西部地区伝統文化総合支援実行委員会　二〇〇八　DVD『石釜のトビトビ』
杷木町史刊行委員会　一九八一　『杷木町史』
八丁島御供納保存会（編）二〇〇六　『八丁島に伝わる御供納』（私家版）
花山院親忠　一九六〇　「獅子舞に流れているもの」『佐賀県文化財調査報告書第九集』　佐賀県教育庁社会教育課
濱田仁・木村光子　二〇一一　「民俗藻類学の旅 筑前国・志賀海神社の歩射祭とガラモ」『藻類』五九　日本藻類学会
原田準吾　一九八五　『我等の枝光』
原尻秀樹　二〇一八　『長崎のジャオドリと筑後の大蛇山』海鳥社
久野隆志　二〇一〇　「海の祭り」『福岡の祭り』一四一頁　海鳥社
久山町誌編纂委員会　一九九六　『久山町誌』
秀村選三　一九八一　「柴藤家年中行事」『近世福岡博多史料』三六五
西日本文化協会
平井武夫　一九三四　『福岡県郷土芸能 - 民間演芸』　巻二
平松秋子　二〇一四　『八所宮のおくんち』（私家版）
広川町教育委員会　一九八六　『ひろかわの郷土史』
風浪宮サイト　「火清鳴弦御祈祷　斎行　（令和３年４月２３日～２５日）」、https://www.ofurousan.or.jp/news/000059.php（二〇二一年五月一六日アクセス）、
深野敏一編　一九七二　『相島』　戸畑中央高等学校郷土部
福岡県教育委員会　一九六二　『福岡県文化財調査報告書』第二十四集
福岡県　二〇〇六　DVD『志式神社の早魃神事』（株）ＲＫＢ映画社

福岡県企画 RKB 映画社制作　二〇〇九　DVD『廣田八幡宮神幸祭　どんきゃんきゃん』
福岡県田川農業改良普及所　一九八四　『生活誌「村のくらし」』
福岡市　二〇二二　『令和四年公称町別　世帯数及び人口（日本人のみ）』https://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/10782/1/2022machibetsu.xlsx
福岡市教育委員会社会教育部文化課　一九七三　『伝統芸能』
福岡市教育委員会編　一九八八　『福岡市の文化財（無形文化財・有形無形民俗文化財）』
福岡市文化財活性化実行委員会　二〇一一　DVD『博多の千灯明と辻祈祷』
福岡市文化財活性化実行委員会　二〇一四　DVD『ウシサマ―家々の収穫祭―』
福岡市文化財活性化実行委員会　二〇一四　『福岡市における獅子祭りの分布と現状に関する調査報告書（城南区・早良区・西区編）』
福岡市文化財活性化実行委員会　二〇一五　『福岡市における獅子祭りの分布と現状に関する調査報告書（東区・博多区・中央区・南区編）』
福岡市史編集委員会編　二〇一二　『新修福岡市史 民俗編一 春夏秋冬・起居往来』 福岡市
福岡市史編集委員会編　二〇一五　『新修福岡市史 民俗編二 人と人びと』
福岡市立北崎小学校百年誌編集委員会編　一九八〇　『北崎小学校百年誌』 福岡市立北崎小学校
福岡県筑前海沿岸漁業振興協会編集　一九九八　『福岡市漁村史』 福岡市漁業協同組合
NHK 福岡放送局郷土資料調査委員編　一九五六　『NHK 福岡放送局郷土資料調査委員報告』四一
福原敏男　二〇一八　「来訪神行事における贈与互酬性」保坂達雄・福原敏男・石垣悟『来訪神 仮面・仮装の神々』 岩田書院
福間裕爾　二〇二一　「南筑後の大蛇山」植木行宣監修『山・鉾・屋台の祭り研究事典』 思文閣出版
福持昌之　二〇〇一　「奴振りの芸態」『民族藝術』一七
福持昌之　二〇一六　「祭礼行列に伴う「奴振り」の分布状況―日本奴行列研究会の収集資料の成果も加えて―」『観光研究論集　大阪観光大学観光学研究所年報』一五
豊前市教育委員会　二〇〇二　『豊前市の文化財―歴史と浪漫の散歩道―』
豊前市制50周年記念事業実行委員会編　二〇〇六　『ぶぜんの祭り』
豊前市史編纂委員会編　一九九一　『豊前市史』下巻
豊前市無形民俗文化財保存協議会編　二〇〇一　『豊前の民俗芸能』
二瀬町誌編纂委員会編　一九六三　『二瀬町誌』
宝珠山村誌資料編さん委員会編　一九九二　『宝珠山村誌資料』
宝珠山村誌刊行委員会編　二〇一〇　『宝珠山村誌』 東峰村
星野村史編さん委員会編　一九九七　『星野村史 文化財民俗編』
穂波町　一九六九　『ほなみ町誌』
古野清人　一九四〇　「筑前宗像の宮座資料」『民族学年報』二　三省堂
古野清人　一九七〇　『農耕儀礼の研究―筑前宗像における調査―』東海大学出版会
平凡社　二〇〇四　『日本歴史地名大系四一 福岡県の地名』
牛原賢二編　一九七五（初出一九四一）『前原町誌』 文献出版
松村利規　一九九七　「福岡市早良区石釜のトビトビ」『福岡市博物館研究紀要』第七号
三原恕平編輯（田坂大藏校訂）　一九八〇　『筑前国福岡区地誌』 文献出版
みやこ町　『福岡県指定文化財「生立八幡神社山笠行事」（生立八幡宮神幸祭）』パンフレット
宮地邦雄　一九六一年「小呂島に於ける部落祭祀」『宗教研究』　三五巻四号
宮田町教育委員会　一九九五　『宮田町祭り行事のいまむかし』
宮武省三　一九四三　「筑後酒見風浪神社と串柿うり」『九州路の祭儀

と民俗』三元社
みやま市史編集委員会編　二〇一九　『みやま市史　通史編　上巻』
みやま市史編集委員会編　二〇二〇『みやま市史　通史編　下巻』
民俗藝術の会編　一九三〇　「筑前鞍手郡山口のお獅子様」『民俗藝術』第三巻第一号
宗像市史編纂委員会編　一九九六　『宗像市史通史編四 美術と建築／民俗』
宗像市老人クラブ連合会地域づくり企画委員会編 二〇一四　『伝承行事を守り続ける平等寺』
森弘子　二〇一六　「鬼すべの歴史」『太宰府市無形民俗文化財調査報告書　鬼すべ』
森弘子　二〇一六　「北部九州の海の祭り」『季刊 悠久』第一四四号
森山邦人・光安欣二　一九八一　『志賀島の四季』　九州大学出版会
夜須町史編纂委員会編　一九九一　『夜須町史』
柳川市　二〇一四　『広報やながわ』
柳川市　二〇一六　「二月一日年の数だけ回って厄を払う両開下八丁地区『龍神宮わら大人形祭』」『広報やながわ』（二〇一六三月一日）
柳川市教育委員会　一九八二　『柳川の文化財』第二集
柳川市編　二〇〇二　『新柳川明証図会』
柳川市史編集委員会編　二〇〇四　『柳川の民俗概観』
柳川市史編集委員会編　二〇一二　『柳川の民俗概観』Ⅱ
柳川市史編集委員会編　二〇〇一　「九　第九扱所村誌」『柳川市史史料編一』
柳川市　二〇一四　「中島と祇園祭り」『広報やながわ』（二〇一四年七月一五日）
山内公二　二〇一七　『新京築風土記』　幸文堂出版
山内昌和　二〇〇〇年　「福岡県小呂島漁業コミュニティーにおける世帯再生産メカニズム」『地理学評論』　七三巻一二号
山田市誌編さん委員会編　一九八六　『山田市誌』
大和町史編纂実務委員会編　二〇〇一　『大和町史　通史編　』下巻
大和町昔ばなし編集委員会編　一九八八　『大和町むかしばなし』大和町
山中耕作　一九九〇　「沖詣り―福岡県大川市大字酒見風浪宮―」『西南学院大学国際文化論集』第五巻第一号
山野の楽保存会記録『「規約」（明治卅三年、昭和十六年、昭和卅一年）文献資料、奏楽実演資料綴』作成年代不明
行橋市史編纂委員会編　二〇〇六　『行橋市史』下巻
吉武地区コミュニティ運営協議会　二〇〇八　DVD『八所宮おくんち』
吉富町教育委員会編 一九八六『吉富町の文化財』
吉富町教育委員会資料 二〇二〇『献水神事の次第要項資料』
吉富町文化財協議会 一九八四『吉富文化』第二号
吉富町役場編 一九五五『福岡県築上郡吉富町誌』
吉永禹山編　一九五三　「和布刈神事の話」『門司郷土叢書』　第六編
雑誌一　門司郷土会
中山主膳編　一九六三　「和布刈神社記録」『門司郷土叢書』　門司郷土会
若宮町誌編さん委員会編　二〇〇三　『若宮町誌』下巻
渡辺次郎　一九九七　『羽高』
Grapard, Allan. 2016. Mountain Mandalas: Shugendō in Kyushu. New York: Bloomsbury Academic.

巻頭図版及び文中写真出典

章	節	タイトル	写真キャプション	写真情報
巻頭図版①	—	—	玉せせり（福岡市）	福岡県撮影
巻頭図版①	—	—	鷺替え（太宰府市）	森弘子撮影
巻頭図版①	—	—	ホンゲンギョウ（宇美町）	森弘子撮影
巻頭図版②	—	—	鬼すべ（太宰府市）	森弘子撮影
巻頭図版②	—	—	畑のどんど焼き（豊前市）	中内華奈撮影
巻頭図版③	—	—	嫁ごの尻叩き（春日市）	森弘子撮影
巻頭図版③	—	—	石釜のトビトビ（福岡市）	福岡市提供
巻頭図版④	—	—	相島の恵比寿祭り（新宮町）	樫村拓男撮影
巻頭図版④	—	—	歩射祭（福岡市）	吉田扶希子撮影
巻頭図版⑤	—	—	大飯喰らい（糸島市）	森弘子撮影
巻頭図版⑤	—	—	和布刈神事（北九州市）	和布刈神社提供
巻頭図版⑥	—	—	藁の大人形（柳川市）	福岡県撮影
巻頭図版⑥	—	—	粥占（福岡市）	福岡県撮影
巻頭図版⑦	—	—	英彦山神宮御潮井取り（添田町・行橋市）	福岡県撮影
巻頭図版⑦	—	—	御田植祭（豊前市）	栗焼憲児撮影
巻頭図版⑧	—	—	山誉め祭（福岡市）	吉田扶希子撮影
巻頭図版⑧	—	—	沖詣り海神祭（大川市）	福岡県撮影
巻頭図版⑨	—	—	叶院千灯明（福岡市）	福岡県撮影
巻頭図版⑨	—	—	風旗（八女市）	亀崎敦司撮影
巻頭図版⑨	—	—	久富の盆綱曳き（筑後市）	福岡県撮影
巻頭図版⑩	—	—	大浜流灌頂（福岡市）	河口綾香撮影
巻頭図版⑩	—	—	流灌頂（大任町）	福間裕璽撮影
巻頭図版⑪	—	—	動乱蜂（久留米市）	森弘子撮影
巻頭図版⑪	—	—	ヒョウカリライ（福岡市）	福岡県撮影
巻頭図版⑫	—	—	筥崎宮神幸行事（福岡市）	筥崎宮提供
巻頭図版⑫	—	—	志賀海神社神幸行事（福岡市）	吉田扶希子撮影
巻頭図版⑬	—	—	福吉神幸祭（糸島市）	福岡県撮影
巻頭図版⑬	—	—	八所宮神幸行事（宗像市）	末松剛撮影
巻頭図版⑭	—	—	平等寺の宮座（宗像市）	須永敬撮影
巻頭図版⑭	—	—	能古島白髭神社のおくんち（福岡市）	須永敬撮影
巻頭図版⑮	—	—	薦替え（東峰村）	内野嗣昭撮影
巻頭図版⑮	—	—	献水神事・水占い（吉富町）	長谷川清之撮影
巻頭図版⑯	—	—	どんきゃんきゃん（みやま市）	河口綾香撮影
巻頭図版⑯	—	—	はやま行事（福岡市）	須永敬撮影
巻頭図版⑰	—	—	山人走り（豊前市）	栗焼憲児撮影
巻頭図版⑰	—	—	亥の子（苅田町）	長谷川清之撮影
巻頭図版⑰	—	—	おしろい祭（朝倉市）	福岡県撮影
巻頭図版⑱	—	—	御供納（久留米市）	福岡県撮影
巻頭図版⑱	—	—	ウシサマ（糸島市）	福岡市提供
巻頭図版⑲	—	—	白糸の寒みそぎ（糸島市）	福岡県撮影
巻頭図版⑲	—	—	川まつり（嘉麻市）	福岡県撮影
巻頭図版⑳	—	—	生立八幡宮神幸祭（みやこ町）	福岡県撮影
巻頭図版⑳	—	—	糸田祇園祭（糸田町）	福岡県撮影
巻頭図版㉑	—	—	風治八幡宮川渡神幸祭（田川市）	福岡県撮影
巻頭図版㉑	—	—	小呂島祇園山笠（福岡市）	福岡市提供
巻頭図版㉒	—	—	前田祇園山笠（北九州市）	福岡県撮影
巻頭図版㉒	—	—	江浦祇園祭（みやま市）	福岡県撮影
巻頭図版㉓	—	—	黒崎祇園山笠（北九州市）	福岡県撮影
巻頭図版㉓	—	—	今井祇園祭（行橋市）	福岡県撮影
巻頭図版㉔	—	—	中島祇園祭（柳川市）	福岡県撮影

巻頭図版及び文中写真出典

章	節	タイトル	写真キャプション	写真情報
巻頭図版㉔	—	—	三池祇園社祭礼行事（大牟田市）	福間裕爾撮影
巻頭図版㉕	—	—	苅田山笠（苅田町）	福岡県撮影
巻頭図版㉕	—		どろつくどん（柳川市）	福岡県撮影
第四章	第三節	玉取祭	写真一～三 写真四	吉田扶希子撮影 福岡市博物館提供
第四章	第三節	ホンゲンギョウ	写真一、二	森弘子撮影
第四章	第三節	鬼すべ・鷺替え	写真一～五	森弘子撮影
第四章	第三節	畑のどんど焼き	写真一～三	中内華奈撮影
第四章	第三節	嫁ごの尻叩き	写真一	森弘子撮影
第四章	第三節	石釜のトビトビ	写真一～二	福岡市提供
第四章	第三節	相島の恵比寿祭り	写真一～九	田中久美子撮影
第四章	第三節	歩射祭	写真一～七	吉田扶希子撮影
第四章	第三節	百手祭り・大飯喰らい	写真一～四	森弘子撮影
第四章	第三節	和布刈神事	写真一 写真二～四	和布刈神社提供 吉田扶希子撮影
第四章	第三節	藁の大人形	写真一、二	田中久美子撮影
第四章	第三節	粥占	写真一～四	福岡県撮影
第四章	第三節	英彦山神宮御潮井取り	写真一～六	福岡県撮影
第四章	第三節	御田植祭	写真一～五	栗燒憲児撮影
第四章	第三節	山誉め祭	写真一～四	吉田扶希子撮影
第四章	第三節	沖詣り海神祭	写真一～六	田中久美子撮影
第四章	第三節	叶院千灯明	写真一～三	森弘子撮影
第四章	第三節	風旗	写真一～五	亀崎敦司撮影
第四章	第三節	久富の盆綱曳き	写真一 写真二、三 写真四、五	小林勇作撮影 田中久美子撮影 福岡県撮影
第四章	第三節	流灌頂（福岡市）	写真一～三	河口綾香撮影
第四章	第三節	流灌頂（大任町）	写真一～三	長谷川清之撮影
第四章	第三節	動乱蜂	写真一、二	森弘子撮影
第四章	第三節	ヒョウカリライ	写真一～四	田中久美子撮影
第四章	第三節	筥崎宮神幸行事	写真一～三	筥崎宮提供
第四章	第三節	志賀海神社神幸行事	写真一 写真二～四	吉田扶希子撮影 小林憲吾（志賀海神社氏子総代会長）
第四章	第三節	福吉神幸祭	写真一～八	須永敬撮影
第四章	第三節	八所宮神幸行事	写真一～四	末松剛撮影
第四章	第三節	平等寺の宮座	写真一～八	須永敬撮影
第四章	第三節	能古島白鬚神社のおくんち	写真一～一五	須永敬撮影
第四章	第三節	薦替え	写真一～五	内野嗣昭撮影
第四章	第三節	献水神事・水占い	写真一～五	長谷川清之撮影
第四章	第三節	どんきゃんきゃん	写真一～九	河口綾香撮影
第四章	第三節	はやま行事	写真一～八	須永敬撮影
第四章	第三節	山人走り	写真一～三	栗燒憲児撮影
第四章	第三節	亥の子	写真一～四	長谷川清之撮影
第四章	第三節	おしろい祭	写真一～三	森弘子撮影
第四章	第三節	御供納	写真一～一〇	須永敬撮影
第四章	第三節	ウシサマ	写真一	福岡市提供
第四章	第三節	白糸の寒みそぎ	写真一～四	森弘子撮影
第四章	第三節	川まつり	写真一～五	福岡県撮影

報告書抄録

ふ　り　が　な	ふくおかけんのまつり・ぎょうじ
書　　名	福岡県の祭り・行事
副　書　名	福岡県「祭り・行事」調査事業
編　著　者　名	森弘子・須永敬・田中久美子・カーターケイレブ・亀崎敦司・末松剛・長谷川清之・福間裕璽・吉田扶希子・吉留徹・石井和帆・内野嗣昭・河口綾香・栗燒憲児・中内華奈・岸本圭・墓昌也・梶佐古幸謙（編集）
編　集　機　関	福岡県教育委員会
所　在　地	〒812-8575　福岡県福岡市博多区東公園７―７ （Tel：092-643-3874，Fax：092-643-3878）
発 刊 年 月 日	2024 年（令和６年）3 月 31 日
要　　約	福岡県教育委員会が平成 30 年度から令和５年度にかけて実施した福岡県「祭り・行事」調査事業の報告書である。事業の遂行にあたっては、福岡県「祭り・行事」調査委員会を設置し、指導・助言を受けた。詳細調査及び報告書執筆は、委員・専門調査員・市町村文化財行政職員・事務局が行った。 詳細調査については、福岡県内各地に存在する祭り・行事のうち、委員会の承認を受けた代表的な４０件を対象として行い、その結果を記録した。また、特論として、福岡県で代表的な行事である「祇園山笠」と「獅子祓・獅子廻」を収録した。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120253
登録年度 5	登録番号 3

福岡県文化財調査報告書第二八五集

福岡県の祭り・行事
―福岡県「祭り・行事」調査事業―

令和６年３月３１日

発行　福岡県教育委員会
〒 812-8575
福岡県福岡市博多区東公園 7-7
印刷　（株）あすなろ印刷
〒 816-0943
福岡県大野城市白木原 1-1-22-302